

川辺遺跡発掘調査報告書

—一般国道24号和歌山バイパス建設に伴う遺跡発掘調査—

(本文)

1995年 3月

(財)和歌山県文化財センター

卷頭図版 1



川辺遺跡西から 空撮 昭和63年3月4日

卷頭図版 2

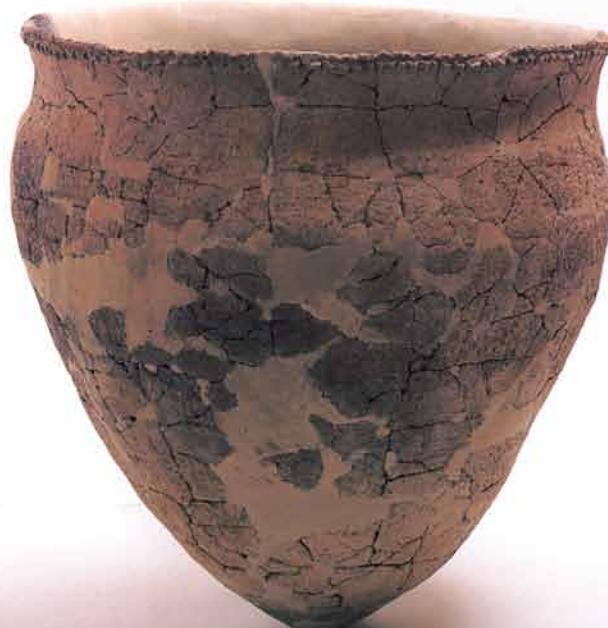


縄文土器群

卷頭図版 3



縄文土器 VIII区 S X502



縄文土器 VIII区 S X501

卷頭図版 4



縄文土器 VI区 SW101 1247



縄文土器 VI区 1258

卷頭図版 5

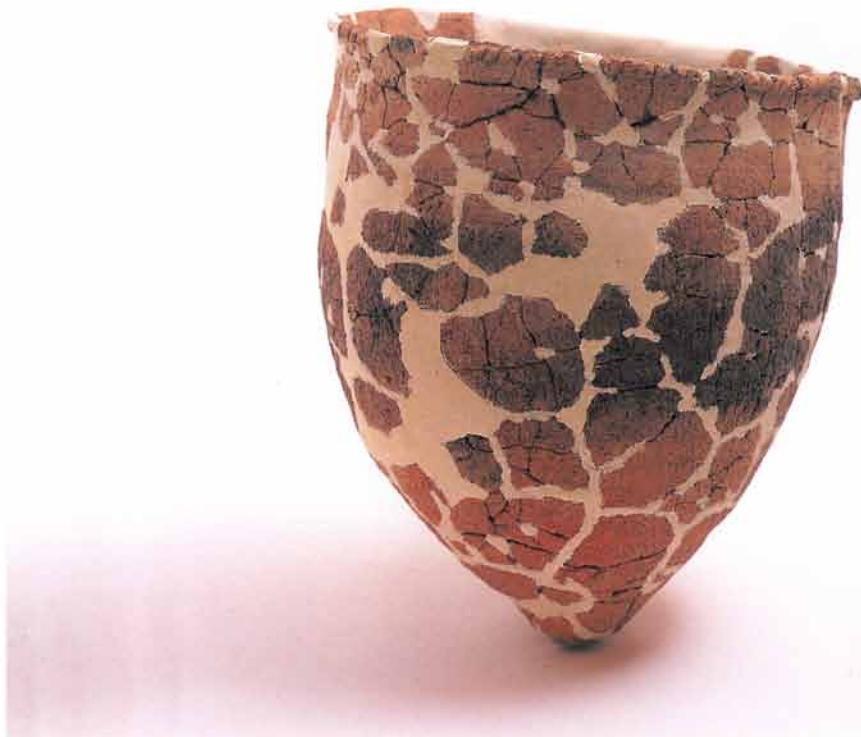


縄文土器 VI区 包含層1308 VII区 SW101 1295

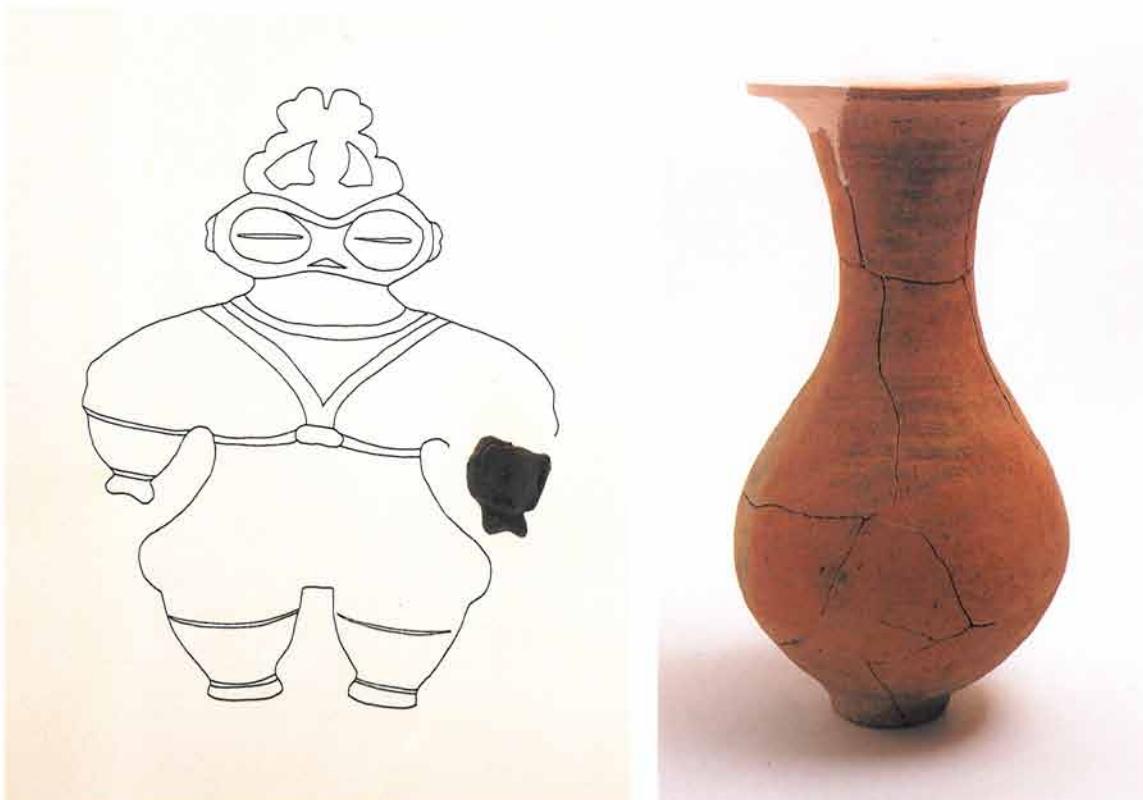


弥生土器 VIII区 下面 S D1012 1057 VIII区 S D1006 1056

卷頭図版 6



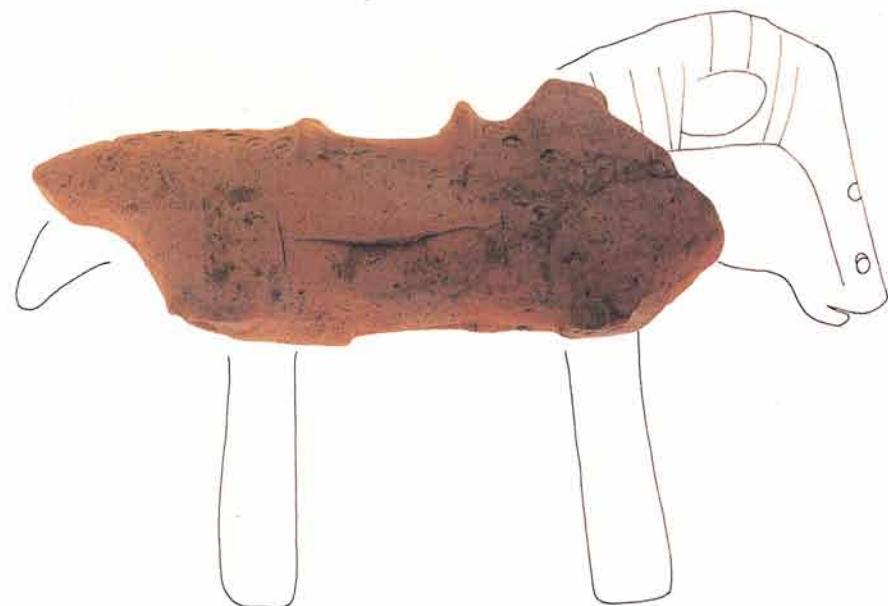
縄文土器 VII区 S X503 1256



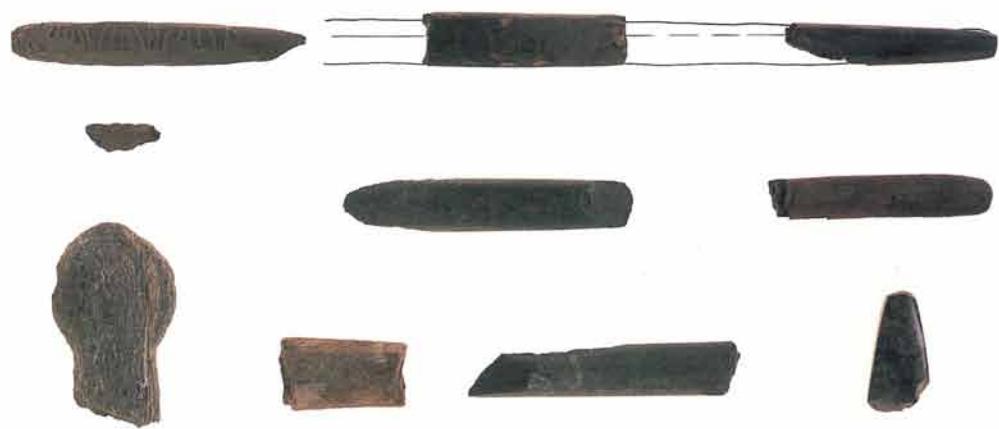
縄文時代土偶 VI区 包含層1359

弥生土器 VII区 上面2008

卷頭図版 7

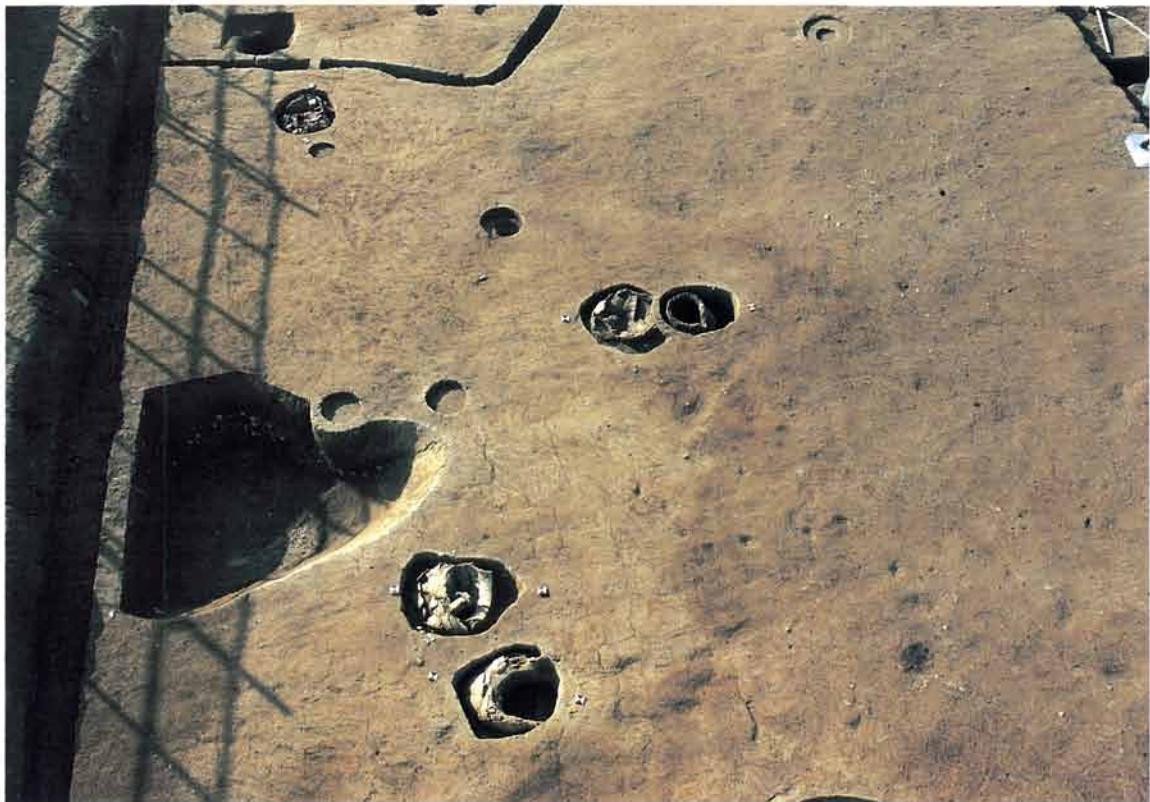


IX区 SD03 土馬



石斧、石刀、石棒

卷頭図版 8

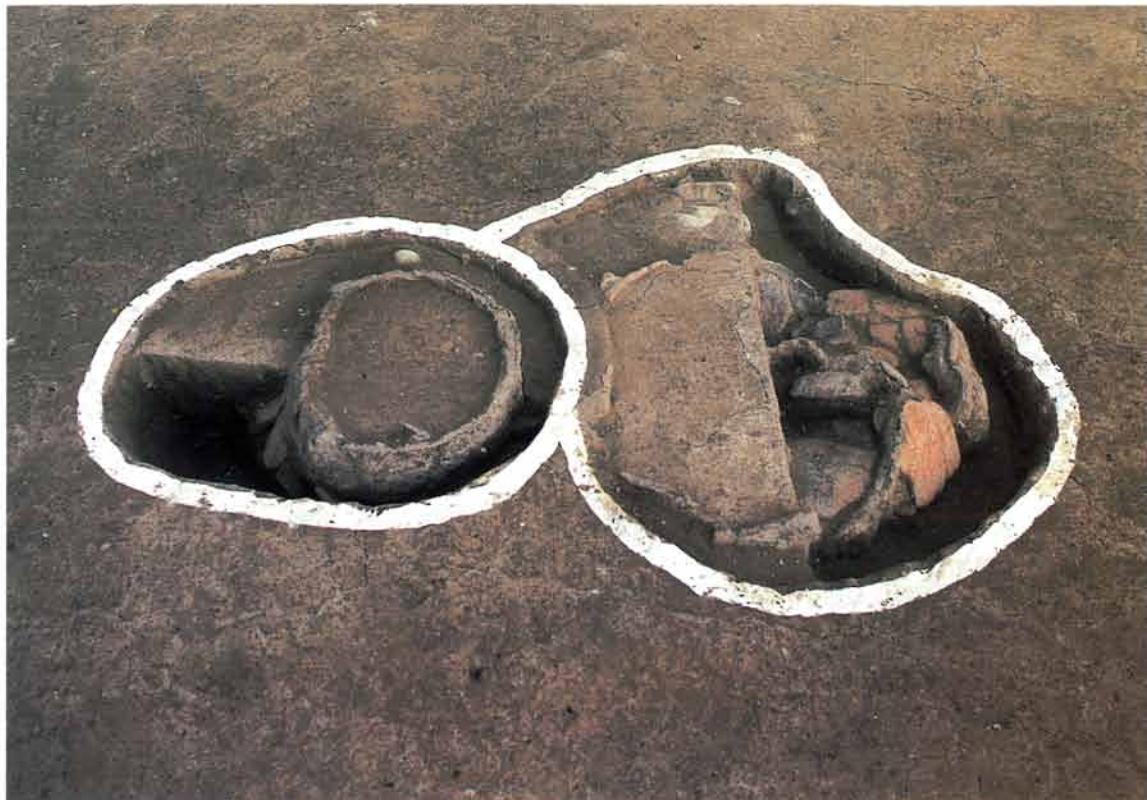


VIII区 上面 S X551~505 東から



VIII区 上面 S XD501、502

卷頭図版 9

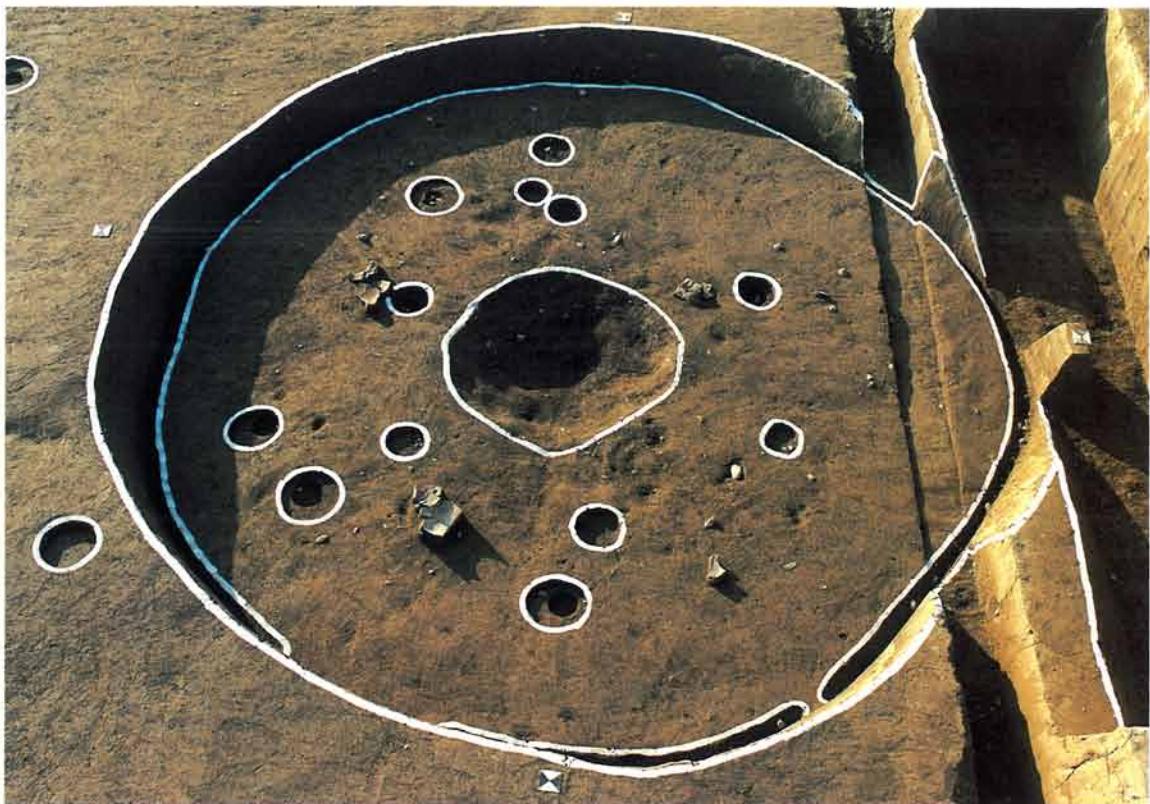


VIII区 上面 S XD503、504

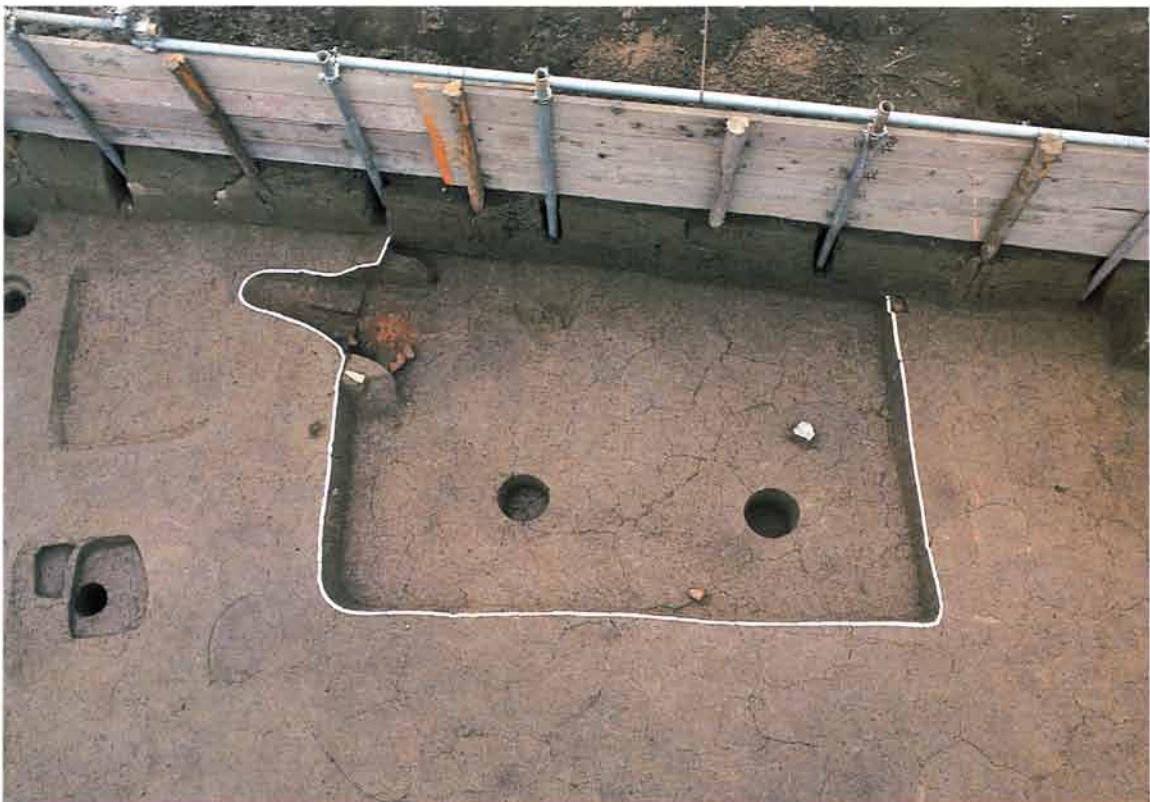


VIII区 上面 S X501 石斧出土状況

卷頭図版10



IV区 上面 S I 10 (東から)



I区 下面 S I 85 (西から)

卷頭図版11



I区 下面 S I 85 カマド（南から）

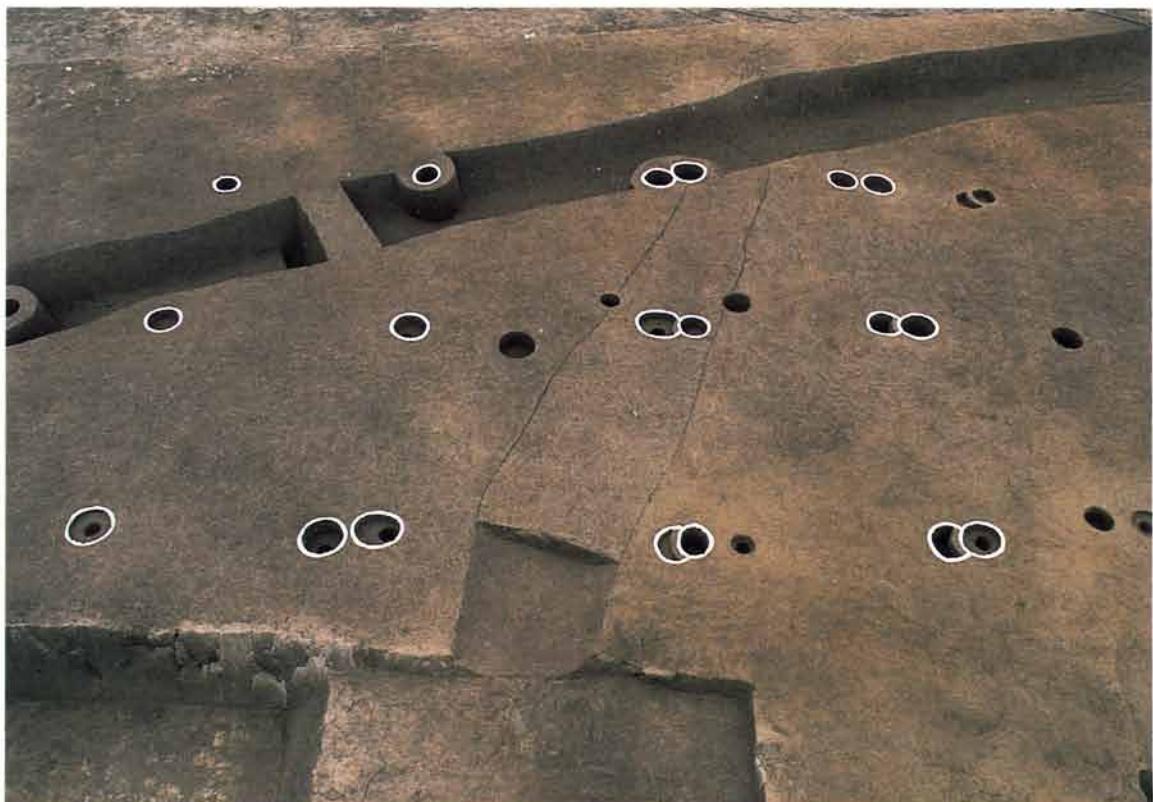


I区 下面 S I 89 （西から）

卷頭図版12

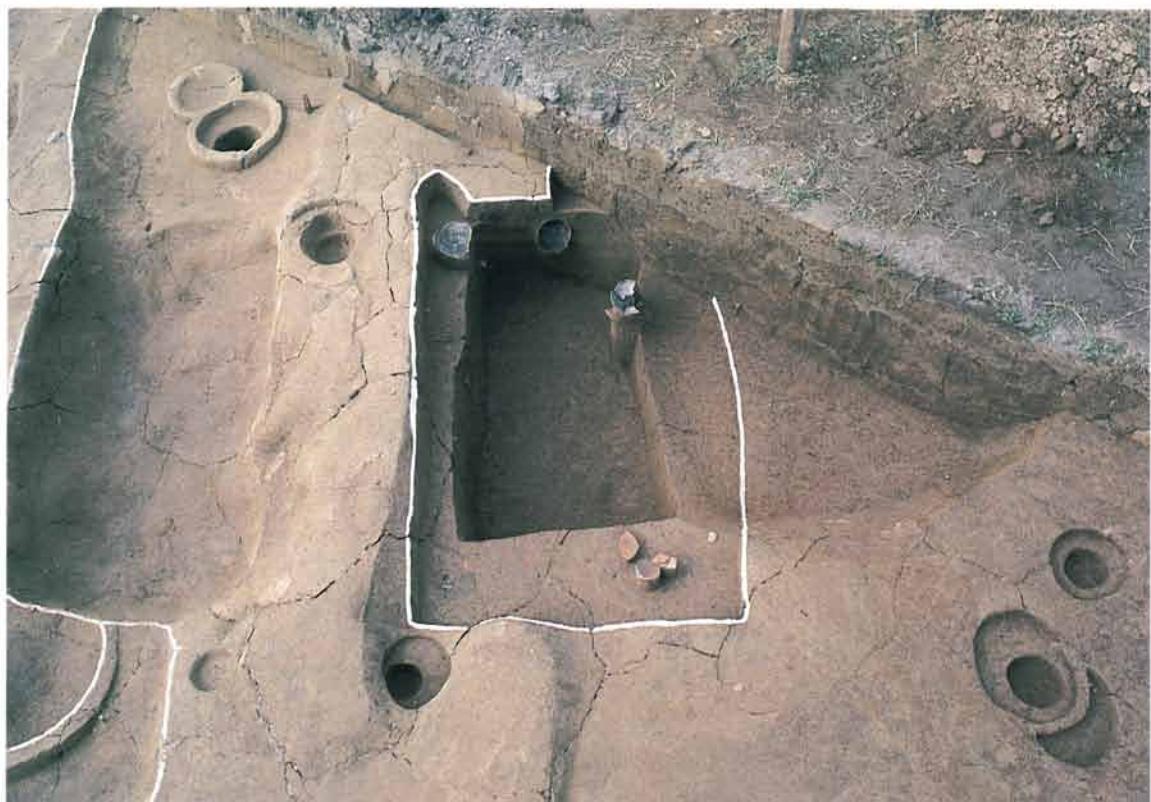


I区 下面 SB71 (南から)



IX区 上面 SB01 (南から)

卷頭図版13



I区 上面 S X304 (東から)



I区 上面 S X322

序

川辺遺跡は和歌山県北部、紀ノ川下流右岸の沖積地、微高地に形成された遺跡である。江戸時代に編纂された「紀伊続風土記」によれば、この周辺は田井荘内の川辺村であり、家数131軒と周辺の村落の中でも家数の多い集落でした。この記録以前のこの地における生活の景観について、この度の発掘調査によって、その一端をうかがえる成果を得ることができました。

和歌山市街から東部へ横断する、一般国道24号和歌山バイパスは、京都市を起点とし、奈良県を縦貫して、紀ノ川に沿って和歌山市に至る幹線道路としての機能と共に、関西都市を結ぶ環状の役割も担うものです。

今回、川辺遺跡の発掘調査は八ヶ年にわたって実施され、縄文時代の遺構、遺物をはじめ、当初の予想をはるかに上回るもので、沖積地や微高地の歴史を考える上で貴重な資料を得ることができたといえます。

なお、本調査を実施するにあたって、建設省近畿地方建設局和歌山工事事務所、和歌山県教育委員会、地元の方々をはじめ、この調査にたづさわっていただきました関係者各位には、多大なご支援とご協力を賜り、深く感謝申し上げますと共に、今後とも当文化財センターの事業に対しましては変わらぬご理解とご協力をいただけます様お願い申し上げます。

平成7年3月

財団法人 和歌山県文化財センター
理事長 仮 谷 志 良

例　言

1. 本書は、和歌山県和歌山市に所在する川辺遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、一般国道24号和歌山バイパス建設に伴う事前調査として昭和62年度から平成6年度にかけて行われた。この間平成元年度、同2年度、及び平成5年度、同6年度は出土遺物整理をそれぞれ実施した。
3. 発掘調査及び出土遺物整理業務は、建設省近畿地方建設局和歌山工事事務所から委託を受け、和歌山県教育委員会の指導のもとに財団法人和歌山県文化財センターが実施した。
4. 調査の組織は以下のとおりである。

調査委員

岡田 英男 (奈良大学教授・県文化財保護審議会委員)
羯磨 正信 (日本考古学协会会员・県文化財保護審議会委員、故人)
巽 三郎 (日本考古学协会会员・県文化財保護審議会委員)
都出比呂志 (大阪大学教授・県文化財保護審議会委員)
藤澤 一夫 (四天王寺国際仏教大学名誉教授・県文化財保護審議会委員)

財団法人 和歌山県文化財センター事務局

専務理事 (事務局長)	鍋島伊津夫
事務局長 (県文化財課長兼務)	梅村 善行 (昭和63年度)
事務局次長	菅原 正明
管理課長	松田 正昭 (昭和63年度～平成4年度)
管理課長	西本 悅子 (平成5年度～)
埋蔵文化財課長	辻林 浩 (昭和63年度～平成4年度)
埋蔵文化財課長	松田 正昭 (平成5年度～)
埋蔵文化財課 技師	黒石 哲夫 (昭和62年度～平成5年度・第一次～第四次発掘調査、第一次～第三次出土遺物整理担当)
" 技師	河内 一浩 (昭和62、63年度・第一次、第二次発掘調査担当 現 羽曳野市教育委員会課)
" 技師	土井 孝之 (昭和62年度・第一次発掘調査、平成元、2年度・第一次、第二次出土遺物整理担当)

〃 技師 佐伯 和也（平成4年度・第四次発掘調査担当）
〃 主任 永光 寛（平成4年度・第四次発掘調査担当）
〃 主任 松下 彰（平成6年度・第四次発掘調査担当）

5. 発掘調査及び報告書作成に際し、建設省近畿地方建設局和歌山工事事務所・県文化財課はじめ地元諸氏の助言・協力を得た。
6. 遺構、出土遺物について、以下の各氏、機関からご教示を得た。記して感謝の意を表します。
泉拓良（奈良大学）、井上雅孝（岩手県滝沢村教育委員会）、家根祥多（立命館大学）、高橋美久二（財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター）、田中清美（財団法人大阪市文化財協会）、宮城県教育庁文化財保護課
7. 航空写真撮影及び航空写真図化は、株式会社パスコに委託した。
8. 胎土分析、微化石分析の分析調査は、パリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。
9. 出土木製品及び金属製品の保存処理は、財団法人元興寺文化財研究所に委託した。
10. 遺構写真、遺物写真は各担当者が撮影し、遺物写真の一部は加茂幸彦による。
11. 本調査における調査記録（遺構実測図・遺物実測図・遺構写真・遺物写真・遺構、遺物スライド）は（財）和歌山県文化財センターが保管し、出土遺物は和歌山県教育委員会が保管している。

凡 例

1. 遺跡遺構名は遺構挿図団面、遺構写真団版と一致できるものである。
2. 出土遺物は遺物挿図に通し番号をつけ、遺物実測図、遺物写真団版と一致できるものである。
3. 本書の遺構実測図、遺構挿図の方針は I 区、 II 区、 III 区、 IV 区は磁北、 V 区、 VI 区、 VII 区、 VIII 区、 IX 区は国土座標第 VI 系の座標北を使用している。標高は東京湾標準潮位 (T. P) で表示している。
4. 各地区名は、本書作成に際し南から順に I 区から IX 区まで地区割を行った。
5. 本書で使用した遺構の記号は以下のとおりである。

S I - 竪穴式住居、 S B - 掘立柱建物、 S E - 井戸、 S X - 墓、 S K - 溝状遺構、 S D - 溝、 S W - 落ち込み状遺構、 S G - 掘乱遺構
6. 各遺構の縮尺は基本的に、溝、木棺墓は20分の1、井戸遺構は40分の1、掘建柱遺構は80分の1の縮尺であるが、場合によって変動がある。
7. 各遺物の縮尺は基本的に、石器は原寸であるが、石皿等の大きいものは4分の1である。

また、縄文土器は2分の1、大きいものは4分の1とした。他に椀、皿類は3分の1、壺、甕類は4分の1としている。しかし、場合によっては縮尺を変えている。
8. 縄文式土器の拓本については、基本的に外面の拓本を断面図の左にしているが、外面、内面の両面を採拓している場合は、内面を断面図の左に、外面を断面図の右にしている。また、内面だけの拓本の場合は、断面図の左にしている。
9. 縄文式土器の底部については、外面の拓本及び断面図の下に、内面の拓本は、断面図の上にしている。
10. 本文写真、図版写真の説明の後の数字は、写真の整理番号である。

目 次

I. カラー図版

II. 序 文

III. 例 言

IV. 凡 例

V. 発掘調査

第 1 章 調査の経緯と経過 1

第 2 章 遺跡の立地 4

1 節 川辺遺跡の地質と基本遺構面 4

2 節 川辺遺跡周辺の遺跡 7

第 3 章 発掘調査

1 節 I 区の遺構と遺物 9

2 節 II 区の遺構と遺物 67

3 節 III 区の遺構と遺物 101

4 節 IV 区の遺構と遺物 119

5 節 V 区の遺構と遺物 131

6 節 VI 区の遺構と遺物 147

7 節 VII 区の遺構と遺物 203

8 節 VIII 区の遺構と遺物 251

9 節 IX 区の遺構と遺物 279

VI. 自然科学分析の成果 295

VII. ま と め 334

図 目 次

図 1.	発掘地区路線図	1
図 2.	発掘年度及び地区割模式図	3
図 3.	川辺遺跡周辺地質図	5
図 4.	現地表面と遺構面の柱状模式図	6
図 5.	川辺遺跡と周辺の遺跡	8
図 6.	S B201	9
図 7.	S E303	10
図 8.	S E303	11
図 9.	S X304	11
図 10.	S X304	12
図 11.	S X306	13
図 12.	S X308	14
図 13.	S X309	15
図 14.	S X310 S X311	16
図 15.	S X312 S X314	17
図 16.	S X314 S X315	18
図 17.	S X316 S X317	19
図 18.	S X318	20
図 19.	S X320	20
図 20.	S X322	21
図 21.	S X322 S X323	22
図 22.	S X325 S X327	23
図 23.	S X328 S X329	24
図 24.	S K333 S K373 S K386 S K504	26
図 25.	S D356 S D359	27
図 26.	I 区上面遺構図	29
図 27.	S I 85 S I 88	31
図 28.	S I 89	32
図 29.	S I 89 煙道部	33
図 30.	S I 90	35
図 31.	S I 91 S I 92	36
図 32.	S I 93	37
図 33.	S B71	38
図 34.	S B72 S B73 S B74 S B77	39
図 35.	S B78 S B79	41

図 36.	S B80 S B81.....	42
図 37.	S B82 S B83 S B84.....	44
図 38.	S B202 S B203.....	45
図 39.	S B204 S B205.....	46
図 40.	S B206 S B207.....	47
図 41.	S E95 S X180 S X182.....	49
図 42.	S K96 S K97 S K98 S K99 S K103 S K106 S K108 S K109 S K110 S K112 S K176 S K209 S K499.....	52
図 43.	S K98 S X99 S K175 S K209 S K499 S K97 S X111 S K114 S K212.....	55
図 44.	S K105 S K114.....	57
図 45.	S D44 S D46.....	59
図 46.	S D44 S D46.....	60
図 47.	S D44 S D46.....	62
図 48.	S D121 S D123 S D129 S D134 S D139	64
図 49.	I区下面遺構図.....	65
図 50.	S X01 (S K349) S X02 (S K350).....	67
図 51.	S D484 S D487 S D490 S D491.....	69
図 52.	S K347 S D490.....	71
図 53.	II区上面遺構図.....	73
図 54.	S E43.....	75
図 55.	S E43.....	76
図 56.	S K217 S K218 S K220 S D48 S D151 S D154 S D158 S D187	77
図 57.	S D45.....	79
図 58.	S D45.....	84
図 59.	S D45.....	85
図 60.	S D45.....	86
図 61.	S D45.....	87
図 62.	S D45.....	88
図 63.	I・II区包含層.....	94
図 64.	I・II区包含層.....	95
図 65.	I・II区包含層.....	96
図 66.	I・II区包含層.....	97
図 67.	II区下面遺構図.....	99
図 68.	S B41	101

図 69.	S D237	102
図 70.	S D237	104
図 71.	S D237	106
図 72.	S D238	107
図 73.	S D238	112
図 74.	S D238	113
図 75.	S D238	114
図 76.	S D55 III区包含層	115
図 77.	III区遺構図	117
図 78.	S D162 S D169	119
図 79.	IV区上面遺構図	121
図 80.	S I 01	123
図 81.	S I 02 S K13	124
図 82.	IV区包含層	127
図 83.	IV区包含層	128
図 84.	IV区下面遺構図	129
図 85.	S K05	131
図 86.	S D01 S D03 S D04 S D07	133
図 87.	S W01	134
図 88.	V区上面遺構図	137
図 89.	S D101	140
図 90.	V区包含層	143
図 91.	V区包含層	144
図 92.	V区下面遺構図	145
図 93.	S B01	147
図 94.	S E01	148
図 95.	S E01	149
図 96.	S K09 S K11 S K13 S K14 S K22 S K25	154
図 97.	S K21 S K23	155
図 98.	S K11 S K21	156
図 99.	S G01	158
図 100.	S G01	159
図 101.	S D01	160
図 102.	S D09	164
図 103.	S K08 S D09	165
図 104.	VI区上面遺構図	167

図 105.	S E101.....	169
図 106.	S E101.....	170
図 107.	S X01 S X02	171
図 108.	S X03 S K102 S K112	172
図 109.	S D101 S D102 S D105 S D110	173
図 110.	VII区中面遺構図	177
図 111.	S E102 S E103	179
図 112.	S E104.....	180
図 113.	S E104.....	181
図 114.	S E104.....	182
図 115.	S E104.....	183
図 116.	S K1002	184
図 117.	S D1004 S D1005 S D1006	185
図 118.	S K105 S K116 S K1003 S D107 S D1002 VI区包含層.....	192
図 119.	VI区包含層	193
図 120.	VI区包含層	194
図 121.	VI区包含層	195
図 122.	VI区包含層	196
図 123.	VI区包含層	197
図 124.	VI区包含層	198
図 125.	VI区包含層	199
図 126.	VI区包含層	200
図 127.	VI区下面遺構図	201
図 128.	S E01	203
図 129.	S D01 S D05 S D06 S D09 S D14	204
図 130.	VII区上面遺構図	207
図 131.	S K103.....	209
図 132.	S K103.....	210
図 133.	S K103 S K105 S K108 S K110 S K135 S K147 S K165 S K167.....	216
図 134.	S K112 S K117 S K118 S K125 S K128 S K136 S K138.....	217
図 135.	S K117.....	218
図 136.	S D102 S D103 S D104 S D118 S D120 S D123 S D124 S D125.....	223

図 137.	S D05 S D06 S D09 S D20 S D110 S D111 S D119 S D120 S D104 VII区包含層	224
図 138.	S D104 S D113	225
図 139.	SW101	226
図 140.	SW101	227
図 141.	SW101	228
図 142.	SW101	229
図 143.	SW101	230
図 144.	SW101	231
図 145.	SW101	232
図 146.	SW101	233
図 147.	SW101	234
図 148.	SW101	235
図 149.	SW101	236
図 150.	SW101	237
図 151.	SW101	238
図 152.	SW101	240
図 153.	SW101	241
図 154.	VII区包含層	244
図 155.	VII区包含層	245
図 156.	VII区包含層	246
図 157.	VII区包含層	247
図 158.	VII区包含層	248
図 159.	VII区下面遺構図	249
図 160.	S X501	251
図 161.	S X501 S X502	253
図 162.	S X503 S X504 S X505	254
図 163.	S X501 S X502	255
図 164.	S X503 S X504 S X505	256
図 165.	S X01	257
図 166.	S X01 S X501	258
図 167.	S I501	259
図 168.	S D01 S D02 S D16	265
図 169.	S D02 S D09 S D10 S D15 S D18 S D19 S D21 S D508 S D512	266
図 170.	S D512 SW01	267

図 171.	VIII区上面遺構図	269
図 172.	S X1001 (S D1001・1002・1003)	272
図 173.	S D1006 S D1012 S D1014	273
図 174.	S D1006 S D1011	274
図 175.	VIII区包含層	275
図 176.	VIII区下面遺構図	277
図 177.	S I 01	279
図 178.	S I 01	280
図 179.	S B 01 S B 02 S B 03	282
図 180.	S B 04 S B 06 S B 07 S B 08	283
図 181.	S E 01	284
図 182.	S X 01	285
図 183.	S D 02	285
図 184.	S D 03	286
図 185.	S D 01 S D 02 S D 03	287
図 186.	IX区上面遺構図	289
図 187.	S K103 S K107 IX区包含層	292
図 188.	IX区下面遺構図	293

第一章 発掘調査の経緯

1. 調査の概要

川辺遺跡発掘調査は、一般国道24号一和歌山バイパス事業に伴うもので、昭和54年度（1979年度）から開始された。この一般国道24号一和歌山バイパスの着手にあたって、鳴神遺跡、田屋遺跡、西田井遺跡、川辺遺跡などの周知の遺跡が発掘調査の対象となった。川辺遺跡における発掘調査対象地域面積はバイパスの幅員平均約30m、延長1,021.4mの約30,641m²である。

発掘調査は昭和62年度、63年度、平成3年度、4年度の4ヶ年にわたって行った。

◎昭和62年度（1987年度）の調査

この年度は試掘調査と本格調査が行われた。試掘調査は、道路予定敷地の中央、幅2mで、I区の上面、下面、II区の上面を行った。本格調査は、I区、II区の路線両側とIV区が行われた。I区、II区は幅約5m、延長220mを先行して行い、IV区は全面発掘を行った。I区、II区、IV区共に二層の遺構面が確認された。

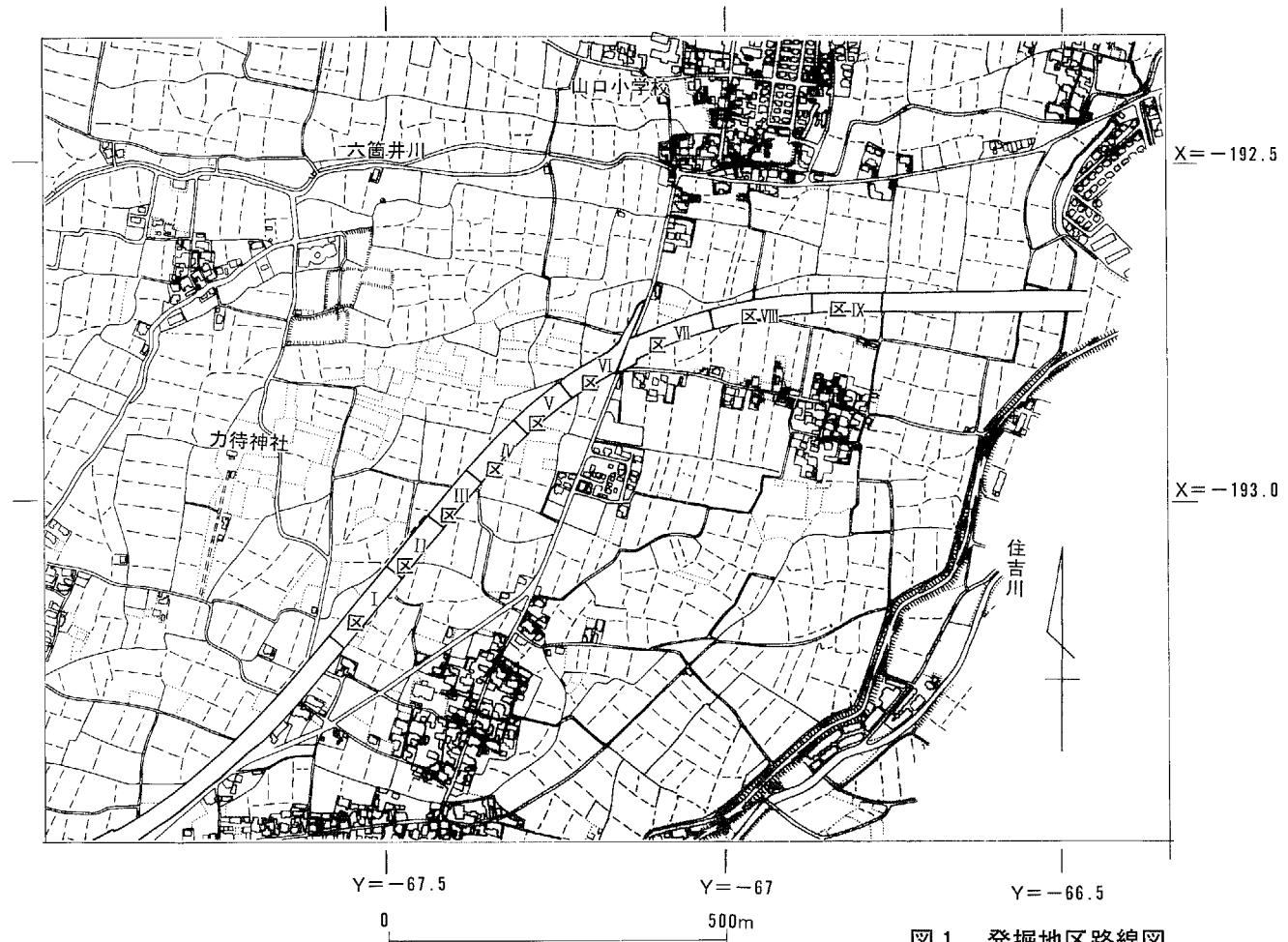


図1 発掘地区路線図

◎昭和63年度（1988年度）の調査

I区、II区の前年度の中央部幅員20mとIII区の調査が行われた。III区の遺構面は一面である。

◎平成元年度（1989年度）：遺物整理

◎平成2年度（1990年度）：遺物整理

◎平成3年度（1991年度）の調査

V区は幅員30m、延長約150mの二層の遺構面が確認された。

◎平成4年度（1992年度）の調査

VI区、VII区、VIII区、IX区が調査対象地区である。VI区は三層の遺構面が確認されたが、包含層部分の確認で困難がともなった。VII区、VIII区は二層の遺構面が確認された。VIII区は上面は全面発掘であるが、下面是東西軸で北側幅15mを先行して調査を行い、折り返して南半分を調査した。

IX区は二面の遺構面が検出された。

◎平成5年度（1993年度）：遺物整理

◎平成6年度（1994年度）：遺物整理、報告書作成

2. 発掘調査年度と地区名の設定

ここで設定した地区割名「川辺遺跡I区」～「川辺遺跡IX区」までの九分割は便宜的に行ったものである。発掘調査年度と地区番号順は一致するものではなく、おのづと地区割は冊子の割付けを優先したもので、ある地区においては遺構番号が10番台から1000番台になっている例もみられる。

遺構、遺物の説明にあたって、発掘調査が最初に行われた地区を「I区」とし、以降北東の路線系統に従って、「IX区」まで、順次行った。

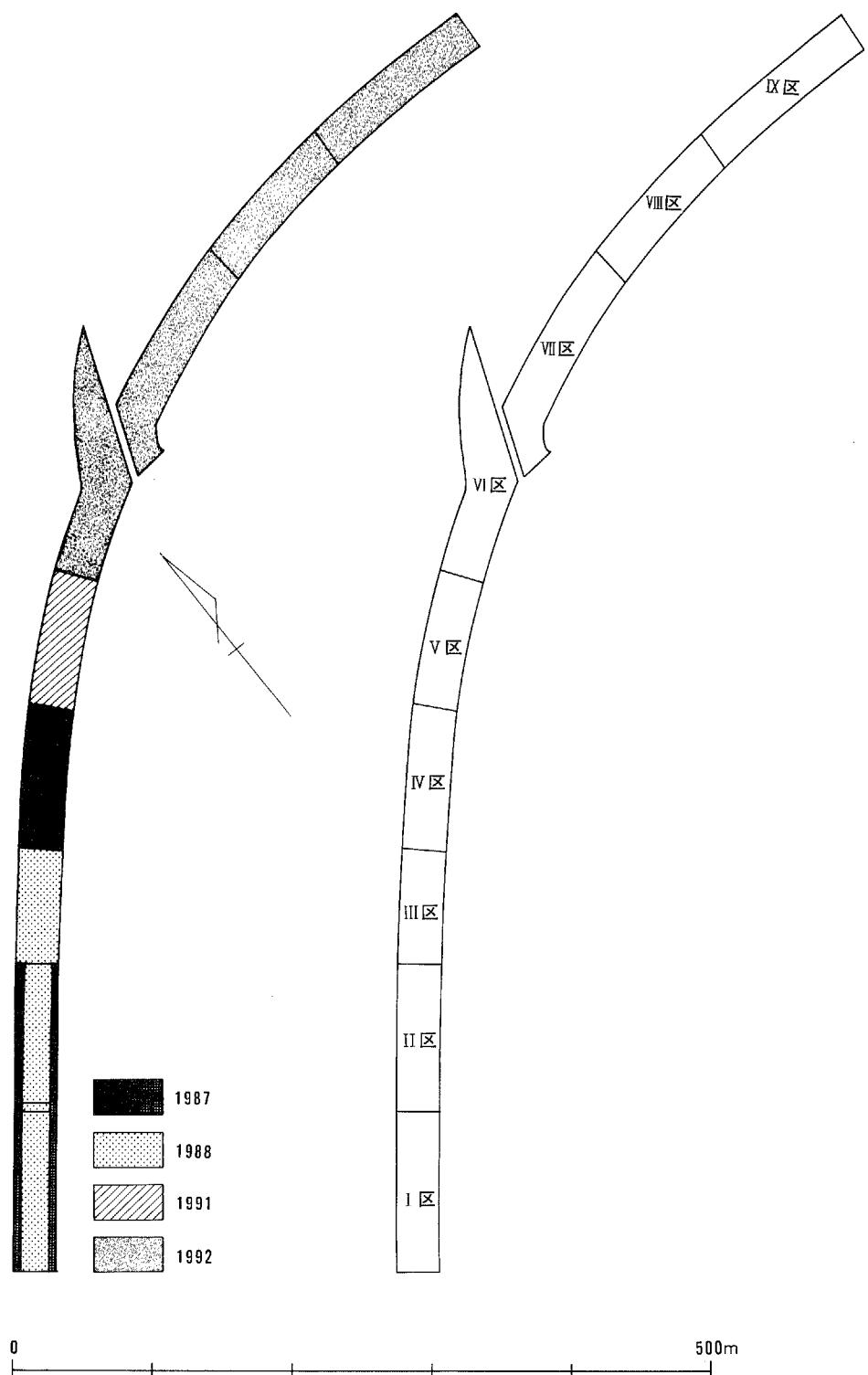


図2 発掘年度と地区割模式図

第2章 遺跡の立地

第1節 川辺遺跡の地質と基本構造面

川辺遺跡は、紀ノ川の下流右岸、和歌山市の北東方にあり、和泉山脈の南山麓、標高11mから12mのなだらかな平坦地にある。

南方の直線距離にして約700mに東西流の紀ノ川があり、北方約1,500mに地質構造線として著名な中央構造線が和泉山脈を東西に走っている。

この中央構造線を境にして地質的には、内帶（大阪方面）と外帶（和歌山方面）に近畿地方は大きく分けられる。

外帶の最も北に東西走するのは、和泉層群で、和泉層群の南麓から紀ノ川の間には局地的に菖蒲谷層があり、この菖蒲谷層を雄ノ山川、七瀬川が侵食して分断し、一部その堆積層によっておわかれているが、多くは冲積層である。

鳴滝川より東方は、段丘状の地形がみられるが、この地形は和泉山地から、紀ノ川に流れる支流によって形成された扇状地の端部が、紀ノ川によって削られて段丘状を呈しているものである。川辺遺跡は、これよりさらに低位の紀ノ川の洪水堆積による中洲にあたる。南流する雄ノ山川、住吉川、七瀬川の合流付近でもあるが、紀ノ川の左岸や右岸下流にみられるような氾濫原から洲や陸地化への移行過程の中で、低湿地が常に氾濫して、水の流路を変えていったのとは異なり、少なくとも縄文時代晚期以降は、この周辺は比較的安定した居住空間をなしていたといえる。地勢は当然ながら和泉山脈から紀ノ川に向かって低くなっているが、一方で雄ノ山川、住吉川の流れは南西流を自然とし、時にこれが直線流で紀ノ川に及んだことも多々あったであろう。

縄文土器が出土、採集される川辺遺跡の対岸の遺跡として、称宜貝塚（和歌山市称宜）、吉礼貝塚（和歌山市吉礼）、岡村遺跡（和歌山市本渡）、岡崎遺跡（和歌山市井辺）があり、同じ右岸下流には六十谷遺跡（和歌山市六十谷）、直川遺跡（和歌山市直川）があり、いずれも標高8m～10mの範囲にある。

この近隣に府中があり、かつて表面採集においてナイフ型石器が採集されている。標高は20mで、段丘上に位置する。この紀ノ川をめぐって、一つの経済、文化活動の道であったと同時に、川の南北の流通、経済、文化等においては、障害となった道でもあったであろう。

川辺遺跡周辺は、近在を流れる和泉山脈を水原として南流する雄ノ山川、住吉川、七瀬川の開折扇状地、あるいは紀ノ川の西流する氾濫洲として成立したと考えられる。

各地区の現地表面の標高を比較すると、I区からIX区までTP10.90mから12.20mと、その比高差は1.3mと序々に北東に対して高くなっている。

これらの遺構面の高さと、遺構面の時代のあり方をみると、7世紀から8世紀の出土遺物と遺構が各地区まんべんなくみられる。この時代を基軸として、その遺構面の高低関係は、自然の地理的条件下のもとでの生活を反映している。II区、III区、IV区、V区では7世紀から8世紀の生活面がみられるが、平安、鎌倉時代の生活面がみられない。特にI区においては、奈良時代以降の近現代まで、この地が、全体からみて安定したことが、遺構の継続からうかがえる。

I区の上面は中世～近世の面であり、下面是飛鳥時代の遺構が中心となる。II区の上面は、中世～近世の遺構面であり、下層は弥生時代から、飛鳥時代の面である。III区は、飛鳥時代を中心で、遺物として縄文式土器、弥生時代石包丁がみられる。遺構のあり方から安定した生活面といえる。IV区上面は、飛鳥時代で、下面是一棟の竪穴式住居と、一棟の円形住居があり、前者は弥生時代、後者は縄文時代であろうと思われるが、出土遺物は少ないが、縄文時代、弥生時代の遺物が少量包含層に含まれている。V区上面は、飛鳥時代遺物にまじって弥生時代遺跡がみられる。下面是弥生時代が主流である。包含層から縄文式土器がみられる。VI区上面は弥生時代遺物、古墳時代遺物、奈良時代遺物、中世遺物が出土し、中面はほぼ中世が主体である。下面から縄文時代、弥生時代、古墳時代、中世の遺構、遺物がみられ、包含層から多くの縄文式土器が出土している。VII区上面は奈良時代、中世の遺構、遺物がみられ、下面においては、縄文時代の遺構、遺

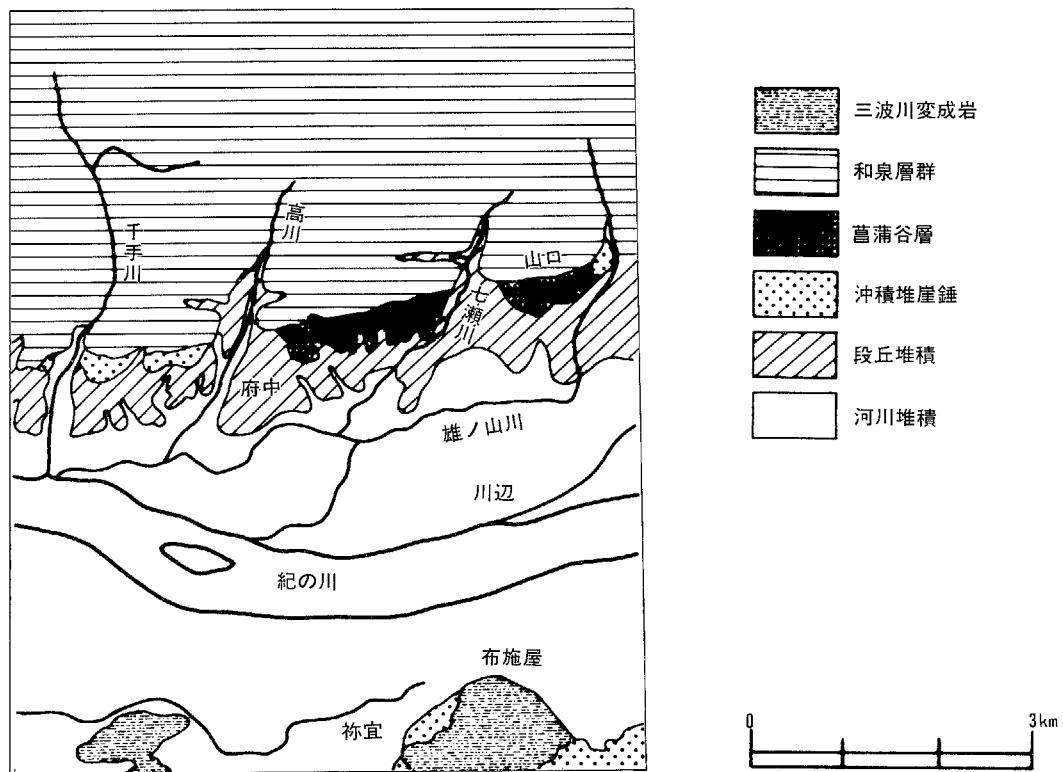


図3 川辺遺跡周辺地質図

物と共に中世の遺構、遺物がみられ、飛鳥、奈良時代の遺物はみられない。VIII区上面は、縄文時代、弥生時代、古墳時代、中世の遺構、遺物がみられる。下面は縄文時代、弥生時代の遺構、遺物に限られる。IX区の上面は奈良時代、中世の遺構、遺物が中心であり、下面は縄文時代の遺構が若干みられる。

図5は、任意の部分で、各遺構面の標高を示したもので、当然ながら位置によっては、すべからくこの模式図通りにいかないのは当然であるが、一つの目度として示すものである。なお、VI区の現地表の高いのは、道路面の部分で盛り土をしていることによる。

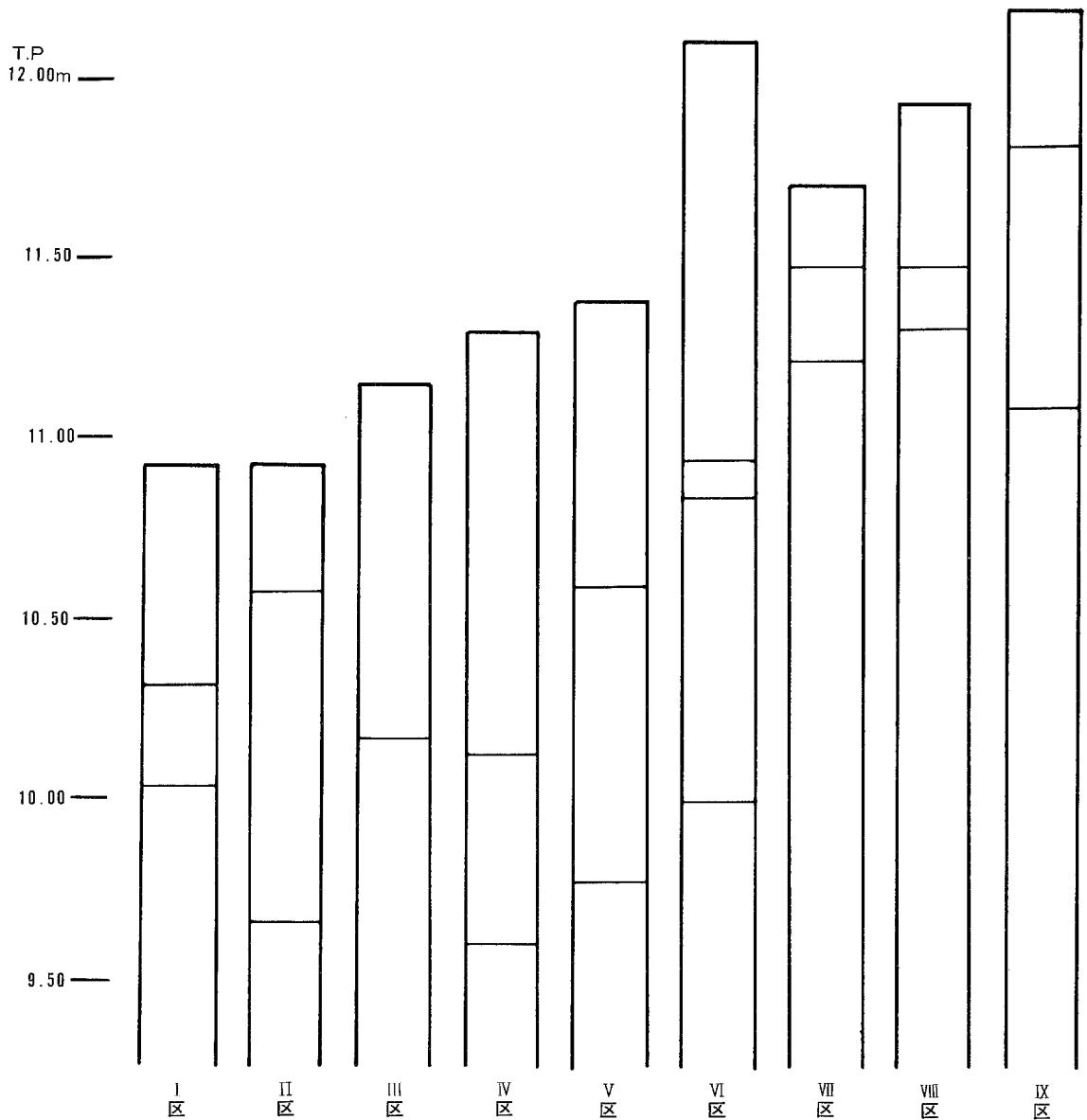


図4 現地表面と遺構面の柱状模式図

第2節 川辺遺跡周辺の遺跡

川辺遺跡は縄文時代後期から、縄文時代晚期、弥生時代中期、後期、古墳時代初期、6世紀古墳時代、飛鳥・白鳳時代、鎌倉時代が顕著に遺構、遺物によって確認される生活址である。しかし、遺物が出土せず、遺構の検出がしにくい、水田、畑地などの土地利用については、可能性を内包させて記述するものである。

先土器時代については、かつて遺跡分布調査において、ナイフ型石器が府中遺跡で採集されている。

縄文時代の遺跡については、先の「川辺遺跡の地質と基本遺構面」で述べたとおりである。しかし、これらの中で発掘調査の例は、岡崎遺跡と称宜貝塚、吉礼貝塚などで、紀ノ川北岸での発掘による縄文土器出土例とその規模の大きさは初めてと言ってよい。

弥生時代になると川辺遺跡の近隣で集落が成立している。宇田森遺跡、吉田遺跡、藤田遺跡、中黒土遺跡など、集落が接触するくらいの密度で開発されていった。

古墳時代においては、吉田遺跡を除いて明確ではない。川辺遺跡においてもI区、II区、IV区、V区において、出土土器、埴輪片等がみられるが、全体的に集落が明らかでない。あるいは古墳時代以後整地された可能性は埴輪片、金環の出土からうかがえる。

次に古墳時代終末～7世紀代において再び遺構、遺物の量が全体的に多くなり、竪穴式住居址もみられる。7世紀代の竪穴式住居址は県内において初見である。

西1kmには大屋津姫神社、北1.5kmには湯屋谷があり、同じく1kmに山口廃寺がある。この山口廃寺の真西1.25km、川辺遺跡の北西1.3kmに上野廃寺がある。いづれも段丘堆積層に建立されている。

奈良時代・平安時代になると、川辺遺跡は衰退している。一方吉田遺跡は、平城京出土の土器と酷似する土器群がみられ、しっかりとした掘建柱建物が検出されている。

また、南海道の存在も無視できないが、明瞭な付帯施設が検出されなかった以上、云々することは、このたびの発掘からは困難である。

平安時代になると熊野参詣が盛んになり、藤原定家の「明月記」では、雄ノ山峠を通って中山王子→山口王子→川辺王子→中村王子→吐前王子と順次参拝している。この熊野古道の道筋については、当時の日記類、記録に負う処が多いが、その道筋が一本でなければならないこともないであろう。その都度、王子社が追加されたり、減らされたりして、道筋を変更したりと、その変化は充分考えられる。

川辺王子に関しては道筋の一つとして、吐前王子に到る紀ノ川の渡過地であったであろうことは、この記録によつていえることである。

川辺は熊野参詣の王子社として川辺王子と平安時代から王子社については頻出するが、他に資料は寡聞である。



I 区の遺構と遺物

I 区上面の遺構と遺物

I 区は1987年、1988年の二年度にわたって、遺跡発掘調査が行われた。そのため遺構の不連続が顕著にならざるを得ない状態であった。このことは包含層面における遺構と最終面の遺構の確認において混乱したためのものである。

遺構の主なものは掘建柱二棟から三棟、木棺墓二十一基、墓制に関する遺構三基と他に落ち込み遺構、溝状遺構が多く検出されている。

この溝状遺構において南北流のものと東西流の溝、そして、南東流の溝状遺構がみられ、南北流の溝状遺構は規模が大きく、他の東西流、南東流の溝は巾が狭く、自然流路と人工流路の違いを示している。

出土遺物の多くは瓦器等の日常用器で、他に江戸時代の遺物も散見する。

S B 遺構

S B 2 0 1 (図 6)

S X328との前後関係は不明である。このS X328に類似するS X329、S X330も出土遺物が無く、比較方法がない。しかし、木棺墓にみられる掘建柱の残痕の状況から、この一帯が中世墓地地域として、墓域設定される以前の建物と、墓域として設定され墓域認識が消滅した以後の建物とに分けられよう。後者の場合は、木棺墓に残る柱穴根から理解できる。しかし、実際にこれらの墓制を中心にしての前後関係から、S B201時期の比較することは難しい。

この 2 間と 3 間の建物の 2 間の一方の面は、長さ 230cm - 250 cm で、対面は 250cm - 250cm と長

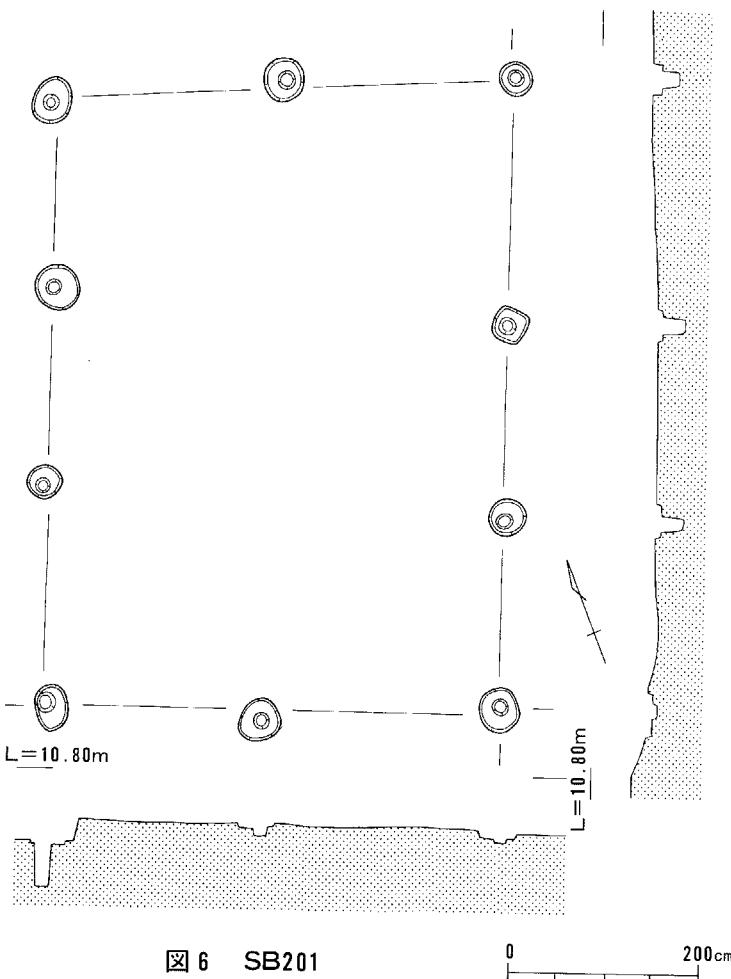


図 6 SB201

さもほぼ等しく、柱間はほぼ一定している。

3間の一方の面は、200cm-200cm-250cmで柱間は対応している。中間は等しいが、他は50cmの違いがある。総柱間長としては等しい長さである。

堀方は円形で、堀方の径は約30cmで、柱痕径は約20cmである。平面積は略々30m²で、柱痕は下面に到っている。

S E 遺構

S E 3 0 3

(図 7)

上端は円形

の掘り方で、

径約230cmの井

戸である。下

端にあたる底

も円形につく

られており、

径110~120cm

である。深さ

は現存値で150

cmである。

底部の形状

から、素掘り

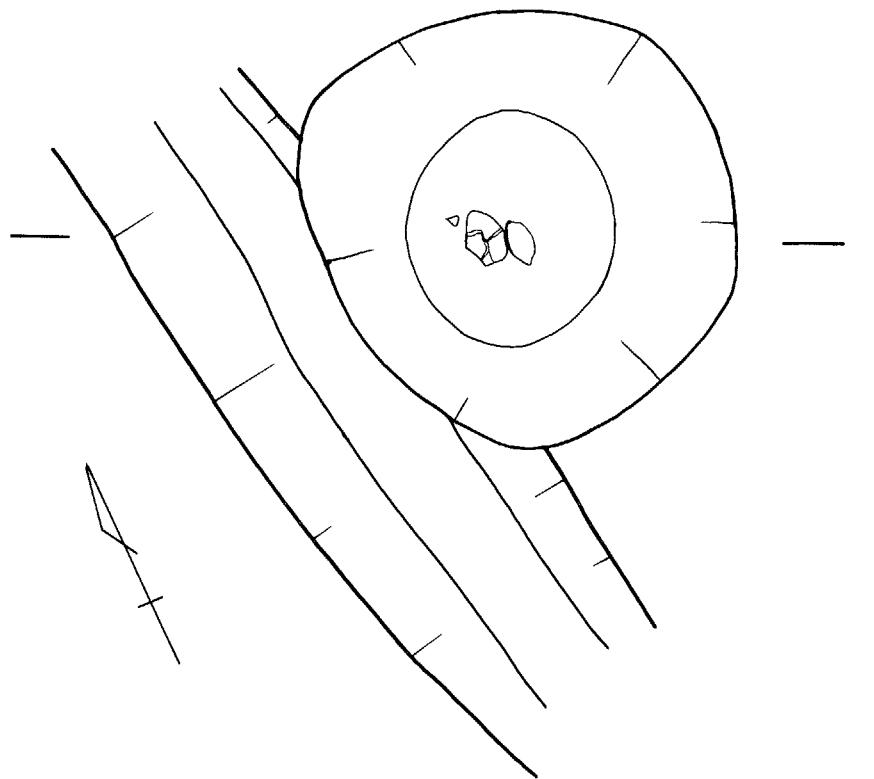
の井戸という

より、本来底

部に曲物を置

いていた可能

性がある。



L=10.00m

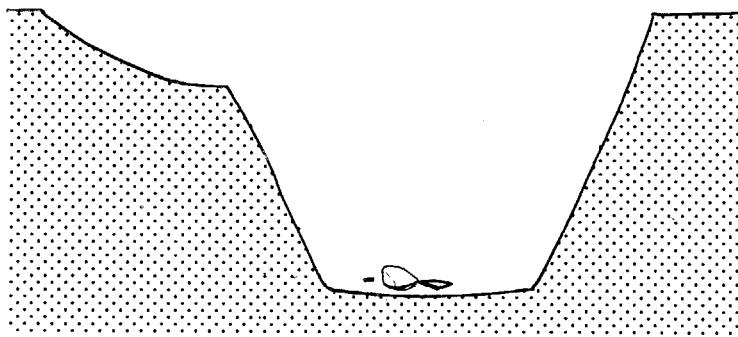
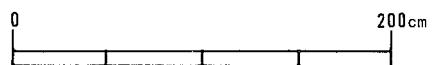


図 7 SE303



出土遺物（図8, PL 61）

瓦器碗（19）

SE303の底で検出されたもので、この井戸の使用時期の一つの資料である。口縁部径13.8cm、器高5cmで、高台は断面台形である。外面器壁は磨滅が著しく調整は不明である。口縁部の外面はヨコナデの調整がされ、器肉がうすくなっている。内面底部には細い螺旋暗文、体部には平行暗文がなされている。

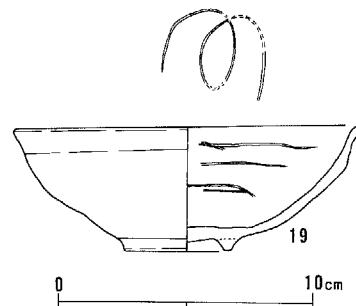


図8 SE303

SX遺構

SX304（図9）

SX305と重なる土坑で、SX305以前の方形の土坑である。掘方は上端の長軸で、210cm、短軸で120cmで、現存の深さ最深部で65cmである。

掘方内に方形の木棺痕があり、長軸145cm、短軸75cmで、深さ45cmの木棺の形状の痕跡をよく残している。

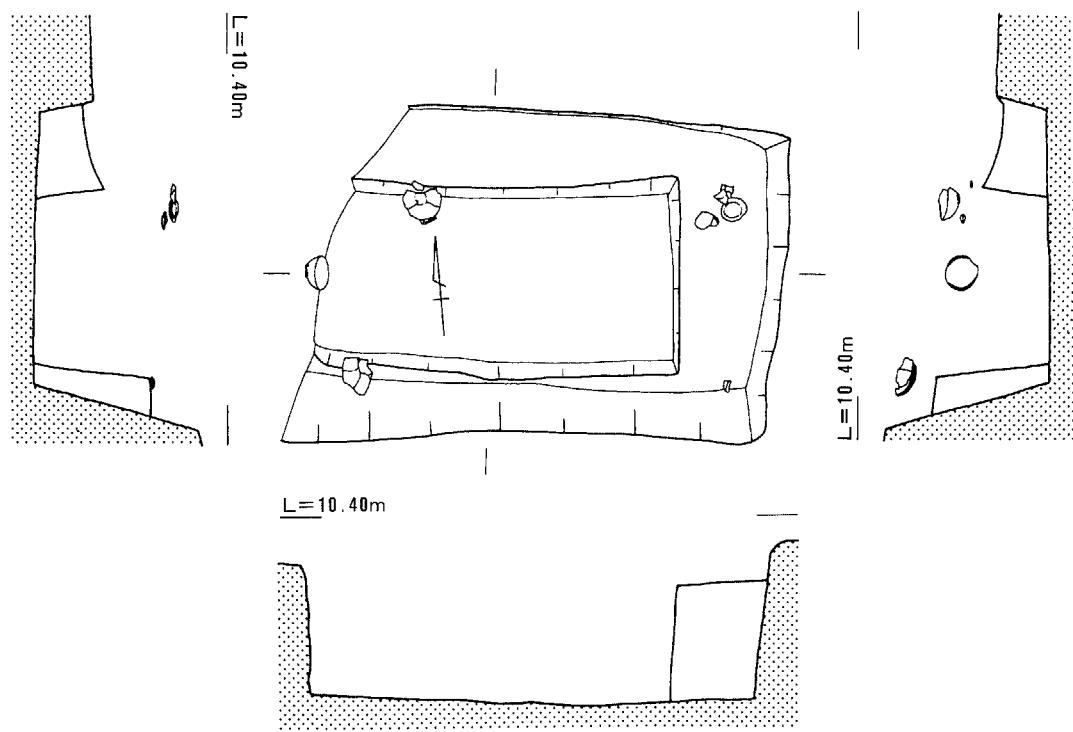


図9 SX304

出土遺物(図10, PL61)

土師器小皿(623)

口径8.4cm、器高1.7cmで、口縁部内外面はヨコナデ、外面底部は指頭圧痕のままで、内面はナデである。

瓦器小皿(2)

口径7.3cm、高さ1.8cmに復元できる。内外面共に灰色を呈する。

瓦器椀(1, 3, 4)

(1)は径16cmに復元できる。内外面共に灰色で、断面胎はより白色である。外面には二段の指押さえがみられ、内面は口縁部に平行に細いミガキ暗文が粗くなされている。口縁部はつまんだヨコナデ仕上げである。

(3)は口径14.7cm、高さ5.5cmで焼成は良好で、残存もよい。内外面共に暗灰色を呈している。成形は(4)と同じであるが、体部内面には、口縁部に平行な細いミガキ暗文が重なって施されている。内面底部には一筆による螺線暗文ミガキがなされている。

(4)は口径15cm、高さ5cmで、焼成の良好な暗灰色を呈している。外面には三段に指押さえがあり、それに沿って器壁の段が未調整のまま残っている。高台は貼り付けてナデたもので、径5cmで疊付部分が若干みられる。口縁部はつまみヨコナデで仕上げられ、体部内面は細い平行のミガキ暗文がなされ、底部までは施されていない。

瓦器鉢(5)

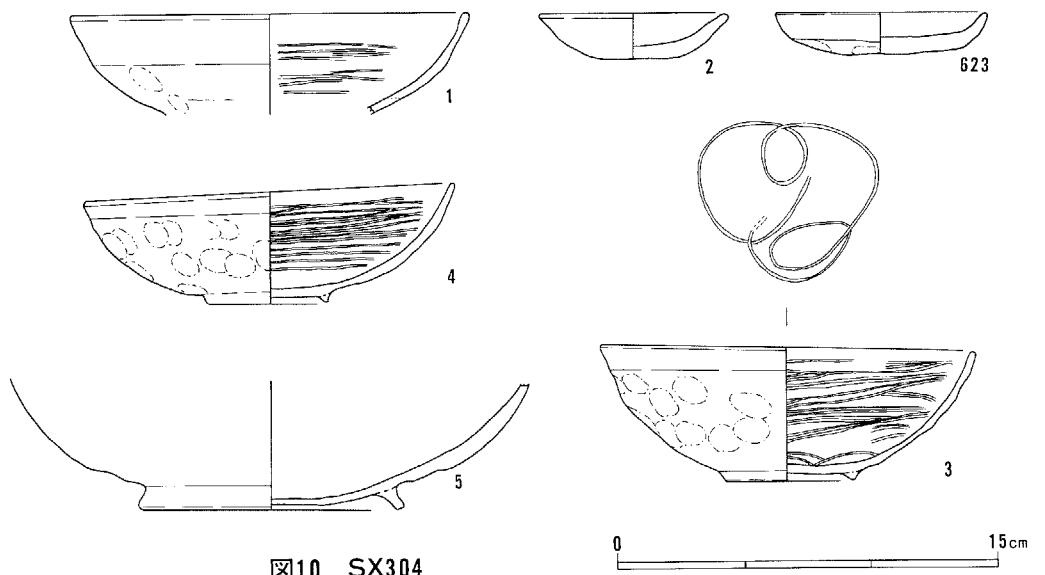


図10 SX304

一応鉢としているが形状は不明である。内外面共に磨滅が著しい。現存の最大径は反転復元で、20.6cmであるが、体部はまだ張るであろう。高台は貼り付けで、かなり外側に張っている。径は10cmである。

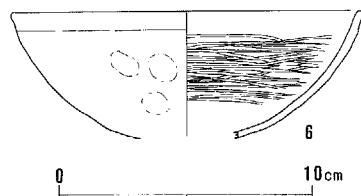
これらいづれの土器も棺外の掘方内に据えられたものである。

土錘（584）

長さ3.8cm、最大幅1.5cmで、径4mmの円孔が貫通している。

S X 3 0 5

S X 304の後に掘られた円形状の土坑である。上端の径160cmで、底も円形で径100cm、深さは30cmである。一応ここではS X遺構としているが不明である。出土遺物は無く、時期は不明である。



S X 3 0 6 (図11)

長方形の掘方で、長軸は150cm、短軸は110cm、深さは70cmである。掘方内には長方形の木棺痕があり、長軸140cm、短軸70~80cmを測る。

出土遺物 (図11)

瓦器椀（6）

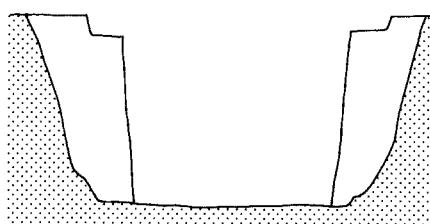
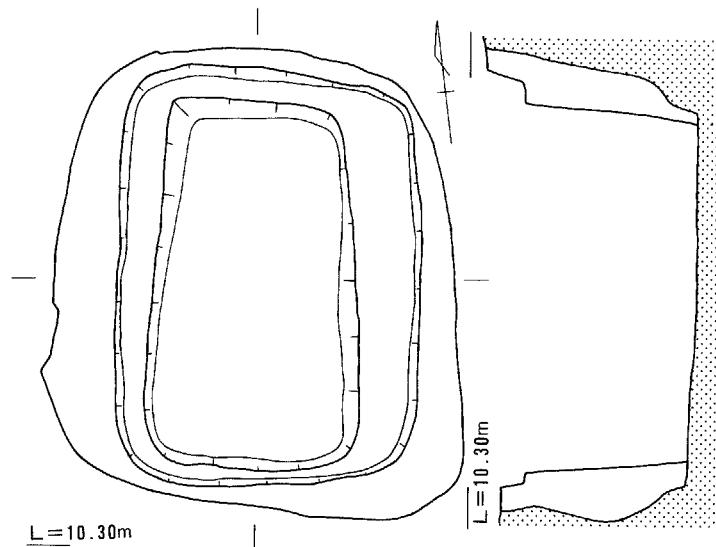
口縁部径13.8cmに復元できる。

全体に灰白色の色調で、口縁部は黒色を呈している。体部外面は、二段の指押さえがあり、内面は細いミガキ暗文が口縁部に平行に重なって密になされている。

他に瓦器片、土師器小皿片、土師器皿片、木炭片が出土している。

S X 3 0 7

掘方は方形を呈し、長軸は最大部分で100cm、短軸は80cmで、深さ20cmである。



出土遺物

木炭片21個、瓦器片、土師器片

図11 SX306



がみられる。

S X 3 0 8 (図12)

掘方は方形を呈する。3分の1は前年度の調査で確認しえなかつたものである。現存の長軸は180cm、短軸は75cmである。掘方内には木棺痕があり、長軸は120cm、短軸は40cmである。

出土遺物 (図12, PL 61)

瓦器椀 (20)

内外面共に剥落している。高さ60cm、口縁径14.5cmに復元できる。内面には密なミガキ暗文がなされている。高台は断面三角形を呈する貼付高台である。

瓦器椀 (21)

口縁径15.6cm、高さ5.2cmに復元できる。内外面共に剥落している。外面体部には二段の指押さえがみられ、内面には、全面に施されていたであろうミガキ暗文が、局部的にみられる。高台は断面台形の貼り付けである。

瓦器椀 (22)

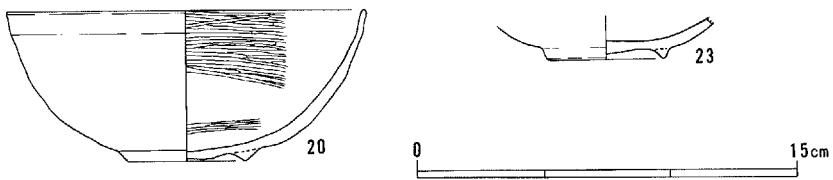
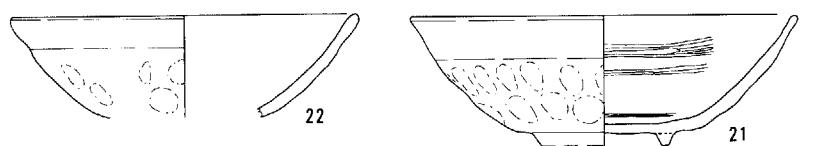
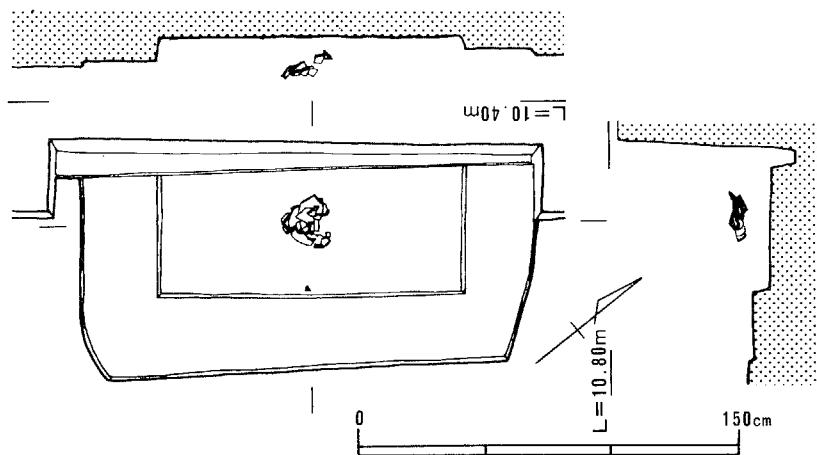


図12 SX308

口縁部は約14cmに復元できる。外面は二段の指押さえがみられる。内面は剥落で不明である。

瓦器椀（23）

底部分である。黒色の強い色調で、高台は断面三角形の貼り付けである。他に瓦器片、土師器片がある。

鉄釘（629）

頭部片と思われるが、形状は不明である。

S X 3 0 9

（図13）

平面が台形状の掘方で、S X 310に先行する。掘方の最長の長さは250cm、短軸は最大で225cmである。木棺痕の長軸は165cm、短軸は60cmで、深さ10cmである。

出土遺物

灰釉の破片が一片である

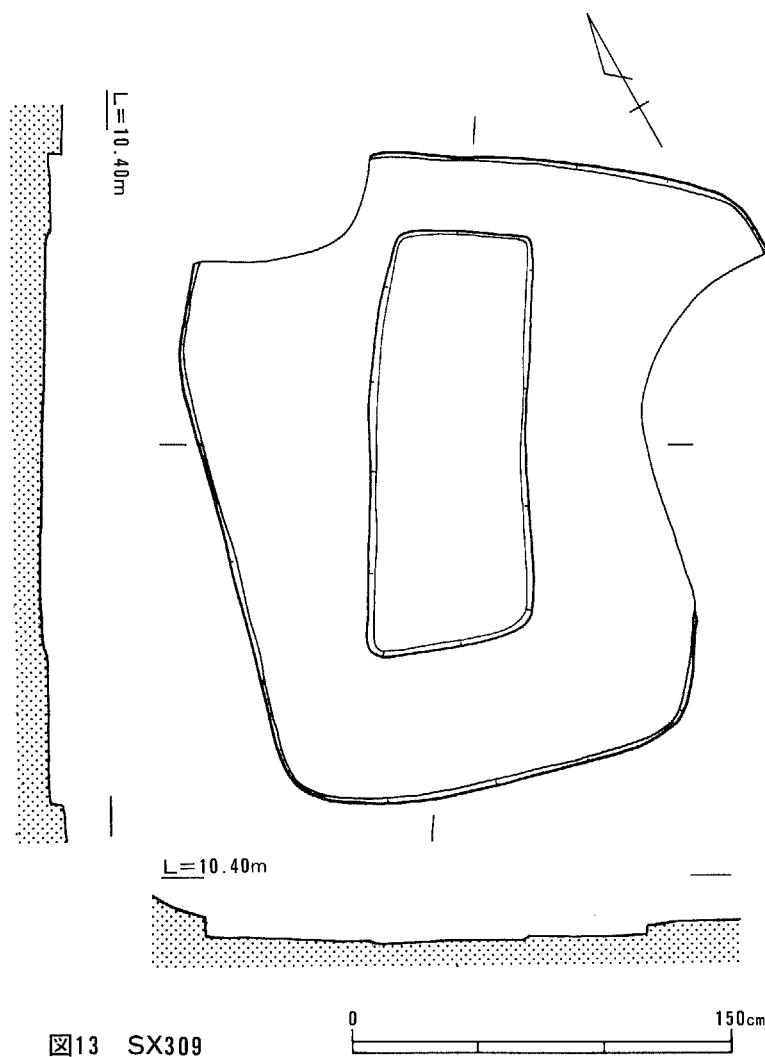


図13 SX309

S X 3 1 0 (図 1 4)

S X309に接して平行に掘られたものであるが、後世の手によって掘方を損なっている。掘方は不整形で、最大長は220cm、短軸は140cm、深さ10cmである。木棺痕は長軸が138cm、短軸が64cmである。

出土遺物

瓦器片、土師器片、須恵器片である。

S X 3 1 1 (図 1 4)

長方形の掘方で、長軸196cm、短軸140cm、深さ10cmである。

出土遺物

瓦器片、土師器片、白磁片が出土している。

S X 3 1 2 (図 1 5)

長方形の掘方で、長軸は190cm、短軸は135cmで深さ10cmである。木棺痕は長方形で長軸128cm、短軸53cmで、土坑墓と思われるS X313より新しい構造である。

出土遺物

土師器片、瓦器片、羽釜か鍋の口縁部片がみられる。

S X 3 1 3

長方形の掘方でS X312に切られている。残存する掘方の最大長は140cm、短軸は75cmである。

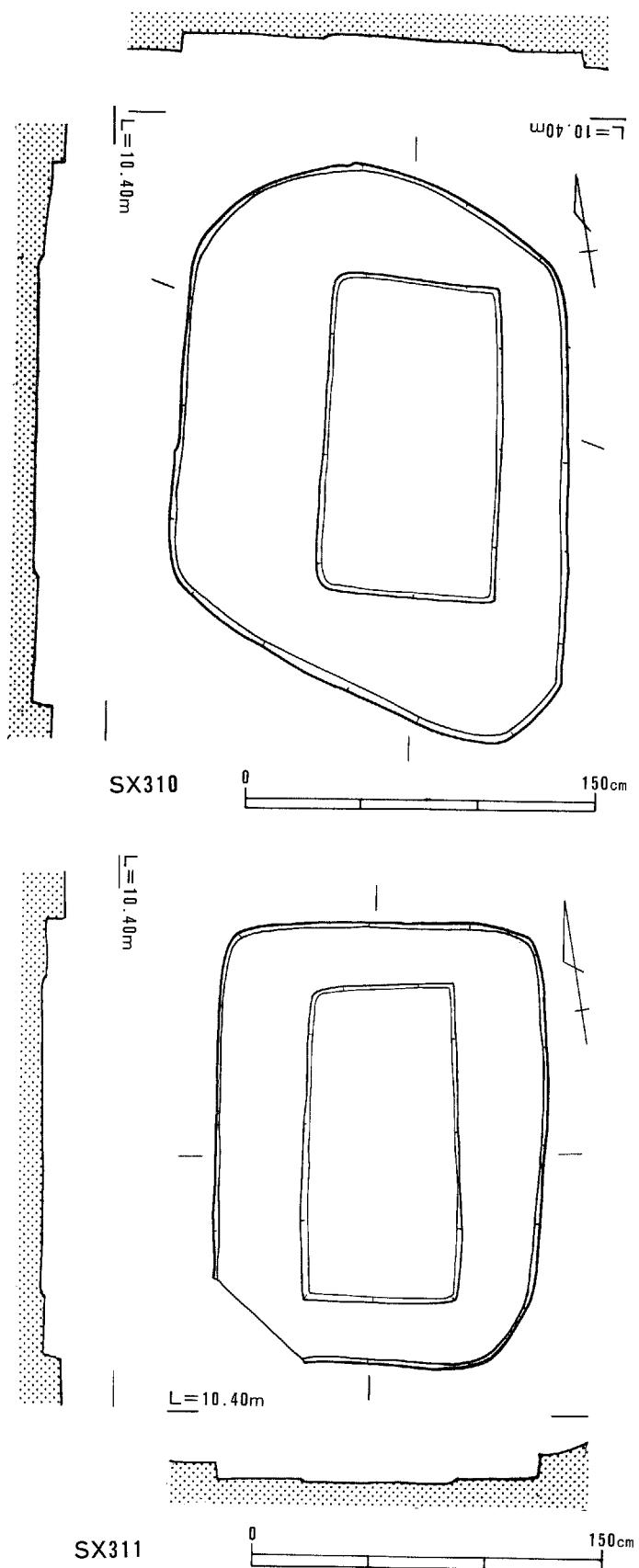


図14 SX310 SX311

出土遺物

土師器片、瓦器片がみられる。

S X 3 1 4

(図15)

不定形な楕円形土坑で、長軸が65cm、短軸は60cm、深さ20cmである。

出土遺物 (図16)

羽釜の口縁部が出土している。口縁部の造りの違いから二個体の羽釜である。

(7) は復元口径24.5cmで、

(9) は (7) に類似する。

(8) は復元口径29cmで、棺に利用したものと考えられる。

S X 3 1 5 (図16)

S X316と重なっており、S X316に先行する。掘方は隅丸方形で、長軸220cm、短軸150cm、深さ20cmである。木棺の痕跡は長方形で、長軸は145cm、短軸70cmである。

出土遺物 (図16, PL 6 1)

瓦器椀 (2 4)

出土状況から木棺内に納められたものと考えられる。復元口径14.8cmで、外面の体部下半は二段の指押さえ痕があるが、上から一段目はナデで消している。内面は、口縁部に平行の細いミガキ暗文が比較的粗くなされている。黒灰色の色調である。

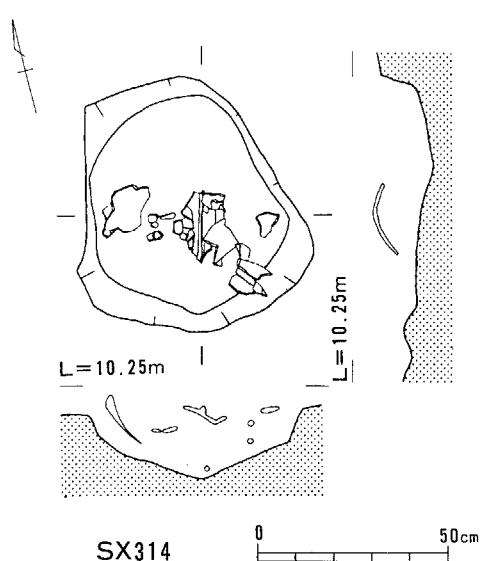
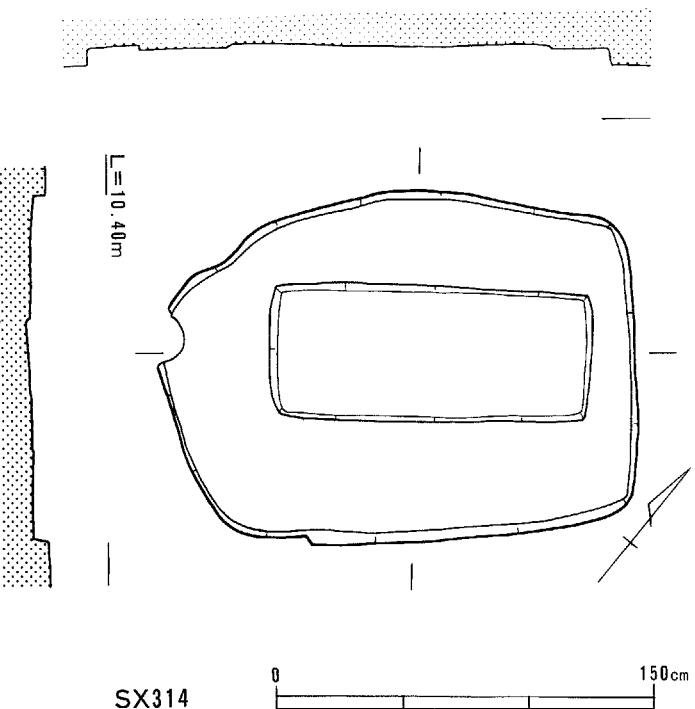


図15 SX312 SX314

S X 3 1 6 (図 1 7)

S X315に一部かかる、S X315より新しい遺構である。掘方は長方形で、長軸が170cm、短軸は55cmである。木棺痕の長軸は130cm、短軸は60cmである。

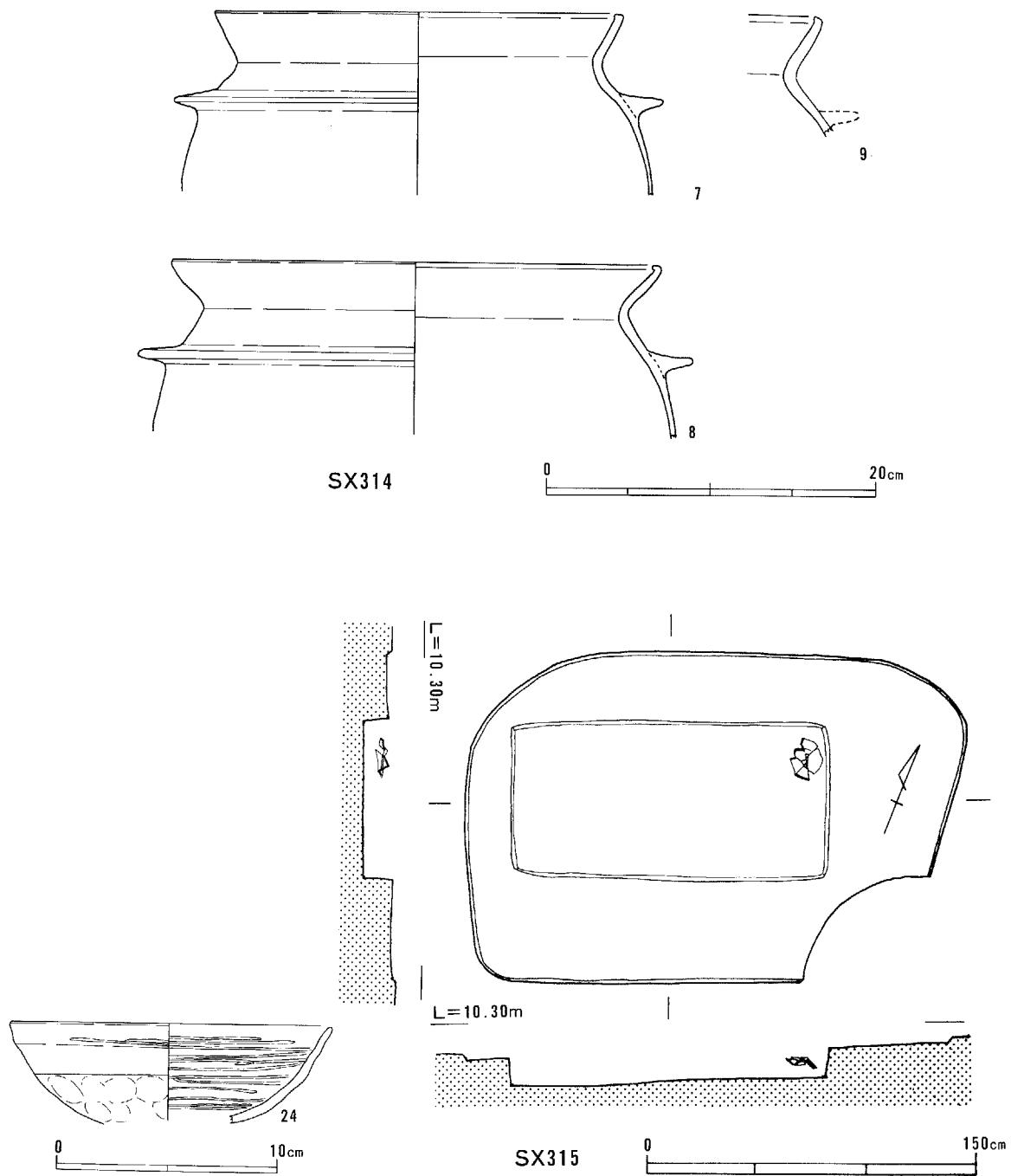


図16 SX314 SX315

出土遺物

瓦器片、土師器片がある。

S X 3 1 7 (図17)

長方形の掘方で、長軸は155cm、短軸で85cmで、深さ10.5cmである。木棺の長軸は125cm、短軸は55cmである。

出土遺物は無い。

S X 3 1 8 (図18)

丁度一次調査と二次調査にあたっている遺構で、明確さを欠いている。現存する部分で径85cm、深さ4cmである。

出土遺物 (図18)

鉄釘 (630)

先端部と頭部が欠け、残存部は長さ2.9cmで、断面方形の方0.6cmである。

他に羽釜があり復元口径27cm、比較的短いつの土器である。

胎土は結晶片岩を含み、内外面に煤が付着している。

S X 3 2 0 (図19)

隅丸方形で、S X 322と重なっている。残存する現存の長さは90cm、幅は100cmで深さは4cmである。

出土土器は瓦器破片、土錐である。

S X 3 2 1

新しい時期の落ち込みによって削平されているが、大部分が残存する方形の土坑である。長軸170cm、短軸115cmで深さ4cmである。木棺痕は検出されない。

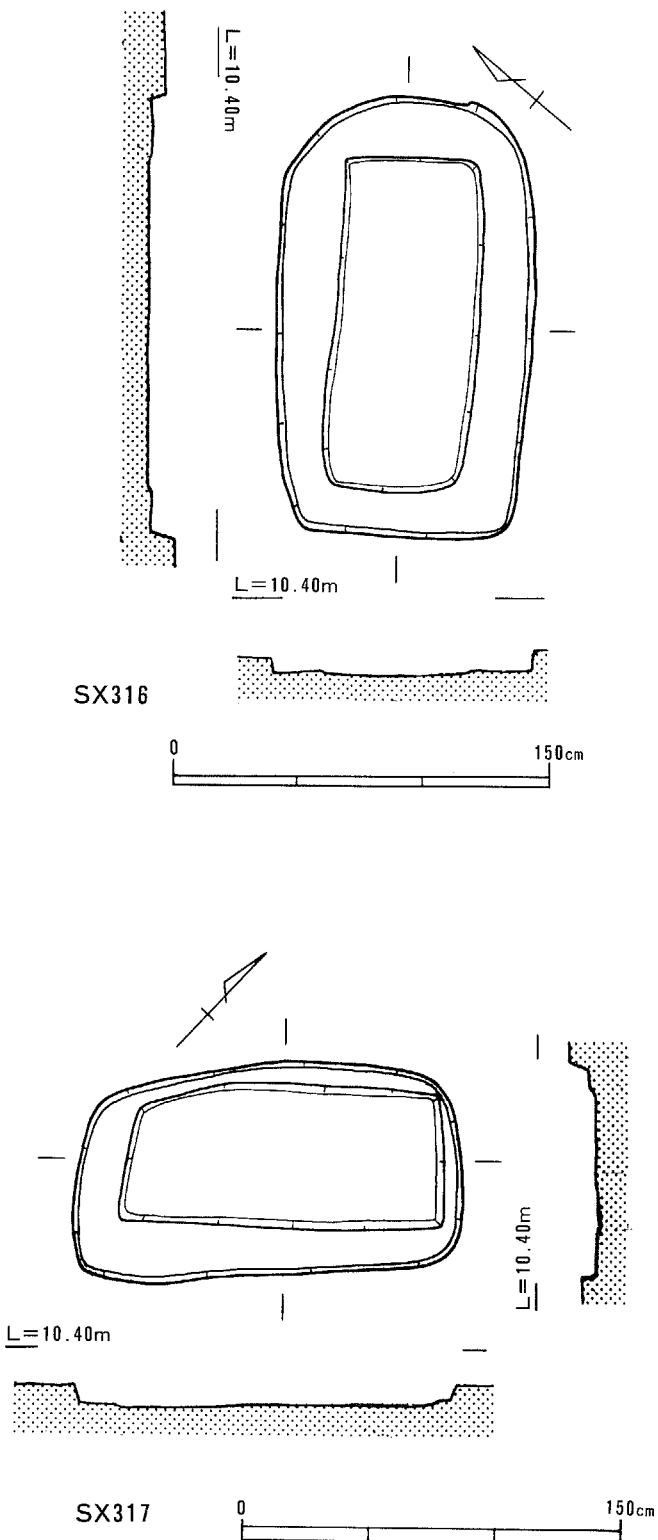


図17 SX316 SX317

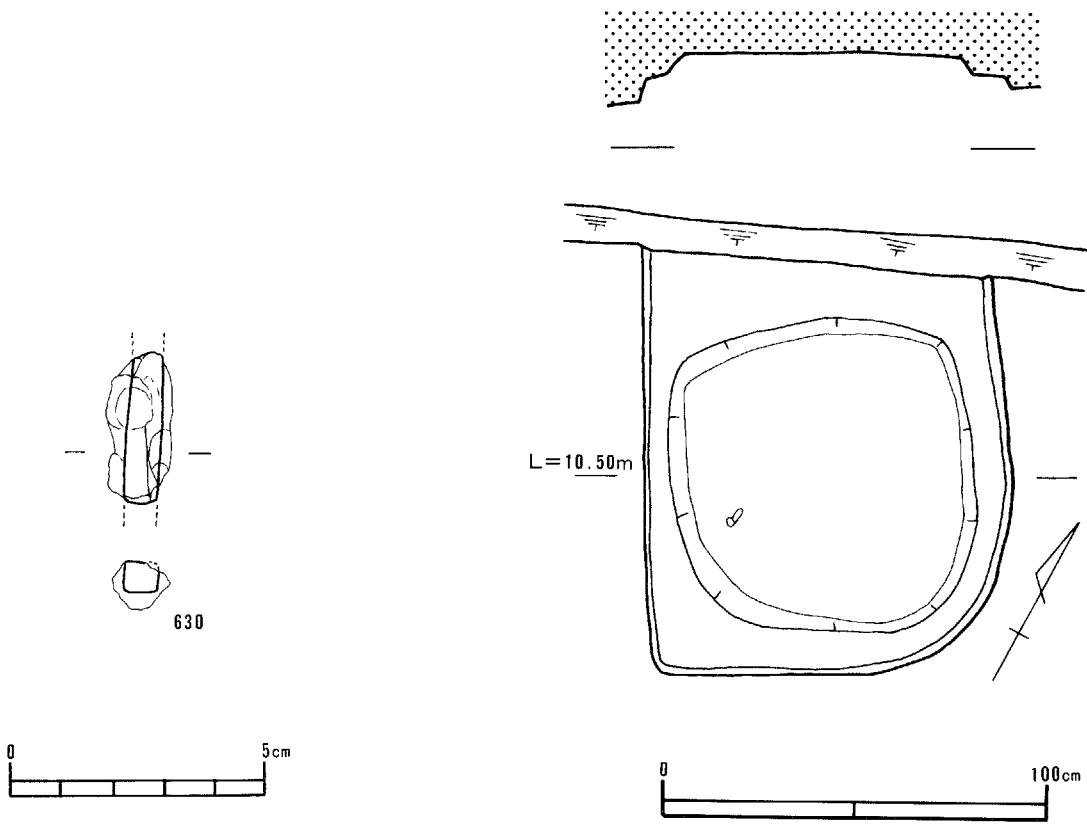


図18 SX318

S X 3 2 2 (図20, PL 3)

S X 320に先行する長方形の土坑で、掘方は長軸が440cm、短軸が160cmである。木棺痕の長軸は160cm、短軸は95cmである。遺構面掘方内に集石がある。深さは70cmである。

出土遺物 (図21, PL 6 1)

瓦器小皿 (10)

口径8.5cm、高さ1.6cmの暗灰色を呈する。底部には整形時の指頭圧痕がみられる。

瓦器椀 (11)

復元口径14.6cmで、底部を欠く。内外面灰色で、内面には細ミガキ暗文が重ねて施文されている。外面は指頭圧痕がみられない。

須恵器長頸壺 (12)

集石内から二個の破片で検出されたものであり、この二片は復元接合のできないもので図上

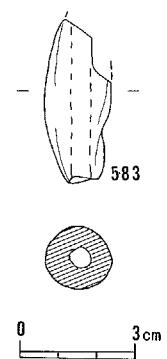


図19 SX320

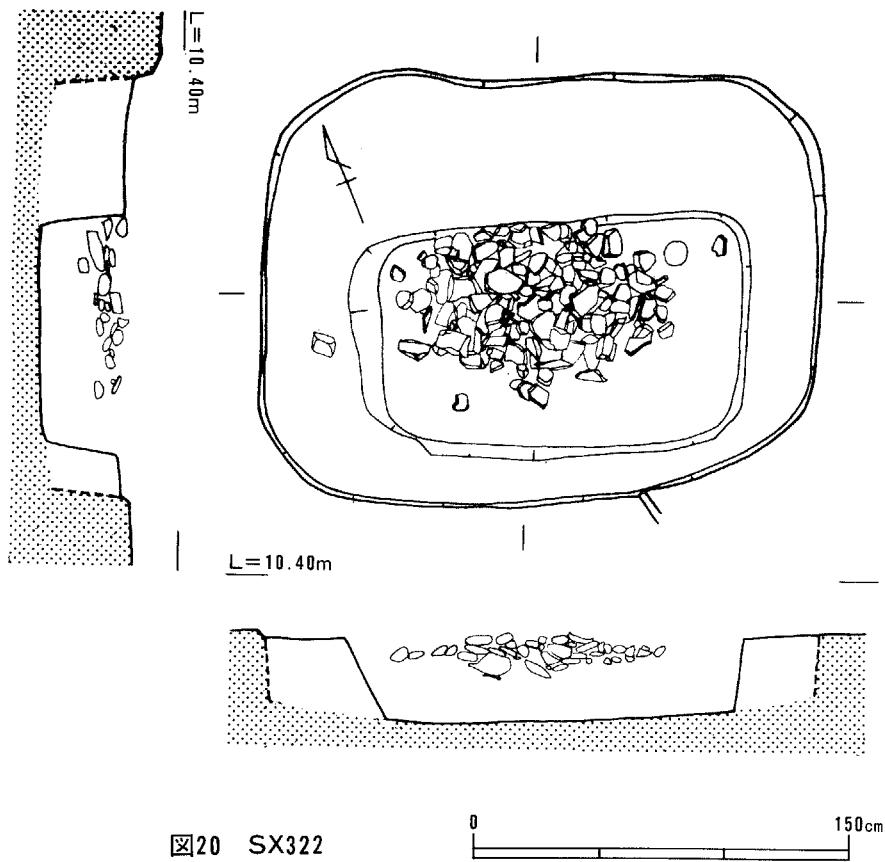


図20 SX322

復元である。

体部外面は格子叩きの上をヨコナデしている。内面粘土紐の接合が顕著であるが、ヨコナデを簡単におこなっている。

S X 3 2 3 (図21)

約2分の1程の検出で他は調査区外である。

掘方の最小長は110cm、最小幅は100cmである。木棺痕は一方の長辺に接し、最小長70cm、最小幅は70cmで、深さは30cmである。

出土遺物 (図21)

瓦器椀 (13)

復元口径15cm、底部を欠いている。外面には指頭痕がみられない。内面は細いミガキ暗文が重複しているのがみられる。黒灰色の色調である。

S X 3 2 4

S X325と長軸の方向を90度違えた遺構で、S X325より新しいものである。遺構の半分以上が未調査区外である。現存長70cm、現存幅110cm、深さ 8 cmである。

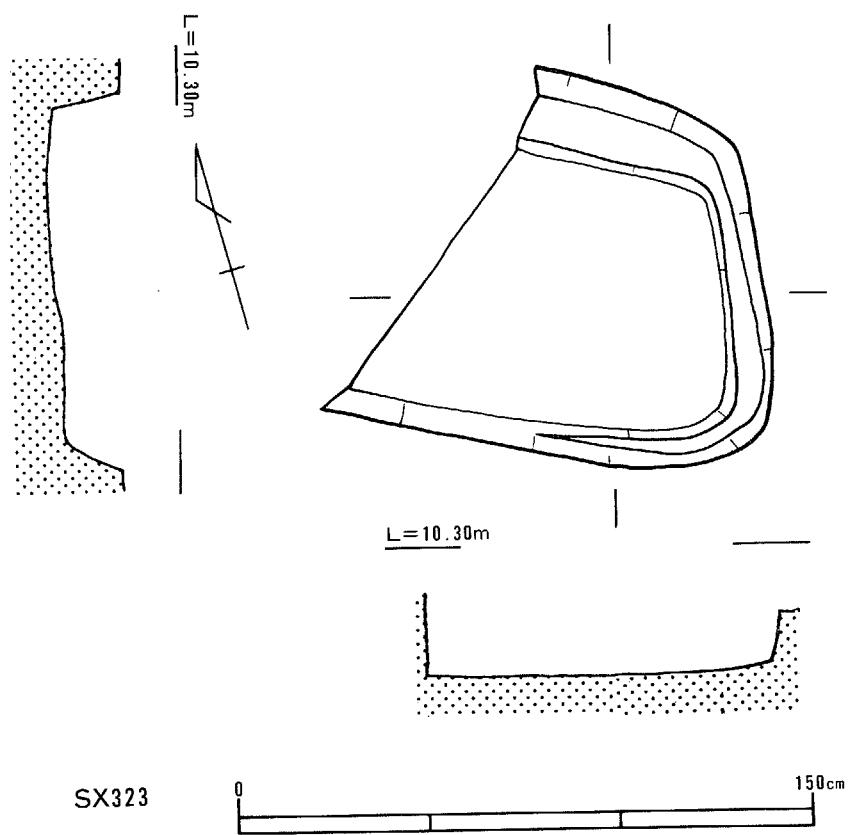
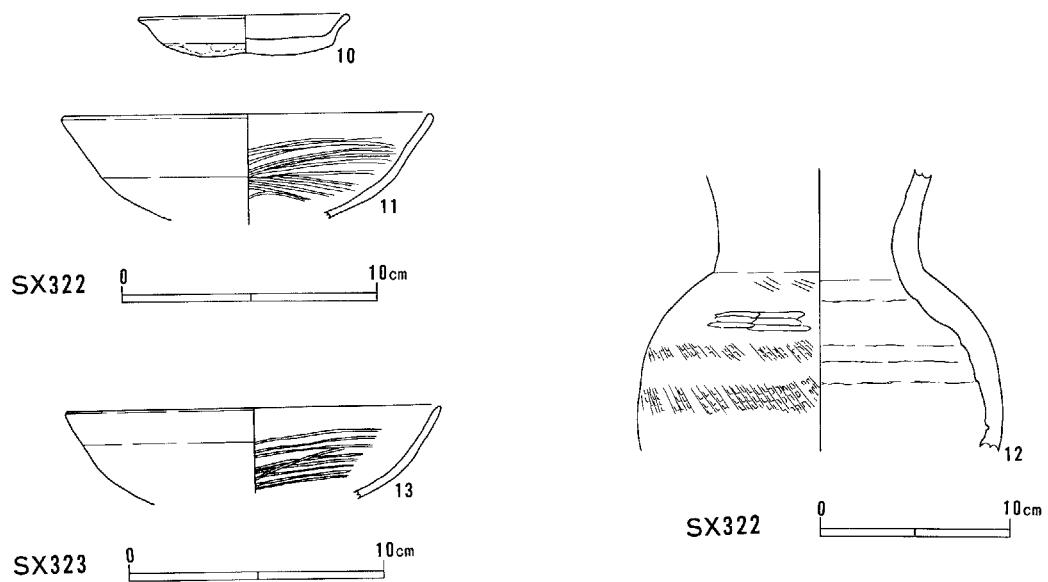


図21 SX322 SX323

S X 3 2 5 (図22)

長方形を呈する不整形な掘方である。SX324より古い。長軸は200cm、短軸は80cmで深さは4cmの浅い残りの遺構である。

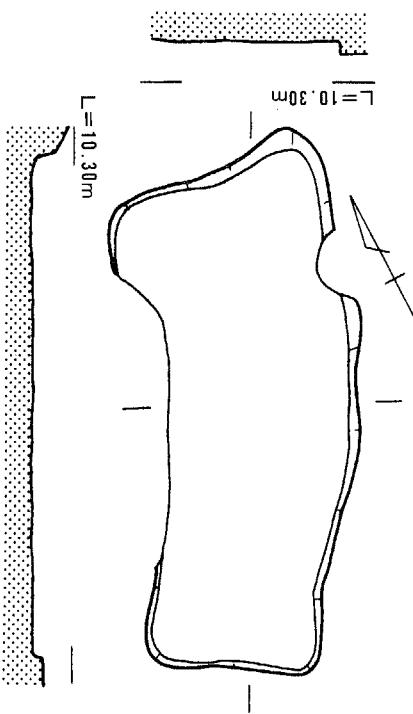
出土遺物 (図22)

瓦器小皿 (14)

復元径8.6cm、高さ1.8cmである。内外面共にヨコナデ仕上げである。底部の調整は不明である。

黒色土器 (15)

内黒の黒色土器の底部である。黒色土器に通有な密な胎土で、焼成



SX325 0 150cm

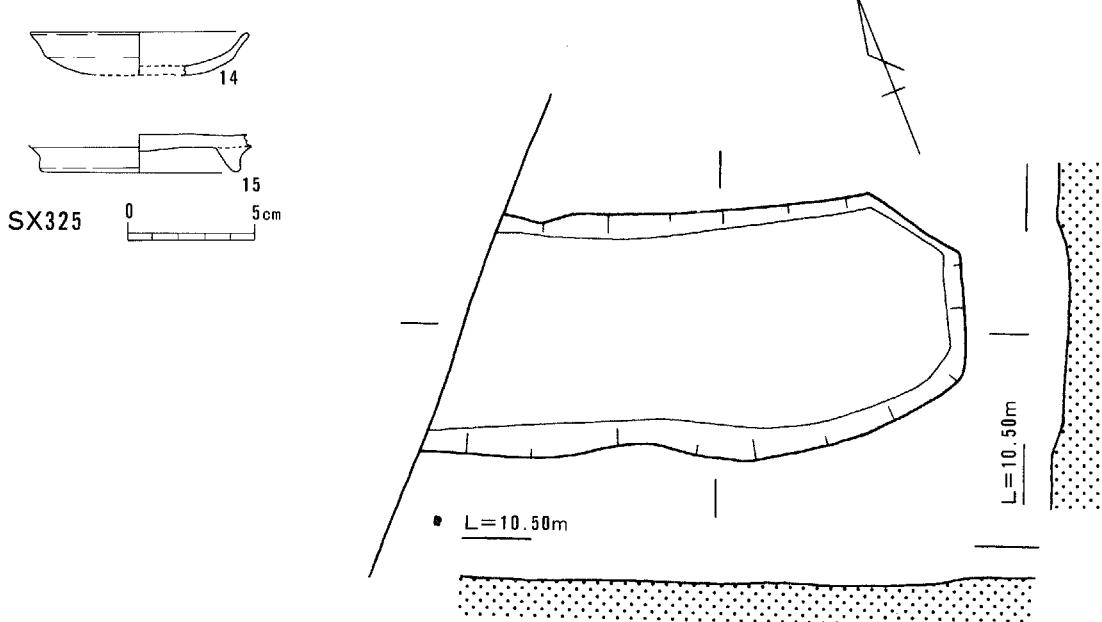


図22 SX325 SX327

も良い。高台は貼り付けで肉厚なしっかりしたものである。

S X 3 2 7 (図 2 2)

前年度の調整と溝状遺構によって土坑の両端を欠いている。現存する長軸は135cmで、短軸は65cm、深さ4cmである。

S X 3 2 8 (図 2 3, PL 4)

四字型の平面の溝をもった、方約7mの遺構で、溝幅は250cmから300cm、深さは5~12cmである。

S X 3 2 9 (図 2 3, PL 4)

長方形の溝が一周する遺構で、長軸が5.2m、短軸が4mである。溝の幅は50~80cmである。

土師器片、須恵器片、黒色土器片が出土している。

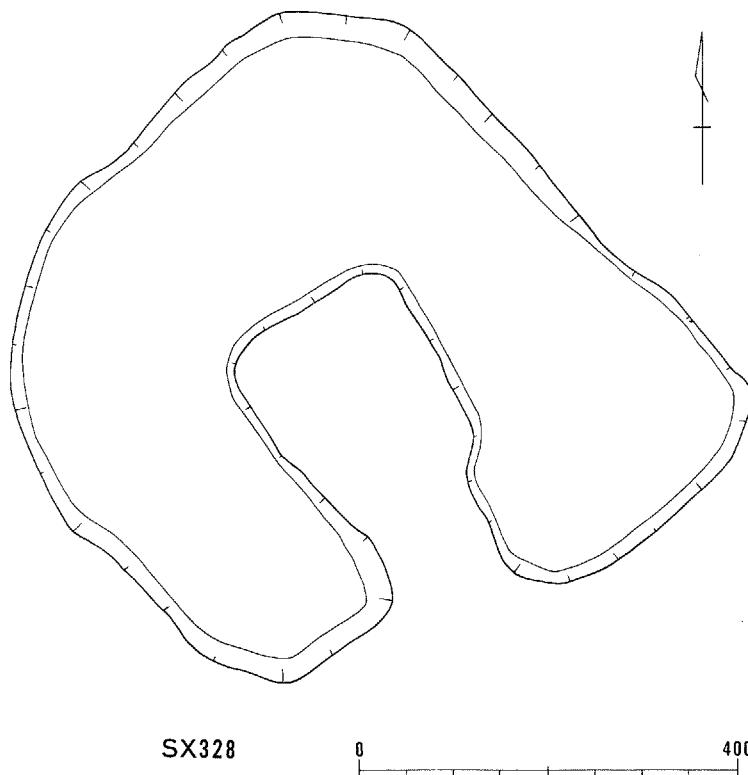
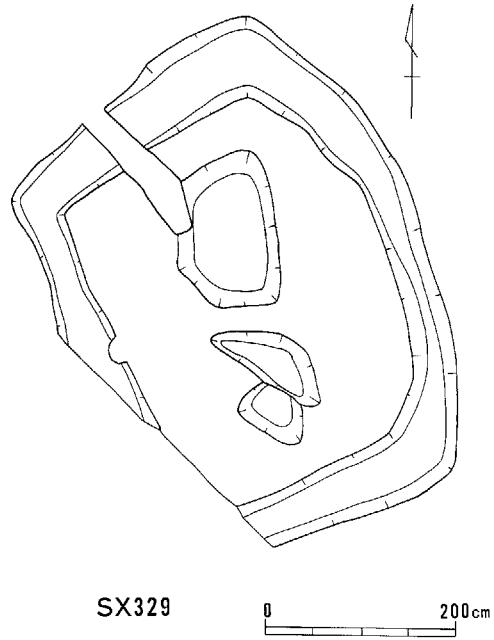


図23 SX328 SX329

S K 遺構

ここでは主に土器の出土した遺構と土器についてのべる。

S K 3 3 3 (図24, PL61・62)

浅い楕円土坑で長軸140cm、短軸125cm、深さ10cmである。

出土遺物 (35, 36, 37, 38, 39)

瓦器小皿 (35)

復元径8.4cm、高さ1.6cmの黒灰色の色調の土器である。内外面共に磨滅が激しく、調整は不明である。

瓦器椀 (36)

復元口径15.2cmで、底部は欠ける。外面は体部下半に二段の指頭圧痕がみられる。内面は細いミガキ暗文が、口縁部から体部の残存部に全面になされている。

土師器小皿 (37, 38)

(37) は口径8.2cm、高さ1.8cmの全面ナデ仕上げの土器である。口縁部から体部はヨコナデ、底部は不定方向のナデで仕上げている。淡橙色の色調で二ヶ所に煤の付着がみられる。

(38) は口径9cm、高さ1.5cmに復元できる。器面内外共に磨滅して調整不明である。内外面共に淡橙色で部分的に黒灰色である。

羽釜 (39)

口縁部片で、口径26cmに復元できる。口縁部外面端には調整の凹線帯がめぐり、つばは比較的短く仕上げている。口縁部から頸部にかけて、外にふくらんで仕上げ、他の羽釜とやや形状を異にする。淡褐色色調である。

S K 3 7 3

不定形な長楕円遺跡で、長軸200cm、短軸130cmで深さは35cmである。近世の土坑である。

出土遺物 (図24)

蓋 (31)

円形の大きなつまみがつき、受け部は平坦に幅広につくられている。外面はこげ茶の鉄釉のままで焼成されている。この釉はつまみ部と上端、受け部の上から体部にかけてなされ、つまみ内面、波板文、受け部外面は露胎である。内面は受け部は露胎で、外は黄色の透明釉がなされている。

急須 (32)

内外面共に露胎である。本体を製作後に把手注口を貼り付けている。注口体部は焼成前に四個の円形孔がなされている。注口以外はロクロ整形痕が顯著で、底部内外面もロクロ削りを残している。内面体部はナデて仕上げている素焼きの土器である。

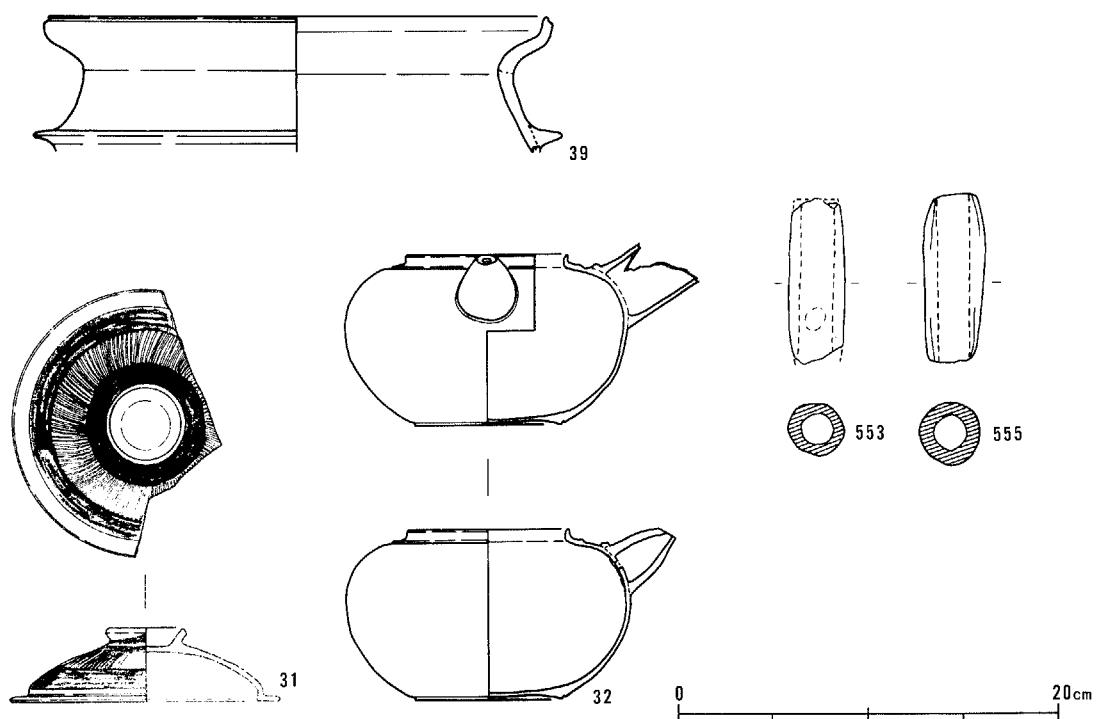
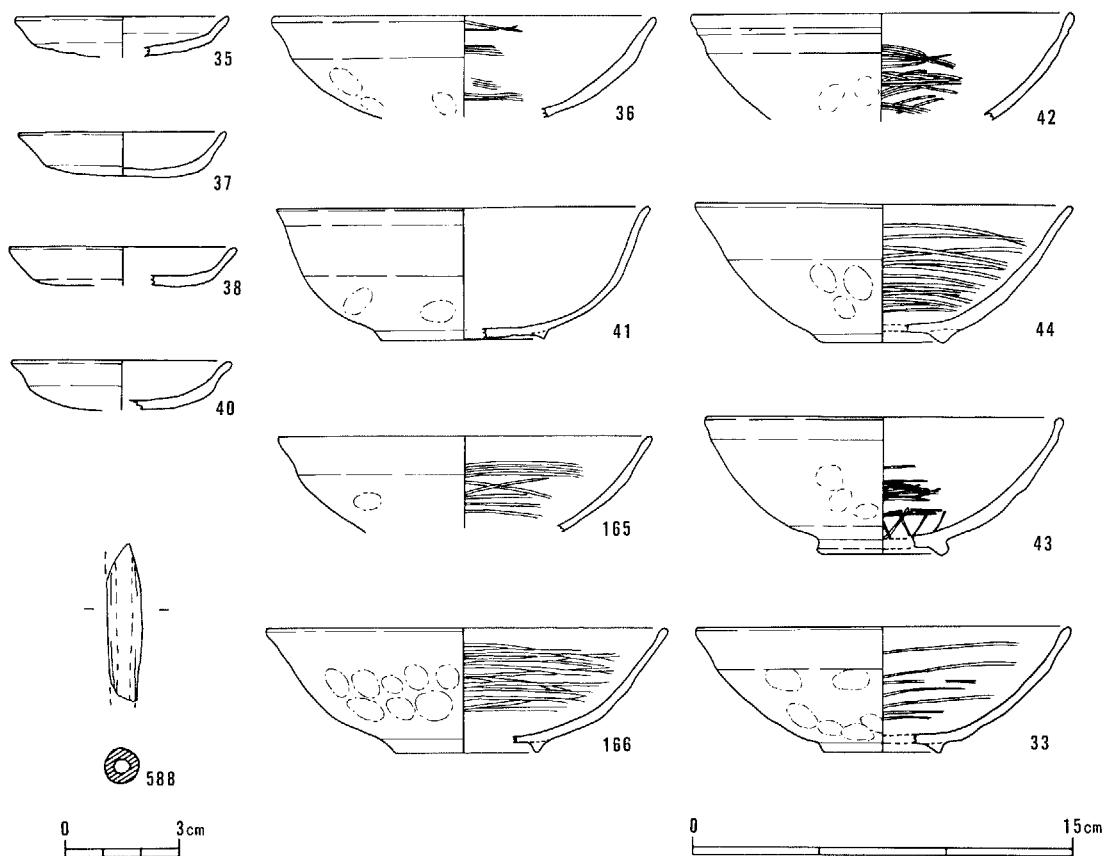


図24 SK333 SK373 SK386 SK504

土錘（588）

長軸の両端が欠損している。最大幅10mmで径4mmの円孔が貫通している。現存する長さは4.2cmである。

SK386

不整形な土坑で、さらに重複して土坑が掘られている。最大長で5m、最短長で3.3m、深さ20cmである。

出土遺物（図24）

土師小皿（40）、瓦器碗（41, 42, 43, 44）、土錘（553）である。（43）は内面底部に斜格子暗文がなされ、付高台も他と異なり断面台形である。

SK504

調査区外にのびる三角形をした遺構で、現存の最大幅2mで、深さ10cm程度である。

出土遺物（図24）

瓦器碗（33, 165, 166）

（33）（165）は口径15cm、（166）は16cmで、器高は（33）で4.6cm、（166）で5.7cmである。いづれも貼付断面三角形の高台であり、内面にミガキ暗文がなされ、（165）（166）は重ねてミガキがなされている。

土錘（555）

出土した土錘の中で最大のもので、長さ8.8cm、最大幅3.2cmで、貫通している円孔の径は1.8cmである。

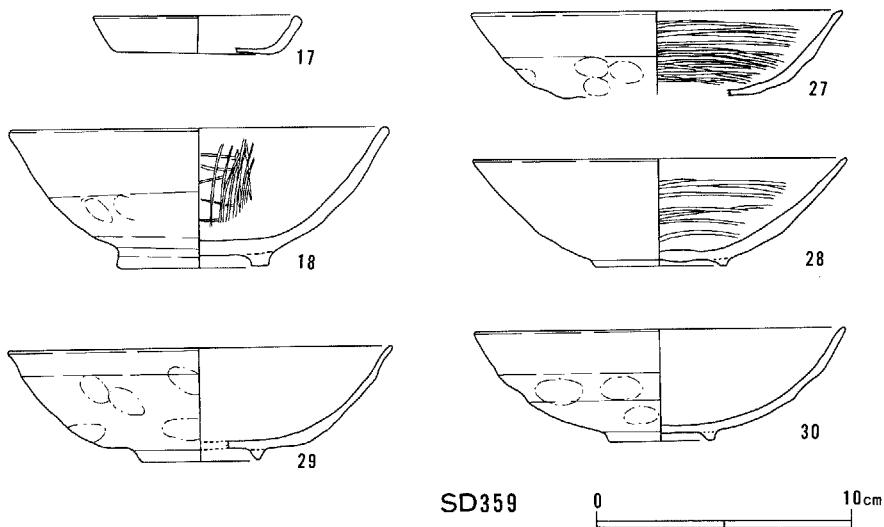
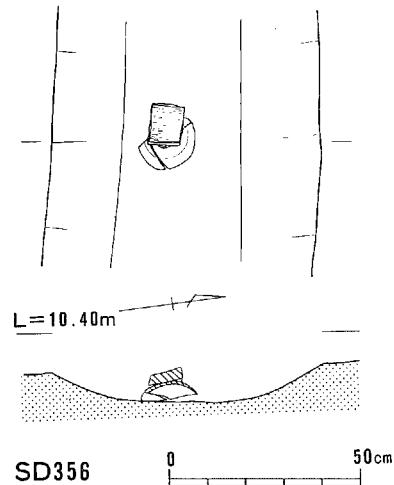


図25 SD356 SD359

S D 遺構

S D 3 5 6 (図 2 5)

東西流の溝状遺構で、幅40cm、深さ15cmである。この溝底に黒色土器碗の上にはほぼ方形の長軸10cmの緑泥片岩が、黒色土器碗を覆うように置かれた状態で出土している。

出土遺物 (図 2 5, PL 6 2)

土師器小皿 (1 7)

口径8.4cm、器高1.4cmの残存部70%程度の土器である。外面底部はケズリ整形で、他の内外面はナデ仕上げである。

黒色土器 (1 8)

口径15.2cm、器高5.5cmの内面黒色の碗である。外面体部中央に、一段の指頭圧痕が部分的に残っている。口縁部から底部はヨコナデで、内面はミガキ暗文が残っており、水平方向の粗いミガキの上を、縦方向に密なミガキ暗文を行っている。高台は、断面四角形で畳付け部分もきっちりと作られている。

S D 3 5 9

幅60cm、深さ 6 cm~10cmの東西の溝状遺構である。

出土遺物 (図 2 5, PL 6 2)

瓦器碗 (2 7, 2 8, 2 9, 3 0)

(27) は口径15cmで、底部を欠いている。体部下半は指頭圧痕が残る。内面にはヨコ方向のミガキ暗文が密になされている。(28) は口径15cm、器高4.3cmで、底部に低い断面台形の貼付高台がみられる。内面にはヨコ方向の疎なミガキ暗文が重ねてなされている。(29) は口径15.5cm、器高4.5cmで、高い断面三角形の貼付高台がなされている。外面口端部はゆるいが稜をもってやや外反りしている。内外面器壁は剥落しているが、外面には三段の指頭圧痕がみられる。(30) は口径15cm、器高4.4cmで、口縁部外面は幅広くヨコナデ調整がみられる。外面に指頭圧痕が二段にみられ、貼付高台は断面四角形を呈している。内外面共に剥落が著しい。

I 区上面遺構図

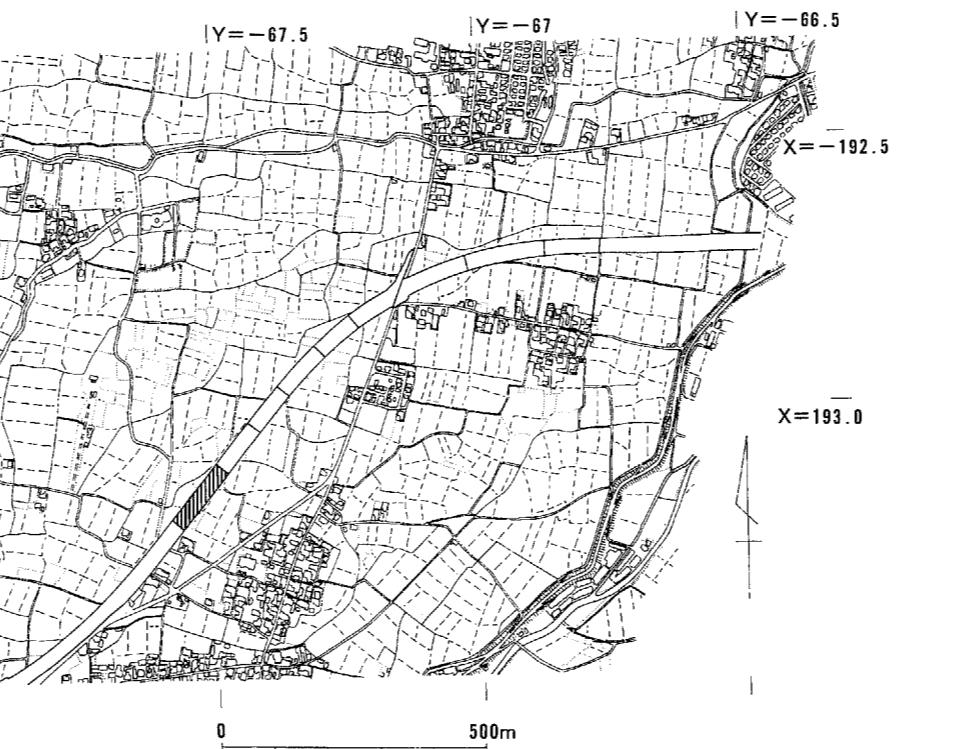
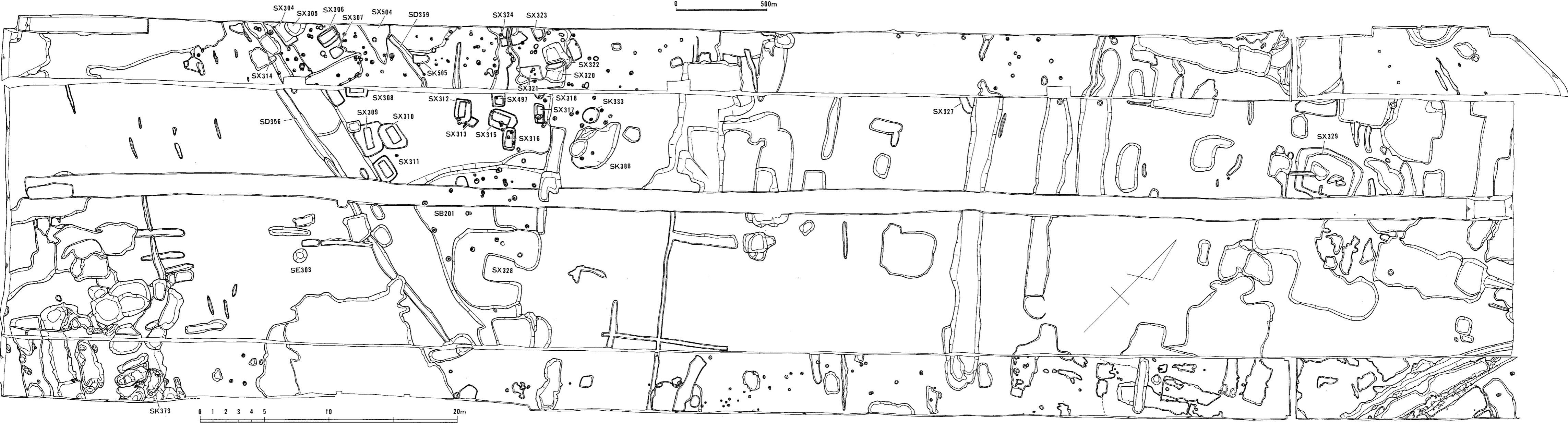


図26



I 区下面の遺構と遺物

S I 遺構

S I 8 5 (図 2 7, PL 6)

二度以上の建替えが行われている、造付かまどの竪穴式住居址である。東側の一辺は調査区外である。残存する壁は、高さ15cmである。造付かまどの辺に対応する長さは不明であるが、他辺は285cmである。煙道は炊き口ピットから120cm、壁から70cmで、炊き口ピットは床面から3cm程度低くなる。

S I 8 8 (図 2 7)

方形の竪穴式住居で、長辺が380cm、短辺が290cm、現存する深さ15cmである。壁に沿って幅20cmの周溝が、床面より4cmの深さでめぐっている。

S I 8 9 (図 2 8)

長方形の住居址で、長辺が485cm、短辺が375cmで、長辺の一方に造り付けのかまどをもつている。炊き口ピットから煙道部端まで230cmで、現存する床面までの深さは20cmである。四壁に幅13cmの周溝があり、床からの深さは5cmである。柱根径は、15~25cm、深さは床面から20~25cmで

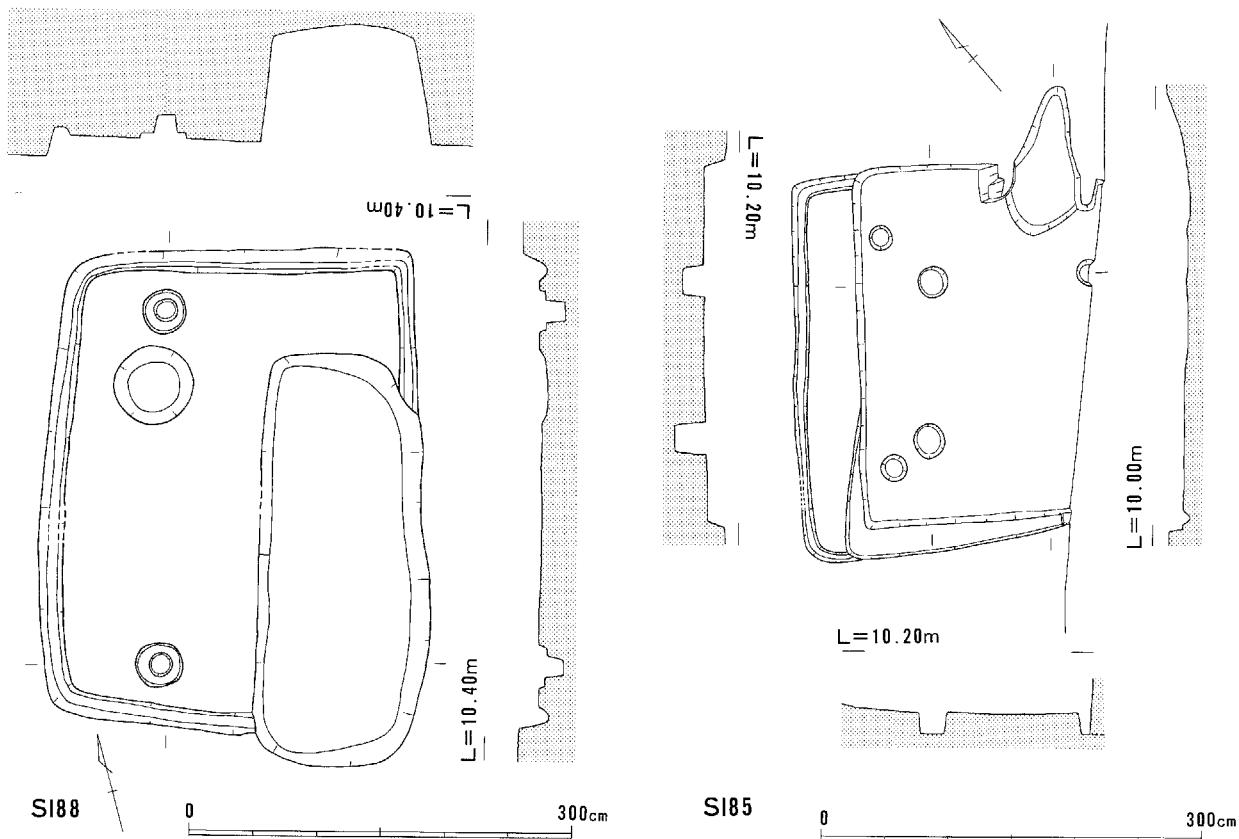


図27 SI85 SI88

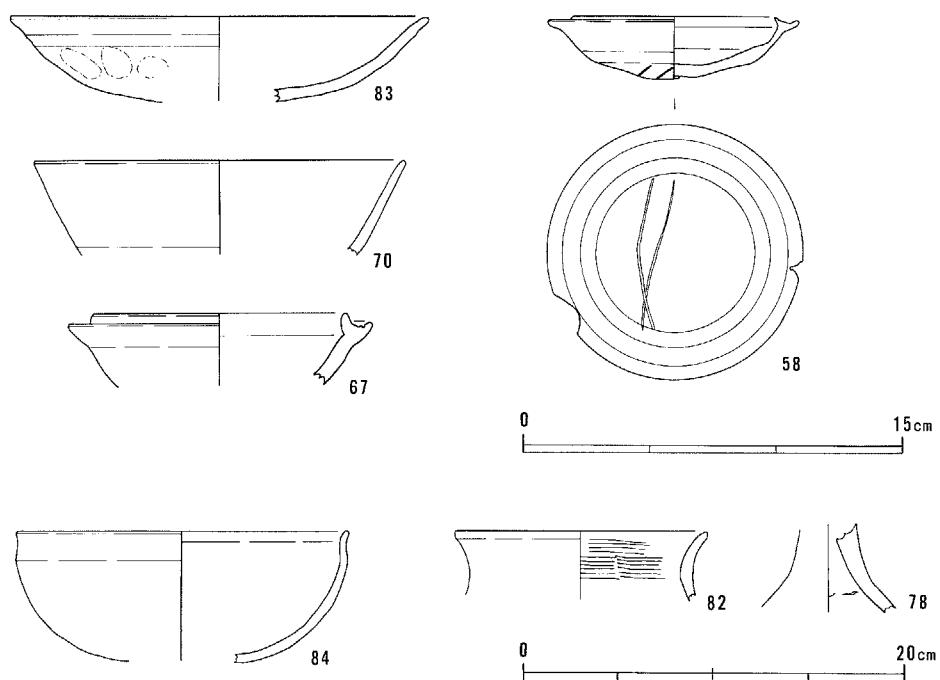
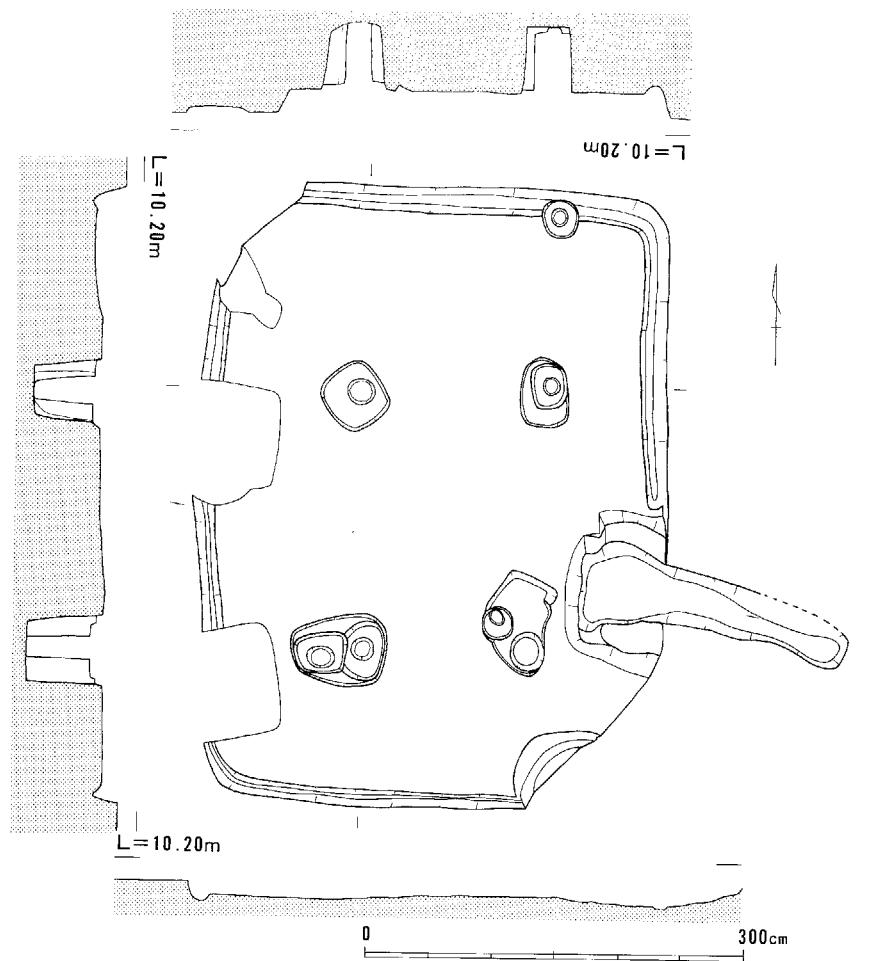


図28 SI89

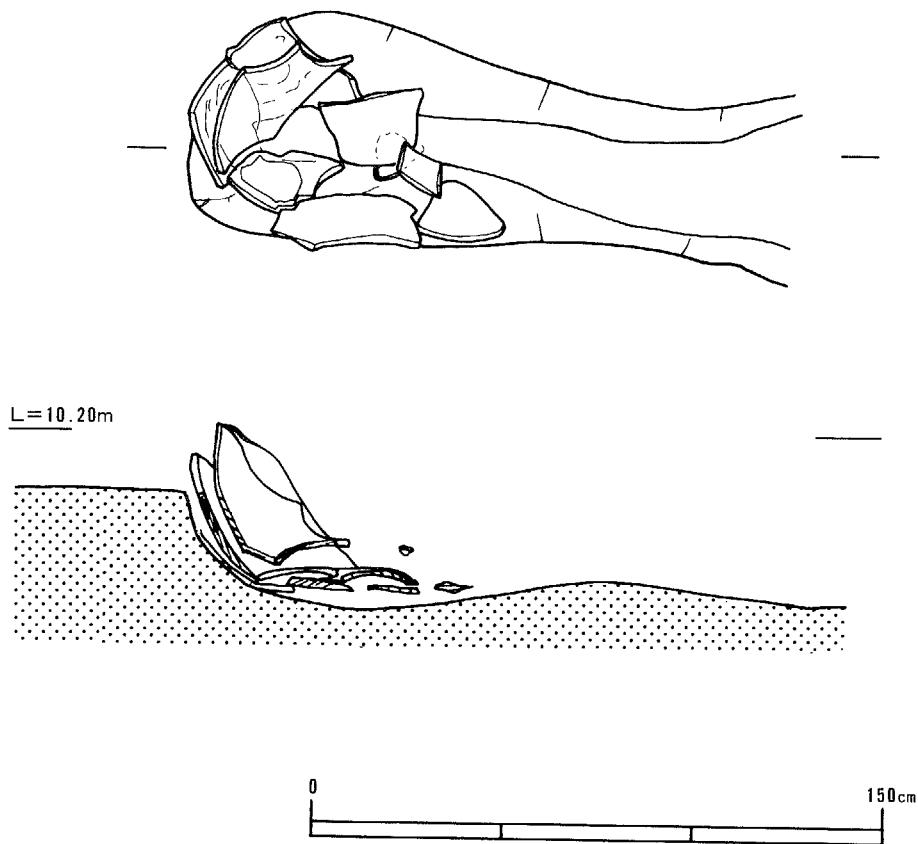


図29 SI89 煙道部

ある。

かまどは長辺の一方に造り付けであり、炊き口ピットから煙道端まで80cmあり、壁から50cm突き出ている。かまど内には、支柱に使用されたと思われる長さ28cm、幅12cm厚さ2cmの結晶片岩があった。

短辺の一方には貯蔵穴があり、他の遺構で切られているが、現存の深さは25cmである。

出土遺物(図28・29, PL62)

須恵器(58, 67, 70)

(58) の口径8cm、器高3.5cmである。外面底部にはヘラ記号がみられる。(67) は(58) に比して肉厚で、口縁は、受部より立ちあがって受け部より高い。(70) は杯の一部である。

土師器(78, 82, 83, 84)

(78) は高杯の脚部である。(82) は貯蔵穴出土の土師器甕の口縁部片で、復元口径13cmである。内面には荒い調整のハケ目がみられる。(84) も同じく貯蔵穴出土である。表面は全体に剥落している。復元口径17.5cm、器高6.8cmである。(83) はピットから出土したもので、整

形、器形は、この住居址より新しいものといえる。外面に指頭圧痕を残している。

S I 9 0 (図 3 0)

ほぼ方形であるが、かまどのある辺が若干長く447cmで、他辺は425cmである。残存する煙道の先端部は、住居壁とほぼ同じ位置にある。壁の残存は約15cmで、四周を幅20cm、深さ3cmの周溝がめぐる。住居址内に4本の柱痕があり、柱穴掘方は円形で径50cm、柱痕も円形で径20cmで、深さは床面から15cmである。

住居址内のかまど寄りに壁に沿って貯蔵穴がある。貯蔵穴は円形で、径45cm、深さは床面から12cmである。

出土遺物 (図 3 0, PL 6 2)

土師器 (77)

(77) は口縁部分の3分の1の破片で、かまど内の埋土から出土している。外面は円形に黒斑があり、全体荒いハケ目調で、内面はヨコナデ調整である。口縁部端部の整形はやや波うつた仕上げとなっている。褐色の色調である。

須恵器 (57, 59, 60)

(57) は鉢で、外面胴部中央部に二本の細い沈線を平行にめぐらせ、この二本の沈線間に荒い波状文をめぐらせる。外面、内面共に丁寧なナデ仕上げであり、内面には、粘土紐による凹凸がみられ、うすい自然釉がかかっている。胴部に二本の沈線をめぐらし、波状文を施こしており、この鉢の形態は、銀器、銅器の模倣を感じる。

(59) はここでは蓋をしている。口縁部の外傾部と内傾部はほぼ同じ高さである。外面にケズリ整形を残している。他はナデ仕上げている。

(60) はここでは身をしている。外面底部は平坦にヘラケズリがなされている。他は内外面共にヨコナデ仕上げである。

土錘 (571, 572)

(571) は下半を欠損している。現存の長さ5.8cm最大幅2.4cm、貫通している円孔の径は5mmである。(572) も下半を欠損しており、現存の長さ3.4cm、最大幅1.2cmで、径4mmの円孔が貫通している。

S I 9 1 (図 3 1, PL 7)

やや長方形の竪穴式住居址で、造付かまどは長辺にあり、その長さは370cm、他辺は315cmである。残存する壁の高さは20cmである。かまどは中心軸より一方に偏して造られており、現存する煙道は、S I 90と同じく住居壁と平行におさまっている。壁沿いに幅10cm、深さ7cmの周溝をめぐらしている。柱穴は四個あり、円形の柱穴の径は25~30cmで、深さは床から15cmである。

出土遺物 (図 3 1, PL 6 2)

土師器 (81)

竪穴式住居址床面から出土した甕で平底甕である。外面は斜下方向に幅3cmのハケ目調整がなされ、底部はハケ目調整の後ナデて消している。内面は、ヨコ方向の板状工具によるケズリ調整がなされている。

須恵器 (56)

住居址内埋土から出土したもので、口縁部内傾部が外傾部より高い。復元口径9.6cm、復元高2.9cm程度である。外面底部はケズリ痕があり、他外面、内面はナデて仕上げている。

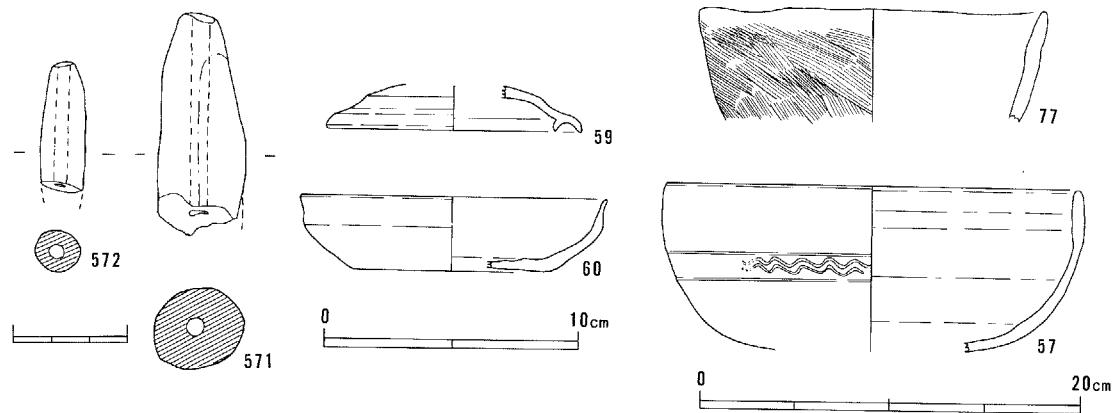
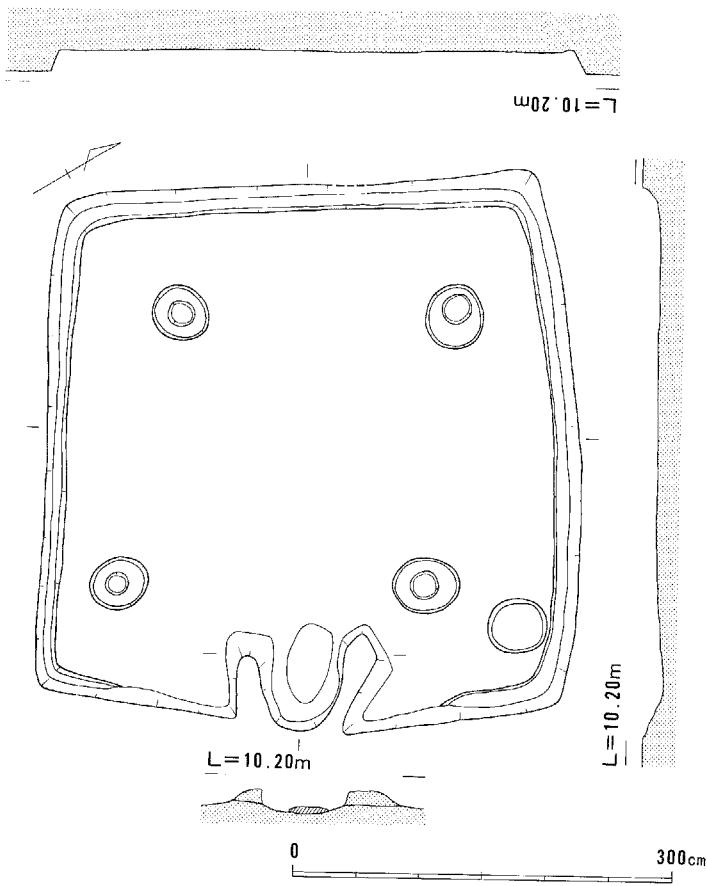


図30 SI90

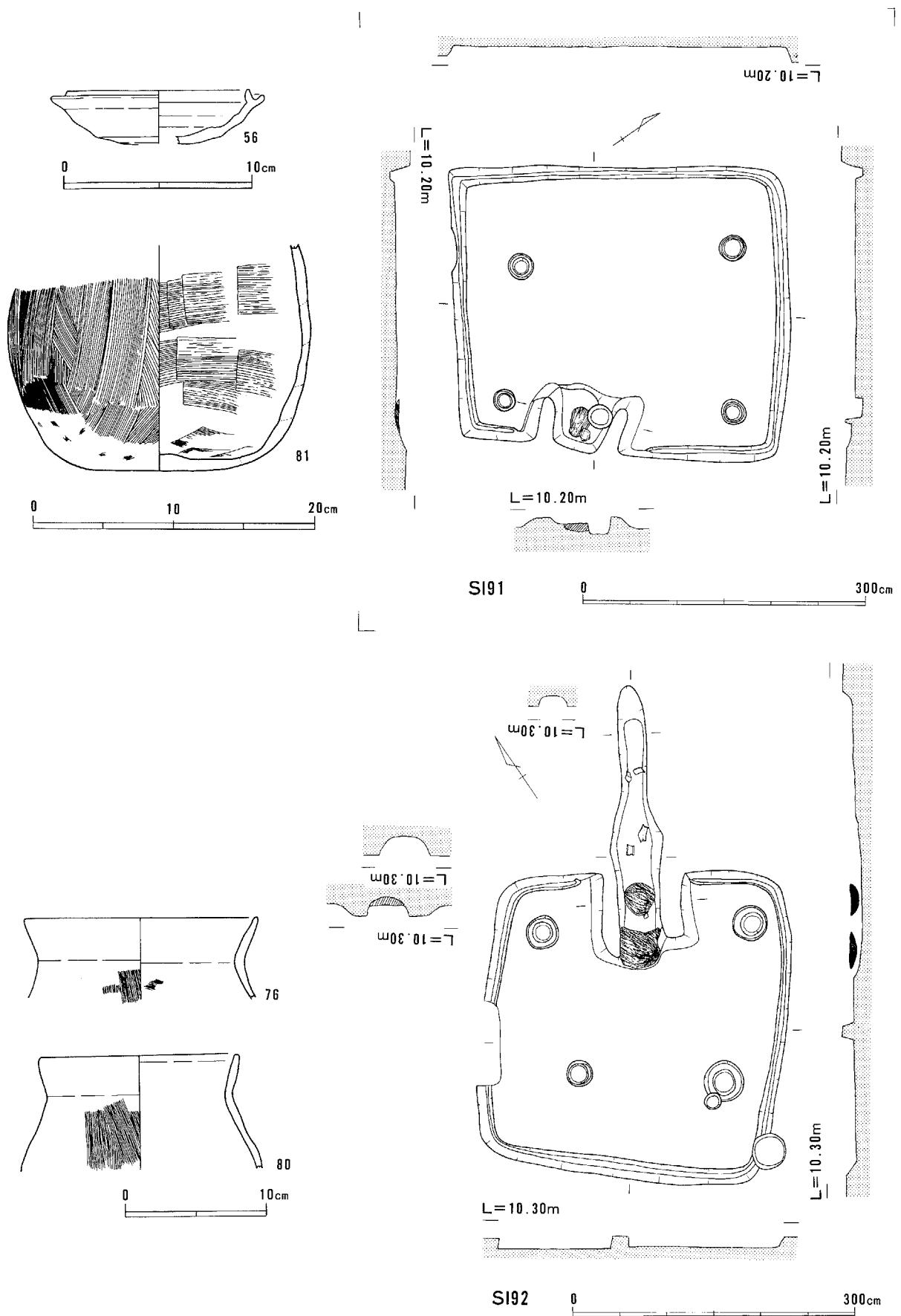


図31 SI91 SI92

S I 9 2 (図 3 1, PL 8)

ほとんど正方形の竪穴式住居で一边320cmである。現存する煙道は、炊き口から煙道端まで300cmの長いものであり、壁からは200cm出ている。煙道の最大幅は約60cmである。

壁の現存高は10cmで壁に沿って幅5cm、深さ3~5cmの周溝がめぐる。柱穴は、他の遺構とも重なっているが、いずれも円形で、径30cmで、柱根径は円形で20cm程である。

出土遺物 (図 3 2, PL 6 2)

土師器 (76, 80)

いずれもかまど内から出土した、口縁部と口縁部から胴部にかけての甕で、口縁はヨコナデ、頸部から下はタテ方向のハケ目調整である。全体に磨滅しているが、(76)は内面に斜めヨコ方向のハケ目が残っている。両者共に淡い褐色を呈している。

S I 9 3 (図 3 2)

発掘年度の違いによって整合性に欠ける竪穴式住居である。長方形の平面で、少なくとも一度の建替えが行われている。長辺は490cm、短辺は350cmで、現存の壁の高さは、20cmである。床面に残る柱穴は、掘方は円形で径30cm、柱痕径は20cmである。

出土遺物 (図 3 2)

土師器 (79)

高杯の杯部底部から続く脚部の一部である。内外面橙色を呈している。脚部は削りはなされていない。

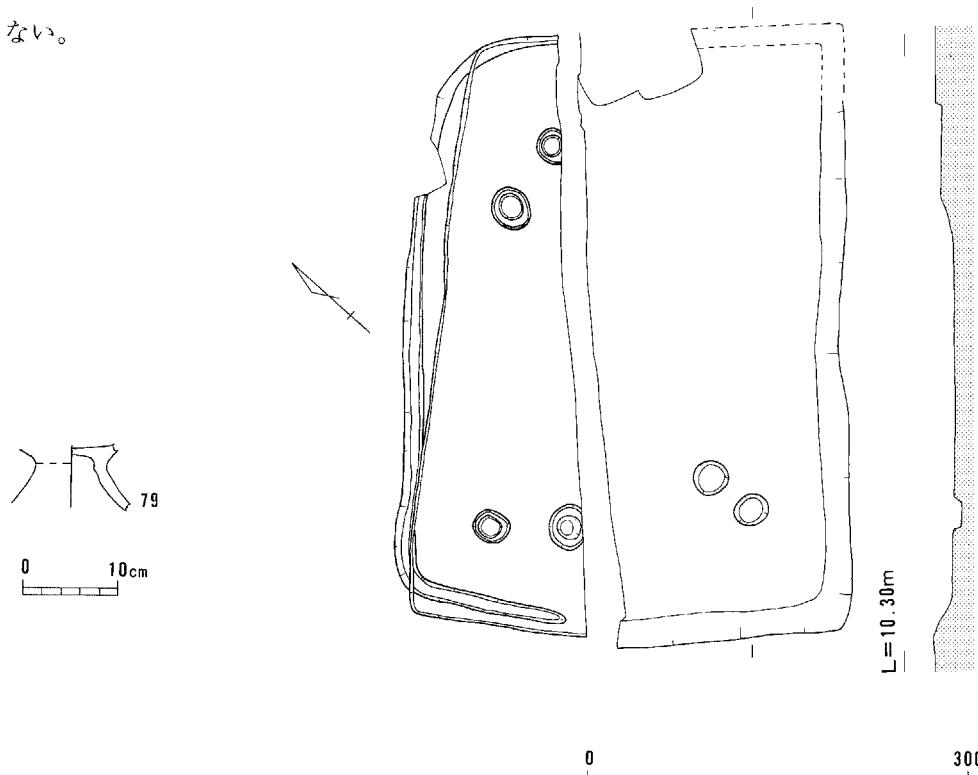


図32 SI93

S B 遺構

S B 71 (図33)

一部柱の差し替えがなされている。2間×3間の掘建総柱遺構であるが、ほぼ方形の平面積である。掘方は方形で一辺70cm～100cm、柱根径は20cmで、現存する深さで40cm～50cmである。

それぞれの柱間芯心の長さは130cm前後、220cm前後と均一性に欠ける総柱建物である。床面積は約18m²である。

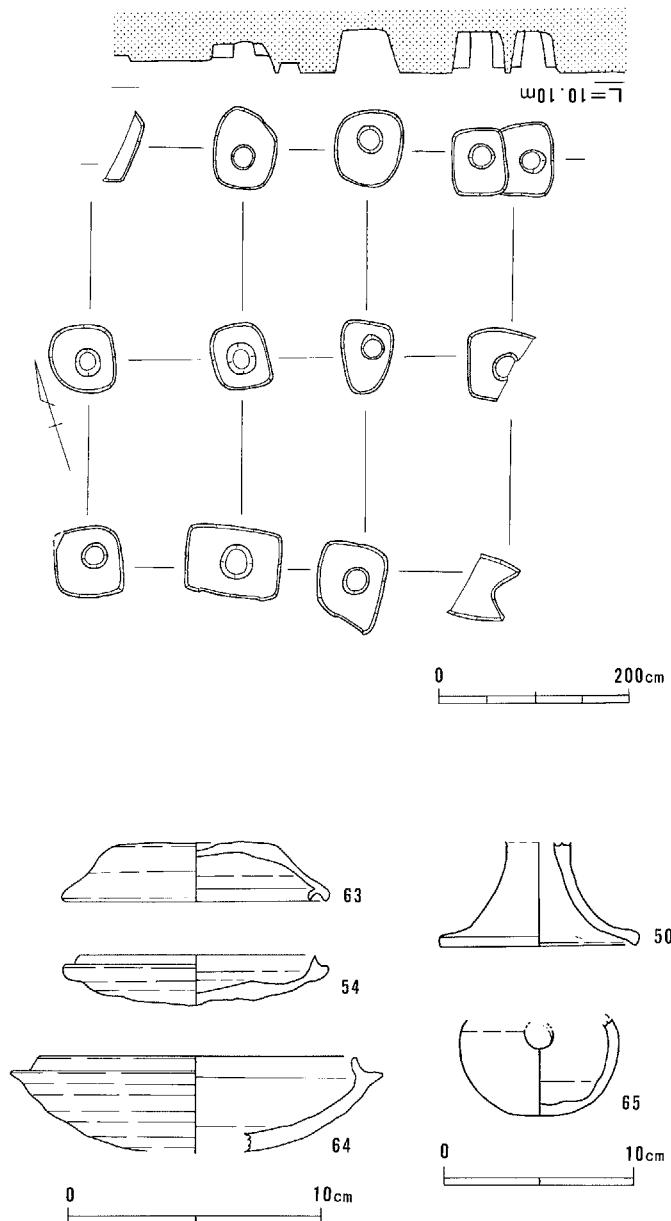
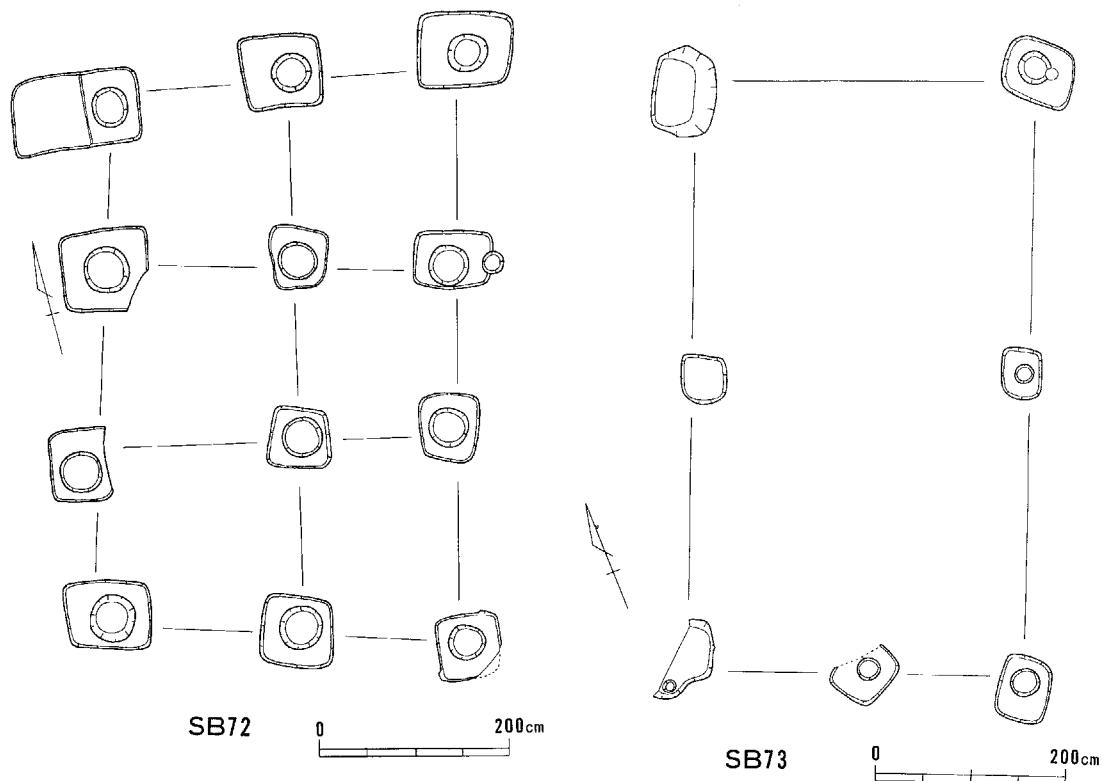


図33 SB71



出土遺物（図33、PL62・63）

いずれも掘方から出土したものであり、それぞれ完型ではない。

土師器高杯（507）

高杯の脚部で、裾部径10.7cmであり、脚部は中空で、内外共にナデ仕上げである。

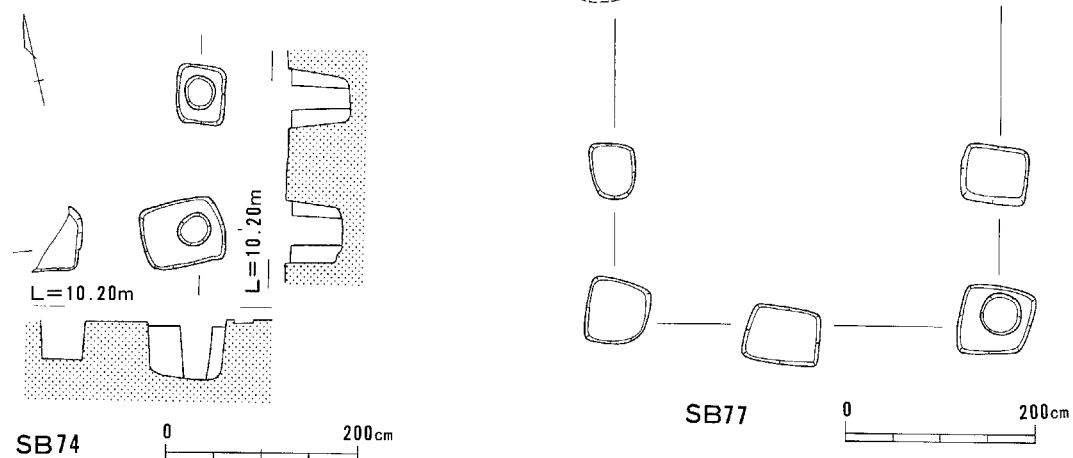


図34 SB72 SB73 SB74 SB77

須恵器 (54, 63, 64, 65)

(54, 63, 64, 65) は同じ柱穴掘方内から出土したものであるが、(64, 65) は (54, 63) に比して古い時期である。(65) は (54, 63) とほぼ同時期のものであり、別の柱穴掘方内から出土した高杯脚部である。

(54, 63) は一応蓋としている。

(65) は脇で口縁部、体部上半を欠損している。

S B 7 2

(図34, PL9)

2間×3間の総柱建物で、柱穴の掘方は一辺が約50cmであるが、それぞれ相違をみせて、むらがある。深さは70~80cmで、柱根径は30cm前後である。

やはり柱間の長さは、均一性に欠け160~220cmの芯心距離で、対応するそれぞれの柱間においても斉一性ではなく、やや雑な建物といえる。

床面積は約21m²である。

S B 7 3 (図34, PL6)

2間×2間の掘建柱建物遺構で、長方形を呈している。長辺の柱間の芯心は240+240cmであり、短辺の一方は120+120cmで、短辺の他方には中間柱が無いのか検出できていない。

柱穴の掘方は方形ながら大きさが不統一であり、方向を異にするものもあり、また柱痕の検出ができなかった柱もあるが、現存する柱穴の深さは25cm前後である。

S B 7 4 (図34)

大部分が調査区外におよんでいる掘建柱遺構である。規模が不統一な方形の掘方で、大きい柱穴の掘方で50×70cmで、柱根径は30cm、現存する深さは60cmである。

S B 7 7 (図34)

2間×4間の掘建柱遺構である。柱穴の掘方規模は不統一であり、長方形の掘方ものが多い。また、柱痕の検出できなかった柱穴もある。柱穴の大きい掘方のもので40×60cm、深さ80cmを計る。柱痕は円形で径40cmである。やはり柱間芯心は、きちんと通っておらず、柱間も150~220cmとばらついた各柱間になっている。柱心間による平面面積は約32m²である。

S B 7 8 (図35)

2間×4間の掘立柱遺構で北西隅の柱穴は調査区外である。少なくとも二度以上の建替えが行われている。このことによってか掘方の深度の違いが顕著である。浅い掘方で20cm、深い掘方で50cmを計る。掘方は大略70—85cm×75—85cmである。柱間の芯心は、貫通しておらないが、概略170~200cmの柱間である。床面積は約51m²である。

S B 7 9 (図35)

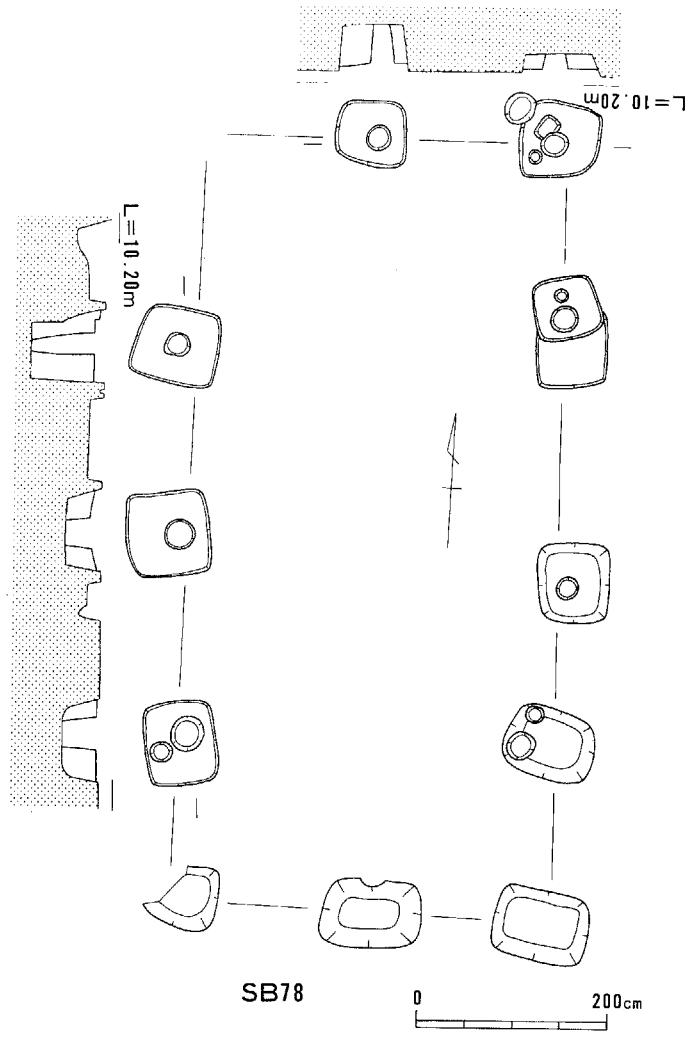
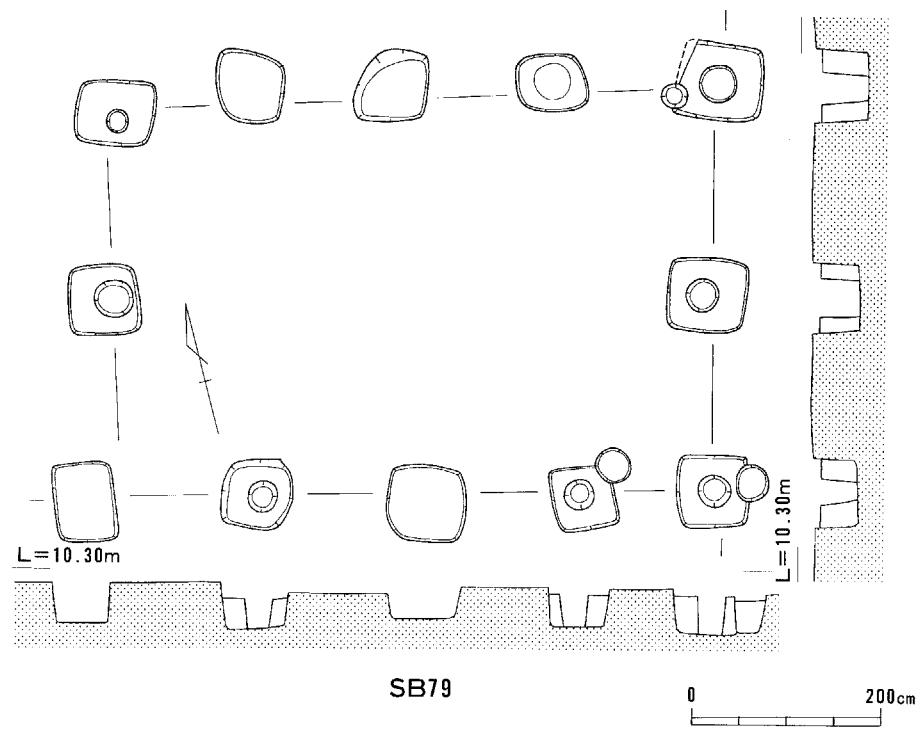


図35 SB78 SB79

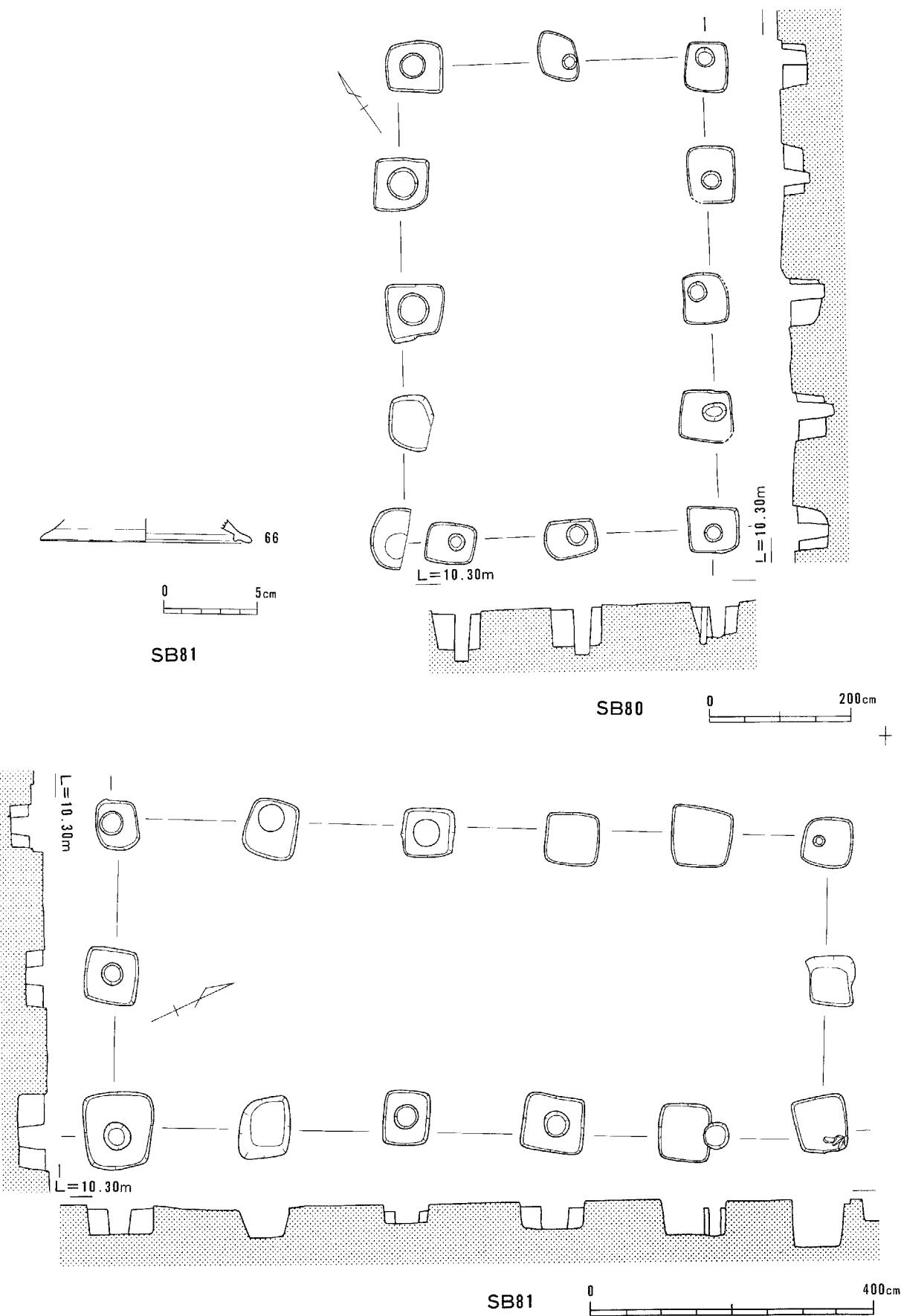


図36 SB80 SB81

2間×4間の掘立柱遺構である。柱穴の掘方は方形で70×75cm、80×80cmの二種の他に70~80cmの間で混在する。深さは40~55cmで、柱痕径は35~40cmである。柱間芯心の距離は150~220cmで、対応する柱間の芯心距離が等しくあるとは限らないのは前例の掘立柱建造物群と同じである。床面面積は略々28m²である。

S B 8 0 (図36)

2間×4間の掘立柱遺構で、柱穴は基本的に方形の掘方であるが、長方形もみられる。50×50cm、60×70cmの二種で他は、これらと同規模である。柱痕径は20cmを満たないものと30cmのものがあり、建替えがあったことが考えられる。いずれの柱痕の芯心は貫通しないが、対応する柱間の距離はほぼ等しい。掘方の深さはほぼ50cm前後である。床面面積は約30m²である。

S B 8 1 (図36, PL9)

2間×5間の長方形を呈する掘立柱建物で、柱穴の掘方も基本的に方形であるが、規格的とはいえない。このことは、柱穴痕より芯心が貫通していないことからもうかがえる。掘方は方65~75cmのものと、85×85cmのものがある。掘方の深さは20cmのものと40~50cmのものがある。柱根径は残っている柱痕より、径30cm前後であったであろう。なお、北東隅の掘方内には長さ28cm、幅12cm、厚さ5cmの板状の結晶片岩が出土し、他に結晶片岩の礫が検出された。根石か、礎板に使用されたものであろう。平面面積は略々44m²である。

出土遺物 (図36)

須恵器 (66)

掘方の埋土内から出土した杯蓋の破片である。

S B 8 2 (図37)

3間×4間の長方形を呈する掘立柱遺構である。残っている柱痕の芯心が貫通はしていない。また、掘立柱の配置についても、遺構の重複が充分考えられるところである。

柱穴の掘方は方形であるが、その規模にはむらがあるが、概略60×60cmが通常なのである。深さは現存で25cmから40cmの違いがみられる。また、建物柱穴痕内部に二基の柱穴があり、それぞれが、長軸の左右から一軒目、短軸の二軒目、三軒目の中央部にみられ、床面中央部の補助柱穴痕とも考えられる。床面積はおよそ39m²である。

出土遺物 (図37)

須恵器 (68)

杯の破片である。復元口径11cm、器高3cmで、ここでは身として扱っている。外面頂部は未調整で、外の部分は内外面共にヨコナデで調整されている。

S B 8 3 (図37)

方形の掘方の掘立柱建物で、1間×2間か2間×2間か遺構では困難であるが、1間×2間の

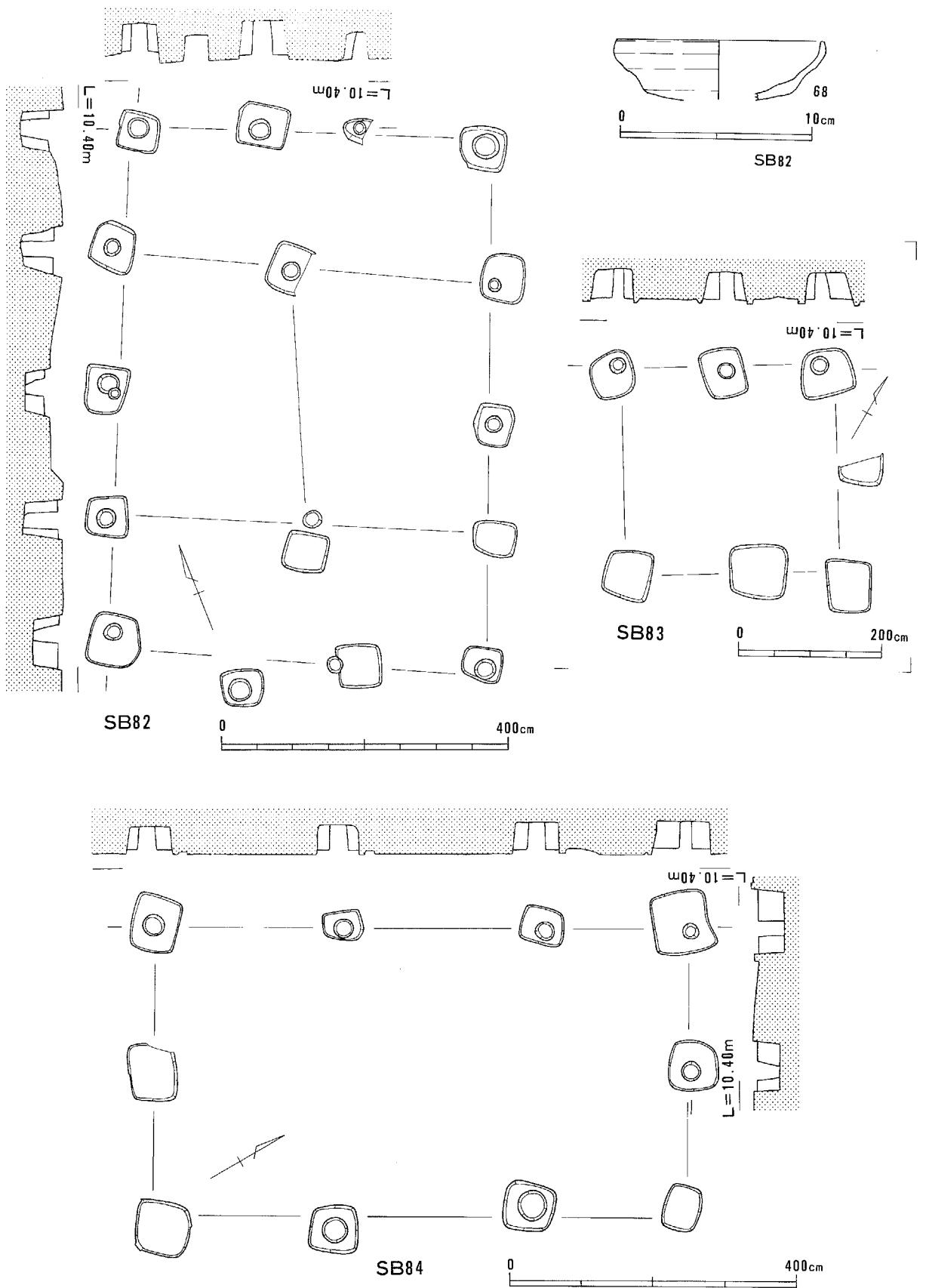


図37 SB82 SB83 SB84

建物とすると、1間の辺は約3m、2間の辺は略々130+150cmである。

方形掘方は60×60cm程度で、深さは45cmをはかる。柱根径は20cmと細いもので、芯心での面積は略々9.3m²である。

S B 8 4 (図37)

2間×3間の掘立柱建物である。いずれも柱穴の掘方は方形であるが、大小むらがあり、柱の芯心も貫通していない。短辺の2間の長さは400cmで、長辺の3間の長さは約700~750cmである。

柱穴掘方は50×70cm、85×85cmなどの統一したものではなく、柱痕径も25~40cmと太さに違いがある。掘方の深さは概ね40cmで、平面面積は約28m²前後である。

S B 2 0 2 (図38)

3間×4間の掘立柱建物で総柱遺構であるが、掘方は無く、径10cm前後の円形の柱根が検出されている。各柱間の距離は、むらがあるが、対応する柱間は概略、近い数値を得る。建物の両側の柱

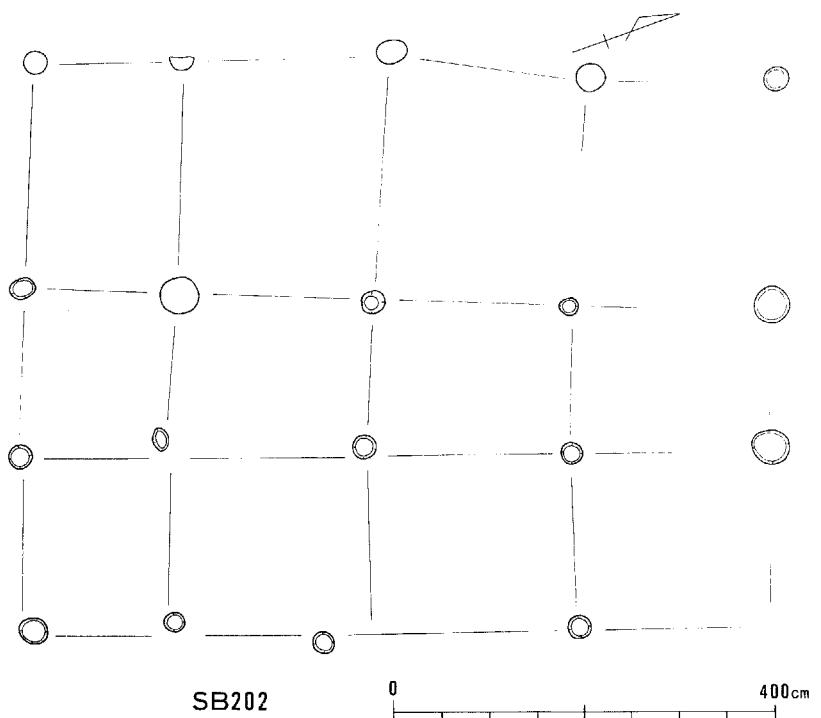
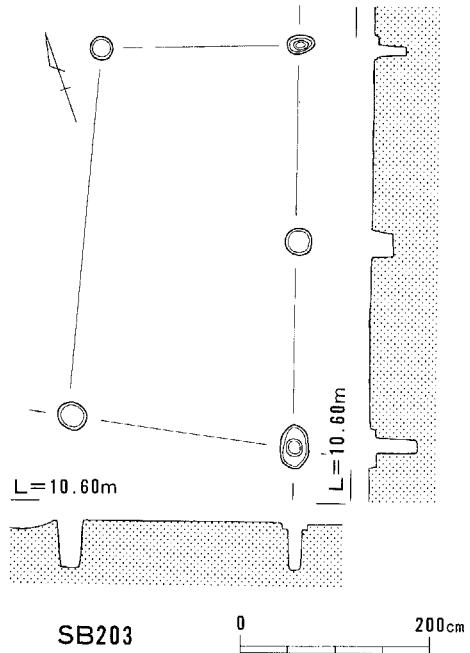


図38 SB202 SB203

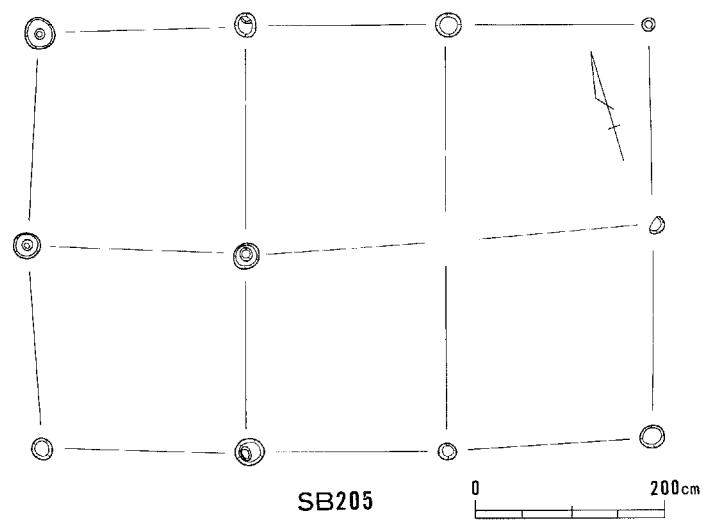
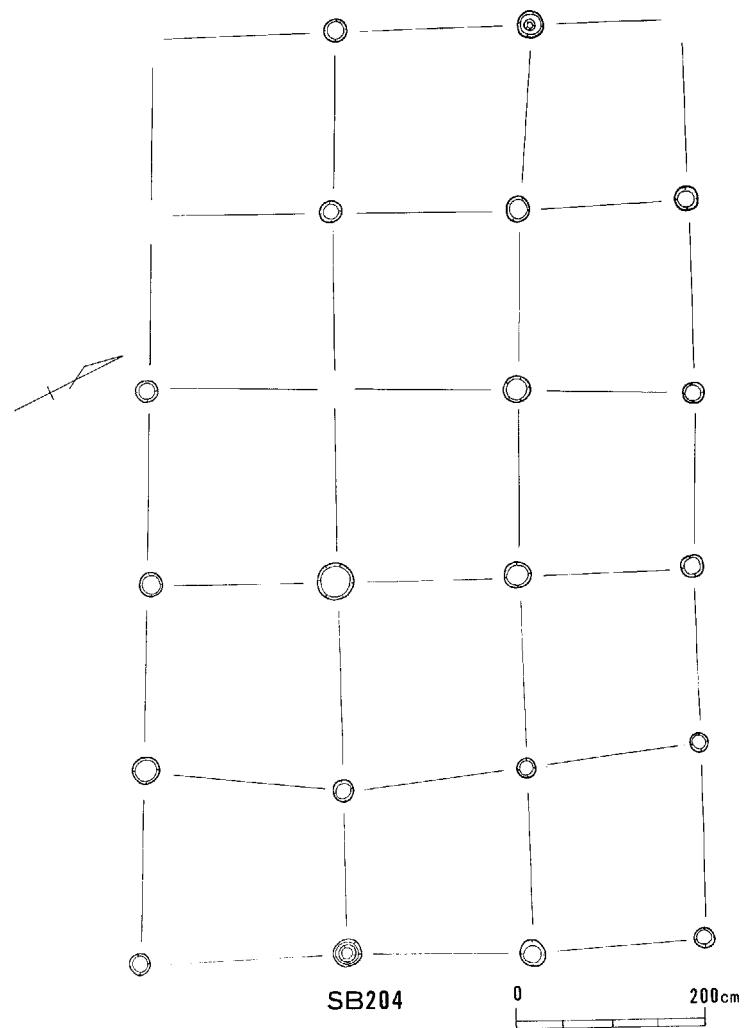


図39 SB204 SB205

間は他と異なって、250cmとやや長い目の柱間である。

いずれも柱の芯心が、直線では通っていない。平面面積は略々50m²である。

S B 2 0 3 (図38)

1間×2間の掘立柱遺構であるが、2間の他方の面の中間の柱は無く、全体に歪んだ建物である。2間面の1間の長さは、約2mで、1間面の長さは、220~240cmであり、柱痕径は20cm前後である。

S B 2 0 4 (図39)

3間×5間の総柱掘立柱遺構である。掘方はなく、円形柱根痕跡がみられ、径25~35cmと太さに幅がある。柱痕の深さは大略15cmである。平面面積は、約60m²である。

S B 2 0 5 (図39)

2間×3間の掘立総柱遺構で、一間の間尺は210cmにはほぼ統一されている。柱穴は径25cmで、深さ3cm~65cmとむらがみられる。平面積は27.72cmである。

S B 2 0 6 (図40)

2間×2間の掘立柱遺構であるが、非常に歪んでいる。一間の間尺もそれぞれ異なる数値で、200cm~260cmの間にある。略々平面積は18m²である。

S B 2 0 7 (図40)

2間×3間の掘立総柱建物で、芯心は通っていない。間尺は2間面が200cm、3間面が240cm程であるがそれぞれ間尺にばらつきがある。柱穴は円形で径20cm前後である。平面積は略々26m²である。

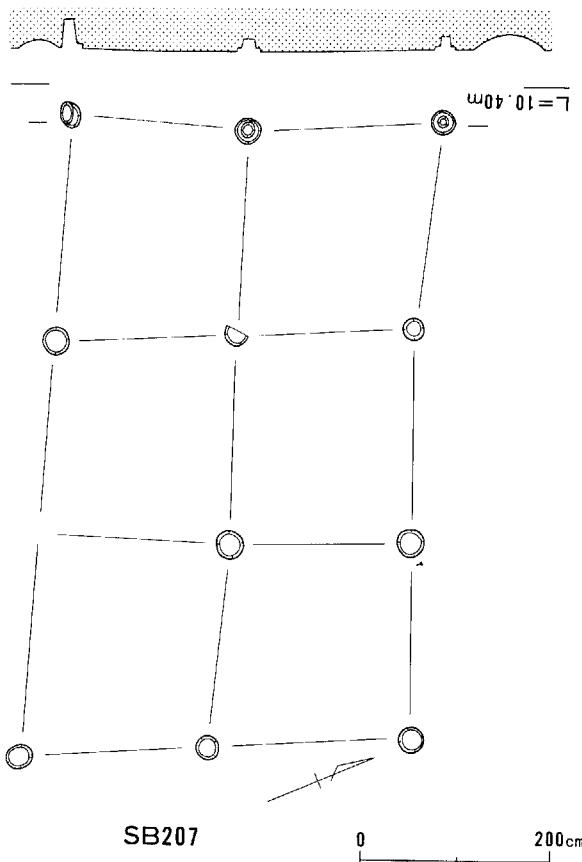
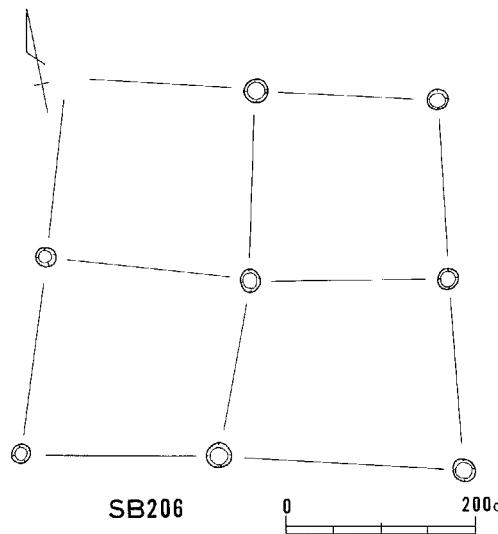


図40 SB206 SB207

S E 遺構

S E 9 5 (図 4 1)

上端は隅丸方形で、底は楕円形を呈する遺構である。二段掘りになっており、井戸の完成後は一段目は埋めたものと思われる。掘方は、方190cm、井戸底径は30cm前後で、深さは200cmである。この井戸から焦げ目の付いた長さ17cm、幅3～7cmの板材が出土しており、この井戸の補強材、あるいは井戸枠として使用されたことも考えられる。

出土遺物 (図 4 1, PL 6 3)

須恵器 (5 3, 5 5)

(53) は杯身で、口径9.3cm、器高4.5cmである。内面体部は回転ナデを行い、底部は平行ナデで仕上げている。外面体部は回転ナデ、底部はヘラケズリを行った後、回転ナデで仕上げている。

(55) は壺で口縁部を欠いている。体部に一孔の円孔があり、円孔の上端には、円孔を穿つ以前の一条の凹線文がみられる。体部下半は左下がりのケズリが、底部は不定方向のケズリがなされている。

S X 遺構

S X 1 8 0 (図 4 1)

やや長方形の遺構で、長軸70cm、短軸80cm、深さ20cmである。出土遺物は無く、時期は不明であるが、出土遺物を全般的に見て、奈良時代の火葬墓の可能性があろう。

S X 1 8 2

S X 遺構か、S K 遺構かについては確かな判断資料は無い。長楕円の遺構で長さ220cm、幅50～65cm、深さ50cmである。

出土遺物 (図 4 1, PL 6 3)

須恵器 (5 0, 5 1)

(50) は高杯の脚部で、内外面共に回転によるナデで仕上げている。脚部端は内傾して立ち上がりの端部を成形している。灰色の色調で、密な胎土である。

(51) は杯身で、受け部の内傾部が外傾部寄り若干高い。内外面共にナデ仕上げであり、外面にはうすく緑青色の自然釉がかかっている。

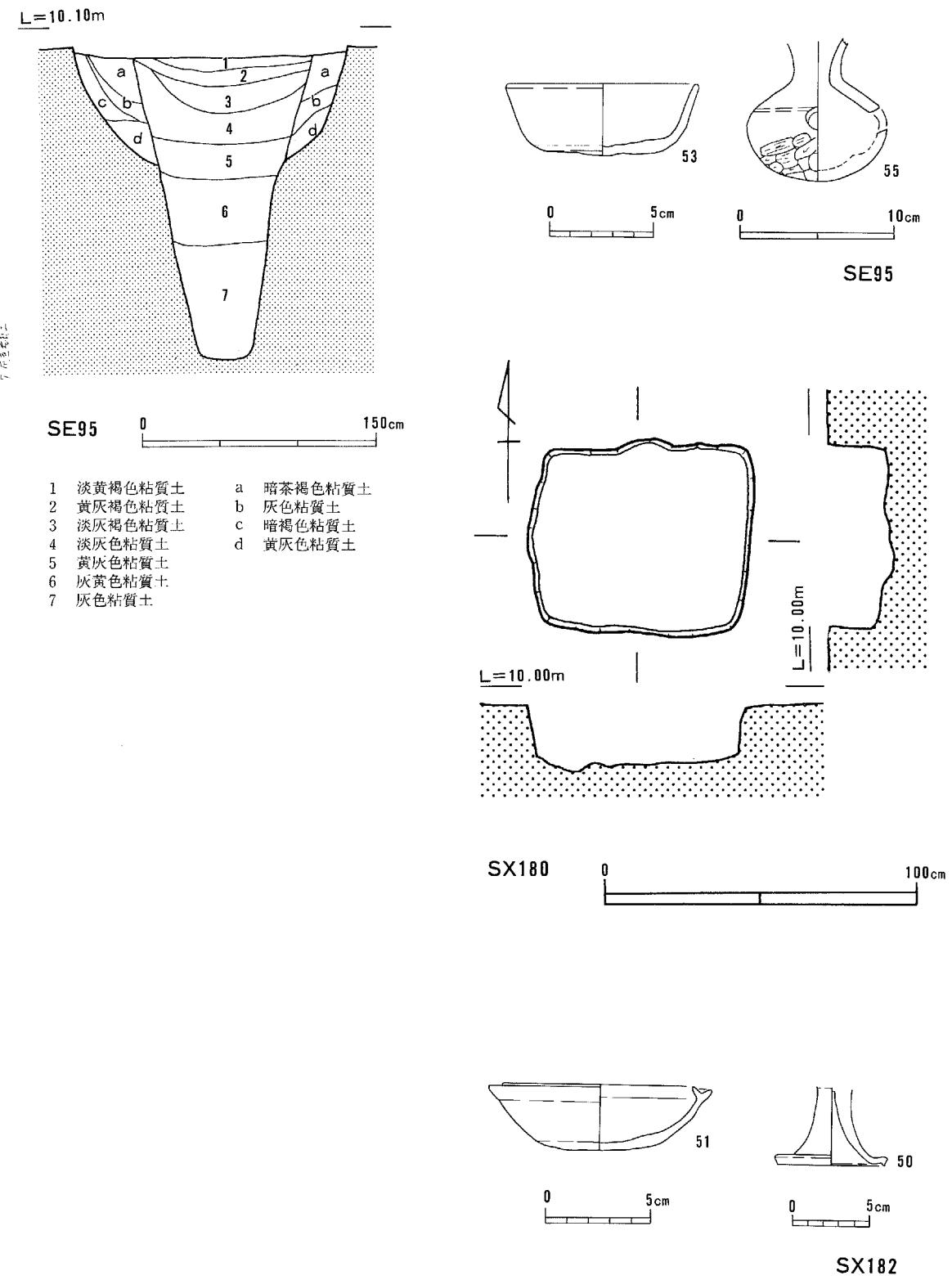


図41 SE95 SX180 SX182

S K 遺構

S K 9 6

長楕円の落ち込みで長軸4.2m、短軸3.8mの深さ30cmの浅い落ち込みである。

出土遺物（図4 2）

土師器甕（153）

口径15.5cmで、体部下半を欠いている。外面口縁部はヨコナデ、ゆるい頸部から体部はタテ方向の荒いハケ目が、現存部で二段になされている。内面口唇部は内傾して成形され、口縁部内面はヨコナデの下に右下がりの板状工具のハケ目がなされ、頸部下は右上がりのケズリがなされている。

S K 9 7

不定形な落ち込みで、最大幅4.5m、深さ30cmである。

出土遺物（図4 2・4 3、PL 6 2）

壺（86）

直口壺で口縁部は、口径7.6cmで口縁部、頸部に近い部分に稜をもつ。内外面回転によるナデで、内面にうすい自然釉がみられる。

杯蓋（88）

口径13.7cm、器高4cmで、外面天井部に回転によるヘラケズリ、他の内外面は回転によるヨコナデ仕上げである。

杯身（87）

口径9.9cm、器高は不明であるが2.5cmそこそこのものである。受け部は深く、立ち上がり部分は、返り部分より2mm程高い。内外面共に回転によるナデである。他に土師器把手が出土している。

土錘（577）

長軸の両端部を欠いている。現存の長さ4.3cm、最大幅1.1cmで径4mmの円孔が貫通している。

S K 9 8

他の落ち込みと重なる落ち込みで、残存部で、大略方4mで、深さ10cm程度の規模である。

出土遺物（図4 2・4 3、PL 6 3・6 4）

須恵器杯蓋（92）

口径10.5cmで、器高は4.3cm程度であろう。口縁部は返りが無く、垂直に立つ。内外面共にナデ仕上げである。

須恵器杯身（89, 90, 91）

いずれも似た法量で、口径8cm～10cm、器高3.5cm前後である。内外面共にナデで仕上げられ

ている。受け部は(90)は浅いものである。

土師器甕(142, 143)

(142)は口縁部径20.4cmで体部下半は欠損している。口唇部は、凹線がめぐる。外面体部は右下がりの荒いハケがなされ、内面はハケ調整が部分的に残っている。

(143)は口径23.5cmで、体部下半を欠く。内外面共に磨滅しているが、内面の頸部の上部に水平ハケ目、頸部下に右下方向、水平の細いハケ目調整痕がみられる。

SK99

方形状の落ち込みで、略々長軸4m、短軸1.8mで深さ20cmである。

出土遺物(図42・43, PL63・64)

土師器高杯(144)

高杯の脚部で内面にタテ方向にしばり目がみられ、杯部外面には斜格子のヘラ暗文がなされている。

須恵器杯蓋(94-1, 95, 97)

(94-1)は、口縁部が外反し、受け部を形成している。口縁部が受部より若干長い。天井部にはケズリ、他の内外面はナデ仕上げである。

(97)は蓋か身か不明であるが(94-1)に似た作りである。

(95)は天井部の成形より蓋として扱う。内外面共にナデ仕上げである。

須恵器杯身(94-2)

口径10.6cm、器高3.3cmで外面底部はヘラケズリ、その他は内外面共にナデている。

須恵器壺(96)

口縁部片で復元口径22cmで、口縁部の成形にあたって、口縁部を意識した作りはみられない。

他に土師器鍋の把手が出土している。

SK103

ここではSK遺構としているがSI(住居址)遺構の可能性が充分に配慮される遺構である。

長軸4.9m、短軸4.5mで深さ7cmであり、造り付け窓に煙道をもつ可能性もある。

出土遺物(図42, PL65)

須恵器高杯(99)

口径10.6cm、器高6.2cmで、内外面共に最終調整でナデ、ヨコナデである。全体にひずんでおり、裾部端の始末は雑である。

SK105

隅丸の長方橢円形の土坑状遺構で、長軸3.3m、短軸1.4m、深さ30cmである。

出土遺物(図44, PL65・66)

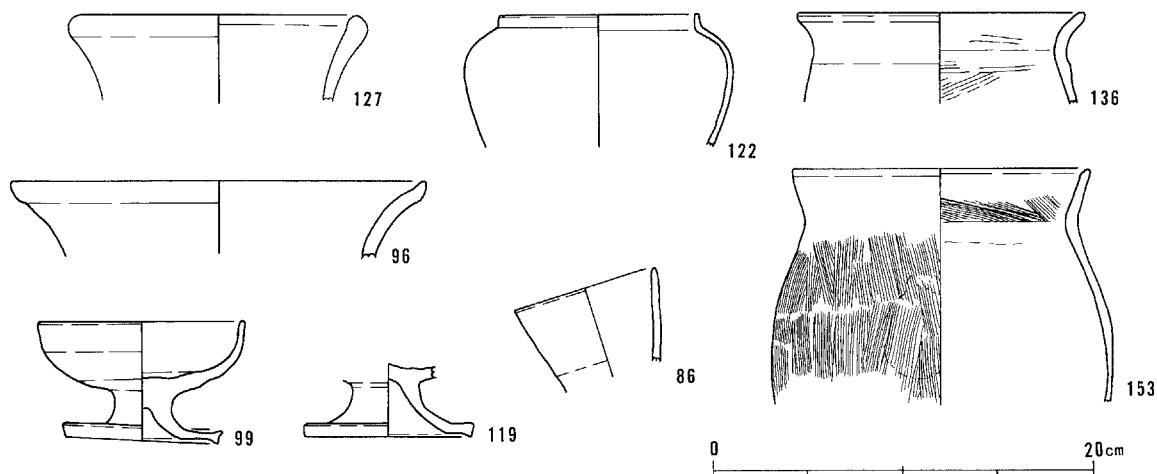
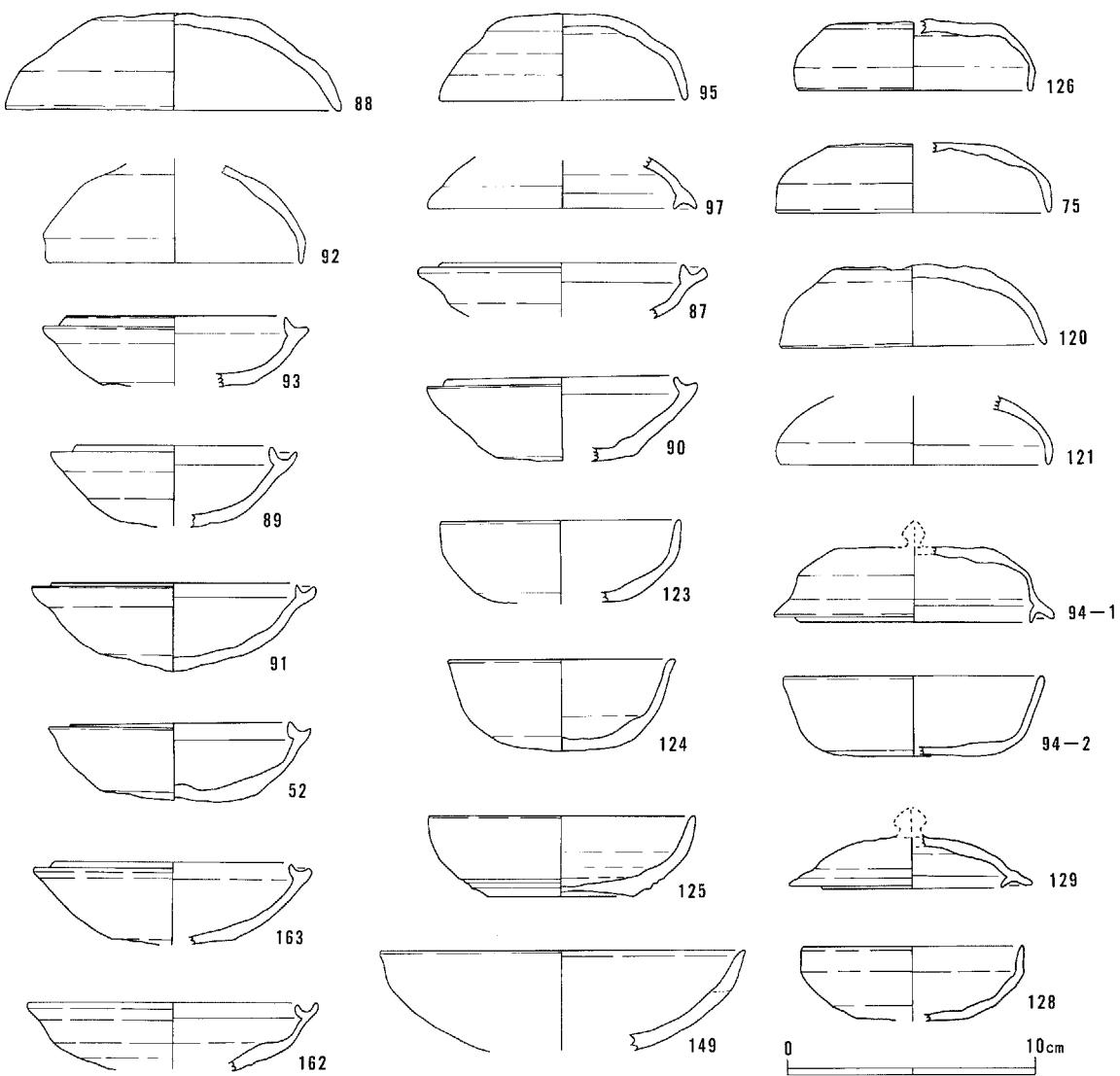


図42 SK96 SK97 SK98 SK99 SK103
SK106 SK108 SK109 SK110 SK112
SK176 SK209 SK499

土師器椀（148）

口径16cm、器高5.7cmで、口唇部はつまみあげて、内面に段をもつ。外面体部下半は水平なヘラミガキで、他はナデ仕上げである。

土師器甕（147）

口径34cmで体部上半から欠損している。内外面口縁部は、ヨコナデであるが、外面の所々に板状工具の当り痕がみられる。体部はタテ方向に太い幅の荒いハケ目がなされている。体部内面は、下方から上方へケズリ成形がなされている。

須恵器杯蓋（100, 101, 105, 107, 109, 110, 111, 112, 113, 116, 117, 118）

この時期の蓋と身の判断は、難しい。一応、口縁部の形状で判断し、I類（100, 105）、II類（107, 109, 118）、III類（101, 110, 111, 112, 113, 116, 117）の三種に分類した。

I類は、口縁部から体部にかけて、古い様相をしているもので、外面天井部はヘラケズリを残している。II類は、口縁部と体部が稜で画され、口縁部の幅の狭い類である。III類は、内面に返りを作っているもので、さらに受け部が幅広く作られているものである。

（112, 116, 117）については身とも判断されよう。III類は口径10cm前後、器高3.5cm前後である。II類は口径10cm、器高2.7～3cmである。III類の口径は（112, 116, 117）を除いて8cm、器高2cmで、（112, 116, 117）は、これらより口径はやや広くなる。

須恵器杯身（102, 103, 104, 108, 618）

いずれも受け部の返りが、口縁部より高いものである。口径9cm前後で、器高は3cm前後である。外面底部はヘラケズリがなされ、他の内外面はナデ仕上げである。

須恵器高杯（106, 114, 115）

いずれも高杯裾部で、（106）は上方に拡張されているが、（114, 115）は拡張されずおさめられている。

SK106

幅1.1m前後で、現存値1.8mの長さの落ち込みで、深さ15cm前後である。

出土遺物（図42, PL64・65）

土師器高杯（149）

口径15.2cmの杯部、杯の深さは約3.4cm程度である。口縁部はつまみもって整形され、杯部の口縁部と体部の接合痕が外面にみられる。

須恵器蓋（120, 121）

いずれも口径11cmで、（120）の器高は3.3cmである。天井部外面は切り離したままで、口縁部内外面はヨコナデ、他の部分はナデである。

須恵器高杯（119）

杯部は欠けている。裾部径は8.8cm、脚部の高さが3.8cmと低い類の高杯で、内外面はヨコナデ仕上げである。

SK108

隅丸長方形の落ち込みで、長軸2.4m、短軸1.5mで深さ最深部で50cmの深いものである。

出土遺物（図42、PL64・65）

須恵器杯身（123）

口径9.8cm、器高3.5cmで、外面底部はケズリで、他の内外面はナデ仕上げである。

須恵器短頸壺（122）

口径10.5cmで体部下半を欠損している。最大幅は体部の上部にあり、14.2cmである。口唇部はケズリ仕上げで、他の内外面はナデ仕上げである。

他に土師器鍋の把手が出土している。

SK109

調査区内では方形状を呈しているが、他は調査区外である。二段掘りで、遺構面からの深さは一段目は20cm、一段目と二段目底は40cmと、遺構としては60cmの深さである

出土遺物（図42、PL64）

土師器甕（136）

口径15cmで、体部下半を欠く。外面体部の調整は不明であるが、ゆるやかな頸部から口縁部の外面はヨコナデ、内面は荒い水平なハケ目で、体部は頸部下はヨコハケ、体部は左下がりのハケ目調整である。

須恵器椀（124）

口径9.2cm、器高3.7cmで内外面共にナデ仕上げの土器である。

SK110

不定形な落ち込みで、一部調査区外に到っている。現存幅は3.3m、深さ70cmである。

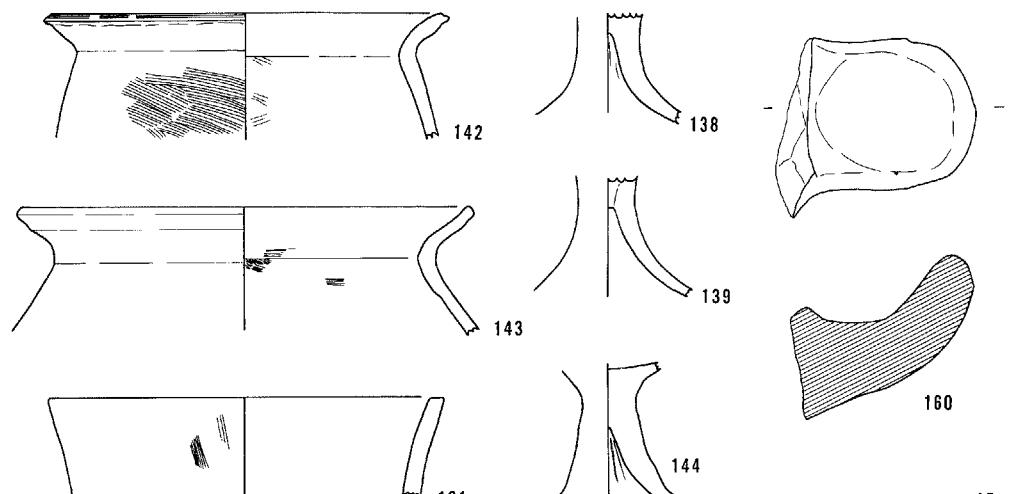
出土遺物（図42）

須恵器杯蓋（126）

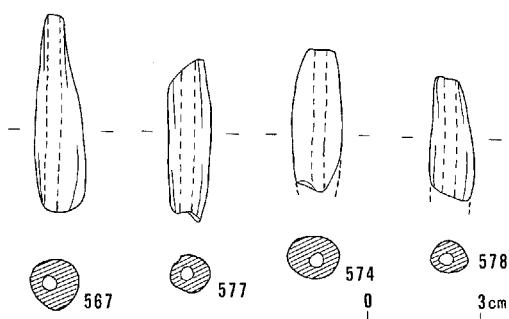
口径9.6cm、器高2.8cmの外面天井部にケズリ痕があり、他の内外面はヨコナデで調整している。口縁部は、垂直に立ち上がる幅の狭いつくりである。

須恵器身（125）

口径11.5cm、器高3.3cmで、底部は凹んでいる。外面底部ははっきりしたケズリ痕を残す。他の内外面はナデている。



SK98 SK99 SK175 SK209 SK499



SK97 SK111 SK114 SK212

図43 SK遺構出土遺物

須恵器壺（127）

口径11cmで丸味でおさめられている。頸部以下は欠損している。内外面共にヨコナデである。

SK111

隅丸長方形の土坑状遺構で、長軸が2.6m、短軸1.3mで、この掘方内に方形の堀方があり、長軸2.1m、短軸0.9m～0.7mで、遺構面からの深さは0.5mである。木棺墓の可能性は充分にある。

出土遺物（図43）

土錘（567）

一方が細く、他方が太く作られている。長さ5.2cm、最大幅1.3cm、最小幅0.5cmである。長軸

方向に径0.35cmの均一な孔がある。

S K 1 1 2

正円に近い円形土坑で、径70cm、深さ35cmである。

出土遺物(図42)

須恵器杯(128, 129)

口径7.4cm、器高2.2cmの受け部が大きく開く口縁部である。内外面共にナデ仕上げである。(128)

は口径9cm、器高3cmの口縁部が垂直に立つ土器である。内外面共にナデ仕上げであり、(128)

と(129)は完型ではないが、セットになるものと思われる。

S K 1 1 4

平面が橢円形で、長軸3.4m、短軸2.5m、深さ0.6mの二段掘りの土坑である

出土遺物(図43・44, PL66)

土師器甕(137, 150, 151)

(137)は、口径27.8cmで体部下半を欠く。(150)は口径22cm、(151)は口径15.4cmで、それぞれ体部下半を欠いている。いずれも口縁部の内外面はヨコナデであるが、(151)は外面に右下がり方向の荒いハケ目が、頸部、体部にかけて一連の作業としてなされている。(137, 150)の内外面体部は、頸部下に右下方向に荒いハケ目がなされ、内面体部は(137)は水平ハケ目調整、(150)は右下がりのハケ目調整である。

土師器高杯(152)

高杯の脚部で、外面調整が明瞭にみられず、内面にはしづら目が二段でみられる。

須恵器杯蓋(130, 132, 134)

いずれも口径9cm前後、器高3.5cm前後の法量で、口縁部に受けは無い。外面天井部に(134)

は回転のケズリがみられるが、(130)(132)は回転によるナデ仕上げである。

須恵器杯身(131, 133)

口縁部は両者共に9cm、器高が2.5cm前後で、受け部もしっかり作られている。外面底部は回転によるヘラケズリがなされている。他の内外面はナデ仕上げである。

土錘(578)

円柱状の形態で、長軸3.2cm、短軸0.6~1.1cmで、長軸方向に径0.3cmの円孔がみられる。

他に鍋の把手も出土している。

S K 1 7 5

他の落ち込みと重なる落ち込みで、調査区外にのびている。最大幅3.6m、深さ17cmである。

出土遺物(図43)

土師器高杯(138)

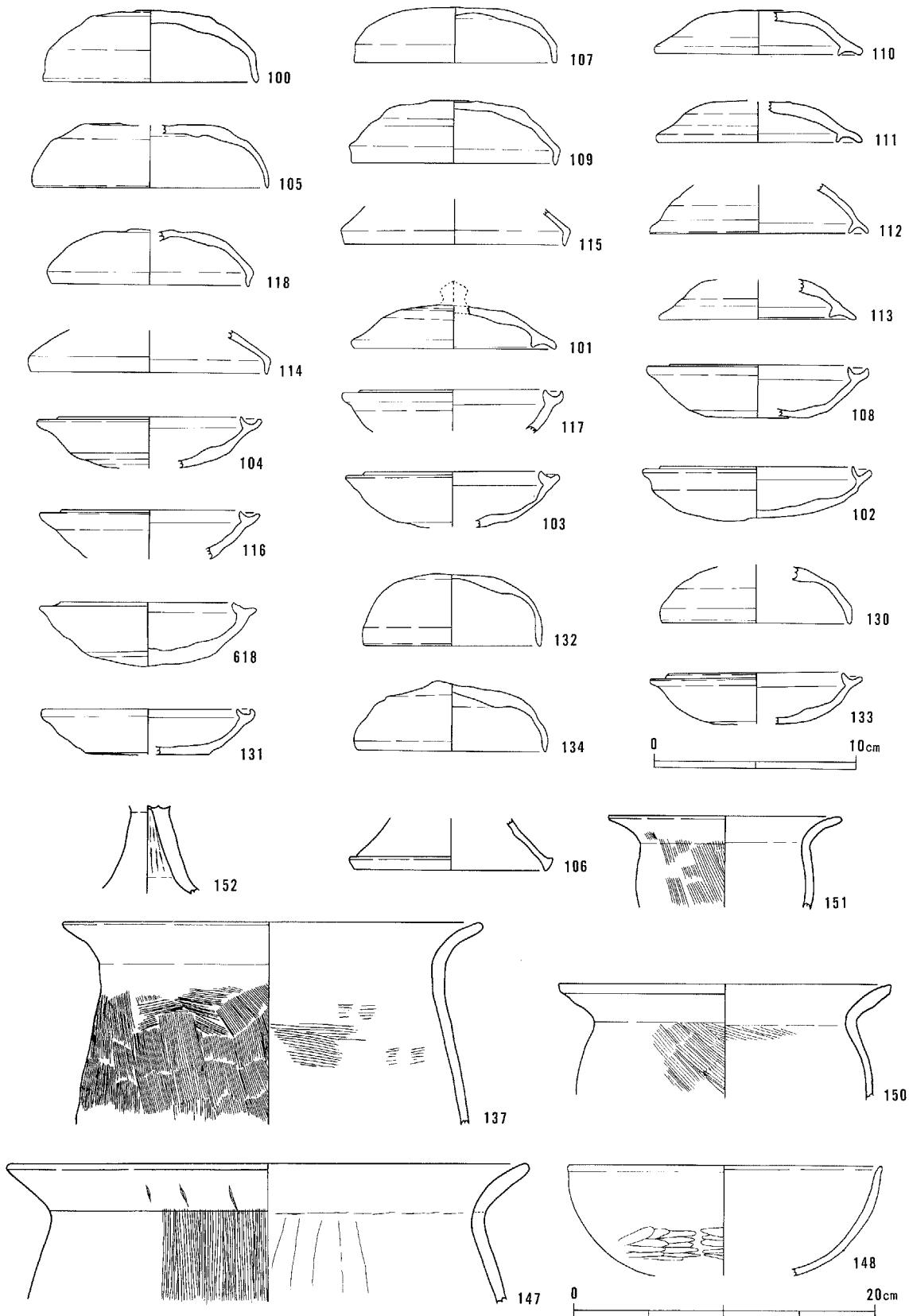


図44 SK105 SK114

高杯脚部で、外面はナデ、内面裾部もナデているが、脚部の中空部分は、ケズリである。

S K 2 0 9

楕円形遺構で、長軸1.6m、短軸1.1m、深さ90cmである。

出土遺物（図42・43、PL63）

土師器高杯（139）

高杯の脚部から裾部の一部で、内外面共にナデ、ヨコナデ調整である。

須恵器杯蓋（75）

口径11cm、器高3cmで、口縁部に受け部のないもので、外面天井部は、回転によるヘラ切りの後ナデしている。他の内外面は回転によるナデ仕上げである。

S K 4 9 9

楕円形の遺構で、試掘時のトレーナによって一部を欠いている。現存する長さ1.5mで、幅は1m、深さ20cm前後である。

出土遺物（図42・43、PL64）

土師器土器（161）

器種は不明である。口径21cmで、器肉が1cmで厚い土器で、外面に右下がりの細いハケ目がみられる。褐色の色調である。

須恵器杯身（162、163）

(162) (163) は、ほぼ同じ作りで、口縁部は、(162) は受け部とほぼ同じ高さで、(163) は口縁部が受け部より高くできている。(162) の口径12cm、器高3cm、(163) は口径10cm、器高3cmである。両者共に内外面回転のナデ仕上げで(163) は外面全体にうすい自然釉がかかっている。

他に鍋の把手（160）がみられる。

S D 遺構

S D 4 4（図45・47）

S D 44をS D 46が切る形の落ち込みであり、他の部分は調査区外で、落ち込みの全体については不明である。あるいは、素掘りのS E 遺構（井戸）に類する遺構を想定するが、平面図からみれば、断面地層図からはそれはうかがえないが、もっと広がるものである。

両者の落ち込みは現存する肩から肩まで5.5mである。S D 44の深さは遺構面の肩から110cm、S D 46の深さが150cmを計る。土層の流れからS D 44がある程度埋まった時期にS D 46として拡張され、時を経ずして一気に土砂の流れがあったものと思われる。

落ち込みの肩から、厚さ10cmの一定した層があり、これが7～8世紀の遺構面となっており、

この時期の整地の可能性を示している。

出土遺物（図46, PL66・67）

弥生土器（74, 187, 188, 189, 200, 2123）

(187, 200, 2123) は高杯で、(188) は壺、(74, 189) は小型の甕である。(187) は脚裾部を欠損しているが、杯部の深さ4.5cm、口径13.5cmである。内外面共に磨滅している。(200, 2123) の器形は(187) に似ているが、(2123) は外面の口縁部に整形を兼ねた細い四条の凹線がみられる。この凹線には下部の杯部は三段の丁寧なヘラミガキ、脚部から裾部にかけてはタテ方向のヘラミガキ、裾部はヨコ方向のヘラミガキで端部はヨコナデで仕上げている。杯部内面は、口縁部はヨコ方向のヘラミガキ、体部から底部にかけては斜め方向のヘラミガキがなされている。

脚部内面は、ケズリがなされている。裾部には四方の円孔透しがなされている。

(200) は外面口縁部と体部、脚部は斜めの磨き、裾部は平行磨きで、それぞれ磨き上げている。内面は平行磨きである。

(188) は、あるいは二重口縁に成形される前身の壺で、急に外方にひらいた口縁部から頸部にかけて平行な叩き目痕を残している。

内面は、ヨコナデを行っているが、粘土紐の輪積み痕がみられ、頸部から体部の接合部分には指頭圧痕状の指押さえが浅く残っている。

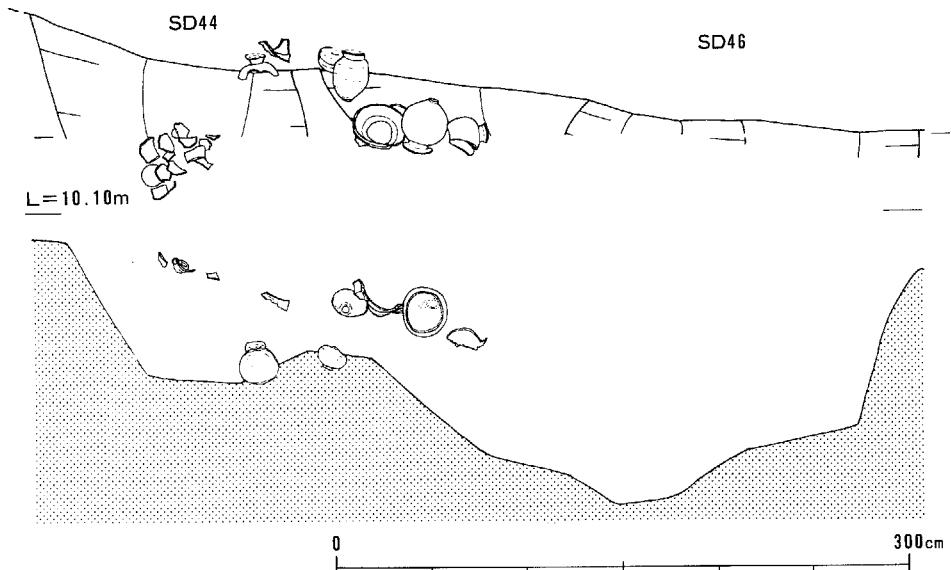


図45 SD44 SD46

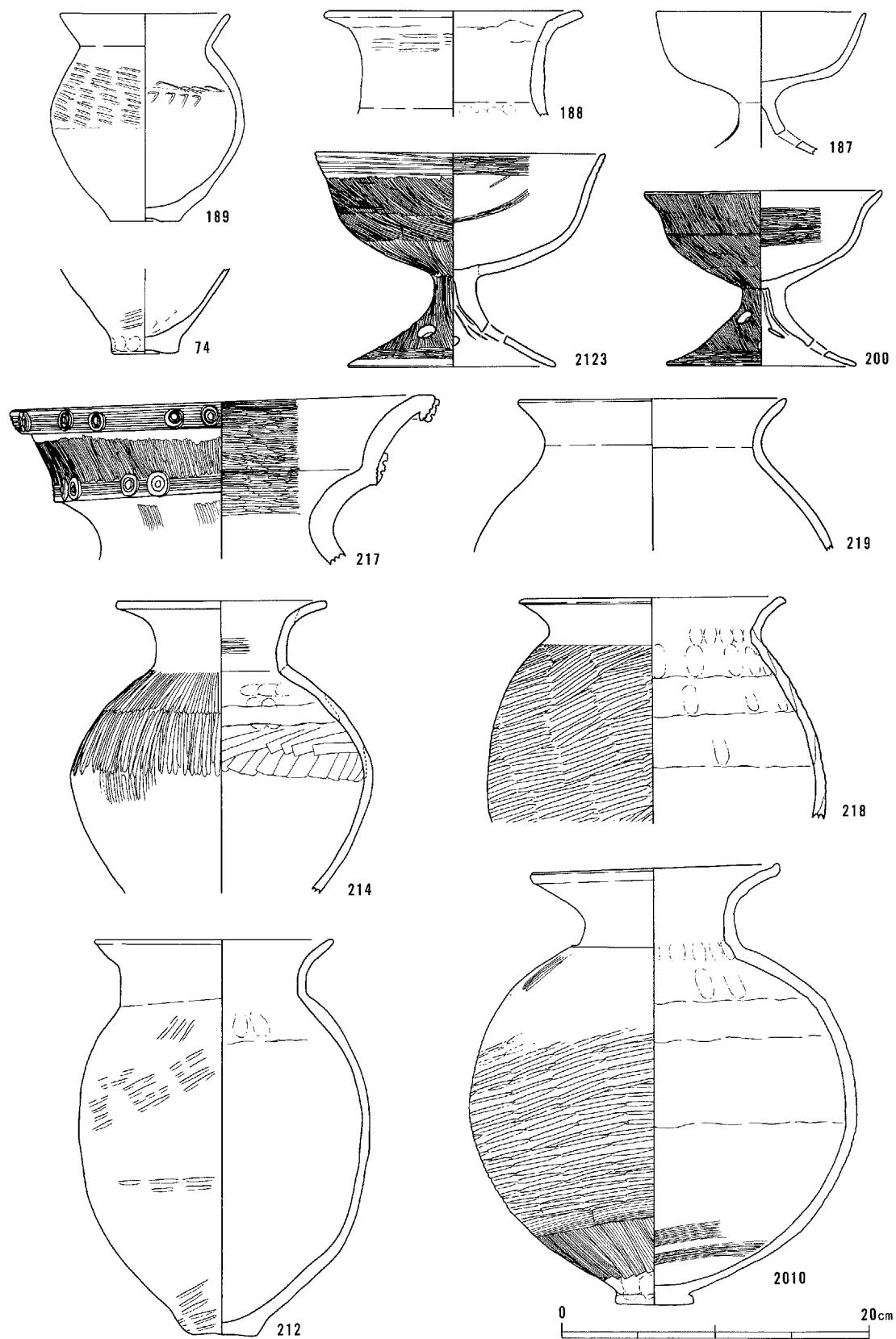


図46 SD44 SD 46

(74) (189) は小型の甕で (74) は外面底部に整形圧痕、そして左下がりの叩き目を残している。

(189) は、口縁部内外面共にヨコナデで、外面頸部から体部中央は、右下がりの叩き目で、体部中央部以下とは、接合部の痕を残している。体部中央下半はナデて仕上げている。

口縁部から体部内面はヨコナデで調整しているが、体部中央はヨコナデ工具による押圧痕が連続に、あるいは重なってみられる。

SD 4 6 (図 4 5・4 7, PL 1 0)

出土遺物(図 4 6, PL 6 7・6 8)

弥生土器

(214, 217, 2010) は壺で、(212, 218) は甕である。この時期、壺と甕の判断のしにくい土器があり、(2010) はそれである。ここでは、調整と形態で分類した。

(214) は、口縁部が顕著に外方するので (2010) に似る。外面の頸部から体部は垂直にタテ方向のヘラミガキがなされている。内面の頸部はヨコ方向のヘラミガキで、体部は雑に板状工具による調整痕が、斜めヨコ方向にみられる。

(217) は、二重口縁部で外面はヘラ磨きの顕著な土器であり、それぞれの口縁段には円形貼付文に円形押捺文がなされている。口縁部段には、それぞれ上部には四条、下部には三条の凹線文がなされ、その上に円形貼付文が付されている。内面もヨコ方向の丁寧なヘラ磨きがなされている。頸部はタテ方向のヘラミガキである。

(2010) は、この時期にみられる球形の体部をした土器で、外面の口縁部はナデ仕上げ頸部から肩部はタテ方向の叩き目を消している。体部は左下がりの叩き目はそのままである。底部は、底部中心に向かってハケ調整がみられ、整形時の指頭様の圧痕がみられる。内面は、粘土紐痕が三ヶ所みられ、肩部には体部と頸部の接合時の指頭痕を残し、底部は荒いハケによる調整痕を残している。

(212) は、胴長の甕で、外面の口縁部はナデ、体部は頸部から肩部へタテ方向の左下がりの叩き目、体部の上部はより左下がりの叩き目、体部下半は平行叩き目、底部は左下がりの叩き目が残っており、口縁部、体部、底部の整形の段階を示している。内面は頸部と体部の接合時の指頭圧痕がみられる。

(218) は、(212) に比してしっかりと成形されている土器で、外面の口縁部はナデ体部は左下がりの叩き目である。内面には粘土紐の接合時の指頭圧痕が平行にみられ、粘土紐も歴々としている。

(219) は、外面に叩き目をほとんど残していない。他に調整も顕にみられない土器で、全体にナデて仕上げている。

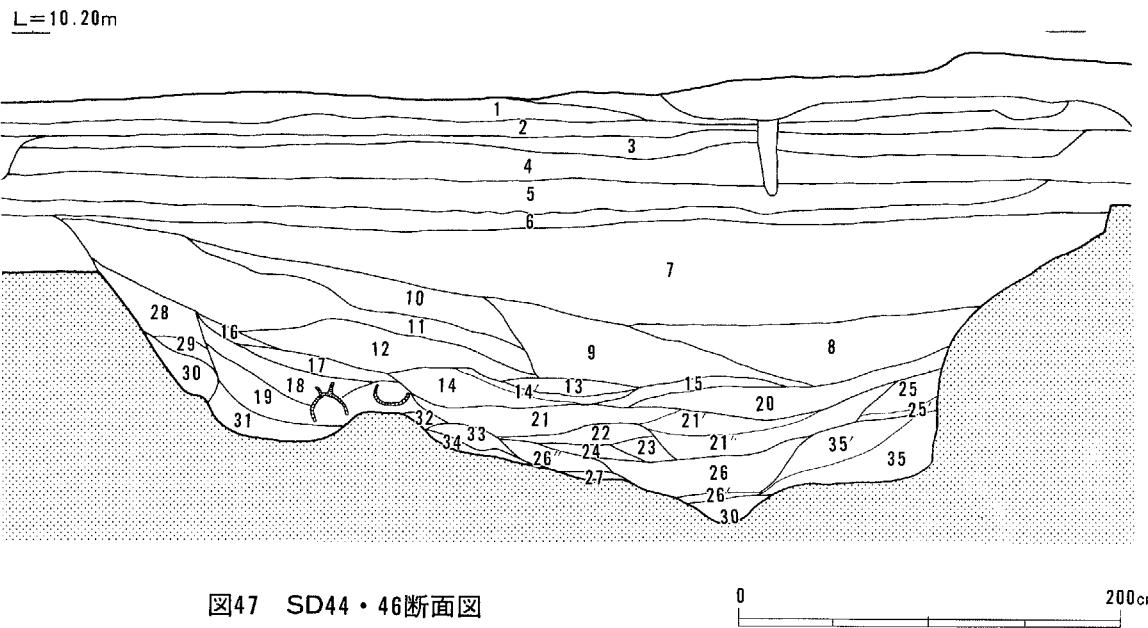


図47 SD44・46断面図

1 耕土	14 灰黄色粘泥	25 灰褐色粘質土
2 床土	14' 灰黄色粘泥	25' 灰色粘泥
3 灰褐色	15 淡灰褐色砂質土	26 濃黄色弱粘質泥
4 淡黄褐色弱砂質土	16 淡黄灰色粘質土	26' 淡灰色粘泥
5 黄黑色土	17 淡黄灰褐色砂質土	26'' 淡灰色微砂
6 濃黄褐色弱粘質土	18 淡黄灰褐色弱粘質土	27 淡褐色粘泥
7 疾黄灰褐色弱粘質土	19 灰褐色弱砂質土	28 灰褐色弱粘質土
8 黄灰褐色弱粘質土	20 灰褐色粘質土	29 淡灰褐色粘質土
9 淡灰褐色粘質土	21 淡灰色泥砂	30 淡灰褐色微砂
10 淡灰黄色粘質土	21' 淡灰色粘泥	31 淡黄褐色粘質土
11 灰褐色弱粘質土	21'' 灰色粘泥	32 淡茶褐色粘泥
12 淡灰白色粘泥	22 明黄灰色粘泥	33 淡灰黄色微砂
13 灰褐色粘質土	23 灰色粘泥	34 茶褐色微砂
	24 淡灰褐色微砂	35 明黄色弱砂質土
		35' 明黄茶色弱砂質土
		36 淡灰褐色粗砂

SD121

S K97に切られている溝状遺構で、幅50cm、深さ20cmで東西流である。

出土遺物 (図48, PL68)

須恵器 (46, 47)

須恵器蓋 (47)

天井部に偏平なつまみがあり、受け部が外方へ突き出ている。口径7.1cm、高さ2.2cmで、天井部つまみ周辺にヘラケズリがみられる。天井部外面に二本の平行なヘラによる記号がなされている。外面3分の2程に重ね焼きによる赤灰色を呈するなま焼け状態である。

杯身 (46)

ここでは一応身として扱った。口径10.2cm、器高3.7cmで、底部から口縁部への立ち上がりは垂直で、底部外面にはヘラケズリがみられ、他の内外面はナデ、ヨコナデである。

S D 1 2 3

南北流の溝状遺構で、幅40cm、深さ20cmである。

出土遺物（図48、PL68）

土師器甕（490）

口径22.2cmの体部下半を欠く土器である。内外面共に非常に磨滅している。口唇部は端正に始末され、口縁部から体部にかけてのくびれははっきりしている。内外面橙色である。

須恵器身（48）

口径9cm、器高2.3cm程度で、体部から受け部にかけては外に反ることなくつくられている。底部は未調整で、他の内外面に水平なナデ仕上げである。

S D 1 2 9

東西流の調査区内を縦断している溝である。幅50cm、深さ10cm前後である。

出土遺物（図48）

土師器甕（488）

口縁部径15.2cmで、頸部下は欠損している。口縁部端はやや立ち上がり、口唇部下外面に一条の凹線がめぐる。胎土は褐色の色調である。

須恵器甕（49）

口縁部が欠損しており、最大幅は肩部にあり9.5cmである。外面体部はヨコナデ、下半はケズリで、底部は未調整である。内面はヨコナデである。

S D 1 3 4

南北流の溝で、幅100cm～120cm、深さ30cmである。

出土遺物（図48、PL68）

土師器甕（487）

口縁部径15.3cmで、頸部以下を欠損する。外面頸部下に左下がりのハケ目、内面頸部、頸部下にヨコハケ調整がみられる。胎土は赤褐色を呈している。

須恵器高杯（45）

口径11.5cmで裾部は欠いている。杯部内外面、脚部外面はヨコナデ仕上げで、脚部内面にはタテ方向のしづり目がみられる。

須恵器提瓶（484）

口径10cm、体部最大幅20cm、厚さ15cmで、一方の面は丸味をもち、他面は偏平である。丸味に作られている面は同心円状にカキ目調整がなされ、他面はタテ方向のヘラケズリである。接着面が円形の把手は若干下方へ垂下するもので、接着面周辺は円形にナデられている。

S D 1 3 9

南北流の溝状遺構で、他の溝状遺構に重なっている。幅1.2m、深さ15cm～20cmである。

出土遺物（図48）

弥生土器（482, 483, 486）

(482) は、壺の口縁部から頸部の部分で、外面は板状工具のタテ方向のナデで、頸部下はヨコナデである。内面の口縁部はヨコ方向の板状工具のナデ、頸部下はしづりによるタテ方向のしづり目がある。

(483) は、甕底部で、外面底部には左下がりのタタキ目があり、内面は底から体部方向のナデがなされている。底部底は、円形の凹み底になっている。

(486) は高杯で、杯部、裾部が欠損している。内外面共に激しく磨滅している。裾部の円孔は四方向の四個である。

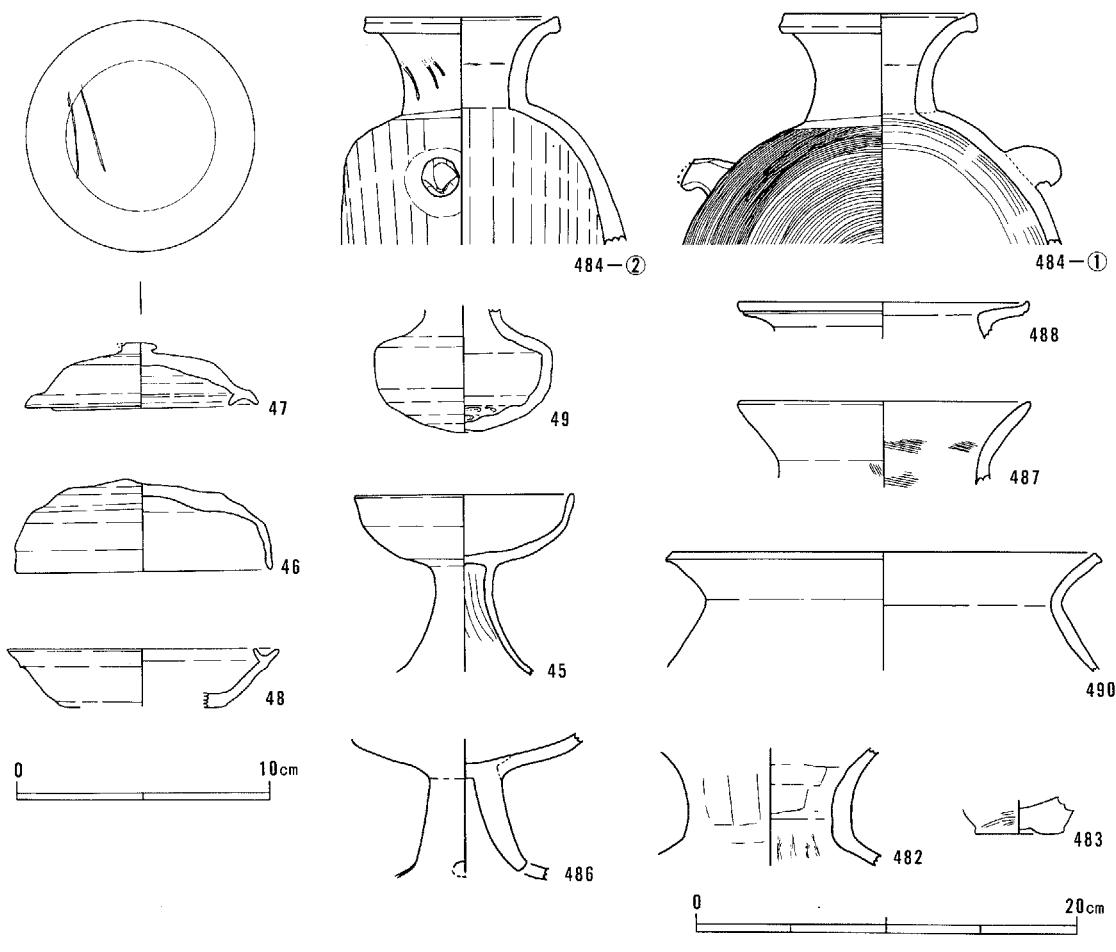


図48 SD121 SD123 SD129 SD134 SD139

I 区下面遺構図

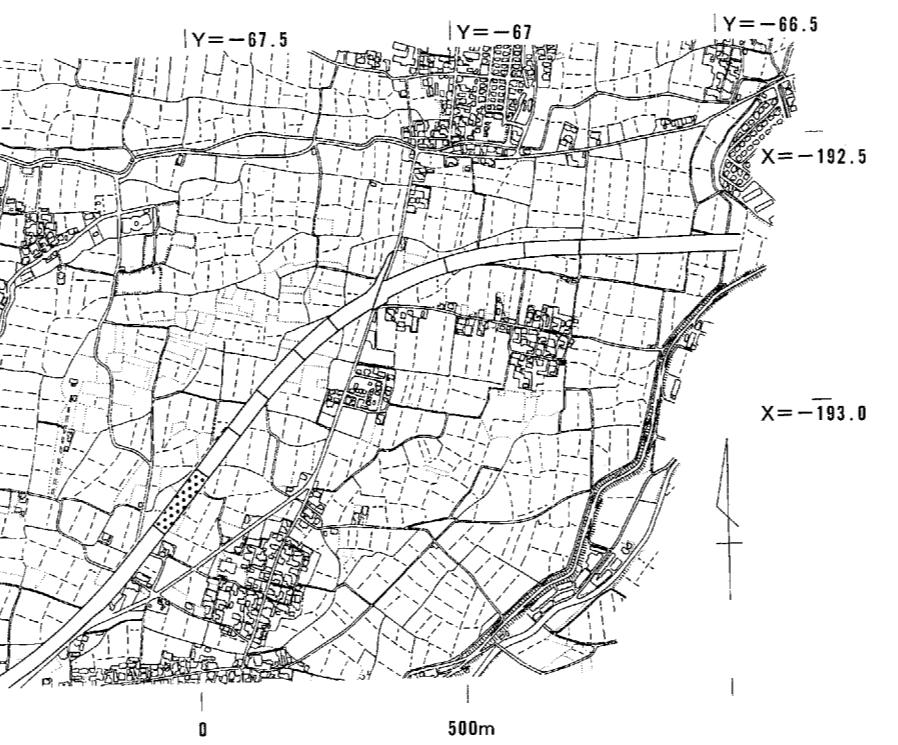
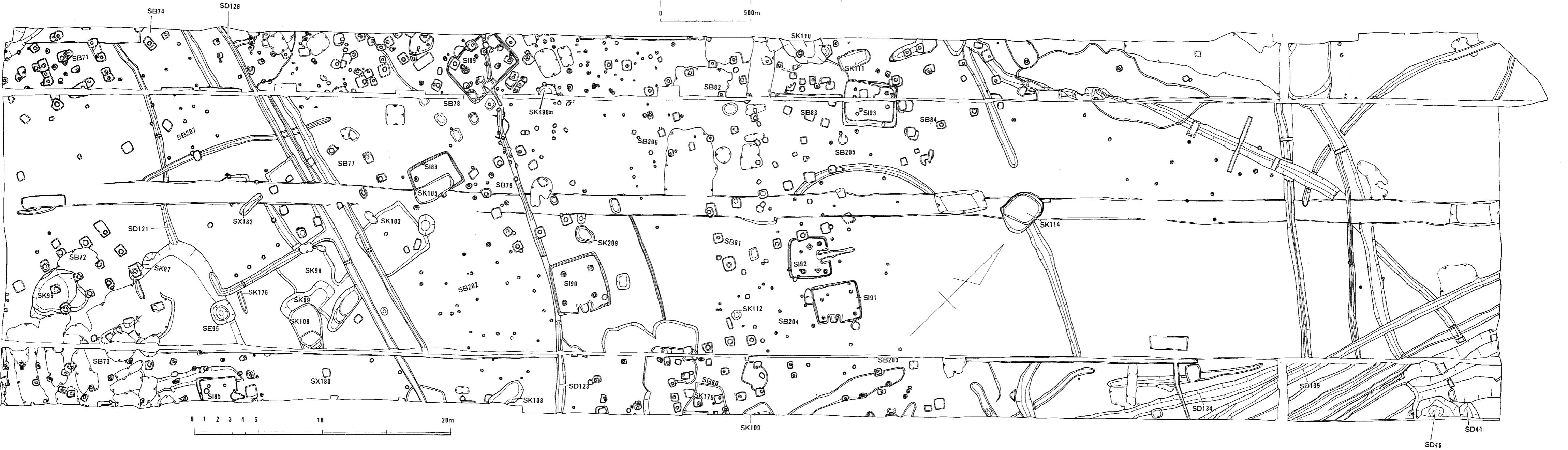


図49

II区の遺構と遺物

II区上面の遺構と遺物

西半分は、遺構の検出されていない部分で、I区の上面遺構と比較すると中世の生活遺構がまったくみられないことである。I区の上面中世～近世の遺構面と20cmの比高差である。

S D 遺構は、南北流の溝状遺構とこの遺構に関連して東西流の溝状遺構が分岐して、地割が行われている、それぞれが人工的溝状遺構である。

S X 遺構

S X 0 1 (SK349) (図50)

正円形の遺構で、径45cm、深さ28cmである。長さ30cm、幅26cm、厚さ5cmの結晶片岩が出土している。近世の桶棺と思われる。

S X 0 2 (SK350) (図50)

S X 01の縁から10cm離れて、近接したS X 01と同様の遺構である。正円形の掘方で、径50cm、深さ40cmである。これもS X 01と同様の近世の桶棺であろう。

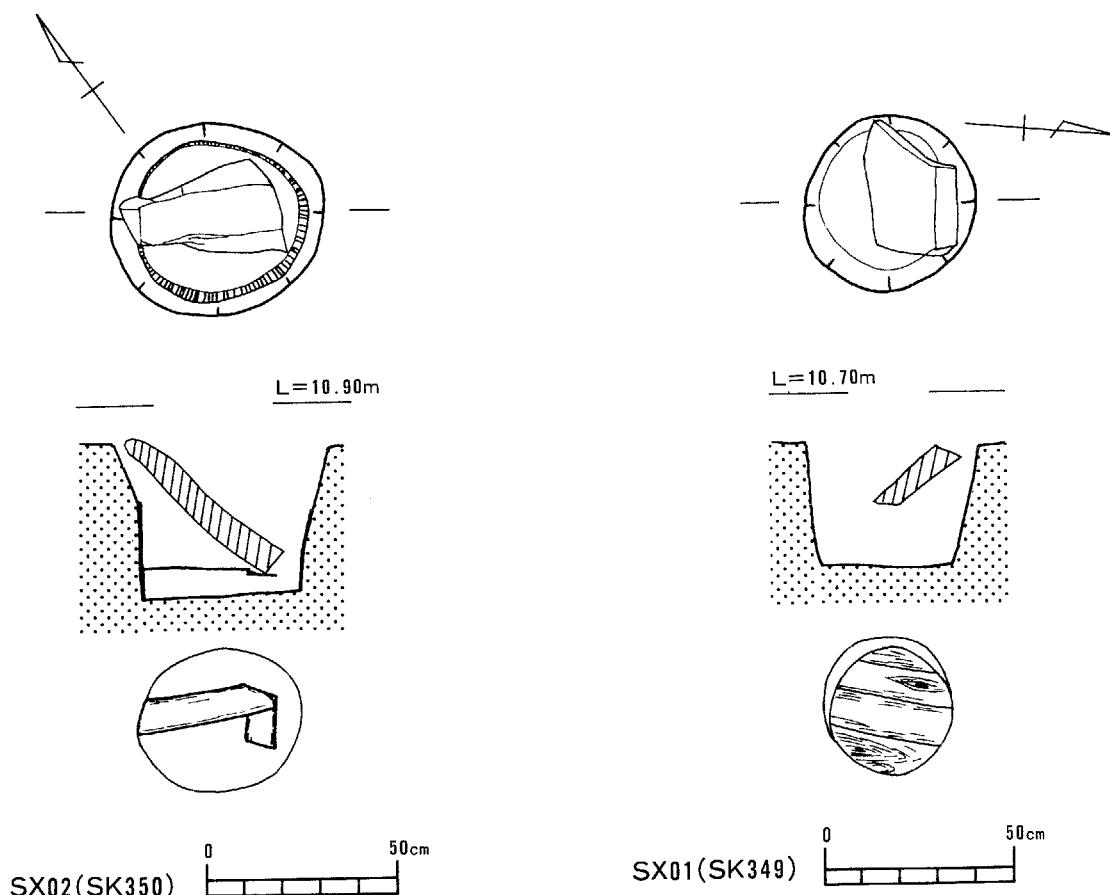


図50 SX01(SK349) SX02(SK350)

S D 遺構

S D 4 8 4 (P L 1 2)

東西流の溝で、南北流の S D 487 に合流する。幅は 140cm 前後で、流路側には木杭が打たれ、合流点では、長さ 100cm、幅 10cm~20cm の板材を用い、さらに長さ 10cm~20cm の結晶片岩の石材が散乱していることから、板材と溝の壁の間の裏込めに利用したものと考えられる。

出土遺物 (図 5 1, P L 6 8)

土師器 (167, 171)

近世以降の遺物で、(167, 171) は土師質の焙烙で、(171) は片口であり、片口の反対方向に肉厚にして貫通しない円孔が穿たれている。いずれも口径 26cm 前後であり、口縁部外面には煤が付着している。

陶器 (168, 169, 170)

(168, 169) は甕で、(168) は口縁部内面まで濃緑色釉がみられ、口唇部はつまみ立ち上がっている。(169) は折り返されて、玉縁状の口縁部を形成し、表面の色調は茶褐色である。(170) は壺で、胎土断面は灰白色、外面は灰色、内面底部には自然釉と思われる濃緑色の釉がみられる。

鉄器 (636)

鉄鎌で、刃部は欠損している。背部の厚さは刃部で 3mm、着柄部でも 3mm である。刃部幅は着柄付近で 2cm であり、非常に小さな鉄鎌である。

S D 4 8 7

南北流の主流になる人工的な溝である。幅 170cm、深さ 20cm である。溝底の東側には 10cm 以下のピッチで径 20~30cm の木坑が護岸用にうたれている。また、溝底から肩にかけて礫石をまんべんなく護岸用の石として利用している。この遺構から 35cm 上面が現在の生活面であり、現在の地割と同じ方向の地割である。

出土遺物 (図 5 1)

いずれも近世から近代にかけての染付陶器である。

染付 (173, 174, 175, 176, 177, 179)

染付には椀類 (173, 174, 176, 179) と皿類 (175)、猪口 (177) がある。(173) の外面は三条、一条、三条、一条の圈線文に縦に三条、一条の単位で染付がなされ袈裟文様となっている。内面は口縁部に二条、底部に少なくとも一条の水平圈線文でおさめられている。

(174) は底部であるが、疊付部は鋭角で釉のふきとりがみられる。他は内外面共に灰色っぽい釉である。底部内面底に染付文様がなされる。

(176, 179) は小さな椀で、(179) は腰部から口縁部に垂直につくられ、(176) は近世から近

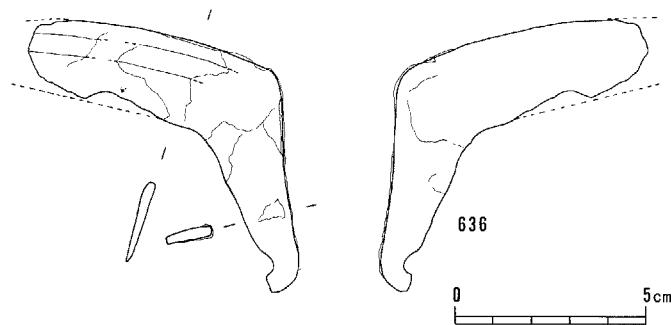
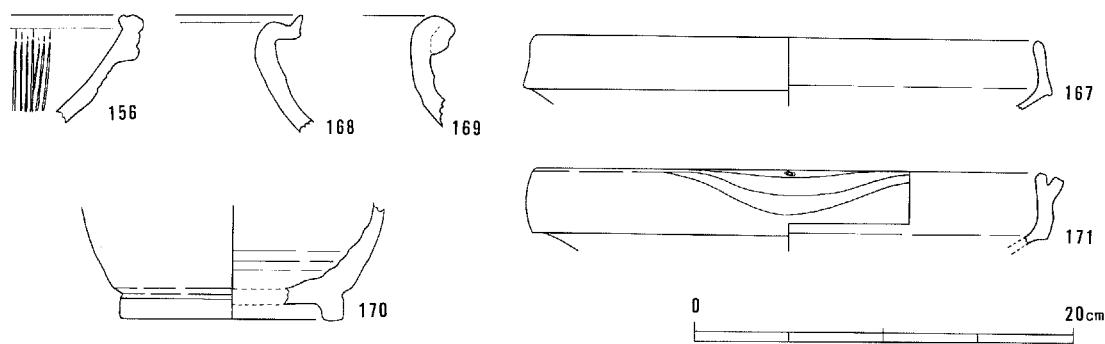
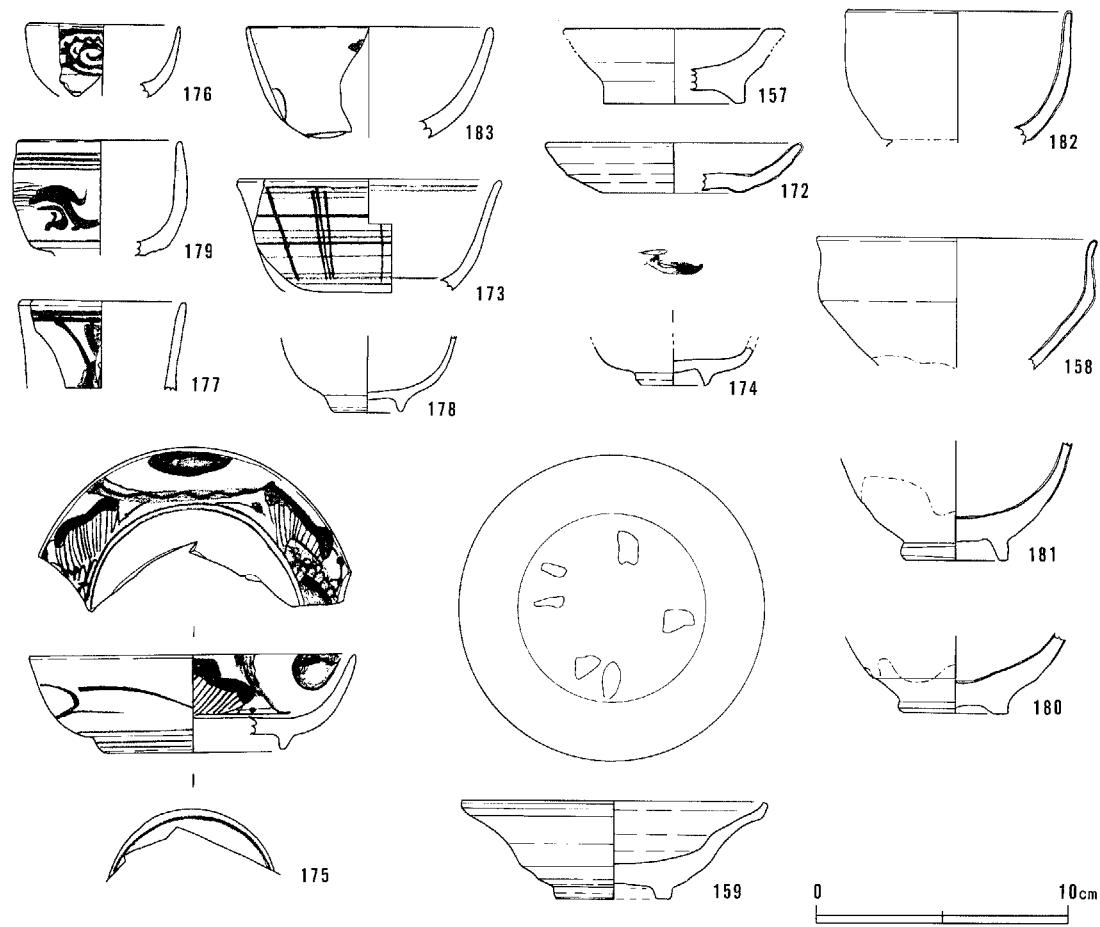


図51 SD484 SD487 SD490 SD491

代に多様される染付文様である。(177) は猪口の形態をし、染付は青色の濃いものと淡いものが使用されて文様を構成している。(175) も濃淡の呉須をもって描かれている。

白磁 (178)

(178) は全体に器肉がうすく、外面底部は露胎である。畳付から内面は施釉がなされている。

灰釉 (172)

(172) は灰釉の小皿で、高台がなくゴケ底になっている。内外面の底部は露胎で、外面底部には重ね焼きの痕跡がみられる。釉は緑味をおびた黄色である。

S D 4 9 0, S D 4 9 1 (図 5 2)

S D 487からほぼ90度に分岐している東流の溝である。S D 487との取付け部分は何度かの改修がみられる。S D 490は幅100cm、深さ15cmと分岐点部分に比べて浅くなり、平坦地の標高も低いこと、さらにS D 487の底とS D 490との底ではS D 490の方が低いことからも、S D 487を本流溝として、S D 490が支流溝であるといえる。分岐点部分では、木杭がみられるが、分岐点部から離れると木杭は非常に少なくなっている。

S D 490とS D 491は分岐点の改修部分がS D 491で、それより東の部分がS D 490である。

出土遺物 (図 5 1, PL 6 8)

S D 4 9 0 (157, 158, 159, 180, 181, 182)

瓦器 (157)

(157) は高台のついた小皿であるが、全体に一定の肉厚気味のもので、それぞれに見られる稜は、明瞭で鋭い。仕上げの最終においてもロクロ回転の平行で一定のナデ仕上げがみられ、口縁部の稜、高台の稜より、ロクロ使用による整形が感じられる。全体に灰色の色調である。

天目茶碗 (158, 181, 182)

いずれも日本製の天目茶碗で、(158) の口縁部はやや端反りになっており、(182) に比してより天目茶碗の形態を残している。(158) は茶褐色、(182) は黒褐色の釉調である。(181) は体部下半であり、外面露胎部分は褐色である。高台はケズリ出し高台でケズリ痕をよく残している。釉調は黒褐色である。

灰釉椀、皿 (159, 180)

(180) は椀下半部分である。釉は内面と外面の腰部までで、以下は露胎である。高台はケズリだしで、中央部に回転ケズリ痕の中心が残存する。釉調は、黄色にやや緑がかったもので露胎部分は茶褐色である。(159) は高台付きの小皿で、やはり内面と外面腰部まで黄色に緑がかった釉がかけられている。外面腰部から高台、底部にかけては露胎である。外面底部に六ヶ所の砂目跡があり、二度焼き痕跡であろう。釉調は緑がかった灰色で、露胎

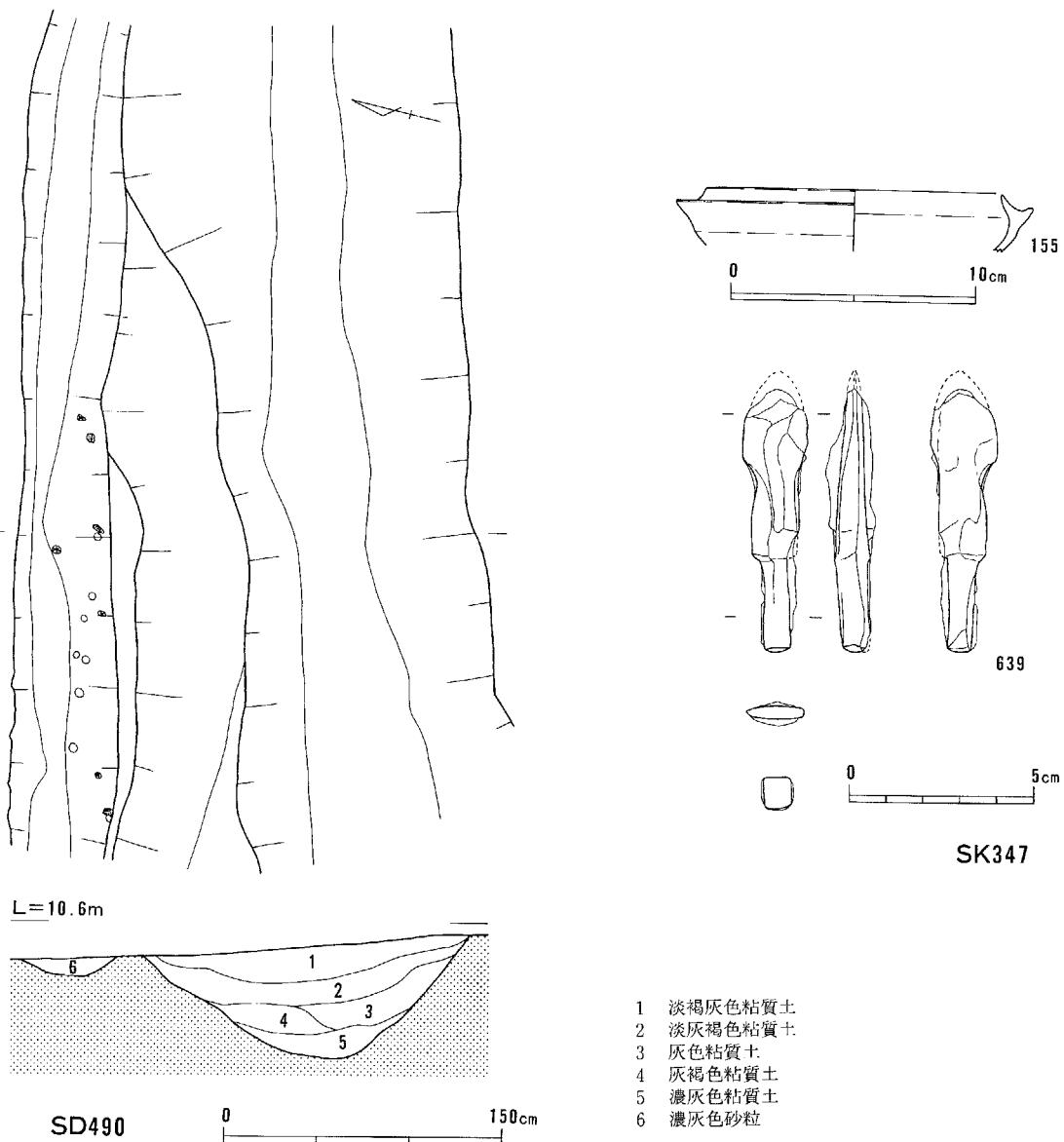


図52 SK347 SD490

部は赤味の灰色である。

S D 4 9 1 (1 5 6, 1 8 3)

摺鉢 (1 5 6)

(156) は小片の備前焼である。口縁部外面に二条の浅い凹線がみられ、内面は肥厚している。内面の摺体としての沈線は荒く、6mm幅の摺面である。褐色の色調である。

染付椀 (1 8 3)

外面の腰部に圈線文、体部に草花文の染付椀で、染付は濃青色で、全体にやや青味の透明釉がかけられている。

S K 遺構

S K 3 4 7

長さ3m、幅1mの方形状を呈する遺構である。

出土遺物 (図52)

須恵器杯身 (1 5 5)

口径12.3cmで、口縁部が受け部より突き出ており、古墳時代の遺物であろう。

鉄鎌 (6 3 9)

現存する全長7cm、茎部の長さ2.7cmである。鎌中央部に抉りがあり、茎部にかけて細くなる。

現存する最大幅1.8cmで、鎌は偏平であり、茎部は8cmの方形で、先端部にむかってうすくなっている。

II区上面遺構図

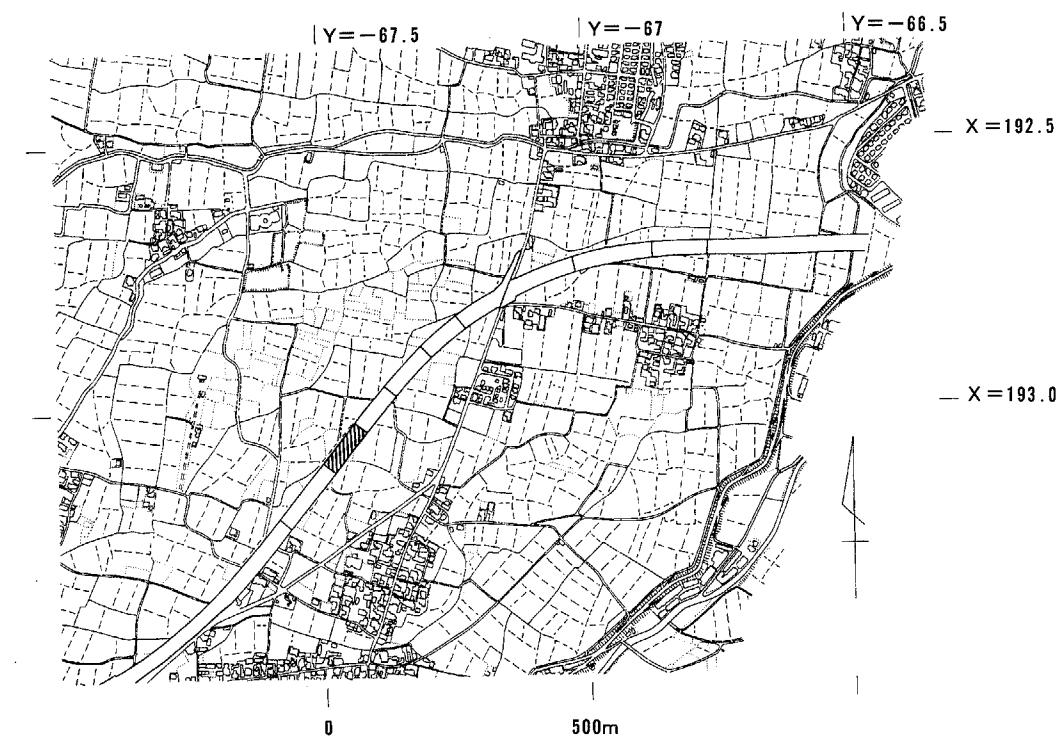
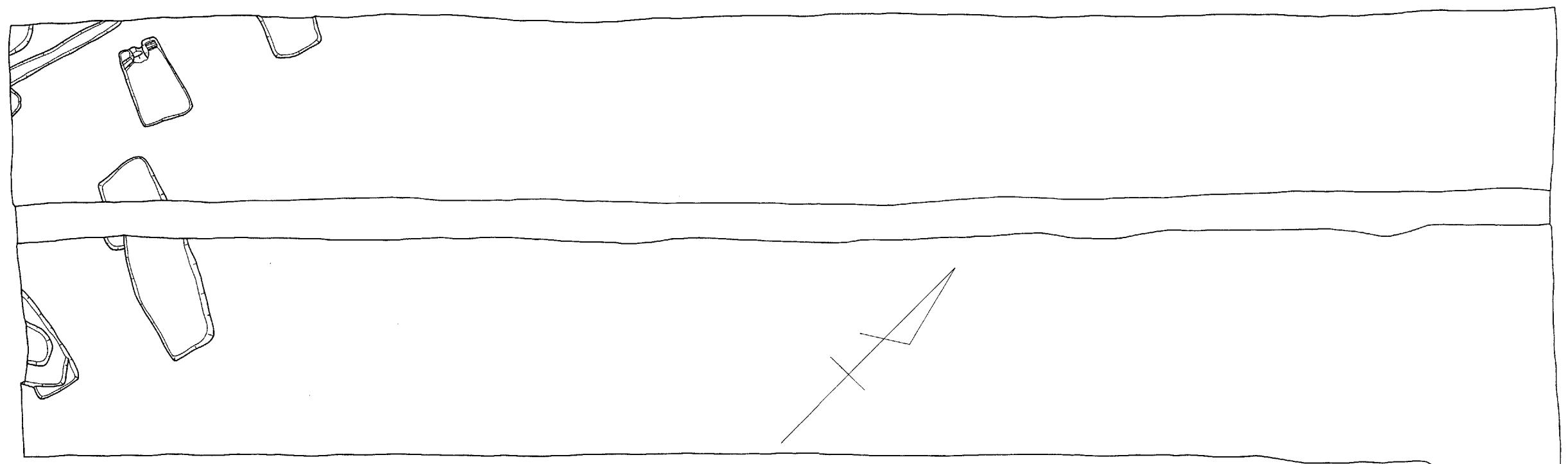
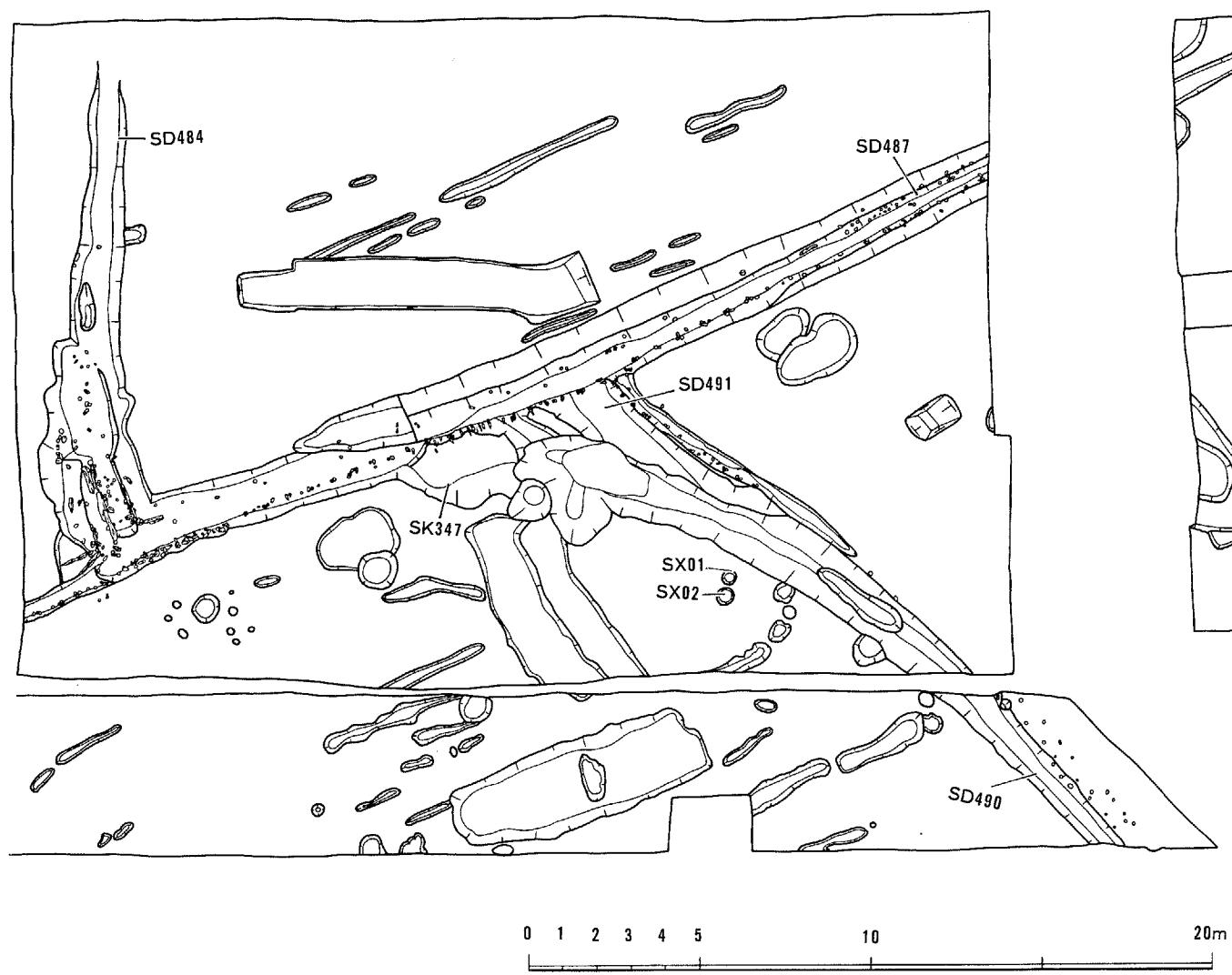


図53



II区下面の遺構と遺物

この遺構面からの出土遺物は縄文時代、弥生時代、古墳時代、奈良時代のものである。遺構は溝状遺構が主なもので、蛇行する弥生時代の S D45に対し、東西流の細い溝状遺構が際だっている。古墳時代金環の出土はこの地区である。

S E 遺構

S E 4 3 (図54, PL14)

楕円形の井戸遺構で素掘の井戸と思われる。しかし、素掘りの井戸の場合、縦に細目の板材を使用してツタ類で編んで、井戸の防護壁に使用することも考えられる。ただこのたびの調査ではこれらに類する植物遺体はみられなかった。

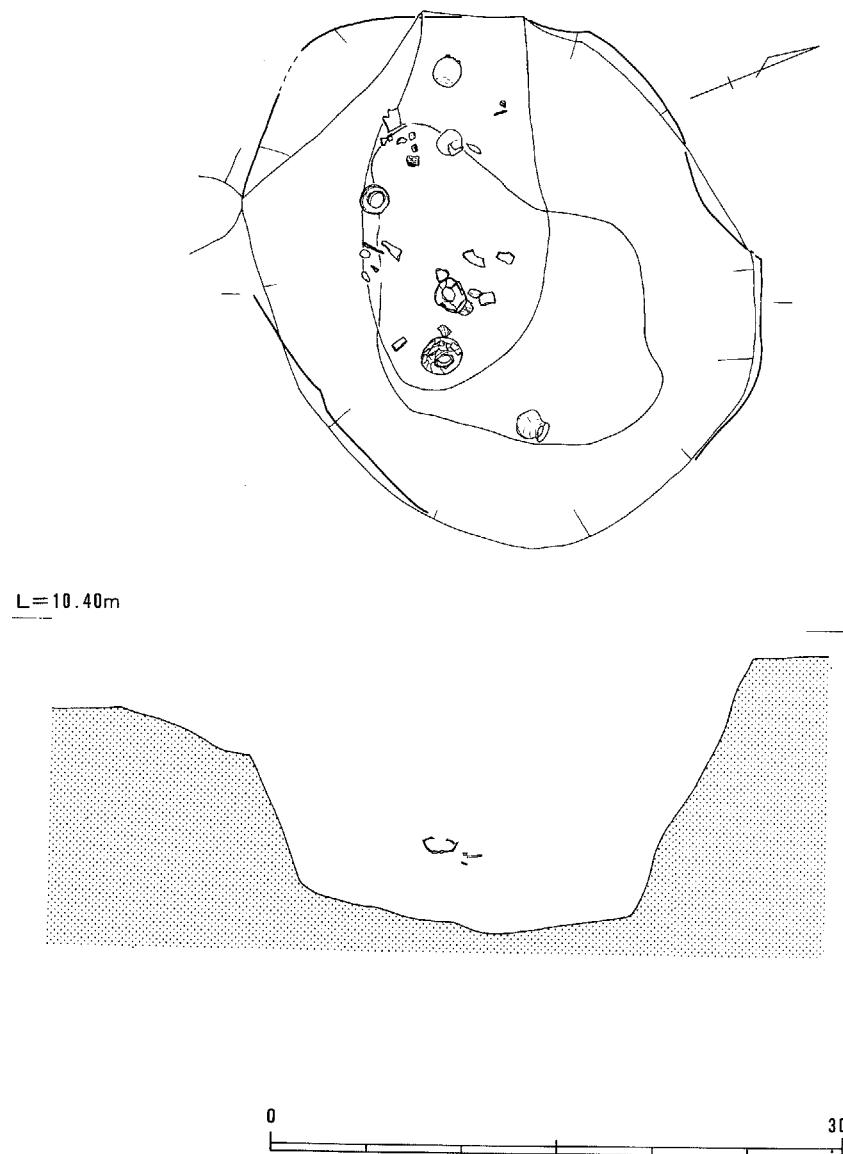


図54 SE43

長軸300cm、短軸240cmで深さ150cmである。

出土遺物（図55, PL69）

弥生土器（190, 191, 192, 193, 194, 195, 196, 197, 198, 199, 199）

これらの土器は、弥生土器の終末から、近畿庄内式土器に併行する土器群であり、弥生土器と一括する。

壺（190, 192, 194, 195, 199）

（190）は口縁部を欠いている。外面は磨滅しているが、底部にはミガキが残っている。体部と頸部の接合部は内面に粘土の肥厚がみられ、指頭押捺がなされている。底部は丸底氣味で、中央部がややへこんでいる。

（192）は、口縁部で、下方に拡張された部分に曖昧な凹線文が四条程なされている。

（194）は、直口の口縁部で、外面に叩き目はみられない。内面に一条の粘土紐痕を残す程度である。胎土は密で、焼成も良好な土器である。

（195）は、口縁部を欠く。内外面共に浅く粘土紐痕が部分的にみられる。内面はナデ仕上げで、内面には、頸部と体部の接合部に指頭圧痕がみられる。

（199）は口縁部で外面には右下がり方向のハケ、内面には水平なハケによる器面調整が部分的に残っている。

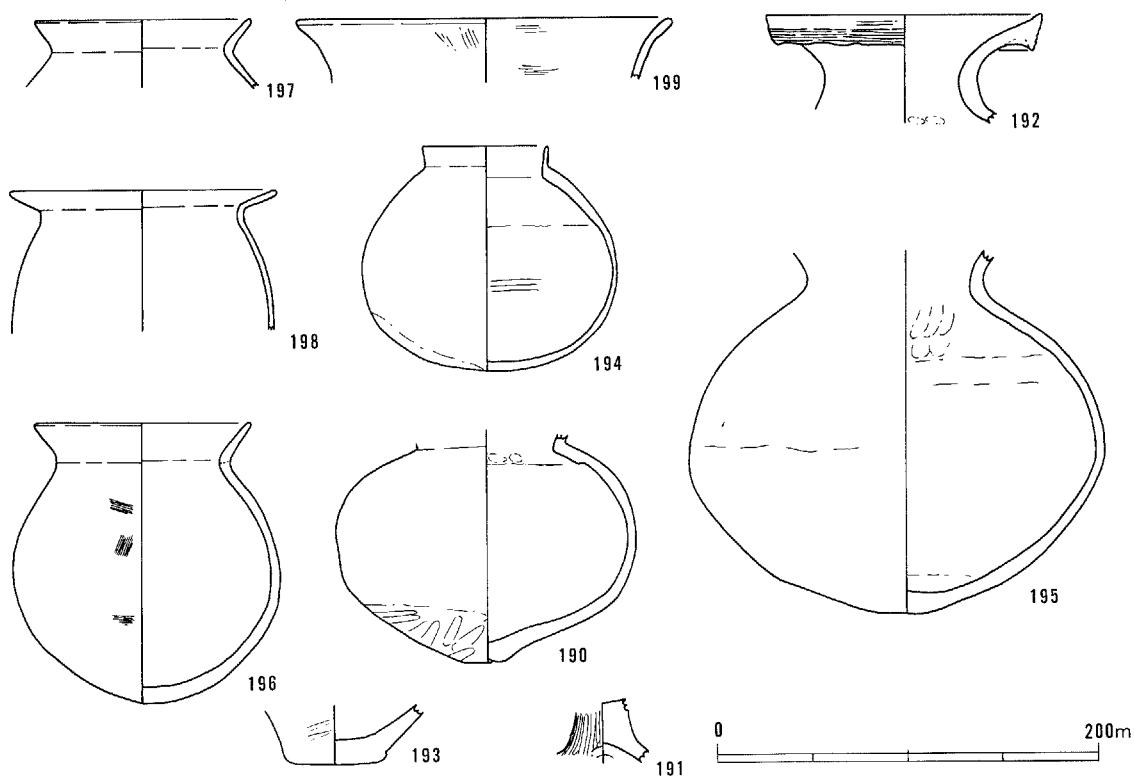


図55 SE43

甕 (193, 196, 197, 198)

(193) は甕の平底の底部で、外面に左下がりのタタキを残す肉厚な底部である。

(196) は内外共器壁の磨滅が著しいが、外面には、右下がり、左下がり、水平方向のハケ目調整痕が部分的に残っている。

(197) は、口縁部から肩部であるが、比較的頸部の稜が他の甕より目立つ肉薄の土器である。

(198) は、口縁部が極度に外反している。タタキ痕はなく、肉薄の土器である。

高杯 (191)

脚部である。外面にはタテ方向の丁寧なミガキがなされている。

S K 遺構

S K 2 1 7

他の遺構に削られて、幅狭の三角形を呈する落ち込みである。最大幅 2 m、長さ略々 4 m、深さ 5 m である。

出土遺物 (図 5 6)

土師器壷 (185)

土器底部の高台部片である。内外共に素焼きの赤褐色を呈している。底径 4.6 cm で、高台は断面四角形で、疊付部もしっかりしている。中世以降の土器であろう。

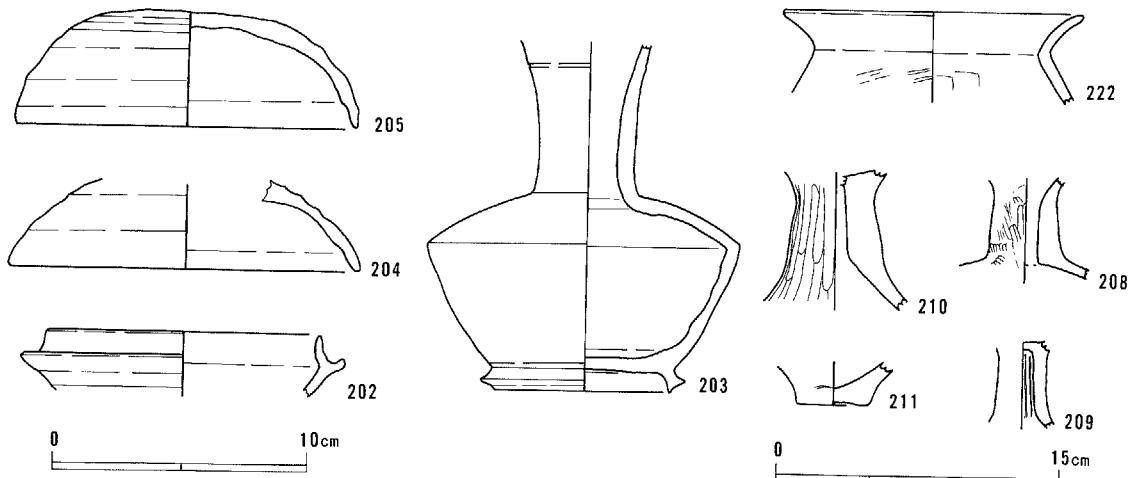
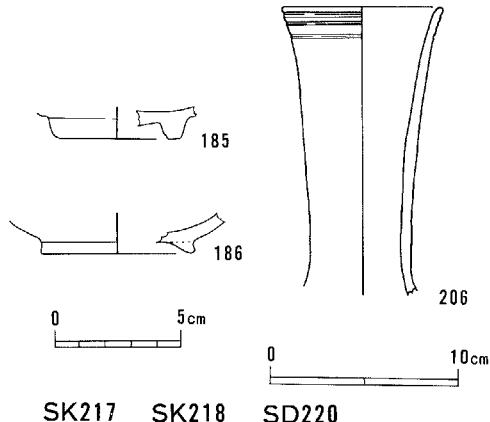


図56 SD48 SD151 SD154 SD158 SD187

S K 2 1 8

長楕円形の落ち込みで、長軸は200cm、短軸は115cm、深さは10cmを計る。

出土遺物（図56）

瓦器椀（186）

底部破片で高台復元径6.2cmで、内外面共に黒色を呈し、古相を示している。

S K 2 2 0

不整形な楕円形の落ち込みで、最大長3.5m、最短幅2.6mで、深さ1mである。

出土遺物（図56, PL68）

弥生土器壺（206）

長頸壺の口縁部で、口径8.5cm、口縁部の長さ14.8cmである。外面口唇部下に三条の凹線文がみられる。内外面は橙色の色調であり、口縁部から頸部までの高さは15cmである。

S D 遺構

S D 1 5 1

幅70cm、深さ50cmの溝で、他の交錯する付近の溝の中で最も新しい溝である。

出土遺物（図56, PL69）

須恵器（203）

長頸壺で、口縁部を欠き、長頸部の上部に一条の凹線がめぐる。くびれ部から、体部にかけて肩部に鋭い稜による屈曲がみられる。高台は、付高台で外反りが著しい。肩部はうすい自然釉の剥落があり、内面底部にも自然釉がみられる。内外共にナデて仕上げている。

S D 1 5 4

幅80cm、深さ25cmで東西流の遺構である。

出土遺物（図56, PL68）

須恵器（205）

杯蓋で古墳時代の遺物である。外面は回転ヘラケズリの後ナデて仕上げ、内面はナデ仕上げである。内面は口縁部から体部にかけて、肉厚の段がみられる。

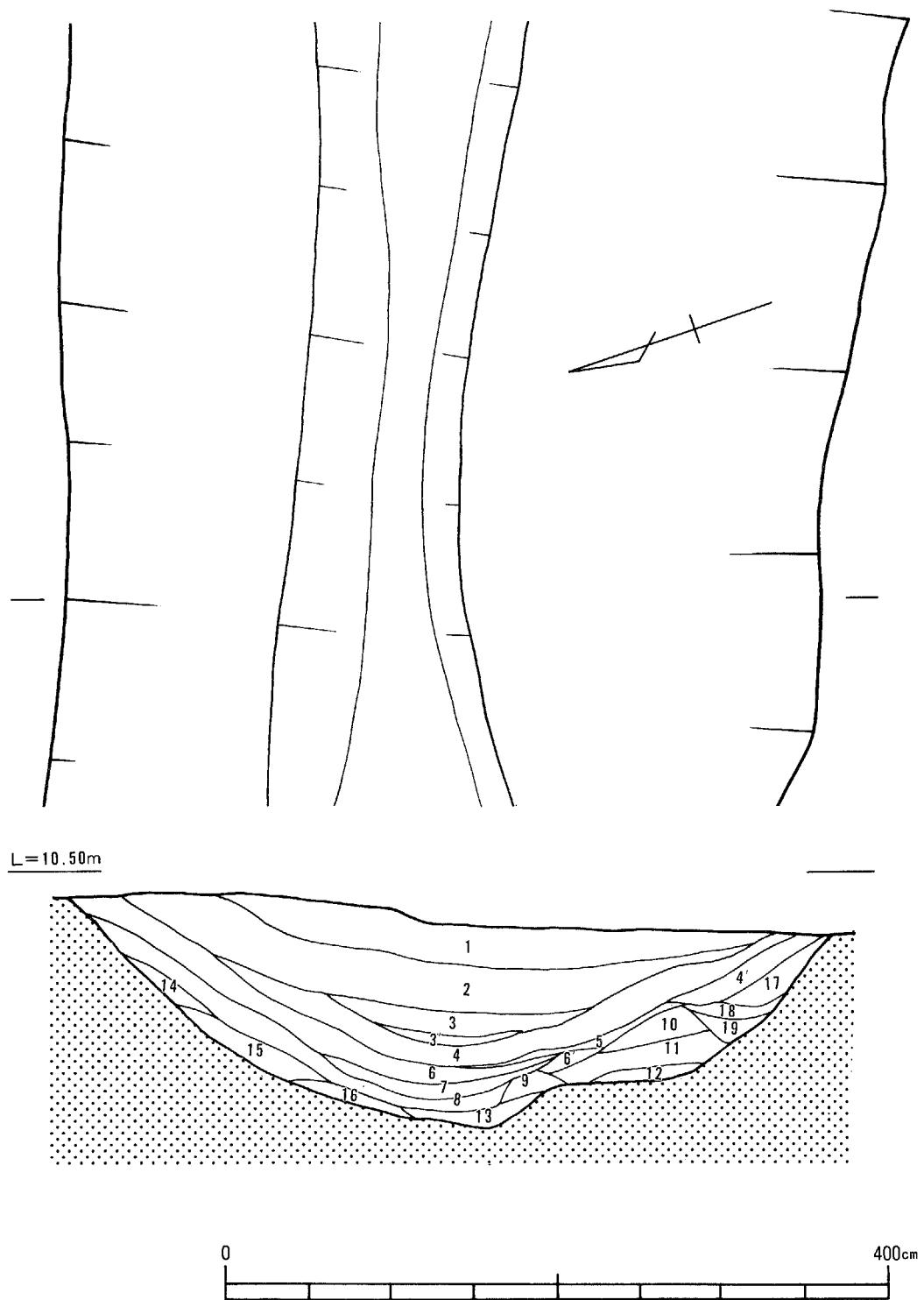
S D 1 5 8

幅80cm、長さ19m、深さ30cmの溝状遺構である。

出土遺物（図56）

須恵器（202）

杯身の破片である。復元口径11cmで、口縁部が受け部より高い。内外面共にナデて仕上げている古墳時代の遺物である。



1 喀褐色弱粘砂質土	6 灰褐色粘質土	12 茶褐色砂質土
2 喀茶黃褐色粘砂質土	6' 黃灰褐色砂質土	13 淡灰色砂
3 黃褐色粘砂質土	7 暗灰色砂土	14 明茶色砂質土
3' 黃灰褐色粘砂質土	8 暗灰色砂土	15 暗茶褐色砂質土
4 黃灰褐色粘砂質土	9 黃褐色砂質土	16 暗茶褐色粘砂質土
4' 茶灰褐色粘砂質土	10 暗茶褐色砂質土	17 明茶色弱砂質土
5 淡灰褐色弱粘質土	11 暗茶褐色砂質土	18 淡灰色弱砂質土

図57 SD45断面図

SD187

幅60cm、深さ15cmの溝状遺構である。周辺の東西流のSD遺構に対し、南北流に近い人工遺構である。この溝の北壁近くの溝の肩より約1mの地点で金環が出土した。

出土遺物（図56）

須恵器（204）

杯蓋で、復元径14cmで天井部は欠損している。内外面共にナデ仕上げで古墳時代の土器である。

SD45（図57、PL16）

発掘調査地区内に大きく蛇行している溝で、東西流で西流する自然流路であるが、部分的に段があり、ある部分においては人工の手が加わっている可能性がある。自然地形からいえば、この溝は逆らっており、弥生時代には住吉川の本流であったことも考えられる。幅5m、深さ1.1mを計る。

出土遺物（図58・59・60・61・62、PL69・70・71・72・73）

この溝は区下のSD44、46と同時期か、やや新しい時期までの土器がみられる。

弥生土器壺

多量の土器が出土しているので、ここでは口縁部と頸部の形態をもって分類の指標とし、底部についても、形態から分類して説明する。

壺A（233、238、272、306、316、336）（図58・59、PL70）

これらは口縁部下端を肥厚させて垂下するもので、(272)は直線文、波状文に竹管文を行っている。この口縁部に竹管貼付浮文を行っているのが、(233, 238, 306, 316, 336)で、(306)は二本の凹線文の上に貼付している。

壺B（230）（図59、PL71）

頸部から口縁部に外反し、口縁部下端を若干の肥厚をもって成形され、口縁部が斜傾しているもので、口唇部近くと下端部近くに二本の凹線文がなされている。肩部には線刻による大きな三角鋸歯文が施されている。

壺C（273、334、2005）（図58・59・60、PL71）

(334)は頸部のくびれから口縁部に至る直口の壺である。(273, 2005)は、後に分類している壺Dとの中間形態といえる。

壺D（236、270、280、309、311、2003、2009）

（図58・59・60、PL70）

頸部が垂直に立ち、口縁部が外方へ開く形態のものとする。外面は全体にヘラミガキが丁寧にされている土器(309, 2009)は次の壺Eに分類される可能性もあるが、一応壺D

に入れておく。(309) は頸部に貼付突帶をして指頭圧痕文様を行っている。

壺E (229)(図59, PL71)

二重口縁の壺で、(229) は、口唇部、口縁部下端は段となってヘラキザミ文がなされ口唇部と段の間は三角文がなされ、三角文内には、水平に四本の短線で埋められている。内外面は丁寧なヘラミガキがなされている。

壺体部 (228, 276)(図59・60, PL71)

(228) は体部径22.2cmで、外面はヘラミガキ、内面はナデである。底部は貼付底部で、外面には指押え痕が連続でなされ、中央部が丸味の平底で不安定である。(276) は体部径7.8cmの小型の壺で、内外面は磨滅していて調整は不明である。褐色の色調を呈している。

弥生土器甕

甕は大きく、タタキ目整形、調整をしている甕Aと、ハケ目調整の甕Bとに分類し、甕Aは大きさから甕A-Iと甕A-IIにさらに分ける。

甕A-I (227, 240, 256, 259, 271, 283, 305, 318, 319, 2087)(図58・60・61, PL69・71・72)

(227) の場合は水平の平行タタキ目が体部上半に残っているが下半はタタキ目をナデで消している。上半部のタタキ目もその上を軽くナデ調整を行っている。体部内面上半には粘土紐の段が顕著であるが、軽くナデている。底部は平底の安定したものである。口径11.6cm、器高13.7cmである。

甕A-II (223, 226, 231, 237, 242, 244, 251, 264, 274, 284, 291, 294, 297)(図58・59・60・61, PL69・70・71)

口径が18cm前後の土器で、(251, 226) は口唇部にヘラキザミ目が施されている。タタキ目の、多くの甕は頸部下左下がりであるのが主流で、(226) は、頸部下平行タタキ目の上を左下がりのタタキ目が重なっている場合がある。(237) は頸部下は左下がりのタタキ目で、体部下半は水平のタタキ日の例である。

甕B (224, 281, 303, 317, 333, 2011)(図58・60・61, PL69・70・72)

(317) は口唇部がややつまみ上げられている。外面体部上部に左下がりの細かいタタキ目がめぐり、その上を右下がりのハケ目調整が丁寧になされている。内面はヘラケズリが水平に、そして右上がりに行われている器肉の非常にうすい土器である。(303) は外面が剥落しているが、内面にヘラケズリがみられ、(281) は外面に局部的に比較的荒いハケ目調整が不定方向になされている。土器の最大幅は体部中央にあり、19.6である。(2011) の外

面は右下がりの細いハケ目調整がなされ、口縁部も水平なハケ目調整が顕著にみられる土器である。

弥生土器鉢（図58・62, PL72・73）

(258, 308) は直口の小型の鉢で、(258) の外面は左下がりのタタキ目、(308) は水平のタタキ目を残している。(235) と (313) は頸部のくびれがあるので、(235) は口径より器高が低く、(313) は口径より器高の高い土器である。(313) は外面体部下半に左下がりのタタキ目が残っている。(235) はタタキ目がみられずナデて仕上げている。

弥生土器底部

底部は壺、甕、鉢があり、明確に壺の底部とするものは大型壺の底部で、ミガキがなされているものを主体として、あるいはタタキ目のあるものである。

壺底部 (71, 72, 225, 246, 249, 267, 269, 288, 302, 304, 307, 310, 312, 321) (図58・60・62)

これらの底部が比較的壺の底部と認められる一群のもので底部の形状は多様である。

甕、鉢の底部 (232, 241, 243, 247, 248, 250, 252, 254, 265, 268, 277, 285, 286, 287, 289, 290, 293, 296, 298, 299, 300, 301, 2086) (図58, 60, 62)

基本的にタタキ目が外面にみられるもので、タタキ目は左下がり方向のものが多い。

小型器台（図58・59・62, PL70）

小型丸底壺とセットになる器台である。器形としては (257) の形態、(260, 275, 335) の形態、(315) の形態と三タイプがみられる。(260) 等の形態は杯部と脚部の中実部が (257) の形態より顕著なものであり、裾部の広く広がるものは (275, 335) の形態になり、狭くおさまるものは (315) の形態である。いずれも外面のヘラミガキが丁寧になされている。

弥生土器高杯 (239, 245, 253, 255, 262, 263, 266, 278, 282, 292, 295, 314) (図58・62, PL70・72)

中実の脚部は (245) だけで、脚部内面にしばり目のあるものが (239, 263, 262, 266) などがある。(314, 255) は外面杯部はタテミガキ、水平ミガキ、タテミガキ、内面は水平ミガキ、タテミガキと丁寧にミガキがなされている。(314) で口径は19cmである。

弥生土器甌（図59・62, PL70・71）

(279) は鉢型の形態で、底に一孔の貫通する円孔が穿たれている。(320) は丸底の中心に径2cmの円孔を通し、周囲に径1cm前後の円孔を四孔程度配していたと考えられる。

S E 43と連続する溝状遺構で、北東側の一方は三段掘りで南西は一段である。この溝は南へのびて、発掘調査区外に及んでいる。全体の幅は、現存する壁で4.2mで、S E 43に接する部分は2である。

三段掘りの部分は、一段目の深さ10cm、一段目と二段目は17cm、二段目と底は50cmで北東の肩から77cm、南西肩から40cmである。

出土遺物（図5-6）

いずれも弥生式土器である。

弥生土器甕（211，222）

(211) は底部、(222) は口縁部である。(211) 外面は、かすかにタタキ目を残し、内面はナデている。底径3.8cmである。(222) は、口径16cmで、頸部は比較的くびれがはっきりしている。外面頸部下は左下がりのタタキ目、内面は板状工具によるナデである。口縁部内外面共にヨコナデである。

弥生土器高杯（208，209，210）

(208, 209, 210) は高杯の脚部である。いずれも中空で、(208, 210) はヘラミガキがなされ、(208) は、胎土も良くミガキが丁寧である。(209) の脚部から裾部にはヘラケズリがされている。

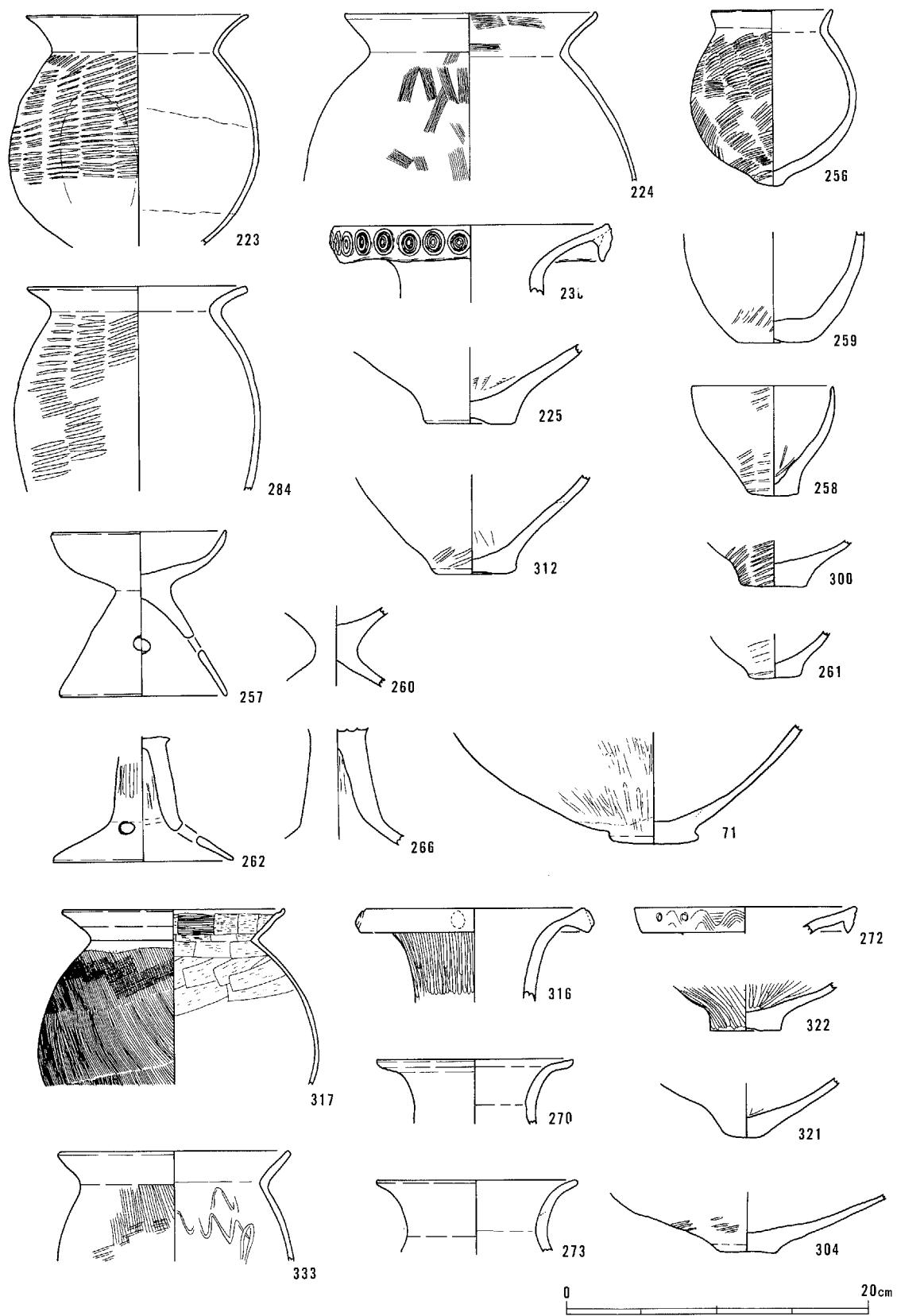


図58 SD45

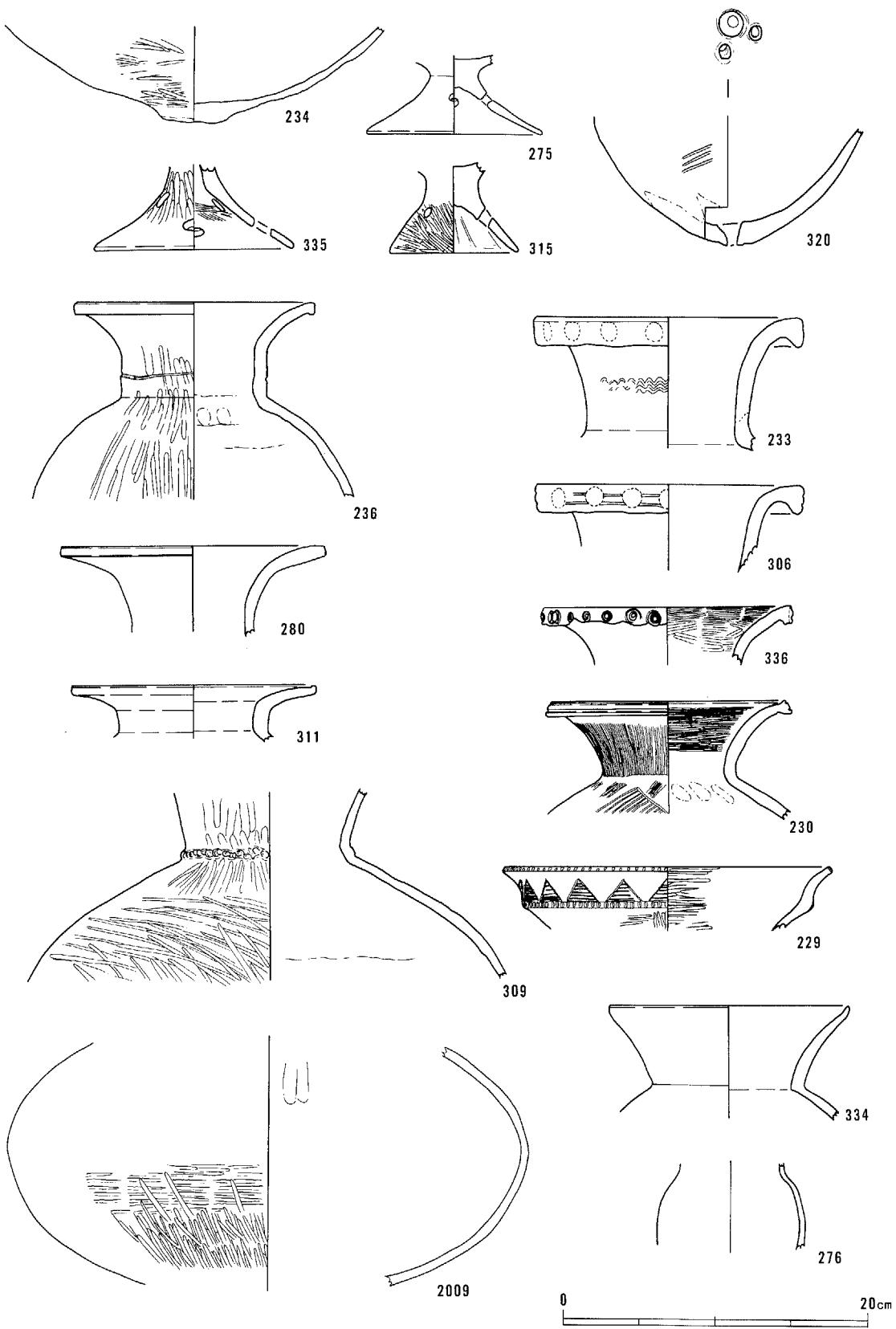


図59 SD45

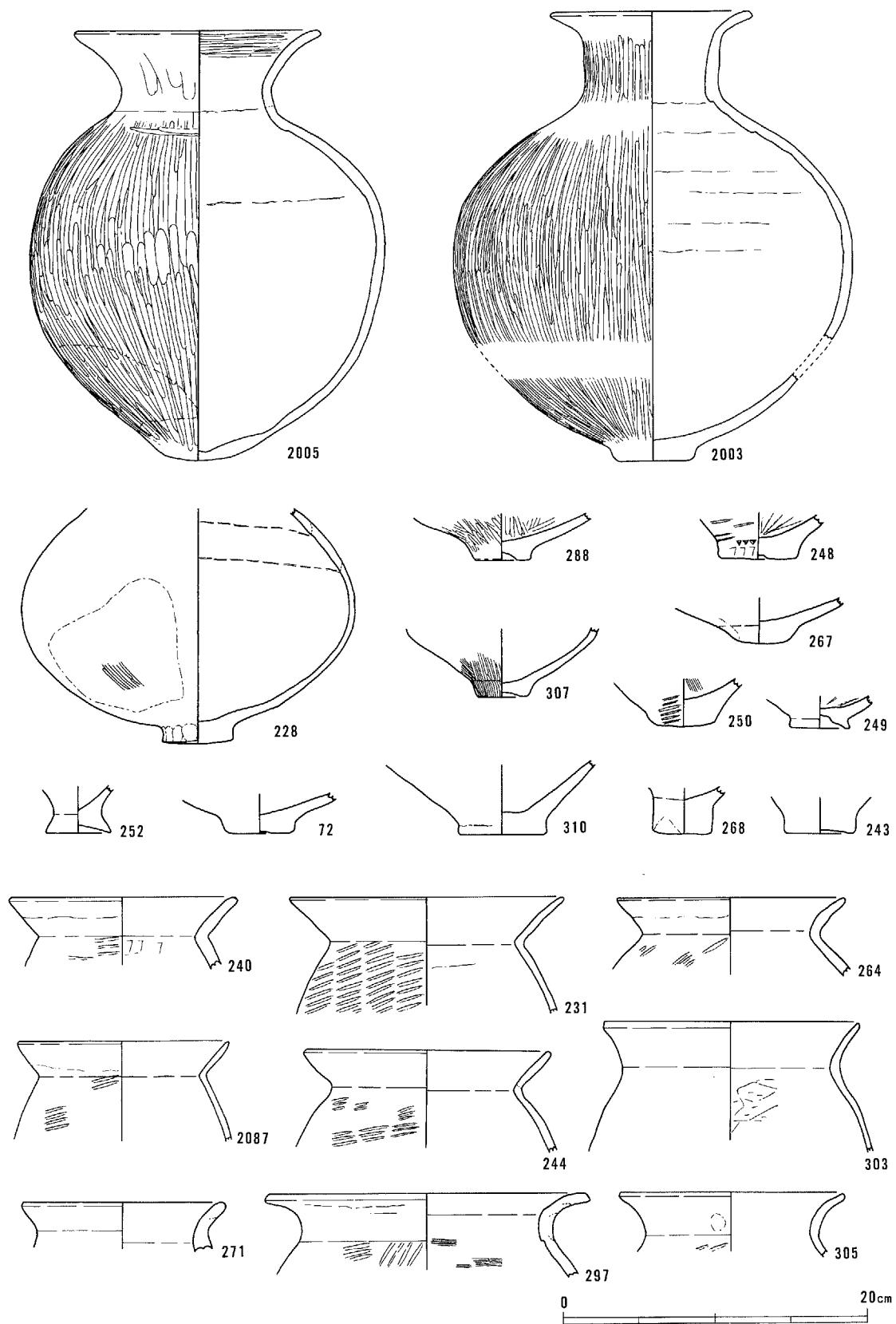


図60 SD45

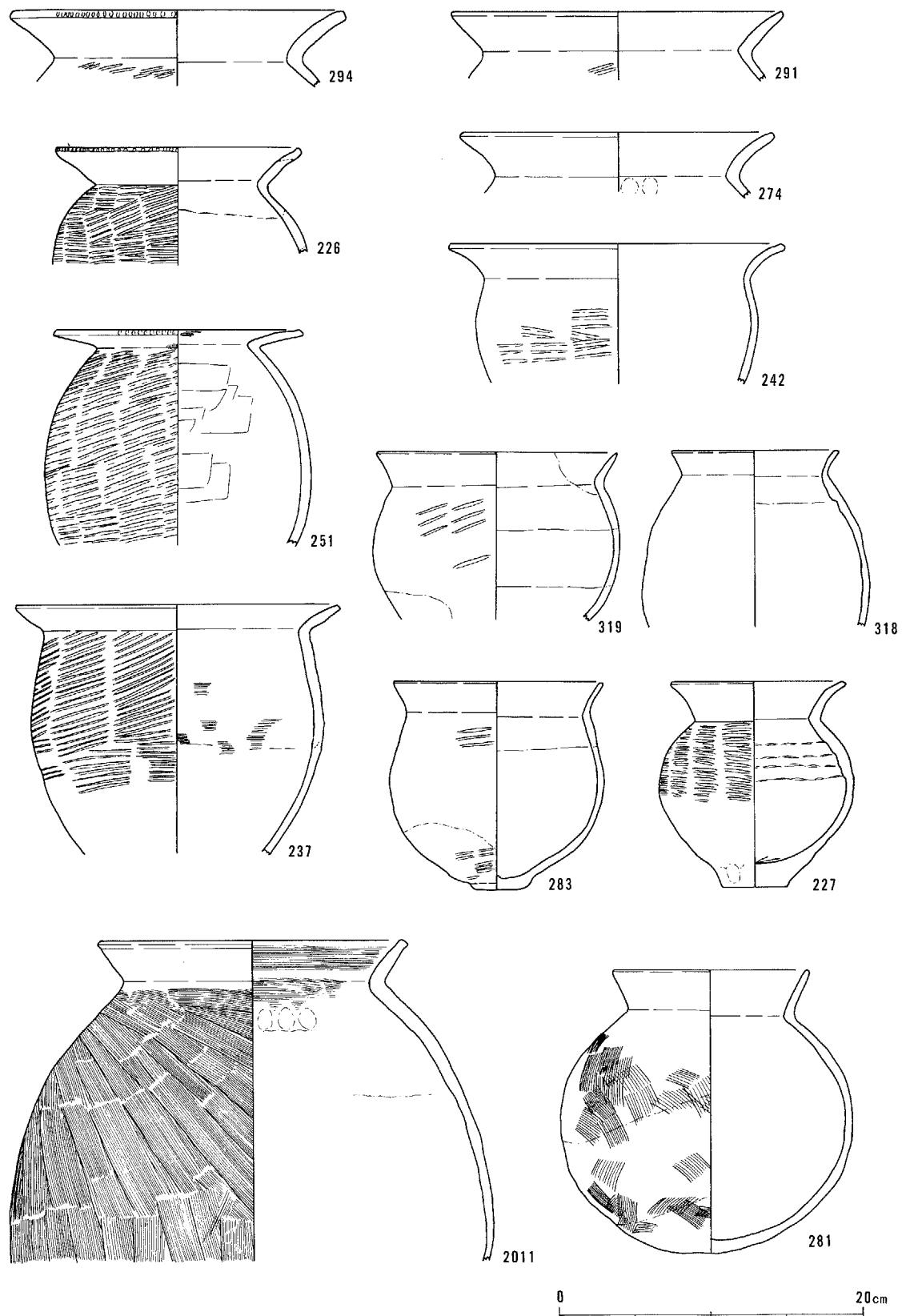


図61 SD45

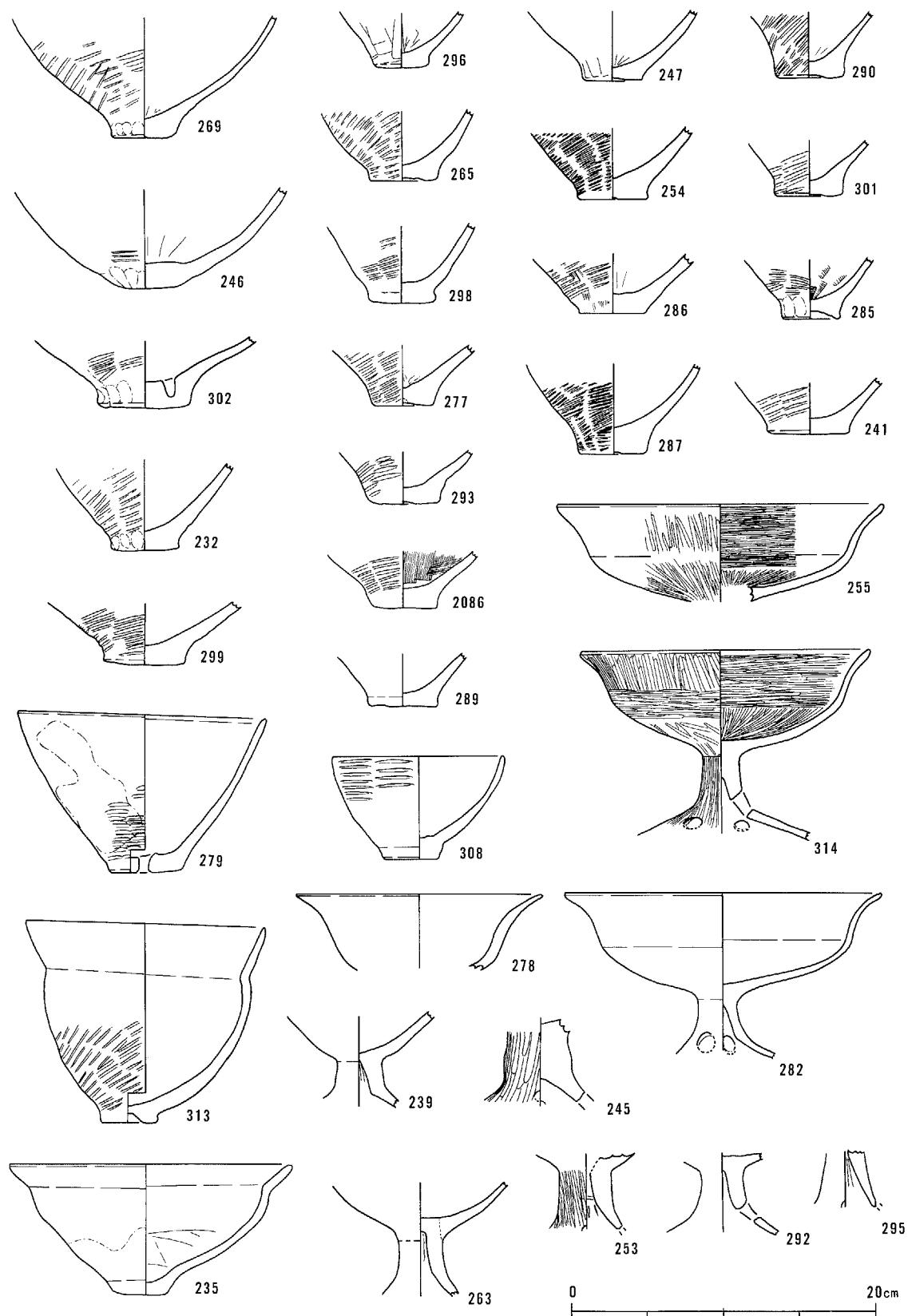


図62 SD45

I区・II区の包含層遺物

包含層の遺物は、調査地区と調査年次と調査地区割の煩雑によって、注記だけでは明確な地区割りによる分別は困難であったことにより、ここでは、I区、II区の包含層出土遺物をまとめてあつかった。

縄文土器 (85, 1117, 1306)(図63, PL92)

(85) は深鉢の尖底土器である。外面は赤褐色で右下がりのケズリがなされ、内面は丁寧なナデで平滑であり黒色を呈している。底部は2.5cmと比較的厚い作りである。

(1117) は平底であるが、やや凹んでいる。底部径5.8cmである。内外面共に二次火によって表面が著しく剥落している。外面は褐色、内面は黒灰色を呈している。

(1306) は、深鉢の口縁部であり、口縁部外面に貼付突帯が付されている。口唇部、突帯には、鋭い工具によるキザミ目が施されている。外面突帯下は、ナデによって平滑化され、磨いている程に思われる。内面も平滑で丁寧なナデ仕上げである。

弥生土器甕 (531)(図64)

口径13cmの口縁部が立ち上がっている土器である。内外面は剥落し、調整は不明であり、暗褐色の色調である。胎土に片岩を含んでいる。

土錘 (554, 556, 557, 559, 561, 562, 564, 566, 568, 571, 580, 581, 586, 590~601)(図63)

この包含層において検出された土錘であるが、形態上二種に分けられる。一種は円筒状の中心を縦に貫通する円孔のものと、円筒状の両端に穿孔している双孔の(556)の一例である。前者はさらに(592)を例とするもの、(562)を例とするもの、(571)を例とするもの、(590)を例とする胴の中間が太くなる例、比較的大きめながら円孔が小さい(571)の例、大きめで円孔が大きい(590)の例である。

高杯 (518, 522, 538, 546)

土師器高杯 (546)(図64)

高杯脚部、中空で脚部内面には成形時のしづり目がタテ方向にみられる。杯部と脚部の境に沈線が一条施されている。内外面ナデている。

須恵器高杯 (518, 522, 538)(図64, PL73)

(522) は長脚二段透しの高杯の脚部である。外面は全体にヨコ方向の一一周するカキ目がなされ、脚部と裾部の境には二条のミガキによる凹線文がなされている。脚部内面には、タテ方向のシボリ目がみられ、脚部下半から裾部にはヨコナデがされている。(518) と (538) は類似した形態の高杯である。(538) の底径は8.6cm、脚裾高が4.2cmで内外面はヨコナデ仕上げである。

土師器把手 (495, 508) (図64)

(508) は、体部との接合部で、厚さ2.8cmで、先端部分は上方へ反る。全体に肉厚にできている。

(495) は、体部との接合部の厚さ1.2cmで先端部分は上に反っている。(508) に比して偏平な作りである。いずれも褐色の色調である。

須恵器壺 (513, 514, 521, 523, 2012, 2019) (図64, PL73)

(521) は、口径8.6cmの瓶子の口縁部である。口唇部は、つまみあげられている。内外面はヨコナデで、自然釉が両面に及んでいる。

(513, 523) は口縁部、口縁部から体部上半が残存するもので、(513) は、口縁部外面が肥厚されている。口径18.6cmで、外面の頸部はヨコナデ、体部は格子目タタキの上を一定間隔をおいて水平方向のカキ目で調整されている。内面口縁部はヨコナデ、頸部下は青海波のあて具痕がみられる。(523) はいわゆる広口壺で、口唇部は内面に斜傾している。頸部下外面には四条以上の細い沈線が施されている。口縁部内外面はヨコナデで、自然釉がうすくかかっている。

(2012, 2019) は口縁部、底部を欠く体部片である。(2012) の外面頸部下は斜格子目タタキで、内面のあて具痕はナデで消している。(2019) の調整は(513) に似ている。外面はタテ方向のタタキ目の上を一定間隔でカキ目調整を行っている。内面はあて具の青海波文が重なってみられる。

(514) は底部片で底部復元径10.8cmで、外方へ張っている貼付高台でもって成形されている。外面の高台との接合部分の体部にはヘラケズリが残っており、他の内外面はナデ仕上げである。

土師器椀 (547) (図65)

口径15cm、器高3.3cmで内外面はナデている。底部外面は指頭による凹凸が顕著で、内面は平滑な仕上げである。

須恵器杯蓋

図化するにあたって蓋と身の判断に迷うものもあり、一応それぞれに蓋と身に分けているが、あくまでも便宜上、感覚的なものである。本来ならば、一定の基準を設定して分けるべきであることはいうまでもないが御了解願いたい。

須恵器杯蓋 (492, 511, 512, 524, 525, 537, 542, 543, 544) (図65, PL74)

杯蓋は、つまみの無い蓋 (542, 543, 544) と、つまみの形態が異なる (512, 537) と (511, 524) に分けられ、口縁部片の (492, 525) は偏平なつまみの上器であろうことから4分類で

きる。

(542, 543, 544) は、外面天井部にケズリがなされ、他の内外面はヨコナデで、それぞれその形態は異なっている。(543) は口径9.7cm、器高3.6cmで、口径に比して器高が高い。(544) は、口縁部から体部、天井部の作りにおいて口縁部の立ち上がり幅が広く、体部幅が狭く、口縁部から天井部にかけて成形する。

(512) と (537) は、口縁部に受け部のある蓋で、受け部の形態は異なっている。

(537) は、口縁部より受け部が短く、(512) の口縁部は受け部が長く伸びている。

(511) と (524) は、つまみが宝珠形で、(524) は、口縁部はより退化して、受け部の伸長が顕著である。(511) の天井部つまみ周辺にはヘラケズリが残り、(524) は内外面全体ナデである。

(492) と (525) は受け部の無い蓋で、両者の復元口径は17cm前後で、残存部分の内外面はナデ仕上げである。

須恵器杯身 (519, 520, 532, 533, 534, 535, 536, 539, 540, 541, 545) (図65, PL74)

杯身は、口縁部の形態、口径と器高の比率より、高台の有無より四種に分ける。I種は10cm以内の口径に対し器高が4cm前後あるもので、(536, 539) がこれにあたる。II種は口縁部に受け部が無く口径が10cm内外のもので、(535, 540, 541) である。III種は口縁部に受け部があるので(519, 532, 533, 545) がある。IV種は底部に貼付高台の身で(520, 534) があるが、(534) は鉢の底部の可能性が大きい。

I種の(536) は、口径8.9cm、器高4cmで、内外面ナデ仕上げで、外面口縁部から体部にはうすい自然釉がかかっている。(539) は、口径8.4cm、器高4cmで、口縁部から底部にかけて段をもって成形されている。外面底部はヘラケズリ、他の内外面はナデ仕上げで、内面にはうすい自然釉が口縁部から底内にいたっている。

II種は(535, 540, 541) で、(541) は口径11.6cm、器高3.1cmで、内外面はヨコナデである。(540) は口径9.3cm、器高3cm、(535) は口径10.9cm、器高3.4cmで、いずれも内外面ヨコナデで、(535) の外面口縁部から底部にうすい自然釉がかかっている。

III種は(519, 532, 533, 545) で、いずれも口径10cm前後、器高3cm前後である。(532, 545) の外面口縁部から底部にかけてはうすい自然釉がみられ、(545) は外面体部から底部にヘラ記号がなされ、底部はヘラケズリを残し、他の土器はナデ仕上げである。

IV種は貼付高台の杯身である。(520) は口径13cm、器高3.3cmで、内外面はヨコナデ、ナデ仕上げである。(534) は鉢の底部の可能性のあるもので、高台径は7.3cmで、肉厚は5mmである。内外面はヨコナデ、ナデ仕上げである。

黒色土器（550, 551）(図65)

(550) は口径13.6cm、残存器高6.5cmで、外面明褐色で、内面は黒色で、水平なミガキ暗文は幾重にも重ねてなされている。口縁部は端反りになっている。(551) は外面褐色、内面は黒色の色調である。高台径6.8cmで、この部分の限りでは内面にミガキ暗文はみられない。

土師器高台皿（506）(図65, PL73)

口径12cm、器高4.1cmで高い高台の土器である。皿部内面は平滑であるが、外面は粘土紐に沿った凹凸のままナデている。他の内外面もナデ仕上げである。

瓦器小皿（497）(図65)

口径7.8cm、器高1.5cmで、外面底部は指頭圧痕の上をナデ、他の内外面はヨコナデである。

土師器小皿（164, 494, 499, 552）(図65)

(164) は、口径9cm、器高1.4cm、(494) は口径10cm、器高1.5cm、(499) は口径7.6cm、器高1.5cm、(552) は、口径10.9cm、器高2.5cmで、(552) は器高が他のものより1cm程高い。これらは底部が指頭圧痕の上をナデ、他の部分はヨコナデ、ナデ仕上げである。いずれも橙色の色調である。

瓦器椀（496, 516, 548, 549）(図65, PL73)

(496) は土器底部で貼付高台は断面方形で、高台径は7.2cmであり、他の器種の可能性がある。底部外面高台内は指頭圧痕の上をナデしている。(516) は、口径14.5cm、残存器高4cmで、外面はヨコナデ、内面は細い工具による水平のミガキ暗文が幾重にも重ねて施されている。内外面は黒灰色を呈している。(548, 549) は、口径16cmで高台は復元できない。(548) は、外面体部に一段の指頭圧痕があり、粘土紐と指頭押捺による成形時の凹凸がみられ、内面は平滑化されている。内外面は磨滅している。内外面の色調は灰色である。(549) の内面は口縁部に浅い沈線が一条めぐり、体部は細いミガキ暗文が、水平に重ねてなされているが、底部には及んでいない。外面には二段の指頭圧痕がみられる。

青磁椀（526, 530）(図65)

(526) は、浅い杯部の中国製の椀の破片である。他に、口縁部外面に雷文のある青磁椀、明代の青磁椀片が出土している。(530) は釉色がアメ色で、内面には一条の沈線、沈線下はクシ烈点文のいわゆる珠光青磁である。外面にはクシによるカキ目が斜め方向に部分的にみられる。

施釉陶器（527, 528, 529）(図65)

(527) は口径21cmで、内外面に非常に濃い緑色の釉を施している。口縁部は端反りで、口縁部下は棒状工具による垂直方向の削り文様がなされている。(528) は底径7.8cmの底部の角取りをしている。外面底部、内面は露胎で、体部は白色の釉がかけられている。非常にシャー

プな成形である。(529) はいわゆる唐津物で、ケズリ出し高台である。外面は露胎で、赤茶色を呈し、内面は透明釉がかけられ茶色を呈している。

染付 (500, 517)(図65)

(500) の外面は草花文を文字文で六分割している。内面底部に一条の圈線内に漢字をまねた文字文様が四字描かれている。畳付は釉のふきとりがなされ、それ以外は透明釉がかけられている。(517) は大皿で、胎土は非常に荒い質のものである。胎土断面には呉須の浸みこみの部分がある。畳付は釉のふき取りがなされ、高台内にも透明釉がなされている。

石器類 (631, 633, 634, 642, 1272)(図66)

サヌカイト剝片 (633, 1272)

(633) はタテ剥ぎの剝片で断面三角形を呈する。全体に風化による白色を呈しているが、新しい時期のリタッチらしきものが縁辺にみられるが、剝片の利用であろうか、リタッチの部分は黒色を呈している。(1272) は長軸2.5cm、短軸1.9cm、厚さ0.5cmの剝片で、全体に風化によって白っぽい。

砥石 (634, 642)

(634, 642) は共に素材は砂岩である。(634) は、不整形なまま利用しているもので、長軸面の三面が作業面で、他の一面は磨きに利用していない。(642) は長さ5.7cm、幅3cm、厚さ2cm~3.5cmの断面四角形で、四面を作業面としている。

不明石器 (631)

素材は砂岩であるが、磨いて平滑な面が対面する二面にみられるが、割面が二面で、他の一面は再利用によってか、やや平滑化されている。

金属器 (627, 640)(図63)

キセル (627)

煙管部分で、長さ4.6cmの銅製品である。葉をつめる部分は一部欠けている。銅の厚さは0.9cmである。

刀子 (640)

現存長6.2cmで、把部分先端部が欠けている。刃部に木質がみられ、木鞘であろう。鉄身は断面三角形を呈し、最大厚は0.4cm、身幅0.8cmである。

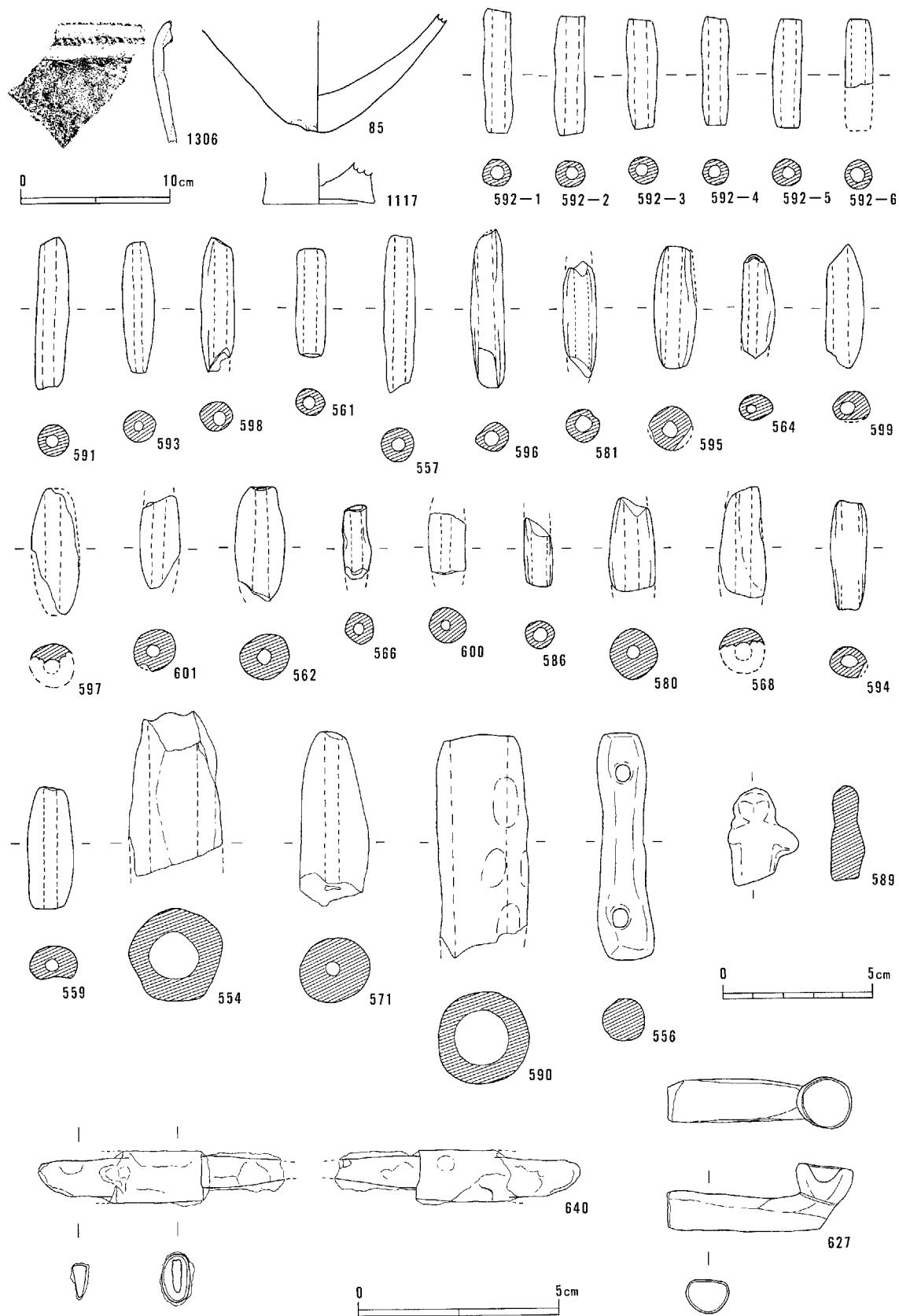


図63 I・II区包含層

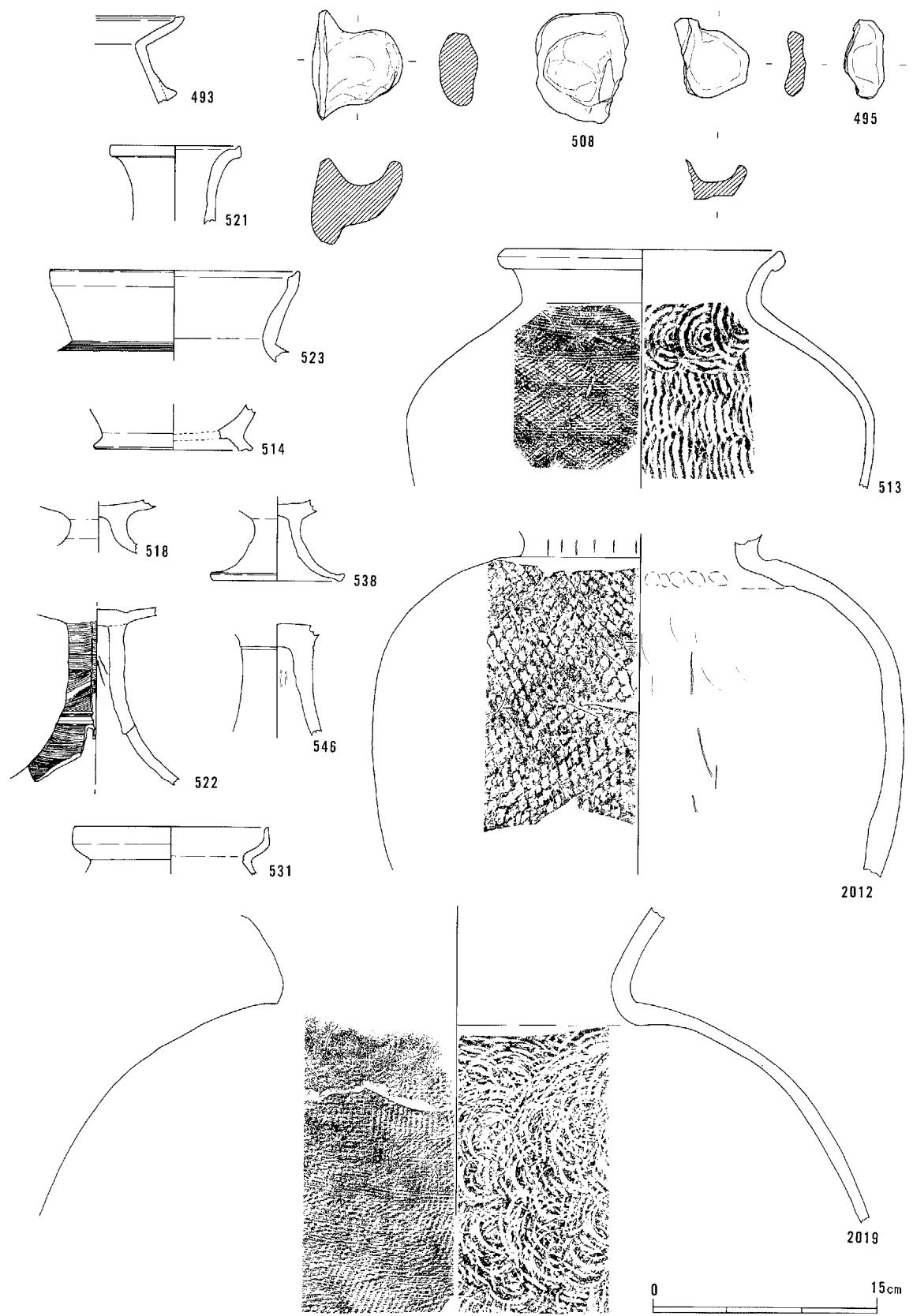


図64 I・II区包含層

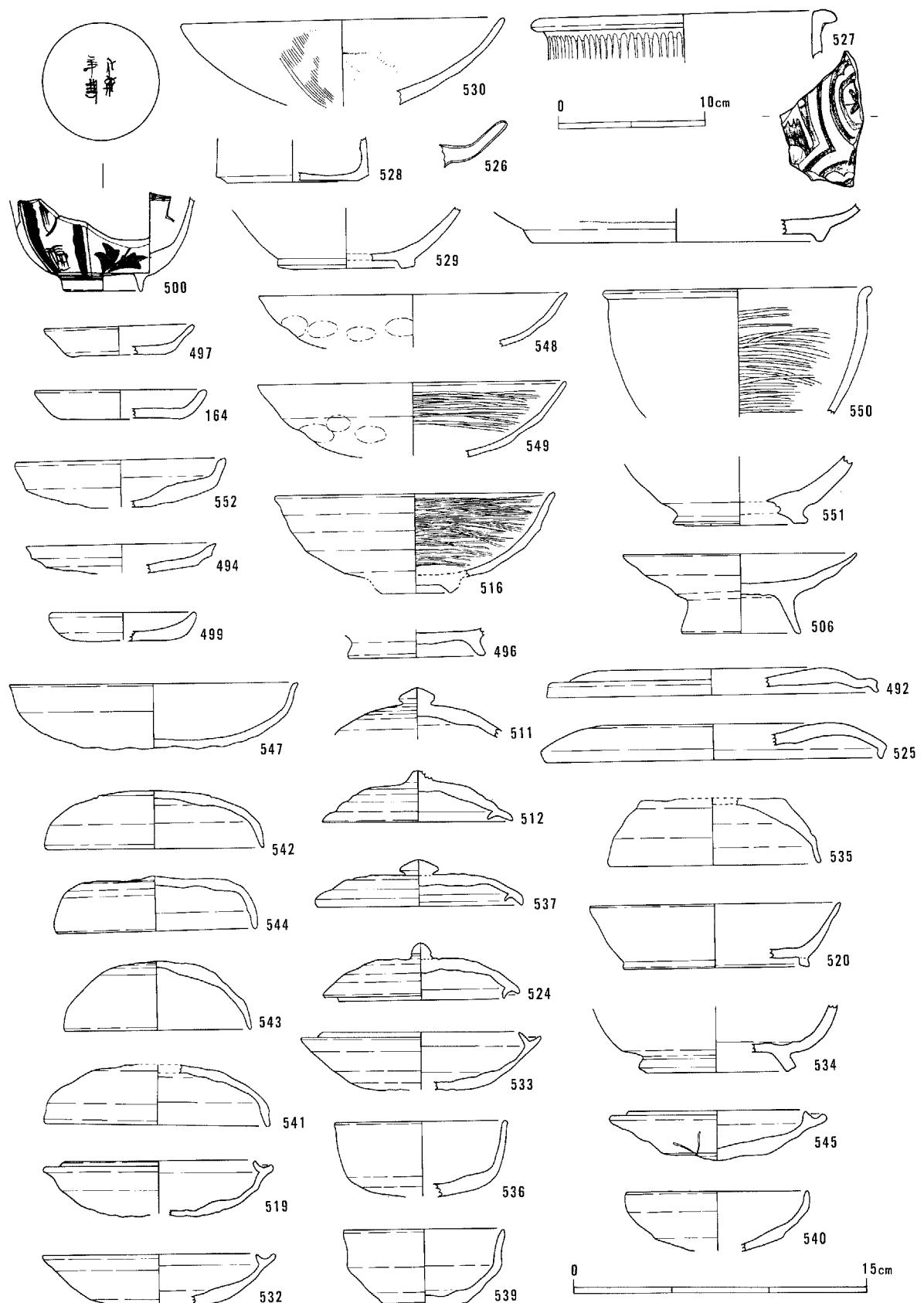


図65 I・II区包含層

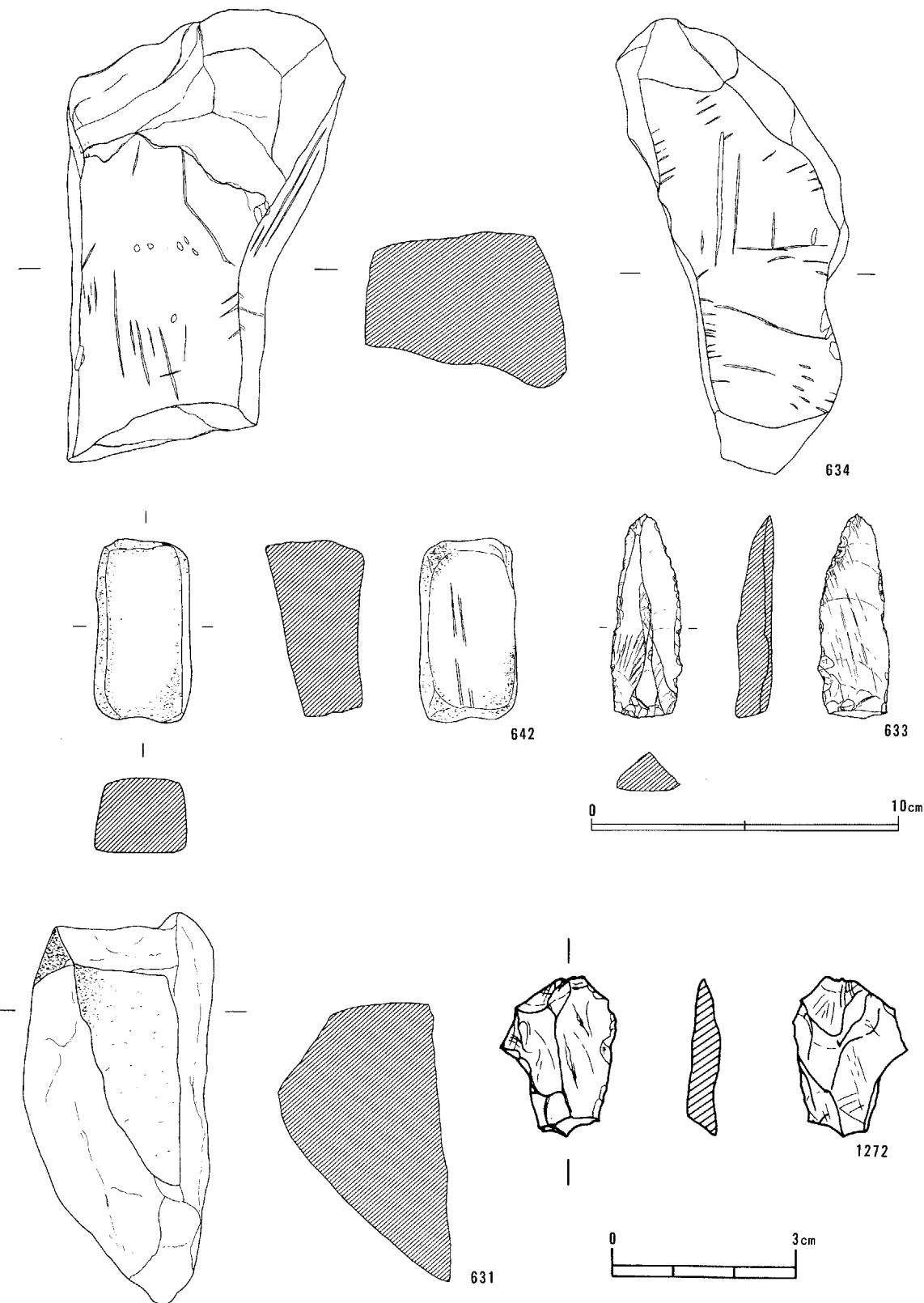


図66 I・II区包含層

II区下面遺構図

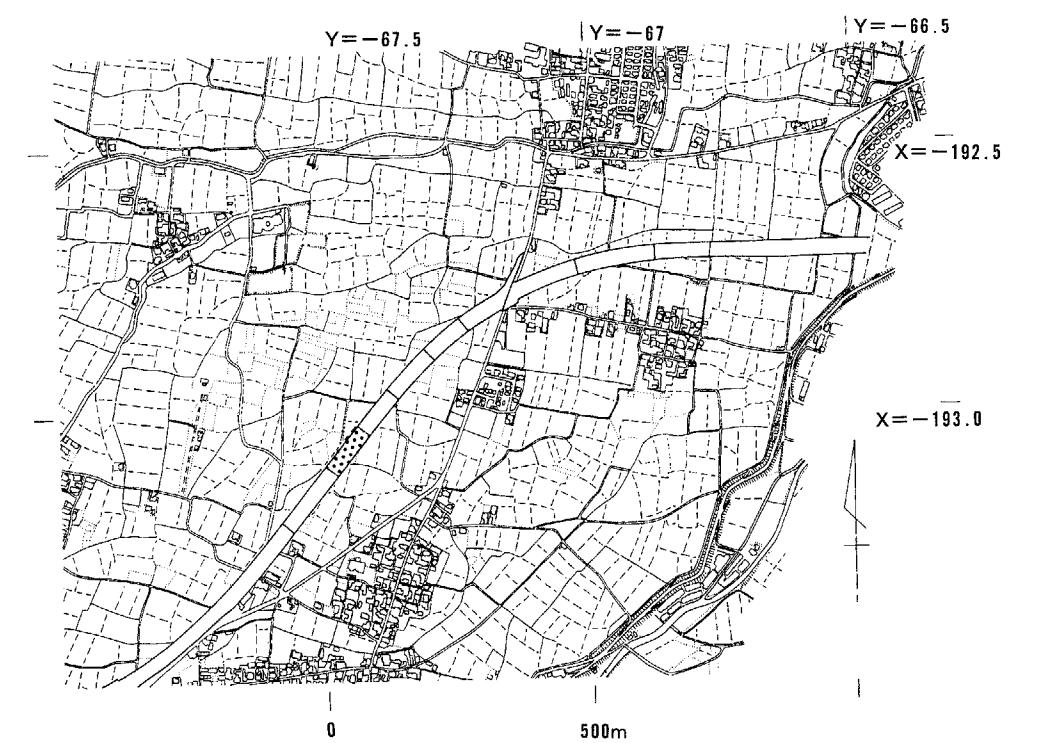
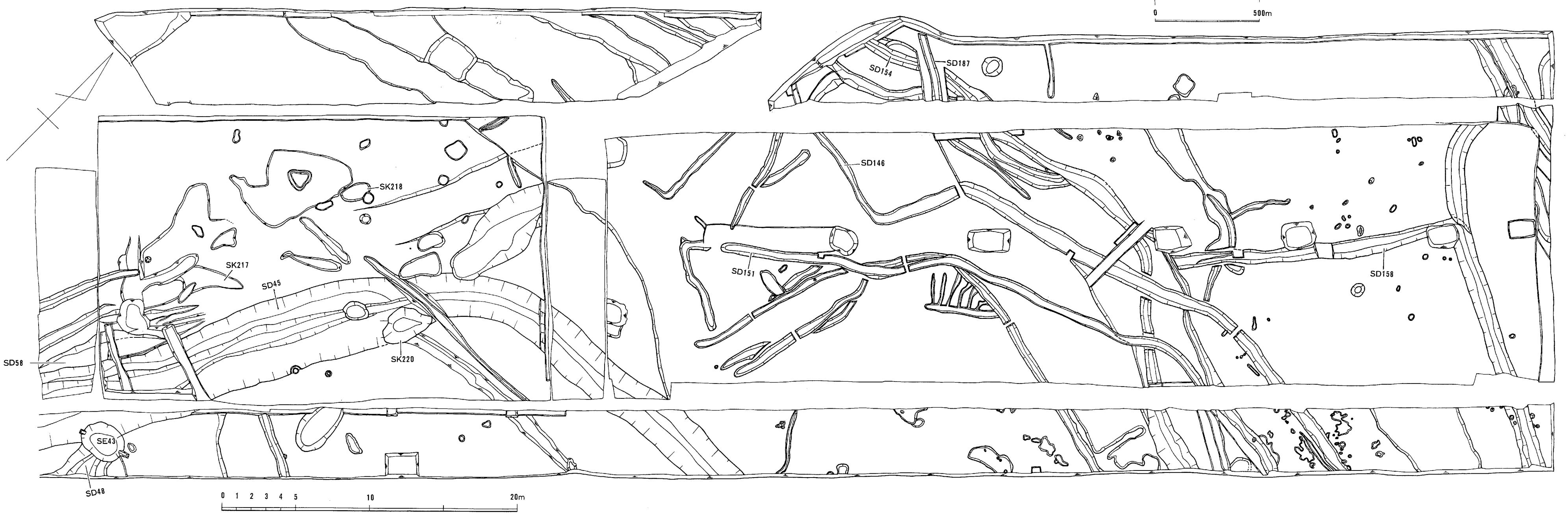


図67

III区の遺構と遺物

この地区は遺物としては、縄文式土器、弥生時代石包丁、古墳時代終末の土器、近世の瓦を出土と、この地域は自然環境において安定した微高地であったことがうかがえる。

S B 遺構

S B 4 1 (図 6 8, PL 1 8)

2間×2間の掘立柱建物と、1間×1間の建物が重なっているが、重なる柱根痕によって2間×2間の建物が先行し、後に1間×1間の建物が建造されている。

1間×1間の建物は1間は基本的に200cmであるが、一辺の対応する柱間が170cmのものが1間ある。

2間×2間の建物は一辺が200cmで他辺が380cmであり、1間の柱間の長さの違いによって、幅広の空間と、幅狭の空間の間取りの建物である。

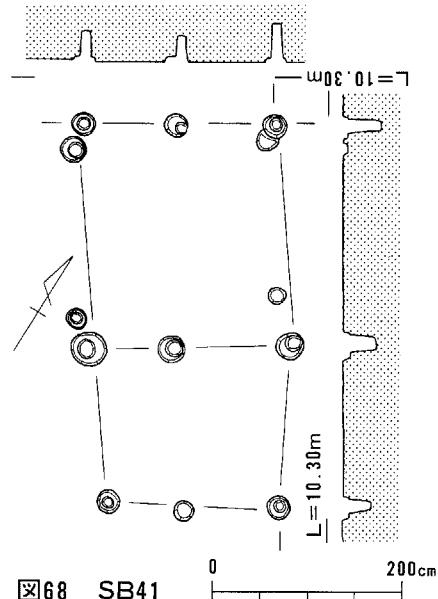


図68 SB41

S D 遺構

S D 2 3 7 (図 6 9, PL 1 8 · 1 9)

幅2m、深さ40cmでSD238に平行している遺構である。この東西流の溝のたぐいは極めて人工溝の可能性が強く、この地区において東西流の溝が中心をなす。紹介遺物の他に製塩土器片が多数出土している。

出土遺物

土師器碗 (419, 422, 423, 431, 433) (図 7 0, PL 7 5)

ここでは、遺物の出土状況が、一定時期でまとめることができない。このため形態、法量上明確な数量で分類できないので、一定通念の中で碗をⅢと分類しておく

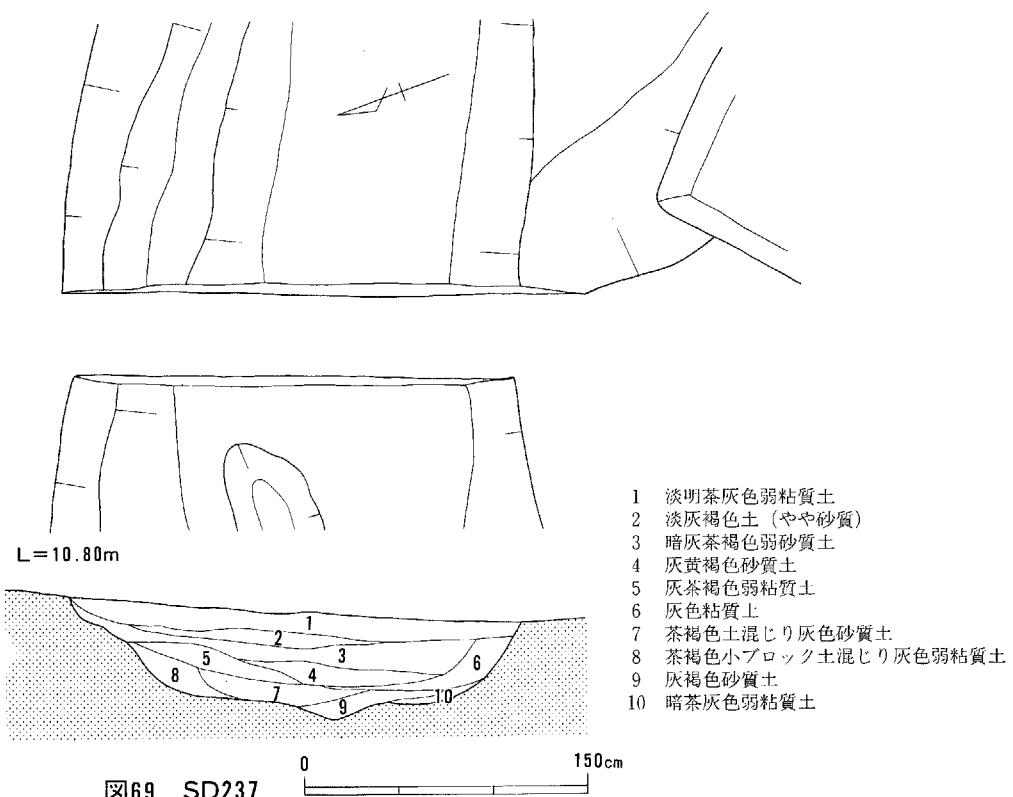
(423) は、口径15cm、器高3.5cmの褐色を呈する。内面と外面体部はヨコナデであるが、外面底部にはヘラケズリがされている。

(419) は、口径14.5cm、器高3.9cmの貼付高台の土器である。内外面共にナデて仕上げている。

(422) は口径14.5cm、器高4.7cmで、やや肉厚な土器で高台も厚い貼付高台である。内面には斜め方向のミガキ暗文がなされている。

(431) は内外面共に磨滅している器肉のうすい土器で、口縁部から底部に向かって角度がある。

(433) は外面に粘土紐の凹凸をナデているだけで、整形としての平滑化はなされていない。



しかし、内面は平滑にナデて仕上げられている。いずれも明るい褐色の土器である。

土師器皿（418, 420, 425, 426, 432）(図70, PL75)

(418) は、口径17cm、器高2.6cmで、口縁部は外反することなく納まっている。内外面共にナデて器面の調整をしている。

(420) は、口径18.3cm、器高2.7cmで、口縁部がやや外反し、内面に凹線状のゆるやかな凹がめぐっている。内外面共にナデて仕上げている。

(425) は、口径17cm、器高が2.3cmで、口縁部は外反することなくおさまっている。内外面共にナデて仕上げられている。

(426) は、口径19cm、器高3.6cmで、口縁部は外反し、内面に凹線がめぐる。内外面共にナデて仕上げているが、外面底部は整形時の指頭圧痕が所々に残っている。

(432) は、口径16.4cm、器高はほぼ2.7cmに復元できる。口縁部は外反し、細い凹線状の凹線帶がめぐっている。内外面共に調整は不明である。

土師器高杯 (421)(図70, PL75)

口径21cm、器高6cmで、杯部内面には放射線状一段暗文ミガキがなされている。杯部外面は水平なやはり細いミガキがみられる。脚部は七面取りの脚柱をなす。裾外面はヨコナデで調整されている。

土師器鉢 (427)(図71)

口縁部を欠いているが、貼付高台径は13cmに復元できる。器壁外面ケズリの後にナデであるか、内面、高台はヨコナデ仕上げである。

土師器甕 (428, 429, 430, 434, 435)(図70)

(428, 435) は小型の甕である。(428) の口縁部端面は丸くおさめられ、口縁部はヨコナデである。体部外面は頸部から太いハケ目調整がタテ方向になされている。

(435) は、口縁部の端面がきちんと整形されヨコナデ仕上げである。内部頸部はヨコ方向にケズリで成形されている。外面体部は頸部からタテ方向に太いハケ目調整がみられる。

(429, 430, 434) はいずれも大型の甕である。(430) は、口径29.5cmで、口縁部端面は丸くおさめられ、外面の頸部以下はタテ方向に1cm3本という荒いハケで調整されている。(429) は口径29.6cmに復元できる。口縁部端部は、ややつまみあげがみられる。口縁部がやや長めで頸部との境がはっきりしている。内外面共にナデ仕上げである。(434) は、口縁径27.5cmに復元でき、口縁部端部はつまみ上げで成形されている。内面頸部下にはヨコハケ調整がみられる。

黒色土器 (424)(図70)

黒色土器の底部破片である。内面は黒色で、外面は褐色である。内面にはミガキ暗文がみられる。

須恵器 (341, 401, 402, 403, 406, , 404, 406, 410, 411, 415, 417)(図70・71, PL75)

杯身 (403, 406, 410, 411, 415, 417)

(410) は蓋の可能性もある。口径11.8cm、器高3.8cmで内面底部に同心円文を残している。

(403) は口径12.4cm、器高3.5cmで外面底部はヘラケズリである。

(401) (406) (415) (417) は高台のある身である。(406) は口径19.4cm、器高5.2cmで、内外面はナデ仕上げである。

壺 (341, 405, 407, 409, 412, 413, 414, 416, 2017)

いづれも体部片か、体部下半部片で、底部に高台のあるものが多く、体部片は肩部と体部の堀に稜のもつものである。(409) の最大幅は23cmである。

平瓶 (408)

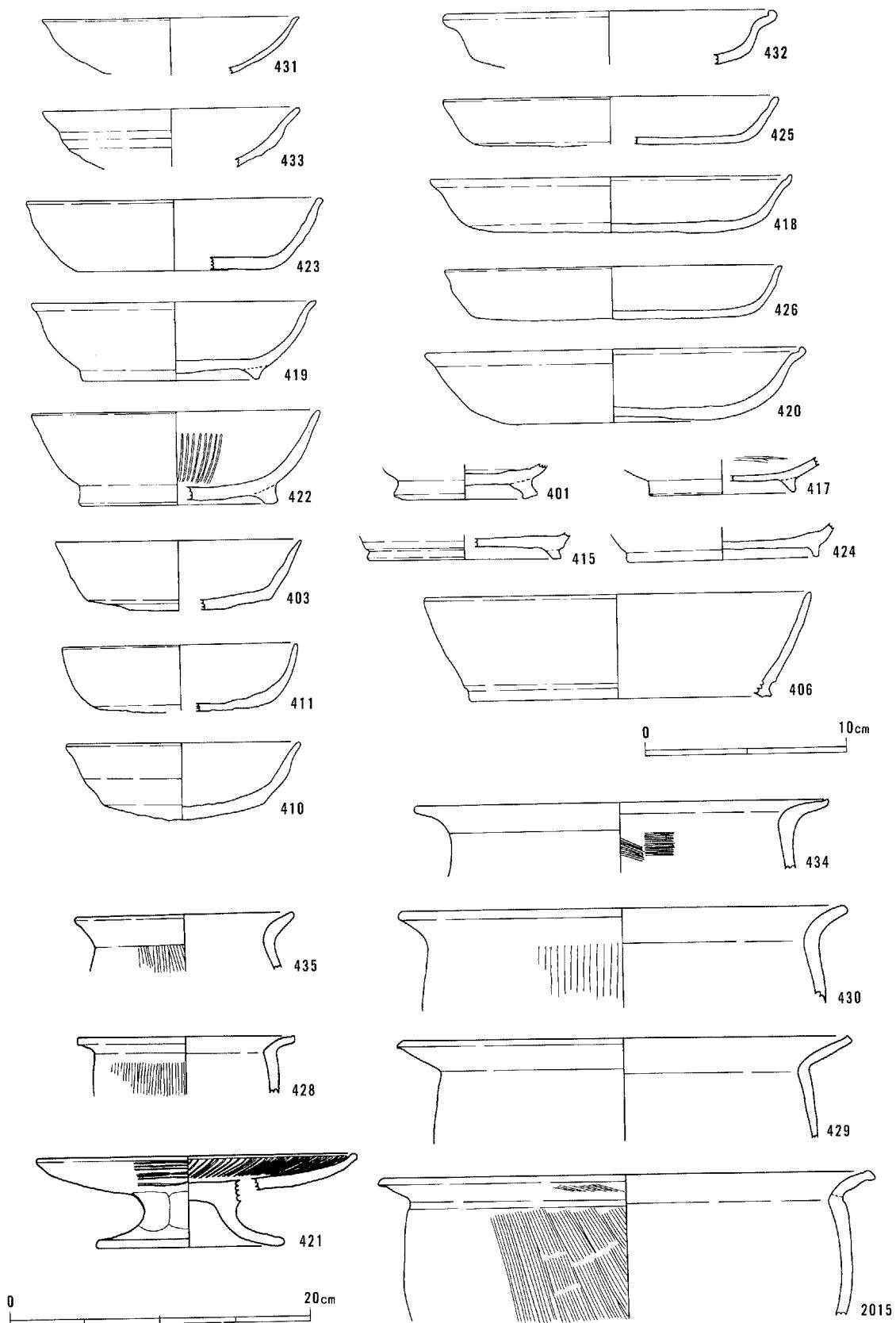


図70 SD237

底部に高台をもつ。肩部から体部に一条の凹線がめぐり、外面には自然釉がみられる。

高杯 (402)

脚裾部で脚部の上部に浅い曖昧な細い凹線が四条めぐっている。裾部端の径は9.2cmで、残存する脚部の器高は6.3cmである。

鉄釘 (628)

断面四角形をもつする釘で、頭部と先端部を欠いている。現存の長さ4.6cmで、最大の辺の長さは、5mm×7mmである。

サヌカイト片 (1273, 1280)

いずれも剝片で、顯著な二次加工、そのものの意図的剝離はみられない。

SD238 (図72, PL20・21)

SD237に平行する東西流の溝で、幅は150~200cm、深さ45~70cmで、西方が上流で、東方が下流である。この溝も製塙土器が出土している。この溝では他に大量の土器が出土しているので、ある程度まとめて記述する。

土師器杯と皿について

この溝で出土している土師器の杯と皿について、法量で便宜上分別して説明する方がより理解しやすいと考える。この場合両者を法量で比較するために、口径、器高の相対比較で適当な数値で分けることとする。

杯は口径14cm以内で、器高が3cm以上のものとし、皿は口径14cm以上で器高が3cm以内を一応のメドとし、高台の有無によってさらに分類する。これに該当しない場合は器高を優先する。

杯に高台の無い土器を杯I、高台のあるものを杯II、皿についても同様で、高台の無いものを皿I、高台のあるものを皿IIとする。

これらの資料によって図化できたのは27点で、(450, 451)は底部を欠き、杯Iか杯IIか不明であるし、(464)も底部だけで、同様不明である。この分類によって杯Iは(438, 442, 448, 452, 453, 469, 471, 472, 445, 470, 2134)の12点であり、杯IIは(441, 458)の2点である。皿Iは(346, 440, 443, 444, 447, 449, 454, 456, 465, 473, 620)の11点であり、皿IIは無い。

杯I (図73, PL76)

杯Iの中で口縁部、体部から底部にかけて角度の急なものとそうでないものがあり、前者は(448, 452)で、外面の調整も粘土紐の凹凸が比較的顯著である。内外面共にナデている。(448, 452)は口端部の外方への端反りがみられない。口端部の端反りのみられないものに(445, 469, 470, 471, 472, 2134)がある。(470)は内面口縁部に一条の凹線帯がめぐっている。(438,

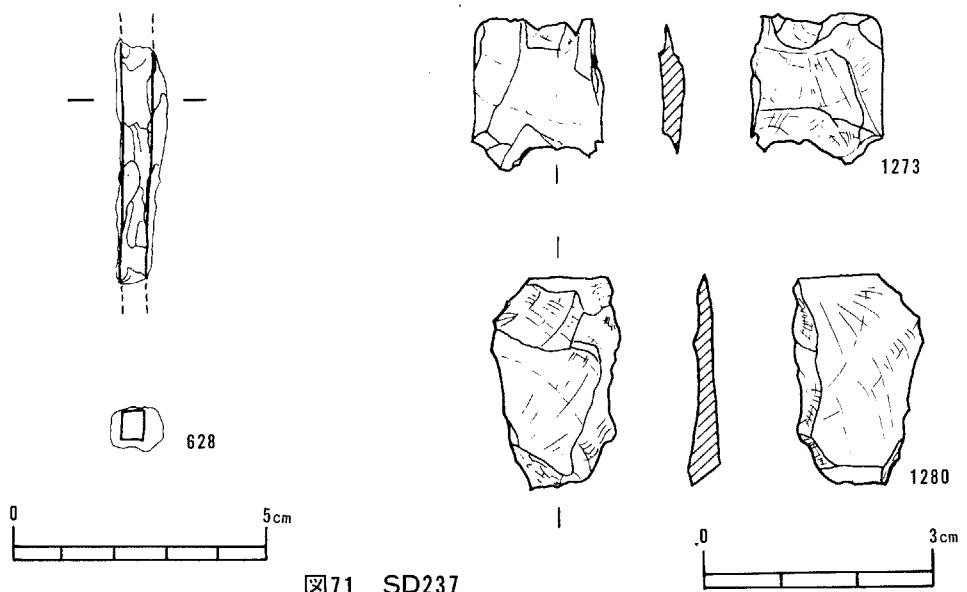
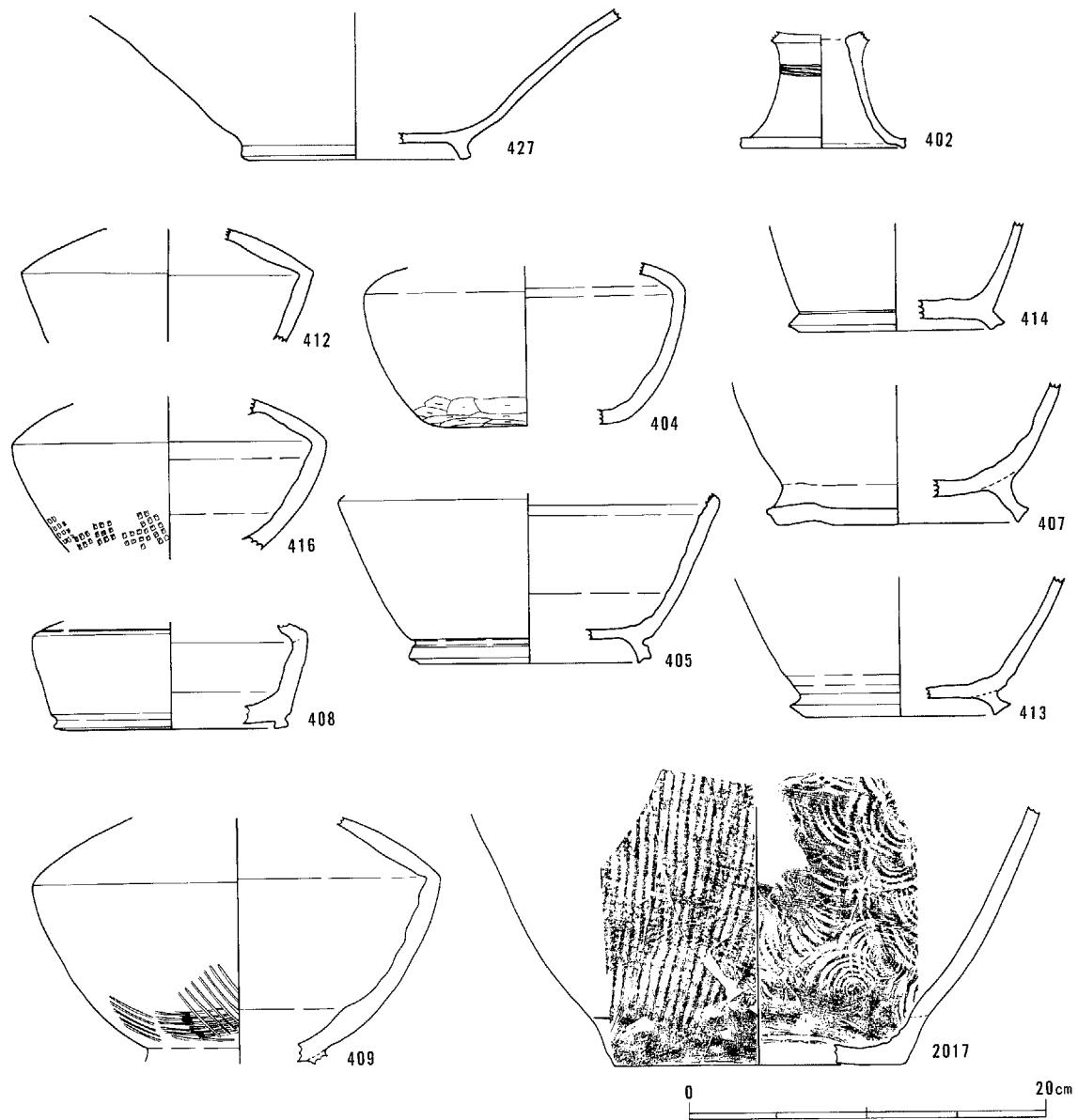


図71 SD237

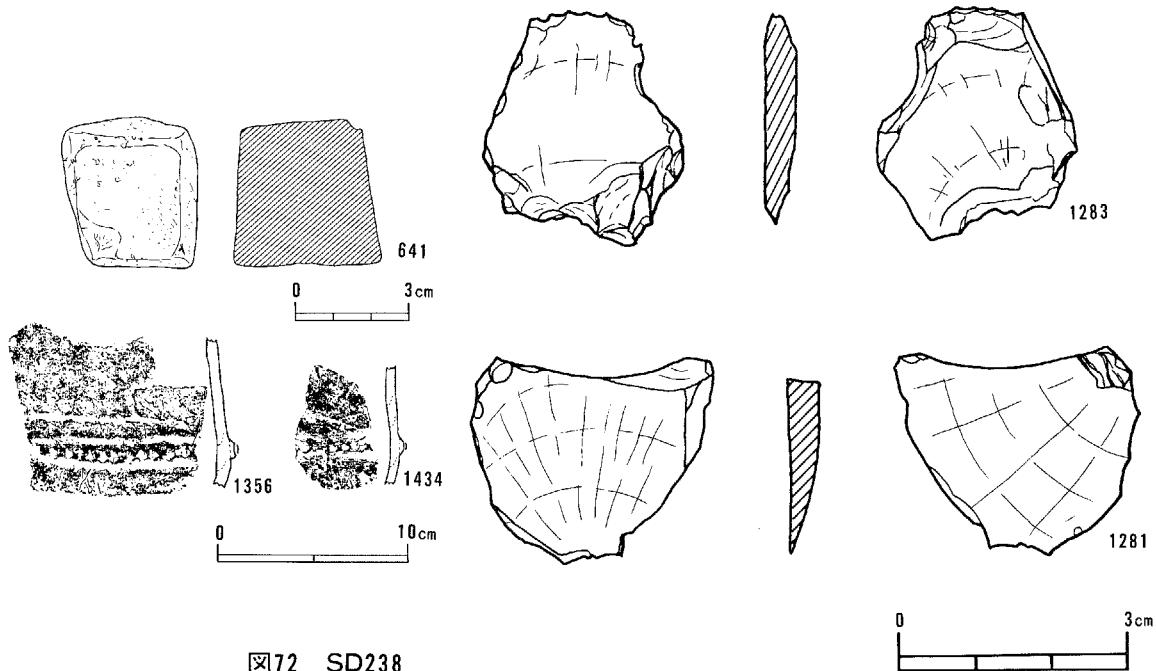
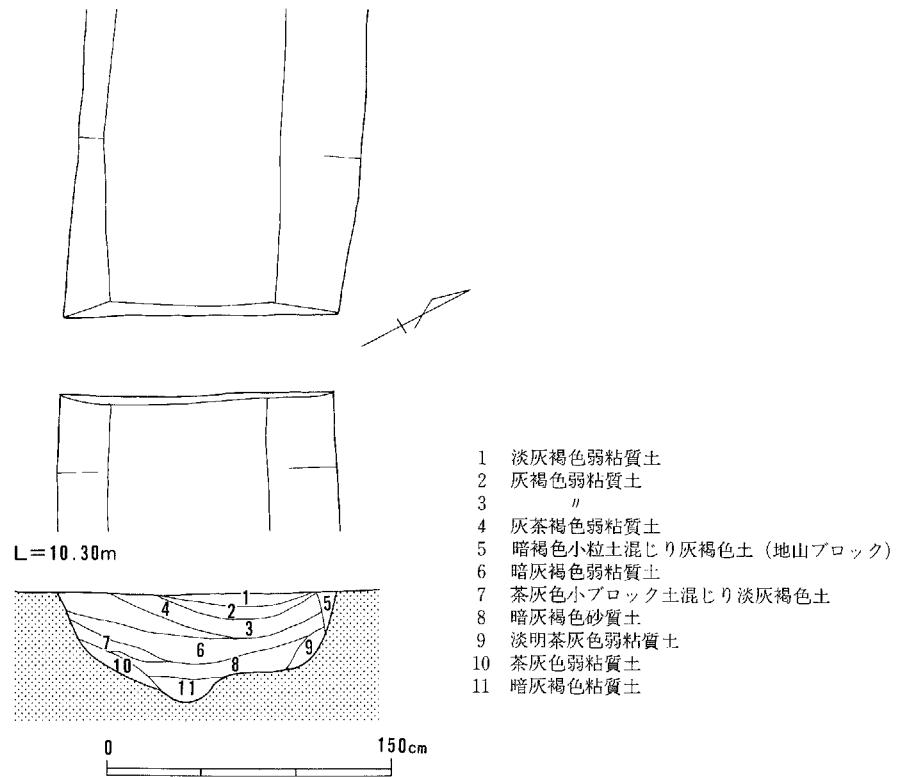


図72 SD238

442, 453) は端反りの作出がみられる。(438) は体部と底部の作出が顕著であるに対し、(453, 2134) は体部から底部にかけて丸くおさめられている。(442) は器肉の薄い作りで、内面底部には平行のミガキ暗文が施されている。

杯II (図73, PL76)

杯IIの(458) は杯Iの(452) に似た体部の角度と作りである。内外面共にヨコナデ仕上げである。(441) は(458) に比して体部から底部にかけての角度は無い。外面口縁部下に口縁部を作出する際の調整が一条の凹線状にみられる。

皿I (図73・74, PL76・77)

皿Iにおいて杯との境にあるのが(443, 449, 454, 473) である。(449) を除いていずれも口縁部に若干の端反りの作出がみられる。内外面共にヨコナデで仕上げ、暗文はみられない。(449) は明確な端反りに作られている。内外面共にヨコナデで仕上げている。(440, 447, 465) は口径16cm前後で(346, 444, 456) の口径20cm前後を規格としてさらに分類することもできよう。(440) は(447, 465) に比して体部の直線化が目立つ。(447, 465) の口縁部は端反りがみられる。いずれも内外面をヨコナデしている。

口径20cm前後の(346, 444, 456, 620) のいずれも口縁部の作りが異なっている。(346, 620) は口縁部内面に肥厚がみられ、(456) は、体部がやや外反りし、口縁部内面に凹線状の段が一条みられる。(444) は口縁部から底部にかけて直線的で、口縁部端部は丸くおさめられている。

杯、皿において、口縁部から底部にかけての角度や端部の始末からそれぞれ類似するものが、同時期の関係にあるといえる。

土師器高杯 (468) (図75)

(468) は脚部部分で面取りの幅が狭く、九面みられる。脚部も短い作りである。脚部内面にケズリがなされている。

黒色土器 (436, 437) (図73)

(436) は口径16cm、器高4.1cmの内黒の土器である。高台は貼り付けたもので断面三角形である。内面体部に細目のミガキ暗文が平行になされている。

(437) は底部を失っている。口径は17cmで、内黒の土器である。体部上部に幅1cm強の部分に細いミガキ暗文が施されている。いずれも外面は淡い褐色を呈している。

土師器甕 (439, 446, 455, 461, 462, 463, 467, 474, 475)

(図75, PL77)

土師器甕は外面を荒いハケ目で調整していないものと、荒いハケ目で調整しているものと大きく分ける。また荒いハケ目調整の甕に比して、ナデ調整のハケ目調整でないものとでは法

量も異なり、ナデ調整の甕は小型である。

(439, 467) は外面器壁ナデで仕上げている小型の甕で、口縁部端部はつまみ上げている。(439) は内外面共にナデ仕上げであるが、(467) は頸部から体部にかけて、体部から頸部方向のケズリがなされている。

外面に荒いハケ目調整されている甕は、法量として口縁部20cm前後の土器と25cm前後の土器にわかれる。(455, 461, 463) は、口径20cm前後の甕で、さらに頸部からやや外方に張るものと、そのまま体部が垂下するものがある。(455, 461) は頸部から垂下する形態であり、口縁部に最大径があり、(463) は口縁部径とほぼ等しい体部径である。この二種は口径20cmの甕にもみられ、(462, 474) は、体部が頸部から垂下する形態であり、(446, 475) は頸部から体部が外方へ張る形態である。いずれにしても、甕の機能として口縁部の拡張が非常に著しい土器である。

製塩土器 (459, 460)(図75)

この溝からは多数の製塩土器片とみられる破片が出土している。図化できたのは(459)と(460)である。

(459, 460) は、いずれも表面が砂っぽく、白色の色調のものと、褐色の色調のものがある。

(459) は、口縁部径9.2cmで、内弯している。器壁調整は不明であるが、外面には指頭圧痕があり、比較的平滑に仕上げているが、内面器壁は粘土紐に沿った凹凸がみられる。

(460) は、口縁部径11.5cmで、口縁部は、体部からまっすぐにしておさめられている。口縁部からの残存部は11cmで、底部の形状は不明である。内外面器壁はゆるやかな凹凸で、指頭圧痕が、重ならない程度に平行にみられる。

須恵器

出土している器種において皿の類は出土しておらず、杯、壺、平瓶、摺鉢、椀等がみられる。

須恵器蓋 (355, 359, 361, 364, 365, 369, 376, 377)

(図74, PL76)

いずれも宝珠形のつまみのある蓋である。口径は復元径も含めて、14cm前後のものと17cm前後のものがある。

(365, 369, 377) は、つまみ部分であり、(355, 359, 361,) は、つまみ部分を欠いている。

(355, 359, 361, 371, 364) の口縁部は、立ち上がりがはっきりして、(355, 359, 364) は、内外面共にナデて仕上げられ、(361, 376) は、外面上部はヘラケズリを残し、(376) は外面全体にうすい自然釉がかかっている。

須恵器身 (343, 344, 345, 347, 351, 352, 353, 354, 357, 358, 363, 366, 368, 370, 374, 375, 378, 379,

400)(図74, PL76・77)

高台のある資料と高台のないものがあるが、実測可能な範囲では高台のあるものが多い。高台の無いのは(345)の一点だけで、口径16cm、器高4.5cmで、口縁部は端反りに作られている。内外面共にヨコナデである。

高台の付いている身では、法量でIV類に分類できる。I類は口径10cm前後、器高3.5cm前後の(358, 343)がある。類は口径12~13cm、器高4cm前後のものに(344, 353, 366, 378)があり、底部だけのものの中に、高台径から(368, 374, 375, 379, 400)などがこの範囲にあるといえる。これらI類II類は、すべて体部から底部の屈曲部に高台が、貼付られるものである。III類は口径が15cm前後で器高が4.5cm前後の(354, 357)がある。(354)は高台の付き方が前二者と同じであるが、(354)は体部から底部の腰部よりやや内側に貼り付けられている。底部だけの(368, 374, 375, 379, 400)は、高台径からIII類に含めた。(368)の外面底部高台内にヘラ記号がなされている。IV類は、口径17cm前後、器高5cm前後の土器である。口縁部がやや端反りの(347)の他は直口の口縁である。高台は(347, 351)は底部に貼付られ、(352, 363)は腰部に貼り付けられている。(347)は底部内面に二本のヘラ沈線があり、沈線間と沈線内にヘラによる短線によるヘラ文様がなされている。外面には灰黄色の自然釉がみられる。(370)は高台径からIV類とした。

須恵器椀(362)(図74)

口縁部径6.5cm、器高5.5cmのやや凹み底の土器で、口縁部は内面部につまみ上げがあり、蓋の受け部を成形している。内外面ナデで、底部外面には自然釉がみられる。

須恵器壺(348, 356, 360, 371, 342, 350, 372, 373)

(図74・75, PL77)

(348)は口径13cm、肥厚されることなく直口におさまる。内外面ナデで、わずかな頸部には円形のタタキ目がある。

(356)は短頸壺で、口縁部径13cm、内外面共にナデ仕上げである。

(360)は、口縁部外面が肥厚されているもので口縁12.5cm、内外面共口縁部はヨコナデ、頸部以下外面は細いカキ目、内面は円形タタキ目である。

(371)は、口縁部径17cmで外方に拡張されている。頸部と肩部が明瞭な壺である。

(342, 350, 372, 373)は壺の底部で、(350)を除いて高台付きの壺である。(350)は、胴部下半に一本の沈線があり、底部外面に重ね焼きの際の須恵器片が接着している。(342)は、内面底部が滑らかで硯に再利用したとも考えられる。

平瓶(367)(図75)

(367)は平瓶の頸部片である。外面器壁に自然釉がみられる。

鍋把手 (466)(図75)

把手中央部に焼成以前に穿れた円孔が貫通している。全体に体部に対して上向きで、偏平なつくりである。

かまど (457)(図75)

かまどの鍔の部分である。残存長25cmで、鍔部分は本体より3.5cm程度突き出ている。調整のハケ目に、細いハケ目と太く粗いハケ目の二種の使用がみられる。

縄文式土器 (1356, 1434)(図72, PL92)

同一固体の可能性はある。深鉢体部に貼付突帯がめぐり、突帯頂にはキザミ目が施されている。

サヌカイト片 (1281, 1283)(図72)

不定形な剥片で、(1283)は一方の縁辺にリタッチがみられる。

砥石 (641)(図72)

石材は軽石であり、用途として砥石が適當かどうか不明であるが、立方体をなす各面取りはミガキ様の加工がなされている。

摺鉢 (349)(図75, PL77)

(349)は、摺鉢の底部で、底部径は11cm、肉厚は1.5~2cmである。

SD55 (PL22)

東西流の幅70cm、深さ15cmの東流の溝である。

出土遺物

石包丁 (624)(図76, PL104)

素材は緑泥片岩で二孔が穿れている。穿孔は両面から行っている。全体の作りは雑で、刃部の研磨もはっきりしていない。長軸は13cm、短軸で4.6cm、厚さ0.6cmである。

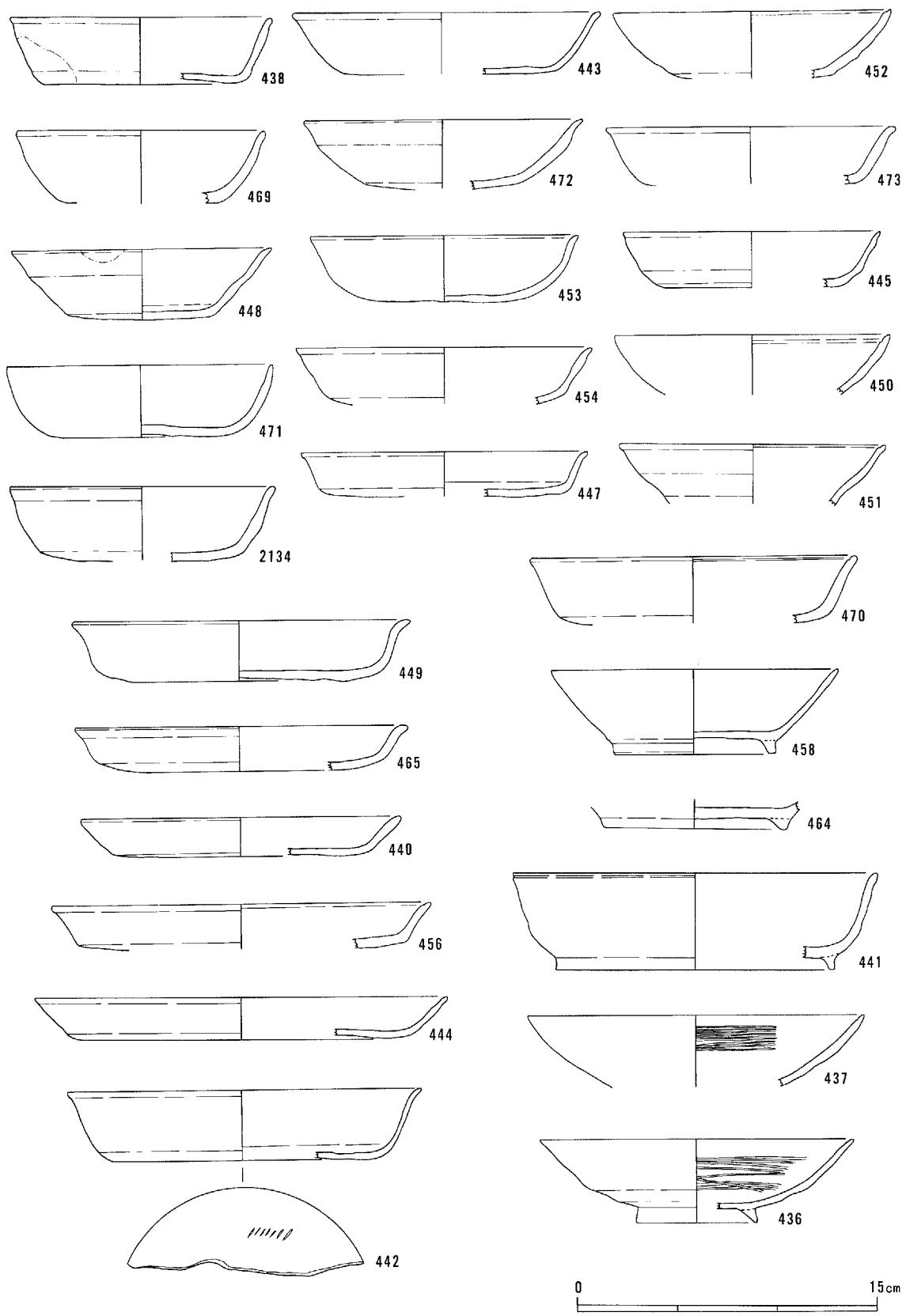


図73 SD238

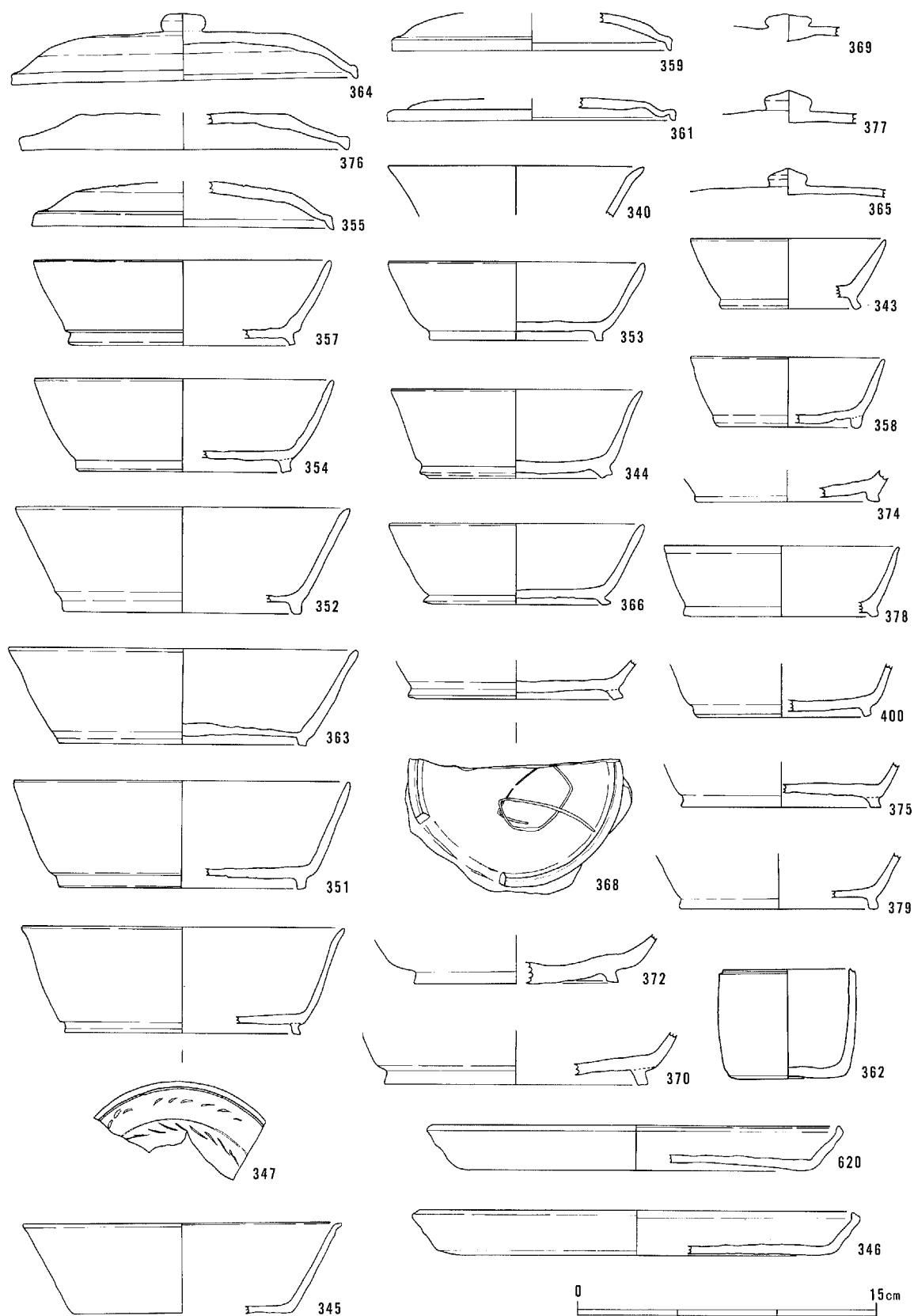


図74 SD238

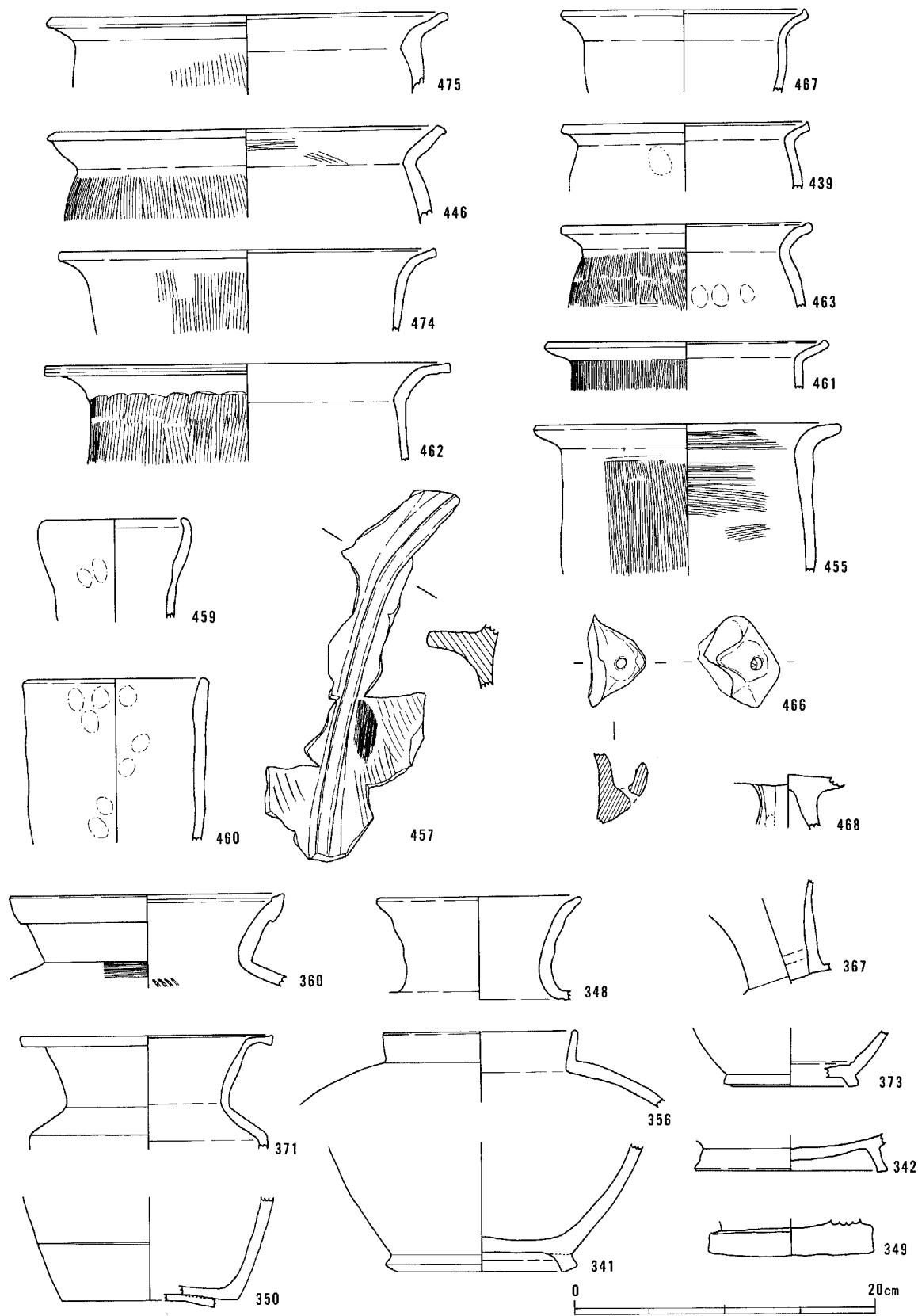


図75 SD238

III区包含層遺物

縄文式土器 (337) (図76)

復元口径約20cm程度になり、口唇部は波形口縁部に成形されている。外面は非常に磨滅していくと調整は不明である。外面は暗褐色の色調である。

土錐 (569, 570) (図76)

(570) は尖型で、長軸に沿って円孔が貫通している。長さ3.5cm、幅1cm、円孔径0.4cmである。ほぼ柱状の作りである。

(569) はやや紡錘形で、円孔径0.3cmである。

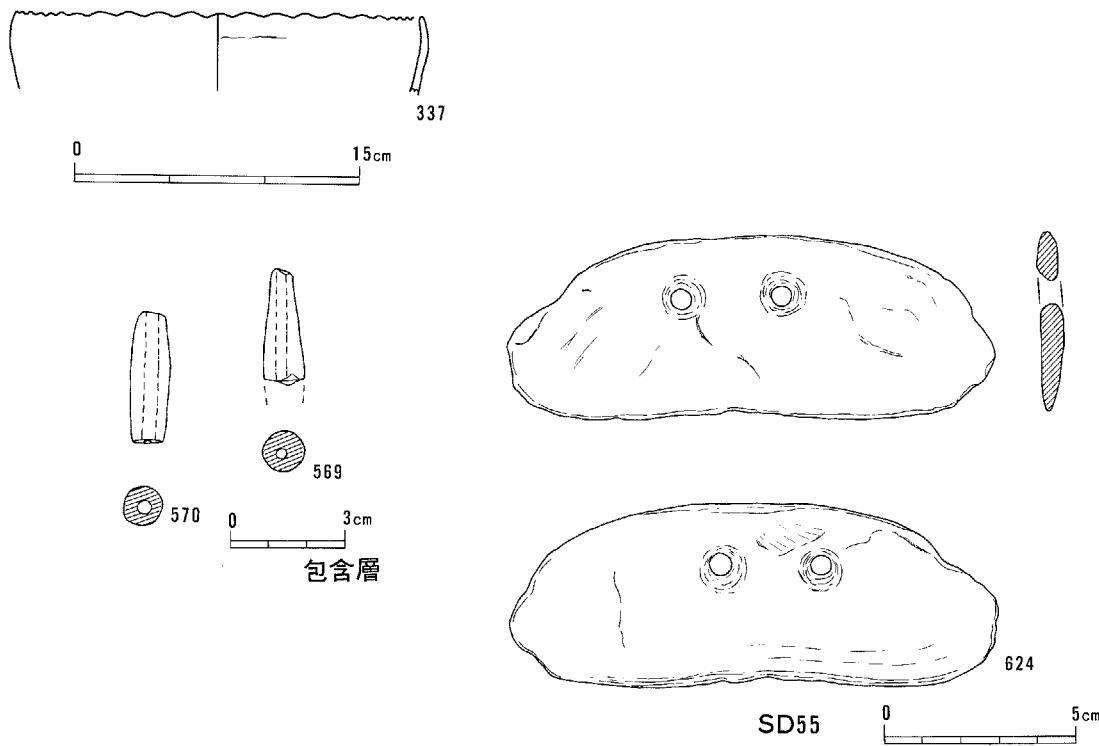


図76 SD55 包含層

III区遺構図

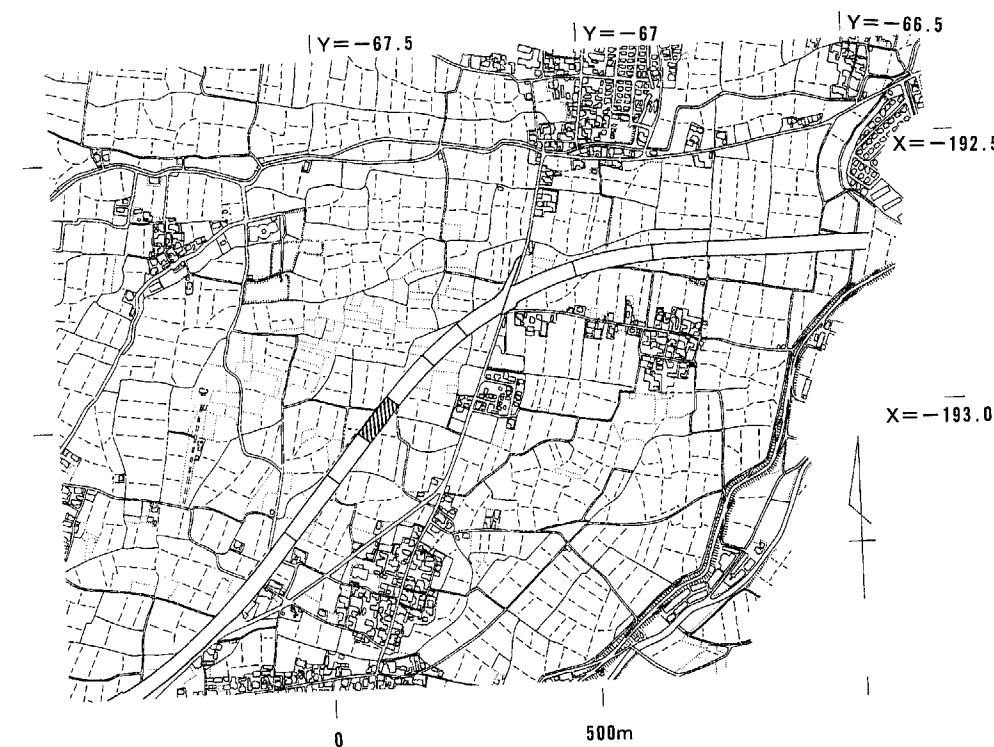


図77



IV区の遺構と遺物

IV区上面の遺構と遺物

S D 遺構

S D 1 6 2 (P L 2 4)

東西流の最大幅120cmで、幾度かの改修されている溝で、深さは60cmである。他の交差する二本の溝より新しい時期である。

出土遺物 (477, 478, 479, 480) (図78, PL77)

土師器壺 (478, 480)

(478) は、復元口径20.6cmの口縁部である。内外面共に最終仕上げはヨコナデであるが、内面にはヨコハケが一部残っている。

(480) は直口壺の外面口縁部で、口径13cmで口縁部と頸部の間に曖昧な凸線がみられる。口縁部から凸線はヨコナデで、凸線から下はタテ方向のハケ目である。

土師器甕 (479)

復元口径17cmの頸部がやや絞りのある甕で、口縁部は丸くおさめられている。外面口縁部はヨコナデ、外面胴部はタテ方向のハケ目である。内面口縁部は一定の長さで荒いヨコハケがなされ、頸部は粘土紐痕を残し、指頭圧痕もみられるが、それらの上をヨコナデしている。

須恵器身 (477)

口径12cm、器高4cmで、受け部は平坦に作られている。内外面共にヨコナデであるが、外面底部にはケズリ痕を残している。

S D 1 6 9

東西流の溝で、他の同じ規模、同じ方向の溝を重複している。幅30cm、深さ25cmである。

出土遺物 (図78)

須恵器身 (491)

口径11.2cmで底部を欠く。内外面共にヨコナデである。

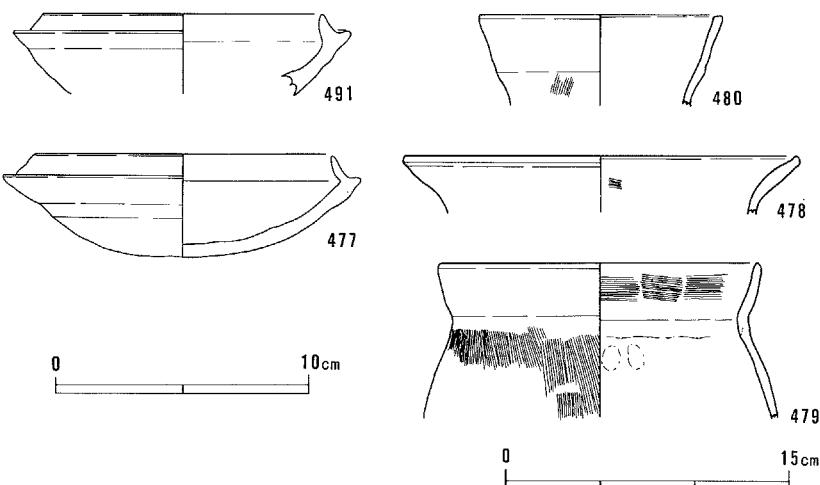
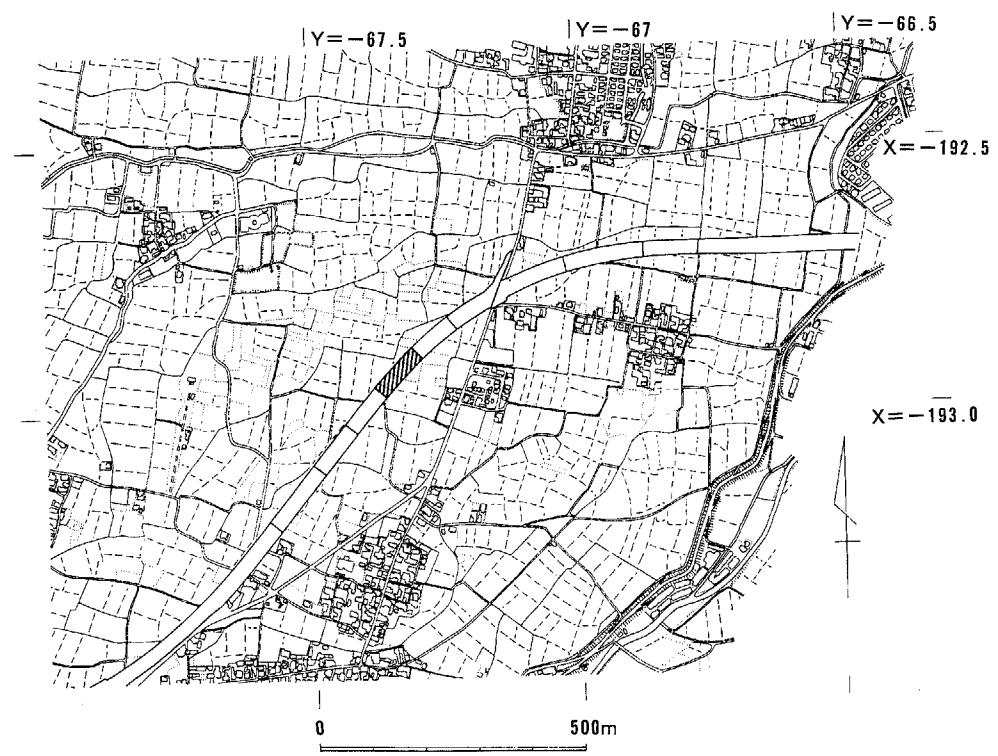
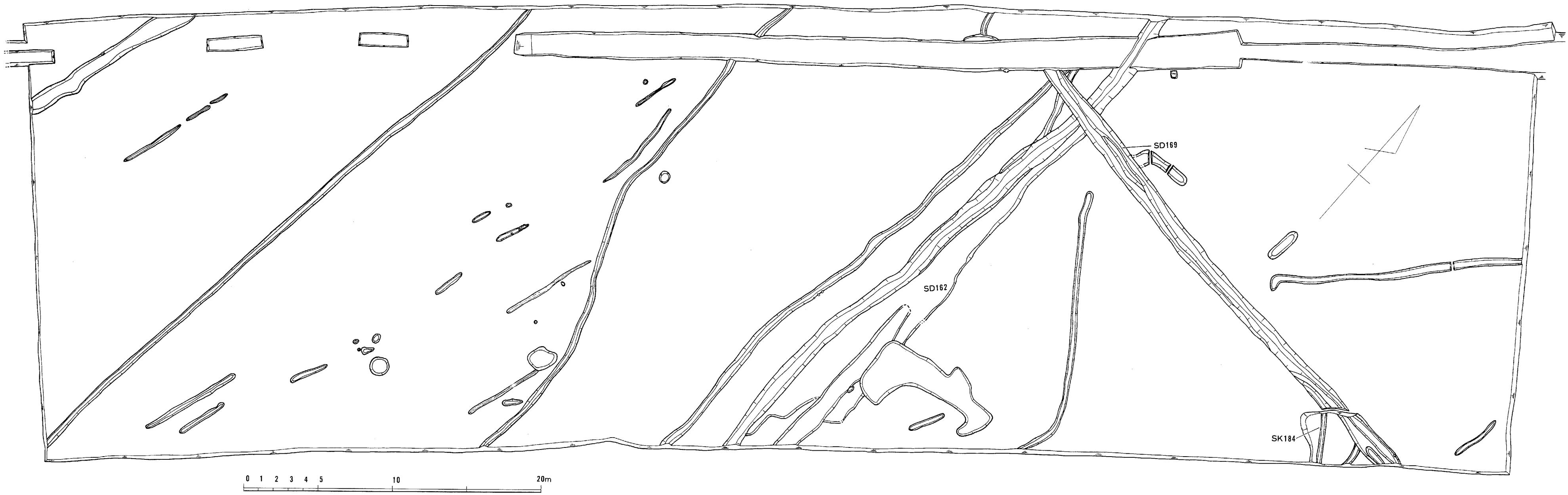


図78 SD162 SD169



IV区上面遺構図

図79



IV区下面の遺構と遺物

IV区下面について

IV区下面是住居址と小さなピットが多くみられる。

S I 遺構

S I 0 1 (図80, PL 26)

平面がやや楕円形を呈する豊穴式住居址で、最大長は740cm、短軸は700cm、深さは2~7cmである。住居址内北側に一部壁に沿った不整形な浅い落ち込みがある。長軸が360cm、短軸が340cm、深さは、床面より10cm前後である。

住居外にはピットは無く、住居内に数個のピットを除いて、壁に接することなく、壁100cm内外に散在し、一定の規則的な配置はみられない。

S I 0 2 (図81, PL 27)

豊穴式住居址と考えられるが、豊穴の壁が無い。径20cmのピットが、円形にめぐり、その主なるピットは19本であり、深さは2~15cmである。これらのピットの周径は450cmである。

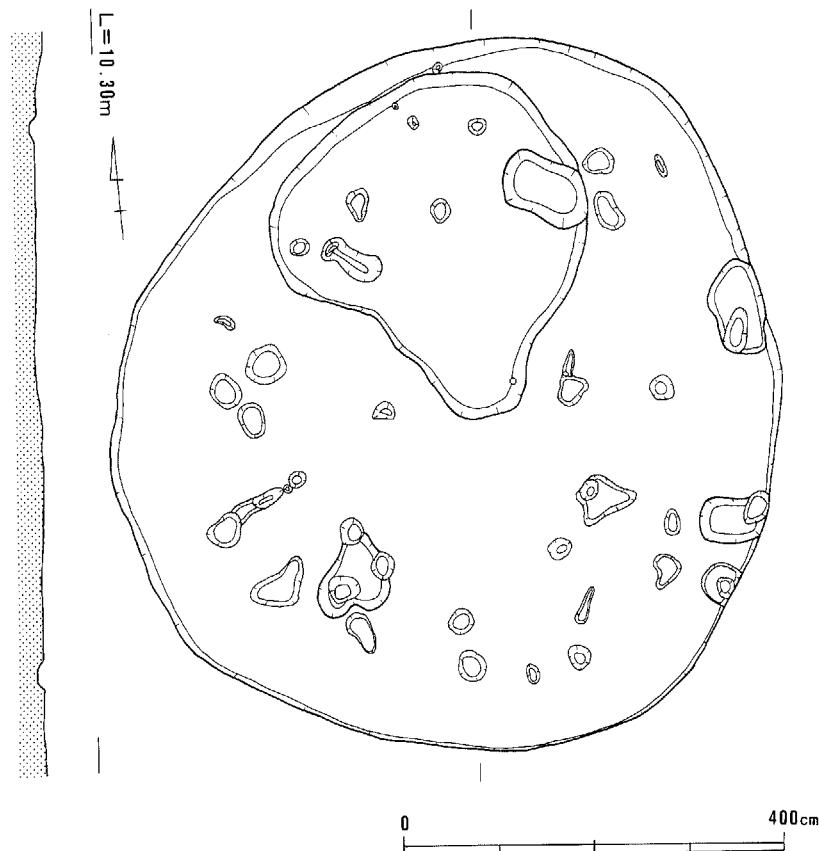


図80 SI01

S K 遺構

S K 1 3 (図 8 1)

不定形な土坑で、土坑の西半分にさらに落ち込みが重なっている。この落ち込みは、大きな落ち込みの面から、深さ20cm前後のものもみられる。焼土は、東半分の部分に大略30cm×50cmの広さのものと10cm×20cmの小さな部分とにみられる。S I 01の西3mにあり、この住居址と同じ時期のS K 遺構と思われる。

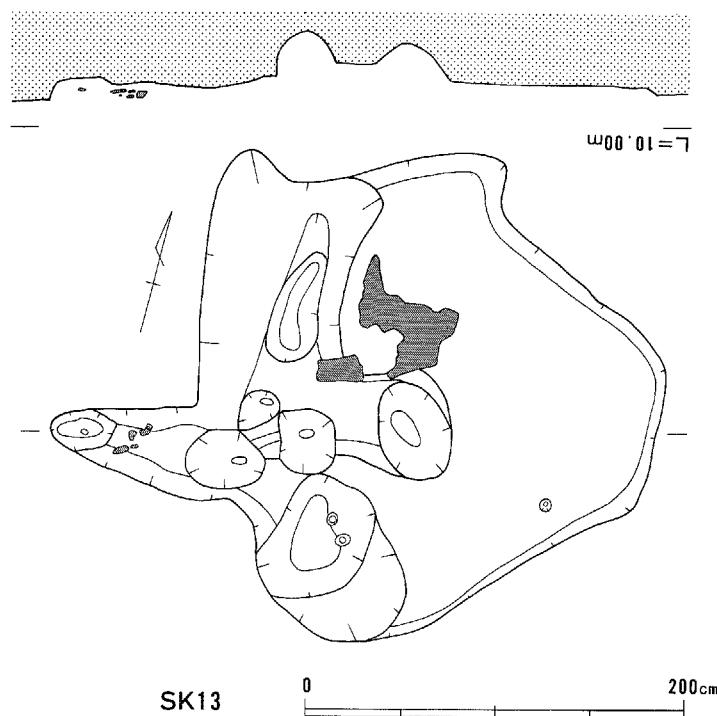
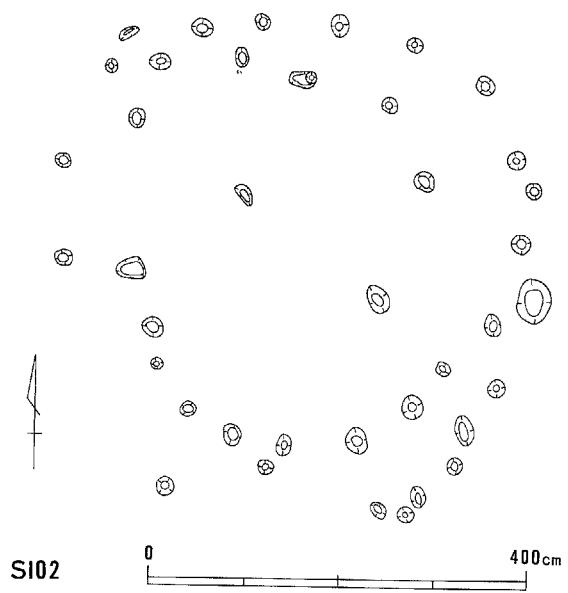


図81 SI02 SK13

図81

IV区包含層遺物

石器

蛤刃石斧 (635) (図83, PL103)

素材は砂岩で、3分の1程欠いている。現存の長さ7.5cm、幅5.3cm、厚さ3cmである。表面は全体にミガキをしていない。石斧作出にあたって、細かく打撃をすることによって成形したとみられ、表面は細かい打痕がそのままであり、刃部についても同様に作出されており、鈍いままである。

石棒 (2133) (図83, PL104)

緑泥片岩を素材とするもので、現存する長さ10cm、頭部の幅5.9cm、柱状部幅4cmで、厚さ2.2cmで偏平な形態である。

石鎌 (603, 604, 605) (図82)

素材はサヌカイトで、(603)は最大長3cmで最大幅1.8cm、厚さ0.4cm、(604)は最大長3.3cm、最大幅2.1cm、厚さ0.5cmで、基部はいずれも凹んでいる形態のものである。(603)は両面から打撃による剥離を行い、(604)はポジティブな面をそのまま利用し、縁辺をリタッチしている。ネガティブな面は打撃によって平坦剥離を行い、その後縁辺をリタッチしている。

石核 (607, 1279) (図82, 83)

素材はサヌカイトで、(607)は偏平の残核で、一方の面に自然面を残している。自然面を残している面の剥片剥離方向は一定していない。一方の面はプレーンな作業面から剥片を得ている。(1279)は両面から剥片を得ており、その打撃方向は不定である。

剥片 (619, 1274, 1275, 1276, 1277) (図82, 83)

いずれもサヌカイトで、厚さ0.5cm以下の不定形な剥片である。

土器

縄文土器 (476, 1357, 1358, 1432, 1433) (図83, PL92)

(476)は底径5.5cmの平底の底部である。内外面黒褐色の色調である。

(1357)は内面黄色、外面橙色の色調で、外面には横位の幅広く浅いくの字爪形文が付されている。

(1358)は内面が橙色、外面黒色の色調である。外面は条痕がみられ平滑化し、内面には一条の凹線文がめぐりナデている。

(1432)は口縁部に貼付突帯がめぐり、口唇部、突帯にキザミ目がなされている。

(1433)は外面褐色で内面は橙色の色調で、口縁部外面に一条の貼付突帯を付し、突帯にはキザミ目が施されている。(1432)と同じく、口唇部にもキザミ目がなされていると思われ

る。

弥生土器高杯（498）（図83）

高杯の杯部と脚部の接合部分片で、円盤充填法をもって成形している。杯部内面はヘラミガキであるが、外面は脚部も含めて磨滅していて不明である。

土師器（621）（図83）

壺の口縁部と思われ、内面に黒班がみられる。内外面ヨコナデで、淡褐色の色調である。

瓦器椀（509）（図83）

瓦器椀底部片で、貼付高台の高台は径5.3cmで、比較的高く、幅狭である。内面は黒灰色、外面は黒色の色調である。内外面は磨滅している。

摺鉢（510）（図83）

須恵質の土器で、口縁部は肥厚されて立ち上がっている。内外面ナデ仕上げで、内外面に煤が付着している。内面にクシ目が無いが、口縁部の形態より摺鉢とした。

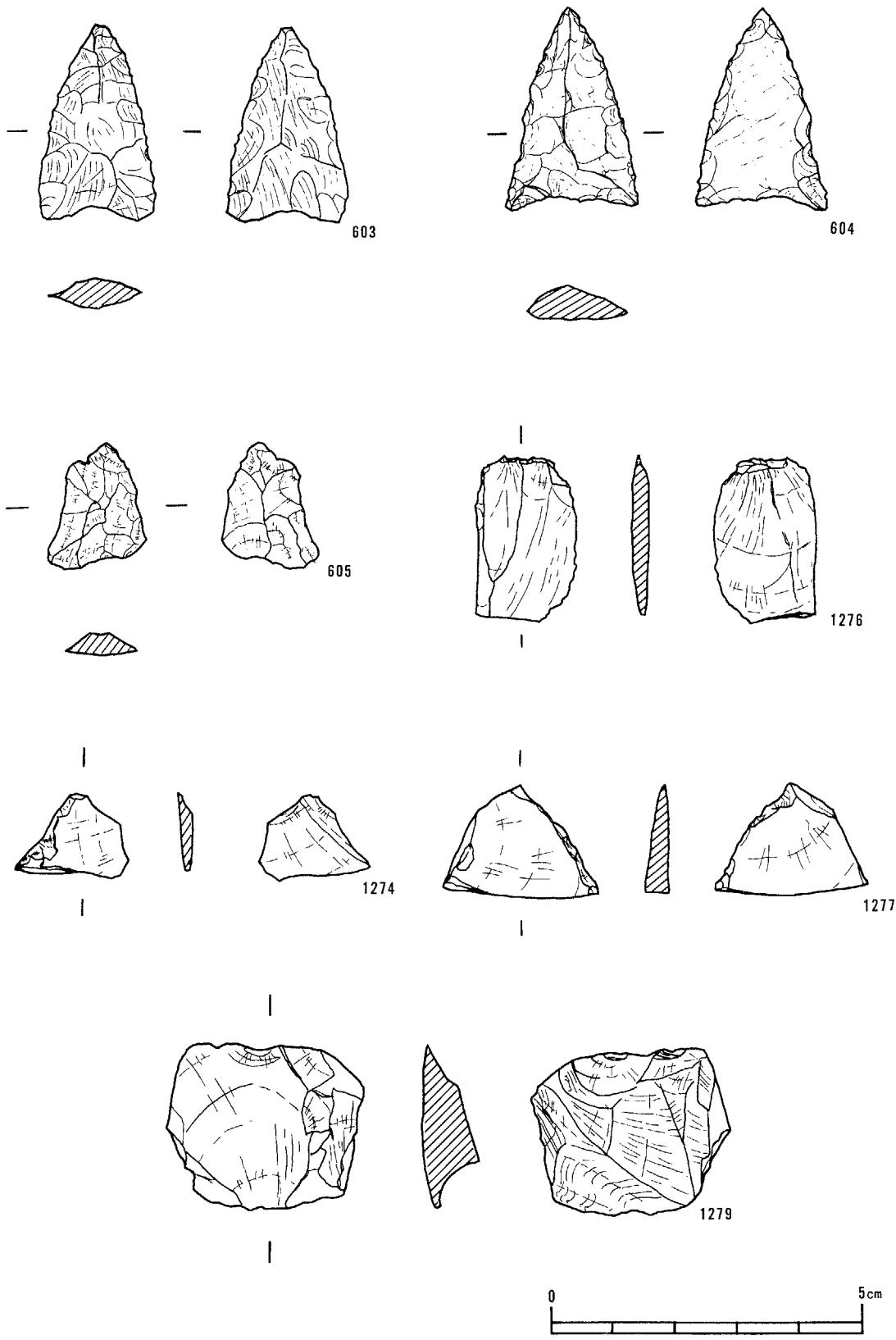


図82 包含層

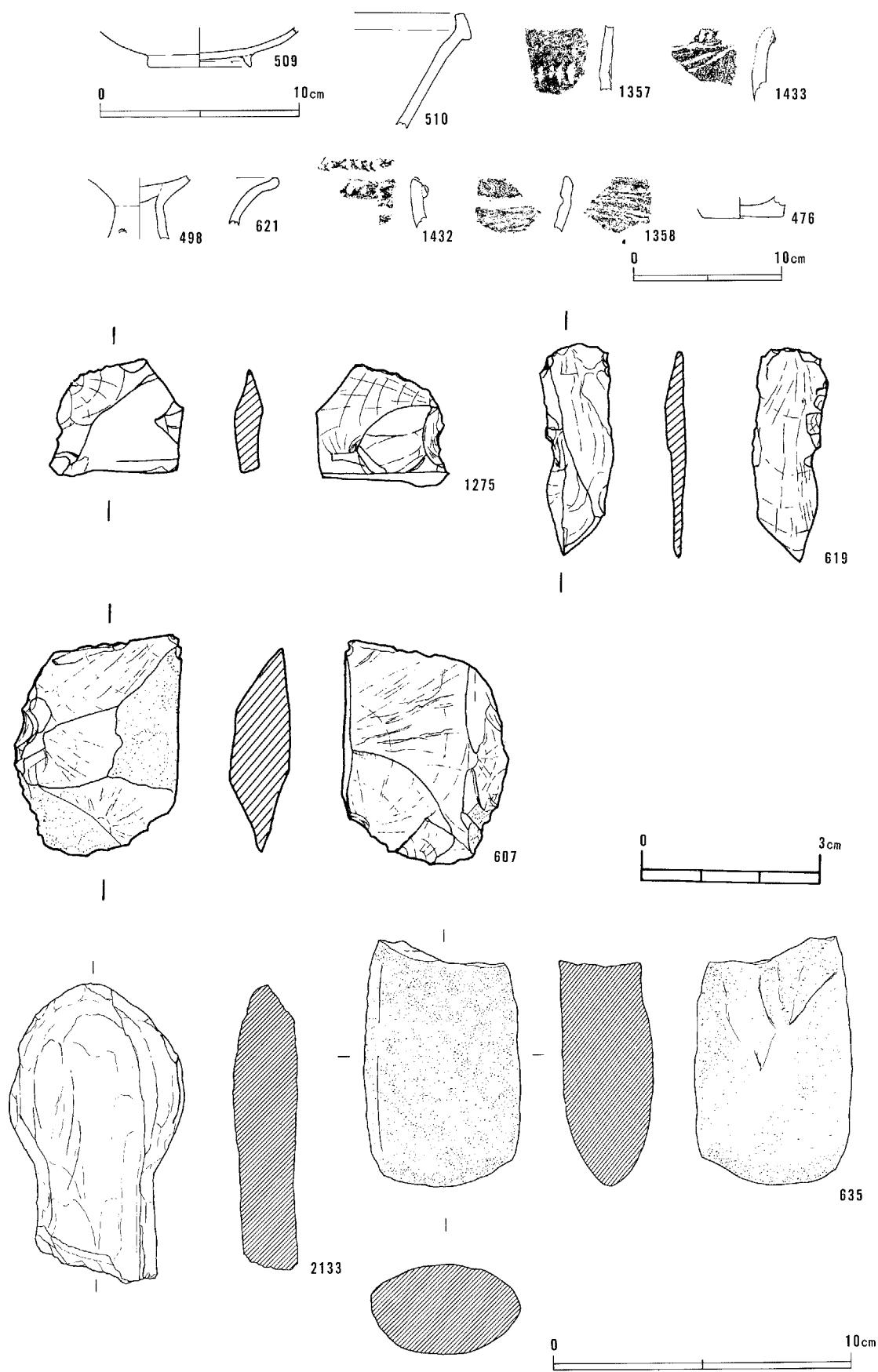
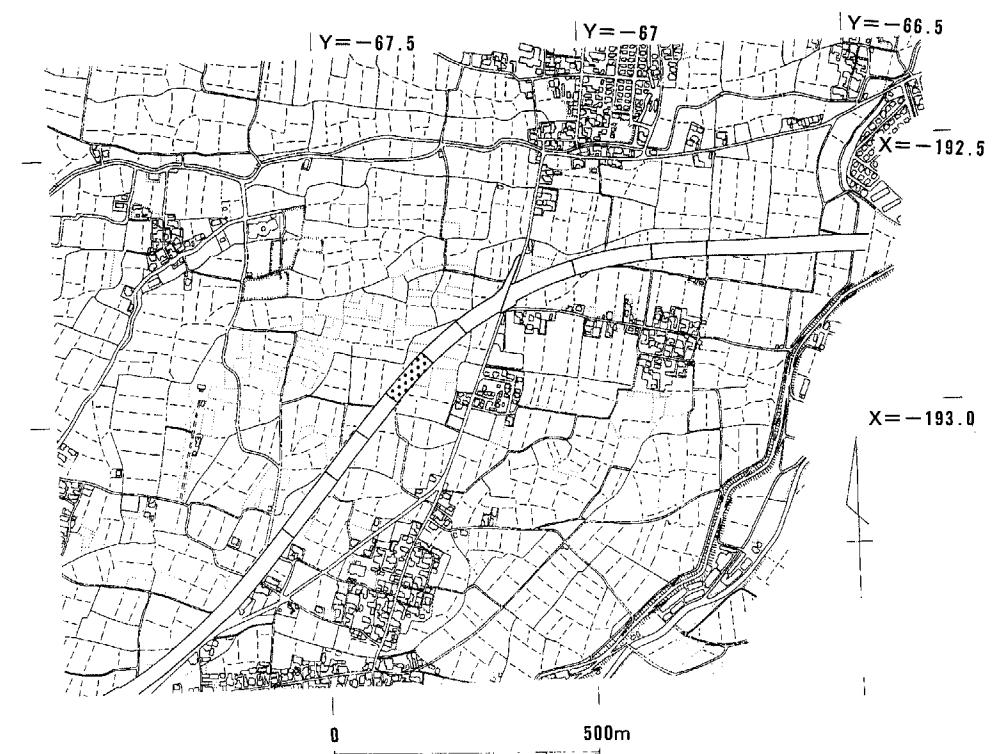
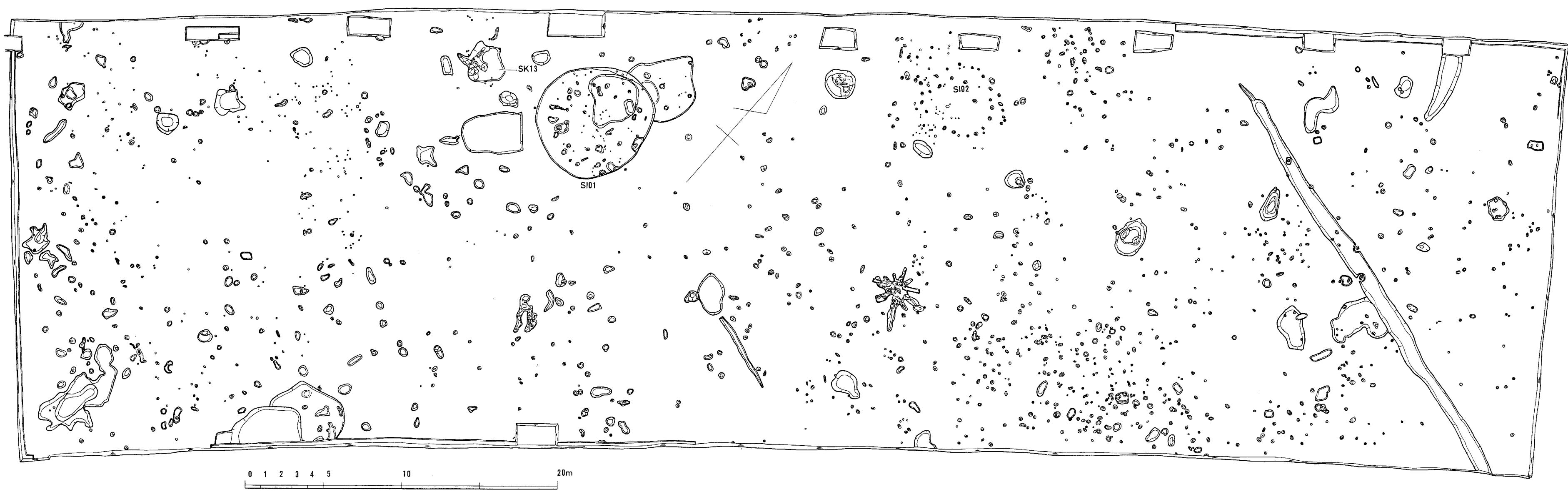


図83 包含層



IV区下面遺構図

図84



V区の遺構と遺物

V区上面の遺構と遺物

SK遺構

SK05

不定形な浅い落ち込みで、深さ15cmである。

出土遺物

須恵器 (677, 678, 679)(図85)

(677) は杯蓋で、口縁部は復元口径13.6cm、器高3.8cm程度のものである。口縁部は垂直に立つ。外面天井部にはヘラケズリ痕を残し、他の内外面は回転ナデである。

(678, 679) は杯身で、(678) は口径11.2cm、器高は3cm程度であろう。受け部は、浅く肉厚にできている。底部はヘラケズリで、他の内外面は回転によるナデ仕上げである。(679) は、口縁径12cm程度に復元できる。受け部は簡略化されている。

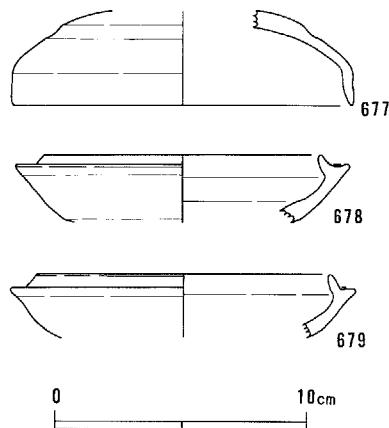


図85 SK05

SD遺構

SD01 (PL28)

発掘調査北東隅にあり、多くは調査区外に及ぶものであり、遺構の規模については不明であるが、深さは50cm以上である。

出土遺物

弥生土器 (666, 667, 668, 669, 670, 671)(図86)

これらの土器は、弥生時代から古墳時代初頭の土器であるが、弥生式土器として扱う。

壺 (669)

底部片で雑な底部の貼り付けた平底である。内外面ナデ仕上げである。

鉢 (666, 667, 668)

(666) は、口径11.7cm、器高6.4cmで、口縁部から体部にかけて、くびれ部のない形態での鉢である。外面底部は左下がりのタタキ目が残っているが、口縁部から体部にかけては、タタキ目の上から板状工具によるナデでタタキ目は消されて、板状工具をあてた痕跡を残している。内面も板状工具によってナデている。底部は、やや凹底でナデている。

(667) は、口縁部から体部にかけて、くびれ部があり、口縁部は外方に開く。底部は貼り

付け底部で肉厚に丸みの不安定な底部である。内外面共に、口縁部はヨコナデ、口縁部以下はナデ仕上げである。

(668) は、口縁部から体部上半を欠いている。ここでは鉢型土器として扱う。外面体部は左下がりのタタキ目が残っているが、タタキの上を板状工具によってナデている。外面底部接合部は指頭圧痕がみられ、底部は平底風にナデて仕上げられている。内面は板状工具によるナデで、底部は板状工具痕がみられる。

甕 (670)

(670) は口縁部から体部にかけて欠けている。外面体部下半に左下がりのタタキ目がみられ、体部と底部の接合部には、指頭圧痕がみられる。内外面共に剥落、磨滅が著しい。底部は凹底である。

甌 (671)

口縁部、体部を欠いている。底部に円孔を一個作出している。孔は焼成以前に内面と外面の両面から回転で穿った孔である。内外面共にナデて仕上げている大型の甌である。

須恵器 (672, 673)

杯蓋 (673)

口径13.4cm、器高4.5cmの定型土器である。口縁部の立ち上がりは、丸味で作られ、口縁部端も丸くおさめられている。外面天井部はヘラケズリで、他の内外面は、回転によるナデである。

杯身 (672)

口縁部は、口径10.8cm、器高4.5cmで、受け部は平坦に作られている。外面の底部はヘラケズリ、他の内外面は、回転によるナデ仕上げである。

S D 0 3

幅50cm、深さ10cmの東西の溝状遺構である。

出土遺物 (図86)

須恵器 (644, 645, 646, 647, 648, 2126)

出土して図化できたのは全て須恵器であり、杯蓋、杯身、高杯に限られる。杯蓋は、口縁部の形態より三種に分けられる。

(644, 645) の口縁部の立ち上がりは、丸くおさめられている。(644) は、外面天井部にヘラケズリがみられ、他の(644)と(645)の内外面は回転のヨコナデ仕上げである。

(646) の口縁部は、屈曲しながら立ち上がっている。口径は10.6cm、器高は3.6cmである。外面の天井部は、ヘラケズリがなされ、他の内外面は回転のナデである。

(647) は、宝珠形のつまみをもつ蓋で、口径18cmに復元できる。口縁部端は、下方に肥厚さ

れ、内外面共にナデ仕上げである。

杯身 (648)

口径11.6cm、器高3.7cmに復元できる。受け部は、若干凹んで成形されている。外面は、体部から底部にかけて、広く回転によるヘラケズリがみられる。他の内外面は、回転によるヨコナデ仕上げである。

高杯 (2126)

脚部で他は欠いている。脚部中央部に二条の凹線がめぐっている。

SD04

不定形な円形状の落ち込みで、最大長450cm、深さ30cmである。

出土遺物

土師器甕 (2130)

口径14.8cm、現存の器高11.4cmである。口縁部はヨコナデで、内面はその上をさらにヨコ方向にハケ目調整がなされている。外面体部の上半はタテ方向のハケ目で、下半は右下がりのハケ目調整である。

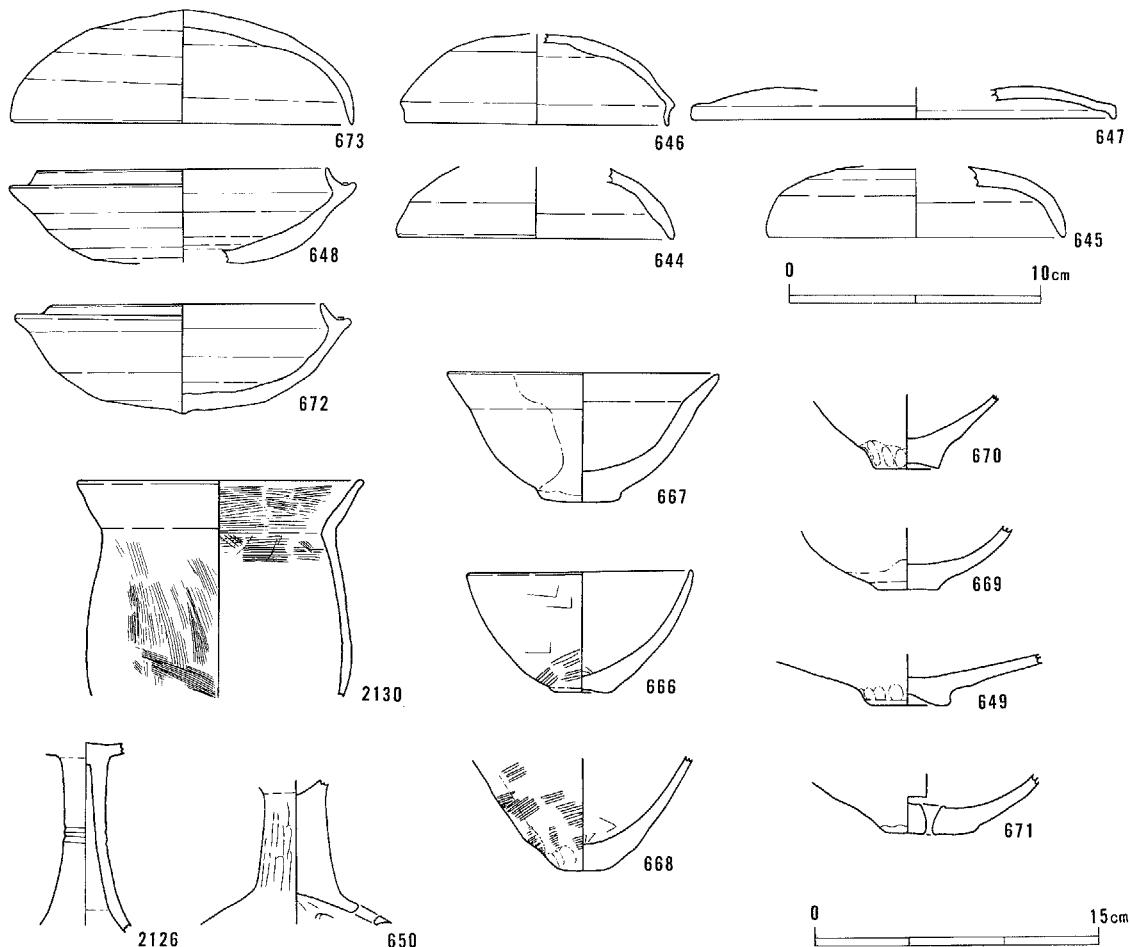


図86 SD01 SD03 SD04 SD07

SD 07

調査範囲内においては、U字に南北に屈曲している溝状遺構である。幅は一定して90cm、深さ20cmで人工的な遺構である。

出土遺物（図86）

弥生土器（649, 650）

壺（649）

口縁部、体部を欠く土器で底部の復元である。外面底部と体部の接着部に指頭圧痕が残っている凹底で、全体に磨滅している。底径で4.1cmである。

高杯（650）

図は高杯脚部と裾部の一部である。脚部は中実で、外面はタテ方向の丁寧なヘラミガキがなされている。脚部、裾部内面は板状工具によるナデがなされている。裾部の円孔も四方以上に復元できる。

SW遺構

SW01

調査区内の北から南方向に広がっている、大きな落ち込みで、最深部で20cmである。

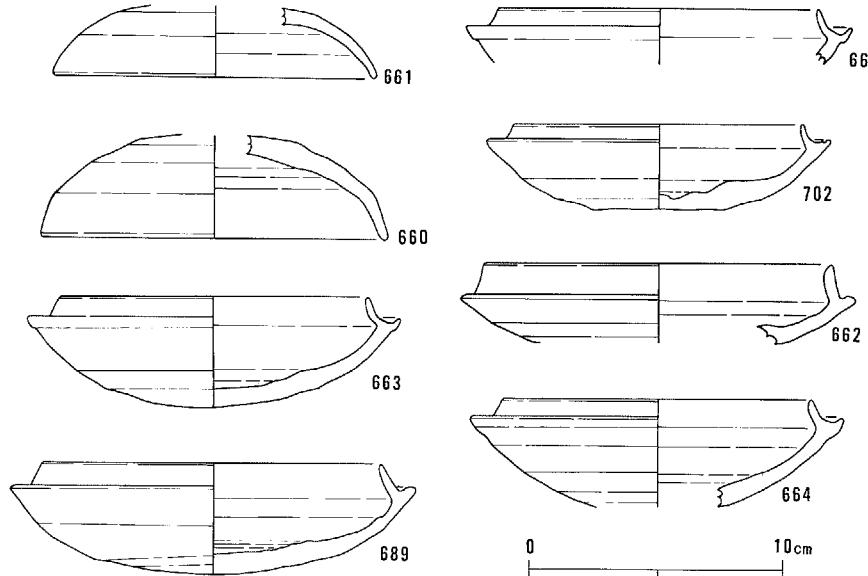


図87 SW01

出土遺物（660, 661, 662, 663, 664, 665, 689, 702）(図87)

出土しているもので図化できたのはすべて須恵器の杯である。

杯蓋（660, 661）

いずれも口縁部に返りが無く、外面天井部に回転のヘラケズリ、他の内外面は回転によるヨコナデである。

杯身（662, 663, 664, 665, 689, 702）

5点共に口縁部に立ち上がりがあり、受け部は、(662, 702) の浅いものもあるが、他はしっかりした受け部となっている。口径は、(662) は16であるが、他は12cm前後で、底部まである身の器高は3.5~4.5cmである。これらは、広い範囲で体部から底部にかけてヘラケズリがなされ、外面受け部から内面にかけては、回転のヨコナデである。

V区上面遺構図

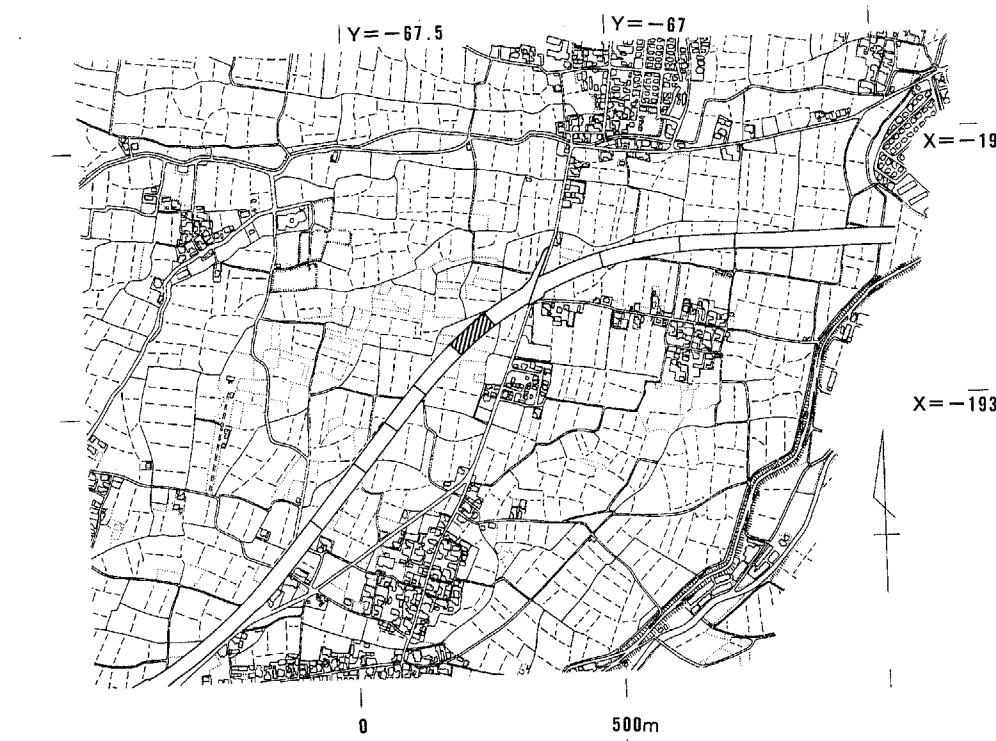
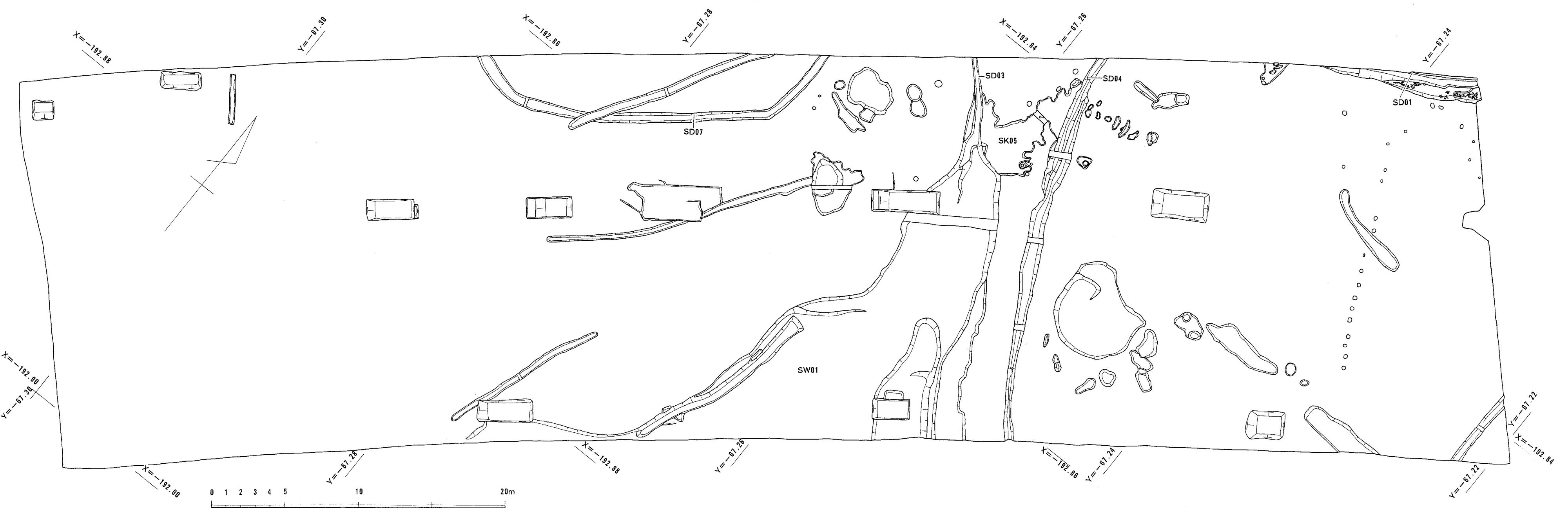


図88



V区下面の遺構と遺物

S D 遺構

S D 1 0 1

やや東西流の溝で、幅120cm、深さ20cmで、安定した溝で、人工的な遺構といえる。出土土器は弥生時代末か古墳時代初頭のものと古墳時代の須恵器などであり、前者は一括して弥生式土器とする。

出土遺物（651, 652, 653, 654, 655, 656, 657, 658, 659, 674, 675, 676, 1089, 2085）（図89）

弥生土器壺（652, 674）

壺（652）は口径19cmで、残存部は口縁部から頸部にかけてである。外面口縁部には二段の指頭圧痕があり、その上をヨコナデしている。内面は磨滅して不明である。

（674）は小型丸底壺で、口縁部を欠く。内外面共にナデ仕上げで、内面底部には板状工具の痕跡を残している。

弥生土器甕（651, 653, 2085）

（651）は口縁部を欠いているが、（653, 2085）は小型の甕である。（651）の底部底は丸味の底で、やや凹底である。外面は左下がりのタタキが底部にまで及んでいる。内面には板状工具痕を残している。（653, 2085）は法量のほぼ似た小型の甕である。（653）の口径は10cm、器高は10cmで、外面体部に平行のタタキが部分的にみられる。体部と底部の接合部は指頭圧痕によって成形されている。外面は口縁部から内面はヨコナデ、ナデによって仕上げられている。（2085）も（653）と似た成形であるが、底部は突出していない。外面頸部から体部中央部に水平のタタキであるが、下半はタタキの上をナデでタタキ目を消している。内面口縁部はヨコナデ、体部は板状工具のヨコナデ、下半に粘土紐痕が残っている。

弥生土器甌（657）

体部下半から底部で、底部の厚さ2.3cmの厚いもので、焼成前に穿孔している。外面は右下がりのタタキで、底部、底部底はナデ調整である。内面は板状工具のケズリ痕がみられる。（658）は台付き甕の台部である。外面底部と台部の接合部には丁寧な指頭圧痕がみられる。内外面共にナデ仕上げで台底径は8cmである。東海系の甕であろう。

弥生土器鉢（654, 655, 676）

（654, 655）は鉢の台で脚部の器肉の厚さが大いに異なっている。（654）は2.5cmである。底部と脚の接合部は、いずれも指押さえで、内外面共にナデて仕上げている。（676）は、口縁部から体部にくびれの頸部を成形している。外面体部はタタキの後、ナデて消している。底部にはタタキ目を残している。口縁部内外面はヨコナデで、体部内面は板状工具によるナデ

である。底部底は平底である。

弥生土器高杯 (656)

(656) は杯部と脚部を残す、いわゆる小型丸底壺とセットとなる高杯で、内面脚部の上部にはしづり目がみられる。全体に磨滅している。

土師器鉢 (675)

鉢に台がつく鉢で、底部と台の接合部には指頭圧痕が残っている。内面、台底部はナデ仕上げで、底は凹底である。

須恵器 (659)

(659) は杯身で、口径11.8cm、器高3.5cmで、受け部は四面部を成形している。外面底部はヘラケズリがされ、他は回転によるヨコナデで、内面もナデて仕上げられている。

土玉 (1089)

(1089) は球状をなす、粘土製の玉である。中央部に一孔の貫通するまっすぐの通し孔がある。孔と同じ縦断面では1.6cm、横断面では2cmと球状であるがやや偏平な玉である。

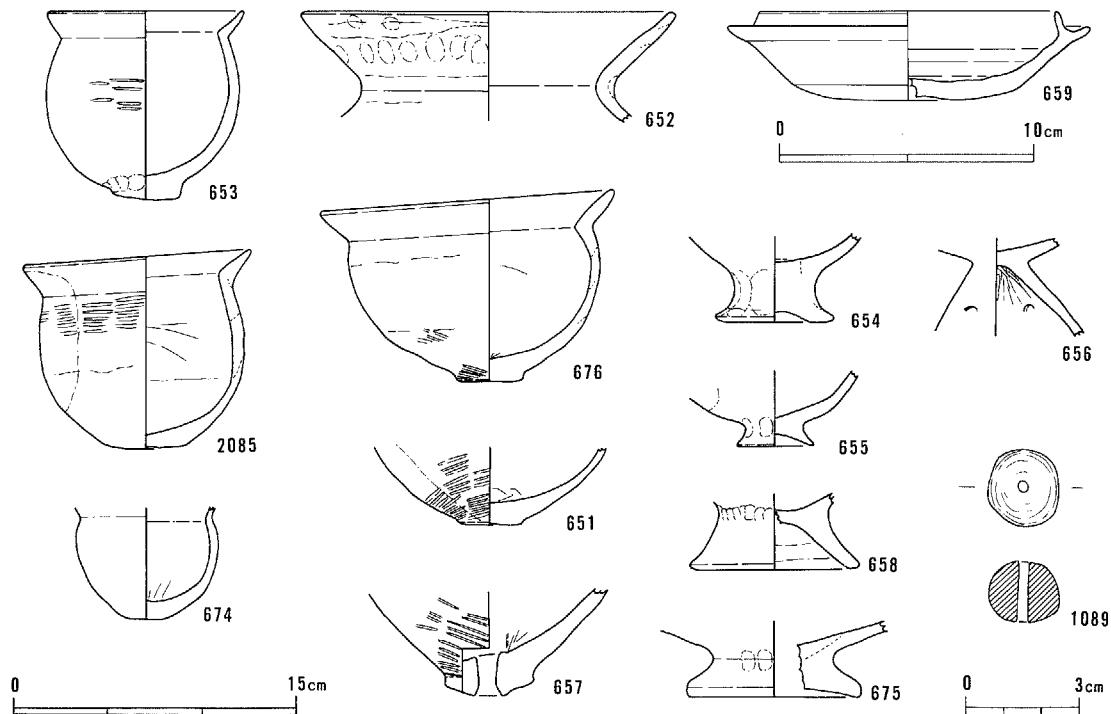


図89 SD101

V区包含層遺物

縄文土器 (681, 682, 683, 684, 685, 1269)

(図91, PL92・101)

(681) は口縁部内面が若干肥厚され、曖昧な段となっている。外面はケズリの後ナデ、内面は水平にケズリの後ナデている。外面暗褐色、内面は黒色の色調で、外面に煤の付着がみられる。

(682) は外面口縁部に低い貼付突帯が一条めぐり、突帯には鋭利な工具によりキザミ目がなされている。内面は砂粒が多量にみられ、外面は丁寧にナデられている。

(683) は内外面黒色である。口唇部に浅いキザミ目がなされ、外面はケズリ、内面はミガキが水平になされている。

(684) は体部に貼り付けられた突帯部分と思われる。突帯にはキザミ目がなされている。内外面は黄橙色の色調で、胎土に片岩を含んでいる。

(685) は口唇部に浅いキザミ目が斜めに付されている。石英の粒を多量に含んでおり、内外面の調整は不明である。外面は褐色、内面は灰色の色調である。

(1269) の外面は沈線を配し、沈線間を一条おきにキザミ目文をタテに入れているもので、ミガいた後に施文したもので、内面はナデ仕上げである。実測面では上端も欠損面としているが、口唇部である可能性がある。

石器

石鏃 (1088)(図90)

長さ4.2cm、最大幅2.2cm、最大厚0.35cmの比較的大きな石鏃である。ポジティブな面は大きな剝離と縁辺のリタッチでなされ、ネガティブな面は、幾度かの打撃剝離と縁辺のリタッチで成形され、基部はネガティブな面からの打撃によって凹基となっている。素材はサヌカイトである。

スクレイパー (700)(図91)

比較的大きな石核を母岩として作出されたもので、背部に自然面が残っている。ポジティブな面の背部は幾度かの打撃で調整を行い、ネガティブの面はそのまま利用している。刃部は両面からのリタッチで成形されている。短軸4.7cm、長軸12.5cm、最大厚は1.5cmである。素材はサヌカイトである。

石包丁 (643)(図90, PL104)

素材は緑泥片岩で未成品であり、製作途中に破損したものであろう。両面共に丁寧に磨いて、穿孔段階の途上と思われる。現存する長軸は8.2cm、短軸は5.8cm、厚さ0.6cmである。

弥生土器 (686, 687, 2127)(図91)

(686) は土器底部で、平底で底径2.8cmである。内外面の器壁は磨滅しており、調整は不明である。胎土に片岩を含んでいる。

(687) は高杯脚部で、中空でしづり目がみられる。内外面橙色を呈している。

(2127) は壺の口縁部で、口径11.7cmで、口唇部の上端、下端にキザミ目を施し、口縁部下部に貼付竹管浮文をめぐらし、口縁部下端にさらにキザミ目文を入れている。外面はヘラミガキ、内面はナデ仕上げで、内外面は橙色の色調である。

須恵器杯 (680, 688, 690)(図91)

須恵器杯身 (680, 688, 690)

(680, 690) は受け部のあるもので、(688) は受け部はない。(680, 690) の口径はほぼ12cmで、内外面ヨコナデである。(688) は口径11.6cm、器高3.8cmで、外面底部は切離しのままの未調整で、他の内外面は回転によるナデ仕上げである。

フイゴ羽口 (701)(図91)

現存する長さは6.5cm、直径6.7cmで、貫通する円孔径は2cm前後である。外面橙色の色調である。

土師器小皿 (692, 693)(図91)

(692, 693) は口縁部は丸味をもって底部に至るもので、口縁部と底部の境は明瞭でない。(693) の底部は指頭圧痕の上をナデて、他の内外面はヨコナデである。(693) の口径は7.2cm、器高は1.2cmであり、内外面は橙の色調で、(692) の色調は黄褐色を呈している。

瓦器椀 (2128)(図91)

口径14.4cm、器高3.7cmで、底部に貼付断面三角形の高台がみられる。高台は非常に低い。内外面は磨滅しているが、外面体部に指頭圧痕がみられる。

須恵質こね鉢 (697)(図91)

いわゆる東播系のこね鉢で内外面は灰色を呈している。口縁部は肥厚して立ち上がっている。

瓦質羽釜 (694)(図91)

口径23.3cm、つばの径は30.1cmである。外面口縁部に成形時のゆるやかな段状成形が二段みられる。貼り付けのつばは体部より2.4cm程突き出している。口縁部内外面からつばの底面までヨコナデで、つば以下の体部は水平方向にケズリである。

瓦質摺鉢 (696)(図91)

底径9.5cmで、体部と底部の接合部は丸くおさめられている。外面体部は、底部から体部方向に左上りにケズリがみられる。内面には原体のクシを15本とするクシ目が重ねて施されている。

陶器摺鉢（695）(図91)

口径25.8cm、器高11.4cmで片口の摺鉢である。外面体部は回転によるナデで、内面には原体が幅2.4cm、クシが8本で、底部から口縁部にむけてクシ目が入れられている。外面は橙色～褐色の色調で、内面は灰色であり、生産地は不明である。

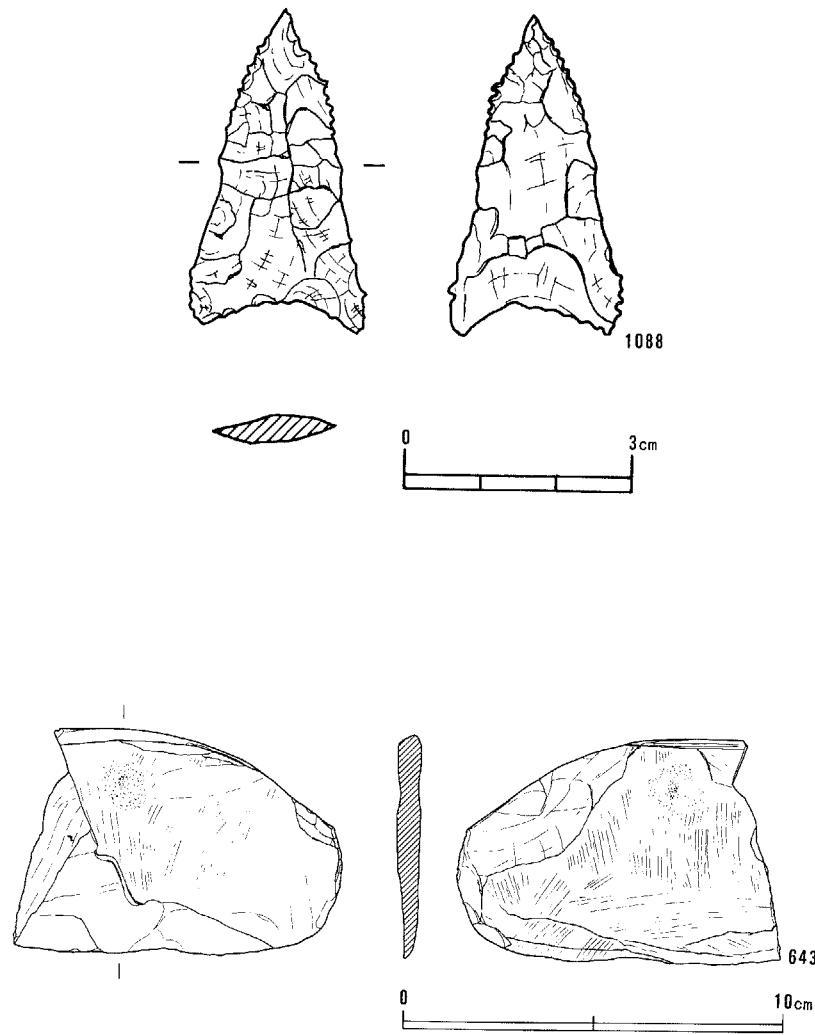


図90 包含層

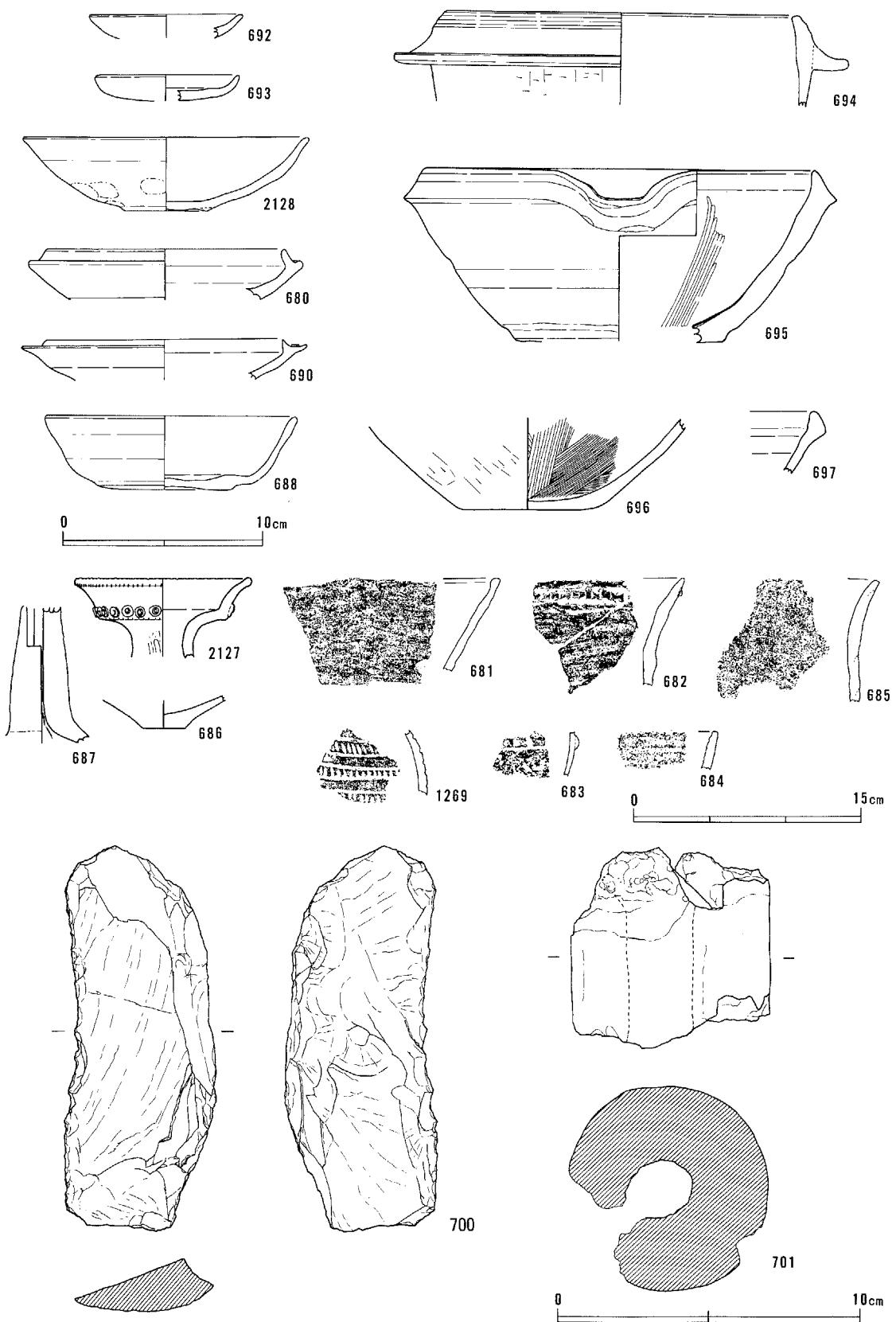


図91 包含層

V区下面遺構図

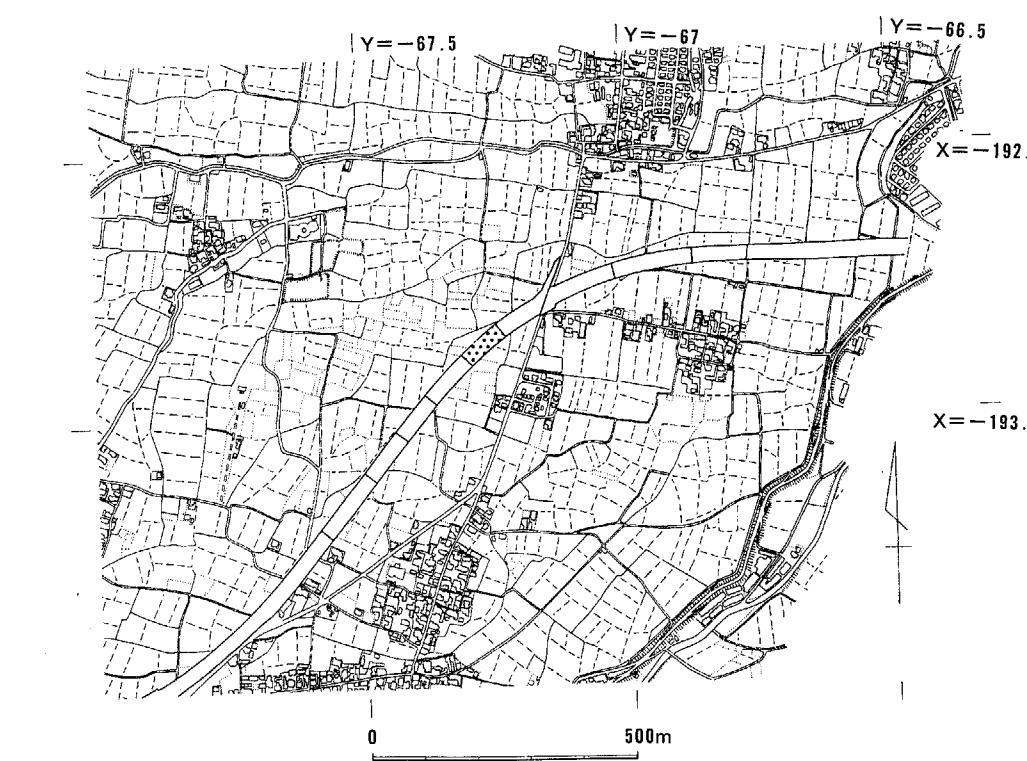
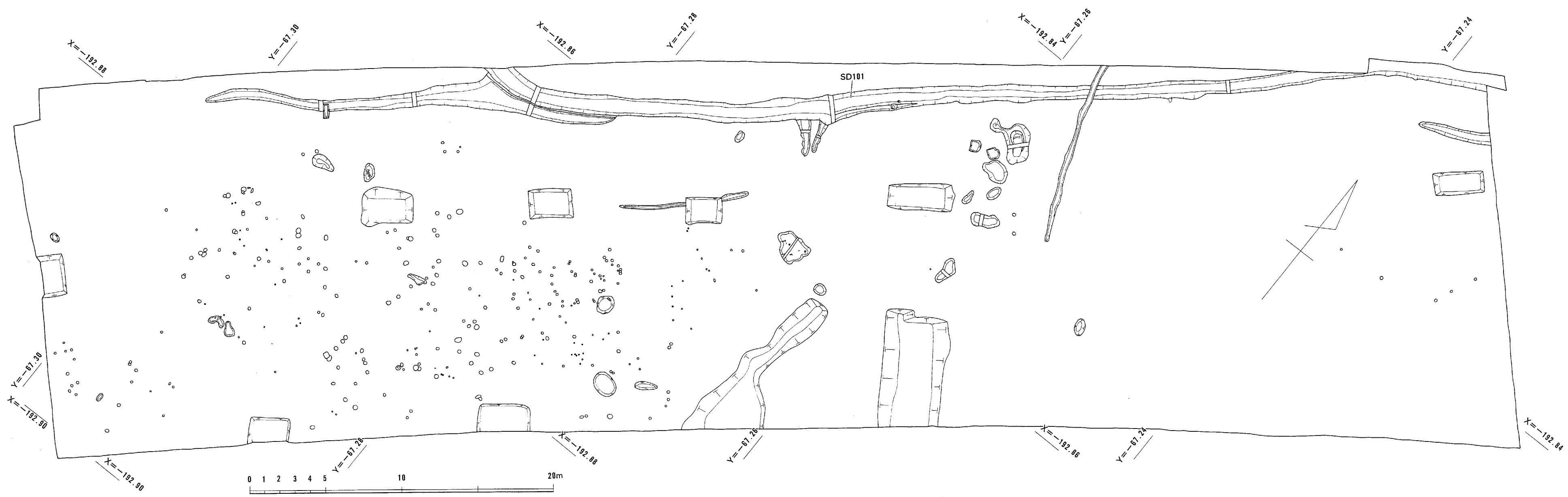


图92



VI区の遺構と遺物

VI区上面の遺構と遺物

S B 遺構

S B 0 1 (図93, PL30)

2間×3間の掘立柱総柱遺構で、柱穴は径20cm前後で、柱根の深さは、80cm前後のものと20cm前後のものがみられる。2間側の1間の間尺は250cm、3間側の1間の間尺は210cmとほぼ齊一性をもっている建物である。

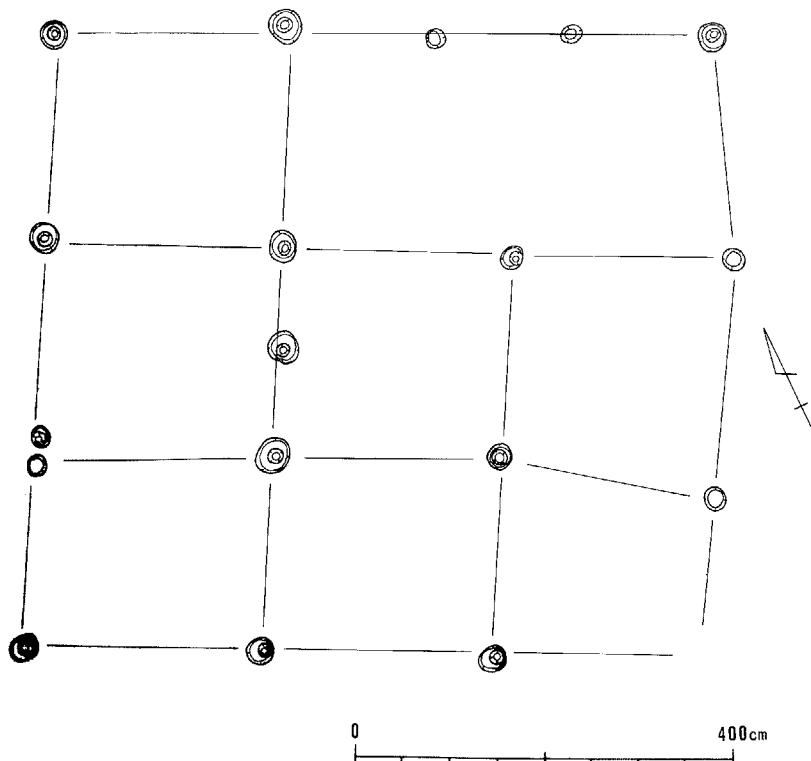


図93 SB01

S E 遺構

S E 0 1 (図93, PL31)

乱石積みの井戸遺構で、掘方の平面は円形で、断面は紡錘形である。石積みは円形に積んでいるが、上部は破損を受けている。掘方は、ほぼ正円で長軸2.5cm、短軸2.3cmである。

残存する石積みは、径70cm、深さ約80cmである。井戸底には、遺構面とほぼ同じ高さまで積んであったであろう石材によって埋められている。完堀りの結果、井戸底には曲物の井筒が一段据えられており、井戸の深さは、遺構から井戸底まで、2.4mである。

出土遺物 (929, 2113) (図95)

(929) は瓦器皿で、口径12.2cm、器高3.2cmで口縁部下に幅広の凹帯があり、その下は指頭圧痕が横列になされ、その上をナデている。内面は一筆の螺旋暗文が、口縁部から底部に到っている。

(2113) は、瓦質の壺の体部下半である。体部内外面共に回転を利用したヨコナデで、底部底は静止糸切痕がみられる。

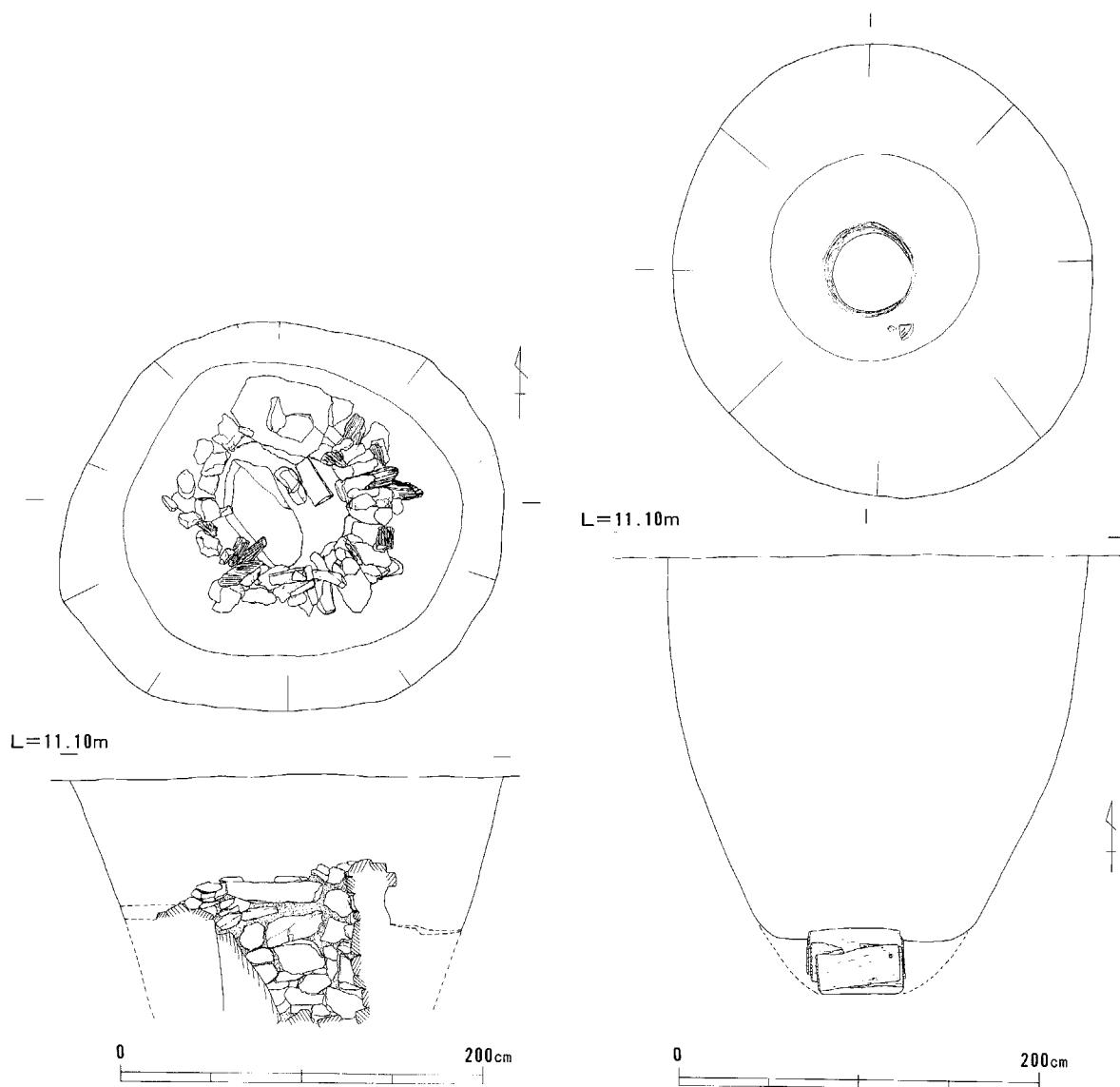


図94 SE01

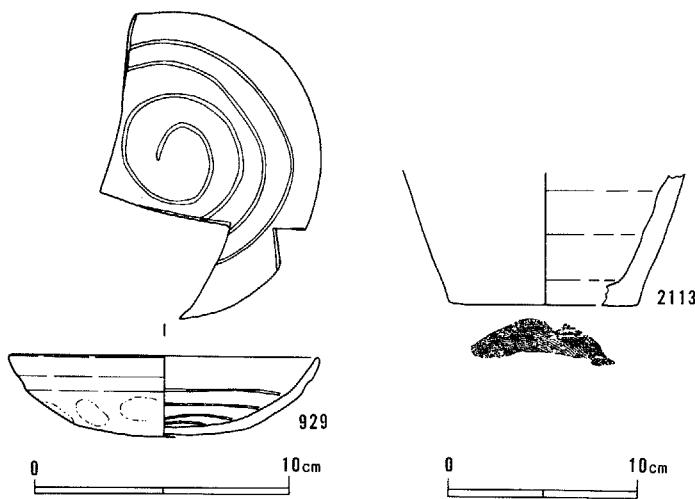


図95 SE01

S K 遺構

S K 9

溝状遺構で、最大幅2.5m、最深部で25cmで、東方の調査区外にのびていく遺構である。

出土遺物（762, 763, 764, 765）(図96)

瓦器椀（763, 764, 765）

(763)は、口径12.3cm、器高3.6cmで、外面口縁部はヨコナデ、体部は二段の指頭押捺の後にヨコナデで、底部はヨコナデである。内面は平滑にして、その上に断続の器面に沿った一周するミガキ暗文が、口縁部下から底部に4本なされている。高台は、断面四角形の低いものである。

(764)は、口径12.5cm、器高3cmで、外面口縁部はヨコナデ、体部から底部には二段の指頭圧痕の後ナデしている。内面もナデ仕上げである。高台は低い断面三角形である。

(765)は、口径15cm、器高5.2cmで、口縁部はヨコナデで、体部はナデた後水平にミガキがなされている。内面は口縁部から底部にミガキ暗文があり、底部はより密である。高台は、畳付の若干ある断面台形を呈している。

青磁椀（762）

底部だけで内外面に釉が及んで、高台、外面底部も施釉されている。底径は8cmである。

S K 11 (図96・98, PL105)

不整形な土坑で、最大長3.2m、最大幅3.0m、深さ15cmである。

出土遺物（703, 704, 705, 706, 707, 708, 2031, 2048）(図96)

土師器小皿（704, 708）

口径8cm、器高1.8cmの底部がやや上げ気味の土器で、口縁部の外方への反りが強い。内外面

共にナデ仕上げである。

(708) は、口径8.6cm、器高1.1cmで、底部も平滑に調整されている。内外面共にナデて仕上げている。

瓦器小皿（705）

口径8.6cm、器高1.5cmで、外面口縁部はヨコナデ、底部は指頭痕の凹凸があり、簡略なナデ仕上げである。

瓦器椀（706）

口径12.8cm、器高3.4cmで、外面口縁部はヨコナデをし、体部は二段の指頭圧痕がみられる。内面は一筆の器面に沿ったミガキ暗文が、口縁部から底部に到っている。高台は、低く断面台形を呈している。

こね鉢（703, 707）

底径9.2cmの底部片で須恵質であり、東播磨生産の土器である。内面、外面体部はヨコナデ、外面底部は回転糸切痕のままである。(707) は、口径19.6cm、器高6.6cmで、外面底部を除いてヨコナデ調整である。内面は平滑であり、外面は粘土紐の凹凸のままナデている。外面底部は、回転糸切痕のままである。底部の器肉はうすく2cmである。口縁部外面は黒色を呈している。

耳環（2048）

銅地の耳環で、全体に腐食しているため肥大している。現存の太さは径1.2~1.4cmで、全体径は4.0cmである。

土錘（2031）

下半を欠いている。最大幅1.4cm、現存の長さ3.3cmで、径が5mmの円孔が貫通している。

S K 1 3

短軸6mの長方形を呈する。方形状の落ち込みで、最深部は90cmである。

出土遺物（709, 710, 711, 712, 2070, 2071, 2073, 2084）

(図96, PL78・79)

土師器小皿（2070, 2071, 2073, 2084）

いづれも口径8cm前後で、器高は(2070)が1.1cm、(2071, 2073)が1.5cm前後で、(2084)は0.9cmである。(2084)の形態は他のものとやや異なっている。

土師器皿（2072, 2074）

口縁部のヨコナデ幅の違いによって、残存する成形時の指頭圧痕の様子も異なっている。似た法量であるが、成形の違いがみられる。

瓦器小皿（709, 710, 711）

(709) は、口径 8 cm、器高 1.6 cm で、内外面共にナデ仕上げで、外面底部は凹凸がみられる。

口縁部は部分によって、やや外方に反る部分と、体部から丸味をもっておさまる部分がある。

(710) は、口径 8.8 cm、器高 1.2 cm で、体部と底部が稜によってはっきりとしている。外面底部は、指押さえをして、その上をナデしている。他の内外面はナデ仕上げである。(711) は、口縁部が外に反り、ヨコナデしている。外面底部は指押さえの後ナデしている。

土師器鍋 (712)

口径 24 cm で体部下半を欠く。口縁部端はつまみ上げられ、内傾して口唇部を成形している。

口縁部内外はヨコナデで、外面頸部より下はナデ、内面は板状工具痕があり、これによってナデ仕上げをしている。

SK21 (PL32)

ほぼ正円形の掘方で、径 50 cm、深さ 30 cm であるが、出土する土器は多量である。

出土遺物 (713 ~ 716, 718 ~ 745) (図 97・98, PL79・80・81)

出土している土器は、土師器小皿、瓦器小皿、土師器皿、瓦器椀という器種の構成になっている。

ここで、小皿との分別を器高によっておこなう。小皿は、高さ 2 cm 以下のものとし、皿は、高さ 2 cm 以上のものとする。基本的にはいずれも高台はないものとする。また、小皿の口径は 9 cm 以下で、皿は 9 cm 以上とする。

土師器小皿 (714-1・2, 718, 719, 721, 722, 723-1・2, 724, 734, 738, 741, 742, 743)

これらの多くは、底部に指押さえの圧痕が残り、その上をナデでおさめている。外面口縁部と内面はナデ仕上げである。

瓦器小皿 (716, 720, 725, 726, 733, 735, 736, 2077)

これら瓦器小皿の調整も土師器小皿と同じものである。(725) は、重ね焼痕を残している。それは、積み重ねるものではなく、口縁部を下にして、土器の底約 3 分の 1 程度の部分を重ねているものである。

土師器皿 (728, 731, 737, 744)

(737) は、小皿と皿の分類の中間にある土器といえる。作りもほぼ小皿と同じであり、これは皿にも共通で、成形の違いも顕著にはみられない。外面底部の指押さえの上をナデ、他の内外面はナデ仕上げである。

瓦器椀 (713, 715, 729, 730, 732, 739, 740, 745, 2064)

瓦器椀は、基本的に高台のあるものを第一義とし、次いで器高の 2 cm 以上のものを瓦器椀とする。多くは口径 12 cm 以上であり、器高は 4.5 cm 前後である。いずれの高台も丸味の付け高台

で、断面三角形のはっきりしている土器は（713）だけで、（740）にいたっては、偏平の粘土紐を貼付た程度のものである。（732, 740, 745, 2064）は内面に一筆の螺線暗文がなされ、他の土器も部分的に暗文が残っている。

土師器羽釜（727）

口径20cmで体部下半を欠く。つばは、体部器面より0.5cmの張り出しで、低いものである。内面は水平な荒いハケ目の上を、右下がりの同じハケで調整している。

古銭

11枚の古銭が一連で銹着した状態で出土している。すべて宋銭と思われるが（3, 10, 11）については不明である。（1）は淳化元宝、（2, 8）は熙寧元宝、（4, 5）は元豐通宝、（6, 7）は元祐通宝、（9）は熙寧元宝である。

S K 2 2

S K21に隣接する土坑で、隅丸方形を呈し、長軸80cm、短軸60cm、深さ60cmである。

出土遺物（746, 747, 748, 749, 750）（図96, PL78）

この土坑の出土遺物は土師器小皿、皿に限られている。

土師器小皿（747, 748, 749, 750）

小皿と皿の分類は、前述のS K21の分類に従う。外面底部は、指押さえの上をナデで調整している土器が、（747, 748, 749）で、（749）は、指押さえ痕はみられず、ナデだけで調整している。他は内外面共ナデで、口縁部はヨコナデ仕上げである。

土師器皿（746）

器肉の厚さにむらのある土器で、外面底部に調整の板目状圧痕がみられる。内外面口縁部はヨコナデで、外面体部、内面はナデ調整である。

S K 2 3 （PL32）

この土坑は、S K21、22に隣接する土坑で、一方の辺は方形を呈し、対置する他方は円形の不整形な土坑で、長軸が70cm、短軸が60cm、深さ60cmの土坑である。

出土遺物（751, 752, 753, 754, 755, 756, 757, 758, 759, 760, 761, 783, 786）（図97, PL79・80・81）

この土坑の出土遺物も土師器小皿、皿に限られている。小皿、皿の分類は先のS K21の分類に準ずるものである。

土師器小皿（752, 753, 754, 757, 760, 761, 786）

外面底部は指押さえの後ナデている（760, 761, 786）と指押さえのままの（752）と、ナデだけの（752, 753, 754, 757）の三種の調整の違いがある。内外面口縁部はヨコナデ、内面はナデである。

土師器皿（751, 755, 756, 758, 759, 783）

口径11cm前後、器高2.8cm前後の群である。この土器も外面底部が指頭圧痕だけの（751, 755, 756）、指頭圧痕の後ナデている（783）、板目状圧痕を残している（758, 759）と底部調整で三種にわかかれている。

SK25

やや正円に近い土坑で、長さ60cm、幅50cm、深さ20cmである。

出土遺物（2065, 2066, 2067, 2068, 2069, 2079, 2080, 2081）（図96）

土師器小皿（2066, 2067）

いずれも口径8.5cm、器高1.8cmの同じ法量である。外面底部は指押さえの後ナデ、口縁部内外面はヨコナデ、内面底部はナデで、同じ調整である。

瓦器小皿（2068, 2069, 2079, 2080）

（2079, 2080）は口径7.5cm前後、器高1.6cmで、口縁部内外面はヨコナデ、外面底部は指押さえで、内面底部はいずれもナデ仕上げである。（2068, 2069）は、それぞれ口径8.2cm、8.7cmで、器高は1.5cm前後である。（2068）の外面底部には板目様の圧痕があり、（2069）は指押さえで成形の違いがみられる。

瓦器椀（2065, 2081）

（2065）の口径は13.3cm、器高4.5cmで、外面底部に貼付断面三角形の高台である。口縁部内外面はヨコナデ、外面体部は指押さえの上をナデしている。内面は、底部には一筆書き様のミガキ暗文がなされている。（2081）は、外面底部に偏平な断面四角形の貼付高台がなされている。口縁部内外面はヨコナデ、外面体部は指押さえが数段みられ、内面はミガキ暗文がなされている。

S G 遺構

S G 01 (PL33)

大きな落ち込みで長軸14m、短軸5mで深さ20cm～30cmである。ある時期に整地の際に出土したもの捨てた落ち込みであろう。

出土遺物（図99・100）

弥生土器

壺（904, 906, 914, 917, 927, 928）

（904, 927, 928）のいずれも二重口縁で、口縁部外面下端部に、貼付円形竹管文を付している。よく外面器壁の磨かれている土器である。（904）は頸部が垂直であることが顯著で

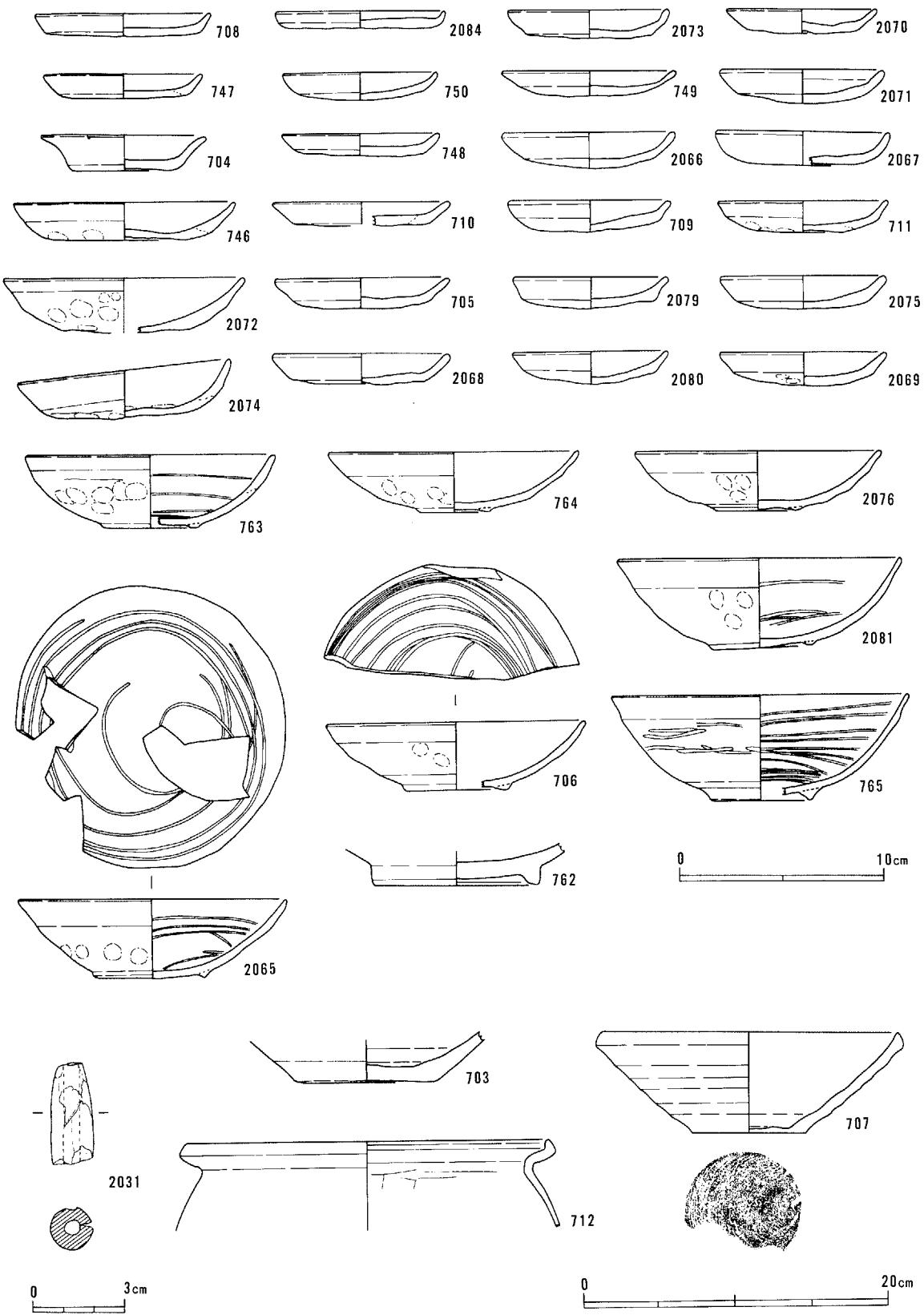


図96 SK09 SK11 SK13 SK14 SK22 SK25

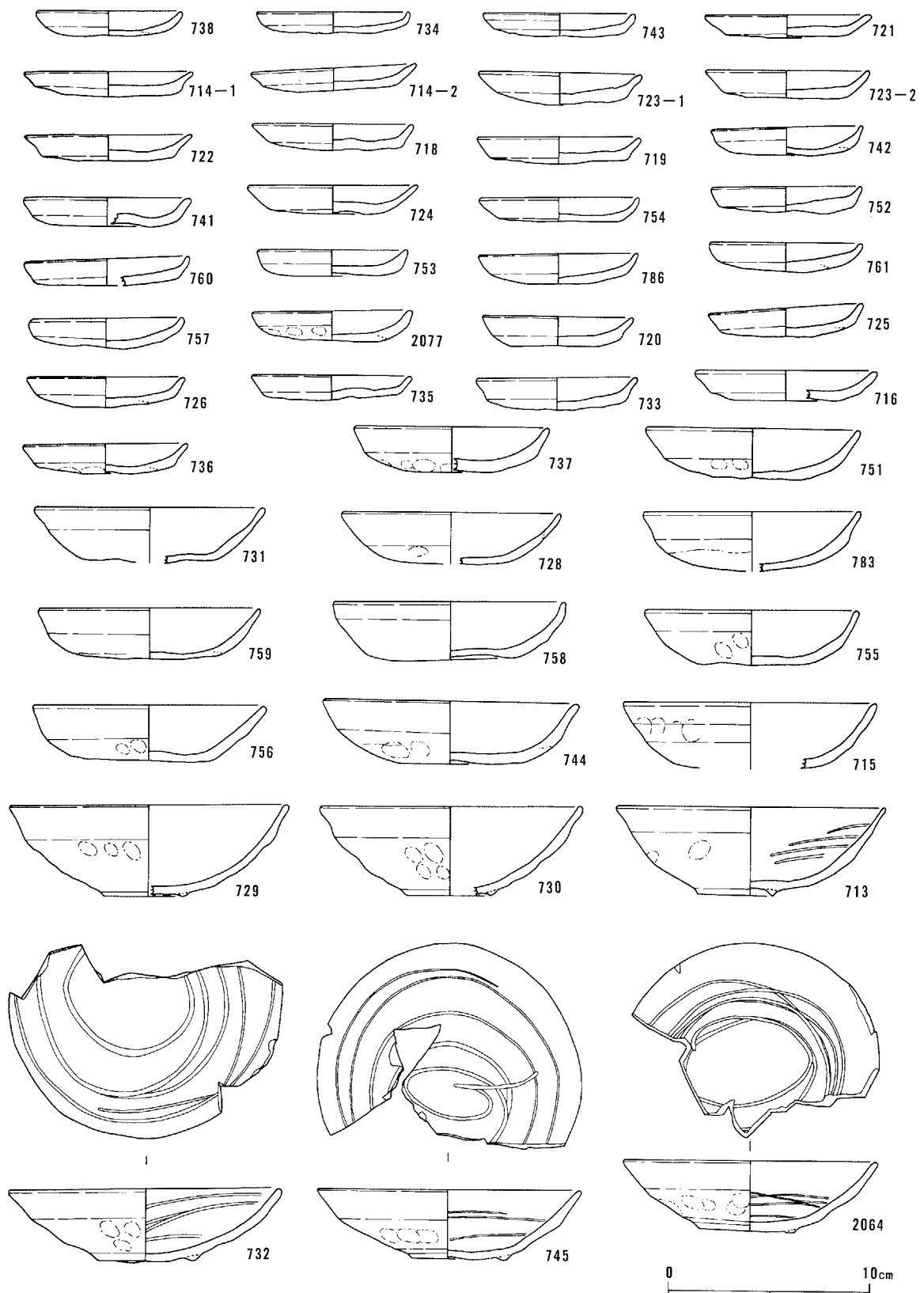


図97 SK21 SK23

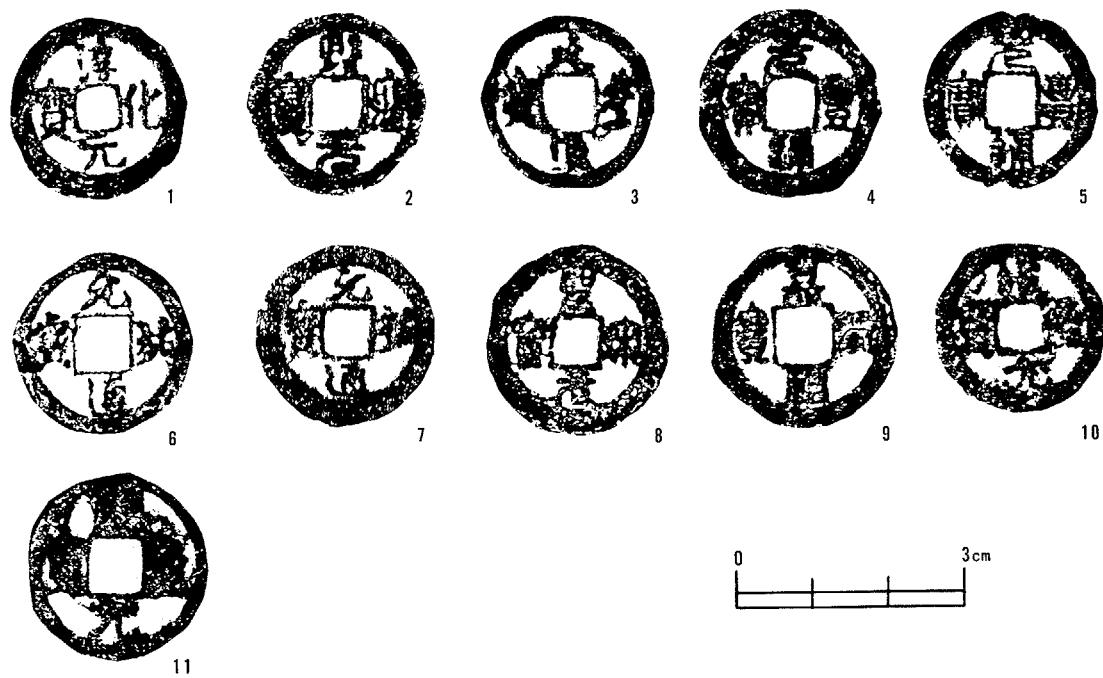
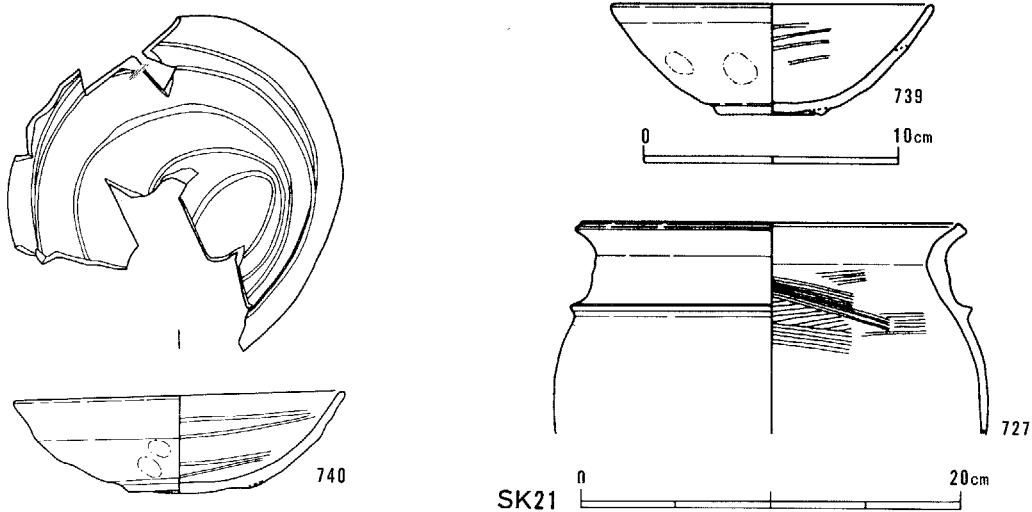
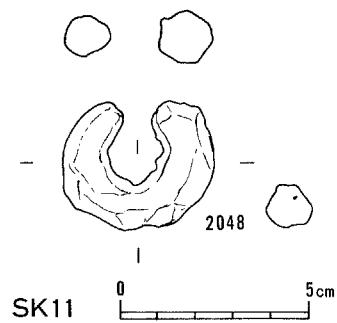


図98 SK11 SK21

ある。(917) は、頸部から口縁部にかけて垂直に成形されている。外面頸部の一部にタテ方向のハケ目、内面には水平のハケ目が調整として残っている。(906) は貼付底部で外面にタタキ目が残っている。あるいは(911)と同じ形態の小型壺の可能性がある。(914) は直口壺の口縁部で、口径14.4cmである。内外面調整は不明である。

甕 (903, 919, 921, 924)

(919, 921, 924) は頸部のくびれがくの字にはっきりしている一群で、(919) は、外面体部は右下がりのハケ目調整、内面は、体部上半が右上がり、体部下半は右下がりのヘラケズリがなされている。(903) は頸部の屈曲の弱い成形で、内面頸部下に指頭圧痕が残っている。

小型壺 (911)

口径10.7cm、器高8.5cmで、外面底部には雑に貼り付けた粘土板で底部を成形している。外面体部下半には右下がりのヘラミガキがなされ、内面頸部下には板状工具の当たり痕がみられる。

台付鉢 (910, 915)

小型壺に台についているもので、(910) の台はくの字に広がっているが、(915) の台は指頭圧痕をそのまま残してほぼ垂直な底部に成形している。

底部 (908, 923)

(908) はやや凹底の底部であり、(923) は、雑に粘土板を貼り付けて底部を成形しているものである。

高杯 (916, 920)

いずれも脚裾部で、脚部は中空であり、(920) には内面にしばり目がタテにみられる。(916) は杯部接合部から裾部に序々に広がっているもので、(920) とその形態を異にしている。

土師器甕 (922, 925)

(922) は、口径26.4cmで、口縁部がやや拡張されて、ヨコナデされている。体部外面はナデ、内面は指頭圧痕の上をナデている。(925) は口径28.2cmで、外面頸部下にはヨコ方向のハケ目がみられ、口縁部内外面はヨコナデ、頸部下はナデである。

鍋取手 (918)

体部との接合部から端部は、上方に成形されている偏平で凹んだ取手である。

須恵器杯身 (907)

口径10.5cm、器高3.9cmで、外面底部に幅広くヘラケズリがみられ、他の内外面はヨコナデである。外面には線刻によるのヘラ記号がなされている。

須恵器高杯 (912)

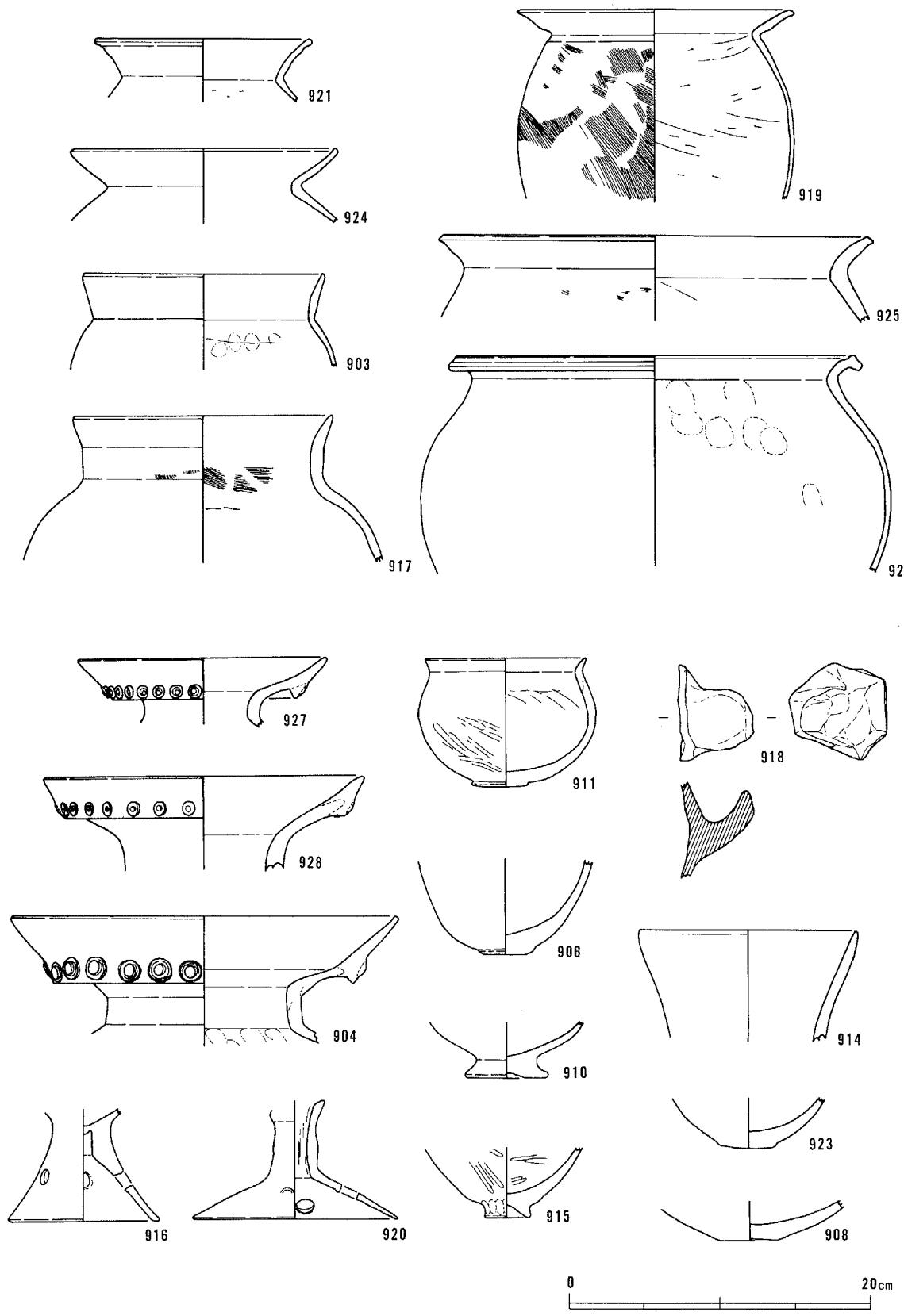


図99 SG01

長脚二段透の脚裾である。下段の透しは台形を呈し透しの上部には一条、下部には二条の凹線文がめぐっている。

須恵器壺（909）

頸部から体部にかけての肩部には明瞭の稜をもって成形されている。比較的藏骨等に利用される有蓋の器種と思われる。

土師器小皿（913）

口径7.4cm、器高1.4cmで、外面底部は指頭圧痕の上をナデ、口縁部はヨコナデ、底部はナデである。

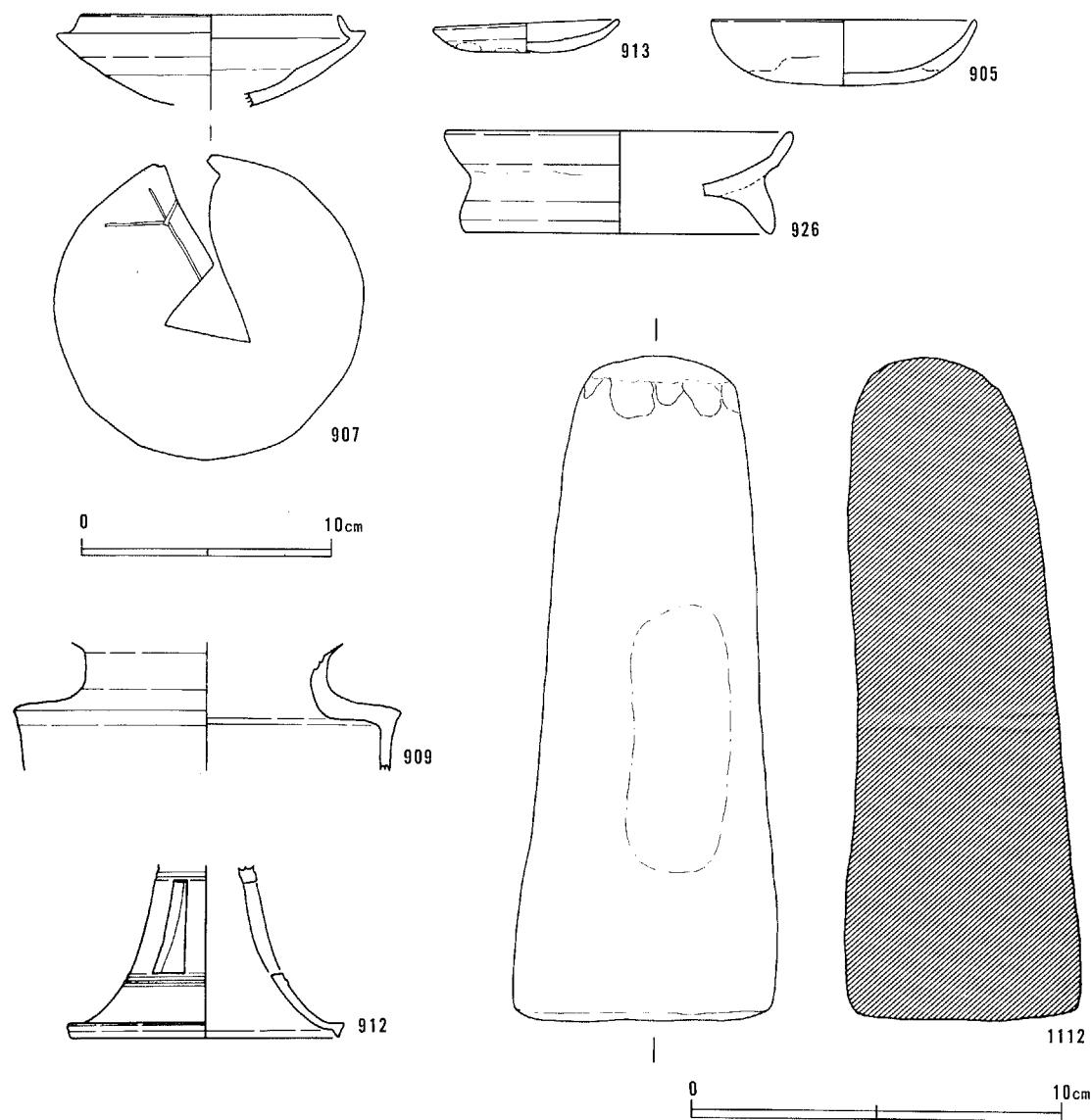


図100 SG01

土師器皿（905）

口径10.8cm、器高2.7cmで、口縁部内外面はヨコナデ、外面底部、内面底部はナデ仕上げである。

台付皿（926）

口径14.2cm、器高4.1cmで、台は非常に肉厚の貼付台で内外面ヨコナデ、口縁部内外面ヨコナデ、内面底部はナデ仕上げである。

石器

すり石（1112）（図100, PL104）

円柱状に全体が丁寧に磨かれて作成されている。最大長17.9cm、最大径7.1cmで、やや円錐となっており、長軸の両端の最大径である部分は、より磨かれている状態で水平な面となっている。他方の端は丸味をもっておさまっている。この面も使用されていたことがうかがえ、一方の水平な面をなす端面はすり石として、他方の面は叩き石として利用したものと考えられる。

SD遺構

SD01

南北の調査壁に沿った溝状遺構で、現存幅は70cmである。

出土遺物（1113）（図101, PL103）

石斧（1113）は半折した刃部の部分で緑泥片岩を素材としている。幅6cm、残存部の最大厚3.9cmの全面磨製の石斧である。折断面は若干の加工磨きがみられ、また両縁辺にすり減った部分が

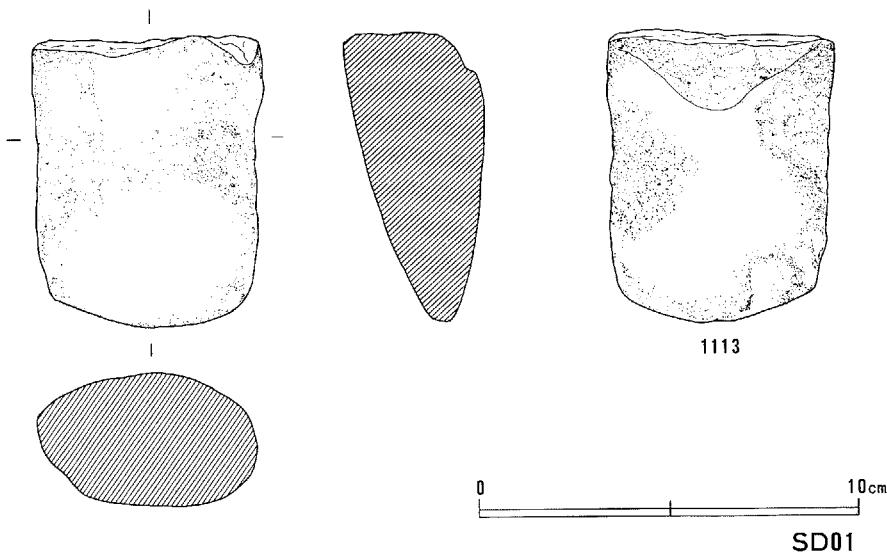


図101 SD01

あることより、半折後も再利用した可能性がある。

S D 0 8

南北流の溝状遺構で、S E 1に切られている。幅60cm、深さ20cmである。

出土遺物（798）（図103）

須恵器蓋（798）

口径11.8cm、器高4.2cmで、天井部外面はヘラケズリで頂部にケズリ残しがある。返りはなく、外面天井部のヘラケズリ以外の内外面は回転によるヨコナデ仕上げである。

S D 0 9

南北流の溝状遺構で、幅1m、深さ60cm～170cmの人工の溝状遺構である。

出土遺物（787, 788, 789, 790, 791-1・2, 792, 793, 794, 795, 796, 797, 799, 800, 801, 802, 803, 804, 805, 806, 807, 808, 809, 810, 811, 812, 813, 814, 815, 817, 818, 819, 820, 821, 822, 823, 824, 825, 826, 2014, 2089）（図102・103, PL82・83）

弥生土器（815, 788, 792, 2089）

(815) (2089) は、口縁部内外面はヨコナデで、頸部下体部は左下がりのタタキ目が残っている。(788) は、高杯で据部を欠いている杯部外面はタテ方向の丁寧なヘラミガキであるが、杯部内面、脚部内外面については調整は不明である。

(792) は鉢で、内外面磨滅している。内面体部には、ヘラケズリがみられる。

土師器（797, 816, 817, 819, 822, 825）

土師器壺（819）

口径18cmで、体部下半を欠く。内外器壁は磨滅して調整は不明である。

土師器甕（822）

口縁部から頸部がゆるやかに屈曲している甕で、口径14.6cmで、外面は口縁部から体部にタテ方向の荒いハケがなされ、頸部はその上を水平な同じハケで調整している。口縁部内面は水平の荒いハケで、頸部は水平の荒いハケの上をヨコナデしている。体部は上部に指頭押捺痕、粘土紐痕が顕著に残っている。

土師器鍋（2014）

口径31cm、残存高15cmで、対に肉厚の把手が貼付けられている。口縁部内面にヨコ方向のハケ目、外面体部はタテ方向のハケ目調整がみられる。

土師器高杯（816, 825）

(825) は、高杯杯部で、器表は全体に磨滅している。杯部の深い高杯である。(816) は、

脚部から裾部で、裾部径は12.3cmである。脚部内面にはヨコ方向のヘラケズリがみられる。

土師器椀（817, 797）

(817) は、口径11.7cm、器高4.2cmで、外面に細く、幅の広いハケ目が不定方向にみられ、ハケの上をナデている。内面はナデで、口縁部内外面はヨコナデである。(797) は、口径14.8cm、器高5.8cmである。内外面は磨滅して調整は不明である。

土師器小皿（791-1, 2）

両者の口径は11cm、器高2.5cm前後で、外面体部、底部の指押さえ成形、口縁部内外面のヨコナデ、内面のナデ仕上げを、成形も調整も同じである。(791-2) は、外面全体に煤の付着がみられる。

須恵器杯蓋（793, 790, 800, 801, 802, 804, 806, 811, 813, 814）

杯蓋は、いずれも反りがなく、口縁部の立ち上がり具合に違いがみられるが、明瞭な稜を作出していない。便宜上形態から三種に分ける。類は、口縁部が立ち上がって体部に至るに、垂直にたつもので、(793, 804, 806) がこれで、口径12cm～13cm、器高4cmである。(806) は外面天井部にヘラ記号がなされている。類は、口縁部から体部にかけて、体部の傾斜をある程度維持して、斜めに口縁部が形成されるもので(790, 800, 801, 802, 814) がこれらである。口径13cm前後で、器高が3.5cm前後のものと4cm～5cmのものがある。この器高の低い類が、III類の系譜にあるといえる。(790, 802) の外面天井部にヘラ記号がみられる。

III類は(811, 813) で、II類に比して器高の低い類である。口径13cm、器高3cmである。成形は、各類に共通で、外面天井部はヘラケズリで、他の内外面はヨコナデである。

須恵器杯身（794, 795, 796, 799, 805, 807, 808, 809, 810, 812, 820, 824, 826）

杯身は、受け部の形態で三類に分類する。I類は、受け部が凹んで、受け部が、口縁部に比較的接近している類で(796, 799, 805, 812, 820) 等である。口径が12cm前後で、器高が4cm前後である。II類は、受け部の凹みが浅く、受け部の退化が顕著なもので、(794, 795, 807, 808) の類である。口径は12cm、器高4cm前後と類と法量としては変化はない。(826) は法量としては、他の類より大きいが形態上類にいれておく。III類は(809, 810, 824) で、受け部の凹みが水平化しているものである。(809) に至っては受け部としての機能がほとんどなくなっている形態といえる。

須恵器壺（787, 803, 818, 821）

いずれも、口縁部は拡張されることなく成形されている土器類である。(787) は、頸縁部

下はタテ方向のタタキ目、内面は青海波文を残している。(813) は、口縁部から頸部にかけて荒いカキ目調整である。頸部下は欠損している。(818) は、右下がりタタキの後にカキ目調整である。体部下半に青海波文をのこしている。(821) は、内外面ナデ仕上げで、他の壺類とは成形が異なっている。肩部に沈線が施されている。(789) は、長頸壺の口縁部で、内外面ヨコナデ仕上げであるが、内面には粘土紐痕の凹凸が顕著である。

須恵器高杯 (823)

口径12.9cm、杯部の深さ5.5cmである。外面には杯部成形の段がみられ、底部にはヘラケズリがなされているが、他の部分はヨコナデである。

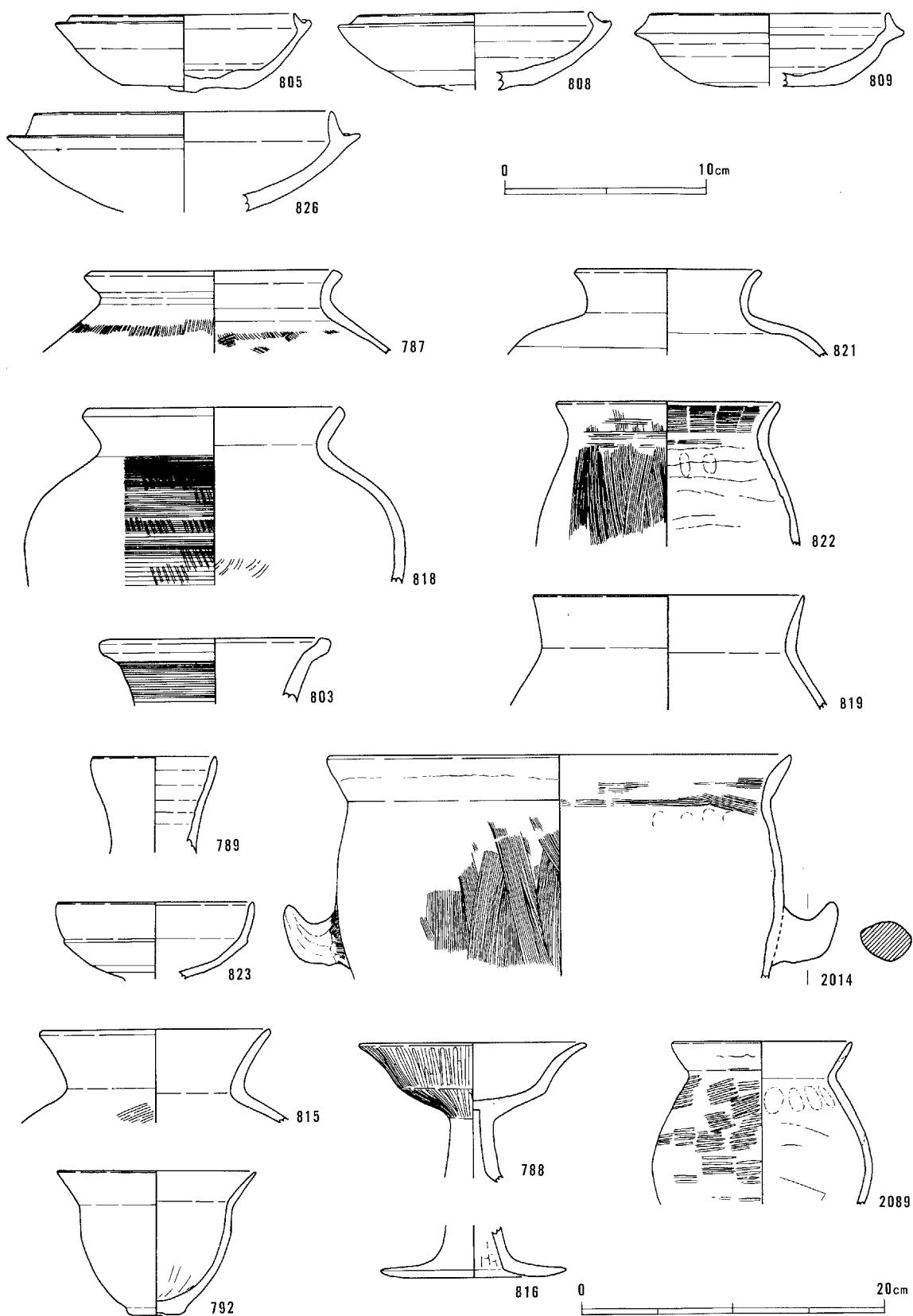


図102 SD09

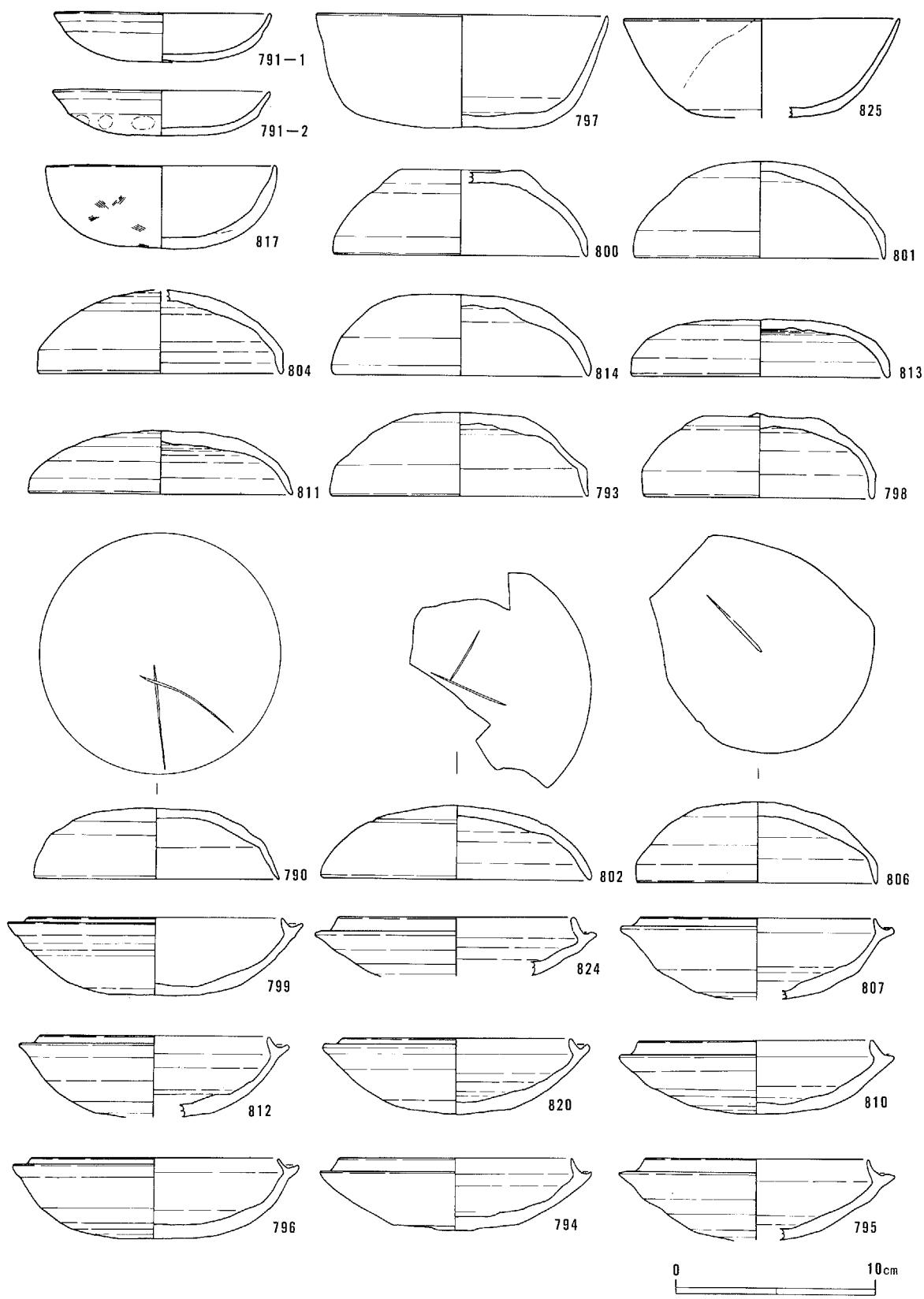


図103 SD08 SD09

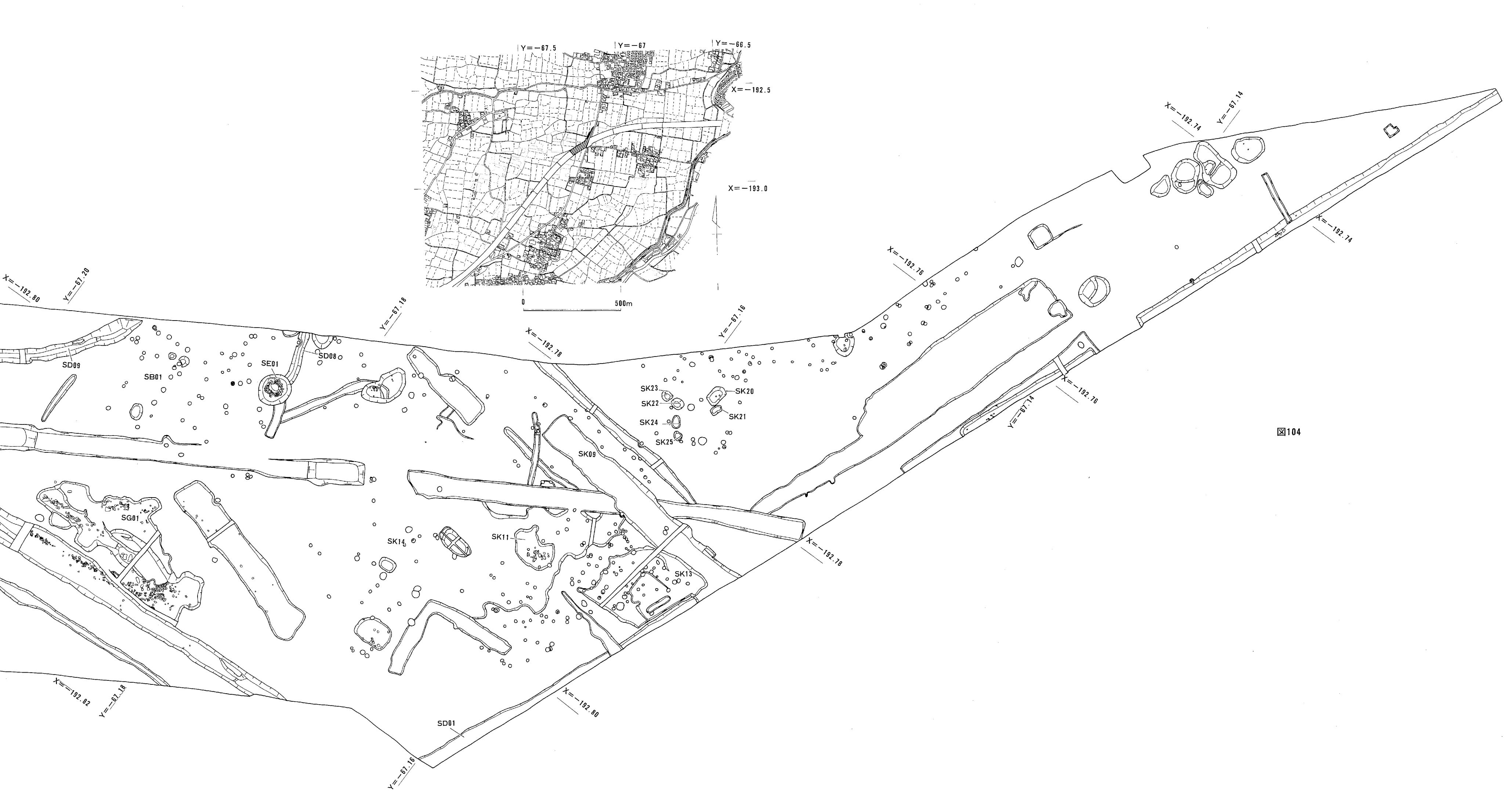


図104

VII区中面の遺構と遺物

SE遺構

SE101 (図106, PL35)

掘方の三分の一は調査区外に至る井戸である。ほぼ円形の掘方で、径340cmで、底には削り抜き一本作りのくすの木を素材とした井戸枠があり、底径は230cmである。

出土遺物 (930, 931, 932, 2023) (図105, PL85)

瓦器 (930, 931, 932)

(930, 932) は瓦器小皿で、(932) は口径7.7cm、器高1.6cmである。外面底部は、指頭圧痕の後ナデている。他の口縁部の内外面はヨコナデで、内面はナデている。

(930) も同じ調整である。

(931) は、瓦器椀で、口径12.7cm、器高4cmである。口縁部内外面は、ヨコナデ、外面体部は指頭圧痕があり、その上をナデている。内面は体部に、水平方向のミガキ暗文の上を右下がり暗文がなされている。高台の始末は悪く、外面体部から高台にかけて、体部の角度で接合、ナデ調整をしているため一種上底風になっている。

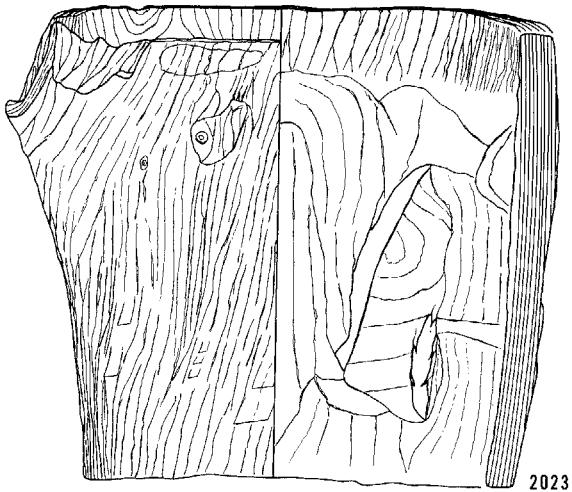
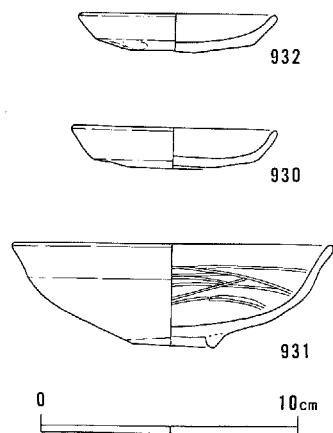
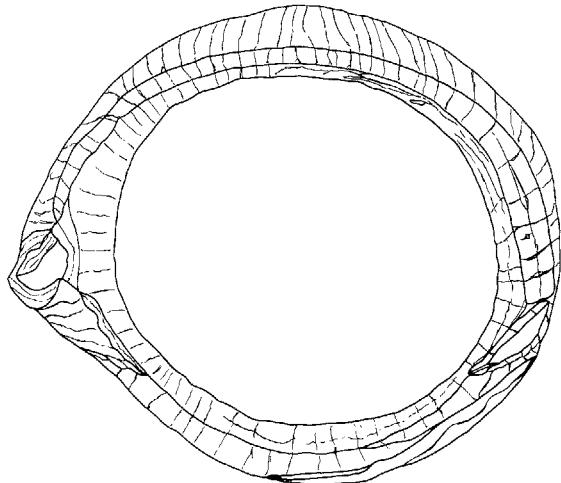


図105 SE101

井戸枠 (2023) (図105, PL85)

円形に割り抜いたもので、上端の略々長径55cm、短径45cm、下端で長径40cm、短径36cm、高さ50cmで太い方を上端にしている。厚さは5cmである。

S X 遺構

S X 01 (図107)

長楕円形の土坑で、長軸100cm、短軸80cm、深さ5cmの浅い土坑である。土坑底には、河原石を敷き詰めている。

S X 02 (図107)

長楕円形の土坑で、長軸150cm、短軸100cm、深さ20cmの土坑である。

S X 01と同じように土坑の底に河原石を敷いている。

S X 03 (図108)

長楕円形の土坑で、長軸130cm、短軸90cm、深さ90cmの土坑で、三基の中でもっとも深い土坑である。

S K 遺構

S K 1 0 2

不定形な土坑で、北部部分は調査区外である。現存の最大幅が3.8mで、深さ10cmである。

出土遺物 (766, 767, 768) (図108)

出土している土器は、いずれも土師器である。

土師器小皿 (766, 768)

(768) は口径7.8cm、器高0.9

cmで、口縁部内外面はヨコ

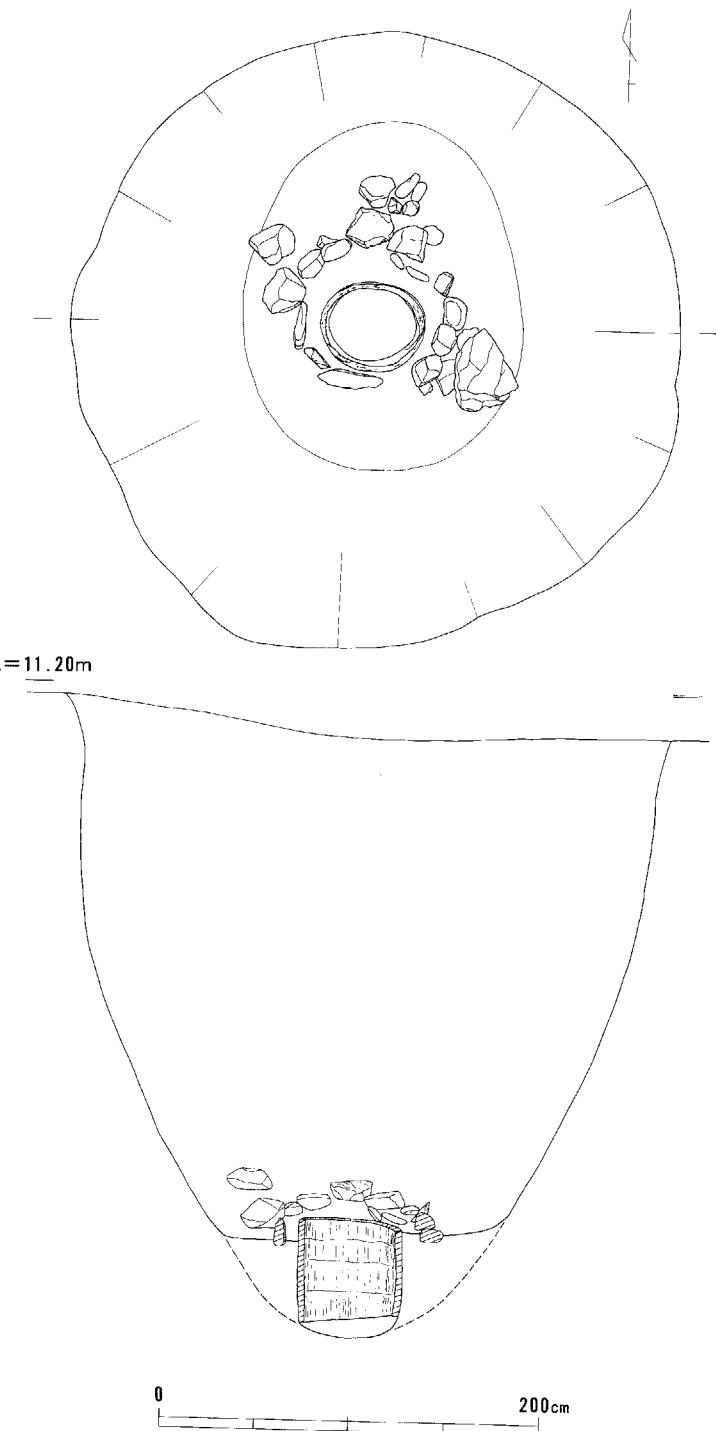


図106 SE101

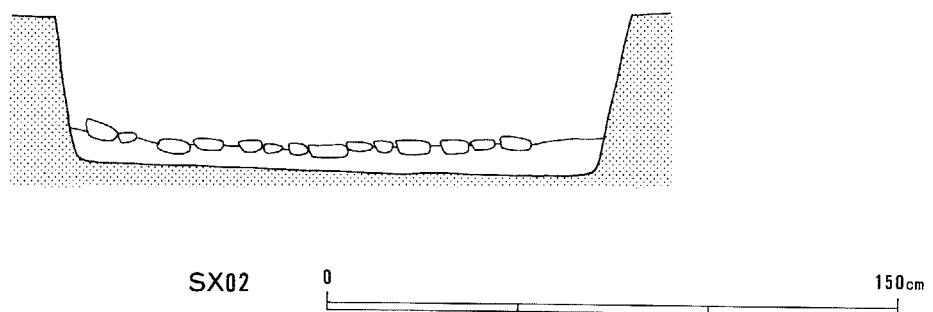
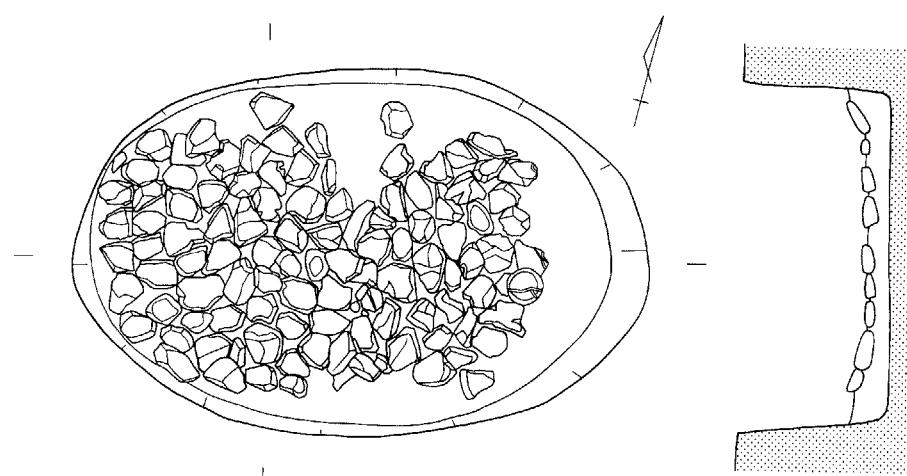
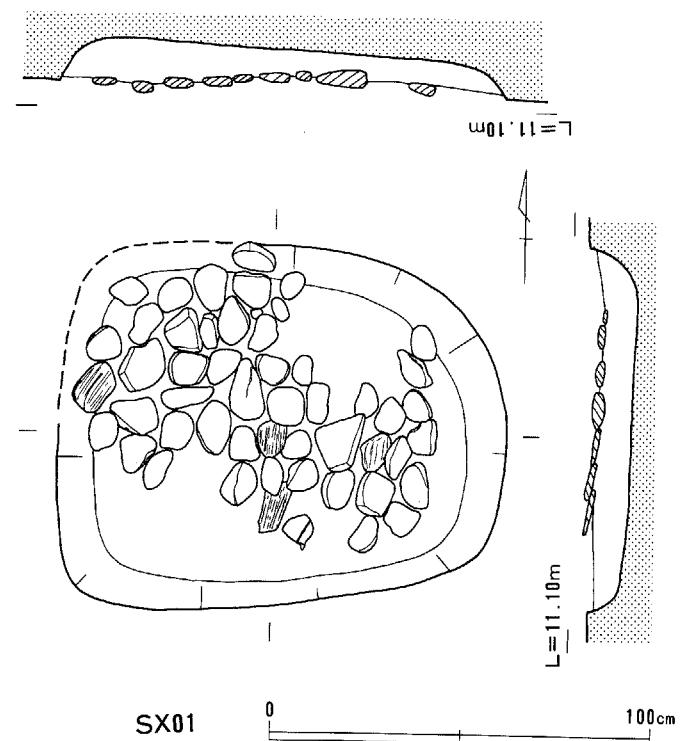
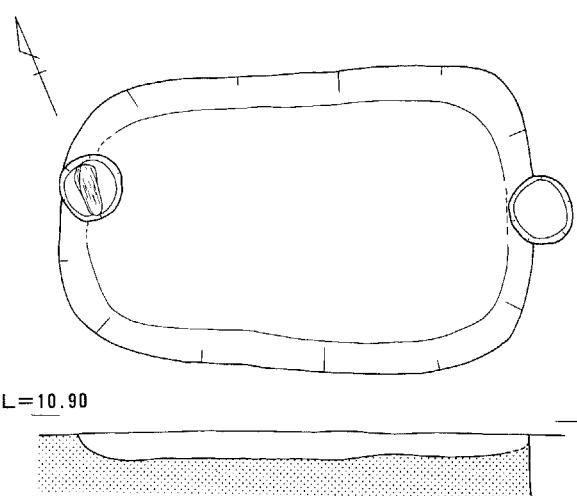


図107 SX01 SX02



SX03

0 100cm

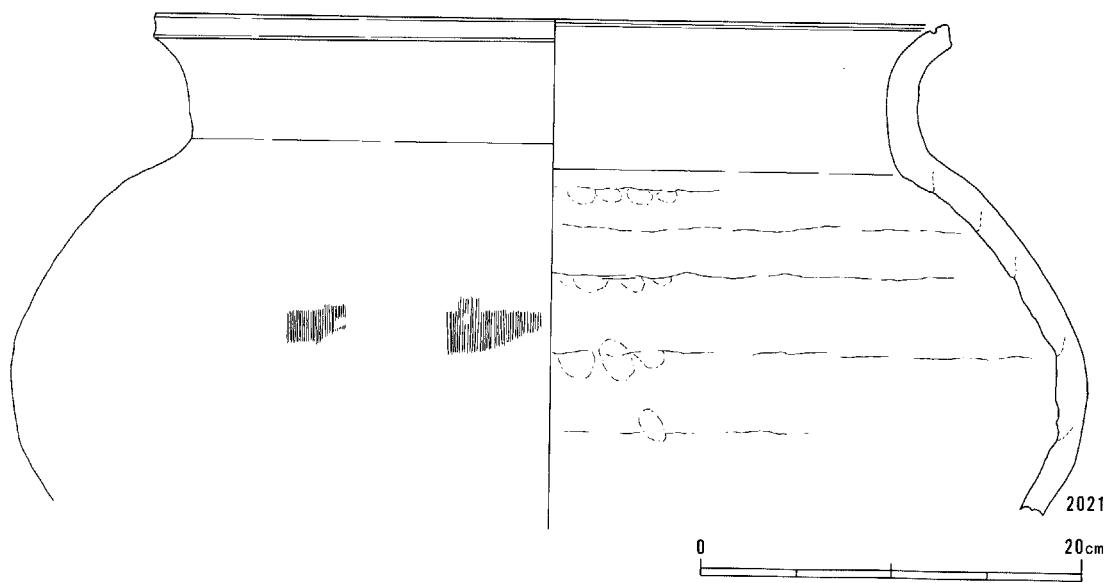
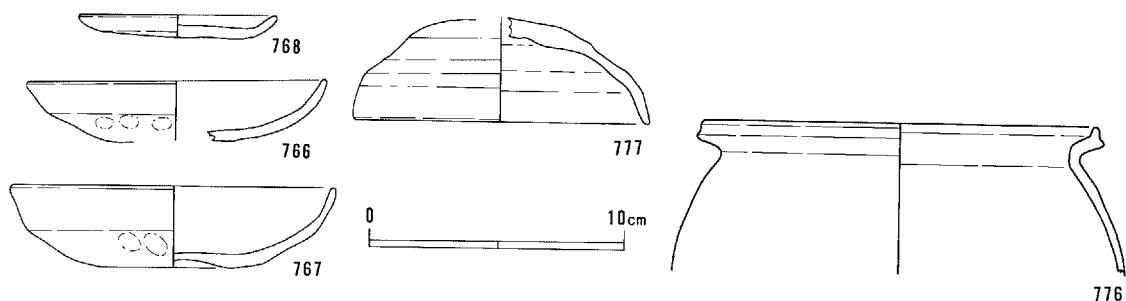


図108 SX03 SK102 SK112

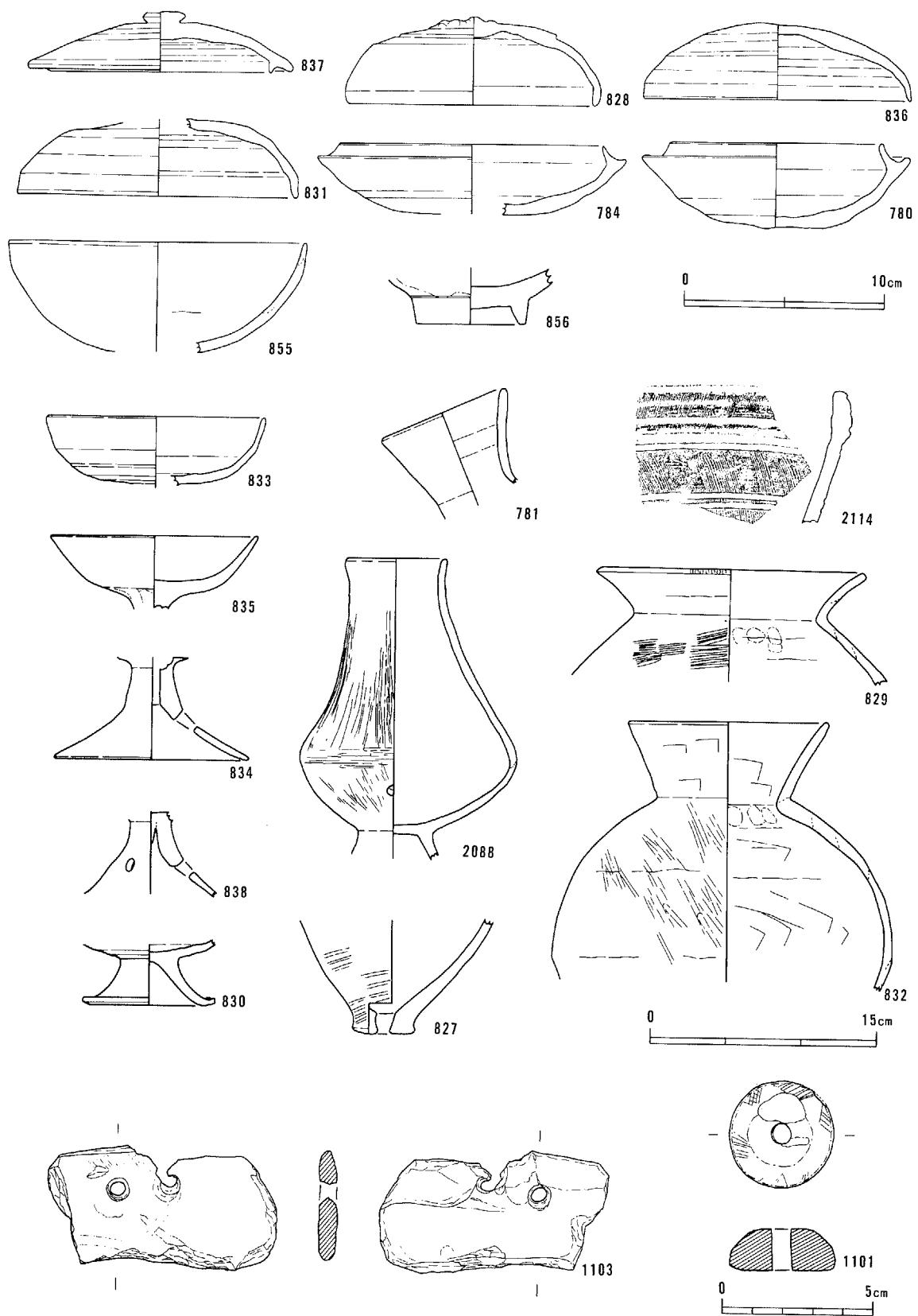


図109 SD101 SD102 SD105 SD110

ナデ、他は内外面共にナデ仕上げである。(766) は、口径11.8cm、器高2.6cmで、(768) より器高の高い小皿である。底部は指頭痕があり、指押さえの後ナデしている。口縁部内外面は、ヨコナデで他はナデ仕上げである。

土師器椀 (767)

口径12.8cm、器高3.3cmで、外面底部は指頭圧痕があり、その上をナデしている。口縁部内外面は、ヨコナデで、内面底部はナデ仕上げである。

S K 1 1 2

不定形な土坑で、最大長180cm、最大幅100cm、深さ20cmである。

出土遺物 (776, 777, 2021)

(図108)

土師器甕 (776)

口径20.8cmで、体部下半を欠損する。口唇部は、つまみ上げられて立ち上がる。全面ナデ仕上げで、外面器壁には煤が付着している。

須恵器蓋 (777)

口径11.4cm、器高4.1cmである。外面天井部はケズリ痕がみられない。内外面は、回転によるヨコナデ仕上げである。

常滑甕 (2021)

口径41cmで、体部下半を欠損している。残存高は25cmで、最大径は体部中央にあり径57cmである。口縁部内面に一条の凹線文がめぐり、口唇部端は垂直である。外面体部には部分的にタテ方向のタタキ目、内面体部には粘土紐痕が残り、外面には自然釉が部分的にみられる。

S D 遺構

S D 1 0 1

東西流の溝状遺構で、最大幅180cm、深さ50cmである。

出土遺物 (827, 828, 829, 830, 831, 832, 833, 834, 835, 836, 838, 2144)(図109, PL83)

弥生土器 (827, 829, 832, 834, 835, 836, 838)

弥生土器壺 (832) は直口壺で口径13.2cmで、最大幅は体部中央にあり、23cmである。口縁部内外面は板状工具による調整の後にヨコナデをしている。外面体部は右下がりのヘラミガキで、成形時の接合痕が残っている。内面頸部は、指頭押圧痕がみられ、外面調整と同じ板状工具による平滑化がなされている。

(829) は、甕で口径17.5cmである。口唇部に幅の広いキザミ目があり、外面体部は水平のタ

タキである。頸部内面は鋭い稜で、頸部下は指頭圧痕がみられる。

(827) は甌の底部で、外面は左下がりのタタキ目、内面は板状工具の扇状の調整ハケ目がみられる。

(834, 835, 838) は高杯で、(835) は杯部、(834, 838) は脚部、裾部である。(835) は、口径13.7cmで、杯部と脚部の接合部分は、接合時の指頭圧痕がみられる。(834) は、中空で円盤充填の剥落がみられ、裾部にケズリ痕がある。(838) は、全体に磨滅している。

須恵器 (828, 830, 831, 833, 836)

須恵器杯蓋 (828, 831, 836)

いずれも反りのない蓋で、形態も良く似ている。(828) は口径12.3cm、(831) は14cm、(836) は13.5cm、器高はいずれも4cmである。(828) の天井部はヘラケズリであるが切離し痕までケズってはいない。

須恵器高杯 (830, 833)

(830) は、脚の低い高杯で杯底部まで3.5cm、裾部径9cmで、全体ナデて仕上げているが、杯底部を脚部の外面接合部にヘラケズリが残っている。(833) は、杯部の外面底部から脚部の接合部まで、ヘラケズリがみられ、杯部口縁部内外面は、ヨコナデ、内面底部は不定方向のナデで調整している。

須恵器甌 (2114)

甌口縁部片で、口縁部はやや肥厚され、二条の凹線をもって頸部との堺としている。外面口縁部は左下がりのハケ目、頸部は右下がりのハケ目である。

S D 1 0 2

東西流の細い溝状遺構で、幅50cm、深さ90cmで、幅の割には非常に深い溝である。

出土遺物 (837)(図109)

須恵器 (837)

須恵器杯蓋 (837)

天井部に偏平な宝珠形のつまみのある蓋で、口縁部が受け部よりわずか高く作られている。

天井部外面は比較的幅広くヘラケズリのままである。他の内外面は回転によるヨコナデである。

S D 1 0 5

東西流の溝状遺構で、幾度か改修が加えられていたため、幅員が不安定である。最大幅250cm、深さ25cmである。

出土遺物 (780, 781, 784, 855, 856, 1101)(図109, PL104)

土師器 (855)

土師器高杯（855）

あるいは高杯の杯部とあつかっているが、鉢の類とも考えられる。全面磨滅している。口径14.8cm、器高5.5cmで橙色の色調である。

須恵器（780, 781, 784）

須恵器杯身（780, 784）

(780, 784) はそれぞれ受け部があり、(780) は口径10.7cm、器高4.4cm、(784) は、口径13.3cm、器高3.5cmである。

須恵器平瓶（781）

平瓶の口縁部で、口径8.5cmで、内面に粘土紐の凹凸がみられる。内外面共に回転によるナデ仕上げである。

磁器（856）

白磁椀（856）

椀の底部で、高台は高くケズられている。外面高台部分から畳付、底部と露胎であり、他の内外面は施釉を行っている。高台径5.5cmである。

石製紡錘車（1101）

淡い茶色を呈する滑石製で、中心に径0.65mmの円孔がある。断面台形を呈しているが、上面から斜面、そして垂直面が底部に至る断面六角形で、斜面部分に線刻による三角鋸歯文が六個描かれている。上部径2.2cm、斜面径3.3cm、底部径3.6cm、厚さ1.4cmである。

S D 1 1 0

東西流の、幅170cm、深さ35cmの溝状遺構である。

出土遺物（1103）

石包丁（1103）(図109, PL104)

非常に風化している縁泥片岩を素材にした石包丁で、半裁した石包丁を再利用するために円孔を穿孔中に背部が剥落して棄てられたものであろう。現存長7.5cm、幅7.3cm、厚さ0.6cmである。刃部の研ぎ出しがあまり。



VI区下面の遺構と遺物

S E 遺構

SE102 (図111, PL36)

掘方は円形で、径2mあり、自然石の乱石積みである。底には曲物の井筒があった。深さは150cmである。

SE103 (図111, PL37)

円形の堀方で、径360cmである。石積みの井戸で、石積みの上端径は80cmで、遺構面とするとこの生活面から80cmの深さである。

SE104 (図112, PL37)

この井戸は石積みではなく素掘りの井戸である。上端径350cmで、底径は160cmで、底から曲物の井筒が三段に重ねられ、さらに板材で四角柱で曲物を囲っているものである。最下段の曲物は消耗が激しく取上げができなかった。

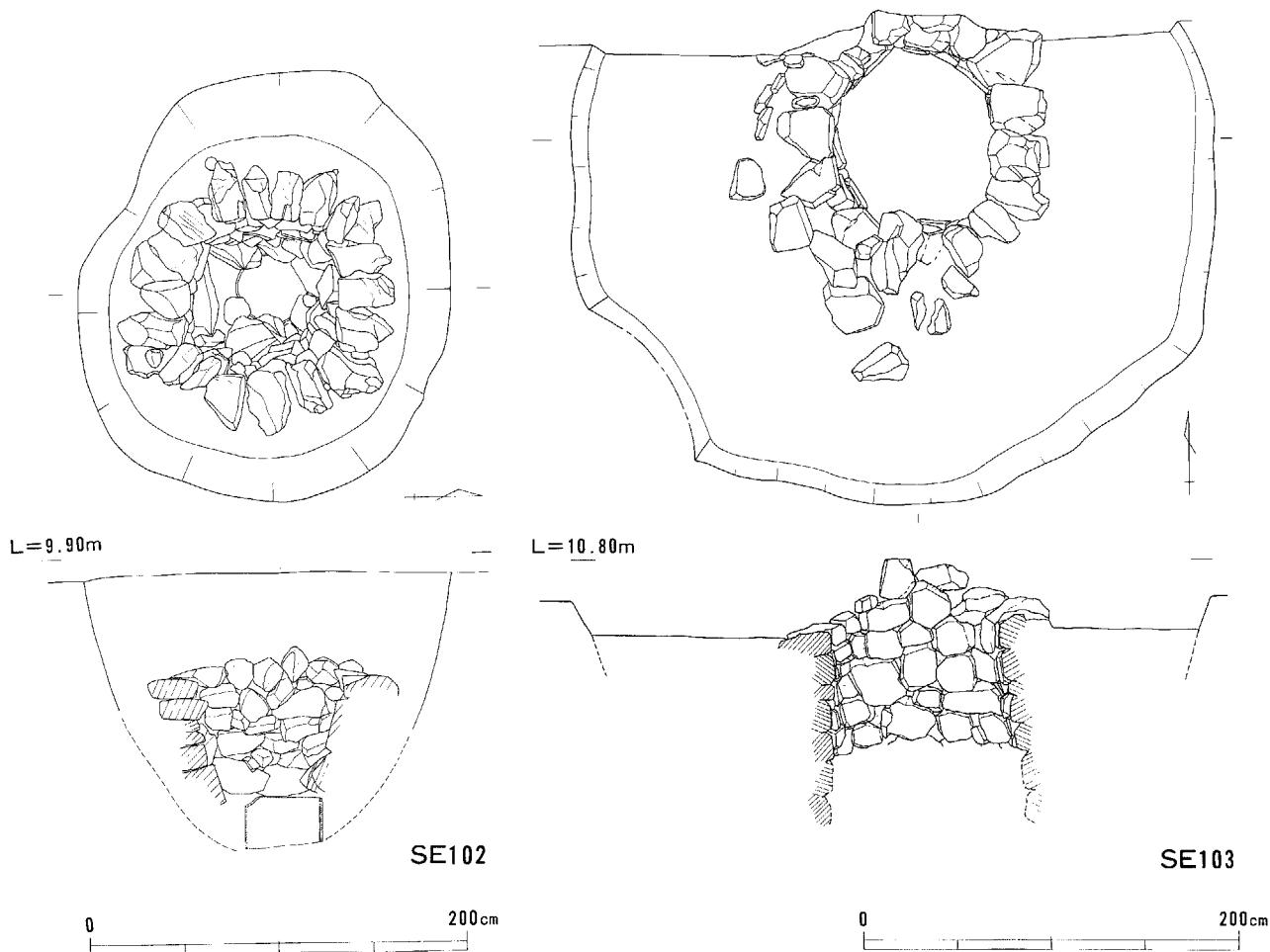


図111 SE102 SE103

出土遺物 (785, 933, 934, 935, 936, 937, 938, 939, 940,
941, 942, 943, 944, 945, 946, 2016, 2025, 2026)
(図113・114・115, PL84・85)

土師器小皿 (935, 938, 939, 946)

これらは、口径8cmから9cm、器高1.3cmの土器である。いずれも外面底部は、指頭圧痕の上をナデており、口縁部内外面はヨコナデ、内面底部はナデ仕上げである。

土師器皿 (934)

口径13.2cm、器高3.4cmで、外面体部から底部は指頭圧痕がみられ、その上をナデしている。口縁部内外面はヨコナデ、内面はナデ仕上げである。なお、内面に煤が付着している。

瓦器碗 (785, 933, 936, 937, 940, 941, 943, 944, 945,)

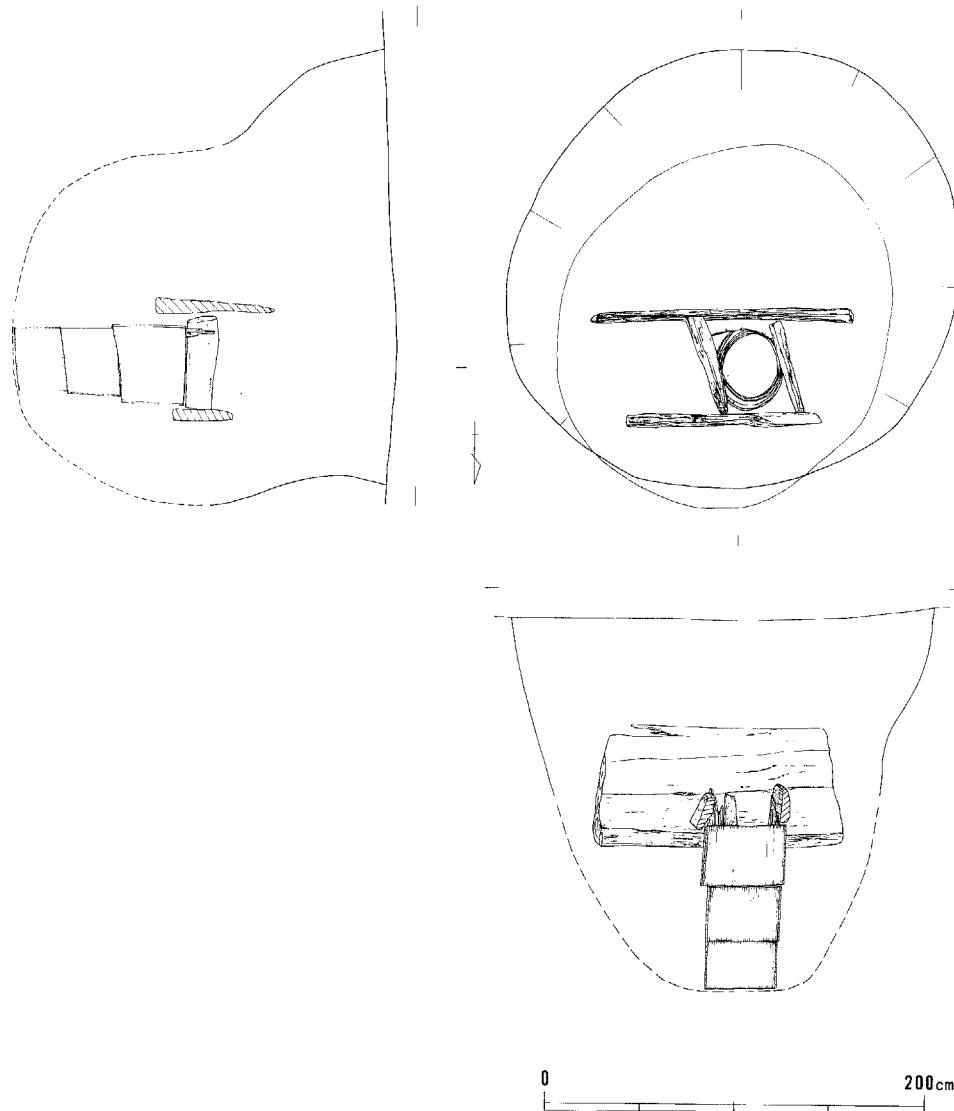


図112 SE104

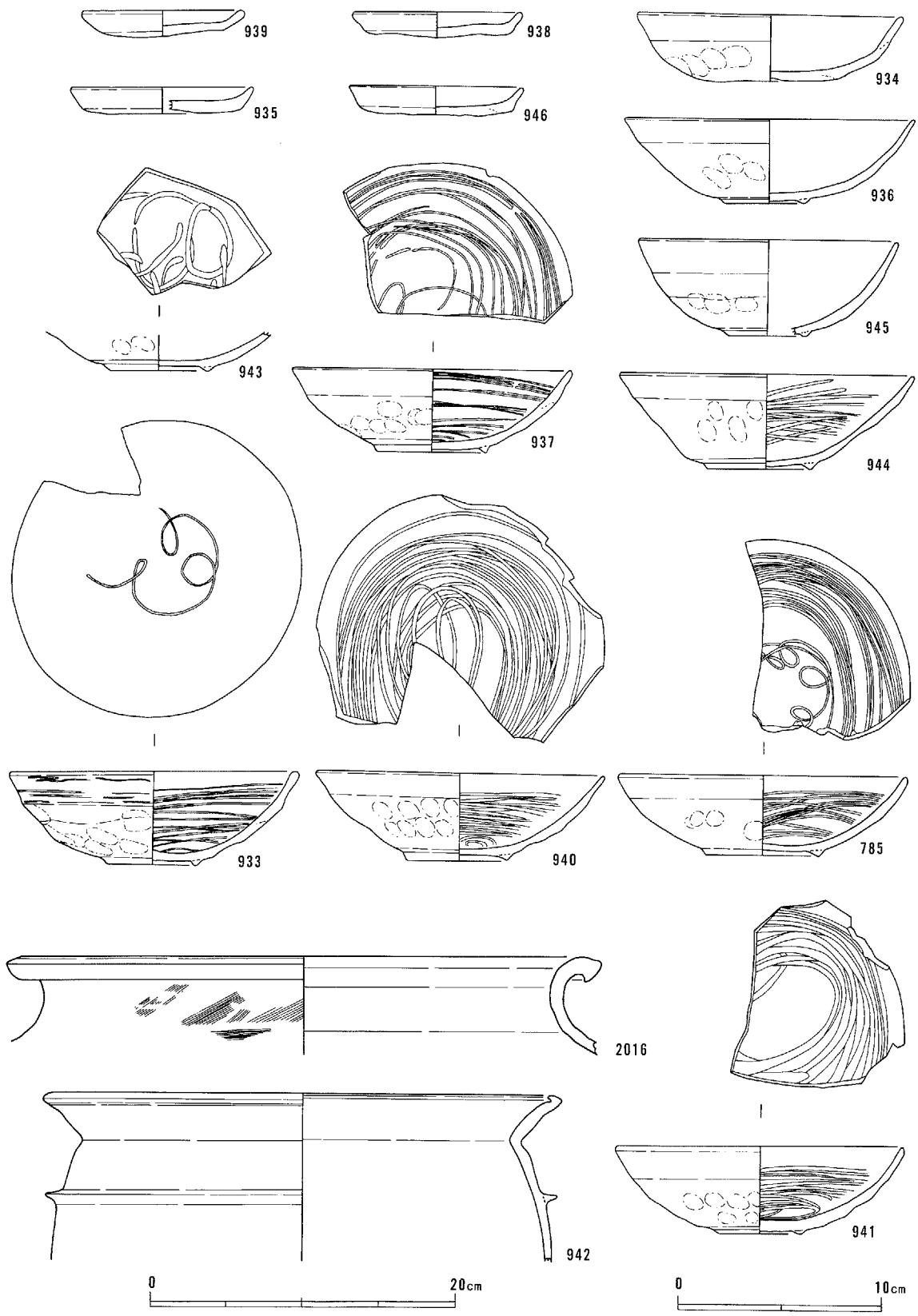


図113 SE104

(933) を除いて他のものは二分の一以上欠損している状況で出土している。(943) を除いてのそれぞれの口径は、13cmの(945)、14cm前後の(785, 933, 937, 940, 941)があり、15cm前後の椀は(936, 944)がある。この口径に対し、器高は4.2cm~4.4cmの(933, 936, 937, 940, 941)と器高4.7cmの(944, 945)とがあり、(945)は小さい口径で高い器高の椀である。また(936)は大きい口径で、低い口径と、相対的な変化はみることができる。高台の形態では、高台の断面三角形がはっきりしている(933, 936, 937, 940, 944)と、高台が低く丸味をもっている(941, 943, 945)にわけられる。器面の調整は、口縁部内外面はヨコナデ、外表面体部は指頭圧痕の上をナデ、高台部分はヨコナデ、底部はナデ仕上げと共に通しているが、(933)は外面口縁部と体部の界までヨコ方向のミガキがみられ、他と異なっている。内面のミガキ暗文が残っている椀は(944)を除いて底部から体部まで施され、(944)は、底部に暗文はみられない。

土師器羽釜（942）

口径32.8cmで、体部下半は欠いている。口唇部端内面は極度に内傾化している。つばは貼り付けで接合部で幅0.8cm、高さ0.8cmの、つばの幅が狭く、高さの低いものである。外面と内面頸部下までヨコナデ仕上げで、内面体部は不定方向のナデ仕上げである。外面頸部からつばの間に炭火物の付着がみられる。

須恵質甕（2016）

口径39cmで、口縁部端は、下方に肥厚されて、巻きぎみである。外面頸部は左下がりのハケ目、頸部から体部にかけて水平なハケ目調整である。

曲物（2025, 2026）

三段に組まれたもので、下段の曲物は採集不可能であった。中段の(2026)は、径が42cmで、高さが34

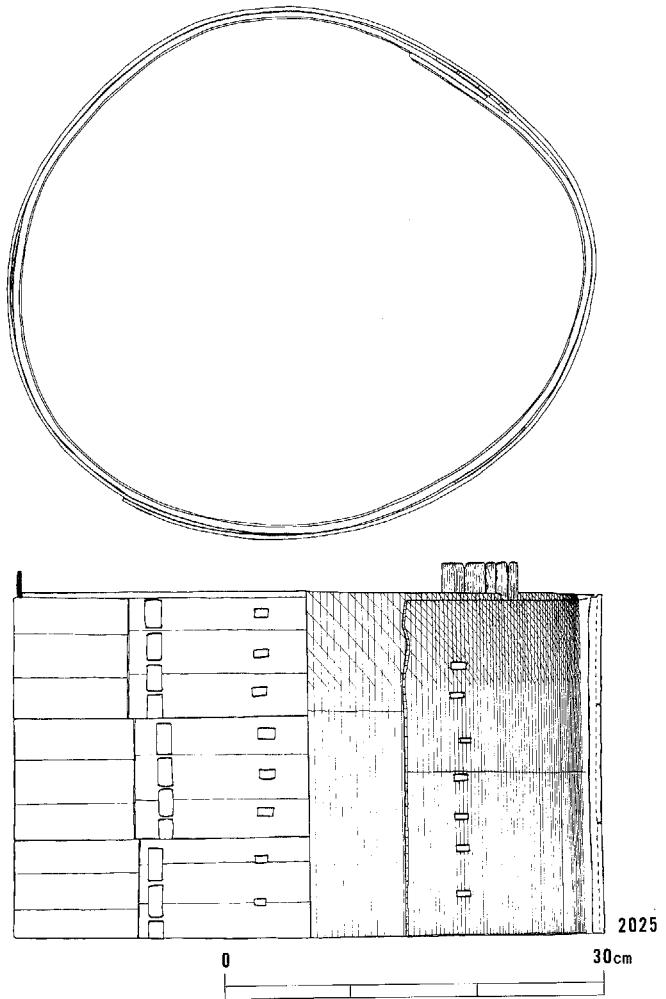


図114 SE104

cmである。厚さ3.5mmのヒノキの一枚板を円形にして、桜の樹皮で綴じている。この一枚板を綴じている部分に、同じヒノキ板を縦方向に幅7cmで補強している。その上を四枚の厚さ2mmの板材（ヒノキ）を、高さ34cmに合わせてほぼ均等にめぐらす。最下段は10cm、二段目は8.5cm、三段目は8cmで、最上段は剥離していない。それぞれ桜の樹皮で綴じている。

(2025) は上段に組まれていたもので、径47cmで中段の曲物より径が5cm長くできている。厚さ5mm、高さ27cm、径46cmのヒノキ材による一枚板を円形にしたものである。この重ねて綴じる四角孔は7ヶ所一列にあり、桜の樹皮で綴じている。この部分に厚さ3mm、幅7cmの一枚板材を補強し、他に二ヶ所に同じ処置がなされている。この補強材は、筒の上端より2cm、それぞれつき出ている。この補強材の外側を、厚さ3mmの三枚の板材を三段に隙間なく、高さ27cmに納めている。下段の高さ7.5cm、中段9.5cm、上段10cmで、それぞれ四角孔を穿って桜の樹皮で綴じている。

S K 遺構

S K 1 0 0 2

長楕円形の落ち込みで長軸260cm、短軸230cm、深さ70cmである。

出土遺物 (1104, 2115,
2116)(図116, PL104)
石器 (1104, 2115, 2116)

叩石 (1104)

砂岩を素材とする、偏平で、ほぼ円形の石器である。全面磨いているもので、長軸8.8cm、短軸7.8cm、厚さ4.2cmである。敲打痕が、一方の片面だけで、長軸の両端にみられる。

石鍶 (2115, 2116)

(2115, 2116) ともに素材はサヌカイトである。(2115) は、長さ3cm、幅1.6cm、厚さ0.4cmで、一方の基部を欠損している。片面は比較的丁寧な作出剥離を行っているが、

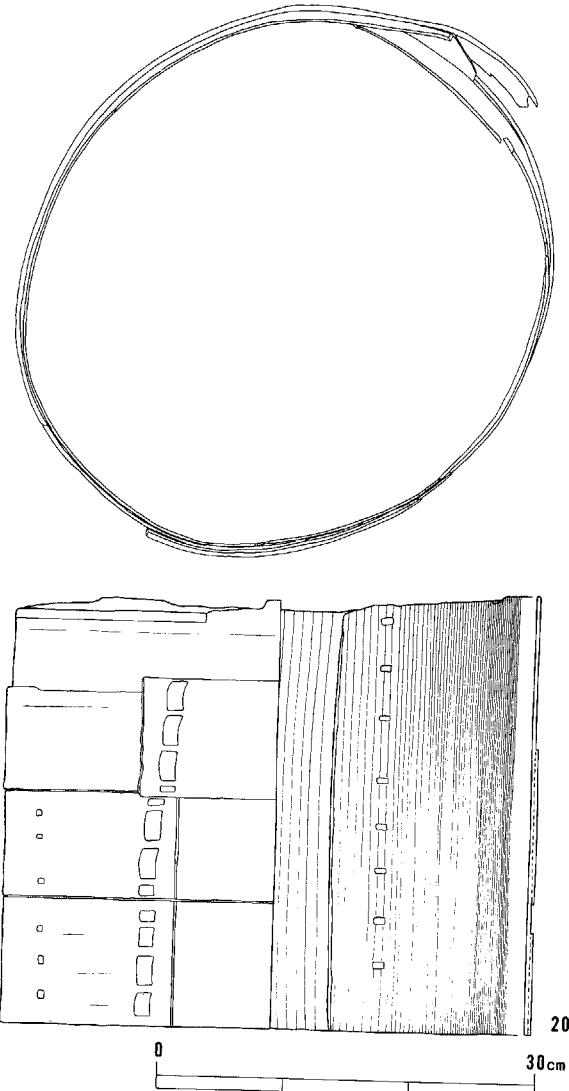


図115 SE104

他面は一次的な剥離が残っている。基部の作出は両面から打撃して凹部を作り出している。

(2116) は、長さ0.9cm、幅1.6cm、厚さ0.3cmである。基部は水平であるが、両面からの加工でうすく鋭利に作られている。

SK1003

不定形な落ち込みで、三角形を呈している。長軸5.5cm、短軸3.6cm、深さ0.9cmで、深い遺構である。

出土遺物 (1297-1・2)(図118, PL92)

縄文土器 (1297-1・2)

(1297-1) は、無文の口縁部であり、若干ゆるやかなくびれ部が看取できる。

(1297-2) は、口縁部が外反りし、口唇部には押圧がなされ、頸部には調整時の浅い凹線状の文様がなされている。

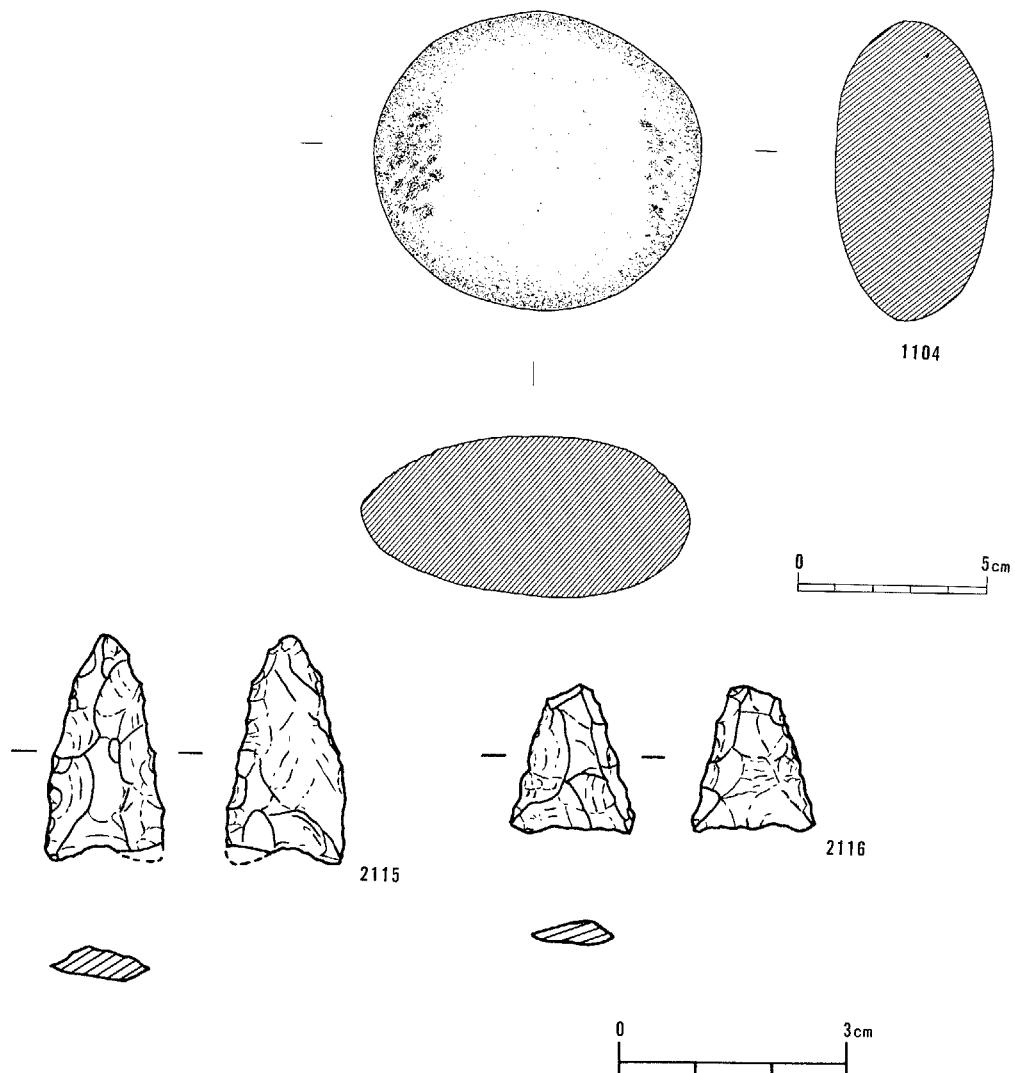


図116 SK1002

S D 遺構

S D 1 0 0 2

東西流から南北流に屈曲している溝状遺構で、幅30cm～60cm、深さ10cmである。

出土遺物（848）（図118，PL92）

縄文式土器（848）

深鉢の口縁部で、大型の深鉢である。口縁部から体部にいたる器形は、頸部にくびれはない。外面口唇部を体部上部に貼付突帯にV字の大きめの刻み目文が施されている。口唇部の突帯は、口縁部成形と調整が一体で、ヨコナデ調整の上を刻み目がなされ、体部上部の突帯は、突帯上部が急で突帯下面は緩やかな傾斜で貼り付け、突帯上部にそって顕著なヨコナデがみられる。口縁部内外面はヨコナデ、外面の突帯と突帯の間と内面はナデ仕上げ、体部上部の突帯から体部下部はケズリ調整である。

S D 1 0 0 4

不定形な落ち込みで、長軸100cm、短軸80cm、深さ10cmの浅い遺構である。

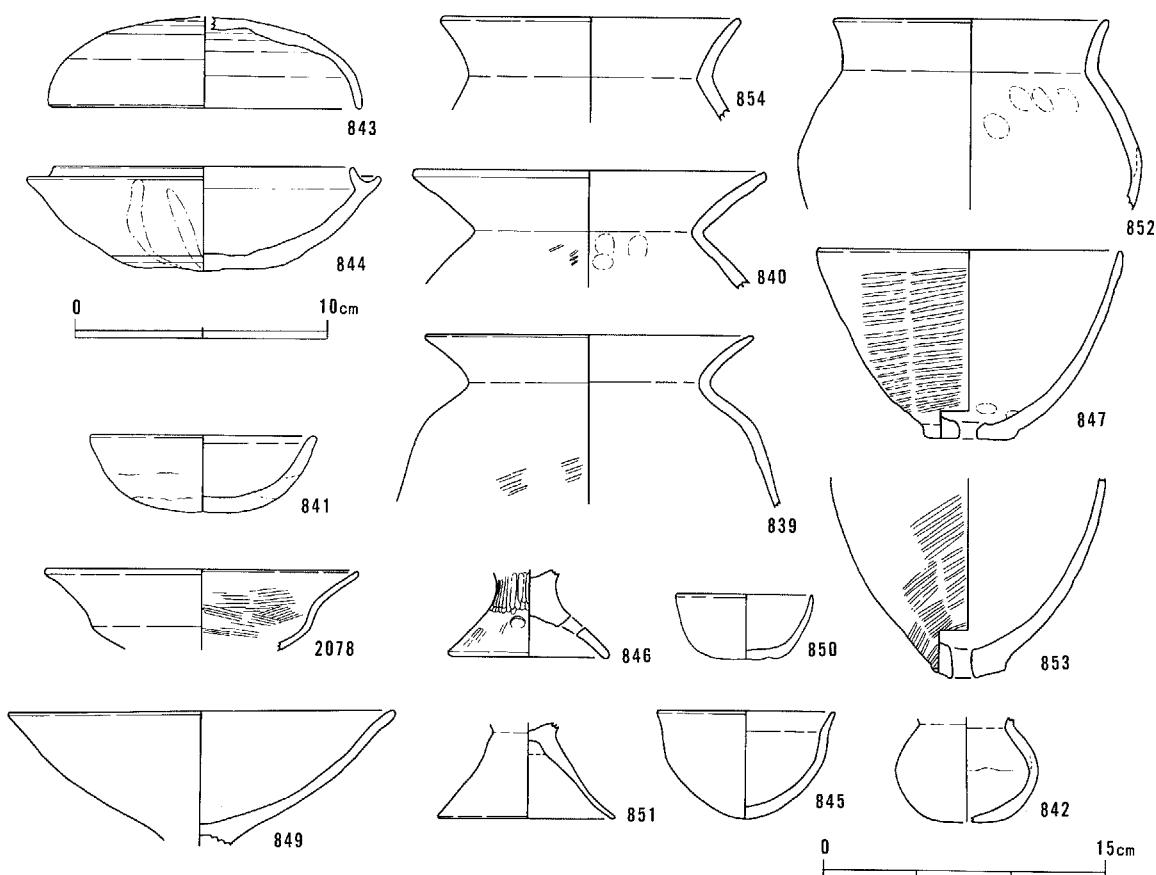


図117 SD1004 SD1005 SD1006

出土遺物（839, 840, 841, 842, 843, 844, 2078）（図117）

弥生土器（839, 840, 842, 2078）

弥生土器壺（842）

小型壺で、口縁部を欠く。頸部から底部まで5.5cm、最大幅は体部の7.6cmの丸底風の土器である。外面磨滅しているが、内面体部に粘土紐痕がみられる。

弥生土器高杯（2078）

口縁16.5cmの杯底部から脚部を欠く高杯杯部である。杯部が深く、内面には水平方向、右下がり方向のヘラミガキがなされている。外面も同様のヘラミガキがなされる高杯である。

弥生土器甕（839, 840）

（840）は（839）に比して頸部のくびれが鋭角ではっきりしている。（839）の口径17.2cm、（840）の口径は18.6cmである。（839）の外面体部に左下がりのタタキ目、（840）は外面頸部下に左下がりのタタキ目、内面には指頭圧痕がみられる。

弥生土器椀（841）

口径11.8cm、器高4cmで外面に粘土紐痕がみられる。口縁部内外面は、ヨコナデで他はナデ仕上げである。

須恵器（843, 844）

須恵器蓋（843）

口径12.4cm、器高3.6cmで、外面天井部はヘラケズリ、他の内外面はナデ仕上げである。

須恵器身（844）

口径12cm、器高4.2cmで、外面底部はヘラ切り離しのままで、ヘラケズリは、底部から体部にいたる一部分である。他の内外面は回転によるナデ仕上げをしている。

SD1005

SD1004の南1.5mにあり、不定形な三角形の落ち込みで、長軸110cm、短軸65cm、深さ10cmである。

出土遺物（845）（図117）

弥生土器（845）

口径9.3cm、器高5.7cmの小型鉢型土器である。内外面器壁は剥落している。橙色の色調である。

SD1006

大きな浅い落ち込みである。不整形な橢円形を呈し、長軸8.5m、短軸6.5mで、深さ5cmである。

出土遺物（846, 847, 849, 850, 851, 852, 853, 854）（図117）

弥生土器壺（852）

口径14.4cm、残高器高10cmで、外面器壁はナデ仕上げで平滑化されている。体部途中で胎土のことなる粘土を使用している。

弥生土器甕（854）

口径15.4cm、残存器高7.5cm内外面は磨滅している。

弥生土器高杯（846, 849, 851）

(849) は、口径20.2cmの杯部で、内外面は磨滅している。(846, 851) 脚裾部で、両者の成形は異なり、(846) の脚部は中実で、外面は丁寧なミガキが残っており、(851) 中空で内外面は磨滅している。

弥生土器甌（847, 853）

(847) は鉢型の甌で(853) は甕型の甌であろう。いづれも底部に、円形の孔が一個穿れており、外面はタタキ目仕上げである。

弥生土器椀（850）

口径7.2cmの平底風の土器である。内外面は磨滅している。

VI区包含層遺物

この地区は縄文土器、弥生土器、7世紀の須恵器、瓦器椀、瓦器小皿、土師器小皿などが出土している。

縄文土器

縄文土器は多量に出土しているため、まず深鉢と浅鉢に分類し、深鉢はさらに、外面口縁部下に突帯の無いものと有るもの、そして爪形文、押し引き文に分類し、さらに文様のあり方細分することとする。

深鉢

I-A類 (1307) (図119, PL95)

口縁部、底部を欠いているが、外面体部に三条の凹線を単位として二段に施文している。体部はミガカれて、体部下半は右下方向のケズリの上をミガいている。内面も平滑なナデ仕上げである。現存の最大幅は22cmである。内面は黒色で外面は黒褐色の色調である。

I-B類 (1135, 1156-1, 1158-1, 1291-1) (図118・121, PL93・94)

口縁部外面に、条痕が顕著にみられる一群で、(1156)は頸部のくびれが明確な例である。口唇部が波形になっている(1135)と、O字押捺文のある(1156-1, 1158-1)と口唇部の施文の違いがみられる。(1291-1)は巻貝条痕である。

I-C類 (1130-1, 1130-2, 1130-3, 1155-2, 1156-2, 1157, 1159, 1158-2, 1161-2, 1163-1, 1164-3, 1165-2, 1166-2, 1246, 1294-2, 1298, 1308) (図118・120・122, PL90・92・93・94・99)

口唇部にO字の押捺文、口縁部はナデ、体部はケズリによって成形、施文している一群である。(1130-1~3)は同一の個体と思われ、口縁部の成形が他の土器と異なり、口縁部の成形にあたって、この部分を厚めに追加している。他の土器は口縁部をスムースに作出している。

I-D類 (1253, 1259) (図119・122, PL92・94)

口唇部は小さなO字押捺文、口縁部外面は条痕調整の後ナデで、体部はケズリのみられるものである。

I-E類 (1161-1, 1162-1, 1164-2) (図122, PL94)

口唇部は細いキザミ目で、口縁部外面はナデ仕上げの土器である。

I-F類 (1126-1) (図121)

口縁部内外面無文の土器である。

突帯土器

II-A類 (1123-2, 1137-1, 1139-2, 1148-1, 1150-1, 4
, 1151-1~3, 1154-1~3, 1305) (図119・121, PL92・93
・95)

口唇部が無文で、貼付突帯も無文の土器である。(1150-4, 1154-1) は内面に凹線がめぐっている。外面はナデである。(1305) は突帯がはずれている。

II-B類 (1123-1, 1124-1, 1124-3, 1127-2) (図122, PL9
2)

口唇部にO字の押捺文があり、貼付突帯もO字の押捺文がなされている一群である。(1123
-1) は口縁部が欠損しているが、この群に入れておく。

II-C類 (1118-2, 1124-2, 1125-2, 1128-1) (図122, PL9
2)

口唇部にキザミ目がなされ、貼付突帯にもキザミ目がなされている一群である。

II-D類 (1118-1, 1120, 1121-1, 1125-1, 1126-2, 130
2) (図118・122, PL92)

口唇部は無文で突帶にキザミ目のある土器である。

II-E類 (1121-2, 1126-3) (図122・PL92)

口唇部と貼付突帯が口縁部を成形して、口唇部にキザミ目、そして、貼付突帯にもキザミ
目がなされている土器である。

II-F類 (1153-1・3, 1300) (図118・121)

口唇部にキザミ目がなされ、突帶が無文で偏平な土器である。

III類 (1128-2, 1140-3, 1141-2・3, 1143-1, 1144-1~3,
1145-1~3, 1146-1~3, 1147-1~3, 1149-2, 1260, 1294
-1) (図119・120, PL93・94・95)

C字爪形文、D字文、四角文や器面に文様施文具をはなさない押し引き文の一群である。
この群の中にも二枚貝条痕、ケズリなどの技法をみる。

IV類 (その他の土器) (図120・122・123, PL91・94・95)

口縁部無文で頸部がナデ仕上げの(1163-3)、体部に貼付突帯があり、突帶の文様は不明
であるが、突帶以下がケズリで丸底の(1258)、口縁部、体部に沈線文のある(1131-2・
3, 1132-1・3, 1133-3・4, 1155-1)がある。

浅鉢 (図118・119・121, PL92・93・94)

浅鉢も口縁部の形態によって分類できる。内外面に細く低い突帶の貼られている(1140-

2, 1148-2)、口縁部が内弯している(1257)、口唇部が内傾化している(1138-1, 1150-3)、あるいは(1138-3, 1139-1)、口縁部内面が肥厚している(1136-1~3, 1138-1, 1164-1)、口縁部内外面に稜をもつ(1160-2, 1296)、口唇部端が外反りする(1136-1, 1160-3, 1304)がある。

底部(図119・123, PL91・102・103)

底部は丸底の(1258, 1400)、凹底の(1399)、平底の(1395, 1396, 1397)、平底であるが体部端が丸味でおさめられる(870, 1398)がある。

土製品(1359, 2039)(図124, PL86)

(1359)は東北地方を中心に発達した、庶光器土偶の腕手の部分である。中空の作りで、手の部分は三方に分岐して表現される。通常の場合、二方向に分岐する例が多いといわれ、偶の肉厚も厚目であることが指摘できる。破損部端に一条の沈線が沿っている。現存長は3.2cmである。

(2039)は中実の粘土塊であるが、指頭痕がみられる。長さ3.6cmである。

石器

石鎌(1095, 1285, 2121)(図124)

(1095)は平基式の石鎌で、最大長2.8cm、最大幅1.8cm、最大厚0.3cm、
(1285, 2121)は凹基式で、(1285)の最大長2.7cm、最大幅1.6cmで、(2121)は先端部を欠いている。

スクレイパー(1084, 1284)(図125)

(1084)は不定形な剥片の一方に、両面からの打撃によって刃部を作り出している。長さ4cm、幅2.7cm、厚さ0.8cmである。

(1284)は方形を呈する剥片を利用しているもので、刃部は両面から打撃をして作出している。

凹石(2038)(図125)

素材は砂岩で、作業面の中心は凹んでおり、作業面に対置する面は、丸くすぼまっている。
作業面はほぼ円形で、径2.8cm、厚さ2.1cmである。

石斧(1111)(図125, PL103)

素材は緑泥片岩で、乳棒状の磨製石斧である。ただ全面に磨ききってはなく、作出時の打撃痕が残っている。現存長11.7cm、長径は4.6cm、短径が3.8cmである。

弥生土器(869, 1142, 1303, 1309, 2006, 2122)(図126, PL93)

(1303, 2122)はヘラ沈線の破片で、(1142)は竹管文の押捺が外面になされている。

(1309)は口唇部下半が肥厚され、端面は、ヘラによる斜格子文様がなされている。

(2006) は壺で、外面体部上半に平行タタキ目がなされ、口径15.9cm、器高35.9cm、最大幅は体部にあり、29.8cmである。

石製品 (1102)(図125)

素材は石英と思われるが、丸い部分の表面は赤橙色を呈し、内面は白色である。全体に細かいひび割れが入っている。

高杯 (857)(図126)

高杯杯部で、口径14.5cm、杯深さ4.2cmで、杯部と脚部の接合部で剥離している。杯内外面橙色の色調である。杯部口縁部と体部に段のない形態である。

鉢 (869)(図126)

口径10.3cm、器高4.7cmで、小さな脚部のつくもので、脚部径3.2cmで、外面には連続して指頭圧痕がみられる。外面橙色で、内面は黄橙色を呈している。

須恵器 (859, 860, 866, 2100, 2132)(図126)

杯蓋 (860, 866)

(866) は、口径14.7cm、遺構4.5cm程度で、天井部はヘラケズリ、他の内外面はヨコナデで、外面口縁部と体部間は凹線文で画される。

(860) は口径12.6cm、器高4.4cmで、内外面磨滅していて調整は不明である。

杯身 (2100)

口径12cm、器高3.3cmで、口縁部と受け部が同じ高さで、外面口縁部下より天井部にかけてヘラケズリが広い範囲でみられ、他の部分はヨコナデである。

長頸壺 (859)

口縁部、頸部の欠損して、体部だけである。外面底部から体部底部近くまでヘラケズリがなされ、内面底部は粘土紐の凹凸の上を軽くナデている程度で、他の部分はヨコナデである。

壺 (2132)

口縁部、頸部を欠く。体部最大径は38cm、現存器高は34cmである。外面全面にタタキ目、内面全面に青海波紋で最終調整をしている。

土師器小皿 (862, 863, 867, 868, 872)(図126)

これらは、口径8cm前後、器高2cm前後のもので、外面底部が指頭圧痕の上をナデ、口縁部内外面をヨコナデ、内面底部はナデ仕上げである。

土師器皿 (871, 778, 779, 861, 864,)(図126)

口径10cm前後、器高3cm前後で、外面体部、底部に指頭圧痕がみられ、その上をナデ、他の内外面はナデ仕上げである。

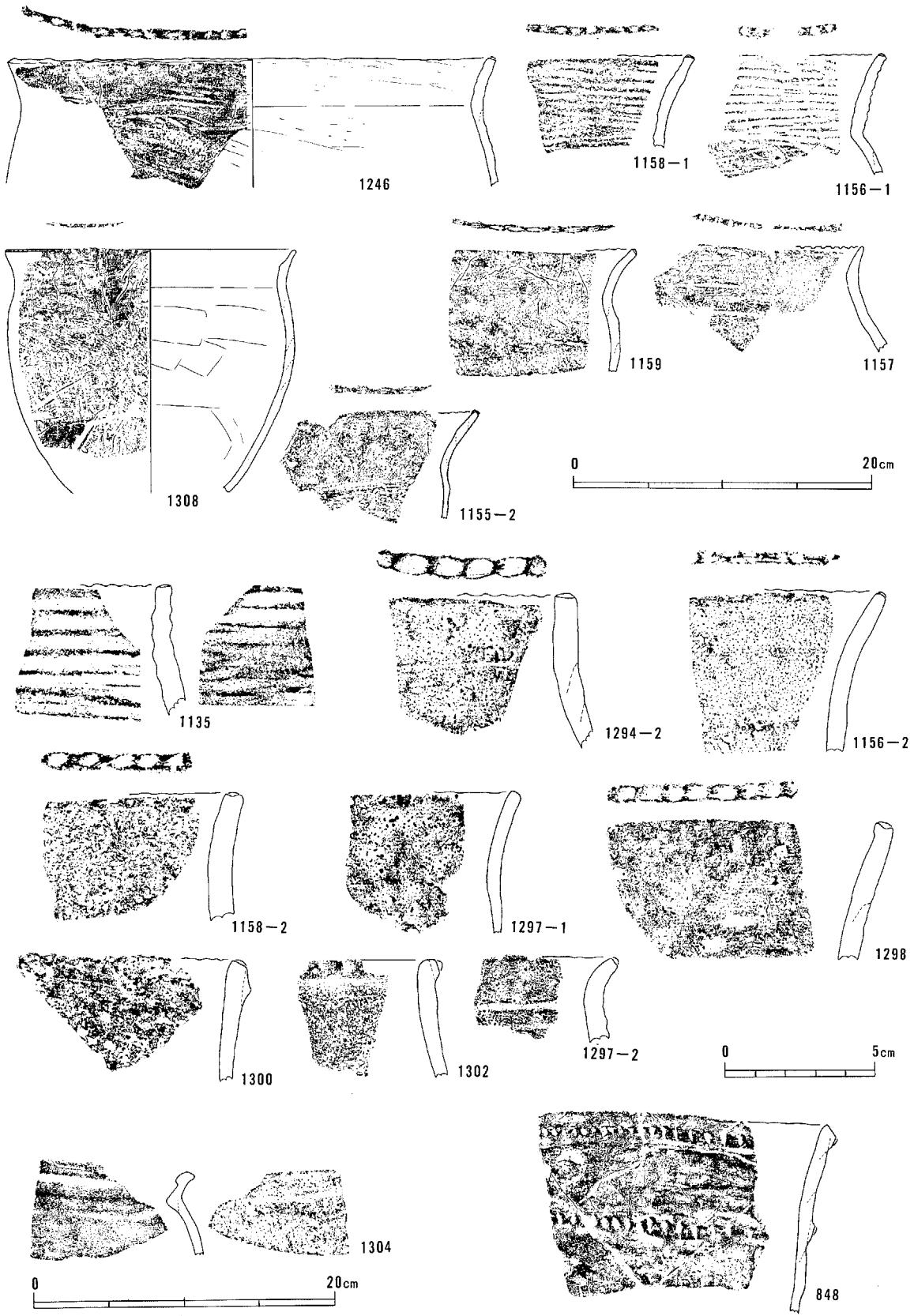


図118 SK105 SK116 SK1003 SD107 SD1002 包含層

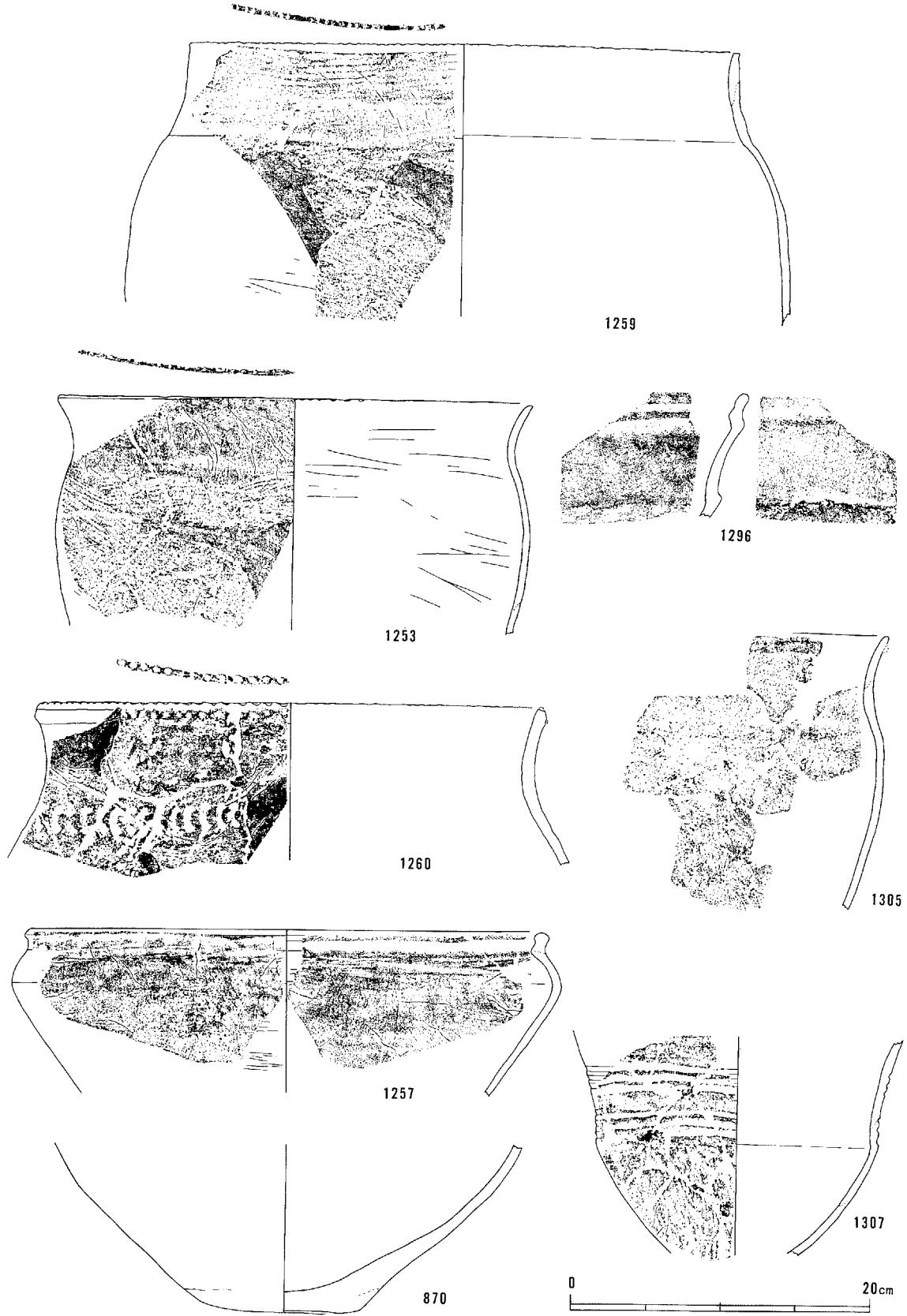


図119 包含層

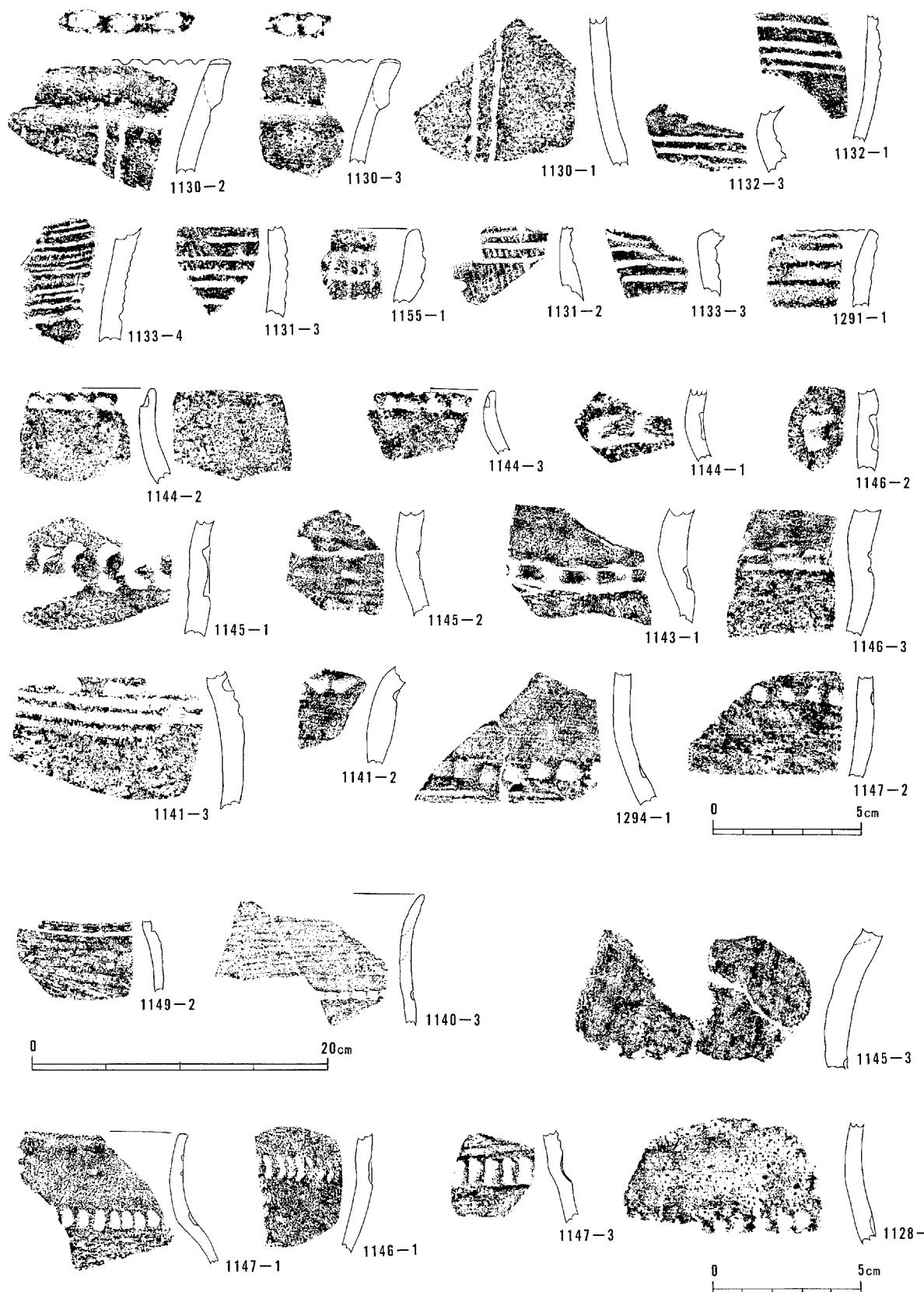


図120 包含層

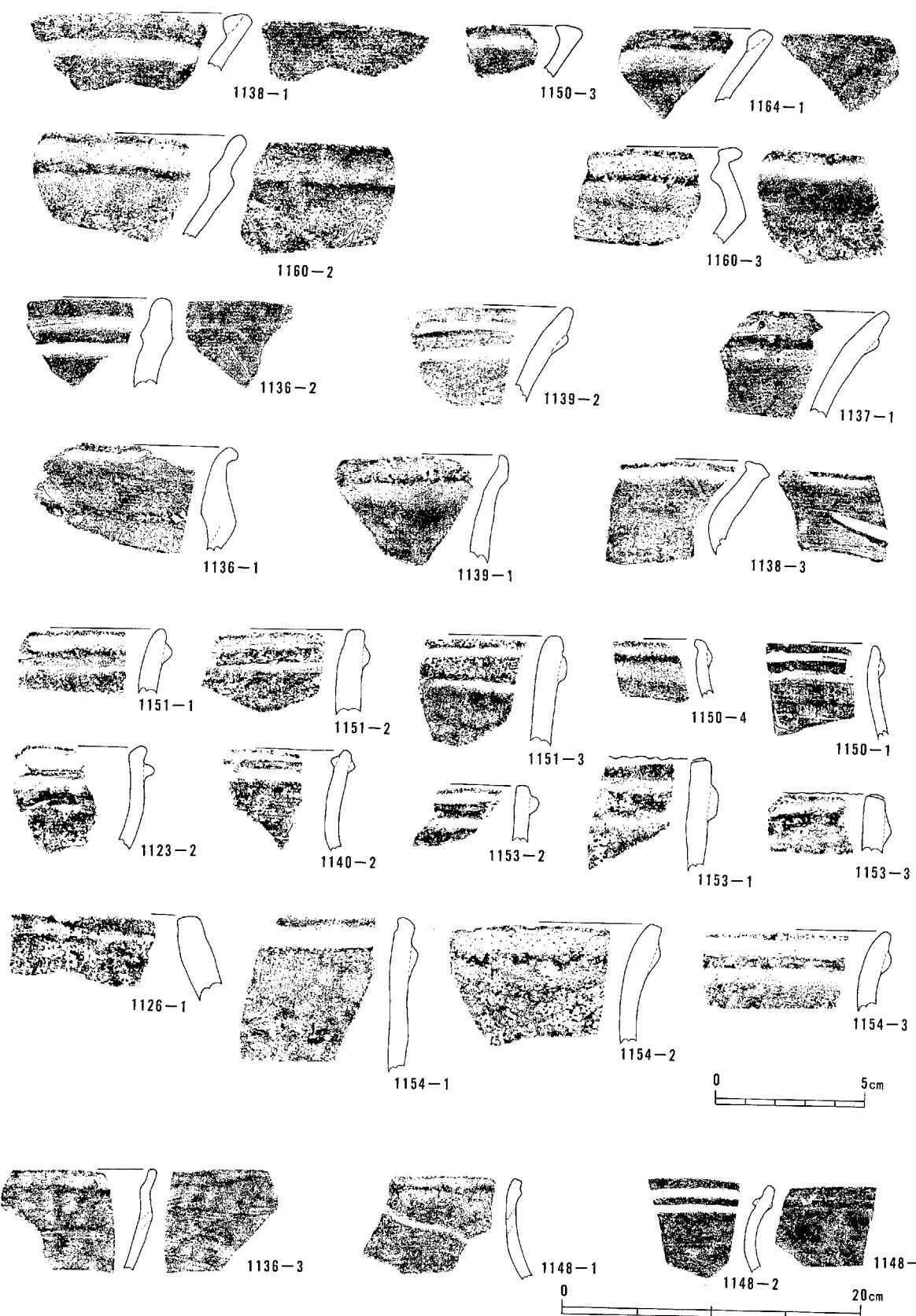


図121 包含層

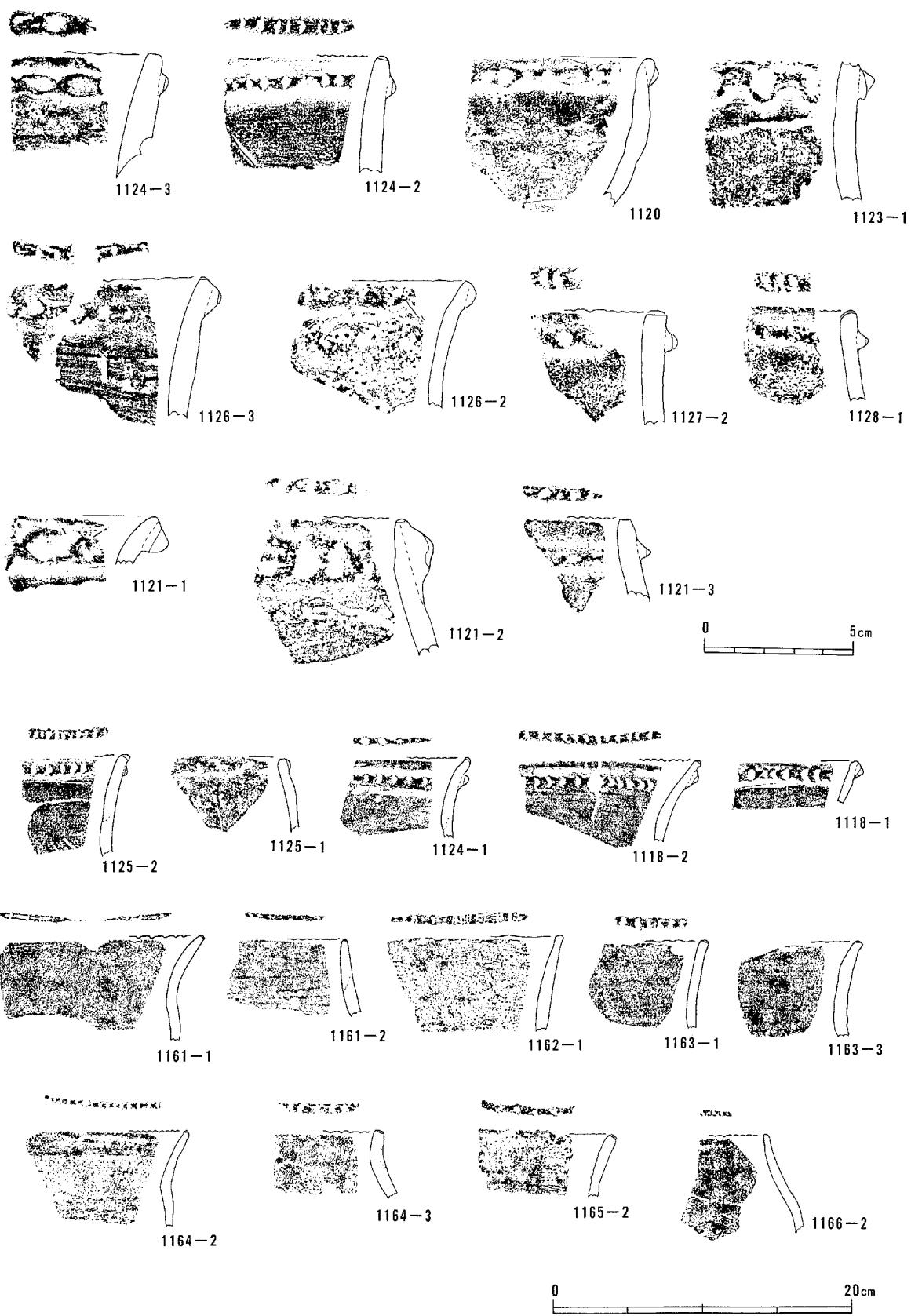


図122 包含層

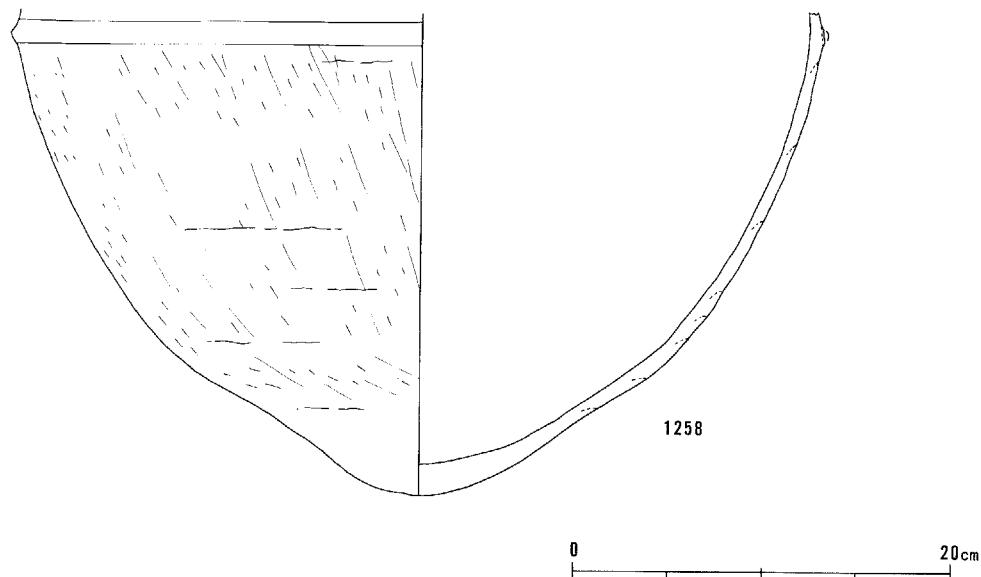
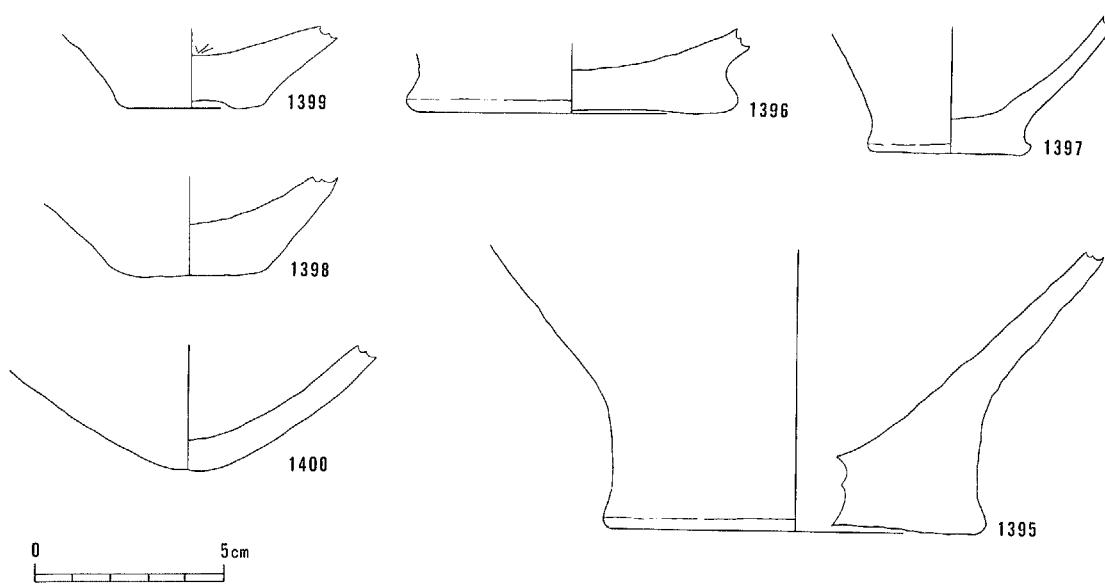


図123 包含層

瓦器椀 (865, 1115)(図126)

(1115) は底部に高台の存否が不明であるので、椀として扱う。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面は指頭圧痕を残している。

(865) は、内面にミガキ暗文が一筆風に、底部から口縁部になされている。

須恵器こね鉢 (858)(図126)

(858) は、底部だけで、外面底部は糸切痕が明瞭にみられる。底径は 9 cm で、外面底部以外

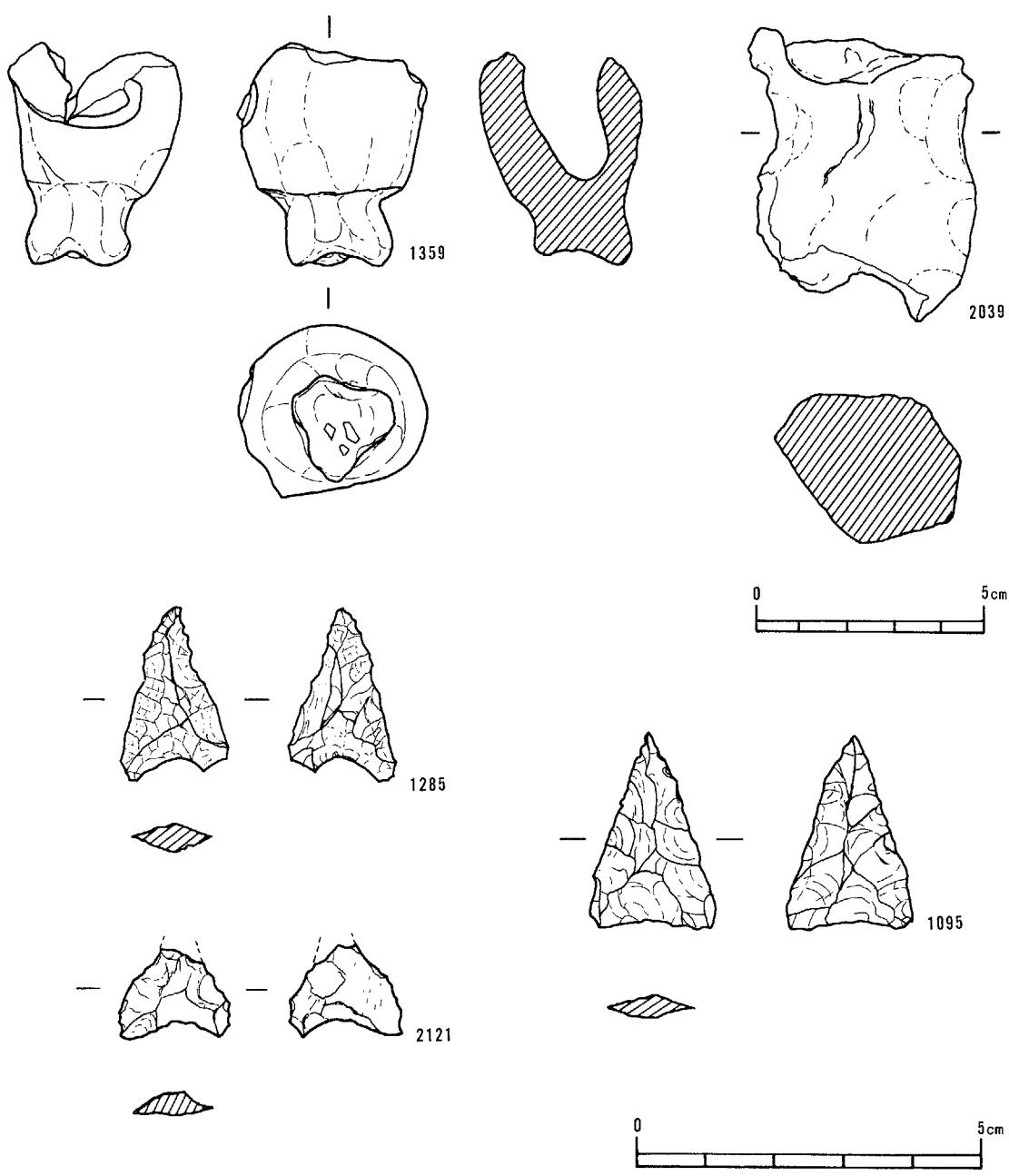


図124 包含層

はヨコナデ、ナデ仕上げである。

土錘（2032, 2033）(図125)

(2032) は中ぶくらみの形態の土錘で、長軸5.4cm、最大幅2.8cmで、長軸方向に内孔が一孔貫通している。円孔径は0.9cmである。

(2033) は (2032) よりひとまわり小型のものである。

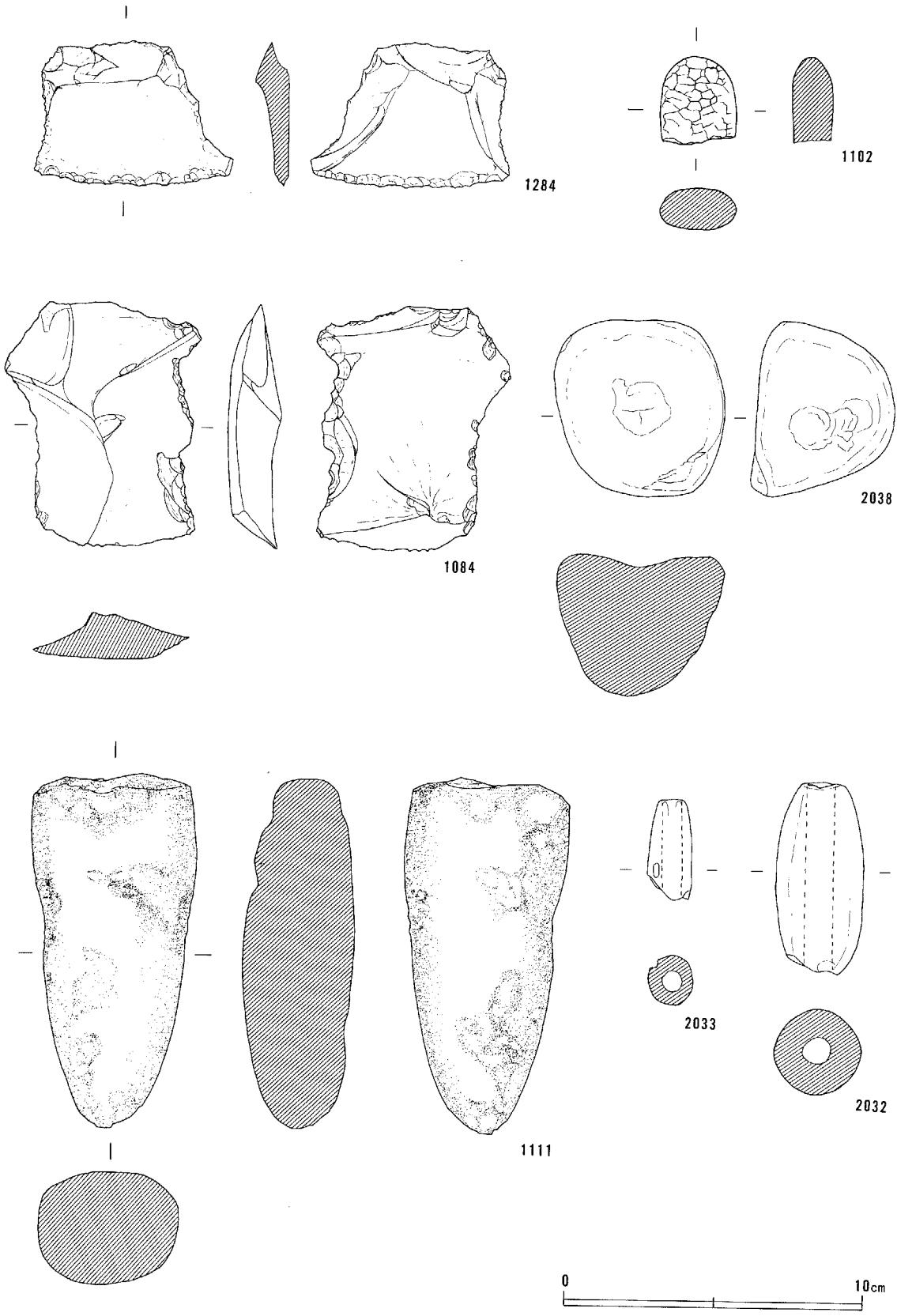


図125 包含層

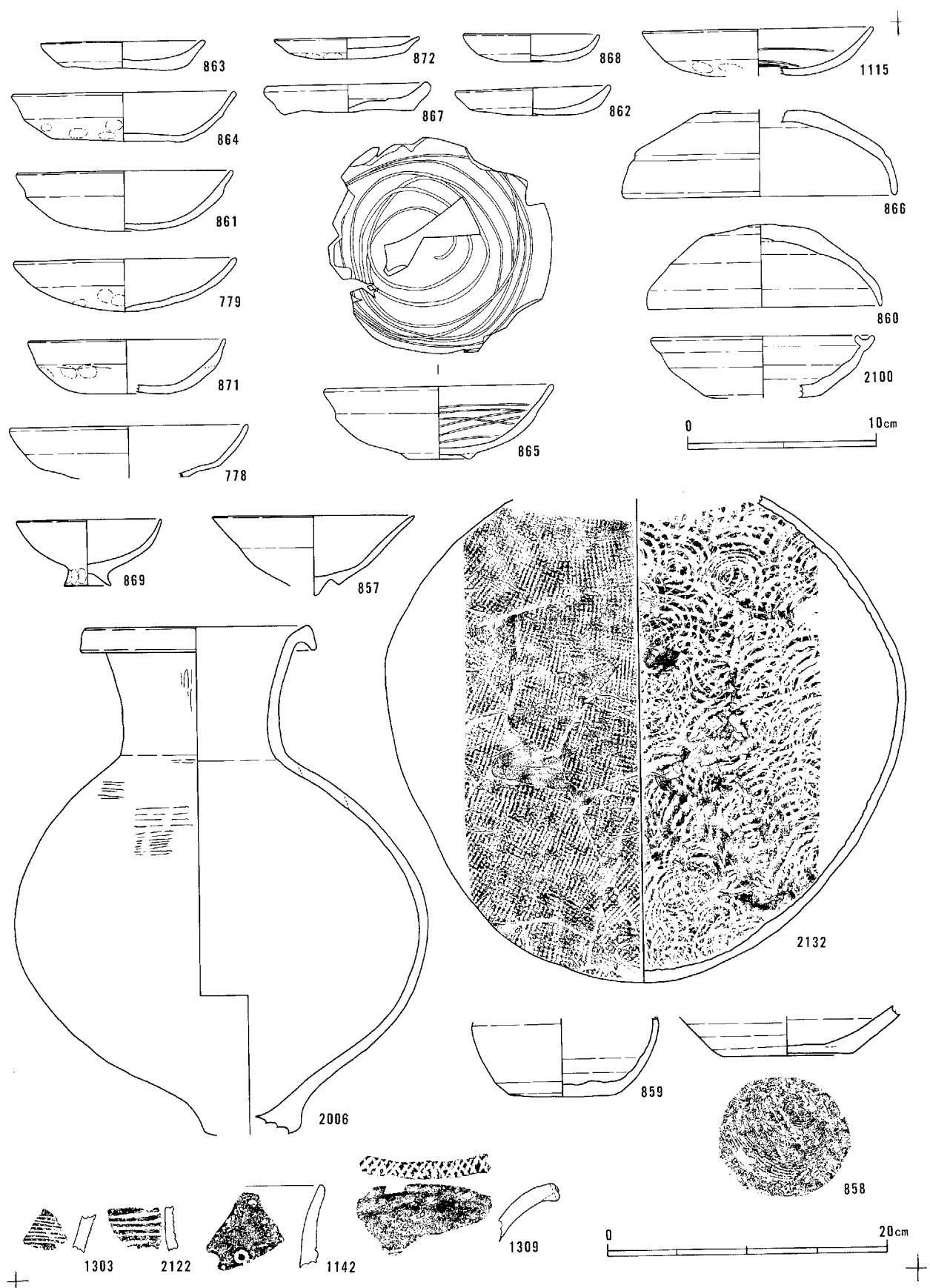


図126 包含層

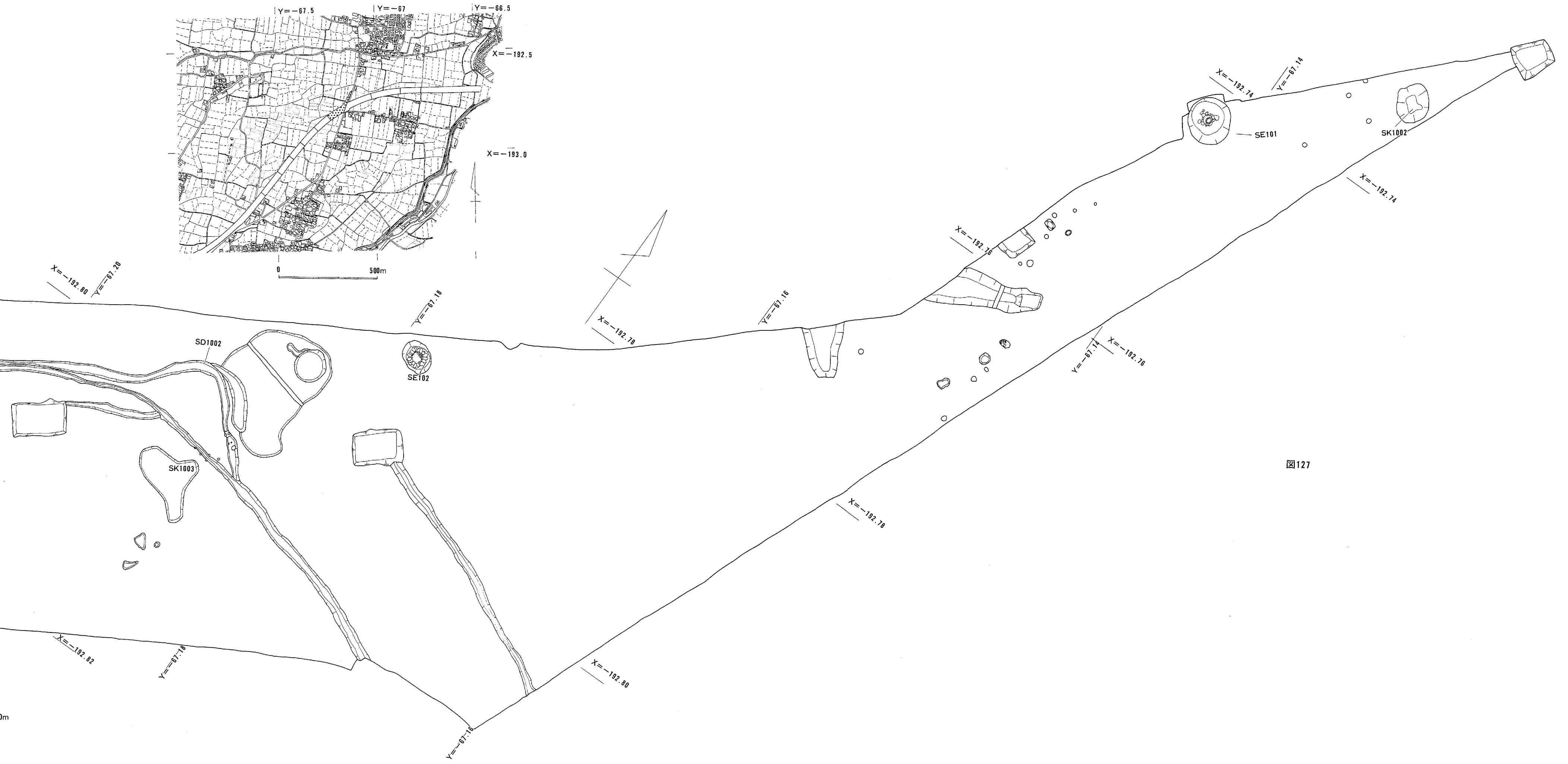


図127

VII区の遺構と遺物

VII区上面の遺構と遺物

S E 遺構

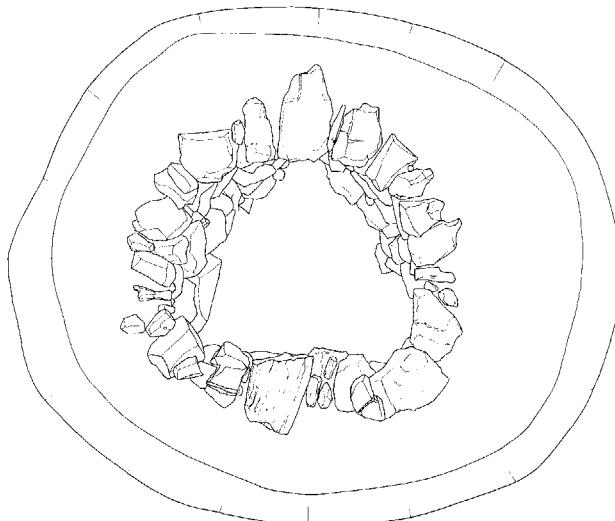
S E 0 1 (図128, PL39)

堀方は、楕円形で長軸270cm、短軸240cm、石積みの径は約100cmで、深さ70cmである。

出土遺物 (1011) (図128)

土師器小皿 (1011)

口径7.6cm、器高1.2cmの小皿の製作技法がよくわかる資料である。この土器によれば、成形は底部を形成する円盤を、中心を中心抜きした偏平な円盤の二個の成形態を作り、底部円盤に外から中抜き円盤を、外面底部側から重ね部分をもたせて接合成形するものであり、一枚の円形盤から成形するものではない。両者を合わせた後に外面底部を指で押え、接合を兼ねて底部の成形を行い、口縁部を折りつつヨコナデをし、内面底部、外面底部をナデてしあげる。これが、土師器小皿、瓦器小皿の基本的な製作技法と考えられる。



S D 遺構

S D 0 1

やや東方向に振る南北流の幅80cm、深さ30cmの溝である。

出土遺物 (2090) (図129)

瓦器椀 (2090)

全体に歪んだ土器である。

口径15.5cm、器高は中心部で6cmである。貼付高台は、断面四角形で、底部外面か

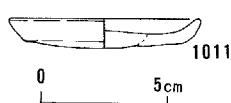
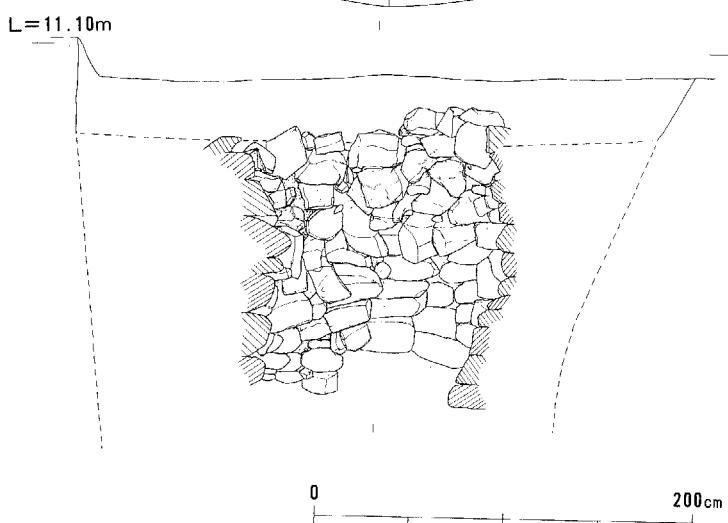


図128 SE01

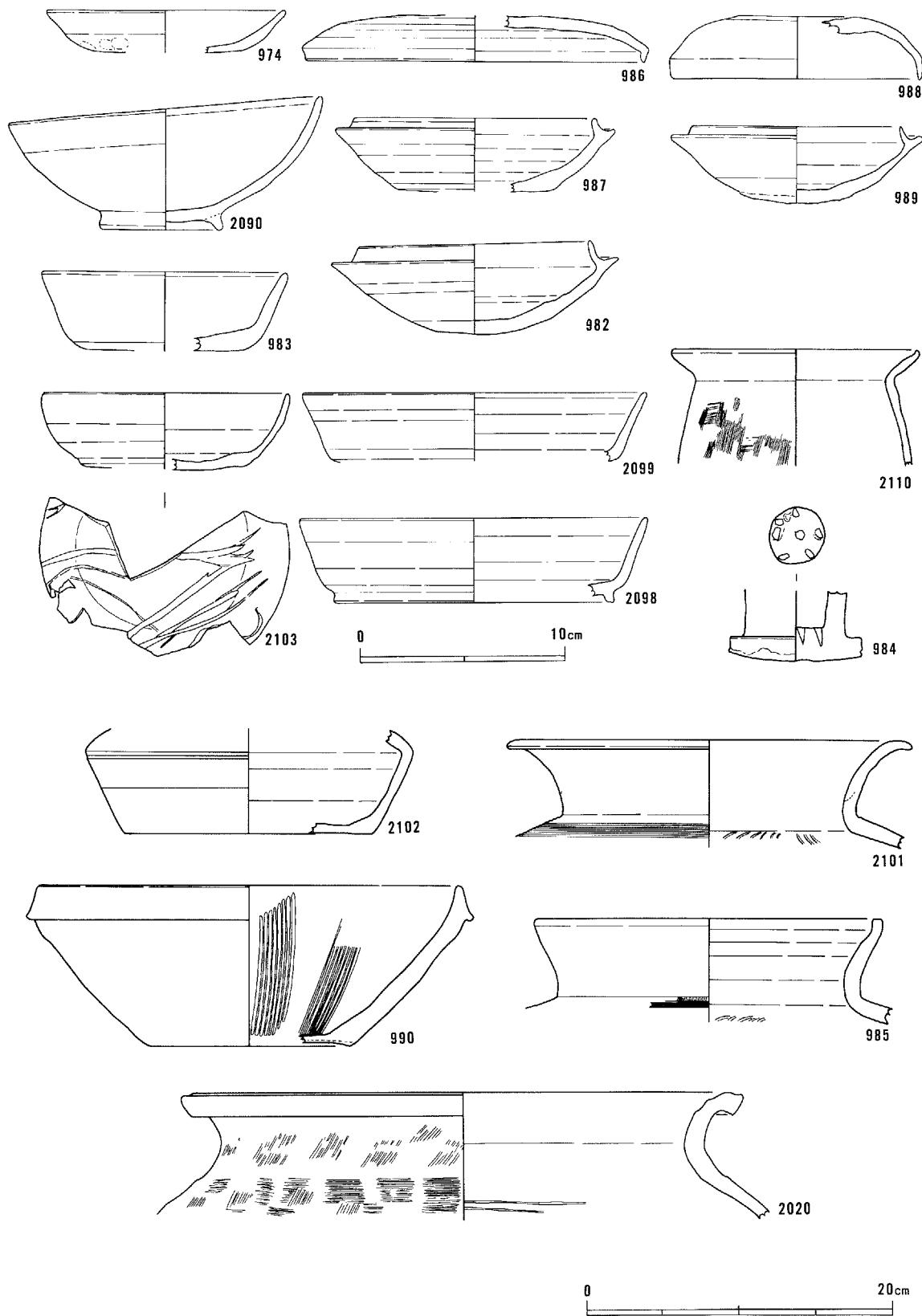


図129 SD01 SD05 SD06 SD09 SD14

ら0.5cmの高さがある。全体に剥離し調整は不明である。

SD 0 5

幅60cm～90cm、深さ25cmの溝状落ち込みである。

出土遺物（982, 984, 2020）（図129）

須恵器（982, 984）

須恵器杯身（982）

口径11.6cm、器高4.6cmで、外面底部はヘラケズリ、他の内外面はナデている。

すり鉢（984）

すり鉢底部で、底部外面はヘラケズリである。底部内面は7個の不整形で不統一な断面楔形の孔が穿たれている。底径8.7cmである。外面底部以外はヨコナデもしくはナデで仕上げている。

土師質甕（2020）

口径35.4cmの土師質の甕である。外面口縁部下頸部に左下がりのタタキ目があり、肩部下はその上にヨコ方向のタタキ目が重ねられている。口縁部内外面はヨコナデである。外面の色調は橙色で、内面も同様である。口縁部の形態は東播系の須恵質甕に非常に似ている。

SD 0 6

東西流の溝状遺構で、溝幅90cm、深さ10cm～20cmである。

出土遺物（983, 985, 986, 2098, 2099, 2101, 2102, 2103, 2110）（図129）

須恵器（983, 985, 986）

（983）は杯身で、口径12.2cm、器高4cmで、内外面はナデ仕上げである。

（985）は、壺の口縁部で、口縁端部は拡張されることなく納められている。外面頸部下はタテ方向のタタキの後にカキ目調整で、内面は同心円文のままである。外面口縁部にはうすい自然釉がみられる。

（986）は、杯蓋で、口縁17cmで、宝珠形のつまみを欠いている。外面天井部はヘラケズリで、他の内外面はナデ仕上げである。

土師器甕（2110）

口径16cmで体部下半を欠く。口唇部はややつまみ上げられ、口縁部内外面は、ヨコナデである。体部外面は、ヨコ方向のタタキ目のうえを部分的にやや左下がり方向のハケ目がなされている。

須恵器杯身（2098, 2099, 2103）

（2098）は口径12.3cm、器高3.8cmで底部外面には焼成時のわらの痕跡を残している。（2098,

2099) は貼付高台の身で、口径17cm、器高4.2cmの同じ法量の身である。内外面はナデて仕上げている。

須恵器甕 (2101)

口径25cmで、口縁部は肥厚されず、外方へのびている。外面頸部下の最終調整はヨコ方向のカキ目である。内面頸部下に同心円文のタタキ目が残っている。

須恵器平瓶 (2102)

底部からくびれ部の高さが5.4cmで、くびれ部に凹線状の成形痕がみられる。体部下半は回転ヘラケズリ、内面はヨコナデである。

S D 0 9

S D 05、S D 06に平行している溝状遺構で、幅100cm、深さ70cmのしっかりした遺構である。

出土遺物 (974, 987, 988, 989)(図129, PL86)

須恵器 (987, 988, 989)

(988) は杯蓋で、口径12.3cm、器高3.1cmで、天井部外面は、切り離しのままで、天井部から体部にかけて、一条の回転によるヘラケズリがなされている他は、ヨコナデかナデ仕上げである。

(987, 989) は、杯身である。(987) は、口径12cm、器高3.6cmで、外面底部は回転によるヘラケズリ痕がみられ、他の内外面はヨコナデかナデ仕上げであり、(989) は (987) に調整はよく似ているが、口径10.4cm、器高3.8cmと法量の違い、底部の整形の違いがみられる。

土師器小皿 (974)

口径11.8cm、器高2.1cmで、外面底部に指頭圧痕がみられ、指頭痕の上をナデしている。内外面口縁部はヨコナデで、内面はナデ仕上げである。

S D 1 4

幅130cm、深さ15cmの溝状遺構である。出土遺物990の口縁部下端はやや拡張されている。太いクシ目が八本を単位として、すり面を形成している。赤褐色を呈する土器である。

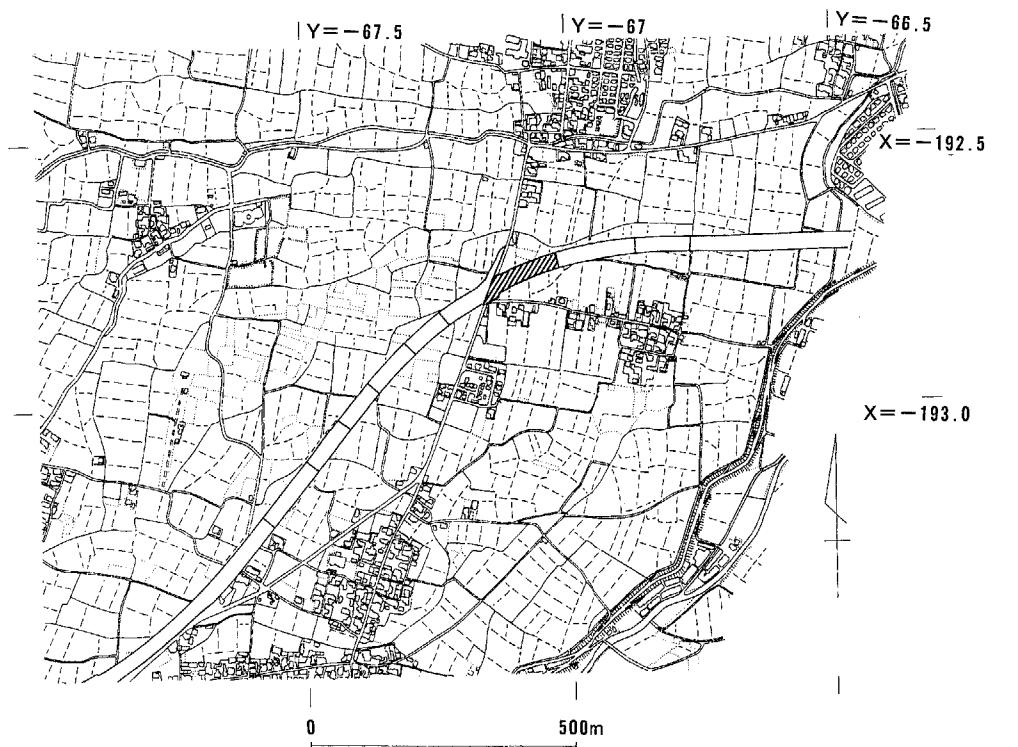
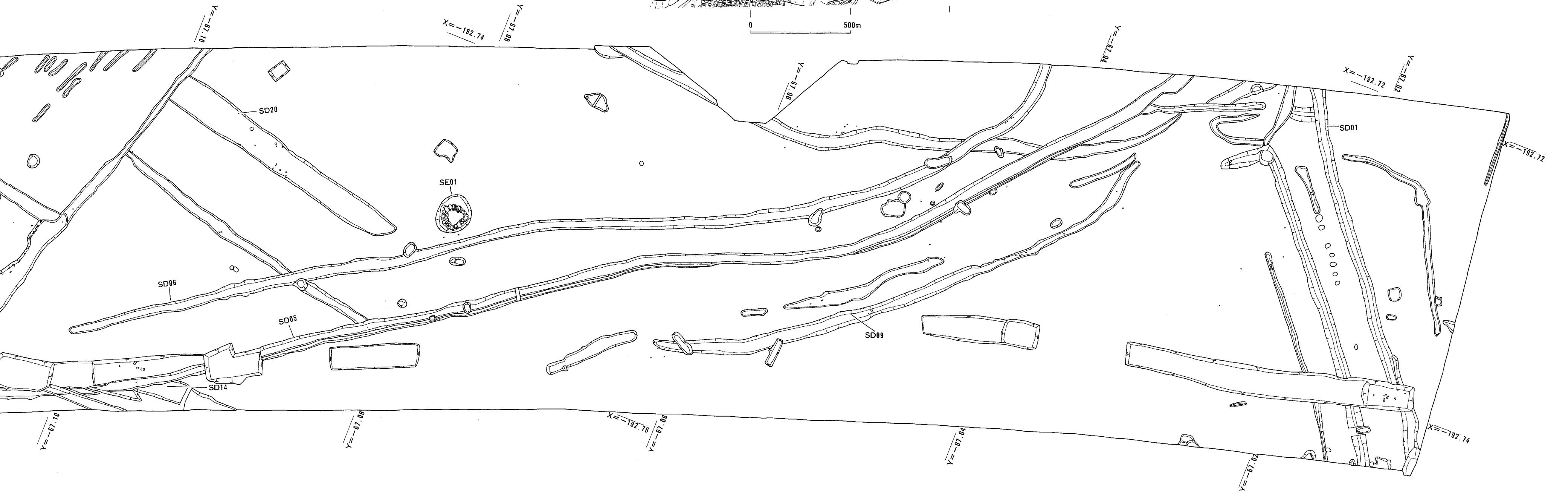


図130



VII区下面の遺構と遺物

SK遺構

SK103 (図132, PL41)

隅丸方形状の土坑で、長軸140cm、短軸80cm、深さ40cmである。ここではSK遺構としているが、SX遺構であることは間違いないであろう。

出土遺物 (950, 951, 952, 953, 954, 955, 956, 957, 958, 2043, 2049, 2050, 2051, 2052, 2054, 2055, 2056, 2057, 2058, 2059, 2060) (図131・132・133, PL86・87・105)

土師器小皿 (951, 952, 953, 954, 955, 956, 957, 958)

(956) 以外は定型である。口径は7.7cm、器高は(957, 958)の1.0cmの他は1.4cmである。口縁部内外面はヨコナデ、体部内面はナデ、外面底部は指頭押捺の後ナデている。

土師器皿 (950)

口径11.6cm、器高2.8cmで、口縁部内外面はヨコナデ、外面底部は、指押えの後ナデしている。中央部に板目状工具の圧痕がみられる。

鉄刀 (2043)

全長34.2cm、身幅3.5cm、

厚さは最大厚で1.6cm程

度の小刀で、全体に錆

化が著しい。把部、鞘

等の木質はみられない。

鉄釘 (2049,

2050, 2051,

2052, 2054,

2055, 2056,

2057, 2058,

2059, 2060)

これらは、木棺に使用

された鉄釘であるが、

定型に復元できない。

(2054, 2055, 2057)

は釘の頭部であり、釘

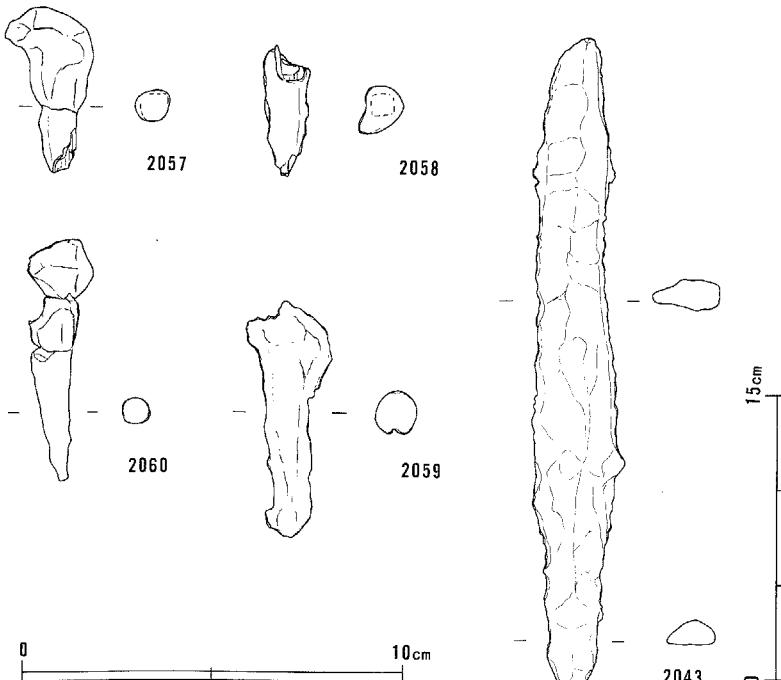
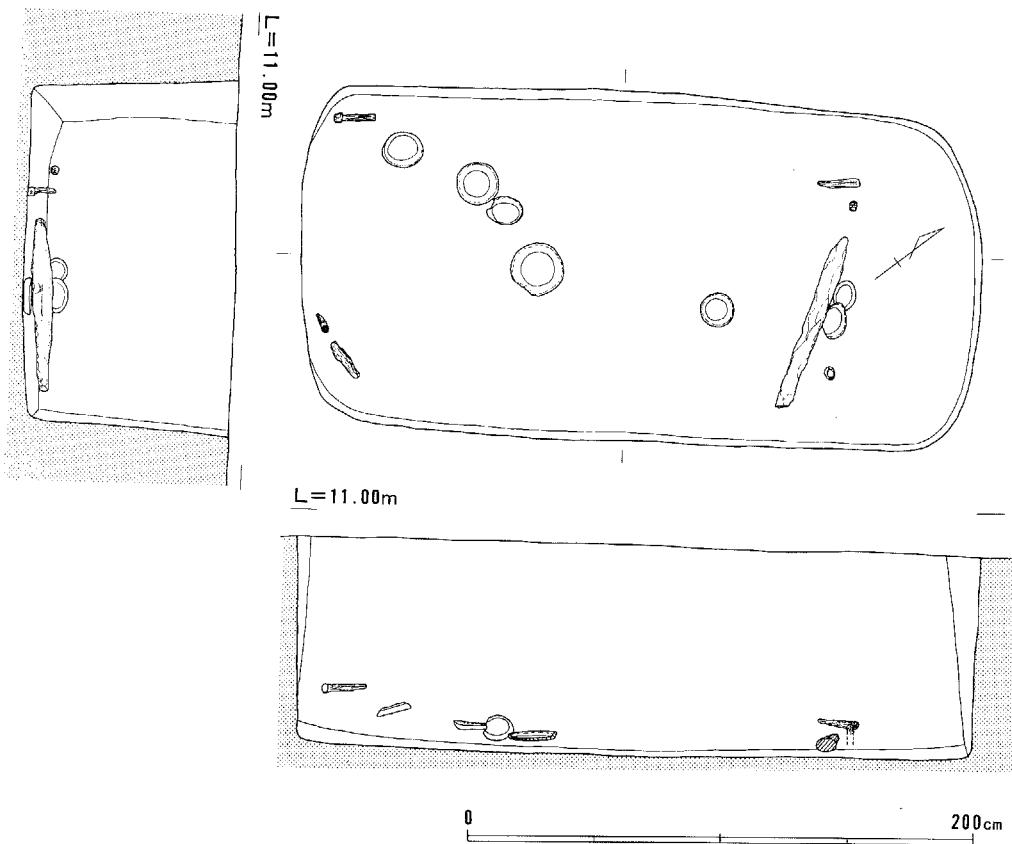


図131 SK103



頭は一方

に扁して
いる。

(2055) に
は木質部
の付着が
みられる。

(2049,
2050) は、
鉄釘の先
端部で、
断面四角
形である。

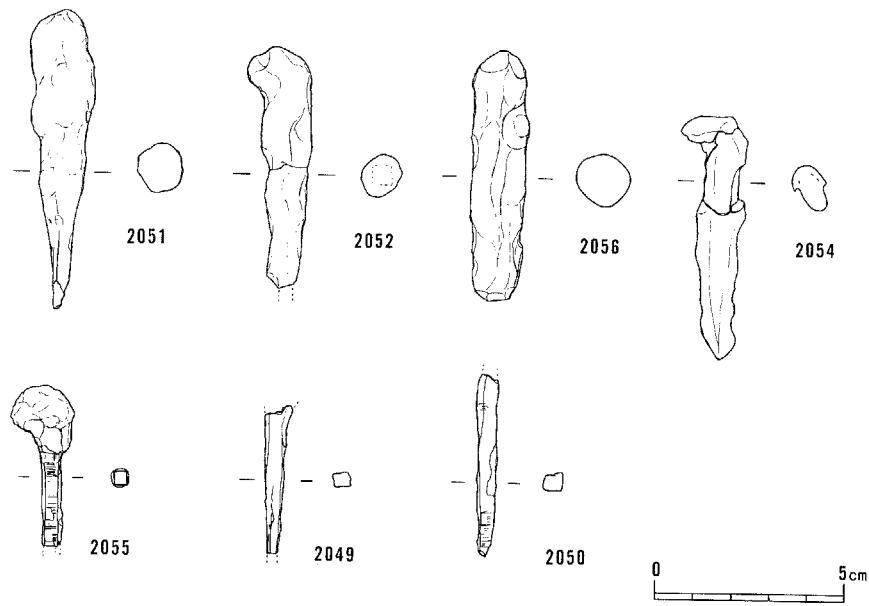


図132 SK103

SK105

隅丸方形を呈している落ち込みで、調査地区外にのびている。幅70cm、深さ70cmである。

出土遺物（959, 960, 961, 962）（図133, PL87・88）

瓦器皿（959）

口径12.4cm、器高3cmで、外面底部は指押さえの後にナデがなされている。口縁部内外面はヨコナデ、他の内外面はナデで仕上げている。ミガキ暗文はみられない。

土師器小皿（960, 961, 962）

（960）は口径8cmで、他は8.5cm、器高はいずれも1.5cmである。外面底部は指押さえの後にナデを行い、口縁部内外面はヨコナデ、他の内外面はナデで仕上げている。（962）の底部は上底風になっている。いずれも橙色の色調である。

SK108（PL41・42）

不定方形な大きな落ち込みで、長軸で6m、短軸で5.5m、深さ80cmである。

出土遺物（963, 964, 965）（図133, PL87・88）

土師器小皿（964）

口径7.8cm、器高1.5cmで、小皿にしては肉厚に成形されている。外面底部は指頭圧痕の上をナデ、口縁部の内外面はヨコナデ、内面はナデ仕上げである。

土師器皿（963）

口径10.4cm、器高2.4cmで、口縁部内外面はヨコナデで、他の部分はナデで仕上げである。

瓦器碗（965）

口径12.6cm、器高3.8cmで、高台は断面三角形の貼付高台である。外面体部は、指頭痕が二段に残っている。口縁部内外面はヨコナデで、成形による段が凹線帶のようにみられる。内面は底部から口縁部にかけて断続螺旋暗文がなされている。

SK110

長楕円形の落ち込みで、長さ4.7m、幅3.5m、深さ65cmである。

出土遺物（769～775, 782, 966, 2063）（図133）

土師器小皿（774）

口径7.7cm、器高1.4cmで、口縁部と底部の境が不明瞭なつくりである。外面底部は指押さえの後ナデ、口縁部内外面はヨコナデ、他の部分はナデで仕上げである。

土師器皿（769, 772, 773, 775, 782, 2063）

（772）は口径11.6cm、器高2.1cmであるが、他の皿は口径12cm前後、器高3cm前後の大きさである。調整はいずれも同じ手法で、外面底部の指押さえの上をナデ、口縁部はヨコナデ、他の部分はナデ仕上げである。

土師器こね鉢（770）

口径18cm、器高5.8cmで、口縁部はつまみ上げられ、内傾して立ち上がっている。外面は粘土紐のゆるやかな段があるが、最終調整はヨコナデである。内外面黄色味の橙色で、その形態は須恵質のこね鉢に似ている。

須恵質こね鉢（771）

口径17cm、器高6.5cmで、外面底部には回転糸切痕がみられる。口縁は片口が作り出され、外面が内傾しておさまっている。

土師器甕（966）

口径24cmで、体部下半を欠いている。口縁部は内傾して立ち上がり、外面には太い凹線文がなされ、内面には切り込み段がみられる。外面体部はナデ、内面はヨコ方向の太いハケ目調整がなされている。外面口縁部、体部に煤の付着がみられる。

S K 1 1 2

長楕円形を呈する落ち込みで、長さ3.8m、幅2.5m、深さ60cmである。

出土遺物（1324, 1325-1・2）（図134, PL95）

縄文土器（1324, 1325-1・2）

（1324）は口縁部片で、口縁部外面に低い貼付突帯に刻みがなされている。（1325-1）は浅鉢で内外面がミガキである。（1325-2）は、屈曲している体部で、屈曲部にキザミ目、体部には三本沈線の二空間に短線の沈線でうめている。

S K 1 1 7 （PL42）

長方形の細長い落ち込みで長軸15m、幅3m、深さ60cmである。

出土遺物（1110, 1326, 1327, 1328, 1329-1・2, 1330, 1331, 1435-1・2・3）（図134・135, PL96）

縄文土器

浅鉢（1326）

山形口縁の頂部に突起があり、内側から押捺されている。内面は二本の沈線があり、突起下の二本沈線間に円孔が貫通している。

深鉢（1327, 1328, 1330, 1331, 1435-1・2）

口縁部に突帶の無い一群は（1327, 1328, 1331, 1435-1, 1435-2）である。（1327）は外面ナデかミガキで、口唇部はO字押捺文である。（1331）は口縁部が波形で、外面はナデている。（1435-1）は山形口縁で、外面は二枚貝条痕がヨコ方向にみられ、頸部下はケズリである。（1435-2）は口唇部にキザミがなされている。（1328）は頸部のくびれのない土器であるが、調整において幅広くナデを行い、その下位は右下がりケズリである。

キザミ文、沈線文の土器（1435-3）

屈曲部と思われる部位にキザミ目、その上か下の空間に二本沈線の文様がなされている。

押捺あるいは押引文の土器（1329-1, 1329-2）

いずれもナデの上を文様がなされているものである。

叩き石（1110）

半裁の台石で、残存部分は、長軸13cm、最大幅9.8cm、厚さ6.1cmで、片面に一ヶ所大きな凹みがある。表面はミガかれた凝灰岩を素材としている。

S K 1 1 8

南北方向の落ち込み状遺構で幅3m、深さ50cmで他は調査区外である。

出土遺物（1436-1・2）（図134）

縄文土器

深鉢（1436-1・2）

（1436-2）は、内外面共に荒い調整がなされ、口唇部はキザミ目がみられる。（1436-1）

は口縁部外面に貼付突帶がなされ、突帶下位に貼付時の調整痕がみられる。突帶はキザミ目が付されている。

S K 1 2 5

遺構不明

出土遺物（1332-1・2）（図134, PL95）

縄文土器（1332-1・2）

二片は同一個体であろう。口縁部に貼付突帶がなされ、突帶下位はその際の調整の稜がみられ、突帶の稜は上向きに整形されている。

S K 1 2 8

長さ4.7m、幅2.7m、深さ30cmの隅丸長方形の落ち込みである。

出土遺物（1333, 1334）（図134, PL95）

縄文土器（1333, 1334）

深鉢（1333, 1334）

（1333）は口縁部外面が二枚貝に似たケズリで、頸部はミガキまでならないナデの帶があり、その下の体部はケズリである。（1334）は深鉢の体部で浅い連續楕円形押捺文がなされている。

S K 1 3 5

長方形の落ち込みで、長軸5m、短軸1.6m、深さ70cmの規模である。

出土遺物（967）（図133）

弥生土器（967）

壺の体部下半から底部片である。外面は右下がりのヘラミガキがなされている。内面は荒いハケ状工具による右上がり方向のケズリがなされている。

SK136

不定形な土坑で長さ1.8m、幅1.6m、深さ70cmと深い遺構である。

出土遺物（1336, 1337）（図134, PL95）

縄文土器（1336, 1337）

浅鉢（1337）

外面にはヨコ方向の沈線文がめぐらされ、口縁部の一条目の山部にキザミ目がなされている。

深鉢（1336）

口縁部外面、口唇部直下に貼付突帯がめぐり口縁部を形成している。突带上には爪による重複押捺文がなされている。

SK138（1338）

不整形な円形状土坑で、長さ2.5m、幅2m、深さ50cmである。

出土遺物（図134, PL95）

縄文土器（1338）

深鉢（1338）

口縁部外面、口唇部下に低い貼付突帯がなされている。口唇部は内面に斜傾して成形され、突带上、口唇部には押捺文が施されている。

SK147

不整形の落ち込みで、最大長軸9m～14mで、深さ10cmである。

出土遺物（968, 969, 1012, 1013, 1021, 2042）（図133）

弥生式土器（968, 969, 1012, 1013）

壺（968, 1013）

（968）は、口径14.6cmで、やや下方に拡張された口縁部は、不明瞭な四本からなる凹線がみられる。頸部は、右下がりのハケ目調整がなされ、内面は水平方向のヘラミガキ調整である。

（1013）の口縁部は下方に拡張され、荒いハケによる波状文がなされ、内面は一定の幅で、右上がり、左上がりのヘラミガキが施されている。口径18.8cmに復元できる。

甕（1012）

底部であるが、外面体部と底部の接合の際の指頭痕がみられ、体部は左下がりのタタキ目

を残す。内面は底部中心部を中心にして、荒いハケ目の扇形状調整がみられる。

(969) は高杯の脚部、裾部で内外面脚部内面のヨコ方向のケズリを除いて全面丁寧なヘラミガキの土器である。裾径は10cmである。

染付椀 (1021)

椀の底部で、削り出し高台径は5.1cmで、内外面に染付けによる圈線文様がみられ、青色の濃い色調である。

青磁椀 (2042)

あるいは皿かもしれない。高台部内面まで釉がおよんでいる。高台径8.8cmである。

SK165

やや楕円形の土坑で、長軸80cm、短軸75cm、深さ15cmの遺構である。

出土遺物 (970, 971, 972)(図133)

土師器小皿 (972)

口径11cm、器高1.6cmで、口縁部内外面はヨコナデ、底部は指頭圧痕の後ナデている。内面もナデ仕上げである。残存する体部と底部の境に径6mmの二個の穴孔があり、少なくとも四個の穴孔があったとおもわれる。

土師器鍋 (970)

口縁部下に、貼付断面三角形の突帯を成形している土器であるが、最大幅は、体部にある。外面体部は左下がりの二段のタタキ目が綺麗になされている、底の浅い土器である。体部下半はタタキの後にナデて消している。外面には煤が付着し、この煤は口縁部内面にもおよんでいる。口径22.3cmである。全体に橙色の色調である。

瓦質羽釜 (971)

口縁部径22.3cmで、全体的につばから内弯している。つばから口縁部にかけて外面はヨコナデで、粘土紐痕の凹凸、つばとの接合部分はナデている。つばから下はケズリ痕がみられる。

SK167

不整形な落ち込みで、深さ30cmである。

出土遺物 (973)(図133, PL87)

土師器小皿 (973)

口径8.8cm、高さ1.1cm、外面底部は指頭圧痕の上をナデしている。口縁部内外面はヨコナデ、内面底部はナデである。

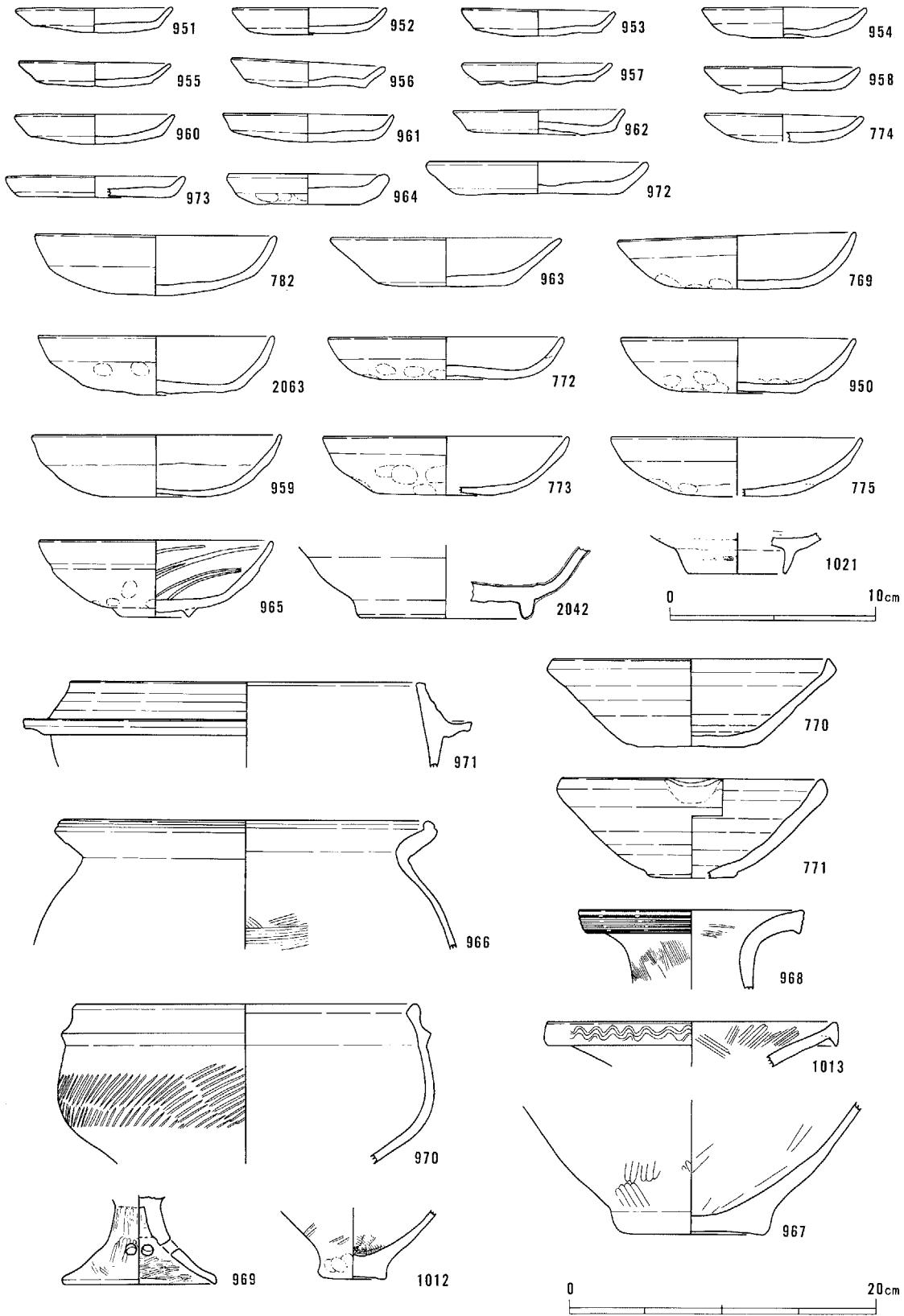


図133 SK103 SK105 SK108 SK110 SK135 SK147 SK165 SK167

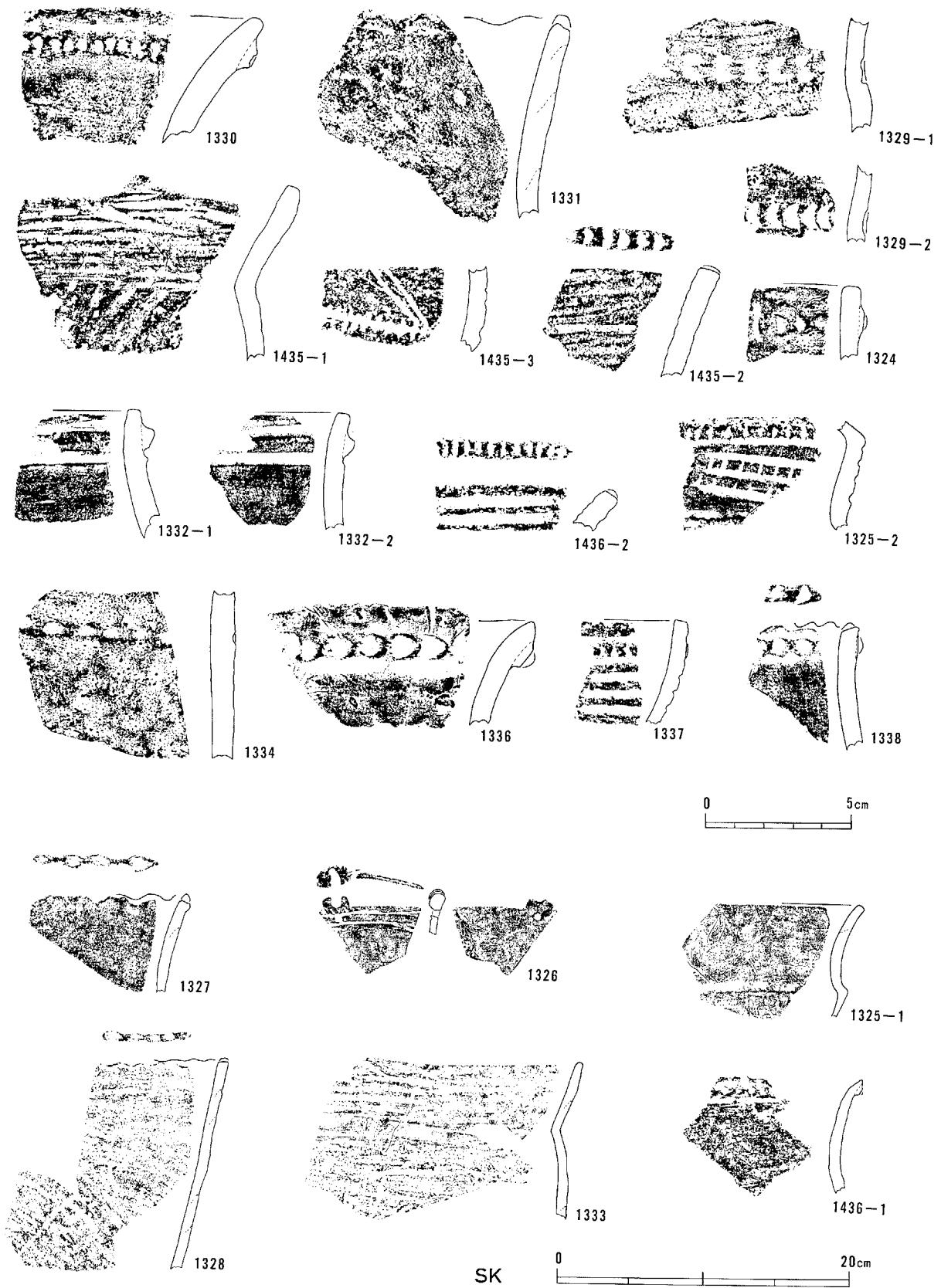


図134 SK112 SK117 SK118 SK125 SK128 SK136 SK138

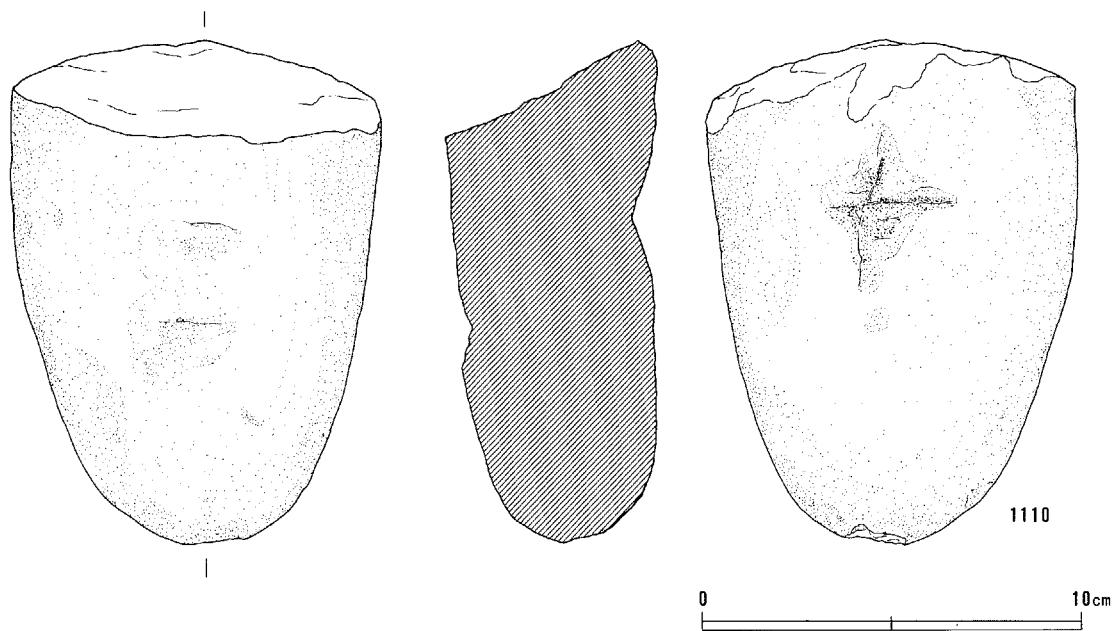


図135 SK117

S D 遺構

ここでは S D 遺構出土の遺物が上面でも出土していたが縄文土器に限って、S D05、06、09、20についてこの項でまとめた。よって遺構は上面の記号である。

S D 0 5 出土の遺物（図137）

深鉢（1437-1）

口縁部が外方に反っている。口縁部外面に貼付突帯がなされている。頸部はナデられてい る。

S D 0 6 出土の遺物（図137，PL96）

深鉢（1345-2，1437-3）

（1345-2）の外面はミガキの上を太い沈線整形がなされ、沈線下は斜格子が施されている。
（1437-3）は口唇部に円形押捺文がなされている。

浅鉢（1349）

内外面ミガキの土器で、外面口縁部に細い沈線がなされている。

S D 0 9 出土の遺物（図137，PL96）

キザミ目文、沈線文の土器（1350-1，1350-2，1437-2）

（1437-2）は口縁部内面に一条の沈線、外面にも一条の沈線をめぐらしている。（1350-1，1350-2）はキザミ目がなされているが、（1350-2）はさらに沈線による斜格子文が施されている。

S D 2 0 の出土遺物 (図 1 3 7, P L 9 5)

深鉢 (1 2 6 1)

口径35.4cmで、口唇部に細いキザミ目がなされ、口縁部から若干くびれる頸部はナデ、頸部下は右下がりのケズリがなされ、口縁部内面はヨコ方向の調整の条痕がみられる。

S D 1 0 2

VII区調査区内西端にある溝状遺構で、幅50cm~90cmで、深さ20cm~30cmである。

出土遺物 (9 9 1, 9 9 2, 9 9 3, 9 9 4) (図 1 3 6)

土師器 (9 9 1, 9 9 2, 9 9 3, 9 9 4)

土師器小皿 (9 9 1)

口径8.5cm、器高1.5cmで調整は通有の外面底部が指頭圧痕の上をナデ、口縁部内外面はヨコナデ、内面はナデ仕上げである。

土師器皿 (9 9 2, 9 9 3, 9 9 4)

口径11.5cm~12cm、器高2.4cm~2.8cmで、口縁部内外面はヨコナデ、外面底部は指頭押捺の上をナデ、内面底部はナデ仕上げである。

S D 1 0 3

東西流の溝状遺構で、溝幅40cm~80cm、深さ15cm~20cmである。

出土遺物 (9 9 5, 9 9 6) (図 1 3 6)

瓦器椀 (9 9 5)

口径13cm、器高4cmで、貼付高台は断面四角形である。底部は高台豊付と同じ高さである。

体部外面は二段の指頭押捺の上をナデしている。内面体部は細い二条のミガキ暗文がみられる。

口縁部内外面はヨコナデである。(996) も似たつくりである。

S D 1 0 4

南北流の溝状遺構で、幅55cm~70cm、深さ10cm前後である。

出土遺物 (9 7 5, 1 0 8 6, 1 3 4 7) (図 1 3 6・1 3 7・1 3 8, P L 9 6・1 0 4)

縄文土器 (1 3 4 7)

深鉢 (1 3 4 7)

深鉢頸部部分にナデた後に浅い刺突様の文様がヨコ方向になされ、下部にケズリがヨコ方向になされている。

石刀 (1 0 8 6)

出土している他の石刀と同じように、破断している。残存長10.4cm、断面最大幅1.9cm、厚さ1.6cmで、断面最大幅の一方が丸味を持った刃部を形成している。素材は緑泥片岩で、よく磨き成形されている石刀の先端部分である。

須恵器（975）

台付の長頸壺で、口縁部と台部を欠損している。頸部から体部上半にかけて凹線—烈点文—凹線—烈点文—凹線—凹線の文様構成である。内面底部には棒状工具による圧痕調整がみられる。外面にはうすい自然釉がかかり、一部内面体部にも及んでいる。

S D 1 1 0

南北流の溝状遺構で、幅1.5m、深さ50cmである。

出土遺物（1354-1・2・3）（図137、PL95）

縄文土器（1354-1・2・3）

深鉢（1354-1・3）

（1354-1）は体部に貼付突帯文がなされ、突帯には橢円形押捺文がみられる。（1354-3）は、口縁部にヨコ方向の条痕の上をナデ、体部はそのままである。口唇部にはキザミ目がなされている。

押引文の土器（1354-2）

器面はナデで、体部にC字様の文様がなされている。

S D 1 1 1

東西流の溝状遺構で、幅1.8m、深さ50cmである。

出土遺物（1348-1・2）（図137、PL96）

縄文土器（1348-1・2）

1348-2は深鉢の体部片で、外面にナデた後C字の連続押捺文がヨコ方向になされている。（1348-1）は浅鉢で、口縁部内面は肥厚され、内外面はミガキで、黄褐色の色調である。

S D 1 1 3

南北流の調査区内を縦断する溝で幅80cm、深さ10cm前後である。

出土遺物（1085）（図138、PL104）

石刀（1085）

石刀の刃部片である。石材は結晶片岩で、断面は偏平な橢円形をしている。稜と稜の幅は3.6cm、厚さ2cmである。

S D 1 1 8

南北流の溝で、幅80cm、深さ10cm前後である。

出土遺物（2108）（図136）

土師器甕（2108）

最大幅が口縁部にあり、口径32.2cmで体部下半は欠く。口唇部は鋭く内弯している。口縁部内外面はヨコナデ、外面体部はナデ、内面には右下がりの板状工具によるナデがみられる。

SD119

南北流の溝で、幅70cm、深さ25cm～30cmである。

出土遺物（1351, 1353）（図137, PL96）

縄文式土器（1351, 1353）

深鉢（1353）

外面はナデで、口唇部にO字の押捺文がある。

沈線文のある土器（1351）

二本の沈線間に短線の沈線を施している。沈線ははっきりとした深いものである。

SD120

不定形な落ち込みで、最大幅1.5m、深さ50cmである。

出土遺物（997, 998, 999, 1335-1・2, 1438）

（図136・137, PL95）

縄文式土器

深鉢（1335-1, 1438）

（1438）の外面は貝殻条痕が水平になされ、頸部らしき部分はその上を平滑にしている。

（1335-1）は、口縁部外面や下方に、突帶裾がはっきりとした、高い突帶がめぐる。突帶にはキザミ目がなされている。

沈線文の土器（1335-2）

土器のくびれ部のやや凸帶部にキザミ目をし、沈線をもって三角文とし、さらに沈線で三角文の中を埋めている。

須恵器

須恵器蓋（998）

口径12.2cm、器高4.6cmで天井部外面は回転によるヘラケズリがなされ、他の内外面はヨコナデ、ナデ仕上げである。外面はうすい自然釉がみられる。

土師器

土師器皿（997）

口径11.4cm、器高2.4cmで、外面底部は指頭圧痕の上をナデしている。口縁部の内外面はヨコナデで、内面底部はナデ仕上げである。

瓦質甕（999）

口径14.2cmの体部下半を欠いている瓦質の甕で、口縁部は外方へ屈曲する成形である。頸部下外面は水平なタタキ目があり、内面は荒いハケ目がみられる。口縁部の内外面はヨコナデで調整している。

SD123

南北流の溝状遺構で、後述のSD124に平行している。幅80cm、長さ8mの規模である。

出土遺物(1000)(図136)

土師器皿(1000)

口径11cm、器高1.2cmで、口縁部内外面はヨコナデ、内面底部はナデ、外面底部は、顕著な指頭痕のままであるがナデている。

SD124

南北流のやや蛇行している溝で、幅150cm~200cm、深さ10cm前後の浅い遺構である。

出土遺物(976, 977, 978, 979, 980, 1001, 1002, 1003, 1004, 1005, 2105, 2106)(図136)

須恵器杯身(1001)

口径11cm、器高3.8cmで、外面底部は回転によるヘラケズリがあり、内面底部は左から右へのナデ仕上げで、口縁部はヨコナデである。

土師器皿(977, 980, 1003, 1004, 2105, 2106)

これらは、器高の差によって他の小皿とは別類にした。(1003)は、口径8cm、器高2.2cmで、外面底部は指押えの後ナデ、他はヨコナデで、内面底部はナデ仕上げである。(977)は、口径9.4cm、器高2.8cmで、全体に磨滅している。(980, 1004)は、口縁部の端反りのもので、(980)は、口径9.7cm、器高2.5cmである。(1004)は、口径11.6cm、器高2.6cmで、極度に体部から外反りしている土器で、いずれも通有の手法で調整をしている。(2105, 2106)は体部と底部に境がある。

土師器小皿(1002, 1005)

(1002)は、口径10.8cm、器高1.8cm、(1005)は口径9.8cm、器高1.8cmである。両者共に外面底部は指頭圧痕の上をナデ、口縁部内外面はヨコナデ、内面底部はナデ仕上げである。

陶器皿(978)

口縁部端の内外面は白灰色、他の内外面は赤褐色を呈する皿である。口縁部、体部はヨコナデ、内面底部はナデ、外面底部は糸切りの後板状工具で調整している。

瓦質火舎(976)

口径11.2cm、器高5.3cmの三脚の火舎で、口縁部は外方に水平に反っている。体部に双渦文スタンプが8単位でみられる。口縁部の水平部分には、煤の付着がみられる。

瓦質羽釜(979)

口径26.6cmで体部下半を欠損している。口縁部外面からつばにかけて内弯し、細い沈線文が三条めぐっている。つばは、厚さ1cmで、体部より水平に2cm突き出して貼り付けられたも

のである。

SD125

南北流の溝状遺構で、幅50cm～100cm、深さ80cmである。

出土遺物 (1006) (図136)

土師器皿 (1006)

口径11.3cm、器高2.6cmで、口縁部内外面はヨコナデ、内面底部ナデ、外面底部は板目状の压痕文がみられる。

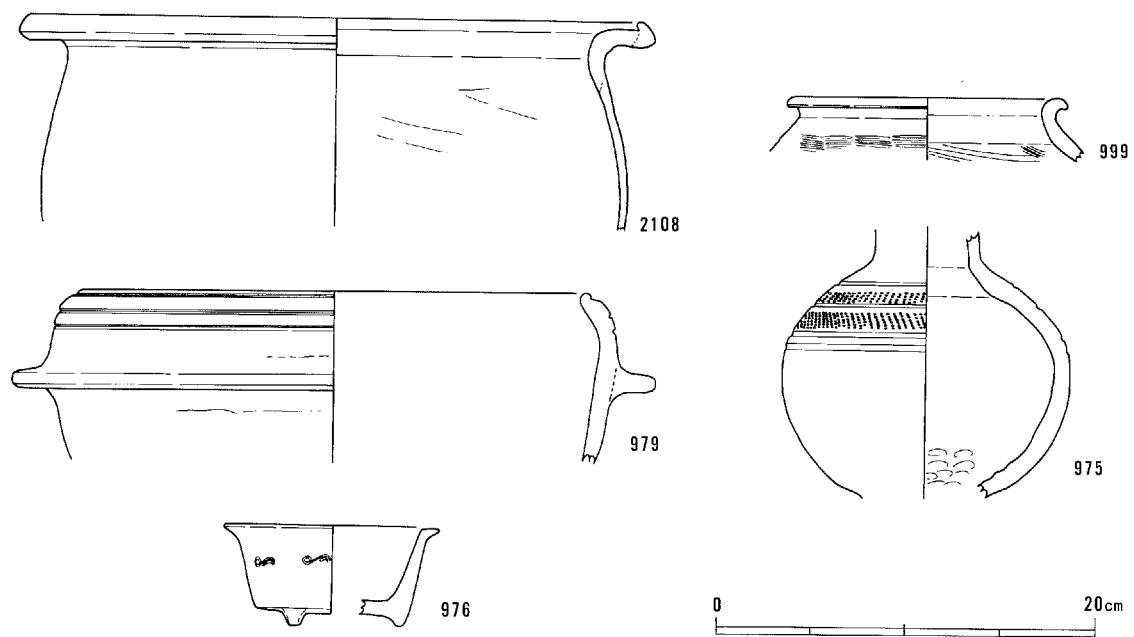
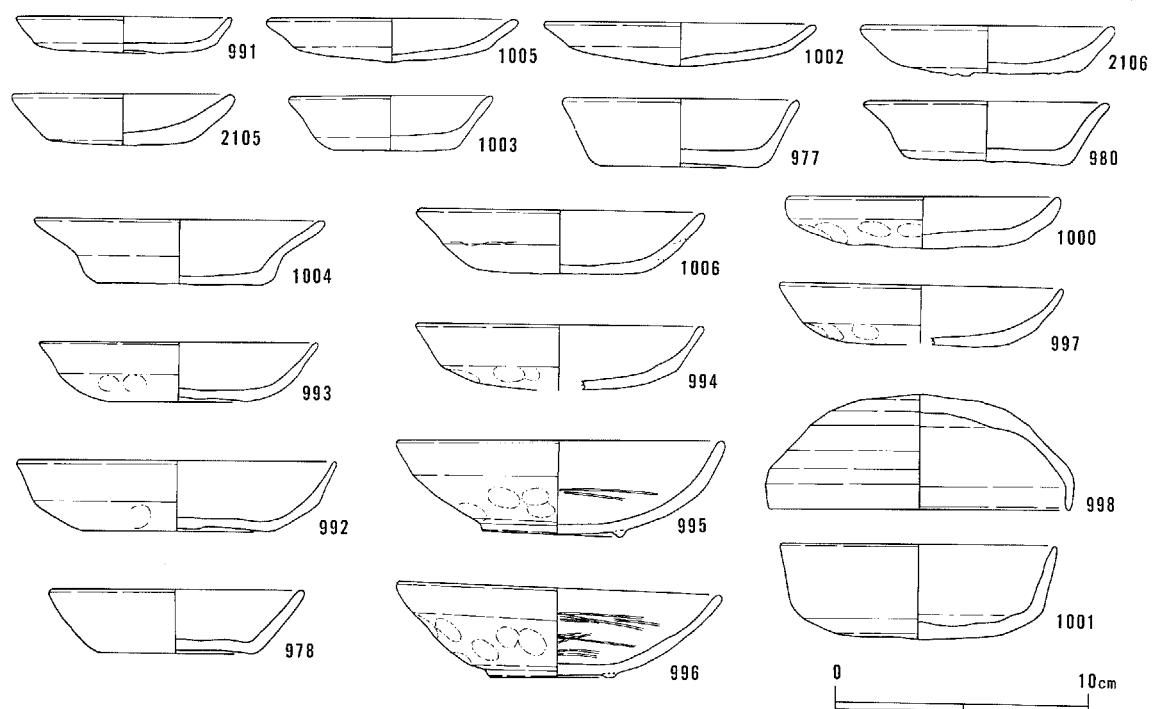


図136 SD102 SD103 SD104 SD118 SD120 SD123 SD124 SD125

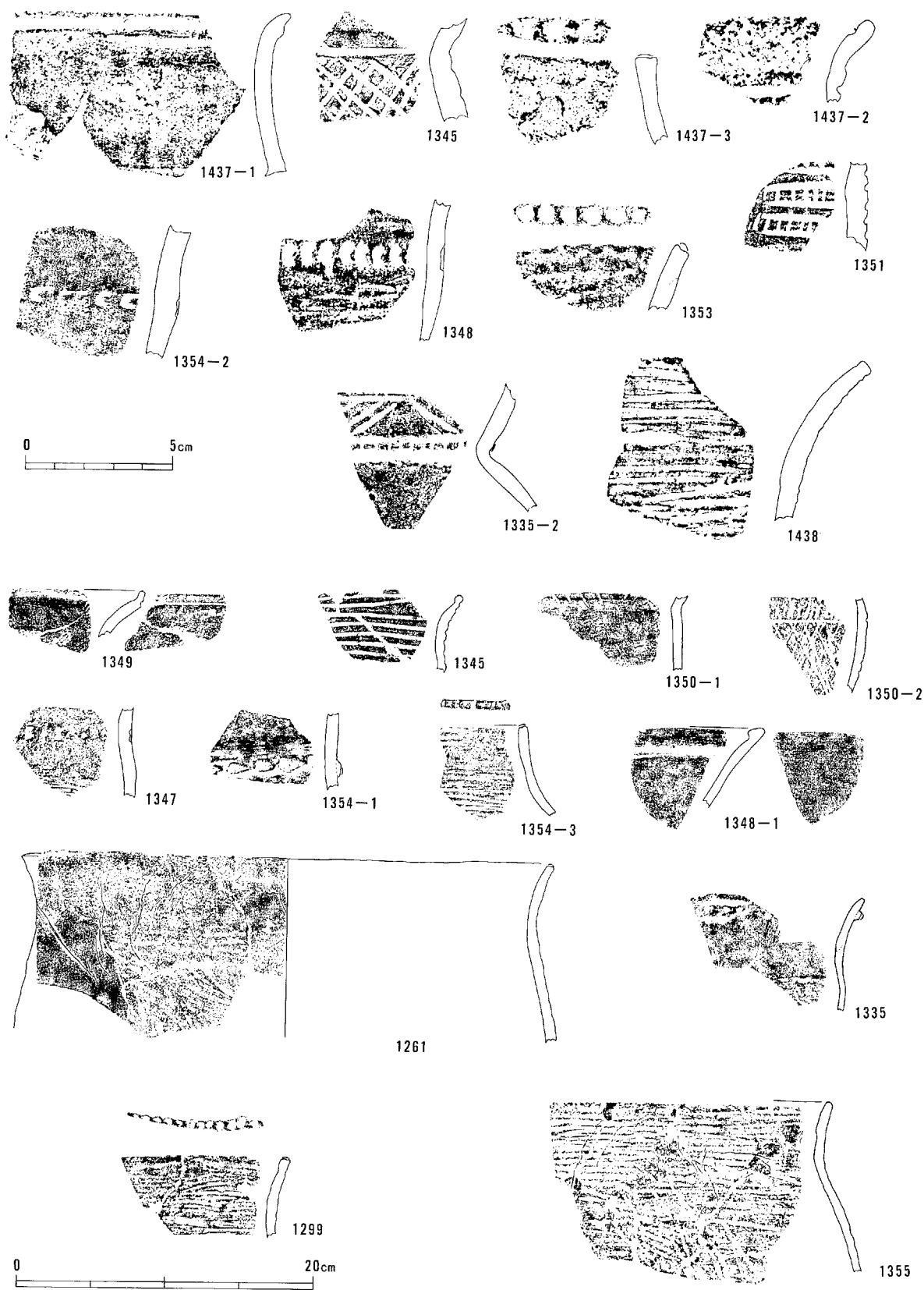


図137 SD遺構出土遺物 包含層

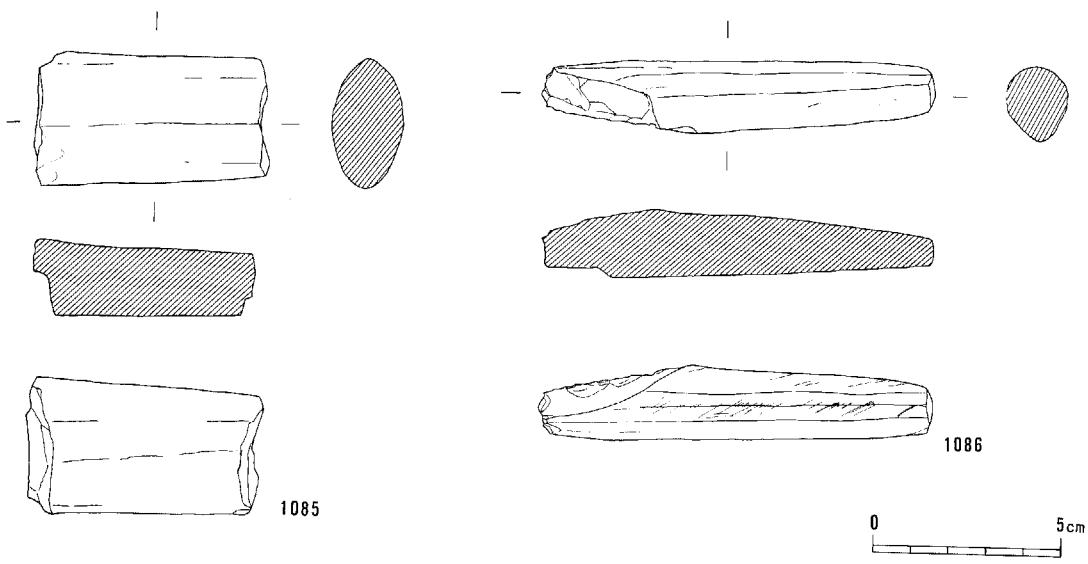


図138 SD104 SD113

SW遺構

SW101 (図139, PL43)

最大幅9mで南北の落ち込みで、調査区外の南にさらに続いている。最大深50cmである。このSW101は多量の縄文式土器が出土しており、文様、形態により分類は可能である。

出土遺物

口唇部に文様がなく突帶も貼付されていない深鉢の一群について、それぞれのあり方をみると、

(1) 外面器面が磨かれて、さらにある種の工具をもって施文している土器、あるいは凹線文を施している土器で、(1203-1, 1203-2, 1204, 1205-1~3, 1206, 1207-1, 1210-2)がある。(図140, PL98)

(2) 線刻文あるいは竹管による沈線文の一群で、(1182-2, 1182-3, 1183-1, 1183-2, 1183-3, 1185-1, 1186, 1190-3, 1191-2, 1192-1, 1192-2, 1192-3, 1192-4, 1194-1, 1194-2, 1194-3, 1196-1, 1197-2, 1198-1, 1200-1, 1200-2, 1200-3, 1201-1, 1201-2, 1207-2, 1207-3, 1210-3, 1293-2, 1231-2, 1222)があり、これらに含めていわゆる檜原式と思われる一群の(1182-1, 1182-4, 1183-1・2・3, 1185-2, 1196-2, 1196-3)がある。

(図140・144・145・146, PL97・98・99)

(3) 外面に条痕があり、二枚貝を押捺している土器で、(1179, 1195-2, 1242-2)があるが、(1195-2)は口縁部が山形口縁である。(図145・149, PL97)

(4) 口縁部外面がミガキかナデで、体部がケズリか二枚貝条痕のものに、(1009, 1248, 1249, 1263, 1314, 1318, 1319, 1339, 1340, 1341, 1343)があり、(1249, 1263)の口唇

部はキザミ目がなされている。

(図141・142・147, PL96・

100・101)

(5) 二枚貝条痕の土器で、(1211-1, 1319, 1341) は口縁部がミガキで体部が二枚貝条痕の土器である。(1009, 1248, 1318) は口縁部が二枚貝条痕で頸部がミガキ、体部が二枚貝条痕、(1250) (1344) は口縁部が二枚貝条痕で頸部がミガキ、体部はケズリの土器である。(1342) は二枚貝条痕の上をナデかミガキで、体部は二枚貝条痕である。(1008) は口縁部が二枚貝条痕で体部がケズリで、(1311) は口縁部が二枚貝条痕で体部も二枚貝条痕である。(1271, 1313) はこれらのいずれかである。

(図140・141・142・147, PL96・99・100・101)

(6) 口縁部無文のミガかれた土器で、(1140-2) がある。(図144)

(7) 晩期爪形文、押し引き文、押捺文の一群で、第143図と第144図の下半部がこの一群の土器である。(1176-2) は内面口縁部と外面頸にC字押捺文があり、多くは頸部と体部の堺に横位に爪形文、押し引き

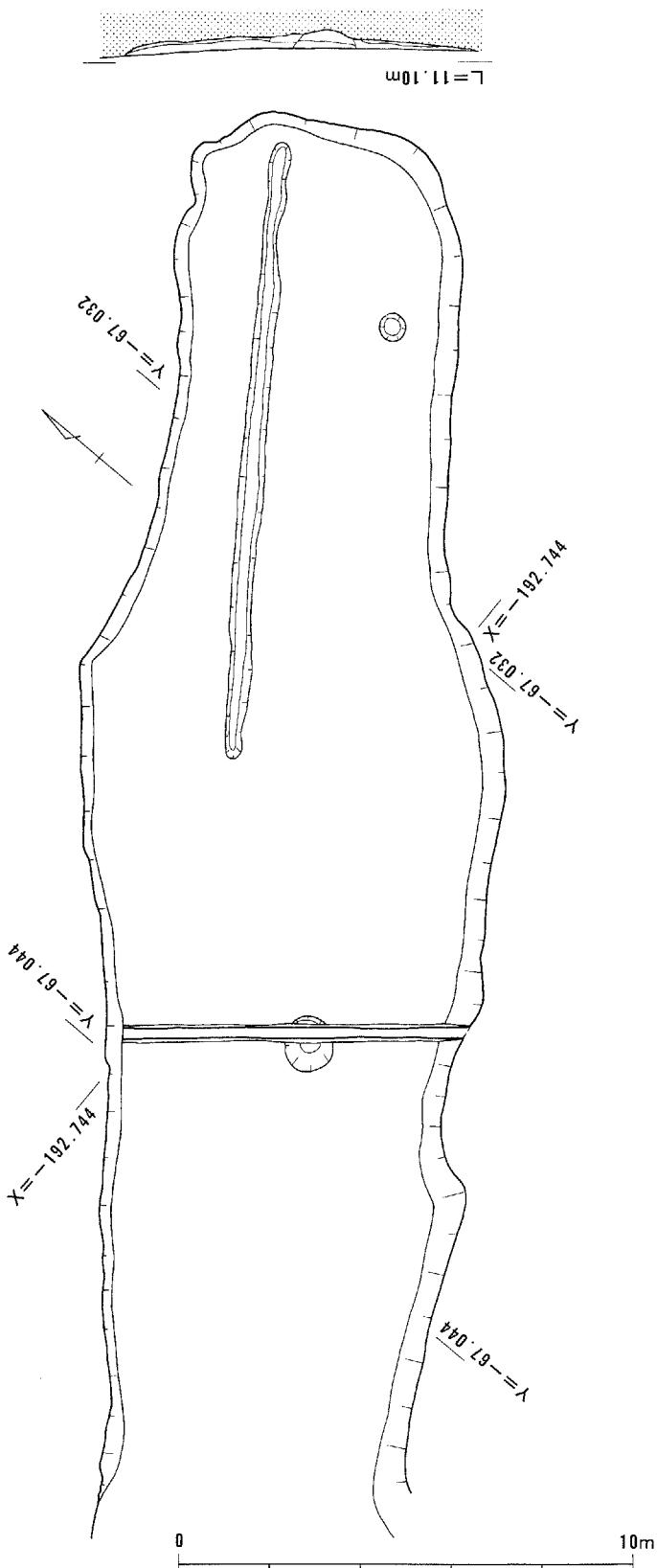


図139 SW101

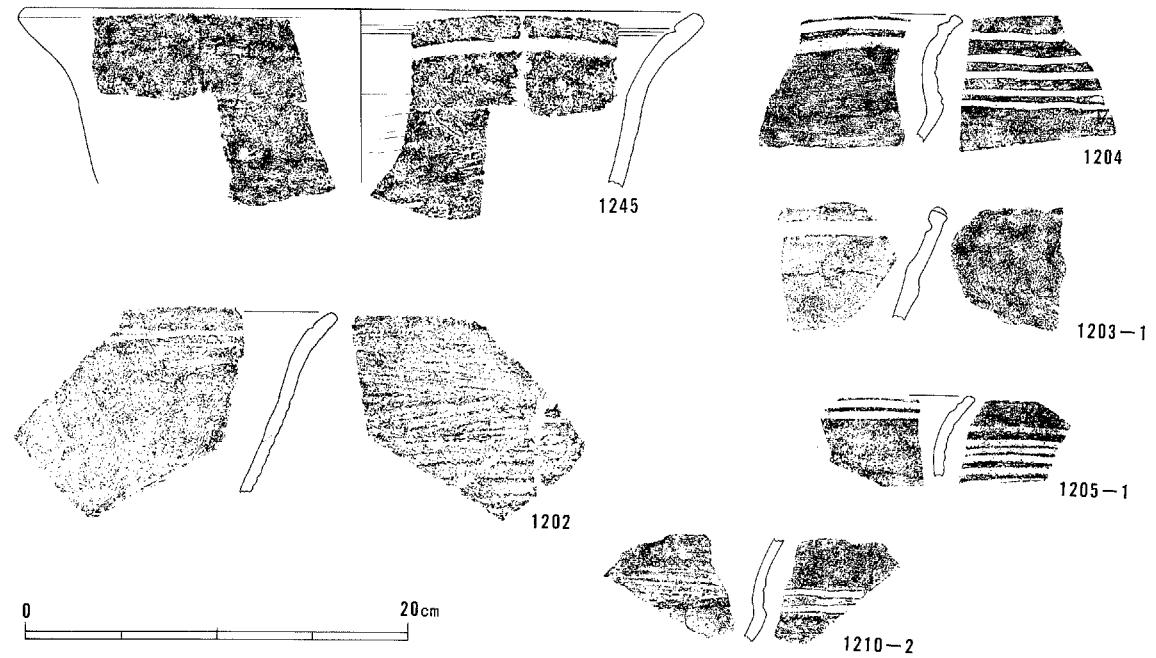
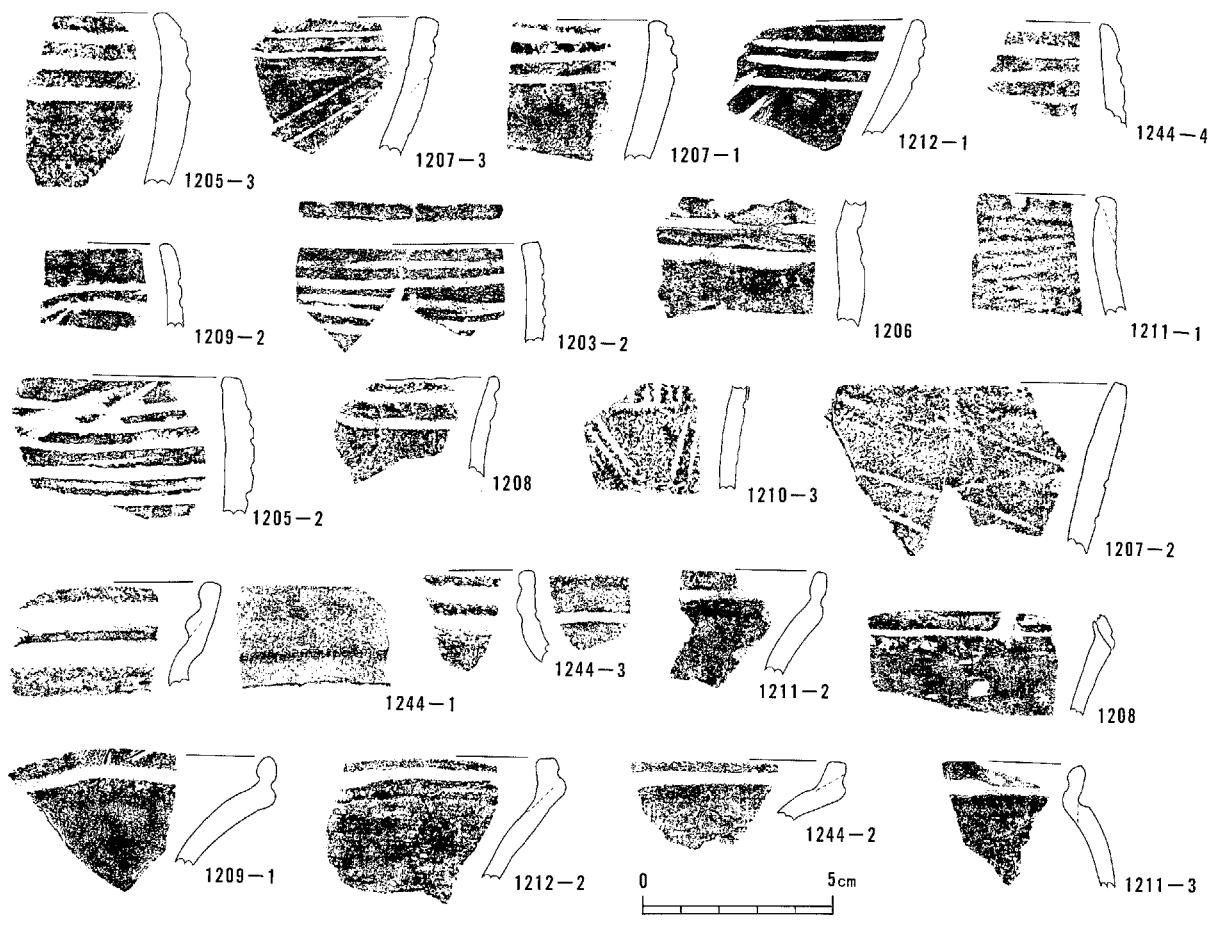


図140 SW101

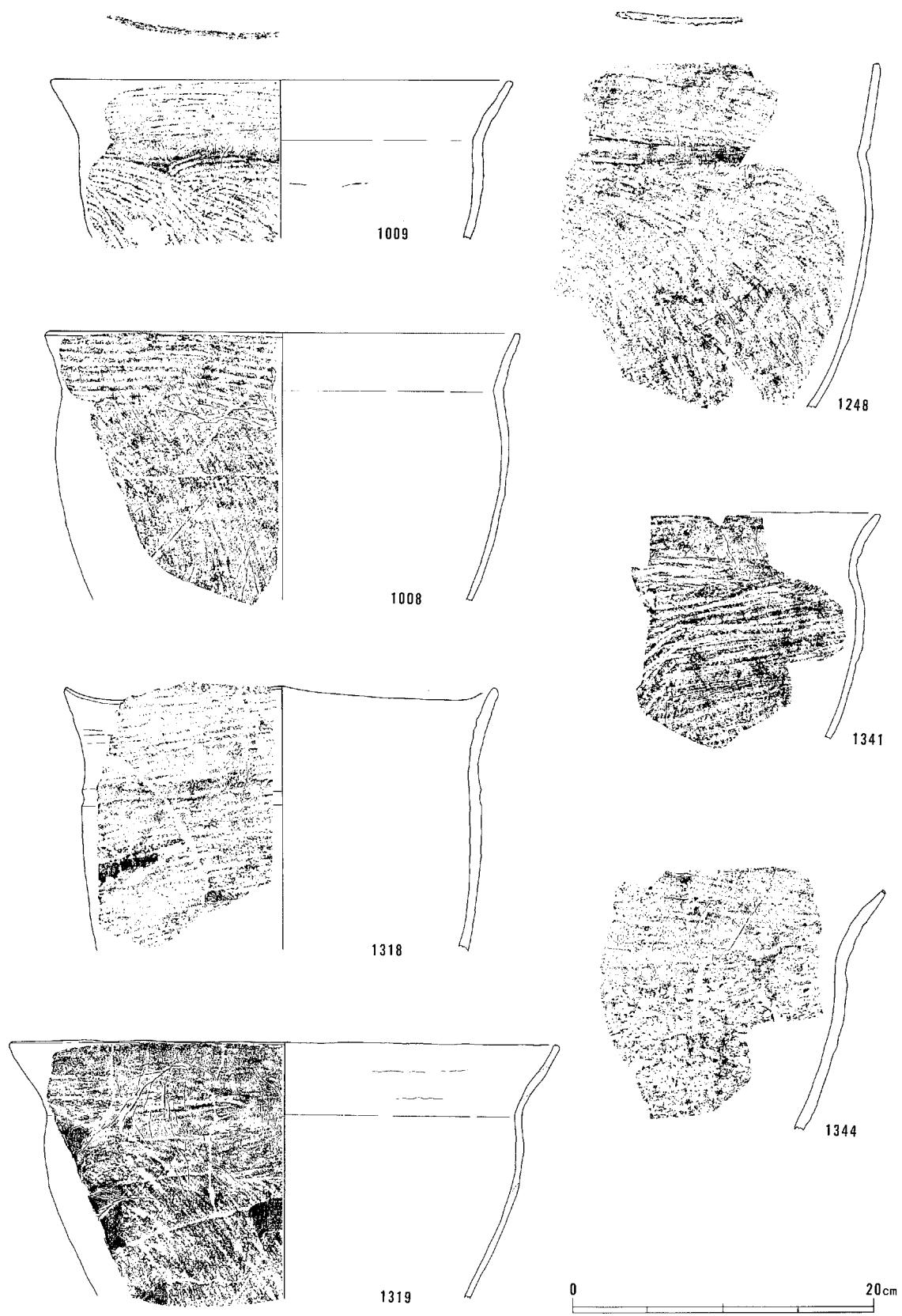


図141 SW101

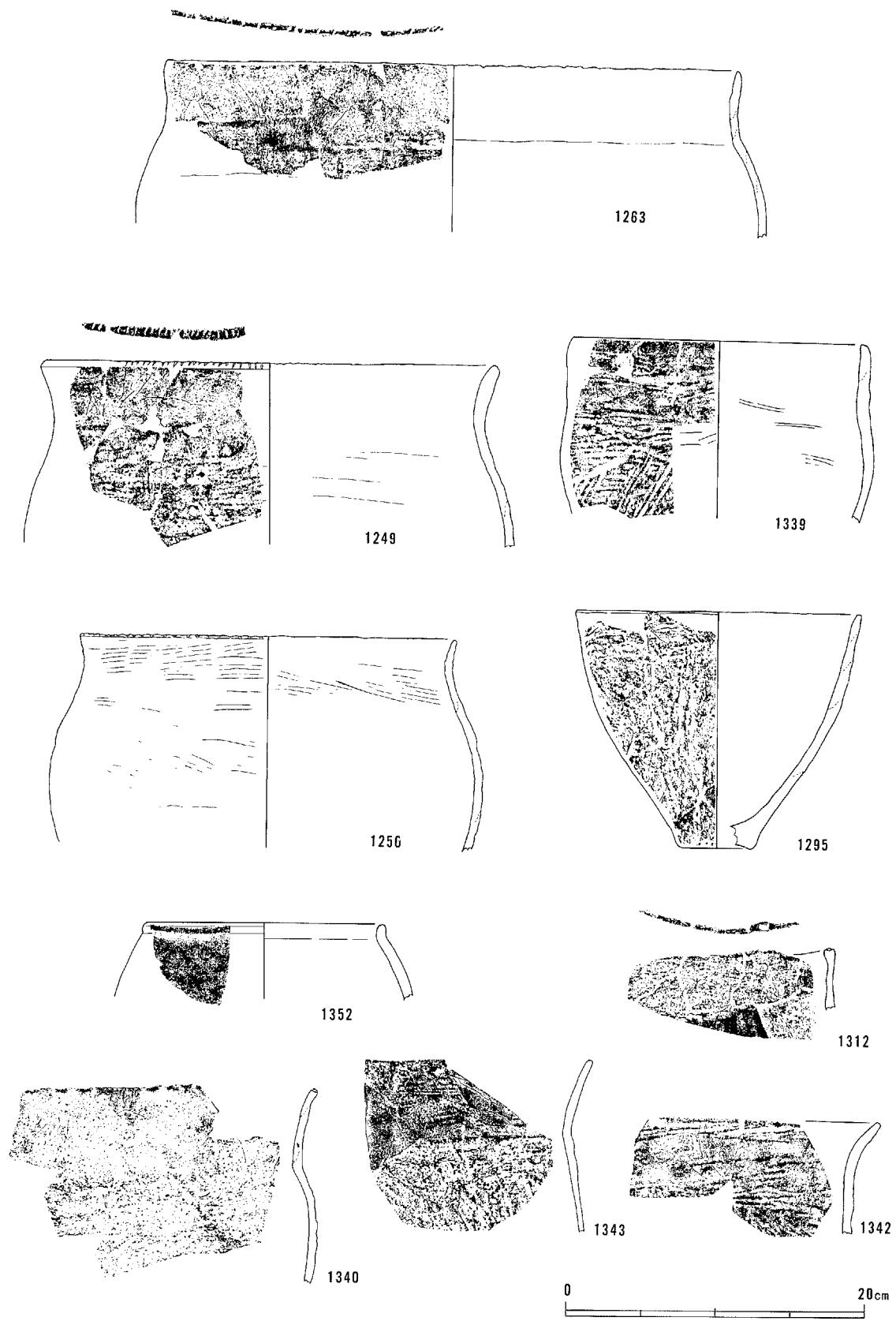


図142 SW101

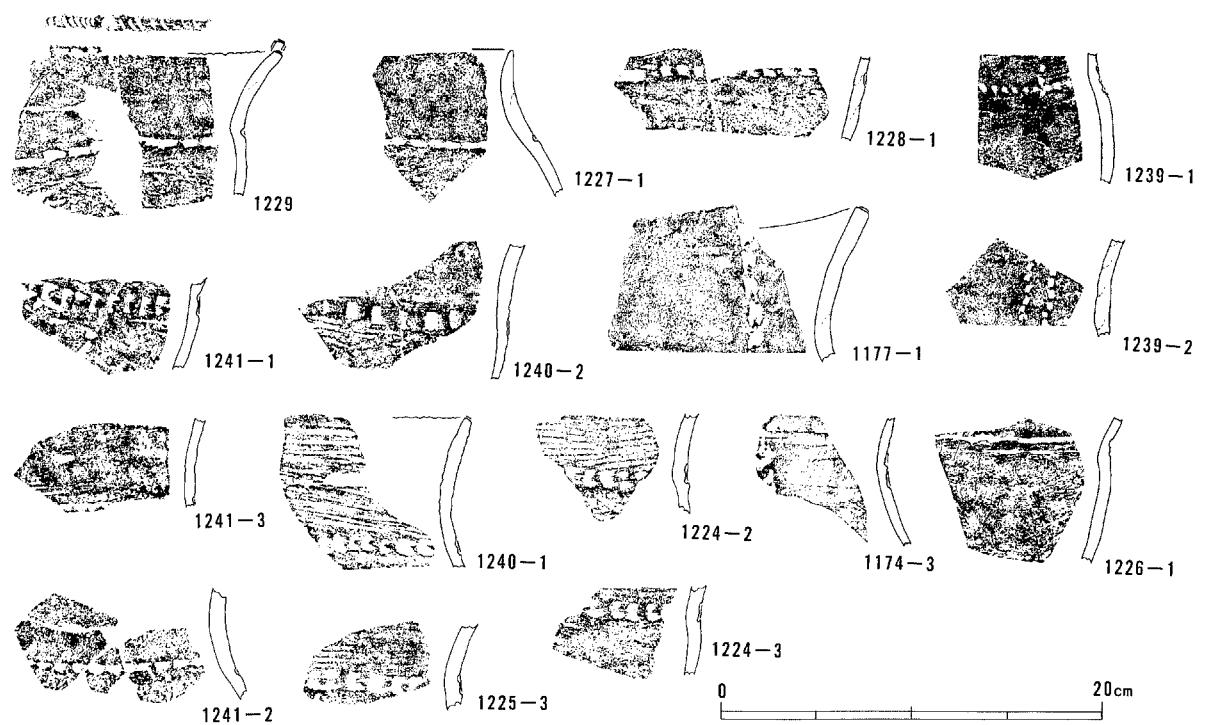
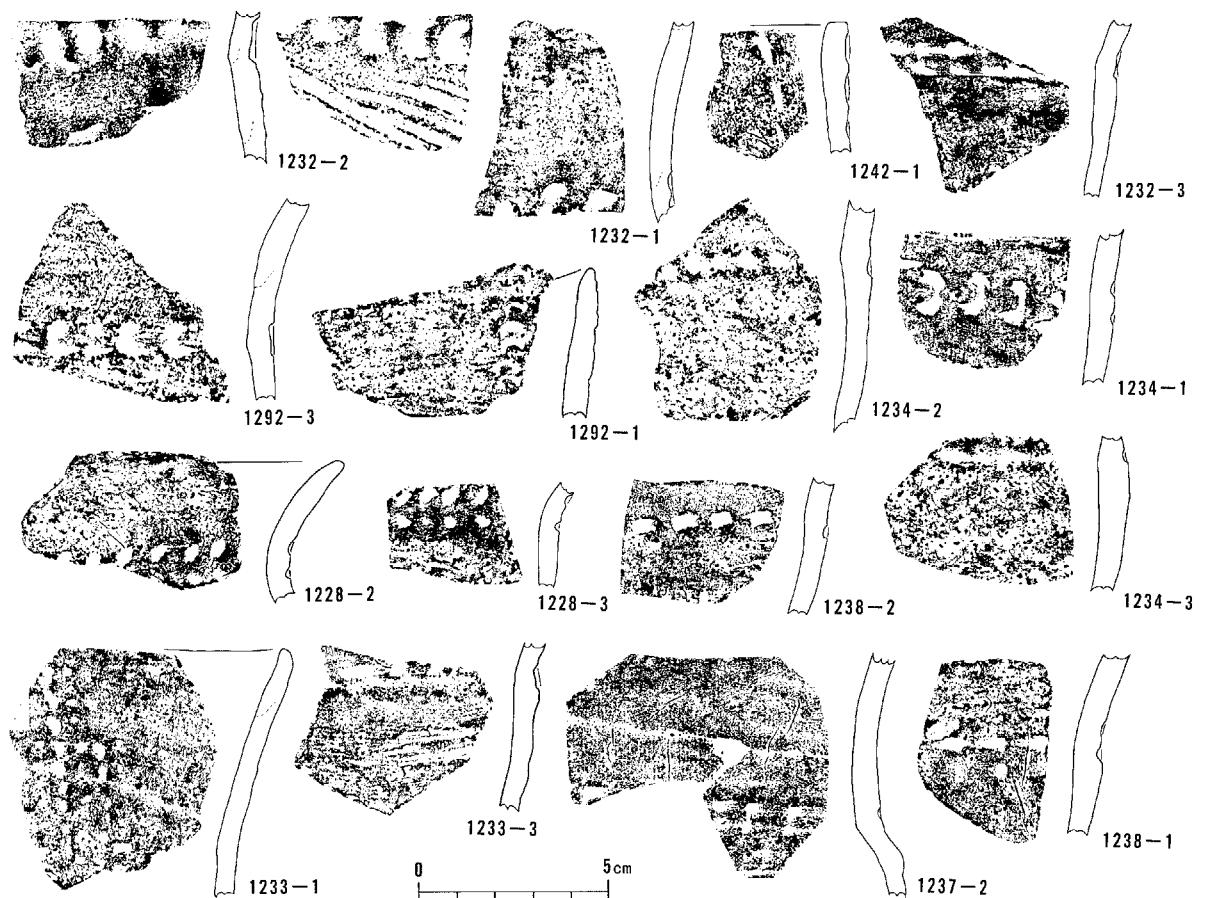


図143 SW101

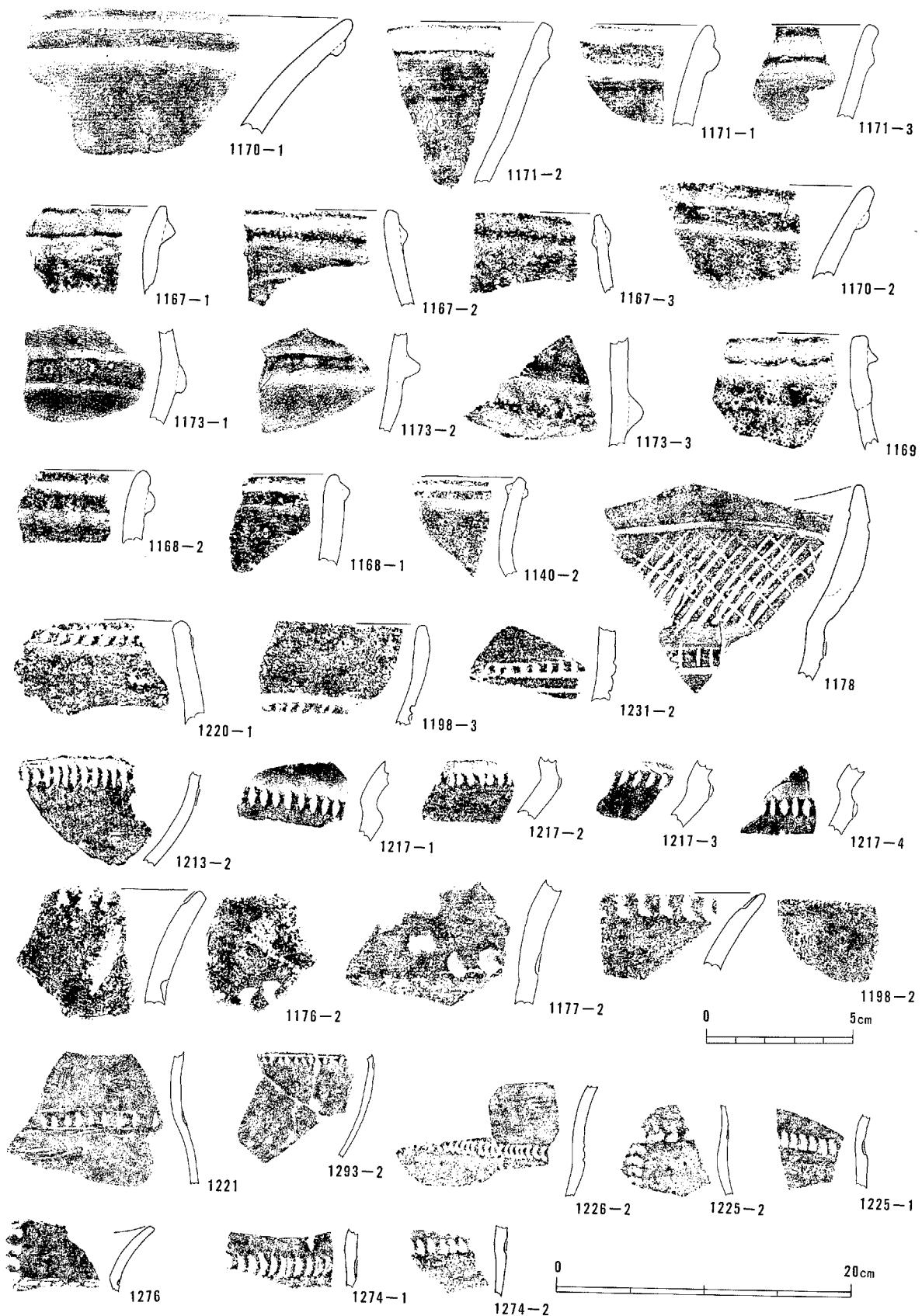


図144 SW101

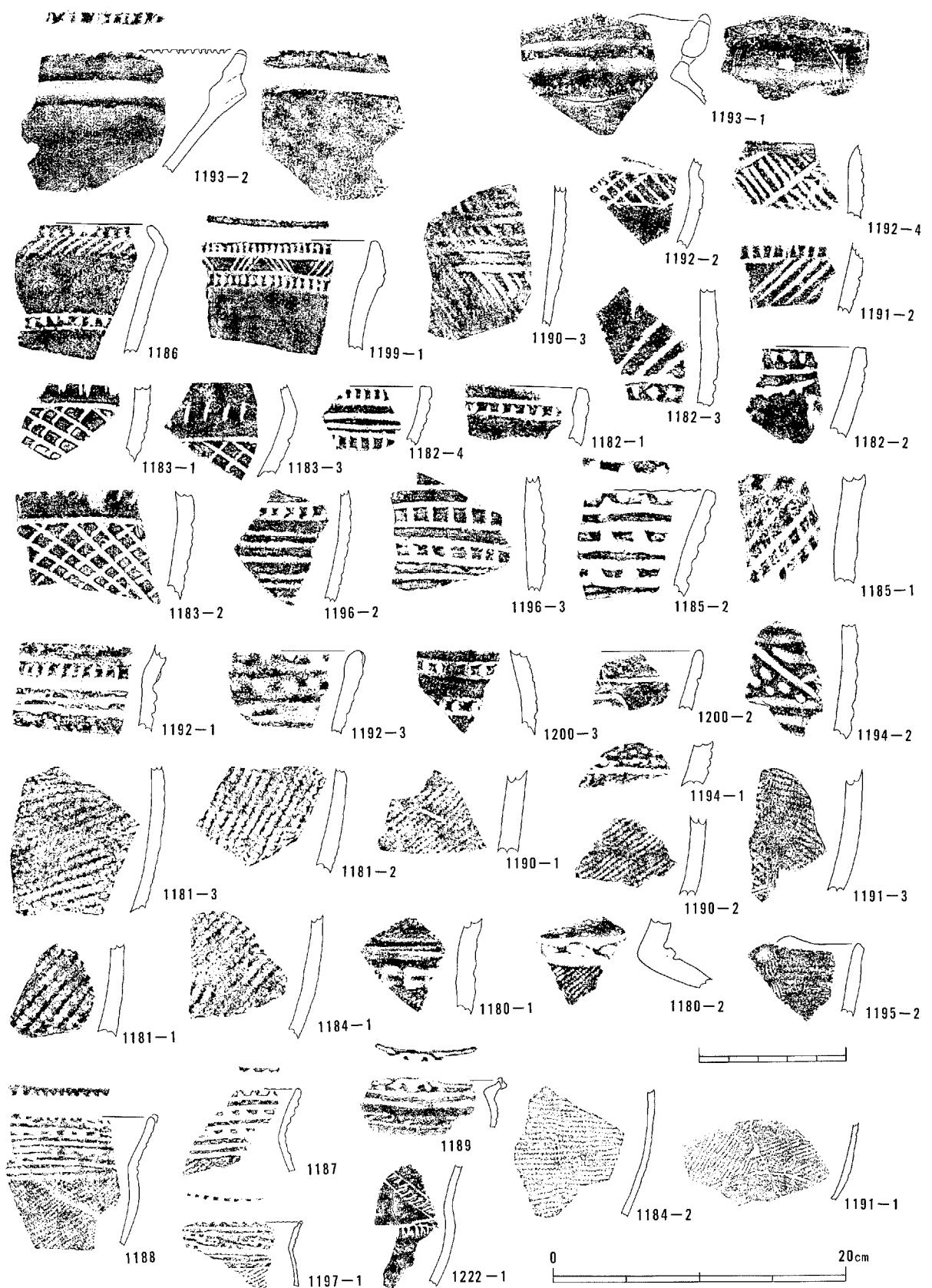


図145 SW101

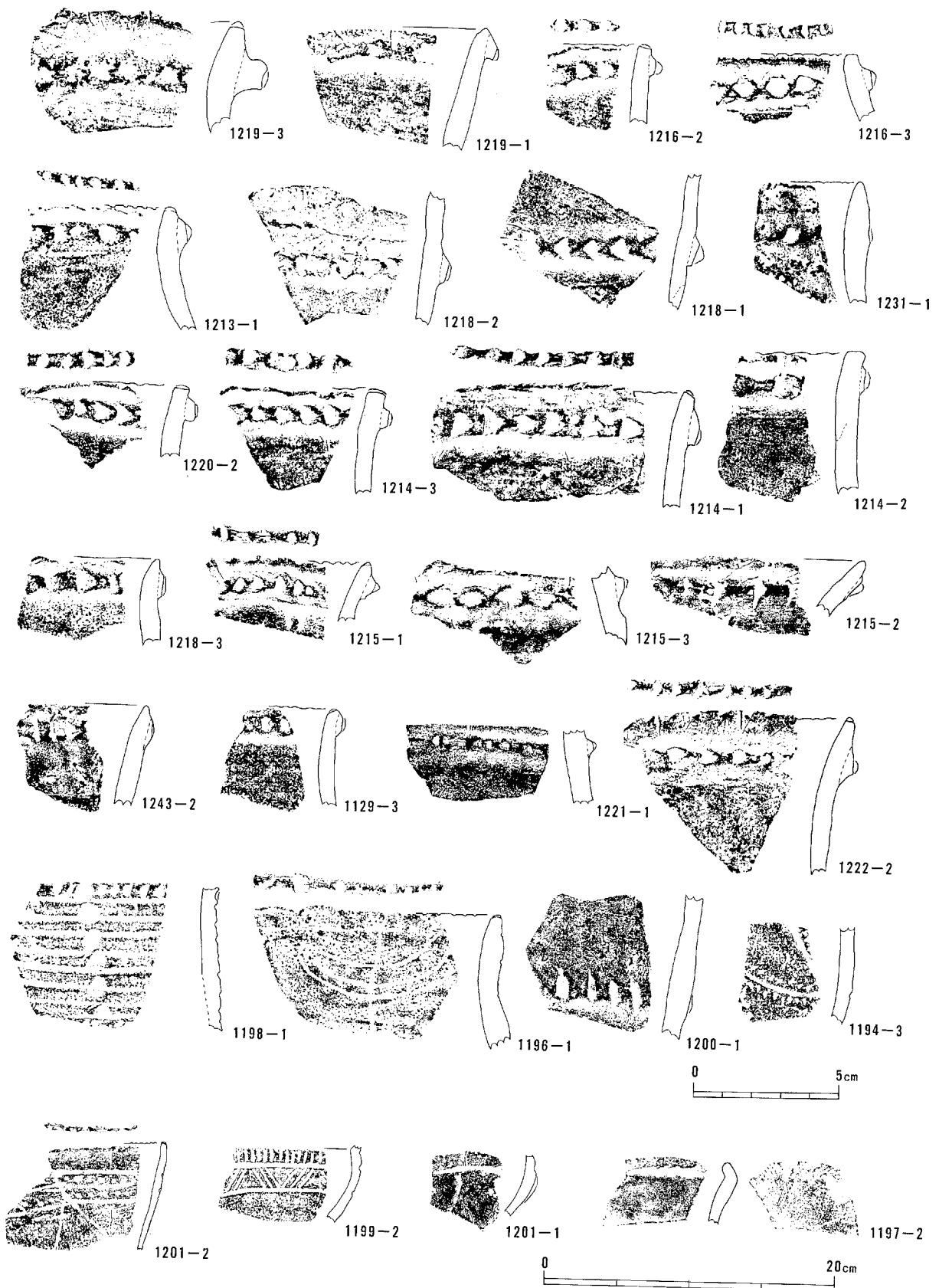


図146 SW101

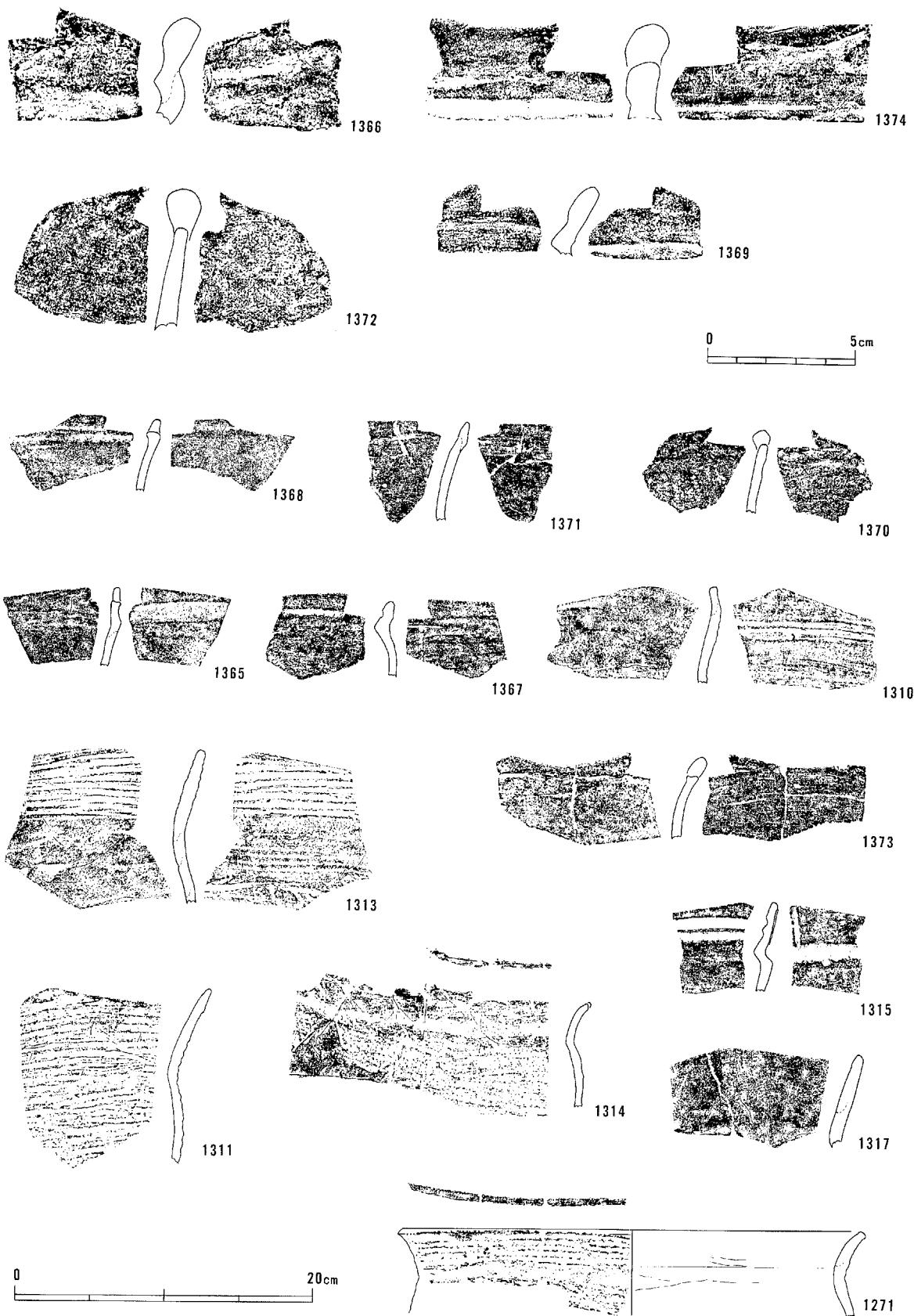
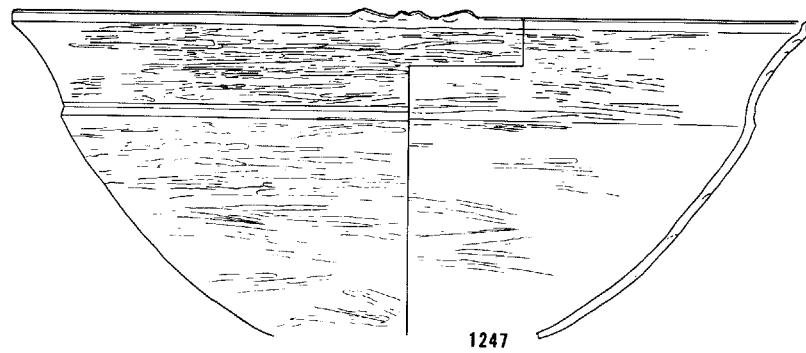
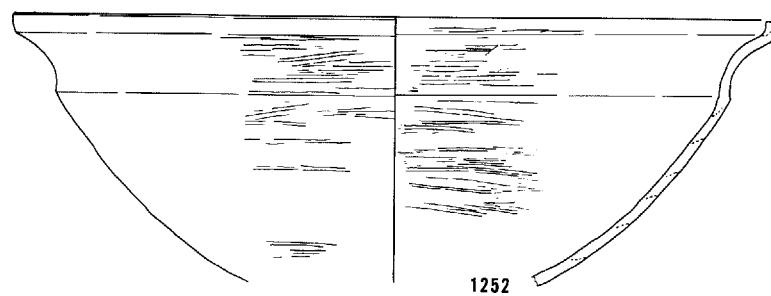


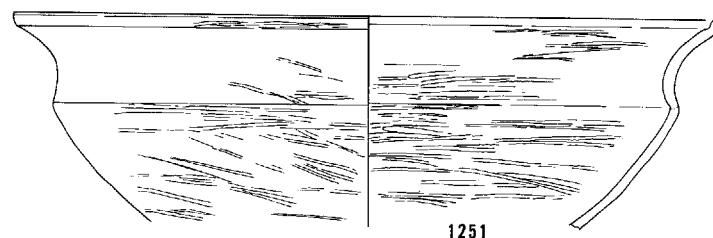
図147 SW101



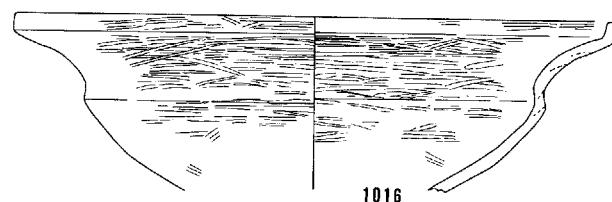
1247



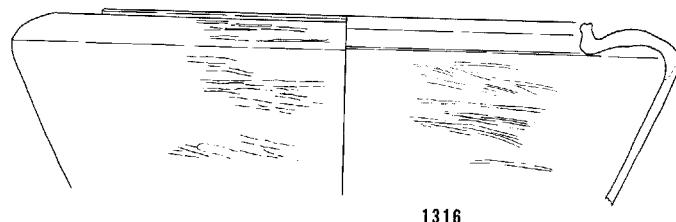
1252



1251



1016



1316

0 20cm

図148 SW101

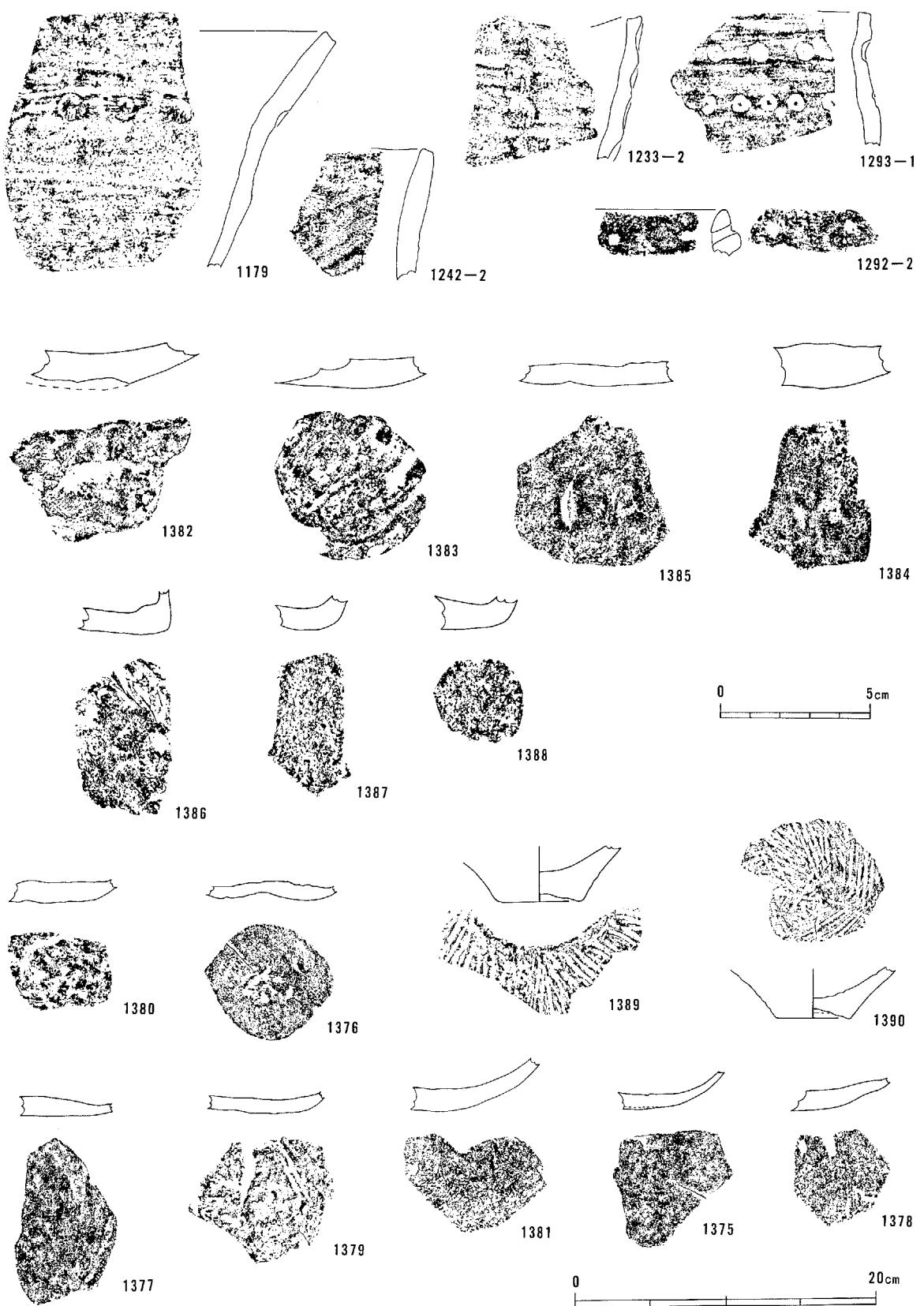


図149 SW101

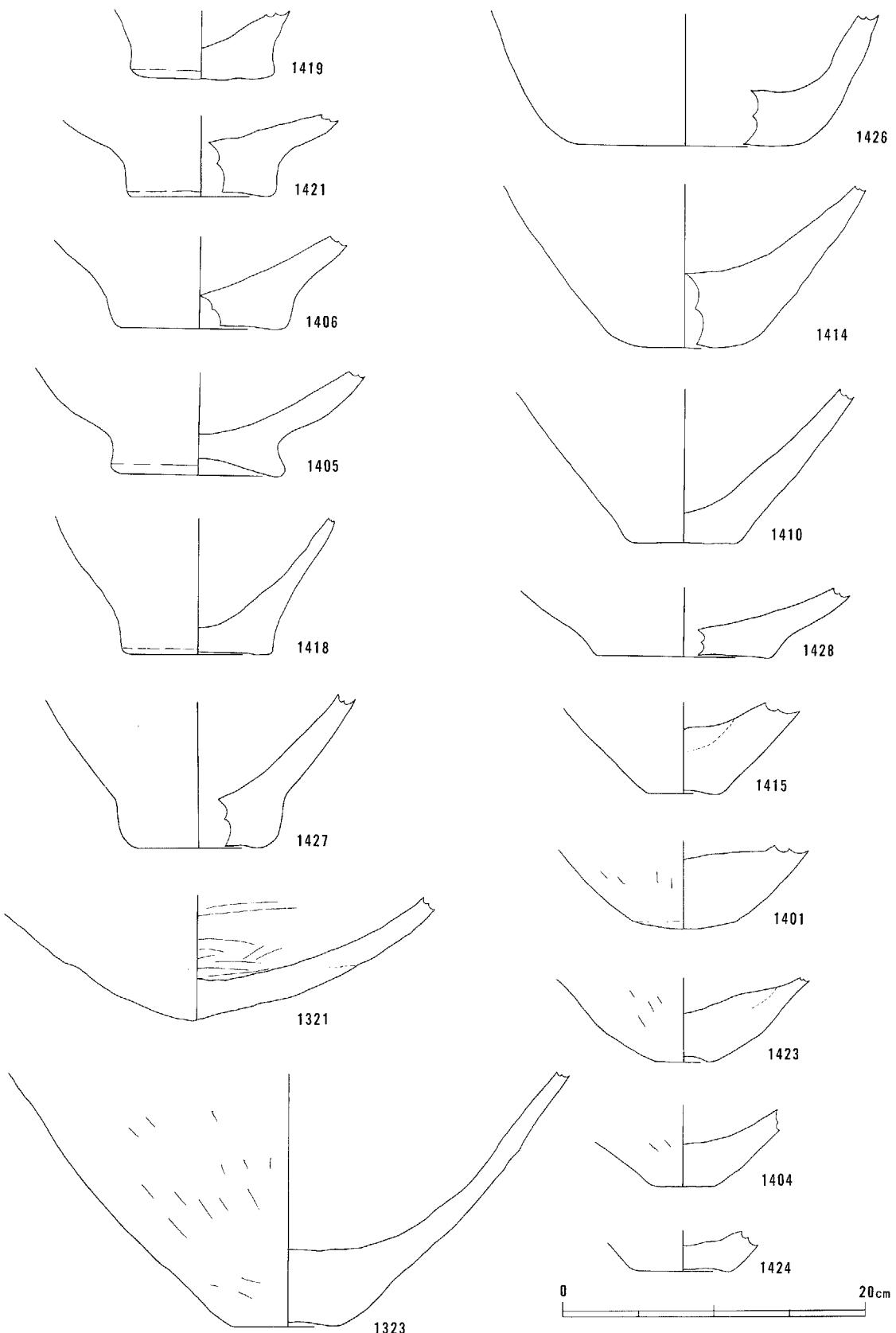


図150 SW101

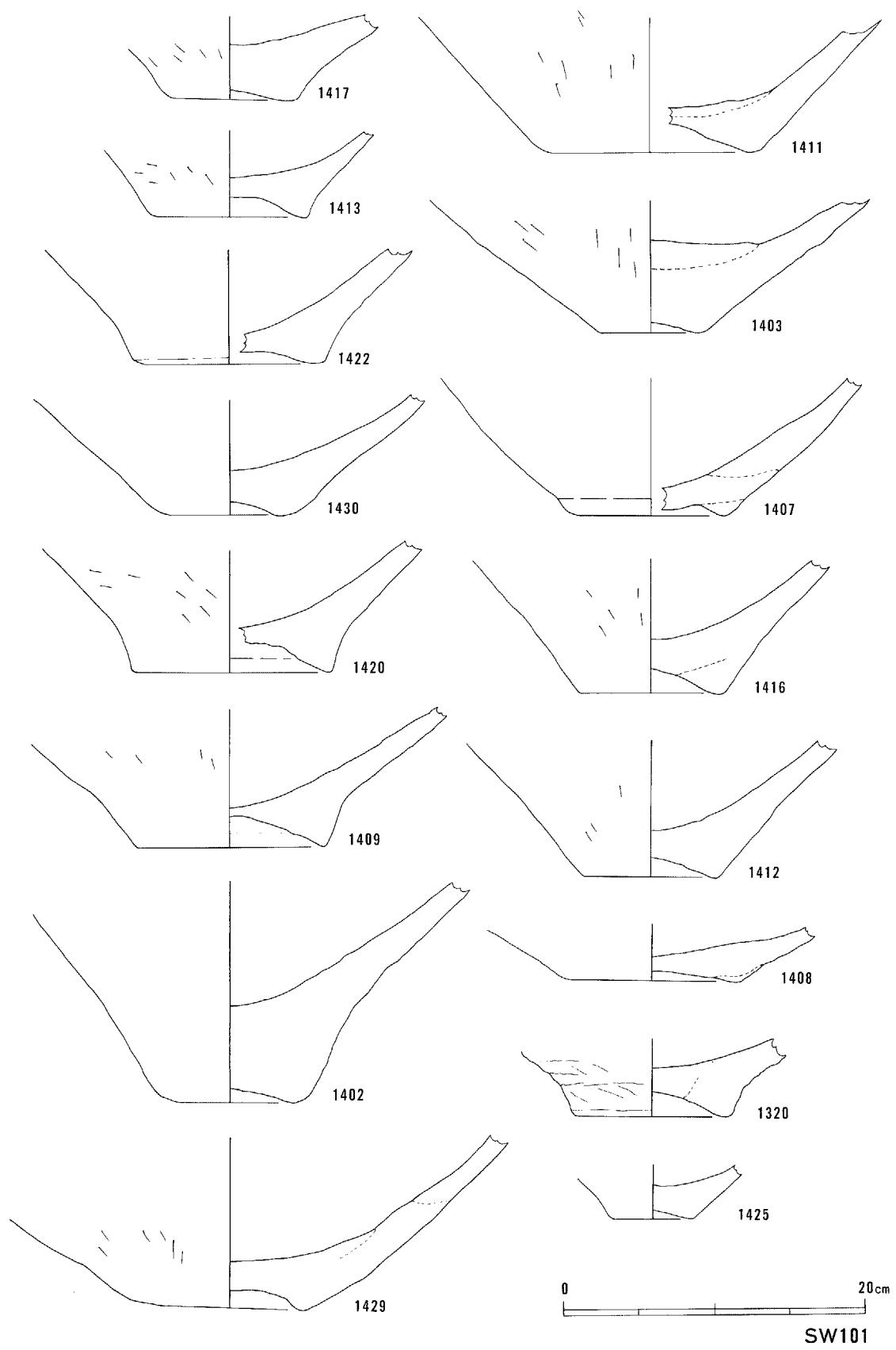


図151 SW101

文がなされているが、(1174-3, 1177-1・2, 1225-2, 1233-1, 1242-1) 等は縦位にも爪形文、押し引き文がみられる。外面の調整は、ミガキ、二枚貝条痕、ケズリがみられ、口縁部が山形になる(1233-1)、口唇部に爪形文のある(1229)などがあるが、いずれも破片であるが突帯文の付されている例はない。(図143・144, PL97・99)

(8) 大洞B C～C 1の東北系の土器

(1180-2, 1181-1～3, 1184-1～2, 1187, 1188, 1189, 1190-1～2, 1191-3, 1197) で、(1187, 1188) の平行沈線文、(1197-1) の羊歯状文などがみられ、他にLRを中心とした縄文がみられる。(図145, PL97・98)

(9) 突帯が口縁部外面にある土器の一群で、口唇部が無文で貼付突帯に文様の無い(1167-1, 1167-2, 1167-3, 1168-1, 1168-2, 1169, 1170-1, 1170-2, 1171-1～3)の例と、口唇部と突帯にO字押捺のある(1213-1, 1214-1～3, 1215-1, 1216-2, 1220-2, 1222-2)があり、(1216-3)は口唇部がキザミで、突帯がO字押捺文である。(図144・146, PL96)

(10) 口唇部と突帯が口縁部を構成する群で、(1215-2, 1219-1, 1220)は口唇部が無文で突帯にキザミがある。(1218-3)(1243-2)は口唇部は無文であるが、突帯に細いキザミ目を行っているものである。(図146, PL98)

(11) 体部片に貼付突帯のある土器で、(1173-1～3,)は無文であり、O字押捺文は(1215-3, 1218-2, 1221-1)にみられる。(1218-1)は三角形を呈するキザミ目が付されている。(図146, PL98)

(12) 無文土器で、外面ミガキの(1352)がある。(図142, PL101)

(13) 口縁部、突帯にキザミのある(1129-3, 1219-3)の例もある。(図146)

浅鉢

浅鉢は全体に器面を磨研している土器が多数を占めている。

(1) 山形口縁で、外面に巻貝条痕がなされている(1310)がある。(図147, PL99)

(2) 内外面に凹線を施文している群で、内面に凹線が施されているのは(1244-1, 1315)で、外面に凹線のあるのは(1211-2・3, 1212-1・2, 1244-2)である。内外面に凹線がなされているものとして(1209-1・2, 1244-3)がある。(図140・147, PL100)

(3) 沈線が施されている土器で、外面になされているのは(1208-1・3)、内面に施されているのは(1193-1, 1202, 1245)で、(1193-2)は口唇部にキザミ目が施されている。(図140・145, PL97・98)

(4) 浅鉢頸部から体部の屈曲部にキザミ目が施されている一群で、(1178, 1198-3, 1199)

— 2, 1213—2, 1217—1～4) がある。(1178) は山形口縁で外面に斜格文がなされて
いる。(図144・146, PL97・98)

(5) 口縁部が外方に屈曲して立ち上がる土器で、(1016, 1251, 1252) がある。

(図148, PL91・101)

(6) 肩部が内方に屈曲して、口縁部が立っている土器で、(1316) がその特徴とする。

(図148, PL100)

(7) 無文土器で、外面口縁部はヨコ方向のケズリ、以下はタテ方向のケズリの (1295) (1317)

がある。(図142・147, PL90)

浅鉢突起について

(1) 平縁口縁に両切り込みを貼っているもので、(1374, 1367) がある。(図147, PL102)

(2) 平縁口縁で切り込み片流れの形態で (1370) がある。(図147, PL102)

(3) 平縁口縁で両切りの (1371) がある。これに双孔の (1292—2) もみられる。

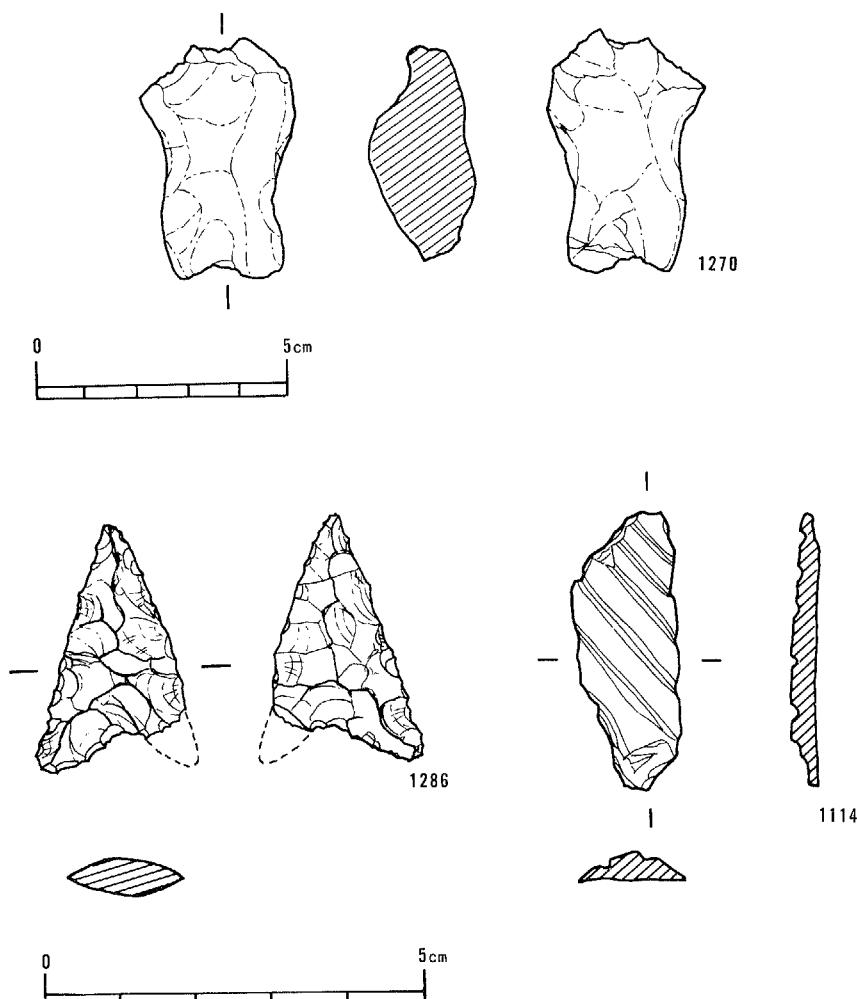


図152 SW101

(図147・149, PL 102)

- (4) 平縁口縁で片切りで片流れの (1368) の例。(図147, PL 102)
- (5) 平縁口縁で、三つの波がつくられ、中央はさらに浅い凹みを入れている (1247) の例。
(図148, PL 91)
- (6) 山形口縁の頂部に片切りの形態をするもので、(1365, 1366, 1369, 1372) がある。
(図147, PL 91)
- (7) 山形口縁から平縁部への途中に切り込み片流れの (1373) がある。(図142, PL 99)
この他に山形口縁の頂部に円形刺突文の (1312) がある。(図142, PL 99)

底部について

これらの底部は深鉢、浅鉢を含めての底部の資料である。

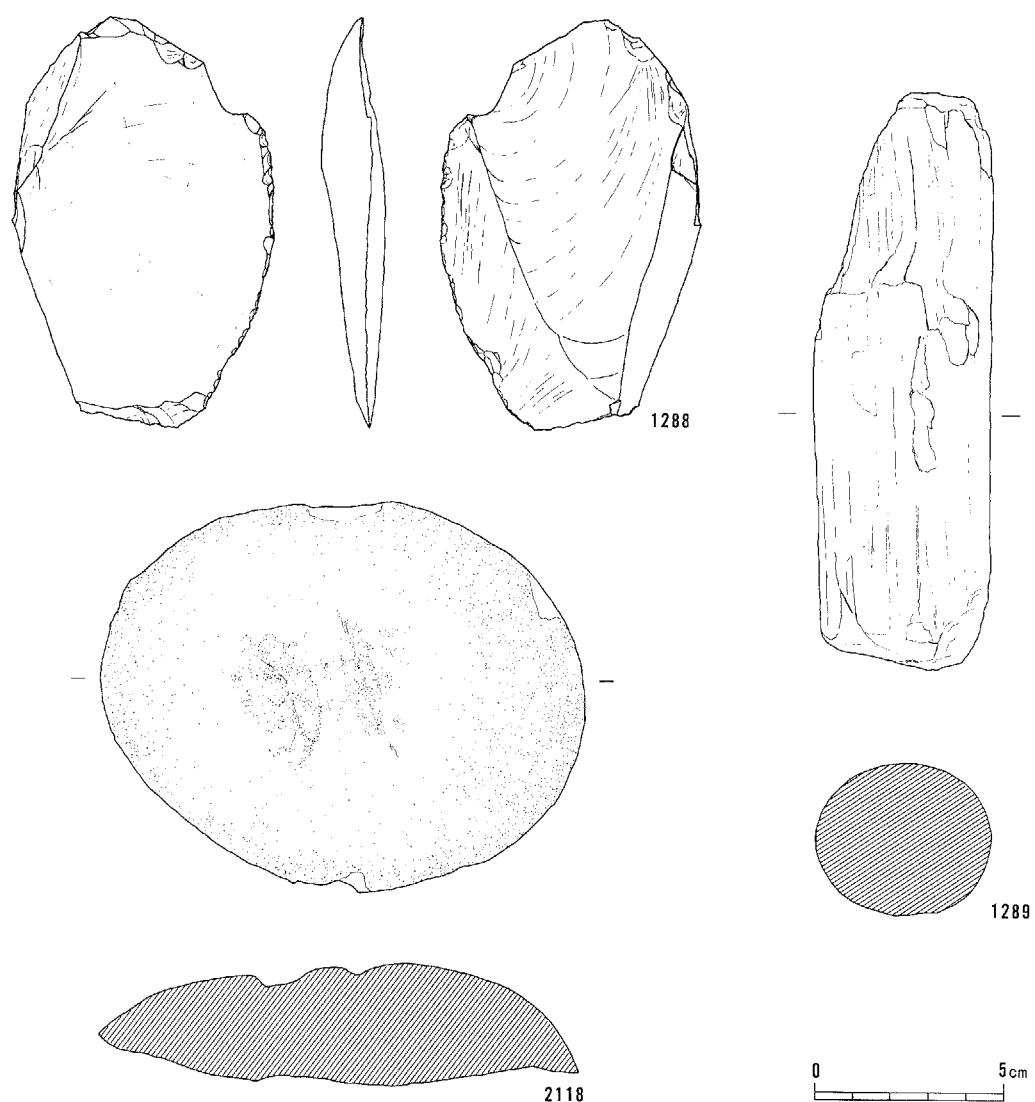


図153 SW101

- (1) 凹底の (1389, 1390, 1409, 1420) は凹部に若干段があり、底部端の部分がミガキを行ったようなツヤのあるもので、底部のナデと異なっている。(1409) にいたっては厚さが0.3cmである。他の (1422) を例として、底部の凹み部分をナデただけの底部とは異なっている。底部の成形においては (1407, 1416) の例のように粘土の輪を貼付して底部を成形している例、あるいは (1403) のように底部内面に粘土を補填している例もみられる。(図149・151, PL102・103)
- (2) 平底の底部で、やや凹んでいる例も含めると (1323, 1410, 1414, 1401) などで、体部への移行が分類の (1) の底部と同じものである。(図150)
- (3) 底部が突き出て成形されているもので、(1421) などの例である。(図150)
- (4) 底部がやや尖り気味のもので、(1321) を例とする。(図150, PL100)
- (5) 丸底気味の底部で、(1376, 1385) 等に代表される一群である。やや調整が難なのが目立っている。(図149, PL103)

土製品 (1270)(図152)

中実の土製品で、あるいは土偶の可能性もある。長さ4.8cm、最大幅3.2cm、最大厚2cmで、両側端は指でつまんで成形している。

石製品

石刀 (1114)(図152, PL1104)

石刀の把の部分の剥落したもので、素材は緑泥片岩である。文様として斜め方向の線刻がなされている。

石鎌 (1286)(図152)

凹基式の石鎌で、最大長3.1cm、現存最大幅1.8cmで、最大厚0.5cmで、一方の脚は欠損している。それぞれ両面から打撃によって偏平化されている。素材はサヌカイトである。

剝片 (1288)(図153)

ポジティブな面に打撃の際の打瘤痕を残している横長の剝片である。明確な意図の加工はみられないが、スクレイパーとしての機能はあるといえる。

凹石 (2118)(図153)

本来の形状のものから剥落した可能性のある凹石である。使用面は磨かれて平滑であり、中央部に二ヶ所凹みがみられる。素材は砂岩で、現存の長軸は12.6cm、短軸は10.4cm、厚さ3.3cmである。磨き面の反対の面は剥落されたままの状態である。

棒状叩石 (1289)(図153)

素材は緑泥片岩で、円柱状に加工されている。一方の端部は斜めに割れたままであるが、他方を作業の際に使用したものと思われ、この端面はガサガサしたものになっている。

VII区包含層遺物

石鎌 (1073, 1074, 1075, 1076, 1077, 1078, 1079, 1080, 1081, 1082, 1083, 1090, 1096, 1097, 1098, 1099, 1100, 2120) (図154・155)

多くは凹基式の石鎌であるが、(1073, 1090, 1100, 2120) は平基式に近い形態である。もっとも大きい石鎌は (2120) で、最大長3.5cm、最大幅2.2cm、最大厚で0.9cmである。最小のものは (1083, 1090, 1099) の類で長さ2cm前後、幅1.5cm前後である。

石刀 (1072, 1094, 1105, 1106, 2119) (図156・PL104)

いずれも素材は緑泥片岩で、破損を受けて、尖型の形で検出されていない。(1072) は把部で、五本の線刻を単位とする文様が、二本の幅狭の部分に斜線刻と交互に文様化しているものを界として文様を構成している。長軸にそってさらに半裁されている。(1105, 1106, 2119) は両側を裁断されており、(2119) は (1072) と同じくさらに長軸にそって半裁されている。(1105)においては、刃部の稜がはっきりしている。(1094) は石刀の先端部と思われ、端部丸くおさめられている。

叩石 (1290) (図156)

素材は片岩で、加工の際の摺理からの剥落をそのままにしている。一方の裁断面は成形時のままで、他方は丸くなつて磨きの状態である。長さ13.6cm、幅4.4cmである。

石皿 (1267) (図156)

長さ39cm、現存最大幅22cm、最大厚7cmで素材は砂岩である。全体に整形時のミガキがなされ、両面には使用による滑らかさがさらに顕著である。

石斧 (1107) (図157)

裁断面を除いて、他の表面はよく磨かれている蛤刃石斧と思われる。現存長10cm、幅6.5cm、厚さ4cmで、素材は砂岩である。

須恵器身 (1020) (図158)

口径5.4cm、器高3cmで、外面体部下半はヘラケズリ、他の内外面はヨコナデである。

瓦質甕 (2093) (図158)

口径20.2cmで、口縁部内外面はヨコナデ、外面頸部下は不定方向の荒いハケ目によって調整されている。内面は剥落している。外面は黒色で、内面は灰色～黒色の色調である。

瓦質摺鉢 (2092) (図158)

復元口径34.8cmの、口縁部のやや発達した摺鉢である。内面には右下がりの細かい調整のハケ目があり、その上を荒く深いクシ目が、体部中位まで重なりつつ、口縁部に近い所では離れて施されている。内外面黒色の色調である。

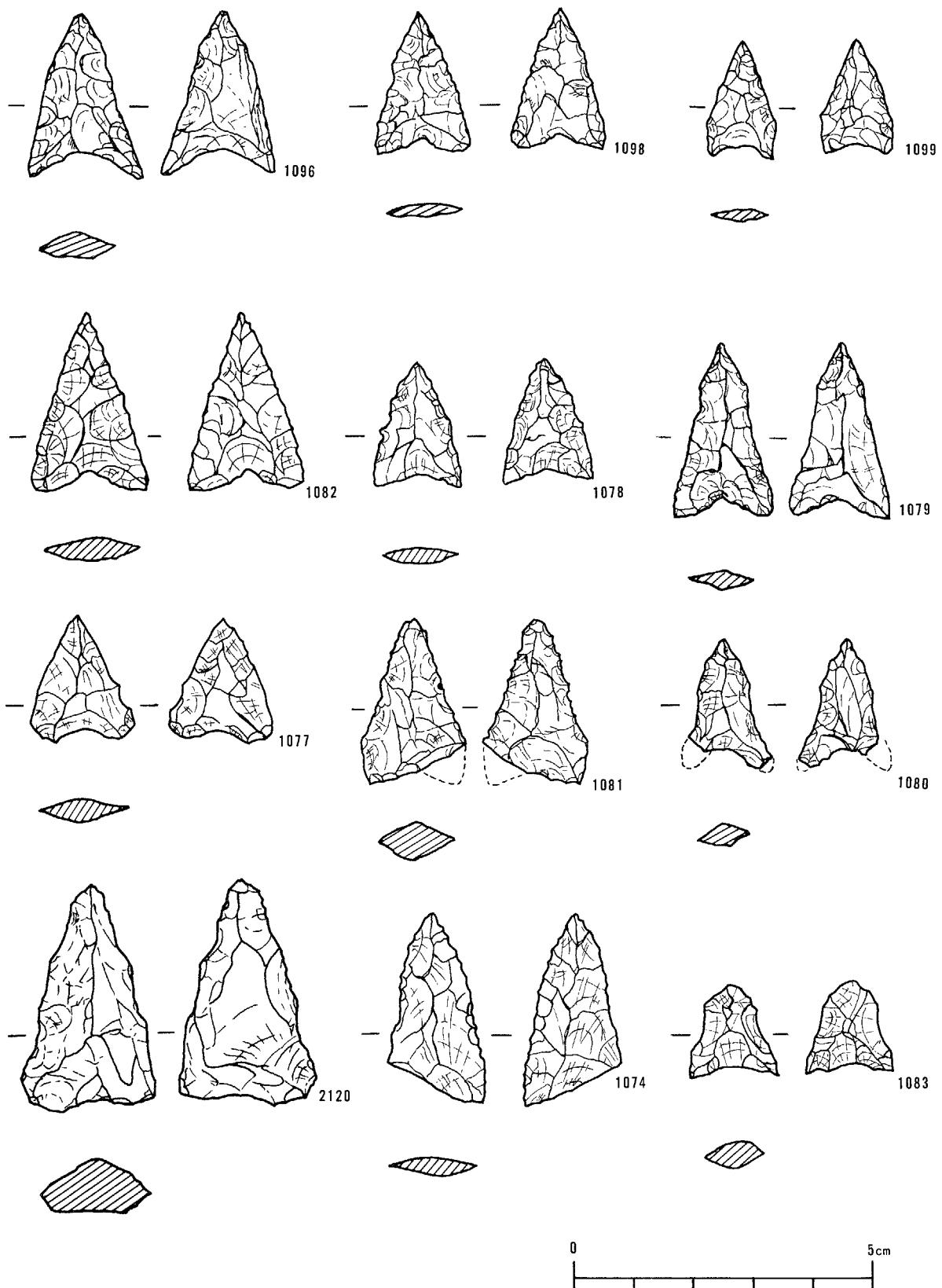


図154 包含層

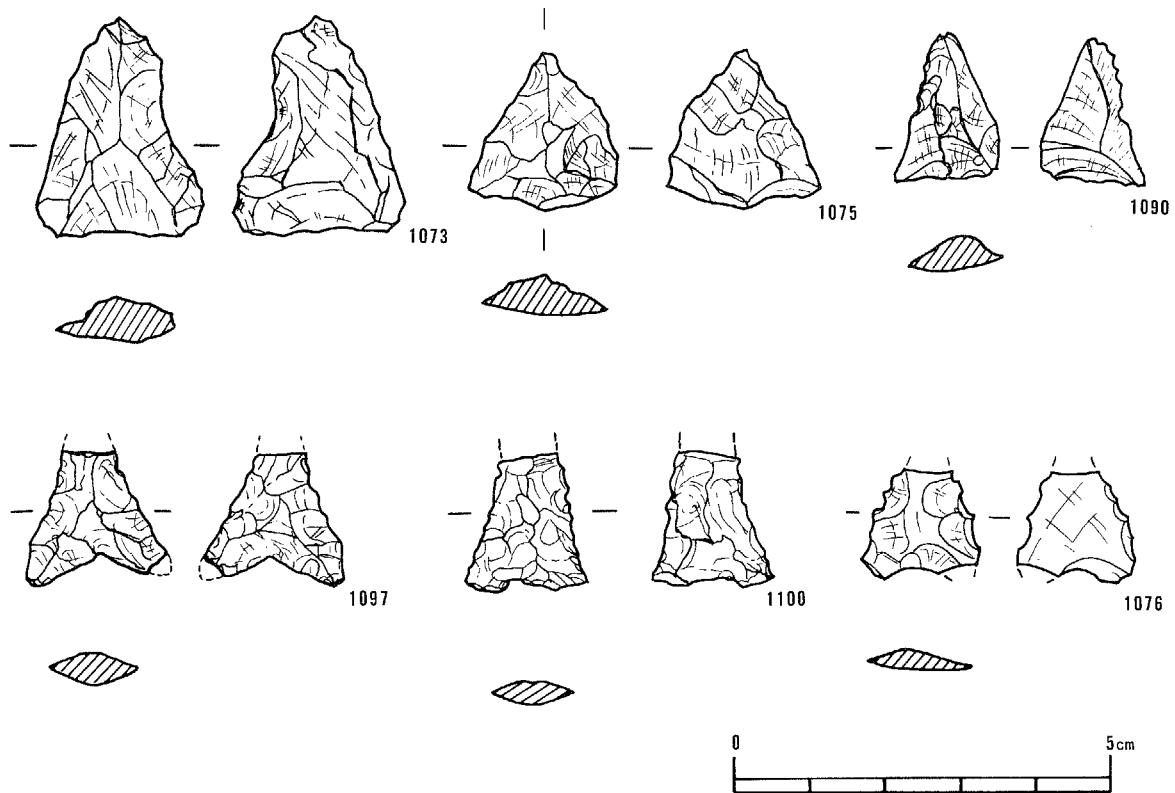


図155 包含層

摺鉢 (1010) (図157)

口縁部が内弯して、一条の凹線がめぐっている摺鉢で、口径20.3cmである。外面はタテ方向に板状工具のケズリで、内面はヨコ方向の調整ナデの後、荒いクシ目がタテ方向に重ねてなされている。内外面橙色の色調で、断面は灰色である。

土師器小皿 (981, 2131) (図158)

(981) は口径7.8cm、器高1cmで、外面底部は指頭押捺の後ナデで、他の内外面はヨコナデ、ナデである。

(2131) は口径8.2cm、器高1.5cmで、口縁部内外面はヨコナデ、他の部分はナデ仕上げである。

瓦器小皿 (948) (図158)

口径8cm、器高1.8cmで、外面底部と口縁部に稜のはっきりとした成形である。底部は指頭押捺の後ナデで、口縁部はヨコナデ、内面底部はナデ仕上げである。

土師器皿 (1007, 1014) (図158)

(1007) は口径8cm、器高2.5cm、(1014) は口径10.4cm、器高2.6cmで、器面調整は、土師小皿と同じである。(1014)においては器高の違いから成形も異なっているであろう。

瓦器碗 (947, 1015) (図158)

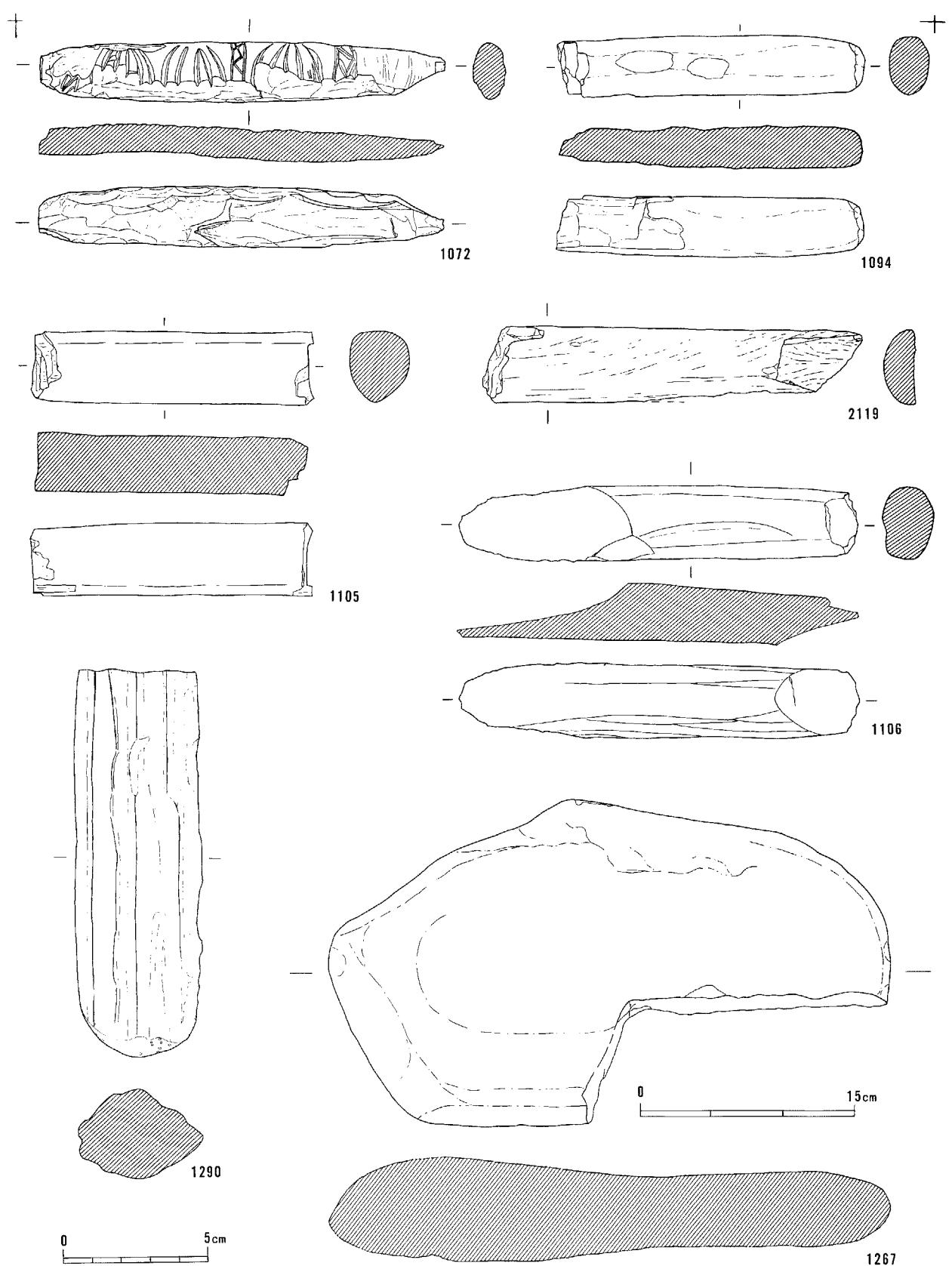


図156 包含層

いずれも断面三角形の貼付高台の椀である。(947)は口径13.7cm、器高3.7cmで、(1015)は口径12.5cm、器高3.4cmで、外面体部に指頭痕が残っているのは共通している。両者共内外面は磨滅している。

青磁椀 (949)(図158)

口縁部は欠損している。高台径5.5cmで、外面には鎬葉文様のケズリがあり、内面には印花文の押捺がされている。高台内部は露胎で、他の内外面には青色の釉がなされている。

用途不明石製品 (1091)(図158, PL104)

砂岩を素材として、一部破損しているが、やや偏平で正円に近いもので、面取りがなされている。径6.2cm、厚さ4.5cmあり、他の石製品と組み合う用途の石製品と思われる。

鉄砲玉 (2061)(図158)

直径1.3cmの玉で、表面は灰白色を呈しているが、銅製と思われ、中実である。

土錘 (2034)(図158)

中ぶくらみをしている形状で、最大径3cm、長さ6.4cmあり、円孔径は1cmである。

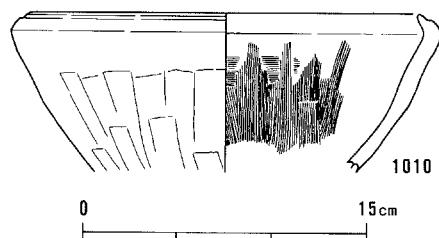


図157 包含層

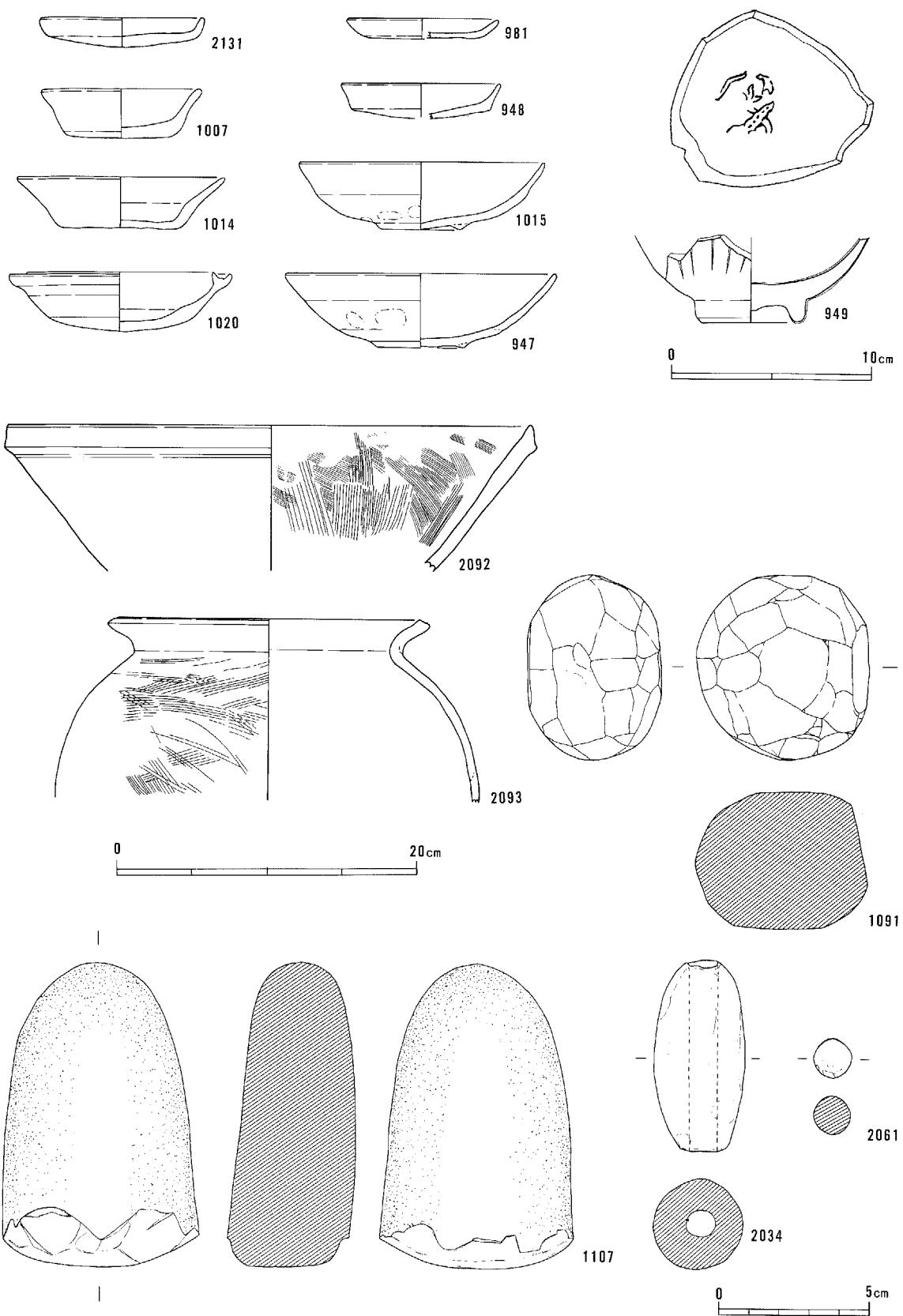
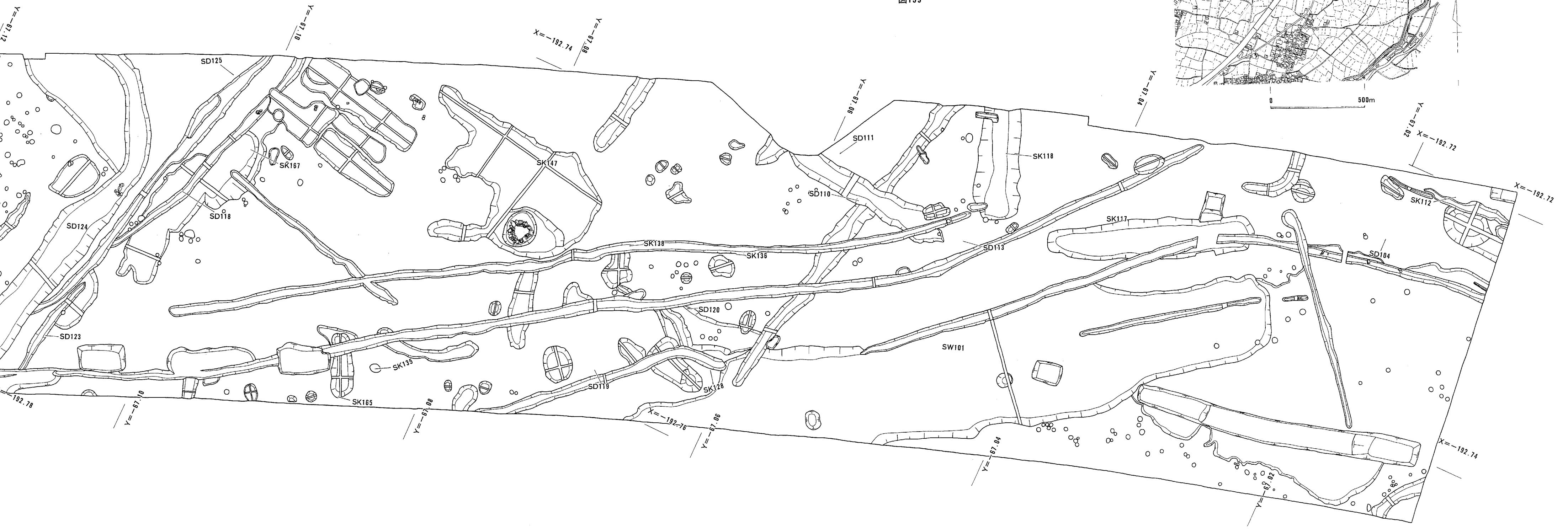


図158 包含層



|159

VIII区の遺構と遺物

この地区の遺構面は、上面でほぼTP 11.50mで、下面の遺構が、上面の遺構面より15cm下がる程度であり、この15cmの土層は遺物包含層でもあり、上面の遺構と下面の遺構が、必ずしも整序だった検出状況にあるとはいえない。

VIII区上面の遺構と遺物

S X 遺構

S X 5 0 1 (P L 8 4 · 8 5)

掘方は不整形な長楕円形で、長軸64cm、短軸60cm、深さ15cm程度で、一個の縄文式土器の深鉢を棺に利用しているものである。

出土遺物 (1 1 0 9, 1 2 5 5) (図160・163, P L 1 2 9 · 1 4 3)

磨製石斧 (1 1 0 9)

棺内から出土した蛇文岩を素材とした、すり切りによる、磨いた小型の石斧で淡緑色を呈している。刃部は一部欠けているが、故意によるものであろう。長さ6.0cm、残存する最大幅3cm、厚さ1.1cmである。

縄文土器深鉢 (1 2 5 5)

口径43cm、器高47.2cmで、最大幅は肩部にあり44.3cmである。口唇部は幅の広い

キザミ目、外面口縁部下に貼付突帯にキザミ目文様がなされている。口縁部から肩部にかけてゆるやかな屈曲に成形され、ミガキがなされている。肩部以下は右下がり方向のヘラケズリ、下半は上方向きのヘラケズリで、底部は不定方向のヘラケズリである。口縁部内面は水平方向の貝ガラ条痕で調整で、体部はタテ方向のハケ目調整である。底部は尖り丸底である。

S X 5 0 2 (P L 8 4 · 8 5 · 8 6)

掘方は不整形な長楕円形で、長軸は77cm、短軸が54cm、深さ10cm前後である。掘方内には、縄文土器の深鉢が一個納められている。S X 502の掘方とは15cmしか離れていない。口縁はS X 501と同じく北向きである。

出土遺物 (1 2 6 6) (図163, P L 1 2 6)

口径34.8cm、器高43cmで、最大幅は体部上半にあり37cmを計る。口唇部は、幅広のキザミ目文で、口縁部外面口唇部下に貼付突帯が一条めぐり、同じキザミ目文様を施している。口縁部か

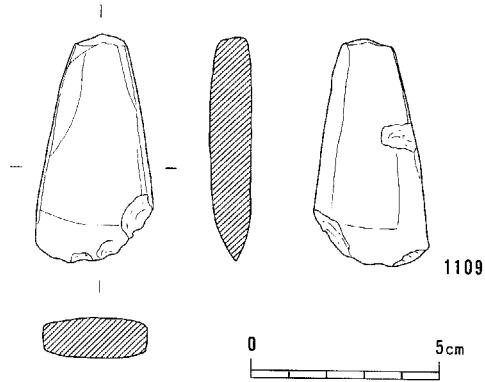


図160 S X 501

ら肩部はゆるやかに屈曲し、ミガキがなされている。肩部下はヘラケズリであるが、ケズリ方向は体部上半がヨコ方向、体部中半はタテ方向、あるいは右下がり方向のヘラケズリ、体部下半はタテ方向の底部から体部方向のヘラケズリである。内面器壁全体はナデ仕上げである。底部は若干凹んだ平底である。

S X 5 0 3 (図162, PL49・51)

S X504の掘方に切られている土坑で、S X502の北西約200cmの離れた位置にある。掘方は、長楕円形で、長軸は67cm、短軸は53cm、深さ20cmである。

出土遺物 (1256) (図162, PL90)

口径34.3cm、器高40.5cmで、うすくつまれた口唇部に浅いかすかなキザミ目があり、この口唇部と口縁部外面を成形するような一条の突帯が貼付られ、強い押捺によってD字形のキザミ目文をつけている。最大幅は、口縁部と体部と同じ程度である。口縁部から肩部にかけてはかすかに屈曲し、この部分はナデられている。このナデから下部はタテ方向のケズリが一連の作業でなされ、ケズリ方向の変化はない。底部は、中心からずれて丸味の尖底である。内面はかすかに水平なハケ目が局部的にみられる。

S X 5 0 4 (図162, PL49・51)

S X503の掘方を切っている土坑で、長軸60cmで短軸は46cm、深さ20cmである。S X503の掘方に重ねて、この棺墓が築かれているのは、S X501とS X502が、ごく近接して築かれているのと似た性格をもった関係にある棺墓といえる。

出土遺物 (1361) (図164, PL91)

口縁部から体部上半が残っている土器で、出土状況から、口縁を下方にして納められた棺墓と想定されている。口径30.2cmで、口唇部は、うすく成形され、小さなO字の押捺文が施され、直下に貼付突帯が一条めぐり、浅く、幅の狭いキザミ目の文様が施されている。内外面の器壁はナデて仕上げられている。

S X 5 0 5 (PL49・52)

円形を呈する掘方で、径58cm、深さ5cmで、S X503から南西3m、東のS X502から4mの位置にある。掘方内には多量の川原石が検出され、他の棺墓とは異なった様相を示している。

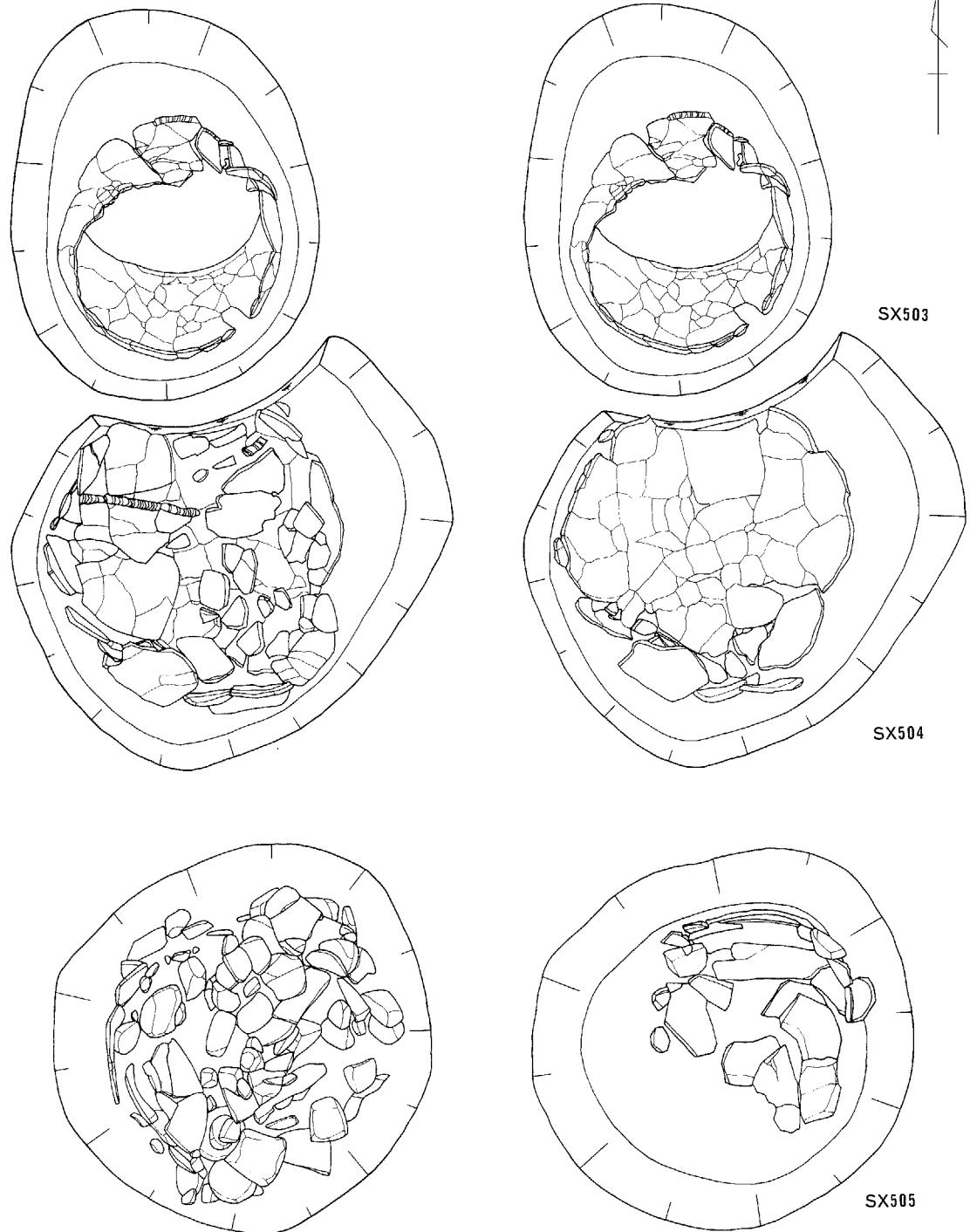
出土遺物 (1391, 1392, 1394, 1431) (図164)

縄文土器 (1391, 1392, 1394, 1431)

(1394) と (1431) は同一個体と思われる浅鉢である。胎土、色調は非常に酷似している。(1391) と (1392) は深鉢であるが別個体の深鉢であり、この棺墓は、深鉢の破片と浅鉢で棺が構成されたものと考えられる。(1394) は、(1431) の口縁部片で、口縁部は肥厚されている部分は山形口縁の山部になると思われる。山部内面には一条の沈線が口唇部を一周してめぐり、

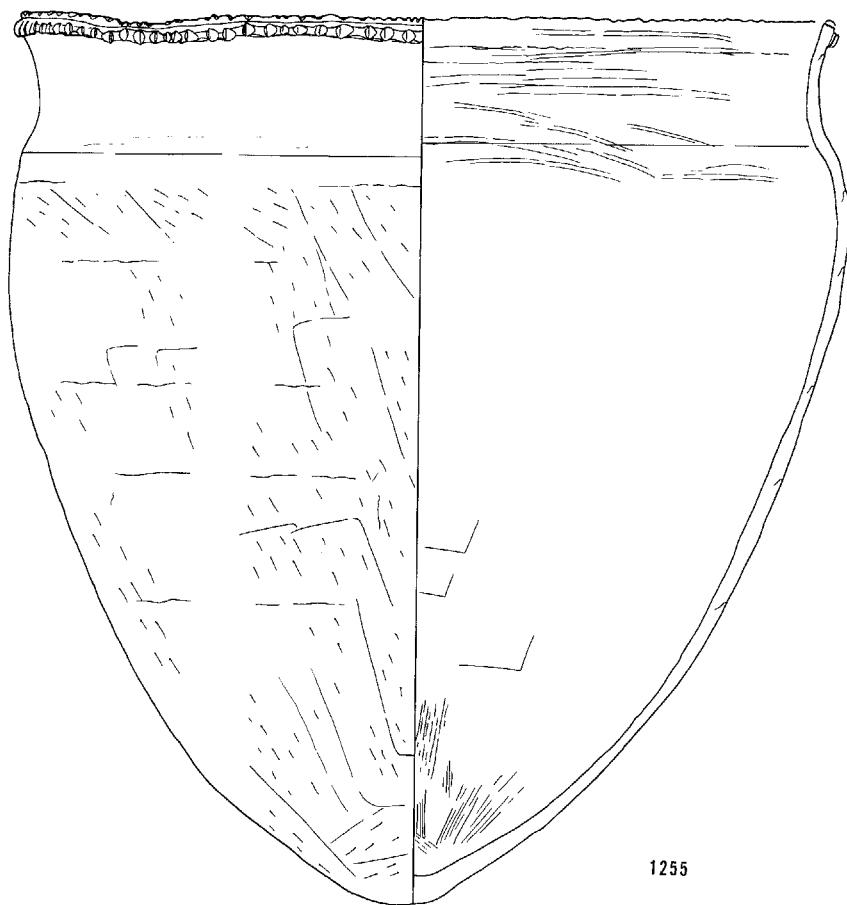


図161 SX501 SX502

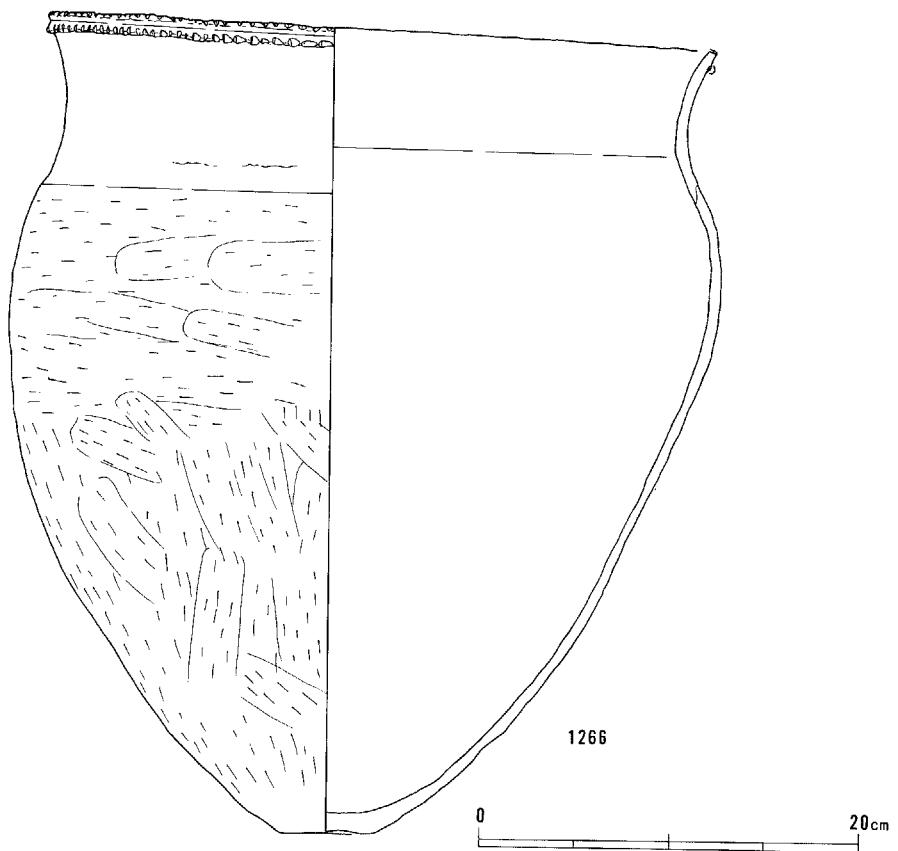


0 50cm

図162 SX503 SX504 SX505



1255



1266

0 20cm

図163 SX501 SX502

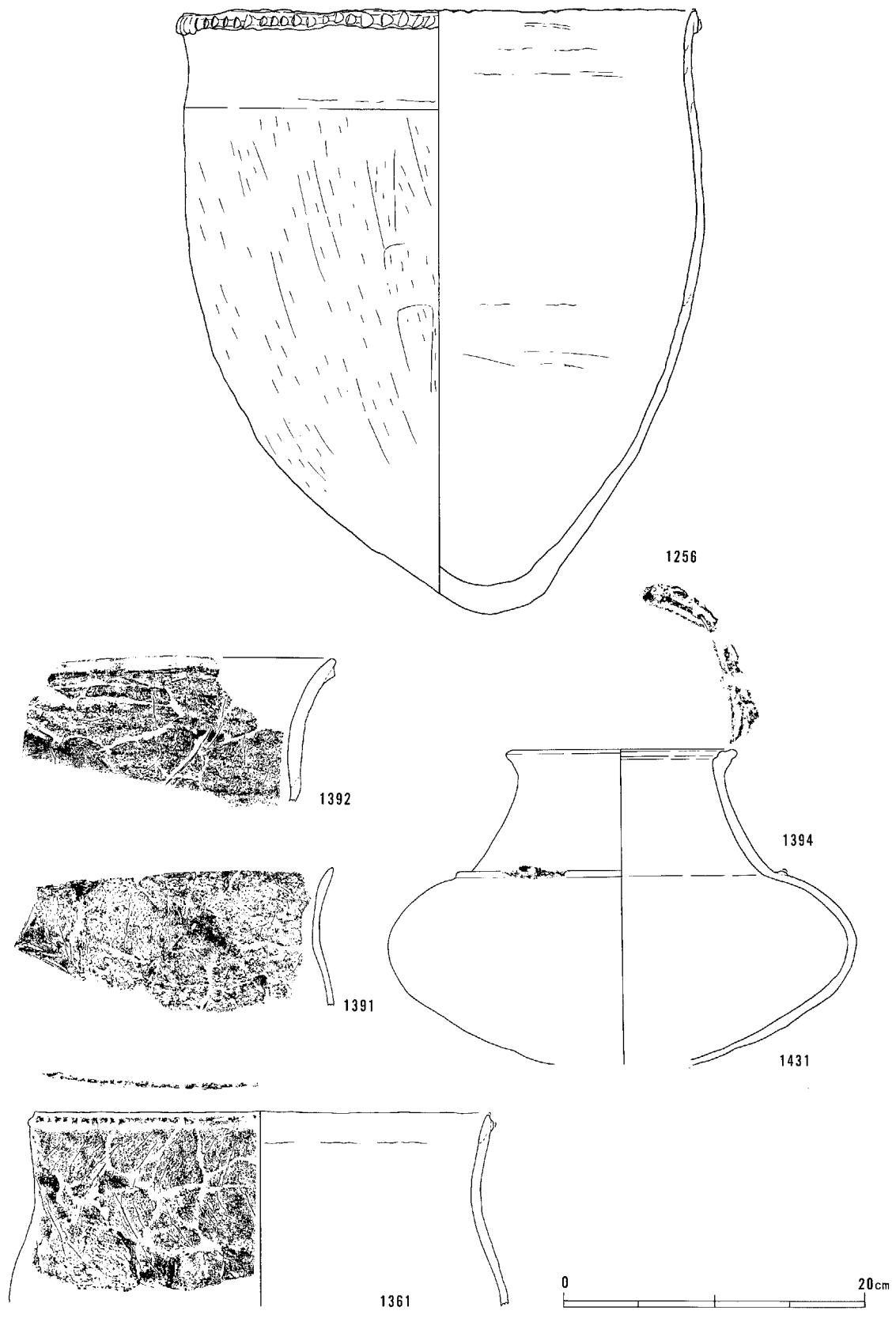


図164 SX503 SX504 SX505

さらに内面直下に一周する沈線が施されている。口縁部外面は、整形による段が平縁部に顕著になされている。内外面共に消耗が激しいが、内面にヘラミガキが残っている。(1431) は、頸部に貼付突帯が一条施されている。体部最大幅は、31.2cmで、底部は破片類に平底がみられない。内外面は、非常に消耗して、剥落も激しい。深鉢の(1391)は、口縁部、頸部にかけてゆるやかに屈曲して口縁部は外反りする。(1392)は同じ成形であるが、口縁部外面のわずか下位に貼付突帯が一条みられる。両者共に内外面の剥落が著しく、調整等については不明である。(1394, 1431)は橙色の色調で、(1391)の内面は黒色で外面は橙色、(1392)は内外面褐色の色調である。

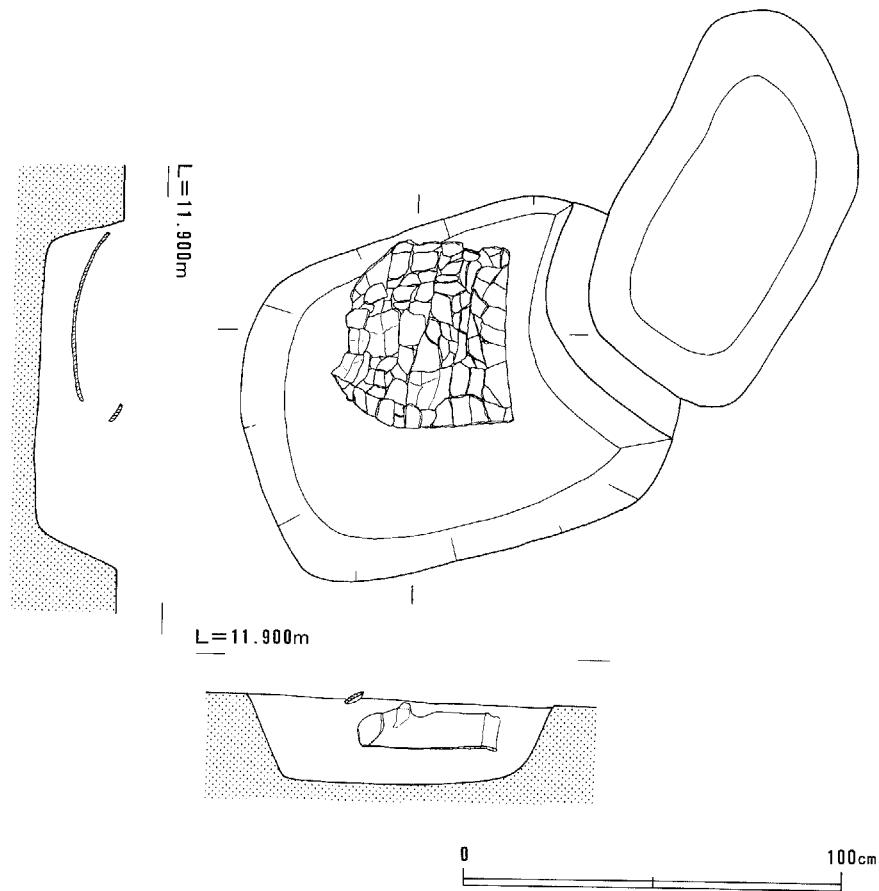


図165 SX01

S X 0 1 (図 1 6 5)

隅丸方形を呈す東西に長い掘方の墓坑であるが、墓坑の東側は新しい時期の土坑によって削られている。東西を長軸とするこの墓坑の現存値は95cmであるが、復元すると115cm程度になる。短軸は87cm、深さは20cmである。この墓坑と、この墓坑を切っている土坑は、上面遺構で検出されたS X501とS X502あるいは、S X503とS X504の類例から、あるいは、S X01に隣接する墓坑である可能性がある。

出土遺物 (1393) (図 1 6 6, PL 9 0)

縄文土器 (1393)

墓坑上半分が削平された状態で出土した。土器は土坑内にほぼ水平に納められていたもので

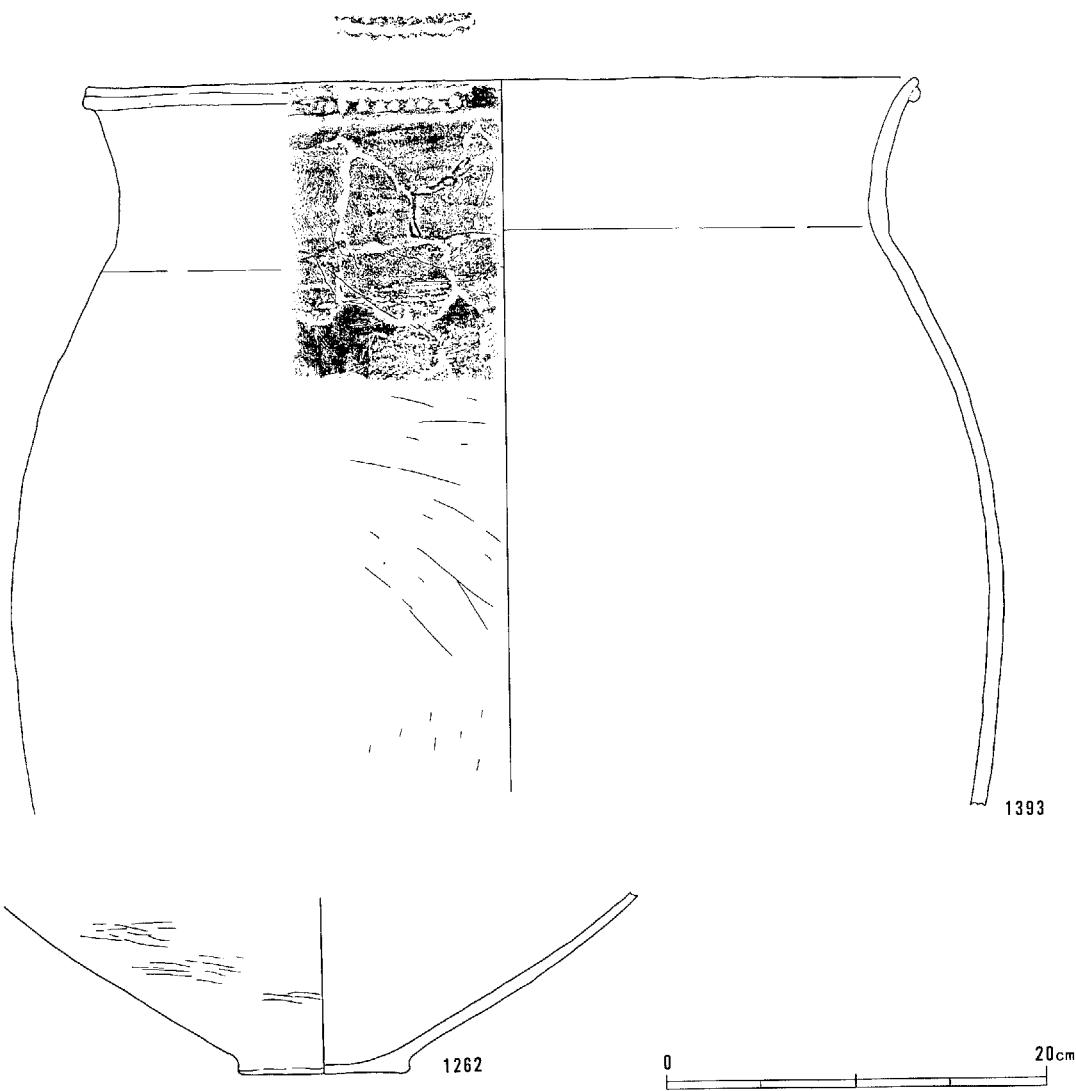


図166 SX01 SK501

あろう。復元口径44cm、最大径は体部にあり52.5cmあることから復元器高は60cmを越えよう。口縁部外面直下に貼付突帯がなされている。口唇部には、口唇部幅にあわせた小さなO字押捺文、突帯にもO字押捺文がなされている。外面口縁部から頸部にかけてナテ仕上げ、頸部以下は右下がりのケズリ、体部下半は垂直方向のケズリがなされている。内面は磨滅が著しく不明である。

S I 遺構

S I 5 0 1 (図167)

本来周溝が一周する遺構であるが、南側の一辺は検出できなかった。周溝は、方形にめぐり、竪穴住居としての四壁は検出されていない。住居の規模は方5mで、周溝幅20cm、深さ3cmである。住居内のはば中央に円形炉跡があり、径40cm、深さ15cmである。同じく東壁側中央には、二段掘りの貯蔵穴があり、一段目は方形で、75cm×65cmで深さ床面から10cmであり、この方形土坑内に、さらに円形の土坑があり、径65cm、床面から30cmの深さの貯蔵穴となっている。

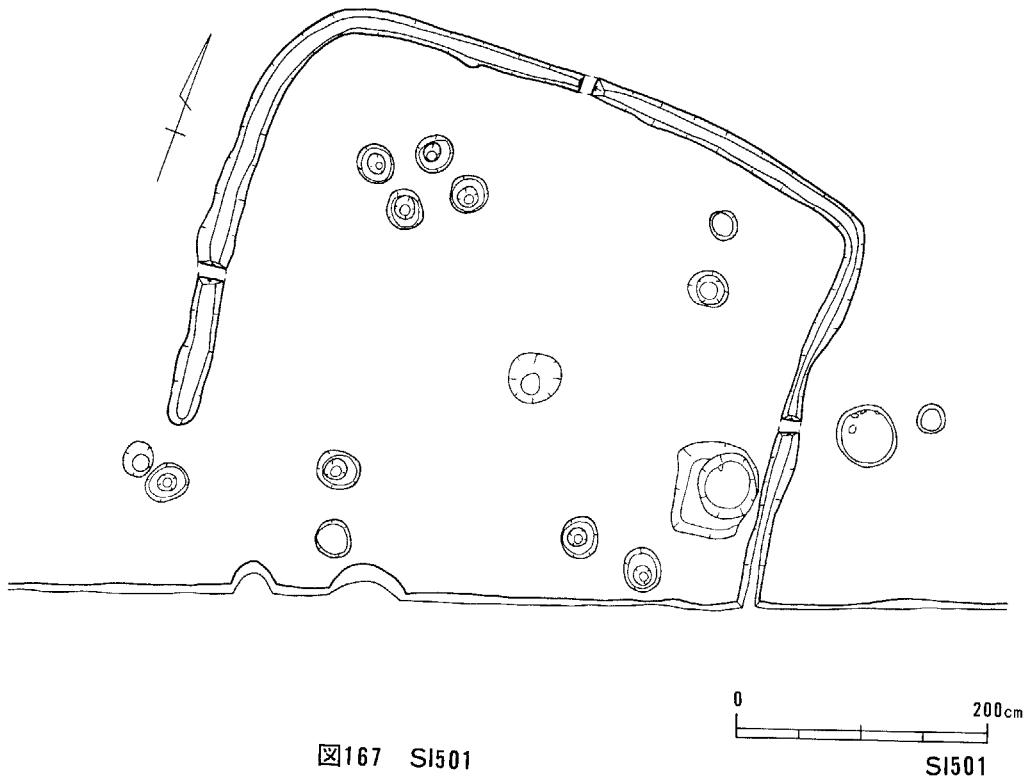


図167 S I 5 0 1

S D 遺構

S D 5 0 8

発掘調査区内を大きく東西に蛇行している自然流路である。溝幅3m～3.5m、深さ60cmである。

出土遺物 (1049, 1050, 1051) (図169)

陶器 (1049, 1050, 1051)

(1049) は、鉢型の陶器で内外面赤褐色で釉はなされていない。外面底部は、切り離したままで、他の内外面は丁寧なナデ仕上げである。(1050) は、削り出し高台の土器で、内面に暗灰色のハケによる釉がなされ、その上を回転による白色の釉が線引きされている。外面底部は黒色で、畳付から高台内部は露胎の赤褐色で、断面の色調と同じである。(1051) は、削り出し高台で、外面以上に高く削られ、底部はうすく作られている。内面はうすい茶色の釉の上を、白色の釉をハケ状工具で施している。重ね焼きのはがれがみられる。外面は露胎で灰色を呈し、高台部には白色の釉の拭き取りがみられる。(1050, 1051) は唐津焼である。

S D 0 2

東西流の人工流路で幅200cm～220cm、深さ30cmである。

出土遺物 (1025, 1026, 1027, 1034, 1035, 1036, 1037, 1038, 1039, 1059, 1060, 2112, 2018)

(図168・169, PL88)

朝顔形埴輪 (1026)

朝顔形埴輪の筒部の上段部分である。断面四角形のタガの接合が上端、下端に幅広く丁寧なヨコナデがなされている。タガの上部外面はやや右下がりのハケ目調整がなされ、下部も上部に連続した調整であることがうかがえる。内面の朝顔部は、水平なヨコハケ調整で、局部に指頭痕がみられる。タガの部分での径は24cmであることから、比較的小きめな埴輪であろう。片岩を多く含んでおり、その製造地は紀ノ川の南岸の地域であろう。

土師器杯 (1059)

口径15cm、器高5.6cmの大きさで、全体に橙色を呈している。外面底部にはヘラケズリがなされ、他の内外面器壁はヨコナデで仕上げられている。内面底部は、ゆるやかな凹凸が円形状にみられる。

土師器甕 (1035, 1039)

(1035) は、口径18.8cmの橙色の色調の土器である。口縁部は、肥厚されて立ち上がっている。内外面共にヨコナデである。(1039) は、頸部がはっきりとくびれている。口径16cmで橙色の色調である。内外面の器壁は磨滅していて調整は不明である。

土師器カマド (1034)

移動式のカマドかと思われるが、つばと他の部分の残り具合から明確にいえない。つばの部分の厚さは3.5cm、他の部分は1cm程度で、図の下位は底部である。

須恵器杯蓋（1027、1038）

それぞれよく似た作りの土器である。（1027）は、口径11.9cm、器高4cmで、（1038）は口径11.4cm、器高3.6cmである。両者共に外面天井部にヘラケズリがみられ、他の内外面はヨコナデ仕上げである。（1038）の外面には所々にうすい自然釉がみられる。

須恵器杯身（1036、1037、1060、2112）

（1036）は、口径10.8cm、器高4.3cmで、口縁部が、内傾して立ち上がり、受け部より高く作られており、受け部には一条の凹線がみられる（1037）は、口径9.4cm、器高3.5cmで、受け部が深く成形されている。口縁部が若干高い作りである。（1060）は、口径12.2cm、器高3.7cmで、受け部が口縁部より若干高めである。（2112）は、口径9.5cm、器高3.4cmで、口縁部が高く成形されている。これらはいずれも外面底部にヘラケズリがなされ、他の内外面はヨコナデで仕上げられている。（2112）は、外面にうすい自然釉がみられる。

須恵器高杯（1025）

全体に歪みのある土器である。口径13.6cm、器高は本来13cmのものである。外面杯部と脚部の接合部近くにヘラケズリ痕がみられ、他は全体にヨコナデ、ナデで仕上げられている。

須恵器甕（2018）

口径39.6cmの口頸部分で、口縁部の両端が拡張され、外面は一条、二条、二条の凹線文がタテ方向の粗いハケ目の上から施文されている。

S D 0 9

やや蛇行している東西流の溝状遺構で、幅80m、深さ10cmで、溝の両端は調査区外に到っている。

出土遺物（2094）（図169）

瓦器椀（2094）

口径15.3cmで、底部を欠いている。口縁部内外面はヨコナデであるが、外面はヘラ状工具によるヨコ方向のミガキ、内面には棒状工具によるミガキ暗文がヨコ方向になされている。

S D 1 0

東西流の溝で、幅80cm～150cm、深さ70cmである。

出土遺物（1052、1053、1054、1055、1058）（図168・169）

弥生土器（1053、1054）

甕（1053）

甕の底部で、外面にはタテ方向のナデの上をタタキ目で仕上げている。

高杯（1054）

杯部口縁部径17cmで、脚裾部は欠けている。内外面は磨滅している。内外面は黄味の橙色である。

須恵器身（1052, 1058）

(1052) は、口径10.7cm、器高約5cm前後で、(1058) は口径10.4cm、器高約3.5cmである。

(1058) の外面底部はヘラケズリがなされ、他の内外面はヨコナデである。

土師器杯（1055）

口径13.2cm、器高4cmで、口縁部内外面はヨコナデ、他の外面は指押さえ、内面は底部中央から放射状にナデ上げている。

SD 15

東西流の溝状遺構で、幅120cm前後、深さ40cm前後の規模である。

出土遺物（1028, 1029, 1040, 2097）（図169）

土師器椀（1040）

口径12.9cm、器高5.5cmで丸底の椀型土器である。内外面器壁は磨滅して、最終調整は不明である。全体に内外面橙色である。

須恵器杯身（1029, 2097）

(1029) は器形の歪みの著しい土器で、口径10.4cm、器高4.7cmである。受け部は口縁部が高く成形され受け部部分の凹みもしっかりしている。外面底部にはヘラケズリが残り、他の内外面はヨコナデ、ナデ仕上げである。外面の口縁部から体部下半にかけて、うすく自然釉がみられる。(2097) は、口径12.8cmで、外面底部は、未調整で中央部が凹んでいる。他の内外面はヨコナデである。

須恵器高杯（1028）

口径12.5cm、器高9cmの無蓋高杯である。外面に杯部と脚裾部の接合部近くに幅1cm程のヘラケズリを残している。脚裾部は、杯部の接合部からゆるやかに裾部に広がっている形態である。外面のヘラケズリの一部の他の内外面は、ヨコナデによる調整をもって最終調整している。

SD 16

東西流の溝状遺構で、幅250cm～350cm、深さ10cm前後の現存規模である。

出土遺物（1031, 1041, 1042, 1043, 1044, 1045, 1046, 1047, 2104）（図168）

土師器小皿（1043, 1044）

(1043, 1044) の口径は9cmで器高は前者が1.9cm、後者が2.1cmである。両者を比して、(1044)

の口縁部は端反りが強く成形されている。いずれも外面底部は指押えをした後ナデており、他の内外面はヨコナデ、内面底部はナデ仕上げである。

土師器台付皿（1031，2104）

(1031) 口径10.9cm、器高2.8cmで、高台は貼付高台で、比較的高い高台の成形である。内外面は磨滅が激しく調整は不明である。色調は、内外面共に橙色である。(2104) はやや小振りである。

土師器碗（1042，1046）

(1042) は貼付高台で成形された碗型土器である。内面は平滑に仕上げられているが、外面は粘土紐に沿った凹凸にヨコナデを行っているが、平滑化まで行っていない。高台内面はナデて仕上げているが、碗部内面は磨滅して調整は不明である。(1046) は、碗底部、高台部分破片である。調整は(1042)と同じであり、碗内面はナデて仕上げている。胎土には片岩を含んでいる。

緑釉陶器（1045）

底径（高台径）17.1cmの大きさであり、壺型土器の可能性はあるが、オリーブ色の釉が、内面、外面底部に及び、釉の拭き取りによる白色の部分が、疊付部と高台内面の幅1cmにみられる。内面底部まで緑釉がなされていることより、鉢型土器の可能性はより強いといえる。

土師器甕（1047）

口径14.2cmで、底部を欠損している。口縁部は大きく「く」の字に屈曲し、土器の最大幅は口縁部にある小型の甕である。外面は、頸部から非常に荒いハケ目調整がなされ、体部下半にみられる細かいハケ目調整の上に及んでいる。体部下半は右下がりのハケ目調整がなされ、部分的に重なっている。口縁部内面は、口縁部から頸部にかけて、体部上半の荒いハケ目と同じハケ目が右上がりに調整として行われている。頸部下半はナデであるが、平滑な仕上げである。

須恵器高台付杯（1041）

口径18.8cm、器高5.8cmで高台の貼付られた杯である。高台の貼付け部位は杯部の腰部に近い位置にある。内外面ヨコナデ、ナデ仕上げである。

S D 1 8

東西流の幅の狭い溝状遺構で、幅45cm、深さ10cmの人工溝である。

出土遺物（1032，1048）(図169)

瓦器碗（1032）

破片による出土で、復元口径15cm、器高5.7cmである。口縁部内外面、高台内外面はヨコナデで、外面体部は指押えの後ナデ、高台部底部外面もナデ仕上げで、断面四角形の貼付高台で

ある。内外面は磨滅によるものか灰白色を呈している。ミガキ暗文は不明である。

瓦器椀（1048）

口径15.2cm、器高5.4cmで、貼付高台の断面が台形を呈する。全体によく整った土器である。

体部は二段の指頭圧痕があり、その上をナデている。他の内外面はヨコナデ、高台外面はナデ仕上げである。灰白色の色調である。全体に磨滅が著しい。

S D 1 9

南北流の溝状遺構で、合流する東西流の溝状遺構か、単独遺構か後の落ち込みによって不明である。幅140cm、長さ600cm、深さ30cmである。

出土遺物（1033）（図169）

須恵器穀（1033）

口縁部、頸部、底部を欠損している。体部には幅の広い二本の浅い沈線があり、沈線間に左下がりの刻み目文がなされている。体部最大幅は9.8cmである。内外面器壁はヨコナデである。

S D 2 1

南北流の幅40cm、深さ15cmの溝である。

出土遺物（1030）（図169）

土錘（1030）

長さ4.1cm、最大幅1.1cmで、円形孔の径は4.5mmで、同じ孔径で貫通している。

S D 5 1 2

東西流の幅100cm～120cm、深さ40cm～50cmの溝遺構である。

出土遺物（2008）（図169・170、PL89）

弥生土器壺（2008）

口径22.5cm、器高45.3cmで、最大幅は体部にあり、25.7cmである。口縁部にはクシ描きによる波状文、口縁部下端はV字のキザミ目文である。頸部から体部にかけてには、クシ原体12本の直線文が8条、2条の波状文、5条の直線文、2条の波状文を施している。体部はヨコ方向のヘラミガキで、底部は右下がりのヘラミガキで、ミガキは底部底も行っている。内面は、粘土紐の凹凸がみられ指頭痕の上をナデ仕上げしている。

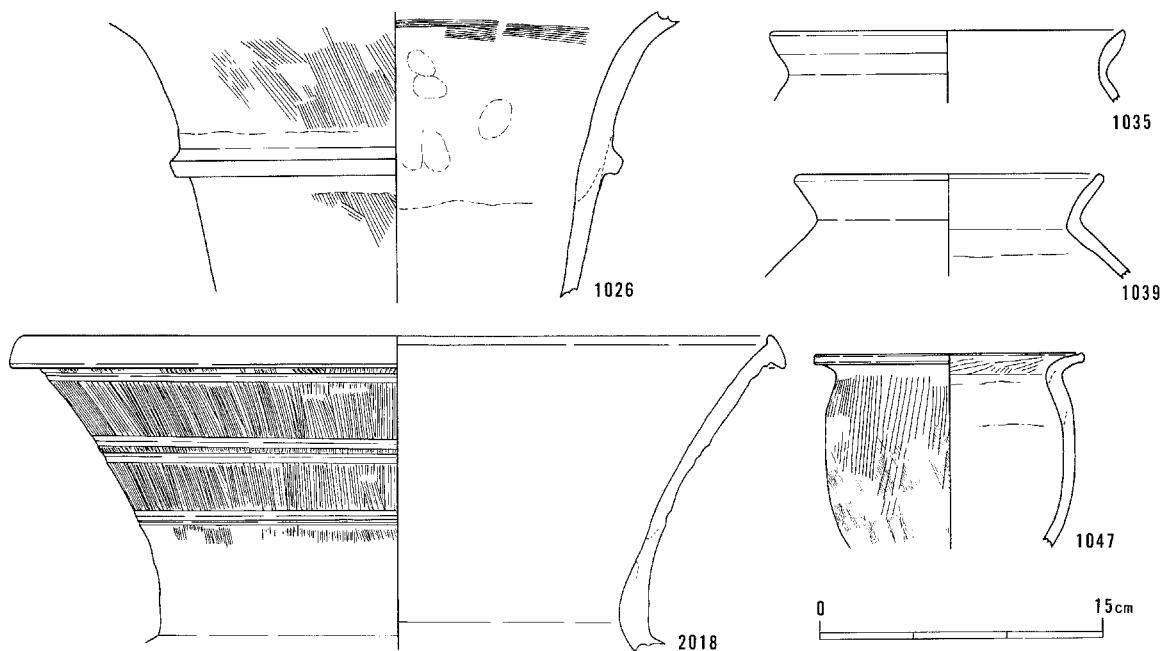
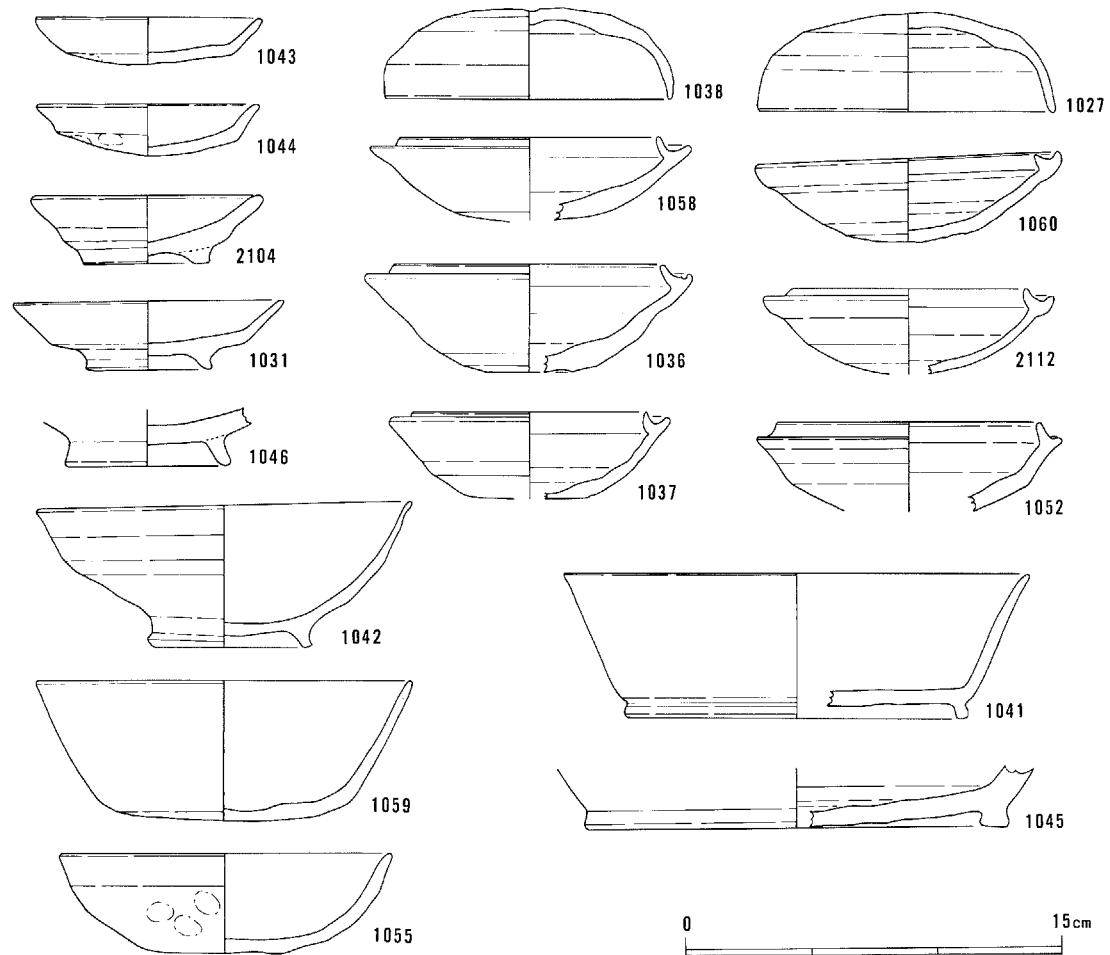


図168 SD01 SD02 SD16

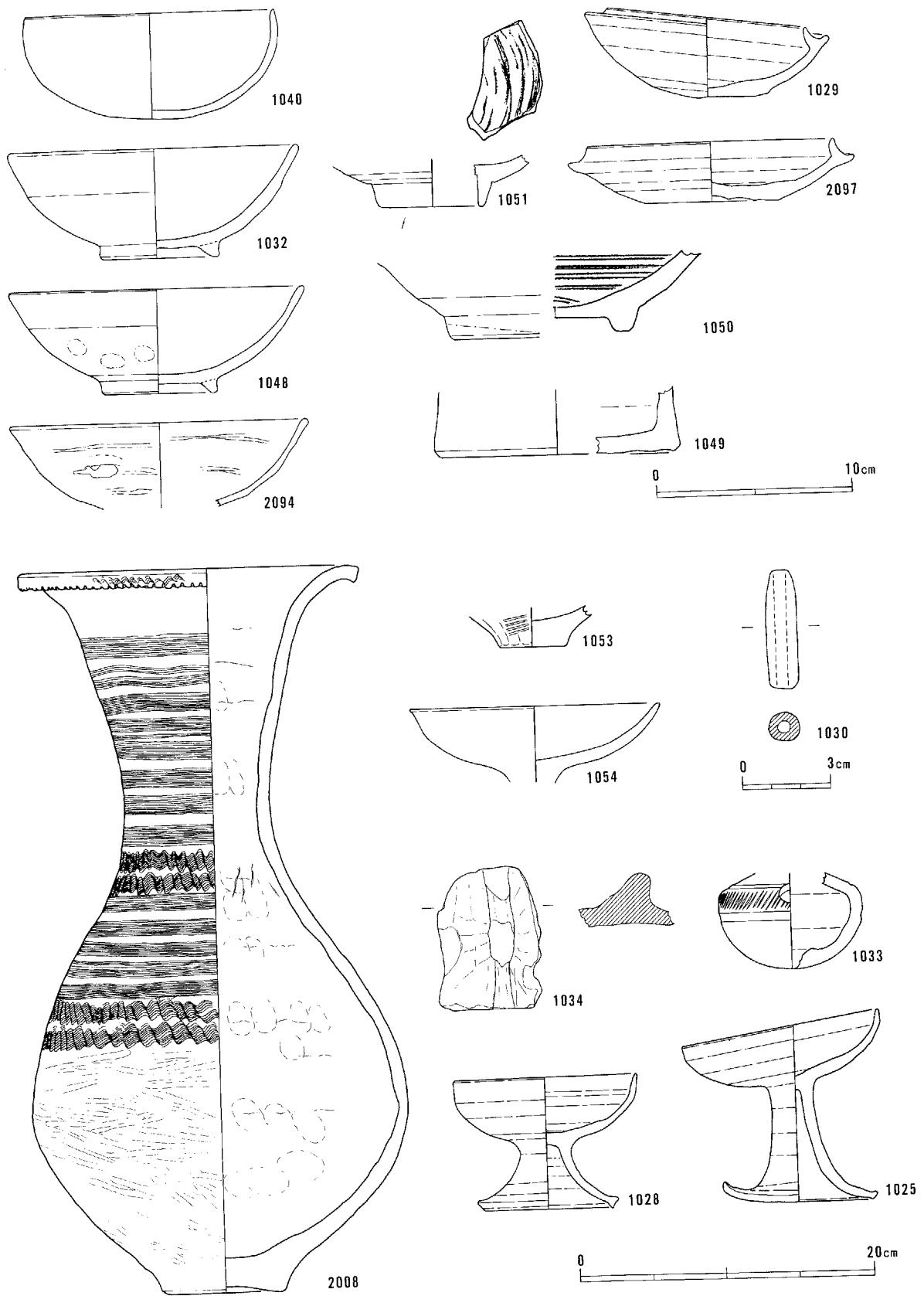


図169 SD02 SD09 SD10 SD15 SD18 SD19 SD21 SD508 SD512

SW遺構

SW01

IX区上面に一部連続している遺構で、東西幅8m、南北長は調査区外で不明である。深さは80cmである。

出土遺物 (1023, 1024) (図170)

縁釉皿 (1023)

ケズリ出し高台の皿と思われる。外面畳付部分から、底部は露胎で灰色を呈している。他の部分の内外面は、縁釉がかけられている。

土師器皿 (1024)

口径12cm、器高2.8cmで、底部と体部の接合が顕著に、土器の形態をしてあらわれているものである。外面底部は、指押えの後ナデて、他の内外面はヨコナデである。

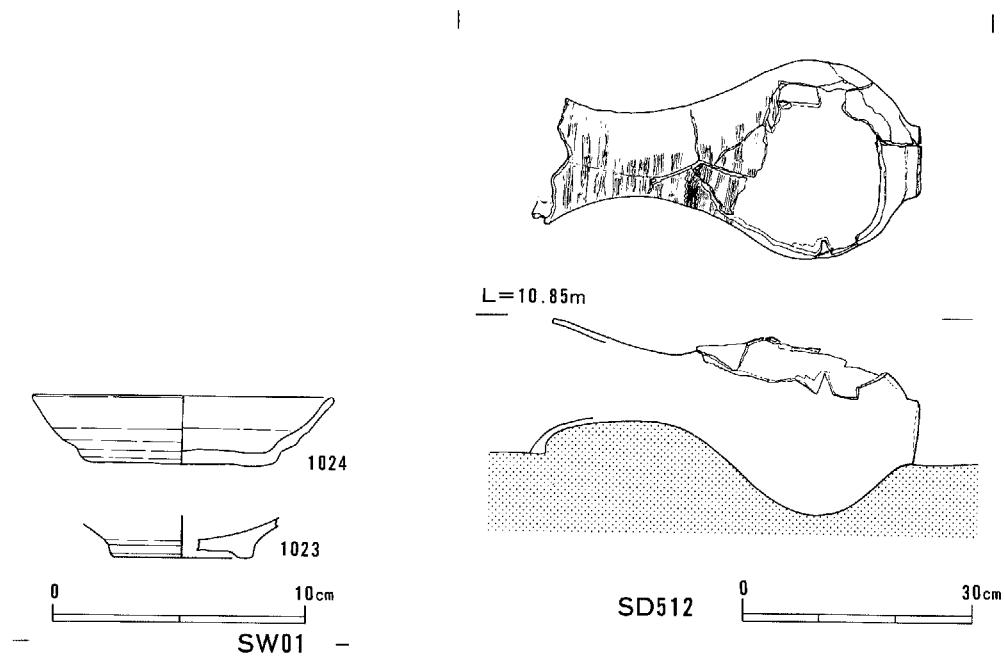


図170 SD512 SW01

VIII区上面遺構図

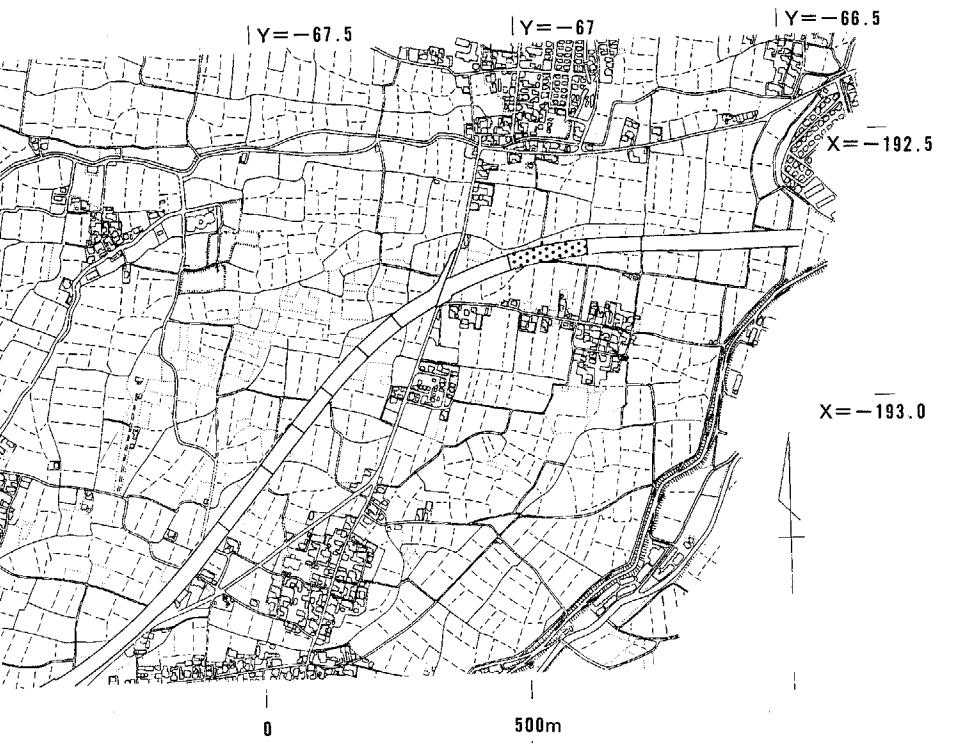
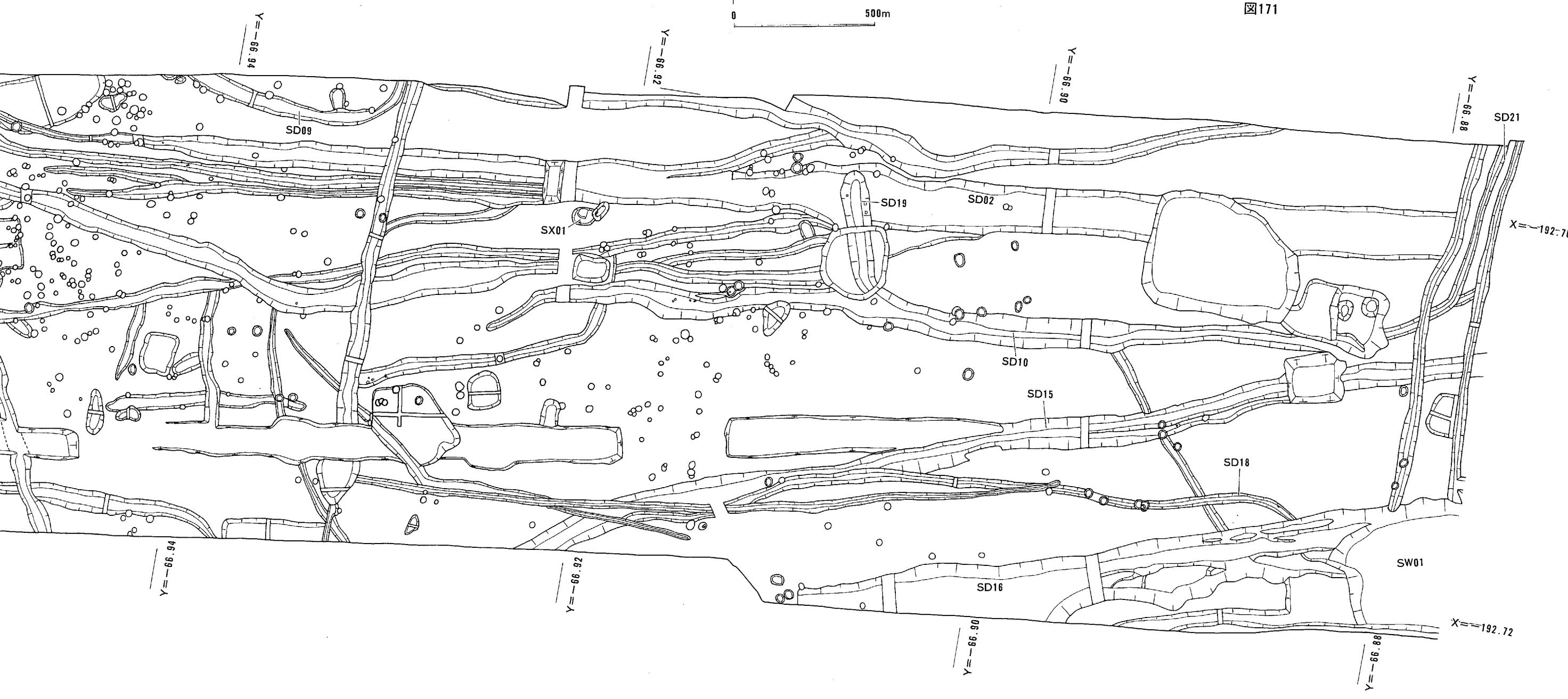
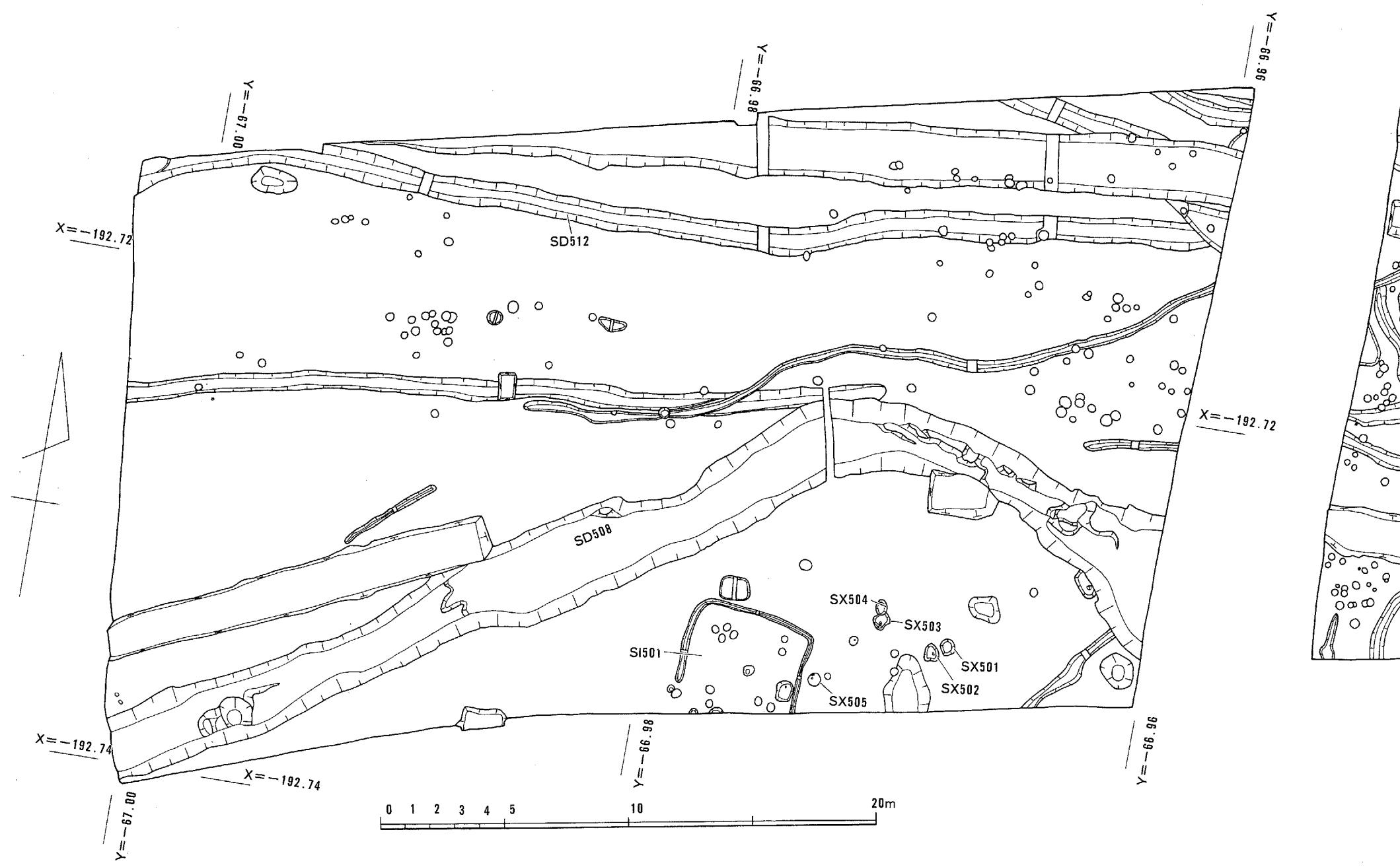


図171

VIII区下面の遺構と遺物

S X 遺構

S X 1 0 0 1 (S D 1 0 0 1, 1 0 0 2, 1 0 0 3) (図 1 7 2, PL 5 4)

弥生時代の方形周溝墓であり、四隅が陸橋になっている型式で、S D1001, 1002, 1003の溝からなり、他の一辺は調査区外である。溝を含めて一辺は15cmで、S D1001の溝幅は100cm、深さ20cm、S D1002は幅100cm～150cm、深さ30cm、S D1003は幅200cmで深さ30cmである。各溝内からの出土遺物はない。

S D 遺構

S D 1 0 0 6

長軸6.6m、短軸2.4mの長楕円形の土坑で深さは50cmである。この周辺に類似する土坑S D1010、S D1004、S D1014とあり、S X1001との関連から同時期の土坑群の可能性がある。

出土遺物 (1 0 5 6, 1 4 3 9, 2 0 0 2) (図 1 7 3・1 7 4, PL 8 9)

縄文土器 (1 4 3 9)

深鉢 (1 4 3 9)

口縁部外面に低い貼付突帯を一条めぐらしている。頸部はゆるやかに屈曲し、内外面共にナデて仕上げている。

弥生土器鉢 (1 0 5 6)

口径22.4cm、器高16.3cmで、外面には、10本のクシを原体とする3条の直線文がなされている。体部から底部にかけては水平もしくは右下がりのヘラミガキがなされ、底部には指頭調整の上をナデている。内面は剥落しているが、ナデ仕上げであろう。直線文の施文は、やや波打って、文様の重なりがみられ、上面のS D512の(2008)に胎土、焼成、施文がよく似ている。

弥生土器壺 (2 0 0 2)

(2002)は、口縁部と体部下半を欠いている。外面頸部から体部にかけてクシ描文がなされ、直線文と波状文が交互に描かれている。体部最大幅は25cmである。

S D 1 0 1 1

溝状遺構で、長さ2.4m、幅60cm、深さ15cmである。

出土遺物 (1 3 6 3) (図 1 7 4, PL 1 0 2)

縄文土器 (1 3 6 3)

口縁部外面直下に貼付突帯文があり、突帯にはキザミ目がなされている。

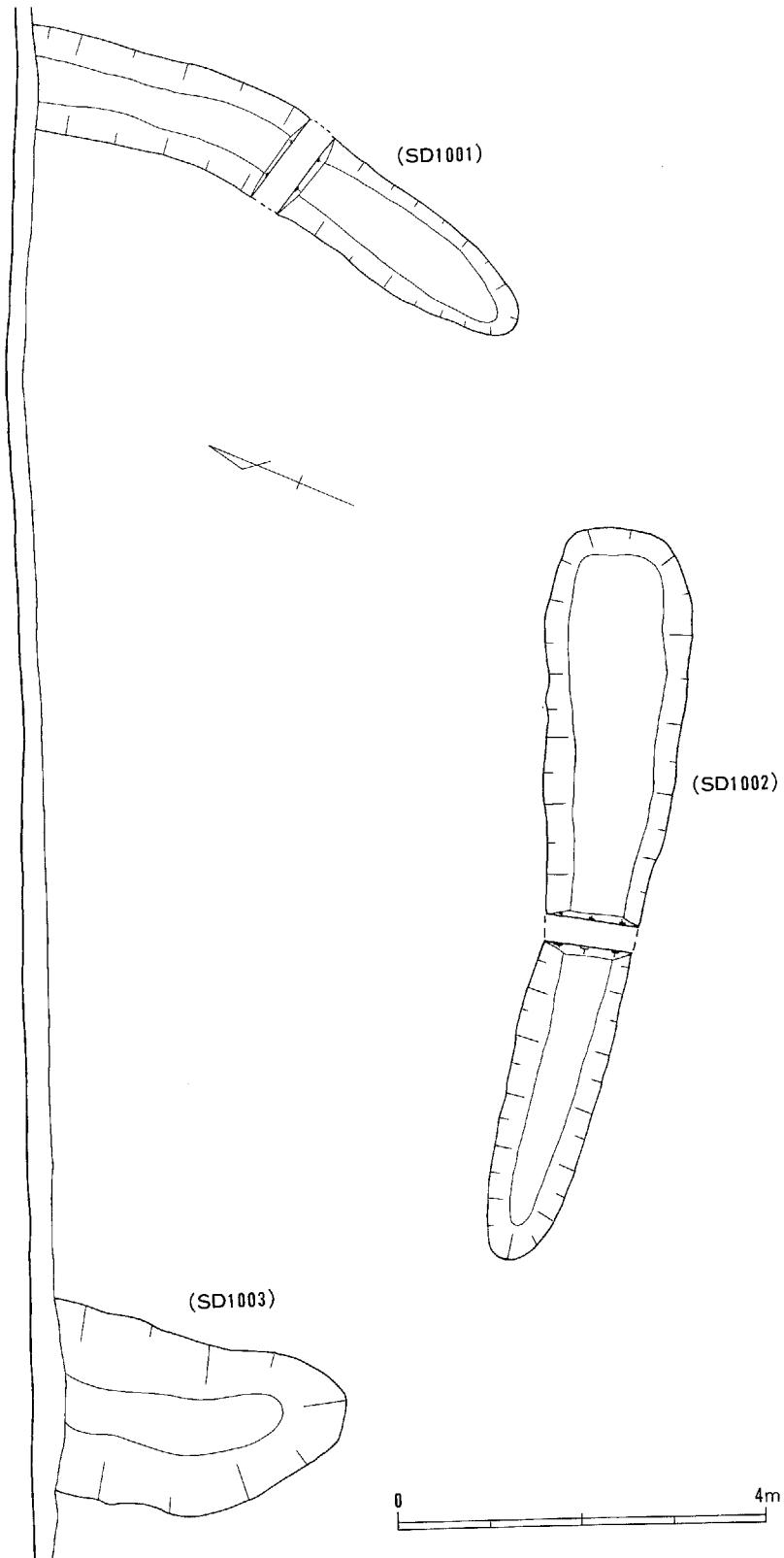


図172 SX1001 (SD1001・1002・1003)

S D 1 0 1 2

隅丸方形状で、長軸12m、短軸3 m、深さ50cmの遺構である。長軸は東西である。

出土遺物 (1057, 1087) (図173, PL89・103)

弥生土器壺 (1057)

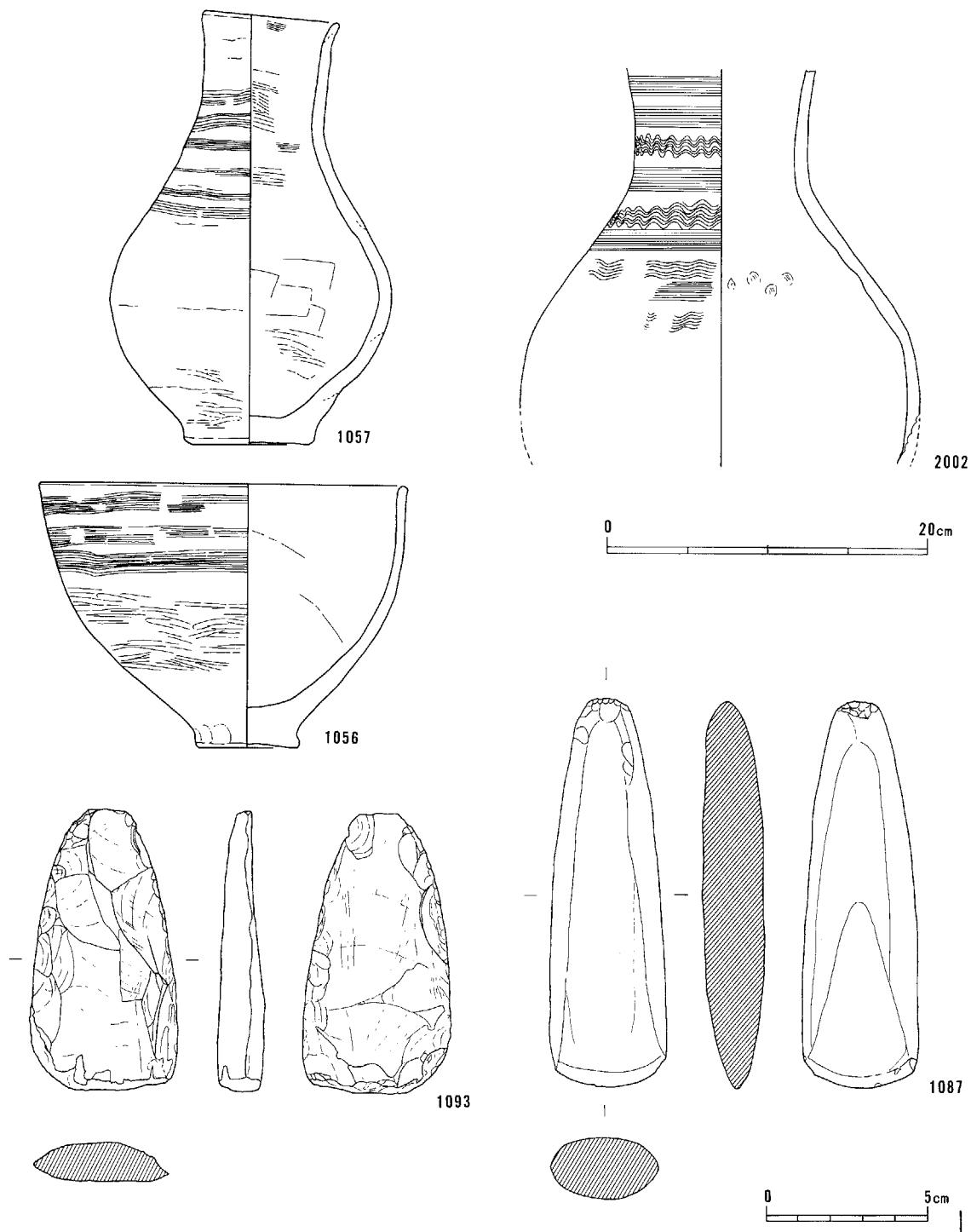


図173 SD1006 SD1012 SD1014

直口壺で口径8.2cm、器高27cm、最大幅は体部にあり17.4cmである。外面にはクシ描きによる直線文がなされ、クシ自身のクシ間にむらのある幅で、荒いクシ原体である。焼成後の穿孔が二ヶ所あり、一ヶ所は5条の直線文の5条目から縦長に長さ3.5cm、幅1.5cmの小さな穿孔であり、この穿孔のほぼ対面に円形の穿孔が底部から8cm上の体部の位置にある。縦5cm、幅6cmの大きさである。前者は外方向から叩いたものであり、後者は内面から叩いて穿孔したものである。後者の穿孔工器片が、一個の破片で、そのまま出土しており、後者の穿孔部分に綺麗に納まる。内面には部分的にヨコナデがみられる。

磨製石斧（1087）

定角式石斧で、素材は緑泥片岩であり、長さ11.9cm、最大幅3.6cm、最大厚1.9cmである。刃部は蛤刃に磨きだし、正面、肩面、側面は丁寧に磨かれているが、基部は細かい打撃による成形痕をそのまま残している。

SD1014

長楕円形遺構で、東西に長く、長軸は7m、短軸は2.2mであり、深さは80cmである。

出土遺物（1093）(図173)

スクレイパー（1093）

素材はサヌカイトで実測図は縦位置にしているが、下位部端部は自然面を残したままであり、ネガティブな面は横剥ぎで、ポジティブな面は縦剥ぎである。両縁辺は打撃による荒い調整剝離がなされ、左図左上部の縁辺はさらに細いタッチで調整されている。

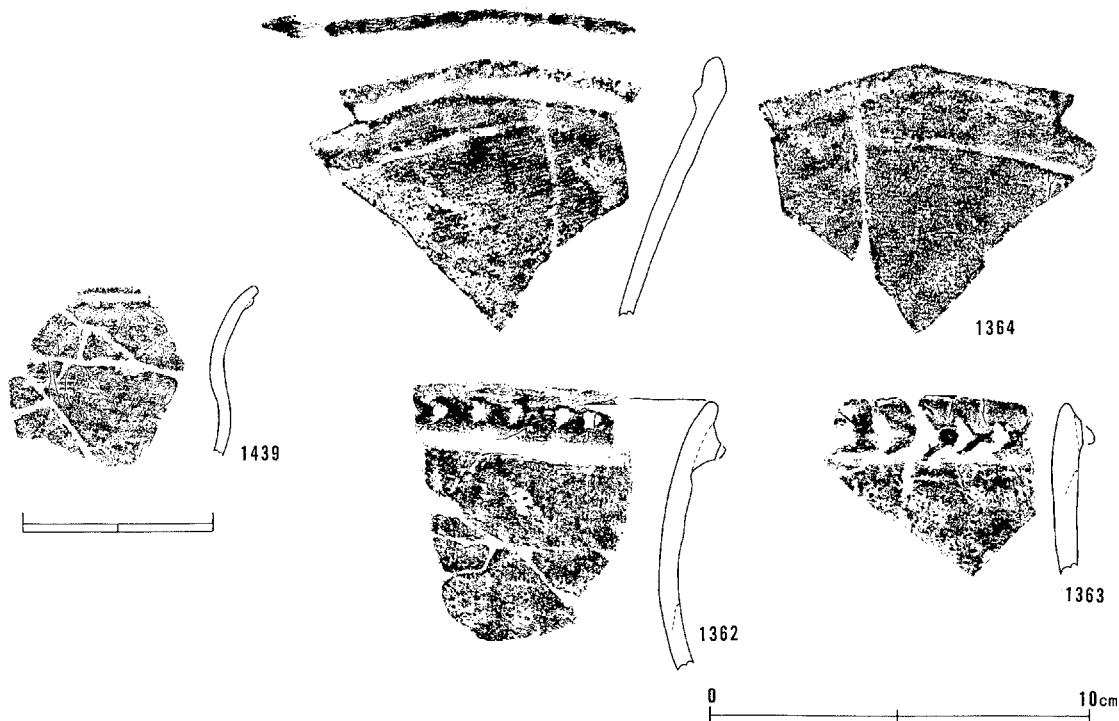


図174 SD1006 SD1011

VIII区包含層遺物

縄文土器 (1362, 1364) (図174)

浅鉢 (1364)

内外面ミガキの器面で、口縁部は山形をなし、山形の途中に鋭い切れ目が両端にみられる。

内面は突帯状の整形がなされている。

深鉢 (1362)

口縁部外面に、比較的高い貼付突帯が一条めぐり、キザミ目がみられる。突帯の下端には調整時の棱がきわだってなされている。

弥生土器鉢 (1022) (図175)

口径12.5cm、器高7.5cmで外面には左下がりのタタキ目がみられる。口縁部の内外面はヨコナデで、内面は板状工具によるナデで、内面底部は扇形状の調整で一周している。

須恵器杯身 (2030)

口径10.3cm、器高3.6cmで、外面底部にはヘラケズリで、他の内外面はヨコナデである。

土師器椀 (2095, 2107) (図175)

(2095) は、口径13.6cm、器高3.6cmの貼付高台の椀である。外面体部には指頭圧痕の後ナデている。高台部とその周辺及び口縁部はヨコナデで、他の部分はナデである。

(2107) は、口径9.6cm、器高3.1cmの貼付高台であり、各部分の調整は (2095) と同じであるが、体部には指頭圧痕はみられない。

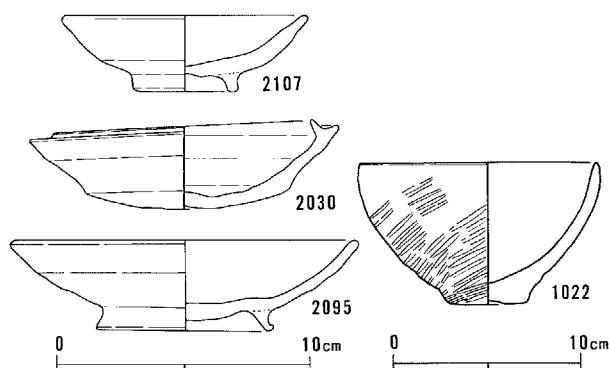


図175 包含層

VIII区下面遺構図

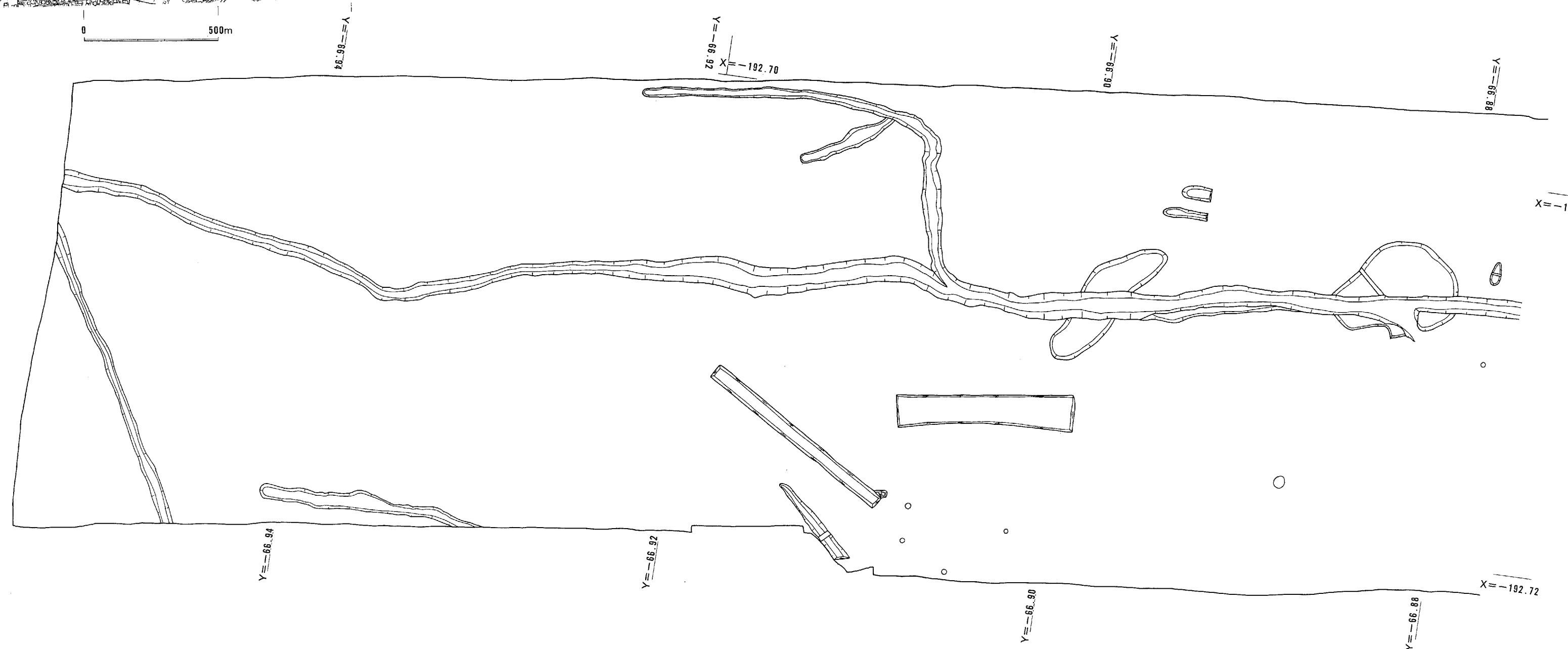
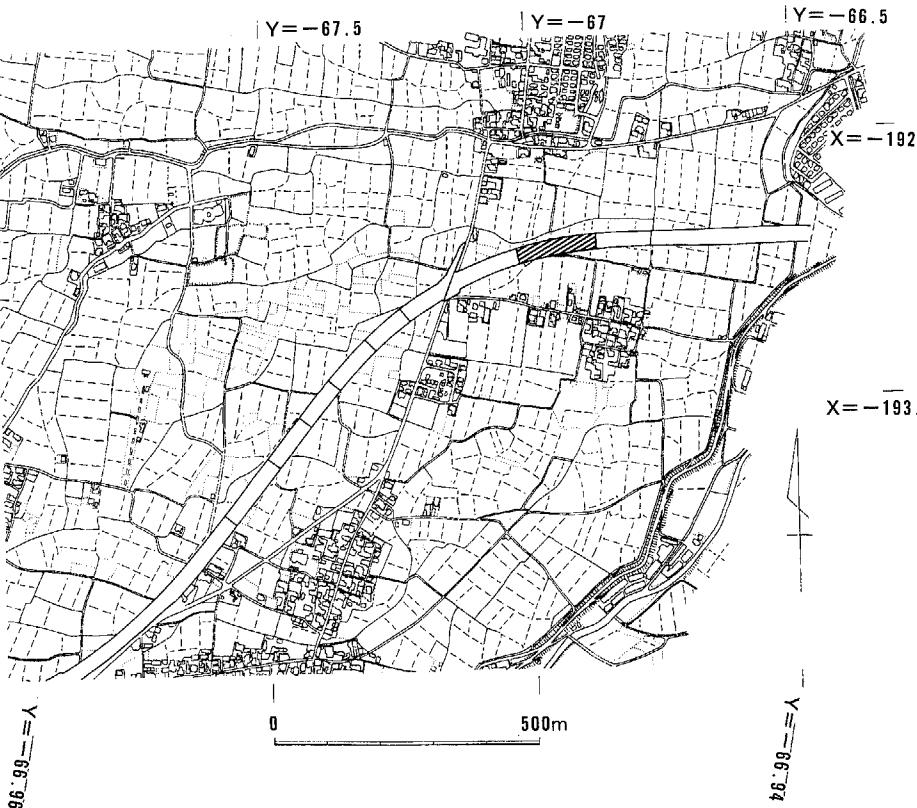
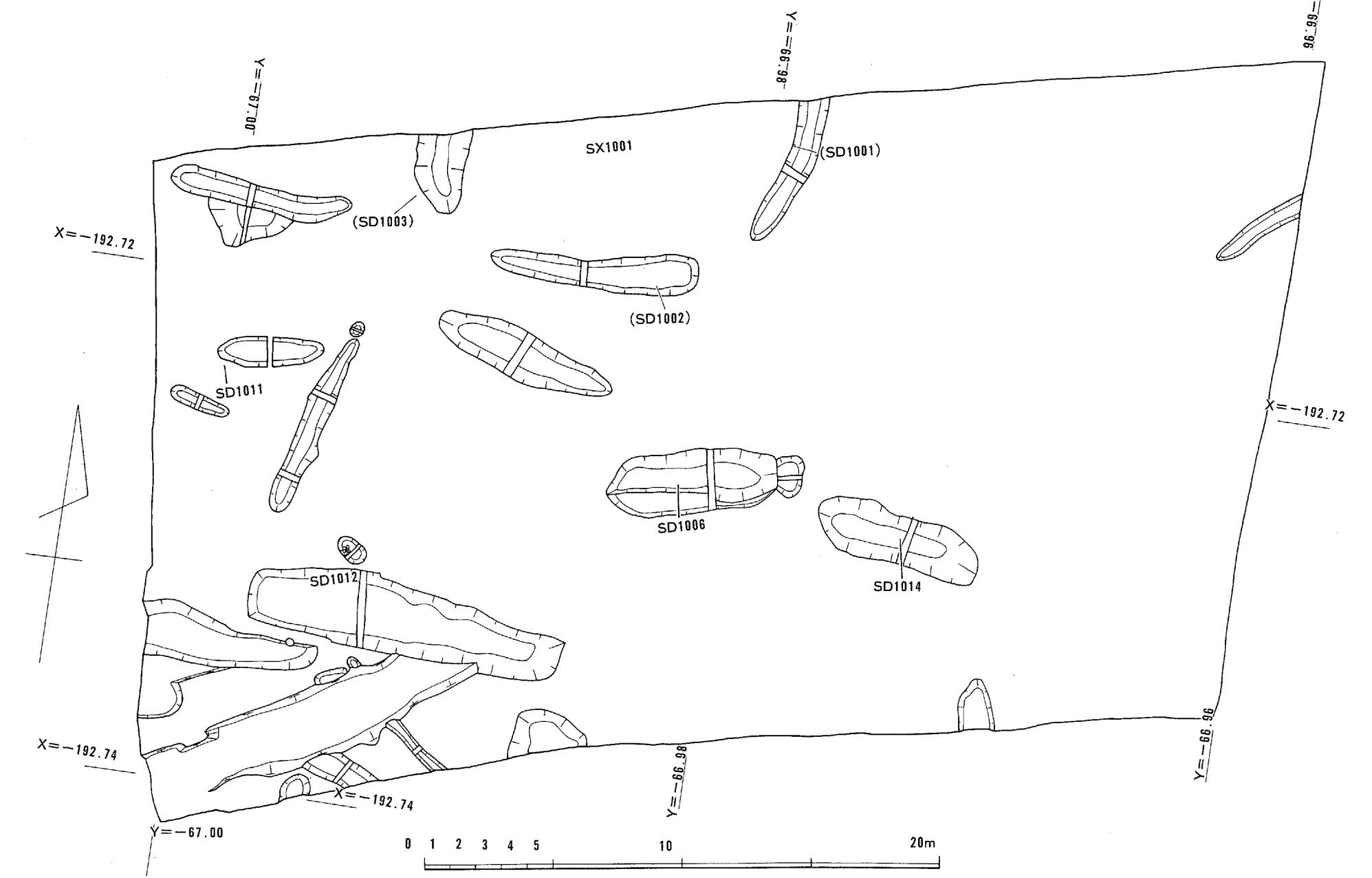


図176

IX区の遺構と遺物

IX区上面の遺構と遺物

S I 遺構

S I 01 (図177, PL56・57)

円形の掘方の遺構で、径5.5m、深さ40cmで、中央部に円形炉があり、径140cm、深さ20cmである。壁に沿って幅5cm、深さ4cmの溝が一部を除いてめぐっている。溝のめぐっていない部分はほぼ1mで、ここを出入口にしていたのであろう。柱穴は、12個あるが、齊一性のあるのは、炉近くを1周する柱穴6個を中心にして出入口の補助柱2個が建築構造上の基本的な柱と考える。柱穴径は径25cmのものと30cmのものがある。柱穴の深さは、床面から10cm程度で浅いものである。

出土遺物 (1062, 1071, 2004, 2111) (図178, PL103)

弥生土器甕 (1062, 2004)

口径22.4cm、現存器高18cmで復元高23cm前後の土器である。口縁部の口唇部はつまみ上げられ立ち上がる。外面の頸部と頸部下はヨコナデであり、左下りのタタキ目の上を右下がりのタタキ目が体部中央部

分から体部下半にみら

れ、体部下半はさらに

部分的にタテ方向のへ

ラケズリがなされてい

る。(2004) は、口径17

cm、器高26cmで、最大

幅は体部にあり21.6cm

である。外面は頸部下

右方向の水平なヘラケ

ズリがなされ、その上

を体部上部は右下がり

のヘラケズリが重なっ

ている。体部中央、下

半は垂直方向のヘラケ

ズリで、底部はナデて

いる。内面体部は板状

工具による調整が水平

になされている。

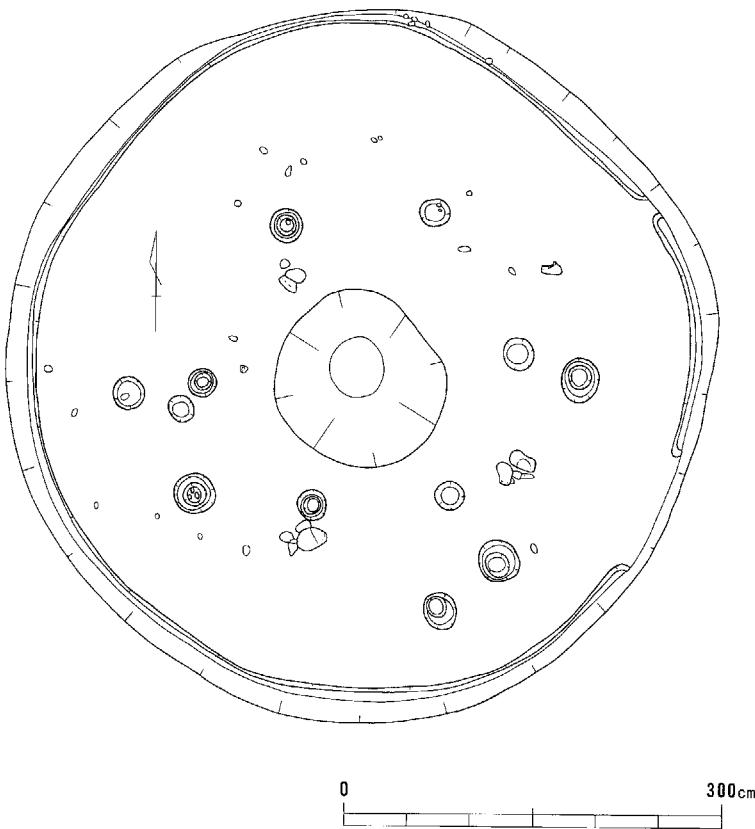


図177 S I 01

偏平片刃石斧（1071）

長さ8cm、幅4.6cm、最大厚1.2cmである。実測図左図面部分と両面部分は、丁寧に磨かれ、成形打撃の際の片岩の板状剥離部分も磨くことで調整されている。右図は左図の裏面であるが、片岩の板状に割れた面をそのままにして磨くことはしていないが、刃部はよく使用されてか、幅広の使用部分が磨製化している。

土師器壺（2111）

口縁部で全体の3分の1残っている破片である。口径部15.8cmで、外面頸部から体部にタテ方向の荒いハケ目、内面も同じ工具による調整ハケ目が右下がりに重ねて行われている。口縁部外面に煤の付着をみる。この土器は、この遺構と直接関係ない資料である。

S B 遺構

S B 01 (図179, PL57)

2間×3間の総柱の建物で、東西が3間である。1間が、2間向と3間向に関係なく、200cm、

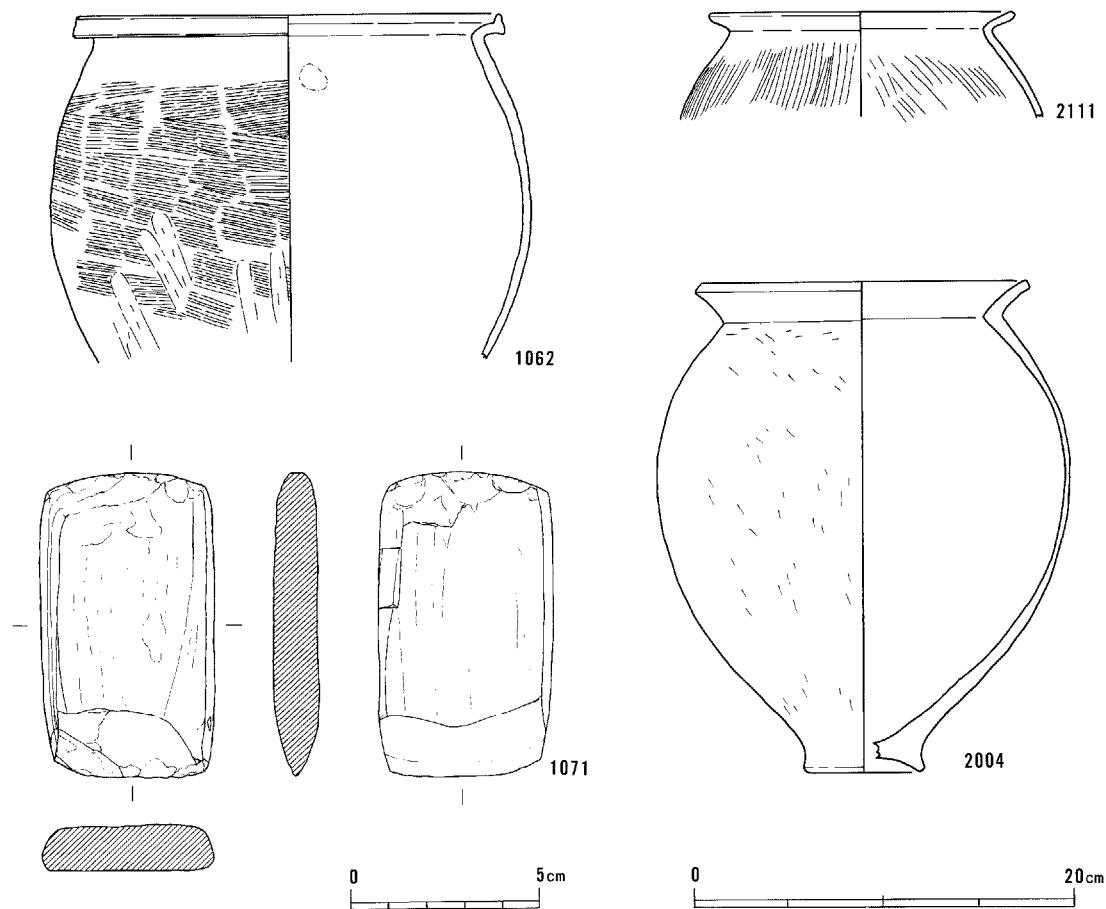


図178 S B 01

210cm、220cm、250cmと芯心間にむらがある。建物面積は大略26m²である。掘方径は30cm前後で、柱痕径は15cm前後、深さ10cm前後である。平面積は約33m²である。

S B 0 2 (図179, PL58)

2間×3間の総柱建物である。2間面の1間距離は165cm、もしくは170cmであり、3間面の1間距離は、140cm、160cm、170cm、180cm、195cm、200cmと非常に雑把な数値である。掘方は円形で、径35cm、柱痕径15cm、深さ13cm前後である。平面積は約30m²である。

S B 0 3 (図179, PL58)

2間×3間の総柱建物である。2間面の1間の距離は、200cm～120cmで、3間面の1間の距離は270cmと290cmである。ただし、この東西を3間にする東側の1間は225cm～240cmで、他の2間より距離が狭くなっている。掘方は円形で、径25cm～30cm、柱痕径15cm～18cm、深さは10cm前後である。平面積は、約30m²である。

S B 0 4 (図180, PL59)

2間×4間の総柱の建物である。1間の距離は170cm、200cm前後、240cm前後と、各1間の距離に統一性のある間尺を得ることのできない建物である。掘方は円形で、径30cm、柱痕径15cm前後、深さ7cm～10cmである。平面積は約31m²である。

S B 0 6 (図180)

2間×3間の総柱建物であるが、三基の柱穴が検出されていない。1間が115cm、140cm、150cm、160cm、170cm、180cm、200cm、220cmと1間の間尺が対応すべき柱間にあってもばらばらである。掘方は無く、柱痕径は25cm、深さ10cm前後である。平面積は約15m²である。

S B 0 7 (図180)

1間×3間の建物で、一基の柱穴は適位置に無く、本来この柱が無いものか不明である。1間面は220cm、230cm、245cmとざらがある。3間面の1間の距離は110cm、140cmで、1間面の距離に比して間尺は短か目である。平面積は約9m²である。

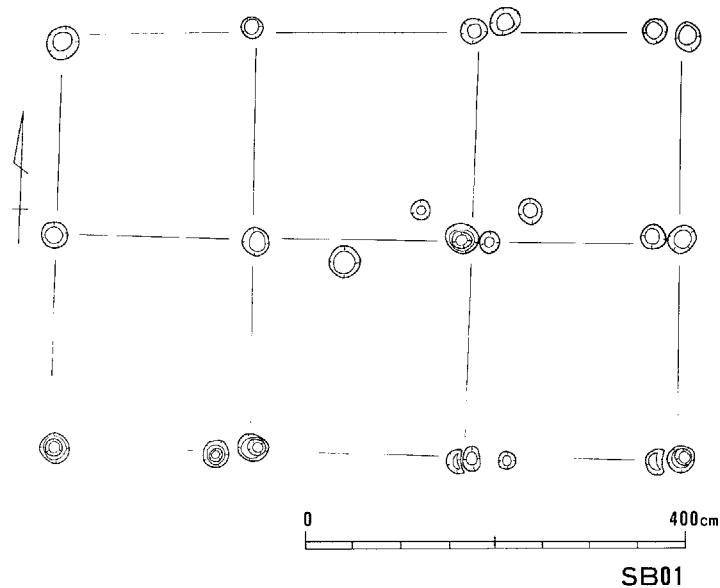
S B 0 8 (図180)

1間×1間の建物で、掘方は円形で径30cmで、柱根径は15cm、深さ12cmである。対応する間尺距離は160cm～165cm、180cm～200cmとほぼ近い数値を得る。平面積は、約3m²である。

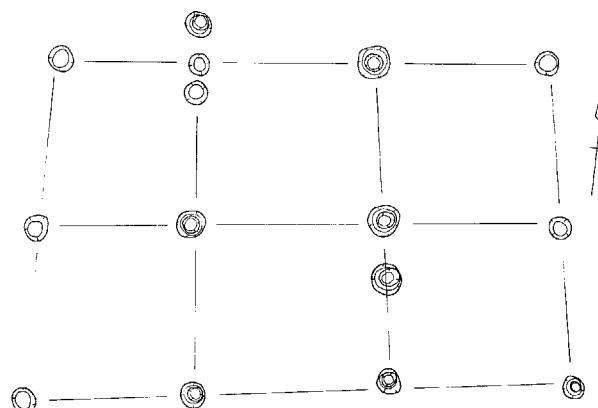
S E 遺構

S E 0 1 (図181, PL59)

楕円形の掘方の井戸で、底は遺構面から200cmであり、二段に曲物を組み、上段の曲物の上の部分は、木材による枠囲いをしている。この形態は 区下面S E 104に非常に似ている。掘方の上端は、長軸1.8m、短軸で1.6mである。



SB01



SB02

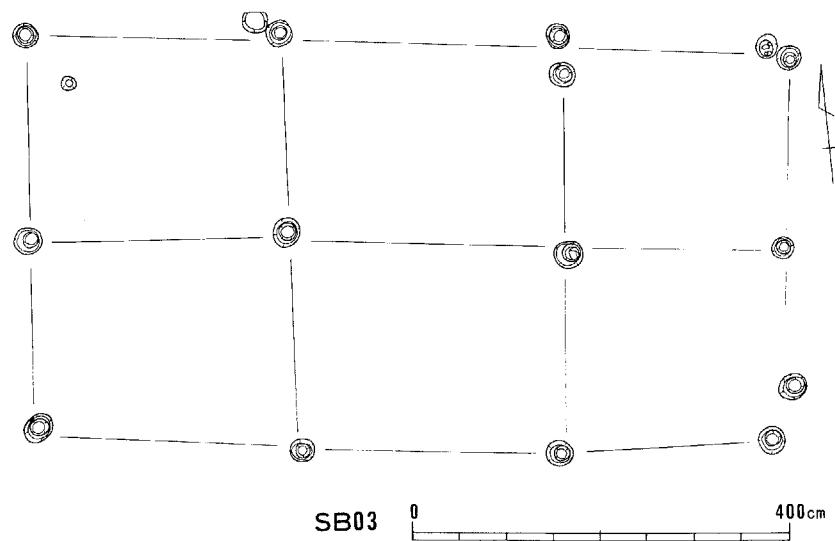


図179 SB01 SB02 SB03

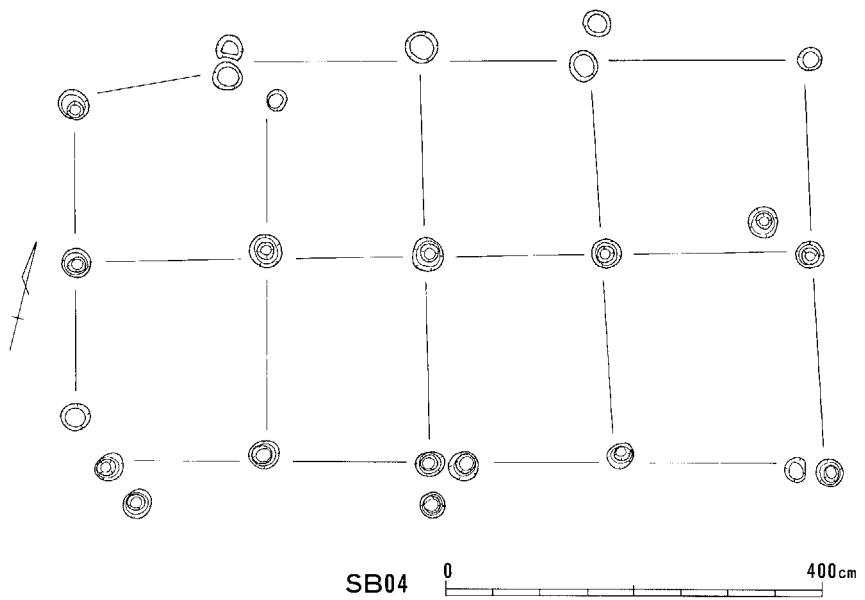
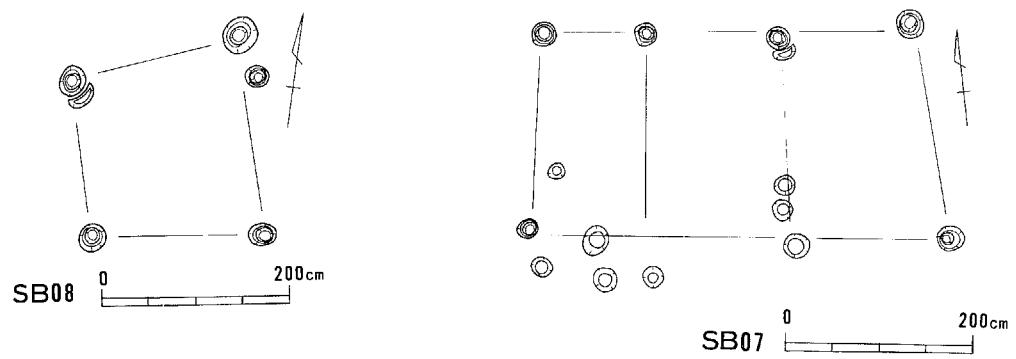
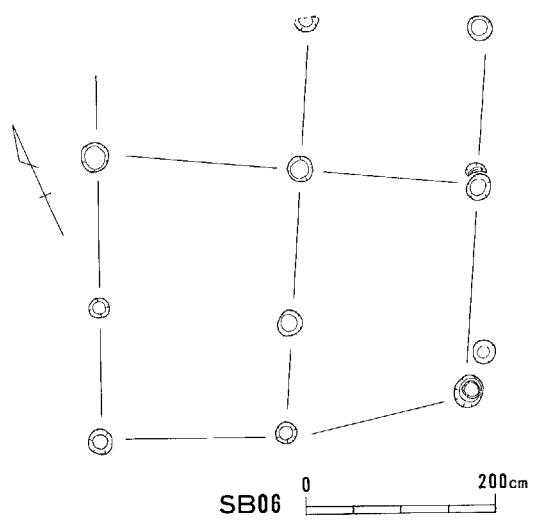


図180 SB04 SB06 SB07 SB08

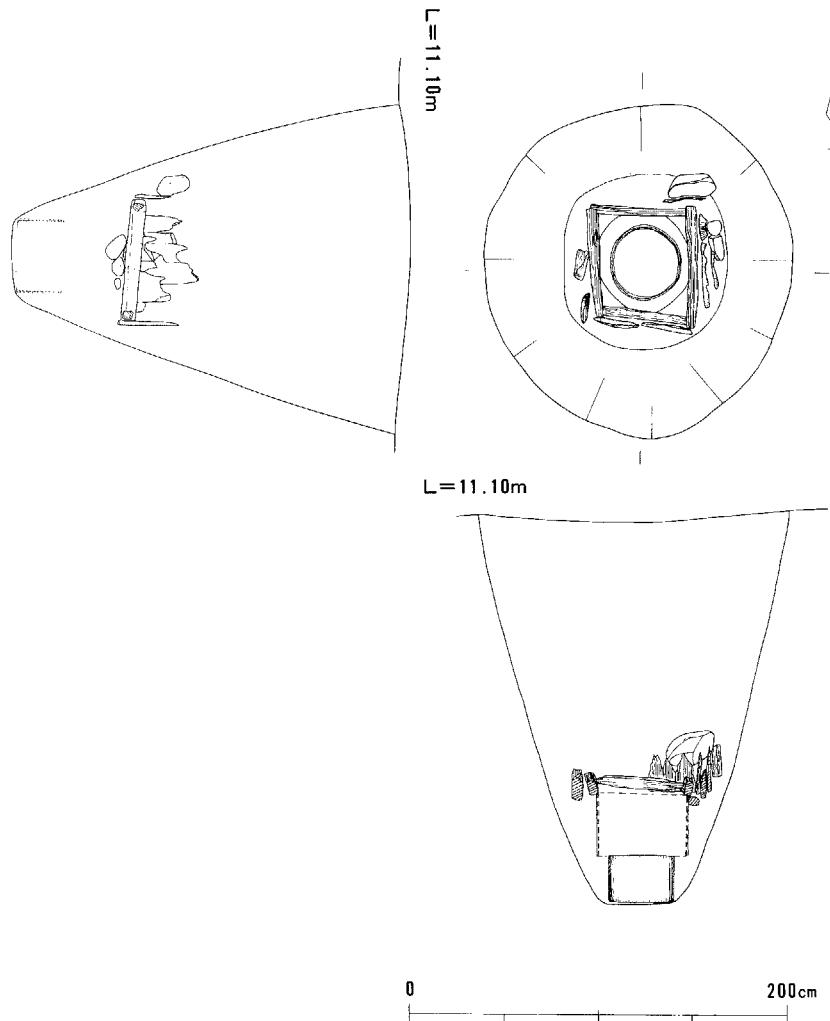


図181 SX01

S X 遺構

S X 0 1 (図182, PL60)

不整形な円形の掘方の土坑である。径はほぼ110cm、深さ100cmである。土坑底には黒色土器椀が据えられ、その上に幅10cm、長さ55cm、厚さ1cmの木片が土器を覆うように出土した。

出土遺物 (図182)

黒色土器 (1066)

口径13.5cm、器高4.2cmの貼付高台の椀である。外面はヨコナデの仕上げであるが、粘土紐接合部の凹凸を平滑化していない。内面は、平滑で磨き暗文が多条になされている。

SD遺構

SD01

東西流の幅2.5m、深さ40cmの溝である。

出土遺物 (2029) (図185)

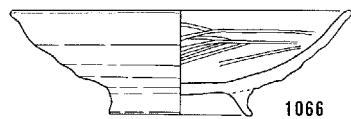
土師器皿 (2029)

口径11.4cm、器高3cmで、口縁部の内外面、内面底部は回転ヨコナデで、外面底部は指押さえの後ナデている。体部は粘土紐のつなぎ目の稜がみられる。

SD02

東西流の溝で、幅150cm~200cm、深さ90cm~100cmである。

出土遺物 (1116, 2096)
(図183・185)



0 10cm

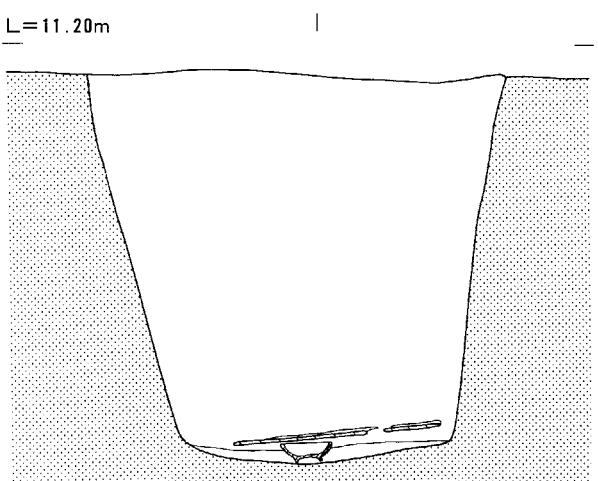
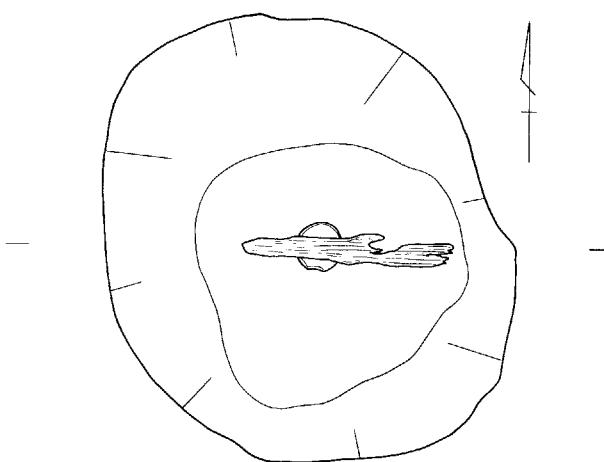


図182 SX01

石鏃 (1116)

片面に大きなポジティブな面を利用してい。ネガティブな面は稜を中心に出され、基部は平坦剝離によって薄くされている。ポジティブな面はラウンドにリタッチで調整されている。長さ3.2cm、最大幅1.5cm、厚さ0.3cmである。

須恵器壺 (2096)

口径17cmで口縁部で4分の1が残存して

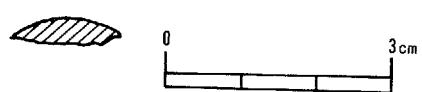
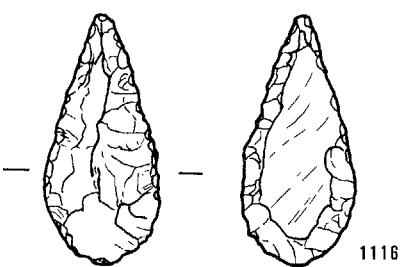


図183 SD02

いる須恵器片である。外面は頸部下にタテ方向のタタキ目が部分的に残っている。内面には青海波のあて具痕がやはり部分的に残っている。

口縁部の内外面はヨコナデで仕上げている。

SD03 (PL60)

SD02に平行する東西流の溝である。幅90cm前後で、深さ100cmのしっかりした遺構である。

出土遺物 (1063, 1064, 1065, 1068, 1069, 1070, 2013, 2109)

(図184・185, PL89)

土師器土馬 (2013)

土馬の頸部から頭部、四肢、尾の先を欠く、飾り土馬で、鞍、障泥が貼り付けで表現され、たづな及び尻がいの飾りは竹管文の押捺で表現されている。土馬は中空で、四肢には別に接合のための径4mm～5mmの刺穴がそれぞれ一個あり、胴部を作成の後、それぞれの四肢に先のとがり気味の一本のクシを刺し、四肢を粘土で接合すると共にクシをもって、胴体に接合している。このことからさらに、四肢は中実であるといえる。尻の尾の下には径6mmの水平な穴が穿たれ中空の胴体を貫通している。腹部には2.5cm×4cmの方形の孔が穿たれ、これらはすべて焼成

以前の作業で

ある。

現存する最大

長は22cm、胴

幅は6.4cmであ

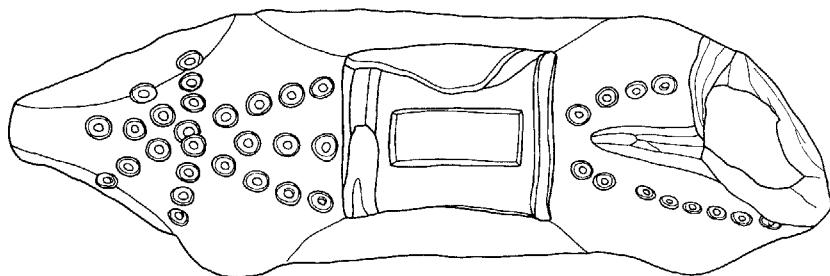
る。外面色調

はうすい褐色

で、円部は白

っぽく焼成さ

れている。



土師器杯

(2109)

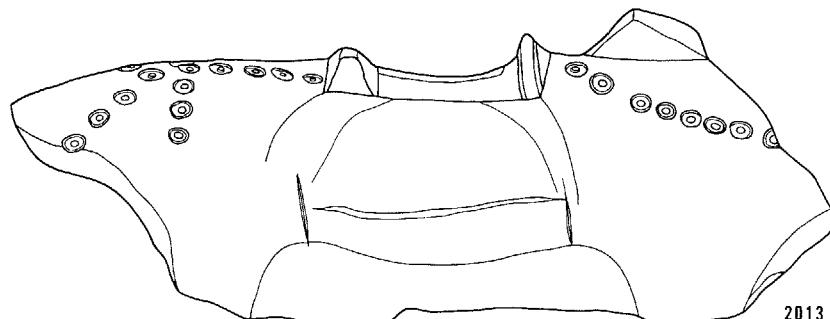
口径13.2cm、

器高3.5cmの口

縁部がやや端

反りしている。

口縁部、体部



0 15cm

図184 SD03

の内外面はヨコナデ、底部内外面はナデている。

須恵器杯蓋（1068）

口径13cm、器高3.7cmで、外面天井部はヘラケズリで、他の内外面はヨコナデである。部分的に自然釉がうすくかかっている。

須恵器杯身（1063, 1065, 1070）

(1065) は、口径11.6cm、器高4cmで、外面底部がナデ、他の部分はヨコナデである。(1063, 1070) は、貼付高台の杯で、この高台の取付け具合が酷似しており、同一個体の可能性はある。(1063) は復元口径17.8cm、遺構3.9cm、(1070) は口径14.3cm、器高3.7cmで、内外面ヨコナデである。

須恵器高杯（1069）

口径12.6cm、器高8.8cmの口縁部が垂直な土器である。杯部外面の脚部との接合付近はヘラケズリが残り、他の杯部、脚裾部の内外面はヨコナデ仕上げである。

須恵器提瓶（1064）

提瓶の口縁部で、体部との接合部ではずれている。口径8.6cmで、口縁部から頸部まで7.8cmで、粘土紐接合部の凹凸を残しながらもヨコナデ仕上げである。

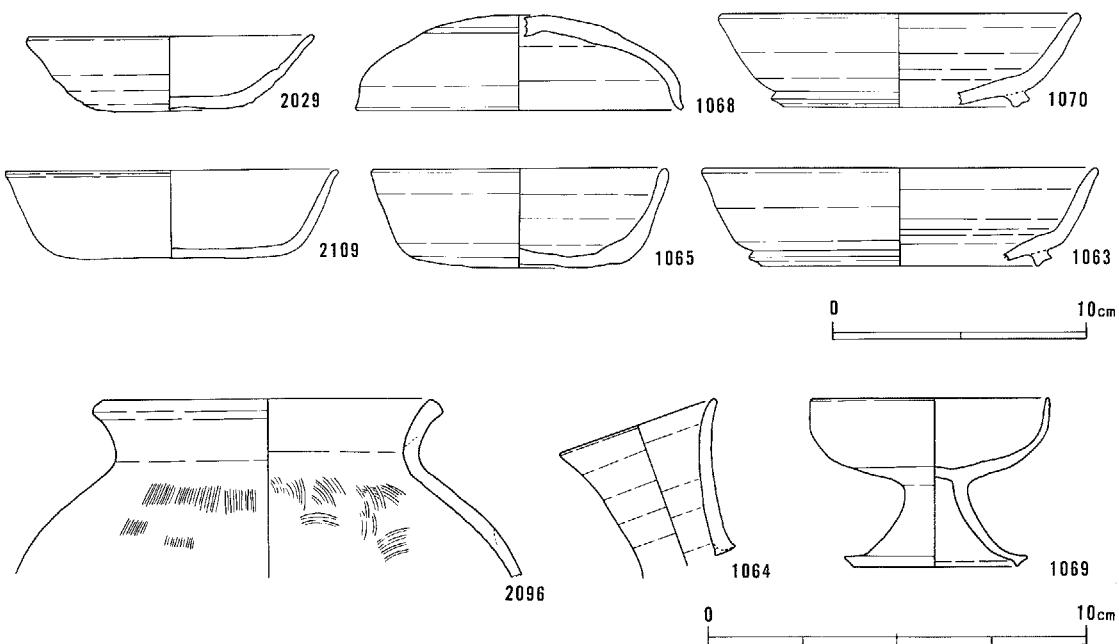


図185 SD01 SD02 SD03

IX区上面遺構図

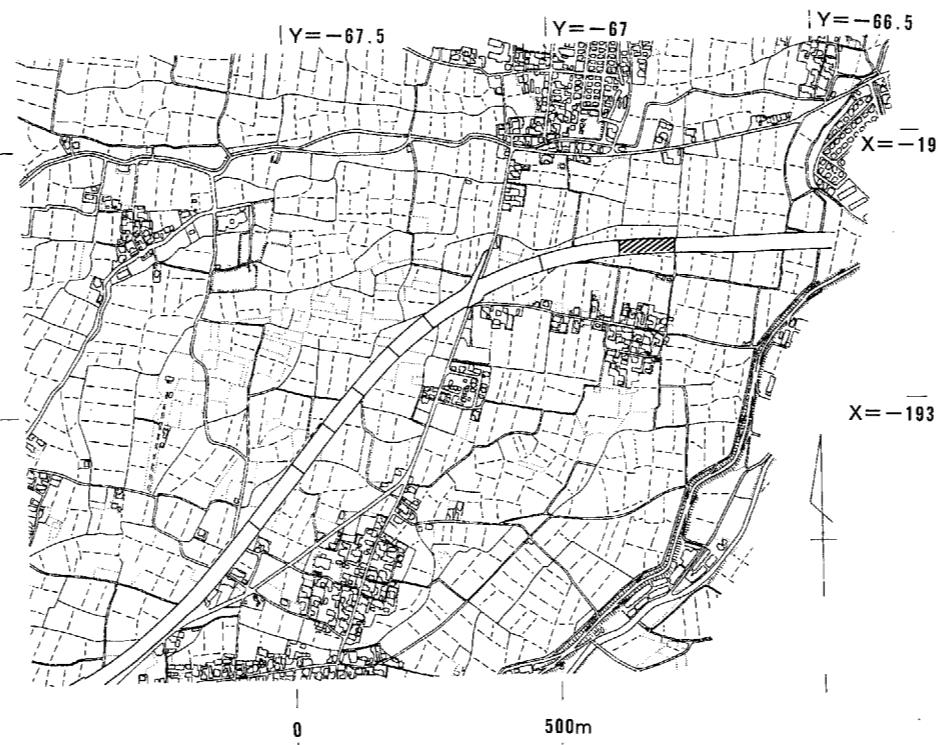
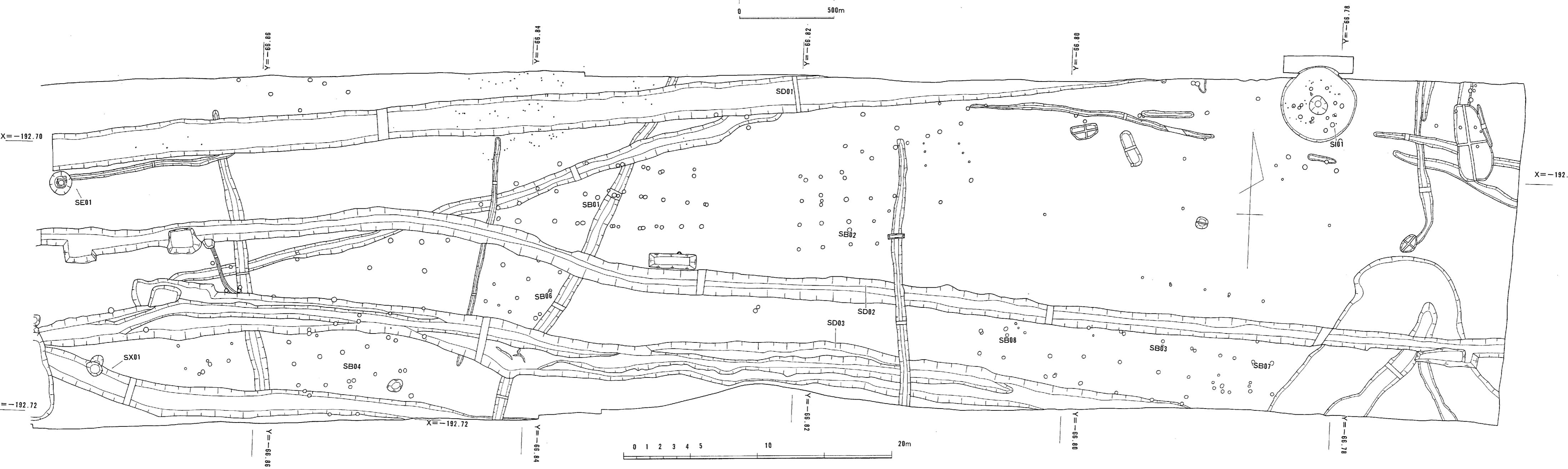


図186



IX区下面の遺構と遺物

S K 遺構

S K 1 0 3

不正形な落ち込みで、最大幅210cm、最小幅180cmで、深さ50cmである。

出土遺物（1108）(図187)

鋤型石器（1108）

素材は結晶片岩で灰石色を呈している。長軸の一方は打撃による大きな剝離で、尖銳化し、他方は長軸に対し、斜めで、端面が平坦である。長軸は14.4cmで、この平坦面寄りの両側に打撃による抉りが作出されている。厚さは縦断面の交差部分で1.6cm、幅は7.7cmで一方の平坦面以外は、両面方向の打撃によって刃部を形成している。抉り部分の稜に顯著に擦れは確認できなく、左図面の方が右図面より安定した平坦面である。

S K 1 0 7

長楕円形の落ち込みで、長軸200cm、短軸170cmで、深さ30cmである。

出土遺物（1264）

縄文土器深鉢（1264）(図187, PL88)

復元口径39.8cmで、くびれ部分がなく、口縁部から体部にかけてゆるやかな段をもって広がる形態としている。外面口縁部から体部にかけての段までの間はヨコナデで平滑で、体部は貝殻条痕が、水平もしくは右下がりになされている。内面はナデで仕上げている。

X区の包含層遺物

黒色土器（1067）(図187, PL88)

口径13.9cm、器高5.5cmの貼付高台の椀である。内外面は平滑であり、内面には一筆様のミガキ暗文がなされ、口縁部近くはより密になされている。内面は黒色で、外面は褐色の色調である。

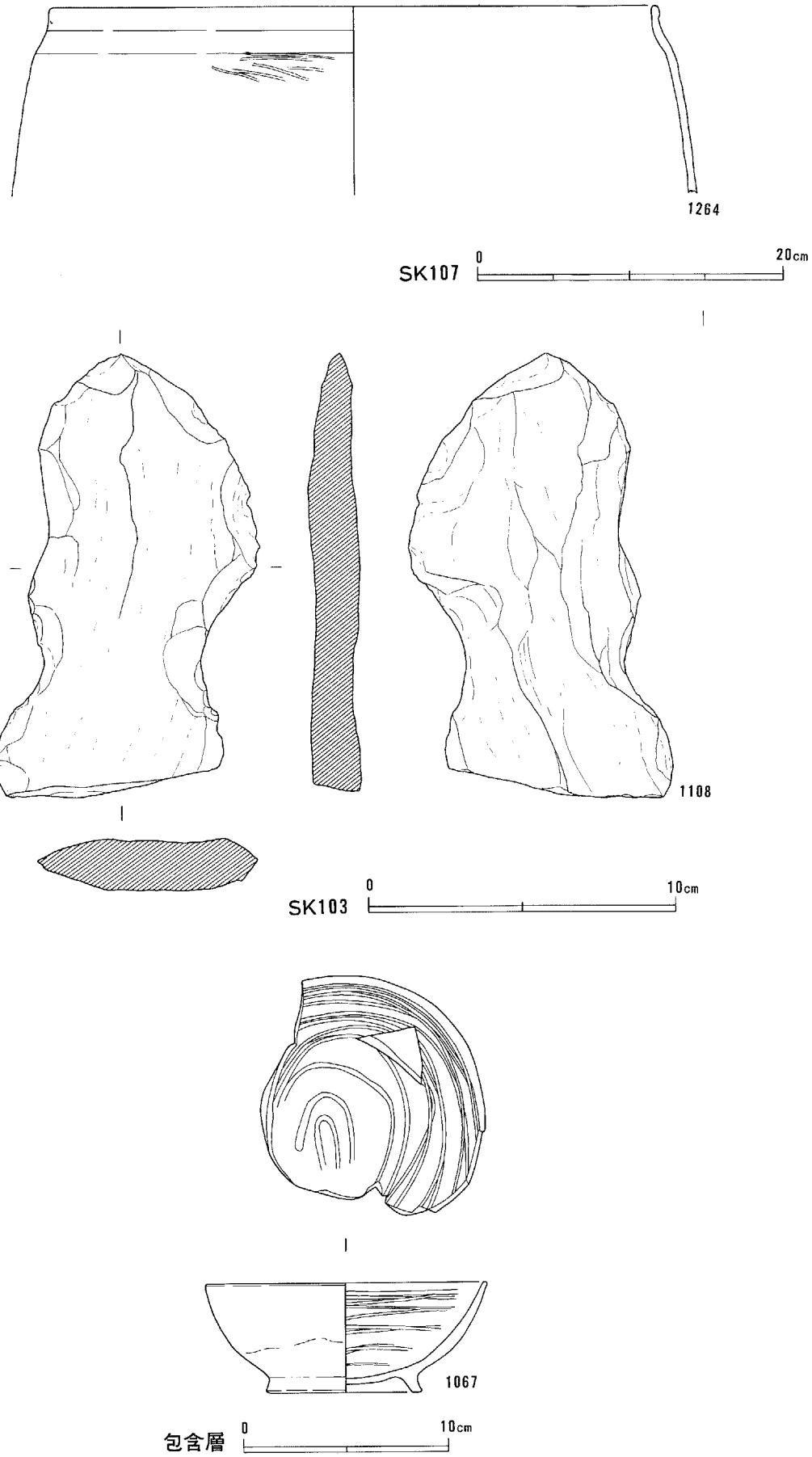


図187 SK103 SK107 1067 1264

IX区下面遺構図

188

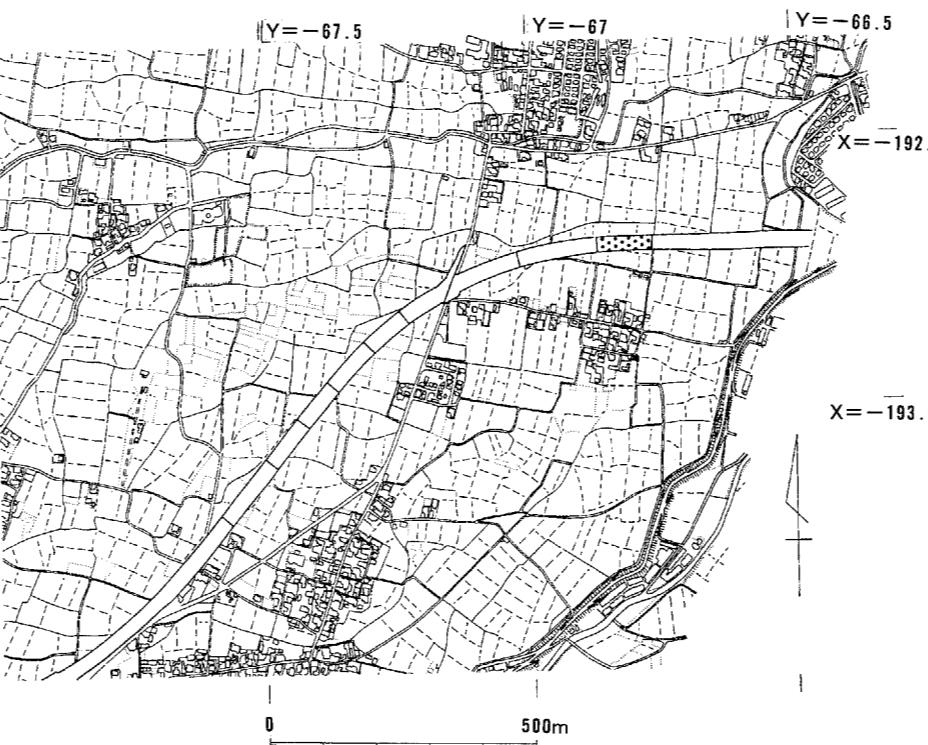
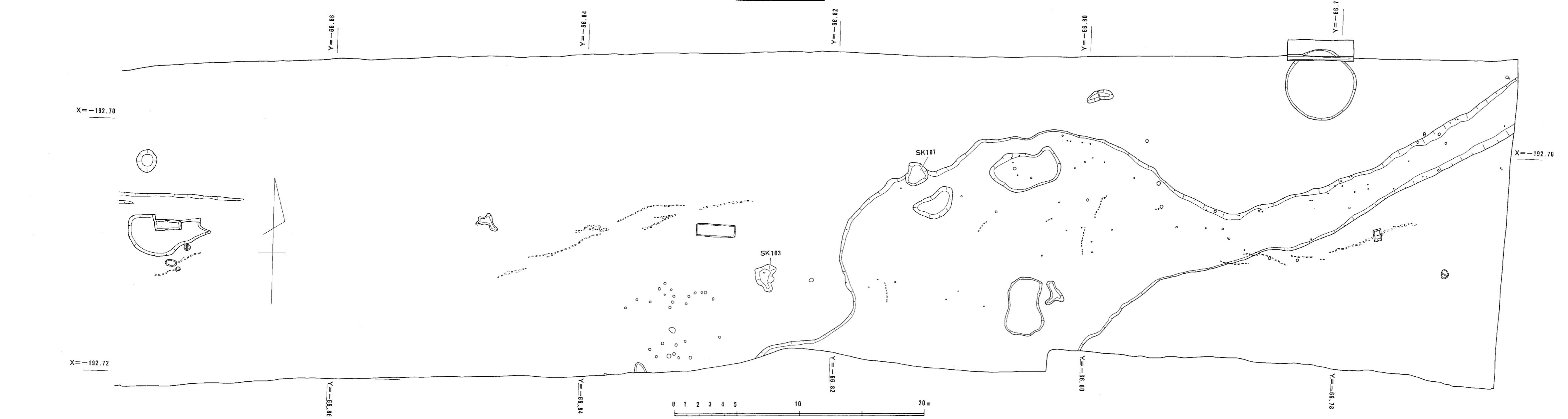


図188



川辺遺跡における自然科学分析調査

パリノ・サーヴェイ株式会社

I. はじめに

本遺跡では、1次～4次調査に平行して自然科学分析調査が実施されており、本報告ではその結果を総合的に捉え以下の3つの課題を検討する。ひとつは縄文時代晚期～江戸時代における遺跡周辺の古環境復元であり、調査区内で実施した珪藻・花粉・植物珪酸体分析に基づいて検討する。次に、土壌墓の可能性が考えられている飛鳥時代と鎌倉時代の土壌の性格の検討であり、骨等の埋設の有無を土壤理化学的（リン・カルシウム）に検討する。さらに縄文時代から平安時代にわたる土器・土師器の胎土の鉱物学的特性を時代別・器種別に捉え、土器の製作や流通などに関する基礎資料を得る。胎土重鉱物・胎土薄片鑑定の結果にもとづいて検討する。

II. 硅藻・花粉・植物珪酸体からみた古環境

1. 調査地点・試料

1次～4次調査で実施した調査地点・試料・分析項目の一覧を表1に示す。以下に試料について調査時・地点別に概説する。

(1) 1次調査

調査地点は、II区のSD45・SD159・SD159の東壁・I区のSI85、IV区SK184の東壁の5地点である。

a) II区

SD45地点：弥生時代末～庄内式併行期の大溝であり、環濠の可能性が考えられている。試料は、溝埋積物中部・下部（センションベルト6層・東壁12層）の2層準より採取された。

SD159地点：飛鳥時代の溝である。試料は堆積物下部の4・6層の2層準より採取された。

SD159の東壁：SD159の上位に堆積する遺物包含層の断面が観察された地点である。試料は鎌倉・室町時代の水田と考えられる10・13層、飛鳥時代の水田層と考えられる15層より採取された。

b) I区

SI85地点：飛鳥時代の住居内の造り付けカマドである。試料はカマド内の土壤1点である。

c) IV区

SK184の東壁：試料は、飛鳥時代の溝埋積物とその地盤となっている堆積層および遺構を覆う堆積物から採取された。

(2) 2次調査

本調査では、弥生時代の溝、弥生時代末期～古墳時代初頭の大溝、掘立柱建物跡、古墳時代～

表1 川辺遺跡の分析試料表

調査次	地区	遺構名	試料番号	層位	試料番号	(当社にて観察した土質を示す)	備考		植物 珪藻 花粉	分析項目
							柱頭	柱底		
1 次調査	II区	SD45	セクショングレート6層	1	にぶい黄褐色砂質粘土	弥生時代末～庄内式土器併行期の大溝			●	●
	II区	S185	東壁	12層	2	にぶい黄褐色砂質粘土			●	●
	II区	SD159の東壁	カマド内	3	にぶい黄褐色砂質粘土	飛鳥時代の造り付けカマド内の埋土			●	●
	II区	SD159の東壁	10層	4	オリーブ黒色シルト質粘土	鍛冶・塗町時代層			●	●
	II区	SD159の東壁	13層	5	灰色シルト質粘土	飛鳥時代層			●	●
	II区	SD159の東壁	15層	6	灰色シルト質粘土	飛鳥時代の大溝			●	●
	II区	SD159の東壁	4層	7	灰色シルト質粘土	飛鳥時代の溝			●	●
	II区	SD159の東壁	6層	8	灰色シルト質粘土	飛鳥時代の溝			●	●
	IV区	SK184東壁	10層	9	灰色シルト質粘土	飛鳥時代の包含層			●	●
	IV区	SD A層	10	10	灰色シルト質粘土	飛鳥時代の溝			●	●
2 次調査	SD E層	11	11	灰色シルト質粘土	飛鳥時代の溝				●	●
	試7層	12	オリーブ黄褐色シルト質粘土	縄文時代層					●	●
	試8層	13	オリーブ黄色シルト質粘土	縄文時代層					●	●
	I区	SK114	4層	1	灰黄色シルト	奈良時代の土壤			●	●
	II区	SD45	1層	2	黄灰色シルト	弥生時代末～庄内式土器併行期の大溝			●	●
	II区	SD58	2層	3	黄灰色シルト				●	●
	II区	SD159	4層	4	黄灰色シルト				●	●
	II区	SD146	5層	5	黄灰色粘土質砂	SD45とはほぼ同時期の大溝			●	●
	II区	SD151	4層	6	にぶい黄褐色粘土質砂	弥生時代の溝			●	●
	II区	SD154	2層	7	灰色シルト	奈良時代の溝			●	●
3 次調査	II区	SD158	4層	9	灰色砂質シルト	6世紀代の溝			●	●
	III区	SD237	2層	10	暗灰黄色砂岩質シルト	6世紀代の溝			●	●
	III区	SD237	1層	1	黄灰色砂岩質シルト	8世紀の溝			●	●
	III区	SD238	2層	2	黄灰色シルト質砂				●	●
	III区	SD238	4層	3	黄灰色シルト質砂				●	●
	III区	SD238	6層	4	灰色砂泥じりシルト	8世紀の溝			●	●
	III区	SD238	8層	5	オリーブ灰色シルト質砂				●	●
	III区	SD238	11層	6	オリーブ灰色細粒一中粒砂				●	●
	VII区	南壁No.46	3層	9	暗灰黄色シルト質砂	江戸時代			●	●
	VII区	南壁No.46	4層	①	にぶい黄褐色シルト混じり砂	江戸時代			●	●
4 次調査	VII区	南壁No.46	4層	②	暗灰黄色砂混じりシルト	鍛冶時代			●	●
	VII区	南壁No.46	4層	③	黄褐色粘土混じりシルト	古墳時代			●	●
	VII区	南壁No.46	27層	④	黄褐色砂質シルト	鍛冶時代			●	●
	VII区	南壁No.46	26層	⑤	黒褐色粘土混じりシルト	古墳時代			●	●
	VII区	南壁No.46	25層	⑥	黒褐色砂質シルト	弥生時代			●	●
	VII区	南壁No.46	30層	⑦	黒褐色砂質シルト	縄文時代			●	●
	VII区	南壁No.46	31層	⑧	黒褐色砂質シルト	縄文時代			●	●
	VII区	南壁No.46	31層	⑨	オリーブ褐色粘土混じりシルト	縄文時代			●	●
	VII区	南壁No.46	31層	⑩	にぶい黄褐色砂質シルト	縄文時代甕棺臺			●	●
	VII区	南壁No.46	31層	⑪	暗灰黄色シルト質砂	縄文時代甕棺臺			●	●
5 次調査	VII区	SX501	ベース土	⑫	暗褐色シルト混じり砂	縄文時代甕棺臺			●	●
	VII区	SX01	埋土	⑬	にぶい黄褐色シルト混じり砂	縄文時代甕棺臺			●	●
	IX区	S101	ベース土	⑭	にぶい黄褐色シルト質砂	弥生時代の堅穴住居			●	●
	IX区	S101	中層	⑮	褐色砂	弥生時代の堅穴住居			●	●

平安時代の溝、鎌倉時代～現代にかけての溝と水田、奈良時代～平安時代の溝などの多数の遺構が検出されている。調査地点は、これら遺構を中心として設定された、I区SK114、II区SD45・SD58・SD159・SD146・SD151・SD154・SD158地点、III区SD237・SD238地点である。各調査区・地点別に試料について述べる。

a) I区

SK114地点：奈良時代の土壌である。試料は、土壌埋積物下部の4層より採取された。

b) II区

SD45地点：II区より続く弥生時代末～庄内式土器併行期の大溝であり、環濠の可能性が考えられている。試料は溝埋積物下部から上部にかけて、7・4・2・1層より層位試料として採取された。

SD58地点：弥生時代末～庄内式土器併行期の溝である。試料は、溝埋積物下部の7層より採取された。

SD159地点：弥生時代末の溝である。試料は、溝埋積物最下部の5層より採取された。

SD146地点：奈良時代の溝である。試料は、溝埋積物下部の4層より採取された。

SD151地点：6世紀世の溝である。試料は溝埋積物下部の2層より採取された。

SD154地点：6世紀世の溝である。試料は溝埋積物最下部の4層より採取された。

SD158地点：6世紀世の溝である。試料は溝埋積物中部の2層より採取された。

c) III区

SD237地点：8世紀の溝であり、道路の側溝の可能性が考えられている。試料は溝埋積物下部～上部の9・4・2・1層より採取された。

SD238地点：8世紀の溝であり、道路の側溝の可能性が考えられている。試料は溝埋積物下部～上部の11・6・4・3層より採取された。

(3) 4次調査

調査地点は、VII区南壁地点、VIII区SX501地点、VIII区SX01地点、IX区SI01地点である。各調査区・地点別に試料について述べる。

1) VII区

南壁地点：本調査区の基本層序に相当する地点である。試料は、縄文時代晩期～江戸時代の遺物包含層を中心に、31・30・25・26・27・4・4'・3層より採取された。

2) VIII区

SX501地点：縄文時代晩期の甕棺墓である。試料は甕棺墓内埋積物と墓壙の底面より採取された土壌である。

3) VIII区

S X01地点：縄文時代晩期の甕棺墓である。試料は甕棺墓内埋積物と墓壙の底面より採取された土壌である。

4) IX区

S I 01地点：弥生時代中期後葉の堅穴住居址である。試料は住居埋積物（覆土）の下部・中部より採取された。

2. 分析方法

(1) 珪藻分析

試料を湿重約10 g 秤量し、過酸化水素水 (H_2O_2) と塩酸 (HCL) で加熱処理して試料の泥化と有機物の分解・漂白を行う。分散剤を加え蒸留水で満たし、自然沈降法で上澄み液中に浮遊した粘土分を除去し、珪藻殻の濃縮を行う。傾斜法で試料中に含まれる砂を除去する。検鏡し易い濃度に希釈した後、充分攪拌しマイクロピペットで適当量計り取りカバーガラス上に滴下・乾燥する。乾燥後、プリユーラックスで封入してプレパラートを作製する。

検鏡は、光学顕微鏡（油浸1000倍）で任意の測線に沿って珪藻殻が半分以上残存するものを対象に200個体以上同定・計数を行う（珪藻化石の少ない試料はこの限りでない）。珪藻の分類は、K. Krammer & Lange-Bertalot (1986・1988・1991) の分類を参考とする。また、珪藻の生態性に関する解説を表2に示す。

(2) 花粉分析

湿重約10 g の試料について、フッ化水素 (HF) 処理、重液分離 ($ZnBr_2$: 比重2.2)、篩別、アセトトリシス処理、水酸化カリウム (10% KOH) 処理の順に物理・化学処理を施して、花粉・胞子化石を分離・濃集する。処理後の残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製した後、光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査しながら、出現する全ての種類の同定・計数を行う。また、産出するイネ科花粉についてはノマルスキー微分干渉装置を使用し、花粉の表面模様を観察し、発芽孔の形態・大きさなどを考慮しながら栽培種のイネ属と他のイネ科に区分する。

結果は同定・計数結果の一覧表と花粉化石群集の層位分布図として表示する。図中の出現率は、木本花粉が木本花粉総数、草本花粉・シダ類胞子が総花粉・胞子数より不明花粉を除いた数を基数として百分率で算出する。なお、複数の種類をハイフオンで結んだものは、種類間の区別が困難なものである。また、木本花粉か草本花粉か判断できない種類（クワ科・バラ科）は草本花粉として表示してある。

(3) 植物珪酸体分析

分析は、近藤・佐瀬 (1986) の方法を参考にした。湿重3 g 前後の試料について、過酸化水素水 (H_2O_2)・塩酸 (HCL) 処理、超音波処理 (70W、250kHz、1分間)、沈定法、重液分離法（ポ

表 2 珪藻の生態分類

塩分濃度に対する区分		塩分に対する適応性	生育環境(例)
海水生種： 強塩生種 (Polyhalobous) 真塩生種 (Euhalobous)	塩分濃度40.0‰以上に出現するもの 海産生種、塩分濃度40.0~30.0‰に出現するもの	低緯度熱帯海域、塩水湖など	一般海域 (ex 大陸棚及び大陸棚以深の海域)
汽水生種： 中塩生種 (Mesohalobous)	汽水生種、塩分濃度30.0~0.5‰に出現するもの	強中塩生種 (α -Mesohalobous) 弱中塩生種 (β -Mesohalobous)	河口・内湾・沿岸・塩水湖・潟など
淡水生種： 貧塩生種 (Oligohalobous)	淡水生種、塩分濃度0.5‰以下に出現するもの	一般陸水域 (ex 湖沼・池・沼・河川・川・沼沢地・泉)	
塩分・pH・流水に対する区分		塩分・pH・流水に対する適応性	
塩分に対する適応性 貧塩-好塩性種 (Halophilous) 貧塩-不定性種 (Indifferent) 貧塩-嫌塩性種 (Halophobous)	小量の塩分がある方がよく生育するもの 小量の塩分があってもこれによく耐えることができるものの 小量の塩分にも耐えることができないもの	高塩類域 (塩水湖上域・温泉・耕作土壤) 一般陸水域 (湖沼・池・沼・河川・沼沢地など)	湿原・湿地・沼沶地
pHに対する適応性 広域塩性種 (Euryhalinous)	低濃度から高濃度まで広い範囲の塩分濃度に適応して出現するもの	一般淡水~汽水域	
pHに対する適応性 真酸性種 (Acidobiontic)	pH7.0以下に出現、特にpH5.5以下の酸性水域で最もよく生育するもの	湿原・湿地・水口湖 (酸性水域)	
pHに対する適応性 好酸性種 (Acidophilous)	pH7.0付近に出現、pH7.0以下の水域で最もよく生育するもの	湿原・湿地・沼沶地	
pH-不定性種 (Indifferent)	pH7.0付近の中性水域で最もよく生育するもの	一般淡水 (ex 湖沼・池沼・河川)	
pHに対する適応性 好アルカリ性種 (Alkaliphilous)	pH7.0付近以上の水域で最もよく生育するもの	アルカリ性水域 (少ない)	
真アルカリ性種 (Alkalibiotic)	特にpH8.5以上のアルカリ性水域で最も良く出現するもの	流入水のない湖沼・池沼	
流水に対する適応性 真止水性種 (Limnophilous)	止水にのみ出現するもの	湖沼・池沼・流れの穏やかな川	
好止水性種 (Limnophilous)	止水に特徴的であるが、流水にも出現するもの	河川・川・池沼・湖沼	
流水に対する適応性 好流水性種 (Rheophilous)	止水にも流水に普通に出現するもの	河川・川・小川・上流域	
真流水性種 (Rheobiontic)	流水に特徴的であるが、止水にも出現するもの	河川・川・流れの速い川・溪流・上流域	
陸生珪藻 好気性種 (Aerophilous)	流水域にのみ出現するもの 好気的環境 (Aerial habitats) 水質以外の常に大気に曝された特殊な環境に生育する珪藻の一群で 少の湿り気と光さえあれば、土壤表面やコケの表面に生育可能 特に、土壤中に生育する陸生珪藻を陸生珪藻といふ	・土壤表面中や土壤に生えたコケに付着 ・木の根元や幹に生えたコケに付着 ・濡れた岩の表面やそれに生えたコケに付着 ・滝の飛沫で湿ったコケや石垣・岩上のコケに付着 ・洞窟入口や内部の照明の当たった所に生えたコケに付着	

註 塩分に対する区分は、Lowe (1974)、pHと流水に対する区分は、Hustedt (1973-38) による。

リタンジウム・ステン酸ナトリウム：比重2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これを検鏡し易い濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥する。乾燥後、プリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、近藤・佐瀬（1986）の分類に基づいて同定・計数する。

結果は、同定・計数結果の一覧表と植物珪酸体組成の層位分布図として示す。各種類の出現率は、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体の各珪酸体毎にそれぞれの総数を基数とする百分率で求める。なお、検出個数が短細胞珪酸体で200個未満、機動細胞珪酸体で100個未満の試料は組成が歪曲する恐れがあるため、植物珪酸体組成を求めず出現した種類を+で示すに止める。

3. 結果

3-1. 硅藻化石

結果を表3～5、図1・2に示す。各地点・遺構別に結果について以下に記載する。

(1) II区 S D 45

硅藻化石はほとんど産出しない。

(2) I区 S I 85

硅藻化石はほとんど産出しない。

(3) II区 S D 159の東壁面

硅藻化石はほとんど産出しない。

(4) II区 S D 159

硅藻化石は比較的多産したが、硅藻殻の保存度は約37%と悪い。硅藻化石群集は陸生硅藻の種群が卓越する。多産種は、*Hantzschia amphioxys*, *Navicula mutica* である。水生硅藻では、*Gomphonema angustatum*, *Gomphonema parvulum*などの流水不定性種や、*Eunotia pectinalis* var. *undulata*, *E.monodon* var. *undulata*等の好湿地性種が産出する。

(5) IV区 S K184の東壁

分析を行ったいずれの層準でも硅藻化石はほとんど産出しない。

(6) I区 S K114

硅藻化石の産出数は少ない。わずかに産出した硅藻化石の種群はほとんどが陸生硅藻の種群である。

(7) II区 S D 45

硅藻化石の産出数は少なく、1層・7層（試料番号2・5）では全く産出しない。わずかに産

表3 II区SD45・SD159・SD159の東壁、I区SI85、IV区SK184の東壁各地点の珪藻分析結果

Species Name	Ecology															
	H.R.	pH	C.R.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
Achnanthes crenulata Grunow	Ogh-hil	al-il	ind	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-
Achnanthes inflata Kuetzing	Ogh-ind	al-il	r-ph	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
· Amphora normanii Rabenhorst	Ogh-ind	al-il	ind	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
Amphora ovalis var. affinis(Kuetz.)V.Heurck	Ogh-ind	al-il	ind	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
Amphora pediculus(Kuetz.)Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
Aulacosira italica(Ehr.)Simonsen	Ogh-ind	al-il	l-ph	-	-	-	-	-	-	4	1	-	-	-	-	-
Caloneis cf.bacillum(Gun.)Mereshkowsky	Ogh-ind	al-il	r-ph	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-
Caloneis lauta Carter & Bailey-Watts	Ogh-ind	ind	ind	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
· Caloneis leptosom Krammer & Lange-Bertalot	Ogh-ind	ind	ind	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-
Cymbella cuspidata Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
Cymbella minuta Hilse ex Rabh.	Ogh-ind	ind	r-ph	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
Cymbella tumida(Breb.)V.Heurck	Ogh-ind	al-il	l-ph	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
Cymbella turgidula Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
cymbella turgidula var.nipponica Skvortzow	Ogh-ind	al-il	r-bi	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
Diploneis ovalis(Hilse)cleve	Ogh-ind	al-il	ind	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-
Epithemia cf.turgida(Ehr.)Kuetzing	Ogh-ind	al-il	l-ph	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
· Eunotia biseriatoides H.Kobayasi	Ogh-hob	ac-il	ind	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
Eunotia monodon var.undulata Cleve	Ogh-hob	ac-il	ind	-	-	-	-	-	-	3	-	-	-	-	-	-
Eunotia pectinalis var.undulata(Rafts)Rabenhorst	Ogh-hob	ac-il	ind	-	-	-	-	-	-	6	1	-	-	-	-	-
· Eunotia praerupta Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	ind	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
· Eunotia praerupta var.bidens Grunow	Ogh-hob	ac-il	ind	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-
Eunotia tenella(Grun.)Hustedt	Ogh-hob	ac-il	ind	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
Eunotia sp.	Ogh-unk	unk	unk	-	1	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-
Fragilaria vaucheriae(Kuetz.)Petersen	Ogh-ind	al-il	ind	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
Gomphonema acuminatum Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	l-ph	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
Gomphonema angustum Agardh	Ogh-ind	al-il	ind	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-
Gomphonema augustatum(Kuetz.)Rabenhorst	Ogh-ind	al-il	ind	-	-	-	-	-	-	4	-	-	-	-	-	-
Gomphonema clevei Fricke	Ogh-ind	al-il	r-ph	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-
Gomphonema parvulum Kuetzing	Ogh-ind	al-il	r-ph	-	-	-	-	-	-	7	-	-	-	-	-	-
Gomphonema sumatorense Fricke	Ogh-ind	ind	ind	-	-	-	-	-	-	1	2	-	-	-	-	-
Gomphonema sp.	Ogh-unk	unk	unk	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
Gomphonema spp.	Ogh-unk	unk	unk	-	-	-	-	-	-	3	-	-	-	-	-	-
· Hantzschia amphioxys(Ehr.)Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	-	1	-	-	-	-	15	-	-	-	-	-	-
· Navicula contenta Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
Navicula cuspidata Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
Navicula laevissima Kuetzing	Ogh-ind	ac-il	ind	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
· Navicula mutica Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	-	-	-	-	-	-	12	1	-	-	-	-	-
Navicula plausibilis Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-
Navicula pupula Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	-	-	-	-	-	-	3	-	-	-	-	-	-
Nitzschia parvula Lewis	Ogh-hil	al-il	ind	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
· Pinnularia borealis var.rectangularis Carlson	Ogh-ind	ind	ind	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
Pinnularia divergens W.Smith	Ogh-hob	ac-il	l-ph	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
Pinnularia gibba Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
· Pinnularia schoederi(Hust.)Krammer	Ogh-ind	ind	ind	-	-	-	-	-	-	4	-	-	-	-	-	-
Pinnularia viridis(Nitz.)Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	ind	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
Pinnularia spp.	Ogh-unk	unk	unk	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
Rhoicosphenia abbreviata(Ag.)Lange-Bertalot	Ogh-hil	al-il	ind	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
Stauroneis anceps Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-
Stauroneis nobilis Schumann	Ogh-hob	ac-il	ind	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
Stauroneis phoenictron var.signata Meister	Ogh-ind	ind	ind	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-
Stauroneis tenera Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
Stauroneis spp.	Ogh-unk	unk	unk	-	-	-	-	-	-	3	-	-	-	-	-	-
Synedra ulna(Kuetz.)Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	ind	-	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-
Marine Water Species				0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Marine to Brackish Water Species				0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Brackish Water Species				0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Fresh Water Species				1	2	1	0	0	1	101	20	0	0	0	0	0
Total Number of Diatoms				1	2	1	0	0	1	101	20	0	0	0	0	0

凡例

H.R. : 塩分濃度に対する適応性	pH : 水素イオン濃度に対する適応性	C.R. : 流水に対する適応性
Ogh-hil : 貧塩好塩性種	al-bi : 真アルカリ性種	l-bi : 真止水性種
Ogh-ind : 貧塩不定性種	al-il : 好アルカリ性種	l-ph : 好止水性種
Ogh-hob : 貧塩嫌塩性種	ind : pH不定性種	ind : 流水不定性種
Ogh-unk : 貧塩不明種	ac-il : 好酸性種	r-ph : 好流水性種
	ac-bi : 真酸性種	r-bi : 真流水性種
	unk : pH不明種	unk : 流水不明種

環境指標種群
〔・〕：陸生珪藻（伊藤・堀内、1991）

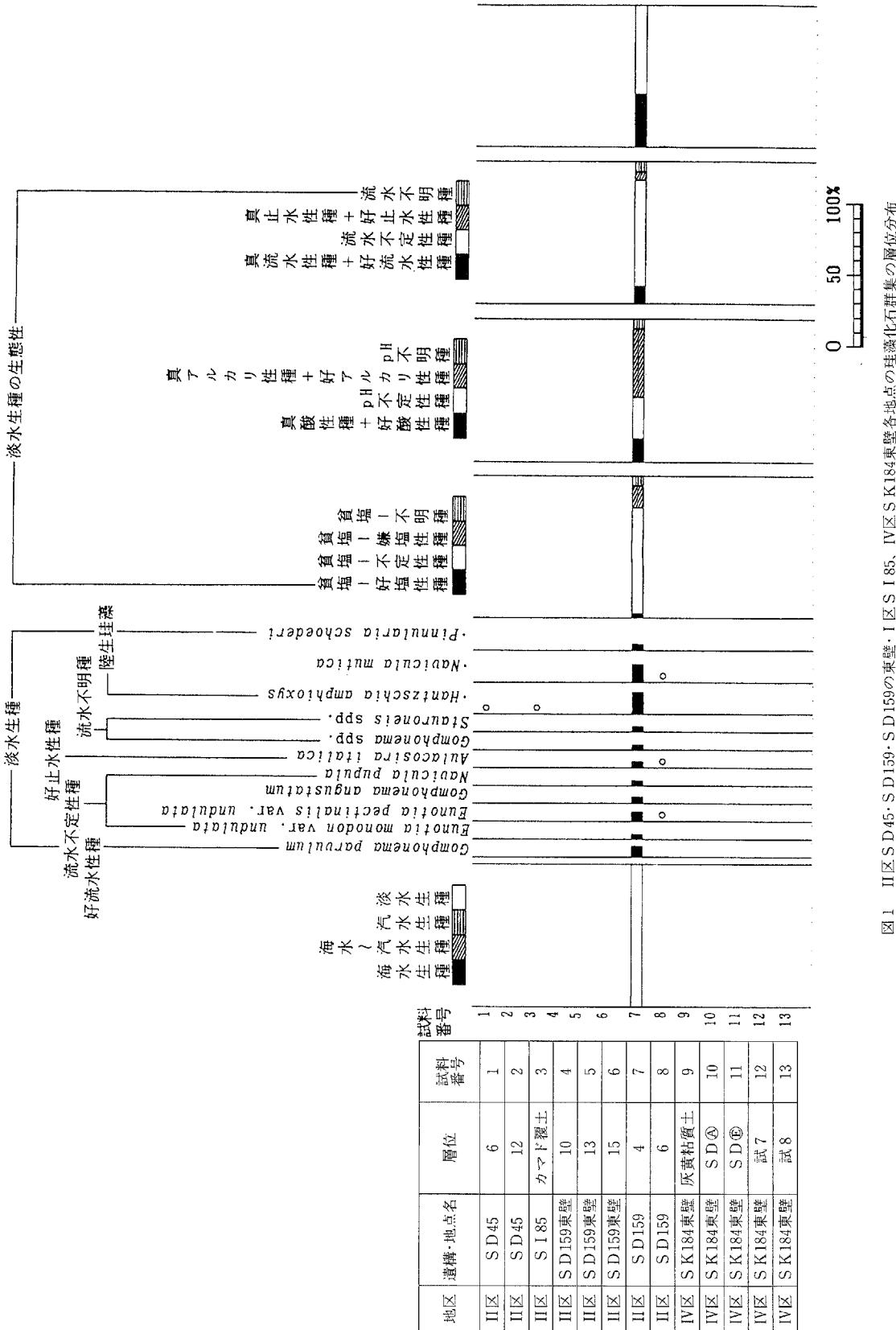


図1 II区 S D45・S D159・S K184東壁・I区 S I85・IV区 S K184東壁各地点の珪藻化石群集の層位分布

表4 I区SK114、II区SD45・SD58・SD159・SD146・SD151・SD154各地点の珪藻分析結果

Species Name	Ecology												
	H.R.	pH	C.R.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
Grammatophora oceanica(Ehr.)Grunow	Euh			2	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Achnanthes lanceolata(Breb.)Grunow	Ogh-ind	al-il	r-ph	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
Aulacosira italica(Ehr.)Simonsen	Ogh-ind	al-il		-	-	-	-	-	1	2	-	-	-
· Caloneis leptosoma Krammer & Lange-Bertalot	Ogh-ind	ind	ind	-	-	-	-	-	3	1	-	-	-
Coconecis placentula(Ehr.)Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-
* * Cocconeis placentula var.euglypta(Ehr.)Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
* * Cymbella aspera(Ehr.)Cleve	Ogh-ind	ind	ind	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-
* * Cymbella sinuata Gregory	Ogh-ind	al-il	ind	-	-	-	-	-	2	-	1	-	-
* * Cymbella tumida(Breb.)V.Hurck	Ogh-ind	al-il	l-ph	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
* * Cymbella turgidula Grunow	Ogh-ind	al-il	r-ph	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
Eunotia mondon var.undulata Cleve	Ogh-hob	ac-il	ind	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
Eunotia pectinalis var.undulata(Ralfs)Rabenhorst	Ogh-hob	ac-il	ind	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
· Eunotia pracrpta Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	ind	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
Gomphonema angustum Agardh	Ogh-ind	al-il	ind	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-
Gomphonema angustum(Kuetz.)Rabenhorst	Ogh-ind	al-il	ind	-	-	-	-	-	2	1	-	-	-
Gomphonema clavatum Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	ind	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-
Gomphonema gracile Ehrenberg	Ogh-ind	al-bi	l-ph	-	-	-	-	-	3	-	-	-	-
Gomphonema parvulum Kuetzing	Ogh-ind	al-il	r-ph	-	-	-	-	-	5	-	-	-	-
Gomphonema sumatorense Fricke	Ogh-ind	ind	ind	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
Gomphonema cf.sumatorense Fricke	Ogh-ind	ind	ind	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
· Hantzschia amphioxys(Ehr.)Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	40	-	3	2	-	23	6	-	-	-
· Hantzschia amphioxys var.capitata O.Muller	Ogh-ind	al-il	ind	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
* * Navicula confervacea(Kuetz.)Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-
* * Navicula contenta Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-
* Navicula cuspidata Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	-	-	-	3	-	-	-	-	-	-
· Navicula kotschy Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
Navicula laevissima Kuetzing	Ogh-ind	ac-il	ind	-	-	-	-	-	3	-	-	-	-
Navicula mobiliensis var.minor Patrick	Ogh-unk	unk	unk	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
· * Navicula mutica Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	10	-	-	-	-	13	13	-	-	-
Navicula plausibilis Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	-	-	-	-	-	3	-	-	-	-
* Navicula pupula Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-
Navicula spp.	Ogh-unk	unk	unk	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
· Neidium alpinum Hustedt	Ogh-unk	unk	unk	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
Nitzschia brevissima Grunow	Ogh-unk	unk	unk	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
· Pinnularia borealis var.rectangularis Carlson	Ogh-ind	ind	ind	-	-	-	-	-	3	-	-	-	-
Pinnularia gibba Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-
* Pinnularia interrupta W.Smith	Ogh-ind	ind	ind	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
Pinnularia nodosa Ehrenberg	Ogh-ind	ac-il	ind	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
· Pinnularia schroederi(Hust.)Krammer	Ogh-ind	ind	ind	-	-	-	-	-	9	7	-	2	-
Pinnularia viridis(Nitz.)Ehrenberg	Ogh-hob	ac-il	ind	-	-	-	-	-	6	-	-	-	-
Pinnularia sp.	Ogh-unk	unk	unk	-	-	-	-	-	1	1	-	-	-
Rhopalodia gibberula(Ehr.)O.Muller	Ogh-hil	al-hil	ind	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
Stauroneis anceps Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	1	-	-	-	-	1	-	-	-	-
Stauroneis tenera Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	1	-	-	-	-	2	-	-	-	-
Synedra ulna(Kuetz.)Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	ind	-	-	-	2	-	-	-	-	2	-
Marine Water Species				2	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Marine to Brackish Water Species				0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Brackish Water Species				0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Fresh Water Species				55	0	3	7	0	0	102	37	0	6
Total Number of Diatoms				57	0	3	7	0	0	102	37	0	6

凡例

H.R. : 塩分濃度に対する適応性	pH : 水素イオン濃度に対する適応性	C.R. : 流水に対する適応性
Euh : 海水性種	al-bi : 真アルカリ性種	l-bi : 真止水性種
Ogh-hil : 貧塩好塩性種	al-il : 好アルカリ性種	l-ph : 好止水性種
Ogh-ind : 貧塩不定性種	ind : pH不定性種	ind : 流水不定性種
Ogh-hob : 貧塩嫌塩性種	ac-il : 好酸性種	r-ph : 好流水性種
Ogh-unk : 貧塩不明種	ac-bi : 真酸性種	r-bi : 真流水性種
	unk : pH不明種	unk : 流水不明種

環境指標種群

(-) : 陸生珪藻 (伊藤・堀内、1991)
 * : 好汚濁性種 * * 好清水性種 (以上は渡辺ほか、1985)

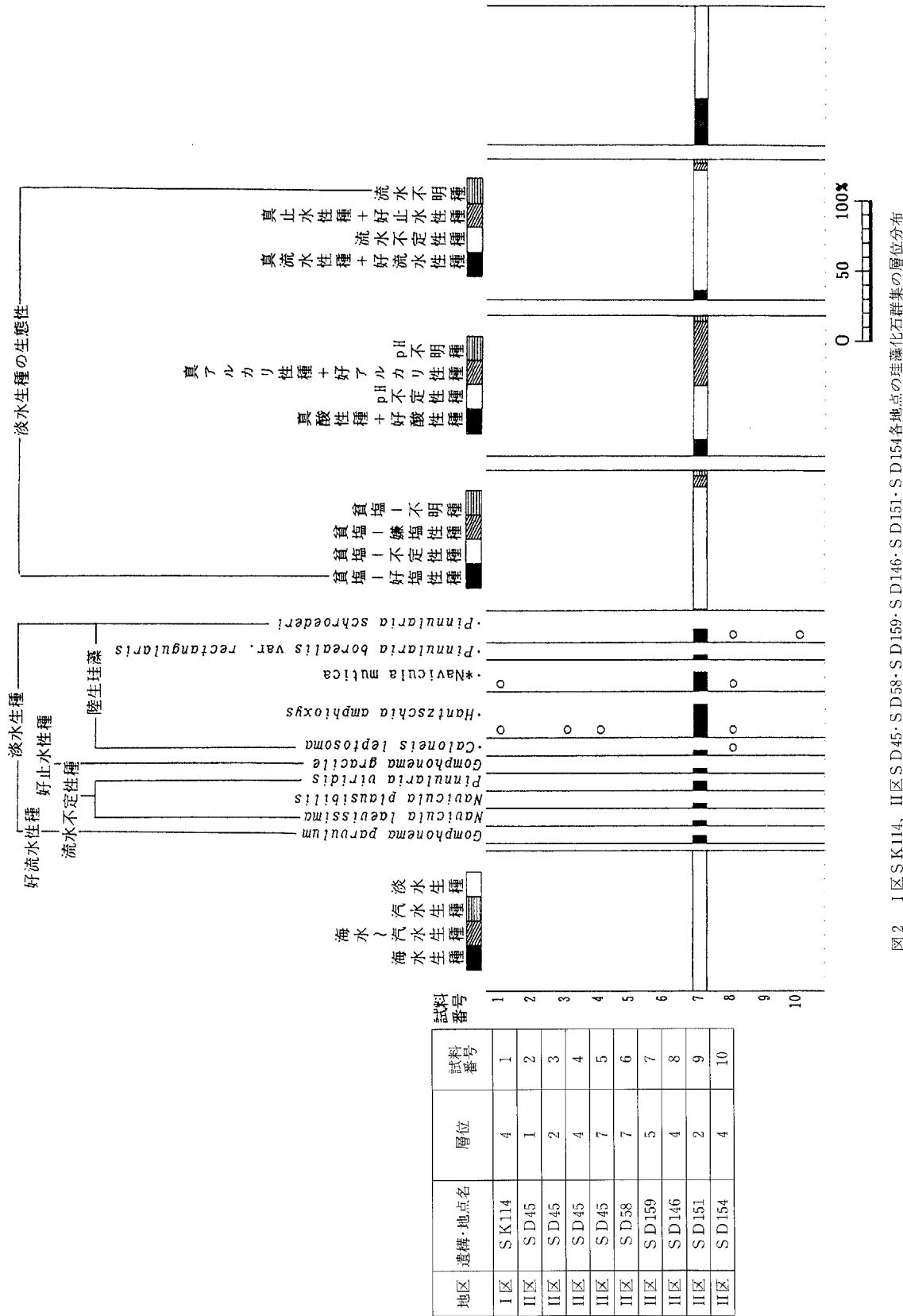


図2 I区SK114、II区SD45、SD58-S D159、S D146-S D151-S D154各地点の珪藻化石群集の層位分布

表5 I区SD158、III区SD237・SD238各地点の珪藻分析結果

Species Name	Ecology			SD158			SD237			SD238		
	H.R.	pH	C.R.	1層 2層	2層 3層	4層 5層	9層 5層	3層 6層	4層 7層	6層 8層	7層 8層	1層 9層
Biddulphia sp.	Euh			-	-	-	-	-	-	-	-	-
Diploreis intertropica (Kuetz.) Cleve	Euh-Meh			-	-	-	-	-	-	-	-	-
#Achnanthus cremlata Grunow	Ogh-hil	a-L-il	ind	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Amphora ovalis var. affinis (Kuetz.) V. Heurck	Ogh-ind	a-L-il	ind	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Caloneis leptosoma Krammer & Lange-Bertalot	Ogh-ind	a-L-il	ind	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Cocconeis Placentula (Ehr.) Cleve	Ogh-ind	Ogh-ind	Ogh-ind	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Cocconeis placenta var. euglypta (Ehr.) Cleve	Ogh-ind	a-L-il	Ogh-ind	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Cymbella leptoceros (Ehr.) Grunow	Ogh-ind	a-L-il	Ogh-ind	-	-	-	-	-	-	-	-	-
##Cymbella turgida Grunow	Ogh-ind	a-L-il	Ogh-ind	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Cymbella spp.	Ogh-unk	unk	unk	-	-	-	-	-	-	-	-	-
##Diatoma hiemale var. mesodon (Ehr.) Grunow	Ogh-ind	a-c-il	r-ph	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Diploneis ovalis (Giles) Cleve	Ogh-ind	a-L-il	ind	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Eunotia incisa W. Smith ex Gregory	Ogh-hob	a-c-il	ind	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Eunotia pectinalis var. minor (Kuetz.) Rabenhorst	Ogh-hob	a-c-il	ind	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Eunotia spp.	Ogh-unk	unk	unk	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Gomphonema acuminatum Ehrenberg	Ogh-ind	a-L-il	1-ph	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Gomphonema angustissimum (Kuetz.) Rabenhorst	Ogh-ind	a-L-il	ind	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Gomphonema cleveri Fricke	Ogh-ind	a-L-il	ind	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Gomphonema olivaceoides Hustedt	Ogh-ind	a-L-il	ind	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Gomphonema spp.	Ogh-unk	unk	unk	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Hantzschia amphioxys (Ehr.) Grunow	Ogh-ind	a-L-il	ind	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Melosira roesearia Rabenhorst	Ogh-ind	Ogh-ind	ind	-	-	-	-	-	-	-	-	-
#Navicula mutica Kuetzing	Ogh-ind	Ogh-ind	ind	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Navicula plausible Hustedt	Ogh-ind	Ogh-ind	ind	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Pinnularia Schroederi (Hust.) Kramer	Ogh-ind	Ogh-ind	ind	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Pinnularia viridis (Nitz.) Ehrenberg	Ogh-hob	a-c-il	ind	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Suriella ovaria Kuetzing	Ogh-unk	unk	unk	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Syndra ulna (Kuetz.) Ehrenberg	Ogh-ind	a-L-il	r-ph	-	-	-	-	-	-	-	-	-
#Tabellaria fenestrata (Lyngb.) Kuetzing	Ogh-hob	a-c-il	ind	-	-	-	-	-	-	-	-	-
Marine Water Species				0	0	0	0	0	0	1	0	0
Marine to Brackish Water Species				0	0	0	0	0	0	1	0	0
Brackish Water Species				0	0	0	0	0	0	0	0	0
Fresh Water Species				4	0	0	0	0	6	21	13	2
Total Number of Diatoms				4	0	0	0	0	6	23	13	2
凡例												
H.R. : 塩分濃度に対する適応性	pH : 水素イオン濃度に対する適応性											
Euh : 海水性種	C.R. : 流水に対する適応性											
Euh-Meh : 海水生種 -汽水生種	1-bi : 真アルカリ性種											
Meh : 汽水生種	a-L-il : 好アルカリ性種											
Ogh-hil : 貧塩好塩性種	ind : pH不定性種											
Ogh-ind : 貧塩不塩性種	r-ph : 好酸性種											
Ogh-hob : 貧塩嫌塩性種	r-bi : 嘘酸性種											
Ogh-unk : 貧塩不明種	unk : pH不明種											
# : 好汚水性種	# : 好滑水性種											
△ : 隆生珪藻	○ : 好汚水性種											

出した珪藻化石の種群はほとんどが陸生珪藻の種群である。

(8) II区 S D58

珪藻化石は全く産出しない。

(9) II区 S D159 (5層：試料番号7)

珪藻化石は比較的多産するが、珪藻殻の保存度は35%と低い(図2)。珪藻化石群集は陸生珪藻の種群が卓越しており、その出現率は全体の50%以上を占める。これに次いで流水不定性種が多産する。陸生珪藻の種群では *Hantzschia amphioxys*, *Navicula mutica*, *Pinnularia schroederi* が比較的多産する。流水不定性種では *Pinnularia viridis*, *Navicula laevissima*, *N. plausibilis* の産状が目立つ。

(10) II区 S D146

珪藻化石はほとんど産出しない。わずかに産出する種群はほとんどが陸生珪藻である。

(11) II区 S D151

珪藻化石は全く産出しない。

(12) II区 S D154

珪藻化石はほとんど産出しない。産出する種群のほとんどが陸生珪藻の種群である。

(13) II区 S D158

珪藻化石はほとんど産出しない。

(14) III区 S D 2 3 7

珪藻化石はほとんど産出しない。

(15) III区 S D 2 3 8

珪藻化石はほとんど産出しない。

3-2. 花粉化石

結果を表6～9、図3～5に示す。各地点・遺構別に結果について以下に記載する。

(1) II区 S D45 (セクションベルト 6層・東壁12層・試料番号1・2)

6層・12層とも花粉化石の保存状態が悪く、コウヤマキ属・ハンノキ属・イネ科などがわずかに出現するだけである。

(2) I区 S I 85 (カマド覆土：試料番号3)

花粉化石の保存状態は悪く、スギ属・アカガシ亜属・イネ科・ヨモギ属などがわずかに出現するだけである。

(3) II区 S D159の東壁 (10・13・15層：試料4・5・6)

10層以外の層準からは花粉化石が良好に出現する。花粉化石群集は15層では総花粉・胞子の中

表6 II区SD45・SD159・SD159の東壁、I区SL85、IV区SK184の東壁各地点の花粉分析結果

種類(Taxa)	試料番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
木本花粉														
マキ属	—	—	—	—	—	1	4	4	2	2	2	—	—	—
モミ属	—	—	—	—	—	3	5	2	2	—	2	—	—	—
ツガ属	—	—	—	1	2	7	2	8	4	7	1	—	—	1
マツ属複数管束垣腐	—	1	—	4	7	15	16	2	5	15	4	—	—	1
マツ属(不明)	—	—	—	1	—	—	—	—	—	2	—	—	—	—
コウヤマキ属	1	—	7	8	29	17	24	75	26	27	6	1	2	—
スギ属	—	—	—	5	68	52	21	8	56	18	4	—	—	—
イチイ科—イヌカヤ科—ヒノキ科	—	1	—	—	12	29	9	—	12	2	—	—	—	—
ヤマモモ属	—	—	—	3	10	3	2	5	6	2	1	—	—	—
クルミ属	—	—	—	—	—	1	1	—	—	1	—	—	—	—
クマシテ属—アサダ属	—	—	—	3	5	5	8	3	8	5	—	—	—	—
カバノキ属	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—
ハンノキ属	1	—	—	—	—	1	—	4	1	—	—	—	—	—
ブナ	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—
イスズナ	—	—	—	1	4	—	1	1	2	—	—	—	—	—
コナラ属コナラ属	—	—	—	10	20	17	15	8	7	5	1	1	—	—
コナラ属アカガシ属	—	1	1	16	150	88	33	61	116	64	6	—	—	—
クリ属	—	—	—	—	8	2	1	—	3	—	—	—	—	—
シノキ属	—	—	—	5	31	25	17	4	49	33	1	1	—	—
ニレ属—ケヤキ属	—	—	—	—	2	1	1	2	—	2	—	—	—	—
エノキ属—ムクノキ属	—	—	—	—	2	4	1	2	7	4	—	—	—	—
カラスザンショウ属	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3	—	—	—	—
ユズリハ属	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—
アカメガシワ属	—	—	—	—	—	—	—	2	—	1	—	—	—	—
モチノキ属	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1	—	—	—	—
カエデ属	—	—	—	—	—	1	—	—	—	2	—	—	—	—
トチノキ属	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—
アドウ属	—	—	—	—	—	2	1	1	1	1	2	—	—	—
ノブドウ属	—	—	—	—	—	—	—	—	—	17	—	—	—	—
グミ属	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—
ウコギ科	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—
ミズキ属	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—
スイカズラ属	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—
ニシキギ属近似種	—	—	—	—	—	1	—	1	—	—	—	—	—	—
ティカズラ属	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—
草本花粉														
ガマ属	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—
ミクリ属	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—
サジオモダカ属	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
オモダカ属	—	—	—	1	2	28	—	—	6	2	—	—	—	—
スプタ属	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—
イネ科	1	2	11	33	61	201	21	42	68	33	7	—	—	1
カヤツリグサ科	—	—	—	6	14	19	9	19	30	12	—	—	—	—
ツユクサ属	—	—	—	—	1	14	—	—	3	1	—	—	—	—
ミズアオイ属	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—
クワ科	—	—	—	—	—	2	—	—	1	1	—	—	—	—
ミチヤナギ節	—	—	—	1	1	1	1	8	1	1	—	—	—	—
サナエタテ節—ウナギツカミ節	—	—	—	1	1	1	1	1	—	—	—	—	—	—
ソバ属	—	—	—	—	1	2	2	—	1	6	9	1	—	—
アカザ科	—	—	—	1	2	2	—	1	—	2	—	—	—	—
ヒユ科	—	—	—	—	—	2	—	1	—	2	—	—	—	—
ナデシコ科	—	—	—	1	3	2	—	2	2	6	1	—	—	—
キンボウゲ科	—	—	—	—	5	3	1	2	3	—	—	—	—	—
アブラナ科	—	—	—	4	—	1	—	—	1	2	—	—	—	—
バラ科	—	—	—	—	1	5	—	—	—	1	—	—	—	—
マメ科	—	—	—	—	—	—	2	—	—	1	—	—	—	—
フウロソウ属	—	—	—	1	3	2	—	1	—	—	—	—	—	—
キシングサ属	—	—	—	—	1	—	—	1	—	—	—	—	—	—
ミズエキシナシ属	—	—	—	—	—	1	—	1	—	—	—	—	—	—
セリ科	—	—	—	2	7	9	4	2	8	11	—	—	—	—
ヒルガオ属	—	—	—	—	—	1	—	1	—	—	—	—	—	—
ネナシカズラ属	—	—	—	—	—	1	—	2	—	—	—	—	—	—
イヌコウジュ属	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—
シソ科	—	—	—	—	—	—	1	2	—	—	—	—	—	—
オオバコ属	—	—	—	—	1	1	1	—	—	—	—	—	—	—
ヤエムグラ属—アカネ属	—	—	—	—	—	1	—	—	—	4	—	—	—	—
ホタルブクロ属	—	—	—	—	—	—	2	—	—	—	—	—	—	—
ナス科	—	—	3	9	34	103	535	35	27	306	130	—	—	—
ヨモギ科	—	—	—	—	—	2	—	—	1	2	—	—	—	—
オナモミ属	—	—	—	2	1	7	36	2	4	8	2	—	—	—
他のキク亜科	—	—	—	1	2	2	14	1	—	4	2	—	—	—
タンポポ亜科	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
不明花粉	—	—	—	24	92	42	55	36	44	50	5	—	—	—
シダ類胞子	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—
ミズワラビ属	—	—	—	1	1	1	—	—	—	—	—	—	—	—
サンショウモ	24	16	32	68	22	38	127	367	21	175	9	22	24	—
他のシダ類胞子	24	16	32	68	22	38	127	367	21	175	9	22	24	—
Botryococcus	—	—	—	2	7	—	—	—	—	—	—	—	—	—
合計	2	4	9	57	360	278	163	192	308	215	26	3	4	—
木本花粉	1	2	14	62	143	408	634	124	161	407	143	0	1	—
草本花粉	0	0	0	24	92	42	55	36	44	50	5	0	0	0
不明花粉	24	16	32	69	23	39	127	367	22	175	9	22	24	—
シダ類胞子	27	22	55	212	618	767	979	719	535	847	183	25	29	—

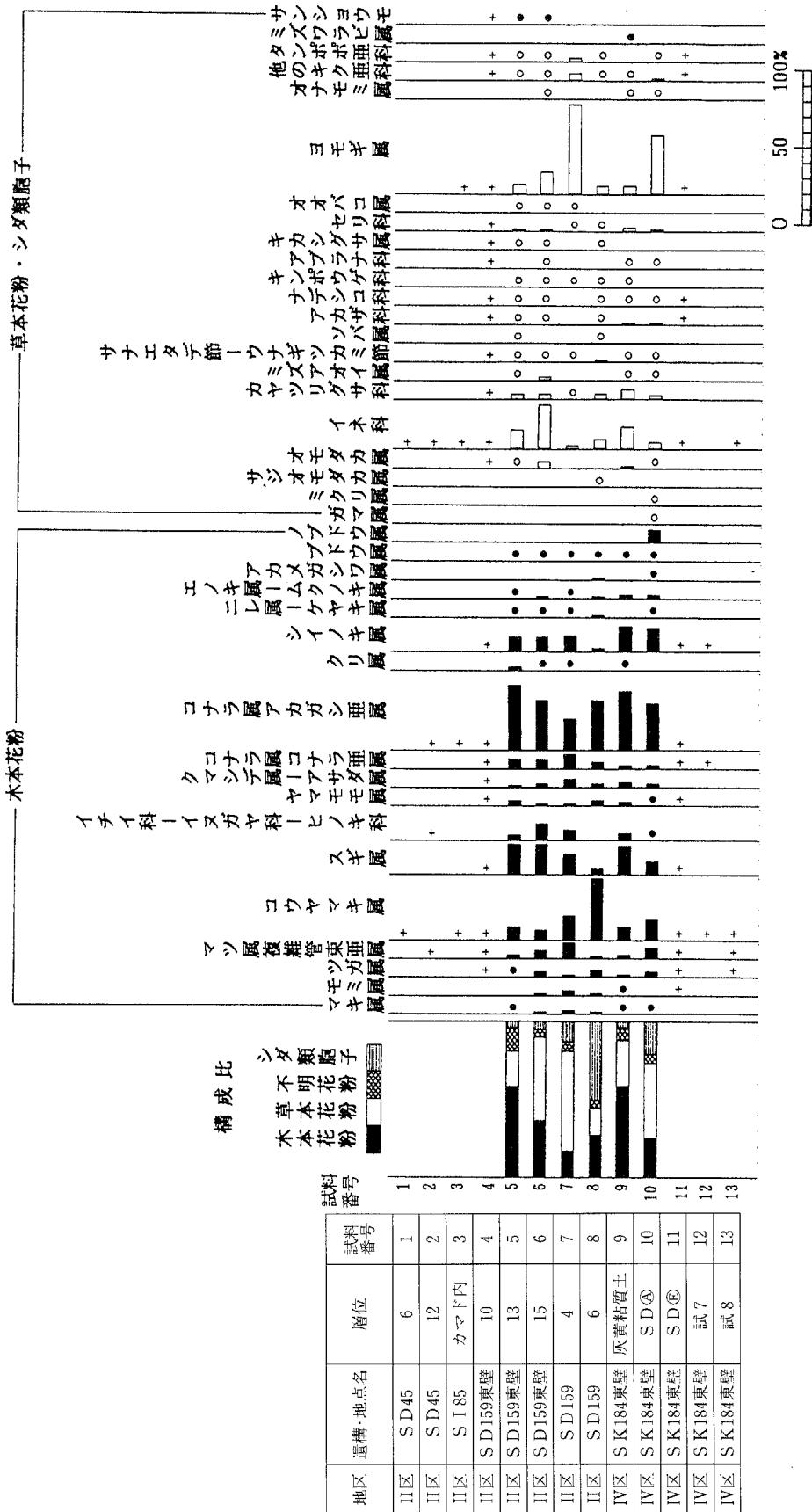


図3 II区SD45-SD159, SD159-東壁、I区S185、IV区SK184東壁各地点の花粉化石群集の層位分布出現率は、木本花粉・木本花粉総数、草本花粉・シダ類胞子が総数から不明花粉を除いた数を基数として百分率で算出した。○●は1%未満、+は花粉化石の保存が悪い試料で出現した種類を示す。

表7 I区SK114、II区SD45・SD58・SD159・SD146・SD151・SD154各地点の花粉分析結果

種類(Taxa)	試料番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
木本花粉											
マキ属	—	—	—	—	—	—	—	1	2	—	—
モミ属	—	—	—	—	—	—	3	—	—	—	—
ツガ属	—	—	—	—	—	—	3	4	4	—	—
マツ属複維管束亞属	—	—	—	40	—	—	3	12	15	—	—
コウヤマキ属	2	—	1	2	2	—	10	16	9	1	—
スギ属	1	—	—	1	—	1	4	25	15	—	—
イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科	—	—	—	—	—	—	—	3	17	—	—
ヤナギ属	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—
ヤマモモ属	—	—	—	1	—	—	—	1	3	—	—
クマシデ属—アサダ属	—	—	—	1	—	—	6	—	4	—	—
ハシバミ属	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
カバノキ属	—	—	—	—	—	—	—	1	1	—	—
ハンノキ属	—	—	1	—	—	—	—	2	—	—	—
ブナ属	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—
コナラ属コナラ亜属	1	—	—	3	—	—	4	8	3	—	—
コナラ属アカガシ亜属	2	—	—	5	3	1	14	28	46	3	—
シイノキ属	—	—	—	—	—	—	11	22	23	2	—
ニレ属—ケヤキ属	—	—	—	1	—	—	—	1	1	—	—
エノキ属—ムクノキ属	—	—	—	3	—	—	1	—	1	—	—
モチノキ属	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—
ニシキギ属	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—
カエデ属	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—
ブドウ属	—	—	—	—	—	—	5	22	2	1	—
ノブドウ属	—	—	—	—	—	—	1	2	1	—	—
シナノキ属	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—
エゴノキ属	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—
ティカカズラ属	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—
草本花粉											
ガマ属	—	—	—	—	—	—	—	72	—	—	—
イネ科	14	2	1	69	4	—	25	16	80	3	—
カヤツリグサ科	—	—	—	8	—	—	—	6	4	—	—
ツユクサ属	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—
ユリ科近似種	—	—	—	—	—	—	4	—	—	—	—
クワ科	—	—	—	—	—	—	—	—	338	—	—
ギシギシ属	—	—	—	—	—	—	2	—	—	—	—
サナエタデ節—ウナギソカミ節	—	—	—	—	—	—	1	1	—	—	—
ソバ属	—	—	1	18	—	—	—	—	—	—	—
アカザ科	—	—	—	13	—	—	40	2	8	—	—
ナデシコ科	—	—	—	5	—	—	—	1	1	—	—
キンポウゲ科	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—
アブラナ科	—	—	—	9	—	—	7	—	—	—	—
バラ科	—	—	—	—	—	—	—	1	1	—	—
マメ科	—	—	—	—	1	—	—	1	4	—	—
フウロソウ属	—	—	—	1	—	—	—	2	1	—	—
セリ科	—	—	—	16	—	—	2	1	4	—	—
オオバコ属	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—
ヨモギ属	10	4	1	13	7	—	230	413	428	13	—
オナモミ属	—	—	—	—	—	—	—	—	9	—	—
他のキク亜科	1	—	—	2	1	—	3	7	61	—	—
タンポポ亜科	—	—	—	26	3	—	2	7	7	—	—
不明花粉											
シダ類胞子	—	1	—	9	6	—	31	52	30	—	—
シダ類胞子	9	8	43	82	81	1	91	127	34	43	—
合計											
木本花粉	7	0	4	57	6	2	68	150	147	7	—
草本花粉	25	6	3	180	15	0	318	533	944	16	—
不明花粉	0	1	0	9	6	0	31	52	30	0	—
シダ類胞子	9	8	43	82	81	1	91	127	34	43	—
総花粉・胞子	41	15	50	328	108	3	508	862	1155	66	—

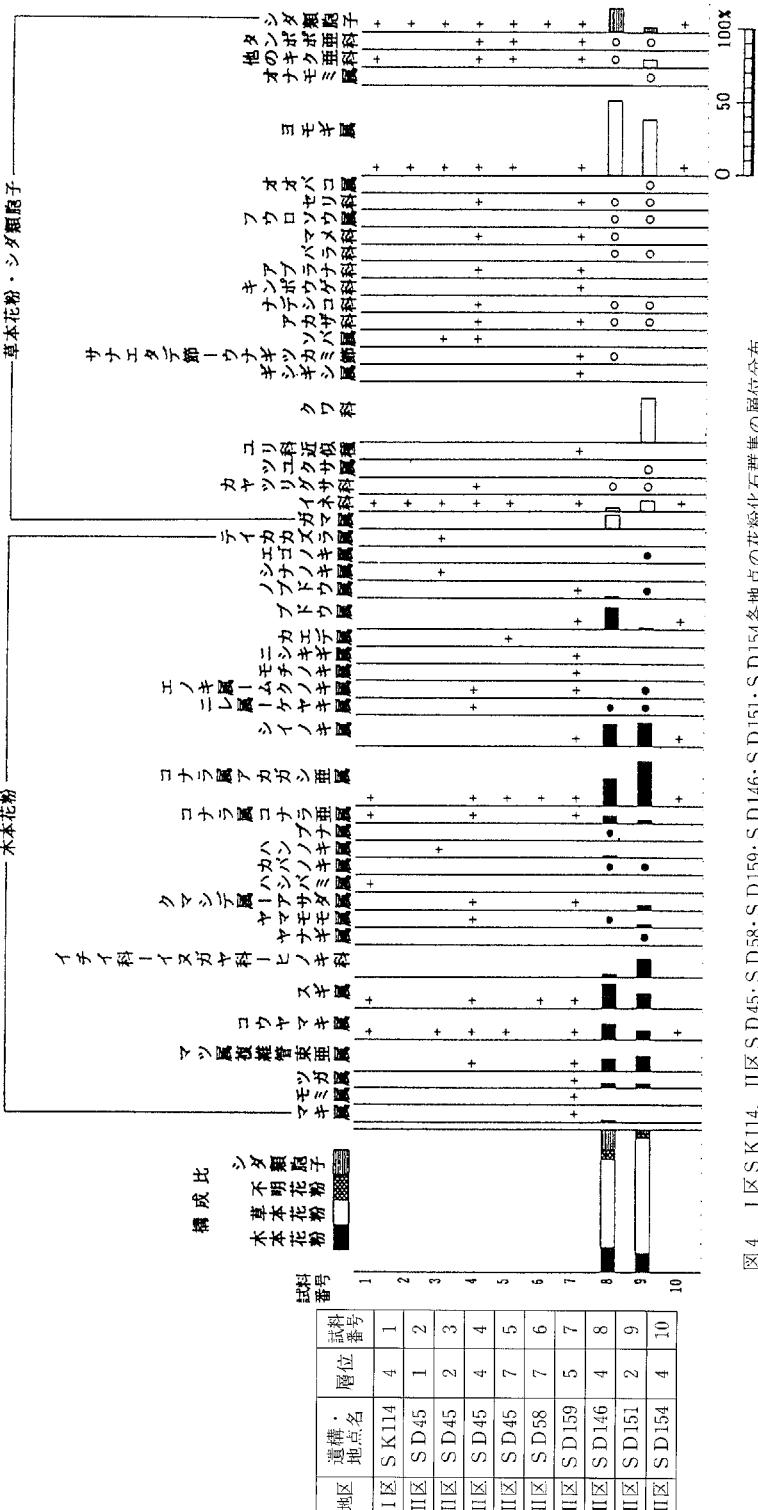


図4 I区SK114、II区SD45・SD58・SD159・SD146・SD151・SD154各地点の花粉化石群集の層位分布
で算出した。○●は1%未満、+は花粉化石の保存が悪い試料で出現した種類を示す。

表8 II区SD158、III区SD237・SD238各地点の花粉分析結果

種類(Taxa)	遺構名 層名 試料番号	SD158 2層 1	SD237				SD238			
			1層 2	2層 3	4層 4	9層 5	3層 6	4層 7	6層 8	11層 9
木本花粉										
マキ属		2	..	1	-	-	-	-	-	1
モミ属		6	-	1	-	-	1	-	-	-
ツガ属		5	2	1	2	-	2	-	-	7
マツ属		23	5	5	1	-	4	-	-	2
コウヤマキ属		7	3	1	3	-	5	-	-	9
スギ属		41	13	9	5	-	1	-	-	-
イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科		-	2	2	1	-	-	-	-	-
ヤマモモ属		6	4	4	3	-	6	-	-	3
サワグルミ属		2	1	1	-	-	1	-	-	-
クルミ属		-	-	-	1	-	-	-	-	-
クマシデ属		2	8	12	3	-	10	2	1	4
ハンノキ属		1	1	-	-	-	3	-	-	-
ブナ属		1	2	2	-	-	-	-	-	-
コナラ属コナラ亜属		7	15	16	11	-	3	1	1	4
コナラ属アカガシ亜属		66	103	123	97	1	118	15	6	70
クリ属—イノキ属		64	63	57	45	-	25	2	1	20
ニレ属—ケヤキ属		3	2	2	1	1	1	-	-	1
エノキ属—ムクノキ属		-	2	1	-	-	3	-	-	2
カラスザンショウ属		-	-	1	-	-	-	-	-	-
モチノキ属		-	-	-	-	-	-	-	-	1
ニシキギ属		-	-	-	3	-	-	-	-	2
カエデ属		-	-	-	-	-	1	-	-	-
クロウメモドキ科近似種		-	-	-	-	-	-	-	-	-
ブドウ属		3	1	1	3	-	2	-	-	1
ノブドウ属		1	-	-	-	-	-	-	-	2
ツタ属		-	-	-	-	-	1	-	-	1
グミ属		-	1	3	-	-	1	-	-	-
ウコギ科		-	1	-	-	-	1	-	-	1
ハイノキ属		-	-	-	-	-	2	-	-	-
ナボタノキ属		-	-	6	4	-	8	-	-	12
ガマズミ属近似種		-	-	1	-	-	1	-	-	-
草本花粉										
オモダカ属		-	1	2	5	-	-	-	-	4
イネ科		52	85	121	55	-	48	9	7	57
カヤツリグサ科		5	4	5	3	-	-	-	-	3
ミズアオイ属		-	-	1	-	-	-	-	-	-
ツユクサ属		-	-	1	-	-	-	-	-	-
クワ科		-	1	5	-	-	1	-	-	1
ギシギシ属		4	-	-	-	-	-	-	-	-
サダエタデ節—ウナギツカミ節		5	-	1	-	-	2	-	-	4
タデ節		-	-	1	-	-	-	-	-	2
ソバ属		-	-	2	-	-	9	-	-	2
アカザ科		14	6	7	8	-	1	-	1	3
ナデシコ科		8	-	1	1	-	4	-	-	9
キンポウゲ科		3	1	2	7	-	4	-	1	4
タケニグサ属		-	1	-	-	-	-	-	-	-
アブラナ科		-	5	9	5	-	1	1	1	-
バラ科		-	1	4	4	-	3	-	-	3
マメ科		1	-	-	-	-	1	-	-	-
フウロソウ属		-	-	-	-	-	-	-	-	2
キカシグサ属		-	2	1	1	-	-	-	-	-
セリ科		8	8	12	4	-	1	-	-	1
オオバコ属		4	-	-	-	-	1	-	-	1
ヤエムグラ属—アカネ属		-	-	1	-	-	-	-	-	-
オミナエシ属		-	-	-	-	-	1	-	-	-
ヨモギ属		607	25	29	23	-	12	4	1	50
オナモミ属		2	-	2	-	-	-	-	-	-
他のキク亜科		16	1	12	8	-	5	-	-	1
タンボポ亜科		4	6	2	6	-	2	-	1	3
不明花粉		43	21	42	22	-	17	3	3	30
シダ類胞子		165	14	61	29	-	154	39	42	565
合計										
木本花粉		240	229	250	183	2	200	20	9	143
草本花粉		734	147	221	130	0	96	14	12	150
不明花粉		43	21	42	22	0	17	3	3	30
シダ類胞子		165	14	61	29	0	154	39	42	565
総花粉・胞子		1182	411	574	364	2	467	76	66	888

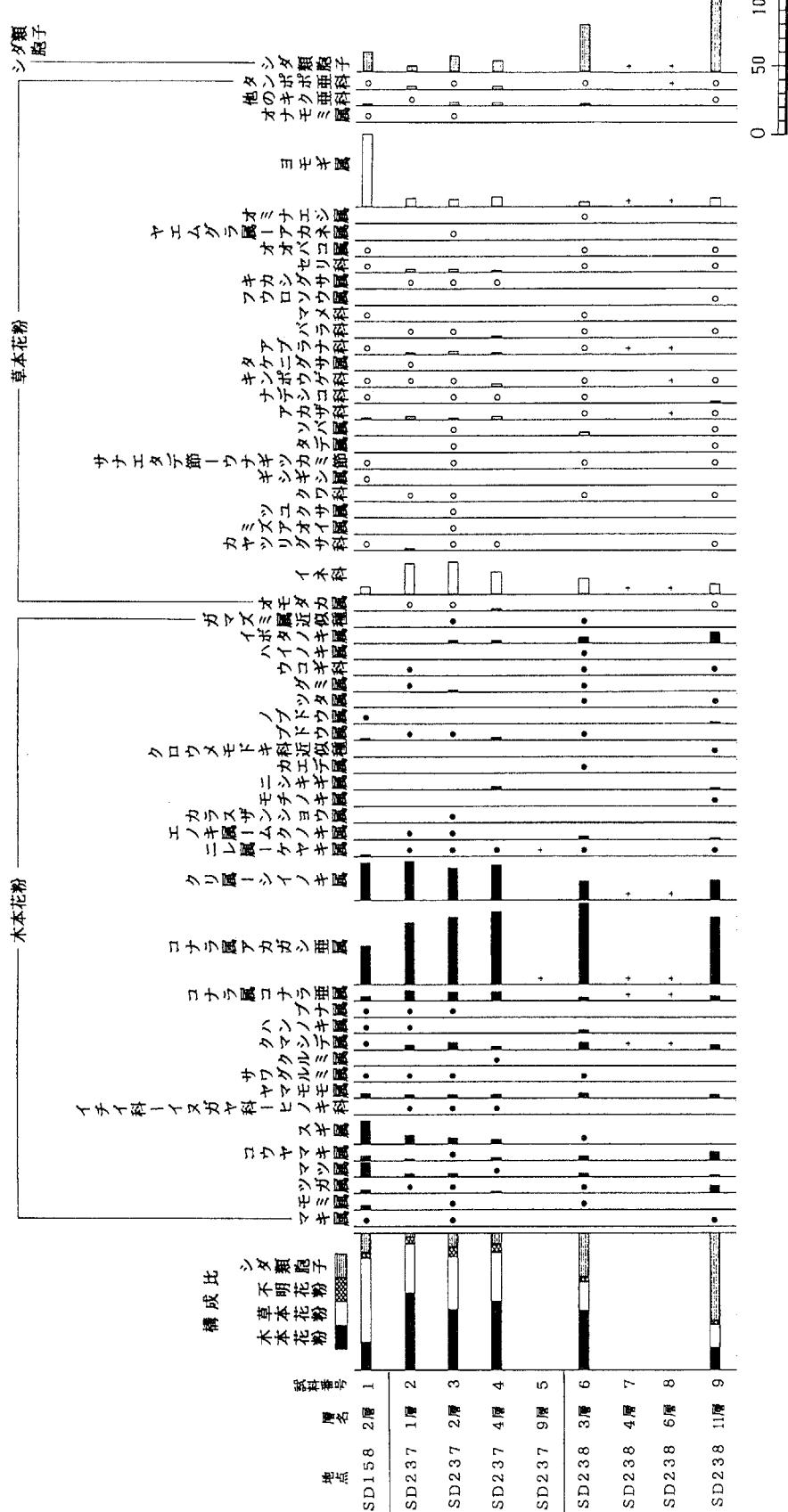


図5 I区SD158、III区SD237・SD238各地点の花粉化石群集の層位分布
出現率は、木本花粉が木本花粉総数、草本花粉・シダ類胞子が総数から不明花粉を除いた数を基数として百分率で算出した。○●は1%未満、+は花粉化石の保存が悪い試料で出現した種類を示す。

表9 VII区南壁、VIII区SX501、VIII区SX01、IX区SI01各地点の花粉分析結果

種類(Taxa)	地 区 遺構名 層名 試料番号	B 南壁No.46				⑤ ⑥				⑦ ⑧				⑨ ⑩				SX501 埋土ベース土 ⑪				SX01 埋土ベース土 ⑫				SI01 中層 ⑬					
		①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	⑯	⑰	⑱	⑲	㉑	㉒	㉓	㉔	㉕	㉖	㉗	㉘	㉙	㉚	㉛
木本花粉 モミ属 マツ属	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
草本花粉 ヨモギ属	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
不明花粉 シダ類胞子 シダ類胞子	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
合計	3	3	4	2	4	1	2	1	2	1	1	2	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
木本花粉 草本花粉 不明花粉 シダ類胞子 総花粉・胞子	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

表10 II区SD45・SD159・SD159東壁、I区SI85、W区SK184東壁各地点の植物珪酸体分析結果

種類(Taxa)	試料番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
イネ科葉部短細胞珪酸体 イネ族イネ属	6	4	27	27	6	13	18	27	—	—	5	—	—	56
イネ族マコモ属	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
キビ族ヒエ属	—	—	11	—	—	—	—	3	—	—	—	—	—	—
キビ族チカラシバ属	10	9	2	12	7	5	8	—	—	—	3	2	3	—
タケ亜科ヤダケ属	2	3	—	1	2	1	1	—	—	—	1	—	—	—
ヨシ属	3	3	—	3	3	2	2	1	2	—	—	—	—	—
ウシクサ族コアナグサ属	1	5	2	1	2	5	2	—	—	—	1	1	1	4
ウシクサ族ススキ属	6	6	32	12	7	1	2	5	—	—	1	1	—	—
ウシクサ族	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
イチゴツナギ亞科オオムギ族	32	28	8	27	15	30	46	—	—	—	3	2	2	—
イチゴツナギ亞科カラスムギ族	—	—	—	1	2	1	1	—	—	—	—	—	—	—
イチゴツナギ亞科ウシヌカグサ族	4	5	2	3	2	4	9	1	2	—	—	—	—	—
ジユズダマ族	2	—	1	—	1	1	—	—	—	—	—	—	—	—
不明	—	1	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—
検出箇数	66	64	88	89	52	57	72	98	31	12	9	62	10	—

で草本花粉が占める割合が高く、13層では木本花粉の占める割合が高い。木本花粉の組成は両層で類似する。アカガシ亜属が高率に出現し、次いでスギ属が多産する。このほかコウヤマキ属、ヤマモモ属、コナラ亜属、シイノキ属などを伴う。草本花粉・シダ類胞子ではイネ科・ヨモギ属が多産し、オオバコ属、水生植物のオモダカ属・ミズアオイ属などを伴う。13層からは栽培種のソバ属が出現する。

(4) II区 S D159 (4・6層：試料番号7・8)

花粉化石は両層から多産する。化石の保存状態は4層では良好であるが、6層では産出する花粉化石の外膜がやや分解を受けて薄くなっている。

6層（試料番号8）の花粉化石群集は、木本花粉ではコウヤマキ属とアカガシ亜属が高率に出現し、スギ属・コナラ亜属・シイノキ属・クマシテ属ーアサダ属・ヤマモモ属などを伴う。草本花粉・シダ類胞子では種類不詳のシダ類胞子が多産する。草本花粉ではイネ科、ヨモギ属、栽培種のソバ属が低率に出現する。

4層（試料番号7）の花粉化石群集は、木本花粉ではコウヤマキ属、スギ属、アカガシ亜属が多産し、イチイ科ーイヌガヤ科ーヒノキ科、コナラ亜属、シイノキ属などを伴う。草本花粉・シダ類胞子では、ヨモギ属が非常に高い出現率を示す。

(5) IV区 S K184東壁（試料番号9～13）

花粉化石は試料番号9・10では良好に産出する。試料番号11～13では少なく、保存状態が悪い。花粉化石群集は、試料番号9では草本花粉が占める割合が高く、試料番号10では木本花粉が占める割合が高い。両層とも木本花粉群集の組成は類似しており、アカガシ亜属が高率に出現し、次いでコウヤマキ属、スギ属、シイノキ属が多産する。このうちスギ属は増加傾向を示す。草本花粉・シダ類胞子は、試料番号10ではヨモギ属が高率に出現し、シダ類胞子がこれに次ぐ。試料番号9ではイネ科、カヤツリグサ科などが出現する。

(6) I区 S K114 (第4層：試料番号1)

花粉化石の保存状態は悪く、コウヤマキ属・スギ属・コナラ亜属・アカガシ亜属・イネ科・ヨモギ属などがわずかに産出する。

(7) II区 S D45 (1・2・4・7層：試料番号2・3・4・5)

花粉化石は分析を行った全層準で少なく、特に1・2・4層では少ない。産出する化石の保存状態も悪い。試料番号4では、マツ属複維管束亜属、コナラ亜属・アカガシ亜属・エノキ属ームクノキ属などが出現する。草本花粉ではイネ科、アカザ科、セリ科、ヨモギ属、タンポポ亜科が出現する。なお、試料番号3・4からソバ属がわずかであるが出現する。

(8) II区 S D58 (第7層：試料番号6)

花粉化石の保存状態は悪く、スギ属・アカガシ亜属などがわずかに出現する。

(9) II区 S D159 (5層：試料番号7)

花粉化石の産出は少ないながら多くの種類が認められる。木本花粉ではアカガシ亜属、シイノキ属、コウヤマキ属、コナラ亜属、クマシデ属—アサダ属、マツ属複維管束亜属、ブドウ属、ノブドウ属、草本花粉ではヨモギ属、アカザ科・イネ科などが出る。

(10) II区 S D146 (4層：試料番号8)

花粉化石は良好に出現する。花粉化石群集は草本花粉が優占する。木本花粉ではコウヤマキ属、アカガシ亜属・シイノキ属・ブドウ属が多産し、マツ属複維管束亜属、コナラ亜属、ノブドウ属などを伴う。草本花粉ではヨモギ属が優占し、ガマ属・イネ科などを伴う。

(11) II区 S D151 (2層：試料番号9)

花粉化石は良好に産出する。花粉化石群集では草本花粉が優占する。木本花粉ではアカガシ亜属が最も多産し、次いでマツ属複維管束亜属、イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科、コウヤマキ属、スギ属、シイノキ属、コナラ亜属・ブドウ属、ノブドウ属などを伴う。草本花粉ではヨモギ属が高率に出現する。草本・木本の区別がつかないクワ科も高率に出現する。

(12) II区 S D154 (第4層：試料番号10)

花粉化石の保存状態は悪く、アカガシ亜属・シイノキ属・ヨモギ属などがわずかに出現する。

(13) II区 S D158 (2層：試料番号1)

花粉化石は良好に出現する。花粉化石群集は草本花粉が高率を占める。木本花粉では、アカガシ亜属・クリ属—シイノキ属が多産し、マツ属・スギ属・コナラ属コナラ亜属、ヤマモモ属、ブドウ属・ノブドウ属などを伴う。草本花粉ではヨモギ属が高率に出現し、イネ科、カヤツリグサ科、アカザ科、セリ科、オオバコ属などを伴う。

(14) III区 S D237 (1・2・4・9層：試料番号2・3・4・5)

花粉化石は9層以外の層準で良好に出現する。1・2・4層の花粉化石群集は類似しており、木本花粉ではアカガシ亜属が高率に出現し、次いでクリ属—シイノキ属が多産する。この他、スギ属、ヤマモモ属、コナラ亜属、ブドウ属、イボタノキ属などを随伴ないし稀に伴う。草本花粉ではイネ科が多産し、カヤツリグサ科・アブラナ科・セリ科・ヨモギ属、水生植物のオモダカ属、ミズアオイ属、キカシクグサ属、栽培種のソバ属などを随伴ないし稀に伴う。

(15) III区 S D238 (3・4・6・11層：試料番号6・7・8・9)

花粉化石は3・11層から良好に出現するが、4・6層では保存状態が悪く、化石数も少ない。3層・11層の花粉化石群集はほぼ類似する。木本花粉ではアカガシ亜属が優占し、クリ属—シイノキ属、ヤマモモ属・ツタ属・イボタノキ属などを伴う。草本花粉ではイネ科、ヨモギ属、ソバ属、ナデシコ科、オオバコ属、水生植物のオモダカ属などを随伴ないし稀に伴う。

(16) VII区南壁No.46

花粉化石は少なく、化石の保存状態は著しく悪い。

(17) VIII区 S X 501

花粉化石は少なく、化石の保存状態は著しく悪い。

(18) VIII区 S X 01

花粉化石は少なく、化石の保存状態は著しく悪い。

(19) IX区 S I 01

花粉化石は少なく、化石の保存状態は著しく悪い。

3 - 3. 植物珪酸体

結果を表8～11と図6～9に示す。イネ科葉部起源の植物珪酸体はほとんどの試料で多産する。保存状態は、短細胞珪酸体では良好であるが、機動細胞珪酸体ではその表面に多数の小孔（溶食痕）が生じているものが認められる。以下に各地点別に結果について記載する。

(1) II区 S D 45 (セクションベルト 6層・東壁 12層：試料番号1・2)

植物珪酸体の総産出数は少ない。産出する種類はオオムギ族、栽培種のイネ属、挺水植物のヨシ属などであり、この中ではオオムギ族が多い。

(2) I区 S I 85 (カマド覆土：試料番号3)

植物珪酸体の総産出数は少ない。イネ属やススキ属の葉・稈の組織片が認められる。この他にメダケ属・コブナグサ属・ヒエ属なども出現する。

(3) II区 S D 159 東壁 (10・13・15層：試料番号4・5・6)

植物珪酸体はいずれの試料でも産出数が少ない。オオムギ族、イネ属などが出現する。

(4) II区 S D 159 (4・6層：試料番号7・8)

植物珪酸体の総産出数は少ない。オオムギ族、イネ属、ヨシ属、ススキ属、メダケ属などが出 現し、その中ではオオムギ族が多い。

(5) IV区 S K 184 東壁 (試料番号9～13)

植物珪酸体の総産出数はいずれの層準も少ない。試料番号12ではイネ属の葉の組織片が認められる。

(6) I区 S K 114 (4層：試料番号1)

植物珪酸体組成は、短細胞珪酸体でイチゴツナギ亜科が優占し、オオムギ族が多産する。機動細胞珪酸体では栽培種のイネ属が多産し、タケ亜科を伴う。

(7) II区 S D 45 (1・2・4・7層：試料番号2・3・4・5)

植物珪酸体組成は両珪酸体でタケ亜科が多産し、短細胞珪酸体でイチゴツナギ亜科が多産する。このうち、タケ亜科は上位に向けて減少傾向を示す。栽培種のイネ属はほぼ全層準から出現し、

表11 I区SK114、II区SD45・SD48・SD159・SD146・SD151・SD154各地点の植物珪酸体分析結果

種類(Taxa)	試料番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
イネ科葉部短細胞珪酸体											
イネ族イネ属		3	2	—	2	1	—	—	1	—	1
イネ族		9	—	—	6	2	—	—	3	—	1
キビ族		4	3	7	5	2	1	13	2	7	14
タケ亜科		27	27	70	53	36	75	74	119	38	148
ヨシ属		3	5	6	3	1	3	9	9	3	3
ウシクサ族		6	21	6	7	5	8	6	14	13	5
イチゴツナギ亞科オオムギ族		52	27	26	6	9	3	15	11	30	20
イチゴツナギ亞科		146	113	74	75	41	62	134	81	122	60
不明		11	108	23	29	13	30	61	122	66	50
イネ科葉身機動細胞珪酸体											
イネ族イネ属		59	20	42	401	39	8	3	4	19	12
イネ族		61	27	30	117	70	20	12	13	32	17
タケ亜科		25	52	50	54	98	141	71	51	67	125
ヨシ属		1	—	—	—	—	—	—	—	—	—
ウシクサ族		56	49	26	32	18	13	16	28	18	15
不明		176	134	224	113	77	84	97	61	90	59
合計											
イネ科葉部短細胞珪酸体		261	306	212	186	110	182	312	362	279	302
イネ科葉身機動細胞珪酸体		378	282	372	417	302	266	199	157	226	228
検出個数		639	588	584	603	412	448	511	519	505	530

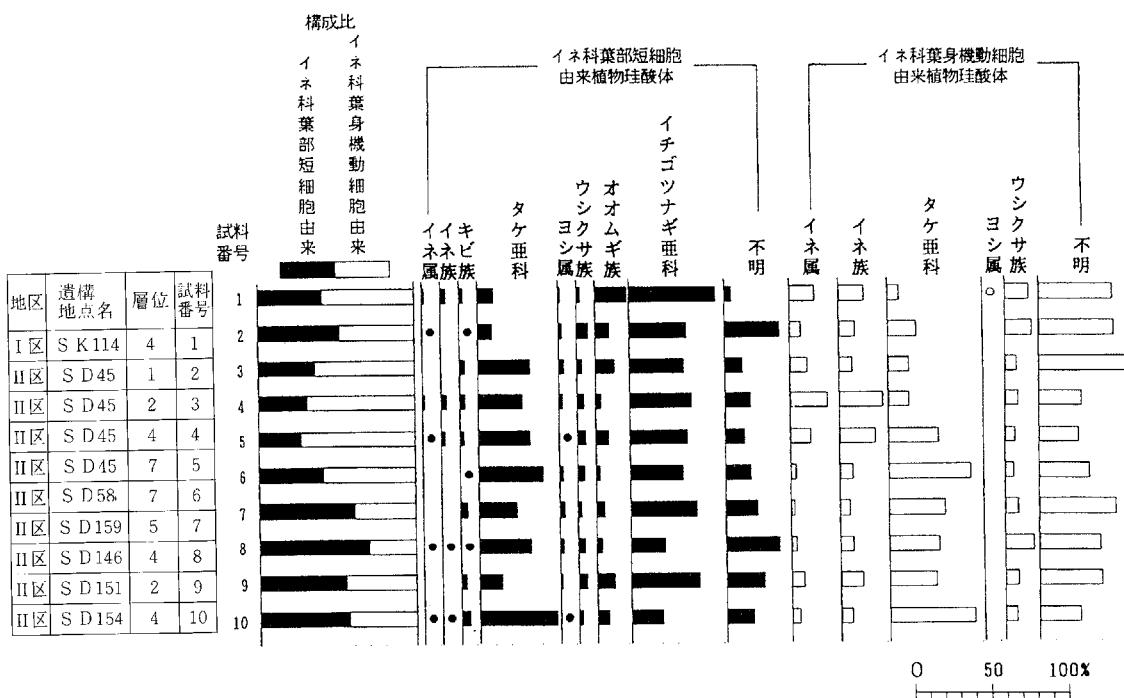


図6 I区SK114、II区SD45・SD58・SD159・SD146・SD151・SD154各地点の植物珪酸体組成
出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体とイネ科葉身機動細胞珪酸体の総数をそれぞれ基数として百分率で算出した。
なお、○●は1%未満、+はイネ科葉部細胞珪酸体の総数が200個未満、イネ科葉身機動細胞珪酸体の総数が100個未満の試料で出現した種類をあらわす。

表12 I区SD158、III区SD237・SD238各地点の植物珪酸体分析結果

種類(Taxa)	遺構名 層名 試料番号	SD158 2層 1	SD237					SD238				
			1層 2	2層 3	4層 4	9層 5		3層 6	4層 7	6層 8	11層 9	
イネ科葉部短細胞珪酸体												
イネ族イネ属		1	11	14	4	—	8	8	8	1		
キビ族		5	4	3	6	—	1	6	1	5		
タケ亜科		28	120	90	118	8	115	73	80	107		
ヨシ属	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
ウシクサ族コブナグサ属	—	—	—	—	—	5	3	6	7	7		
ウシクサ族ススキ属	11	9	6	6	—	4	7	6	6	10		
イチゴツナギ亞科オムギ族	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
イチゴツナギ亞科(その他)	8	25	28	31	4	32	62	51	56			
不明キビ型	87	32	30	23	3	34	40	41	31			
不明ヒゲシバ型	16	11	16	7	—	7	11	12	10			
不明ダンチク型	22	14	35	31	23	23	18	28	21			
イネ科葉身機動細胞珪酸体												
イネ族イネ属		4	9	11	27	5	28	37	23	5		
キビ族		7	2	8	—	—	1	6	1	5		
タケ亜科		36	47	30	46	5	35	30	45	46		
ウシクサ族		22	9	14	3	3	6	10	7	17		
シバ属	—	—	2	—	—	—	—	1	—	—		
不明	30	53	73	65	7	52	72	46	39			
合計												
イネ科葉部短細胞珪酸体		180	227	222	226	43	227	231	234	248		
イネ科葉身機動細胞珪酸体		99	130	138	141	20	122	156	122	110		
計測数		279	357	360	367	63	349	387	356	358		
組織片												
イネ属顕珪酸体		—	1	2	—	—	4	3	1	—		
イネ属短細胞列		—	4	2	1	—	2	2	1	—		
イネ属機動細胞列		—	—	1	—	—	—	1	—	—		

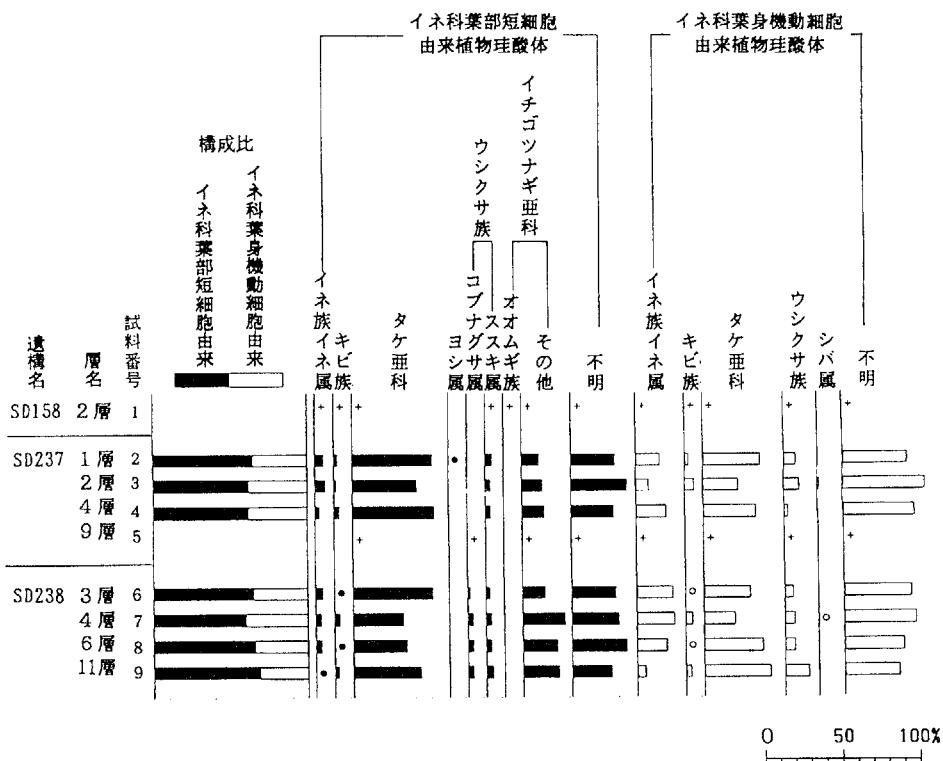


図7 I区SD158、III区SD237・SD238各地点の植物珪酸体組成の層位分布
出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体とイネ科葉身機動細胞珪酸体の総数をそれぞれ基数として百分率で算出した。
なお、○●は1%未満、+はイネ科葉部細胞珪酸体の総数が200個未満、イネ科葉身機動細胞珪酸体の総数が100個未満の試料で出現した種類をあらわす。

表13 VII区南壁、VIII区SX501、VIII区SX01、IX区SI01各地点の植物珪酸体分析結果

種類(Taxa)	地区 遺構名 層名 試料番号	VII区 南壁No.46				VIII区 SX501				VIII区 埋土ベース土				IX区 SI01			
		①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	⑮	
イネ科葉部短細胞珪酸体																	
イネ族イネ属	70	62	57	41	21	11	9	8	2	22	31	2	10	3			
キビ族	6	5	2	4	1	—	1	1	1	2	1	—	6	16			
タケ亜科	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—			
タケ属	30	37	32	30	68	111	106	88	102	124	156	64	22	102	80		
ヨシ属	1	—	1	—	—	3	2	2	—	1	—	2	—	2			
ウシクサ族コブナグサ属	1	—	—	3	4	2	—	1	—	—	3	—	—	—			
ウシクサ族ススキ属	7	8	1	3	5	8	10	7	3	5	4	2	—	19	22		
イチゴソナギ亞科	41	25	124	56	42	91	66	45	20	28	58	40	10	12	17		
不明キビ型	64	62	36	29	35	72	42	28	18	26	44	30	3	51	34		
不明ヒゲンチク型	33	29	20	25	16	57	18	26	14	20	27	20	2	14	11		
不明ダシチク型	29	41	13	24	30	33	19	12	16	17	30	31	10	6	30		
イネ科葉身機動細胞珪酸体																	
イネ族イネ属	81	72	44	100	90	40	15	2	—	10	16	37	1	34	30		
キビ族	1	—	—	1	1	—	—	—	—	—	—	1	—	1	1		
タケ亜科	5	5	1	4	1	4	—	—	1	2	4	2	—	2	—		
タケ属	10	40	23	30	89	106	51	75	85	36	42	31	15	41	39		
ヨシ属	1	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	3	2		
ウシクサ族	18	33	21	31	49	62	19	25	7	25	22	18	2	49	11		
シバ属	2	1	1	3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
不明	26	47	35	33	36	22	21	26	12	32	26	41	14	58	58		
合計																	
イネ科葉部短細胞珪酸体	282	269	286	213	226	390	273	218	176	226	347	221	49	222	215		
イネ科葉身機動細胞珪酸体	144	198	126	202	266	234	106	129	106	107	108	129	32	188	141		
検出個数	426	467	412	415	492	624	379	347	282	333	455	350	81	410	356		
組織片																	
イネ属穎珪酸体	12	5	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
イネ属短細胞列	8	4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	1		
イネ属機動細胞列	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—		
キビ族短細胞列	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	1		
樹木(W)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	1		

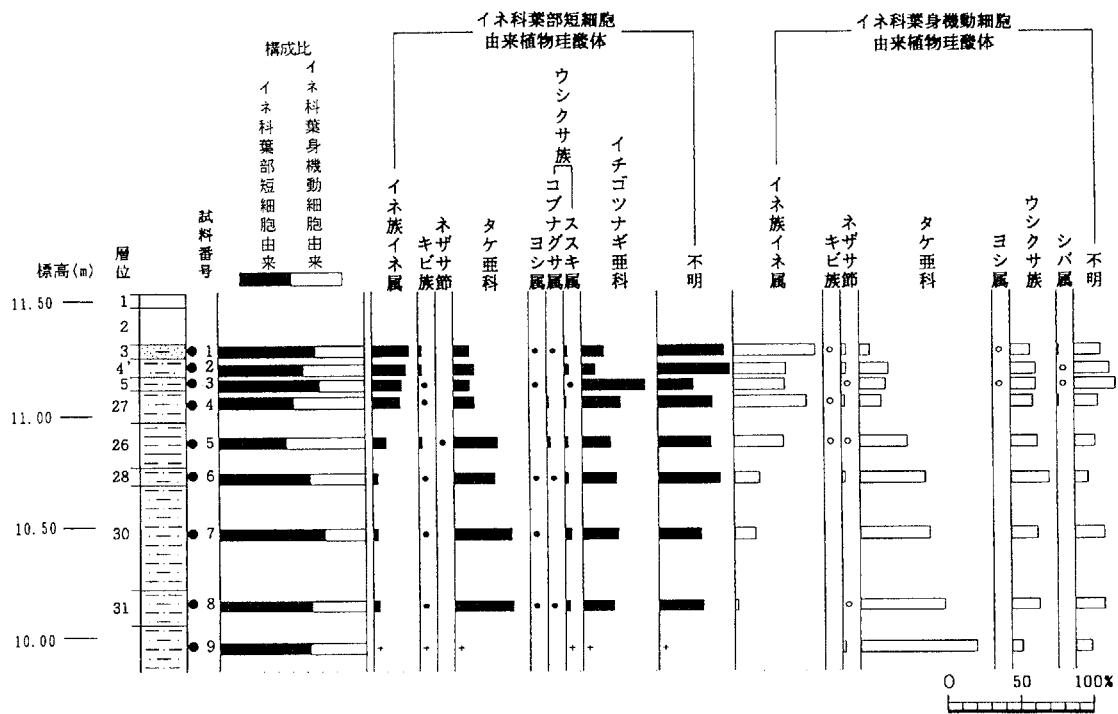


図8 VII区南壁地点の植物珪酸体組成の層位分布
出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体とイネ科葉身機動細胞珪酸体の総数をそれぞれ基数として百分率で算出した。
なお、○●は1%未満、+はイネ科葉部細胞珪酸体の総数が200個未満、イネ科葉身機動細胞珪酸体の総数が100個未満の試料で出現した種類をあらわす。

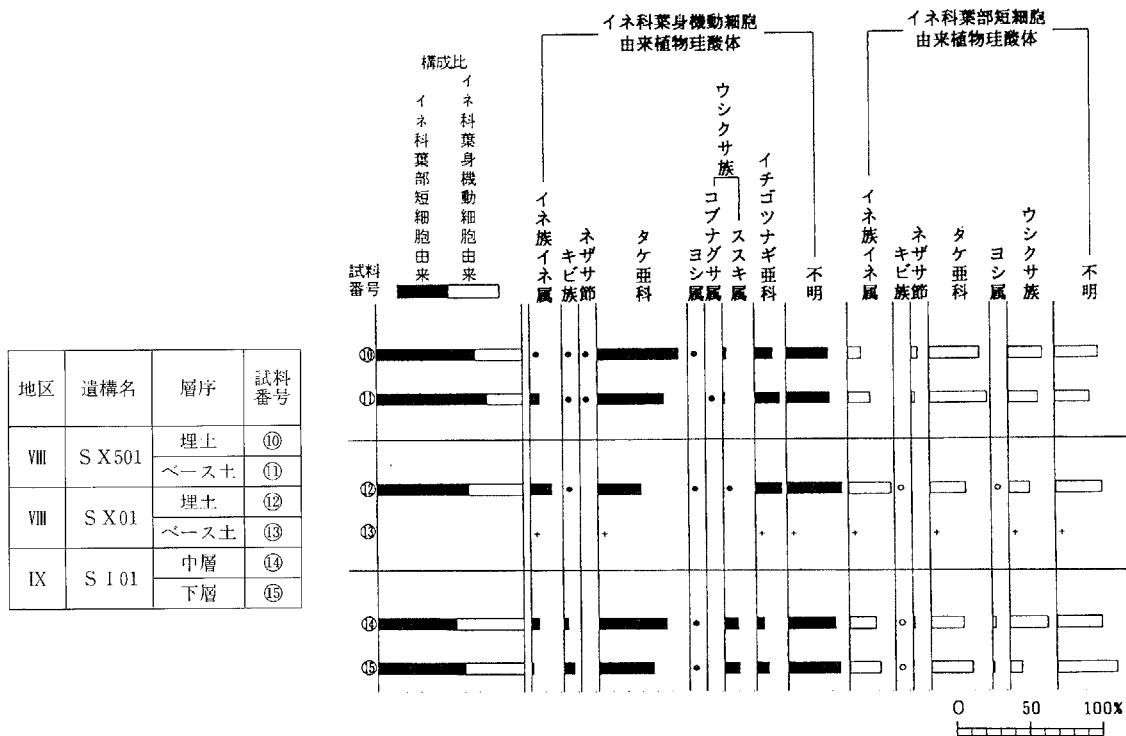


図8 VII区S X501、VII区S X01・IX区S I 01の植物珪酸体組成
出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体とイネ科葉身機動細胞珪酸体の総数をそれぞれ基数として百分率で算出した。
なお、○●は1%未満、+はイネ科葉部細胞珪酸体の総数が200個未満、イネ科葉身機動細胞珪酸体の総数が100個未満の試料で出現した種類をあらわす。

4層で増加する。

(8) II区 S D58 (7層：試料番号6)

植物珪酸体組成は、両珪酸体でタケ亜科が多産し、短細胞珪酸体でイチゴツナギ亜科が多産する。栽培種のイネ属は機動細胞珪酸体でわずかに出現する。

(9) II区 S D159 (5層：試料番号7)

植物珪酸体組成は、両珪酸体でタケ亜科が多産し、短細胞珪酸体でイチゴツナギ亜科が多産する。栽培種のイネ属は機動細胞珪酸体でわずかに出現する。

(10) II区 S D146 (4層：試料番号8)

植物珪酸体組成は、両珪酸体でタケ亜科が多産し、短細胞珪酸体でイチゴツナギ亜科が多産する。栽培種のイネ属は低率ながらも両珪酸体で出現する。

(11) II区 S D151 (2層：試料番号9)

植物珪酸体組成は、両珪酸体でタケ亜科が多産し、短細胞珪酸体でイチゴツナギ亜科が多産する。栽培種のイネ属は機動細胞珪酸体でわずかに出現する。

(12) II区 S D154 (4層：試料番号10)

植物珪酸体組成は、両珪酸体でタケ亜科が多産し、短細胞珪酸体でイチゴツナギ亜科が多産する。栽培種のイネ属は低率ながらも両珪酸体で出現する。

(13) II区 S D158 (2層：試料番号1)

植物珪酸体の総産出数は少なく、タケ亜科、イチゴツナギ亜科などがわずかに出現する。

(14) III区 S D237 (1・2・4・7層：試料番号2・3・4・5)

植物珪酸体は9層では総産出数が少ないが、4・2・1層では多産する。植物珪酸体組成は層位的にほとんど変化しない。すなわち、両珪酸体でタケ亜科が高率に出現し、短細胞珪酸体でイチゴツナギ亜科、機動細胞珪酸体で栽培種のイネ属が多産する。栽培種のイネ属には組織片として出現するものが認められる。

(15) III区 S D238 (3・4・6・11層：試料番号6・7・8・9)

植物珪酸体は9層では総産出数が少ないが、4・2・1層では多産する。植物珪酸体組成は層位的にほとんど変化しない。すなわち、両珪酸体でタケ亜科が高率に出現し、短細胞珪酸体でイチゴツナギ亜科、機動細胞珪酸体で栽培種のイネ属が多産する。栽培種のイネ属には組織片として出現するものが認められる。

(16) VII区南壁No.46

植物珪酸体組成は層位的に変化し、栽培種のイネ属が31層から3層にかけて増加傾向を示す。これとは逆に卓越していたタケ亜科が減少傾向を示す。このほか、イチゴツナギ亜科やウシクサ族（ススキ属やコブナグサ属を含む）が多産し、キビ族やヨシ属などが検出される。

栽培種のイネ属に由来する短細胞・機動細胞珪酸体各々の出現率は、31層が約3%・約2%、30層～28層が3%前後・15%前後、26層～27層が9～19%・33～50%、4層～4'層が20%前後・35%前後、3層が約24%・約56%である。また、27層・4層・3層では稲穂に形成される穎珪酸体も認められ、上位層で多産する傾向がある。

(17) VIII区 S X501 (縄文時代晚期の甕棺墓埋土・ベース土)

甕棺の埋土とベース土の植物珪酸体組成は概ね類似する。すなわち、タケ亜科が高率に出現し、ついでイチゴツナギ亜科やキビ族などが検出される。また栽培種のイネ属も産出し、ベース土では多産する。

(18) VIII区 S X01 (縄文時代晚期の甕棺墓・ベース土)

甕棺の埋土とベース土の植物珪酸体組成は概ね類似する。すなわち、タケ亜科が高率に出現し、ついでイチゴツナギ亜科やキビ族などが検出される。また栽培種のイネ属も産出し、埋土では多産する。

(19) IX区 S I 01 (弥生時代中期後葉の豊穴住居埋積物)

埋積物下層と中層の植物珪酸体組成はほぼ同様である。すなわち、タケ亜科が多産し、イネ属、キビ族、ヨシ属、ウシクサ族、イチゴツナギ亜科などを伴う。

4. 低地の環境

4-1. 各地点・遺構の古環境

(1) S D45地点 (弥生時代末～庄内式土器併行期の大溝堆積物：II区セクションベルト6層・東壁12層：試料番号1・2、II区1・2・4・7層：試料番号2・3・4・5)

弥生時代末～庄内式土器併行期の大溝堆積物について、距離的に離れた2カ所の地点で調査を実施した。両地点の溝内堆積物からは珪藻化石がほとんど産出しなかったため、堆積環境を推定することは困難である。また、花粉化石も全層準で産出数が少なかったが、わずかに出現する種類は草本花粉の種類が多く、周囲にはイネ科・カヤツリグサ科・アカザ科・セリ科・ヨモギ属・タンポポ亜科などの草本植物が生育していた可能性がある。また、II区の4・2層の層準からは栽培種のソバ属の花粉が比較的多く産出した。溝という堆積環境を考慮すると、調査地点での栽培は考えにくいが、当時の栽培種の一種であった可能性はある。

一方、植物珪酸体はII区溝内埋積物から比較的良好に産出した。栽培種のイネ属が層位的に連続して産出し、7・4層では多産した。過去の稻作の存在を推定する場合、水田の規模、稻作技術、イネの種類などが現在と過去で同様であったとは考えにくいが、現水田耕土におけるイネ属の出現率は過去の稻作の消長や様態を推定する上で目安となる。現在の水田耕土におけるイネ属の機動細胞珪酸体の出現率は、イナワラ堆肥連用（8年間、500kg/10a/年）の水田土壤表層で

16%を示したとの報告がある（近藤、1988）。今回の結果では4層でこの値を上回っており、調査地点が溝であることを合わせると、溝堆積期には溝周辺で稻作が行われていたことが推定される。また、植物珪酸体組成ではタケ亜科、イチゴツナギ亜科が多産しており、これらの母植物も溝周辺に生育していたことが推定される。

（2）I区S I 85地点（飛鳥時代の造り付けカマド内：試料番号3）

カマド内土壤試料からは、珪藻・花粉化石がほとんど検出されなかった。このような原因として、珪藻は1400°C位まで耐性があることから（Matskainen, H. and Alhonen, P. 1984）、熱による溶解消失は考えにくく、住居内であることから珪藻はもともと少なかったと推定される。これに対して、花粉は熱に対する抵抗性が弱いことから、カマド使用時の燃焼により分解消失したと考えられる。一方、植物珪酸体は総産出数は少ないものの、イネ属やススキ属の葉・稈の組織片が認められた。このような産状は、それらの母植物が堆積物中に取り込まれていることを示しており、カマドの燃焼材として、イネ属やススキ属などの草本植物が利用されていた可能性が考えられる。

（3）II区S D159東壁（鎌倉・室町時代の10・13層、飛鳥時代の15層：試料番号4・5・6）

鎌倉・室町時代の水田耕土とされる10・13層、飛鳥時代の水田耕土とされる15層からは、珪藻化石はほとんど産出しなかった。このような産状の直接の原因については不明であるが、わずかに産出する化石の保存状態が著しく悪いことから、堆積後に何らかの風化作用の影響を受け分解消失したものと思われる。

一方、花粉化石12層と15層から良好に産出した。その中にはオモダカ属・ミズアオイ属・サンショウウモといった水生植物の種類が認められた。これらは水深の浅い低湿地などに生育している種類であるが、水田雑草の種類でもあり、当時も水田雑草として生育していた可能性がある。また、植物珪酸体では総産出数が少なかったものの、その中には栽培種のイネ属が認められた。このことは、各層が水田耕土とする見解を裏づける。

（4）II区S D 1 5 9（飛鳥時代の溝：4・6層：試料番号7・8）

溝埋積物の6層からは珪藻化石がほとんど産出しなかったことから堆積環境は不明であるが、4層からは多産したことから次のような堆積環境が推定される。4層の珪藻化石群集は陸生珪藻の種群が卓越することが特徴である。陸生珪藻は常に大気に曝された好気的環境、すなわち土壤表面、コケなどに付着生育する種群であり（Florin, 1970 Patric, 1977 小杉、1986）、産出した陸生珪藻の種群の多くが陸生珪藻の種群の中でも特に耐乾性の強い陸生珪藻のA群とされる（伊藤・堀内、1989）。したがって、4層は冠水することの少ない湿润な好気的環境下で堆積したと考えられる。このことは当時の溝内が空堀のような状態であったことを示唆する。

一方、花粉化石は両層から多産し、草本花粉・シダ類胞子が卓越する傾向が捉えられた。4層

ではヨモギ属が卓越したことから、本溝周辺にはヨモギ属が生育する開けた場所が存在したことが推定される。また、植物珪酸体では総産出数が少ないものの、オオムギ族、イネ属、ヨシ属、ススキ属、メダケ属などが出でており、これらの母植物が周辺に生育していたものと思われる。

(5) IV区 S K184東壁（縄文時代包含層、飛鳥時代の溝埋積物・包含層：試料番号9～13）

各時期の堆積物からは珪藻化石が全く検出されなかっただため堆積環境を推定することは困難である。この原因は不明であるが、おそらく堆積後に何らかの風化作用により分解消失したものと思われる。

一方、花粉化石では飛鳥時代の包含層と同時代の溝内堆積物のSDA層から多産した。両層からはオモダカ属・ミズアオイ属といった水生植物の種類が出現した。このことから、周辺にはこれらの母植物が生育する水湿地が存在したことが推定される。また、SDA層ではヨモギ属の花粉化石が高率に出現したことから、溝近辺が開けた場所であったことが示唆される。

植物珪酸体はいずれの層準も総産出数が少なかったが、縄文時代晚期～弥生時代前期の試8層からはイネ属の葉の組織片が産出した。このことはイネ属の母植物が堆積物中に取り込まれていることを示唆するが、堆積環境が特定できることや上位層からの落ち込みの可能性もあることから、縄文時代晚期～弥生時代前期に栽培種のイネ属が存在したと特定できない。このことについては発掘調査成果を含めて総合的に評価する必要がある。

(6) I区 S K114地点（奈良時代の土壌埋積物4層：試料番号1）

奈良時代の土壌埋積物4層からは、珪藻化石はほとんど産出しなかったが、わずかに産出した種群のほとんどが陸生珪藻の種群であったことから、好気的環境下で堆積した可能性がある。好気的環境下では分解消失する花粉化石がほとんど産出しなかったことも調和的である。

一方、植物珪酸体は比較的良好に産出しており栽培種のイネ属が多産した。土壌埋積物であることから、本地点での稻作は考えにくいが、この時期に調査地点近辺で稻作が行われていた可能性が考えられる。

(7) II区 S D58地点（弥生時代末～庄内式土器併行期の溝埋積物7層：試料番号6）

溝埋積物7層からは珪藻化石がほとんど産出しなかったが、わずかに産出した種群が陸生珪藻の種群であり、好気的環境下では分解消失する花粉化石がほとんど検出されなかっことを合わせると、7層は好気的環境下で堆積した可能性がある。一方、良好に産出した植物珪酸体組成ではタケ亜科、イチゴツナギ亜科、ウシクサ族などが産出しており、これらの母植物が周辺に生育していたことが推定される。栽培種のイネ属も認められるが出現率は低率であり、稻作が行われていたかは判断がつかない。

(8) II区 S D159（弥生時代の溝埋積物5層：試料番号7）

溝埋積物の5層の珪藻化石群集は、陸生珪藻の卓越と流水不定性種の多産が特徴である。陸生

珪藻の種群の多くは耐乾性の強い陸生珪藻のA群（伊藤・堀内、1989）である。このような珪藻化石群集の特徴より、5層の堆積環境として、溝底にある程度の水が溜っており、その中に当時の地表面あるいは溝壁面の土壌やコケなどに付着生育していた陸生珪藻が落込み堆積した、あるいは水が溜まっている時期もあったが基本的には好気的環境であった、の2つの可能性が考えられる。好気的環境下で化石として残り難い花粉化石の保存が悪かったことから、後者の可能性が強いと考えられる。

産出した花粉化石では草本花粉が卓越しており、その中ではヨモギ属が卓越した。また、ヨモギ属とアカザ科の花粉化石にはしばしば花粉塊として産出するものが認められたことから、これらの母植物が溝周辺に生育していたことが推定される。また、良好に産出した植物珪酸体組成で多産したタケ亜科、イチゴツナギ亜科、ウシクサ族などの母植物も溝周辺に生育していたことが推定される。栽培種のイネ属の植物珪酸体も認められるが、その出現率は低率であり溝周辺で稲作が行われていたかは判断がつかない。

(9) II区 S D146 (奈良時代の溝堆積物4層：試料番号8)

溝堆積物の4層からは珪藻化石がほとんど産出しなかったことから、堆積環境を特定することは困難である。

一方、花粉化石は良好に産出した。草本花粉が卓越しており、その中ではヨモギ属が優占した。このような産状から溝周辺が比較的開けた場所であったことが推定される。優占したヨモギ属の花粉化石はしばしば花粉塊として産出したことから、母植物が溝周辺に生育していたことが推定される。ブドウ属も同様な産状を示すことから溝周辺に生育していた可能性がある。また、ガマ属も比較的多産したことから本種もヨモギ属やブドウ属と同様に周辺に分布していたことが推定される。また、植物珪酸体組成では栽培種のイネ属が認められたが、出現率が低率であることから周辺で稲作が行われていた可能性はあるものの特定はできない。

(10) II区 S D151地点 (6世紀代の溝埋積物2層：試料番号9)

6世紀代の溝埋積物2層からは珪藻化石が検出されなかったため、堆積環境について推定することは困難である。一方、花粉化石群集では草本植物が卓越することから、溝周辺には開けた空間が存在したことが推定される。溝周辺にはヨモギ属、クワ科、イネ科・アカザ科・セリ科・オナモミ属・他のキク亜科・タンポポ亜科などの草本植物が生育していたと考えられる。このうちクワ科とヨモギ属の花粉化石はしばしば花粉塊として産出した。この状況は溝周辺に母植物が生育していた可能性が高いといえる。また、植物珪酸体組成では栽培種のイネ属が認められたが、出現率が低率であることから周辺で稲作が行われていた可能性はあるものの特定はできない。

(11) II区 S D154地点 (6世紀代の溝埋積物4層：試料番号10)

溝埋積物4層からは珪藻化石がほとんど産出せず、堆積環境を推定することは困難である。花

粉化石も産出数が少なかった。わずかに産出した花粉化石の保存状態が著しく悪かったことから、堆積後に分解消失している可能性がある。

一方、植物珪酸体は良好に産出した。その中ではタケ亜科が卓越しており、溝周辺に本種類が生育する開けた空間が存在したことが推定される。また、栽培種のイネ属が出現するが、出現率が低率であることから、この時期に溝近辺で稻作が行われていた可能性はあるものの特定はできない。

(12) II区 S D158地点（6世紀の溝：2層：試料番号1）

溝埋積物の4層からは珪藻化石がほとんど産出しなかった。そのため、堆積環境について推定することは困難である。

一方、花粉化石は良好に産出した。草本花粉が高率を占め、その中ではヨモギ属が卓越した。人里植物のオオバコ属・オナモミ属なども認められることを合わせ考えると、溝周辺にはヨモギ属などが生育する開けた場所が存在したことが推定される。また、植物珪酸体は産出数が少なく、保存状態も悪かった。産出した種類が周辺に生育していたことが考えられるものの、当時のイネ科植物相については不明である。

(13) III区 S D237地点（8世紀の溝：1・2・4・7層：試料番号2・3・4・5）

溝埋積物からは珪藻化石がほとんど産出しなかったことから、堆積環境について推定することは困難である。

一方、花粉化石は良好に産出した。草本花粉化石ではイネ科が多産し、オモダカ属・ミズアオイ属といった水生植物の種類が産出した。また種類数も豊富であった。これら草本植物の種類は溝近辺ないしその周辺に生育していたと考えられる。また、2層からは栽培種のソバ属が算出したが、出現率が低率であることから栽培されていたかは判断つかない。

また、比較的良好に産出した植物珪酸体組成では、タケ亜科が卓越し、キビ族、ウシクサ族（スキ属を含む）、イチゴツナギ亜科などが産出しており、これらも溝周辺に生育していたものと推定される。また、栽培種のイネ属も多産し、組織片や穂殻に形成される穎珪酸体も認められたことから、溝積物中にはイネ属の植物体（イナワラや稻穂）あるいは稻作耕土が混入していることが推定される。したがって、当時の溝堆積域周辺では稻作が行われていた可能性がある。また、本溝から獸骨や鉄滓、奈良時代の多量の土器類が出土したことから、これらに混じってイナワラや穂が混入した可能性も考えられる。

(14) III区 S D238（8世紀の溝：3・4・6・11層：試料番号6・7・8・9）

本溝は道路の側溝と考えられており、上記したS D237と反対側の側溝である。溝埋積物からS D237と同様に珪藻化石がほとんど産出せず、堆積環境について推定することは困難である。一方、花粉化石と植物珪酸体は、花粉化石で保存が悪い層準もあったが、S D237地点とほぼ同様な産状

を示した。S D237地点と同様なことが推定される。

(15) VII区南壁No.46地点

VII区南壁で得られた縄文時代晩期以降の植物珪酸体組成は、タケ亜科の卓越する組成から栽培種のイネ属が卓越する組成に層位的に変化した。このことから、少なくとも調査地点の景観は縄文時代以降に大きく変化したことが推定される。

縄文時代晩期とされる31層では、調査地点周辺にはタケ亜科、イチゴツナギ亜科、ウシクサ属などが生育していたことが推定される。植物珪酸体組成において卓越するタケ亜科がササ類あるいはタケ類に由来するかは、植物珪酸体の形態的特徴から分類することができなかったが、両者とも開けた場所に生育する種類であり、調査地点周辺にはこれらが生育する開けた場所が存在したことが推定される。また、31層では栽培種のイネ属が検出されたが、出現率が低率であることから、周辺で稲作が行われていたとは考え難く、上位層からの落ち込みの可能性が強い。

弥生時代とされる30層・25層では、栽培種のイネ属が短細胞珪酸体で3%前後、機動細胞珪酸体で15%前後の出現率を示すようになる。先述した現水田におけるイネ属の機動細胞珪酸体の出現率とほぼ同様の値を示していることからみて、調査地点もしくはその近辺では稲作が行われていた可能性が強い。

古墳時代とされる26層ではイネ属の出現率が増加し、機動細胞珪酸体で30%以上を示すようになる。これは、調査地点での稲作を示唆するものである。今後、この点を明らかにするために、調査地点と検出された遺構の分布状況について検討することが望まれる。

鎌倉時代とされる27層・4層では、イネ属の出現率はさらに高率となり、江戸時代と同様の出現率を示すようになる。また、これとは逆に多産していたタケ亜科が急激に減少する。このような一連の変化は、本低地における稲作地の範囲が拡大したこと、あるいは本層準における稲作期間が長く植物珪酸体の蓄積量が増加したこと、などを示している可能性がある。

江戸時代とされる④'層・③層の時期も基本的には鎌倉時代と同様の状況であったと推定される。

ただし、イチゴツナギ亜科が減少することから、周辺植生は多少変化した可能性がある。

(17) VIII句 S X501（縄文時代晩期の甕棺墓埋土・ベース土）

縄文時代晩期の甕棺墓であるS X501・S X01の埋土とベース土の植物珪酸体組成は2基とも類似しており、VII区南壁の縄文時代晩期とされる31層の組成と概ね類似するが、栽培種のイネ属の出現率が高い点で異なる。ただし、甕棺墓の埋積状況に関しては情報が少なく、上位層からの落ち込みの可能性もあり、発掘調査時の堆積状況に関する知見を含めて総合的に慎重に評価する必要がある。

(18) VIII区 S X01（縄文時代晩期の甕棺墓・ベース土）

縄文時代晚期の甕棺墓であるS X501・S X01の埋土とベース土の植物珪酸体組成は2基とも類似しており、B区南壁の縄文時代晚期とされる31層の組成と概ね類似するが、栽培種のイネ属の出現率が高い点で異なる。ただし、甕棺墓の埋積状況に関しては情報が少なく、上位層からの落ち込みの可能性もあり、発掘調査時の堆積状況に関する知見を含めて総合的に慎重に評価する必要がある。

(19) IX区 S I 01 (弥生時代中期後葉の竪穴住居埋積物)

住居覆土下層と中層の植物珪酸体組成は、VII区南壁の弥生時代とされる30層・25層の組成と類似する。本住居址が自然状態で埋没したのか、人為的に埋め戻されたのかはここでは不明である。そのため、植物珪酸体組成の形成過程を考慮した絞殺はできないが、遺物の時代性に基づくとB区南壁の傾向と調和的であり、同様なことが推定される。

4 - 2. 低地の古環境

今回の調査地点の時代性は縄文時代晚期～江戸時代にわたるが、これらの時期を通じて化石群集が得られたのは植物珪酸体だけであり、花粉化石群集は6世紀から鎌倉・室町時代、珪藻化石群集は弥生時代末と飛鳥時代と断片的に得られているだけである。ここでは、各地点で得られた化石群集および推定された古環境について、遺物の時代性に基づいて比較検討し、低地の古環境について述べる。

縄文時代晚期にはタケ亜科、イチゴツナギ亜科、ウシクサ属などが生育する開けた場所が存在したことが推定される。

弥生時代の堆積層の植物珪酸体組成は、距離的に離れた地点間で類似していたことから、同様なイネ科植物が生育する環境が低地に拡がっていたことが示唆される。植物珪酸体組成は基本的には縄文時代晚期と同様であり、同様な植物が生育していたことが推定される。また、本時期の堆積層では栽培種のイネ属が産出する傾向が複数の地点で認められる。このことは当時の低地において稲作が行われていたことを示唆しているのかもしれない。

古墳時代～鎌倉時代の堆積層では、植物珪酸体組成は基本的には弥生時代と同様の組成を示すが、栽培種のイネ属が増加し、多産していたタケ亜科が減少傾向を示すようになる。一方、本時期の花粉化石群集は草本花粉が卓越する地点が多く、その中ではヨモギ属が高率である。このような両化石群集の傾向から、この時期の低地には森林と呼べる林分の存在は考え難く、ヨモギ属などが生育する開けた空間が拡がっていたことが推定される。また、稲作も広い地域で行われるようになったことが推定される。

近世の堆積層では、植物珪酸体組成では栽培種のイネ属が卓越するようになる。タケ亜科などは分布を狭めた可能性が強く、低地一帯では稲作が行われるようになったと思われる。

5. 森林植生

今回の調査では、6世紀から鎌倉・室町時代までの花粉化石群集が得られている。このうち周辺の森林植生を反映していると考えられる木本花粉化石群集の特徴は以下のようにまとめられる。

6世紀、奈良時代、8世紀、飛鳥時代、鎌倉・室町時代の木本花粉化石群集は、基本的には類似している。すなわち、暖温帯常緑広葉樹林の主要構成要素であるアカガシ亜属が高率に出現することが特徴であり、マキ属、ヤマモモ属、シイノキ属といった暖温帯性の種類を伴っている。また、モミ属・ツガ属・コウヤマキ属・スギ属・イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科といった温帶性針葉樹の種類の産状も目立っており、本群集の特徴の一つである。このような特徴から、当時の周辺植生について推定する。

本遺跡周辺の古植生は、6世紀～鎌倉時代の時期を通じて、大きく変化することなく、基本的にはアカガシ亜属を中心とした暖温帯性の広葉樹林であったと推定される。マキ属、ヤマモモ属（おそらくヤマモモ）、シイノキ属なども当時の森林構成要素であったであろう。このような植生は、各地点の花粉化石群集において木本花粉の占める割合が低いこと、本遺跡の立地環境より花粉化石群集の多くは異地性と考えられることから、森林と呼べる林分は遺跡の近くに存在したのではなく、後背の山地や段丘上に成立していたものと想定される。また、木本花粉化石群集において目立った産状を示した温帶性針葉樹のスギ属・モミ属・コウヤマキ属・イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科といった要素は、現在では暖温帯から冷温帯にかけての推移帶に成立する中間温帶林の構成要素でもある。当時も照葉樹林の後背山地において分布していた可能性が強い。

和歌山平野では、本遺跡より下流側に位置する田屋遺跡や西田井遺跡において弥生時代以降の花粉化石群集および植生が推定されている。それによれば、弥生時代から古墳時代にかけては後背山地などにはカシ類を中心とした照葉樹林が成立していたことが推定されている。今回の結果は、このような傾向と調和的であり、本地域において普遍的な植生を反映していることになる。また、田屋遺跡では古墳時代以降の時期に何らかの影響により照葉樹林が分布域を狭め、二次植生としてのマツ林が分布域を拡げた可能性が指摘されている。このような傾向は今回の結果では認められず、田屋遺跡での変化が局所的な変化である可能性が強く、少なくとも本地域の植生は鎌倉時代の頃まで暖温帯性の広葉樹林であったと考えられる。

III. 飛鳥時代・鎌倉時代土壌の性格について

(1) 試料

分析に供された試料は表11に示すとおりである。

いずれの試料も土壌内埋土の各断面より採取されている。

I区の2つの土壌上面（S X322、S X307）では、1土壌より各1点づつの試料が採取されて

いるが、詳しい採取地点はわからない。

I 区の土壌 (S X180) では、上・中・下層より 1 点づつ採取されている。

また、II 区の東壁土層では S X180 の対比試料として S D159 の東壁の 14 層より 1 点、 S X322、 S X307 の対比試料として同じ S D159 の東壁の 7 層より 2 点それぞれ採取されている。

なお、分析試料の合計は 8 点である。

表11 リン・カルシウム分析試料表

試料番号	地点・地区（遺構・層位）			備考（時代）
1	K N B	I 区（下面）	S X180 上層	871029 飛鳥時代の土壌
2	K N B	I 区 S X180	中層	871029 飛鳥時代の土壌
3	K N B	I 区 S X180	下層	871029 飛鳥時代の土壌
4	K N B	II 区 S D159 東壁	14 層	871215 No. 1 ~ 3 の対比試料
5	K N B	I 区上面	S X322	871118 鎌倉時代の土壌墓？
6	K N B	I 区上面	S X307	871107 鎌倉時代の土壌墓？
7	K N B	II 区 S D159 の東壁		871215 No. 5・6 の対比試料
8	II 区 S D159 の東壁			871215 No. 5・6 の対比試料

(2) 分析方法

粉碎、篩別した試料について過塩素酸分解を行った後、リンについてはバナドモリブデン酸法（注 1）により全リン酸 ($T-P_2O_5$) を、またカルシウムについてし原子吸光光度法（注 2）により全カルシウム ($T-CaO$) をそれぞれ測定した。

分析の行程は以下の通りである。

1. 試料は風乾、粉碎した後、 $\phi 0.5\text{mm}$ の篩を全通させて供試した。
2. 水分は、加熱減量法（注 3）により測定した。
3. 試料の一定量を秤りとり、はじめに硝酸 (HNO_3) により、次に過塩素酸 ($HCLO_4$) により加熱分解を行った。
4. 本分解液の一定量を採取し、発色液を加えて、比色法により全リン酸を測定した。
5. 別に分解液の一定量を採取し、干渉抑制剤を加えた後、原子吸光光度法により全カルシウムを測定した。

（注 1）農林省農林水産技術会議事務局監修：土壤養分分析法（養賢堂）

（注 2）日本土壤肥料学会監修：土壤標準分析・測定法（博友社）

（注 3）今日と大学農学部農芸化学教室編：農芸化学実験書第 1 卷（産業図書）

(3) 結果および考察

結果は表12に示すとおりである。

表12 リン・カルシウム分析結果

試料番号	T-P ₂ O ₅ g/mg	T-CaO g/mg
1	1.18	4.23
2	1.14	4.64
3	1.09	4.60
4	0.51	3.23
5	1.62	4.80
6	1.21	4.87
7	0.85	4.08
8	0.87	3.99

リン・カルシウムの値は乾土 1 g中のmgで示す。

以下に各遺構毎に結果の概要を述べるが、それに先立ち対比試料とされる東壁土層II区7層および14層の結果について記す。

7層より採取された2点の試料では、両者ともにリン0.9mg、カルシウム4.0mg前後の近似した値を示し、14層の試料では7層よりもさらに低い値が認められる。

この結果から、7層および14層の土壤については人為的にリン・カルシウム含量の多いものが富化された形跡はない。

S X 3 2 2 ・ S X 3 0 7

試料は両土壤内断面から各1点づつ採取されているが、詳細な地点場所は不明である。

S X 322ではリン1.62mg、カルシウム4.80mg、S X 307ではリン1.21mg、カルシウム4.87mgの値を示し、対比試料よりも明らかに高い傾向が認められる。

S X 1 8 0

試料は、土壤内断面の上・中・下層よりそれぞれ1点づつ採取されている。

各試料ともにリンで1.09~1.18mg、カルシウムで4.23~4.64mgの範囲の値を示し、リン・カルシウム含量に大きな差異は認められない。ただ、対比試料の値と比べると高い傾向が認められる。

以上の結果から、S X322、302およびS X180について、墓壙としての可能性を検討したい。

まず、土壙内のいずれの試料においても対比試料に比べてリン・カルシウムの高い傾向が認められ、人間活動によるリン・カルシウムの富化がなされた土壙であると考えられる。

ただ、人骨がもし埋納されていたとすれば、土壙内の含量には局所的に高い値が認められるはずである。しかし、S X180では測定値に局所的に高い値を認めることはできず、骨埋納の可能性は低いと判断せざるを得ない。

一方、S X322、302では分析に供された試料が僅かに1点だけであり、今回測定された値の局所性は判断できず、人骨埋納の可能性を検討するのが難しい。

土壙中に埋められた骨のリン・カルシウム成分も時間あるいは環境の変化によって土壙中で分解、流亡することがあり、埋納した人骨があったとしても埋めた時点よりはかなり低くなっていることは確かである。ただし、骨が埋められた場所の土壙と、その影響を受けていない周辺の土壙とでは、含量に何らかの差異が認められるはずである。

したがって、今回のように時代のわかっている基本的な土層の含量を調査することも当然必要であるが、人骨が埋納されたと考えられる土壙内の埋土についてもできるだけ細かく試料を採取し、分析する必要があろう。

引用文献

- 安藤一男 (1990) 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用. 東北地理, 42, p. 73-88.
- Florin, M. B. (1970) Late-Glacial Diatoms of Kirchner Marsh, Southeastern Minnesota Nova Hedwigia Heft 31, Diatomaceae II, p. 997-756
- 伊藤良永・堀内誠示 (1991) 陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用. 珪藻学会誌, 6, p. 23-44.
- 近藤鍊三・佐瀬 隆 (1986) 植物珪酸体分析, その特性と応用. 第四紀研究, 25, p. 31-64.
- 近藤鍊三 (1988) 十二遺跡の植物珪酸体分析. 「鎌師屋遺跡群十二遺跡—長野県北佐久郡御代田町十二遺跡発掘調査報告書」, 御代田町教育委員会, p. 377-383.
- 小杉正人 (1986) 陸生珪藻による古環境の解析とその意義—わが国への導入とその展望—. 植生史研究, 1, p. 29-44.
- Krammer, K., and H. Lange-Bertalot (1986 · 1988 · 1991) Bacillariophyceae, Suesswasser flora von Mitteleuropa 2 (1 · 2 · 3): p. 1-876, p. 1-585, p. 1-576.
- Matiskainen, H. and Alhonen, P. (1984) Diatoms as Indicators of Provenance in Finnish SubNeolithic Pottery. Journal of Archaeological Science vol. 11, p. 147-157.

Patrick, R. (1977) ecology of fresh water diatoms—Diatom communities. *The biology of diatoms.*, Botanical Monographs, vol. 13, (ed. Warner, D.) . 284—332. Blackwell Scientific Publication, London.

ま　と　め

遺構について

川辺遺跡は、発掘調査によって様々な知見を得ることができた。調査は、バイパス道路とあって、幅約30m、総延長約1kmに及ぶ。

結果I区は、弥生時代末から古墳時代初頭の溝、7世紀代の遺物と方形の掘方の倉庫状建物、鎌倉時代の木棺墓、江戸時代の遺構、遺物が多い。倉庫状遺構は、同時期の竪穴住居と地域を画している。鎌倉時代の木棺墓は、この地域に限定された墓域として村落地域と異なった墓域の設定がなされていると考えられる。

II区は弥生時代末から古墳時代前半、7世紀代、奈良時代、鎌倉時代の遺物に混じって縄文土器が散見する。

III区は奈良時代の遺物が他の地区に比して目立つ。

IV区は、縄文時代の住居、焼土遺構があるが、遺物の量は非常に少ない。

V区は、出土遺物が少なく、出土している土器の時期は、まとまってはいない。

VI区は古墳時代前半、鎌倉時代の遺物が比較的まとまっている。遺構として鎌倉時代の井戸が多くなり、廃棄そして作り替えの様相がみられる。一方で包含層からの縄文土器が、目立って多く出土している。

VII区は、縄文時代、鎌倉時代の遺物、遺構が主である。特に縄文時代の遺構であるSW101からはまとまった量の土器が出土している。

VIII区は、四基の縄文時代の深鉢の棺墓と、一基の壺を利用した棺墓がまとった形で検出された。他に距離をおいて一基の深鉢を利用した棺墓がある。そして、弥生時代の方形周溝墓、古墳時代の方形住居址があり、遺物としては朝顔形埴輪、奈良時代、平安時代の土器が出土している。

IX区は弥生時代の住居址、他に掘立柱建物が多く検出されたが、出土遺物の状況からしても時期の判定は困難である。

縄文時代の遺物について

IV区の二棟の円形住居のうちSI01は、若干の掘り込みが検出されたが、SI02は円形の柱跡だけである。これらの住居址に伴う土器の検出は、明確でない。

出土している土器では、VI区包含層から1307の宮滝式の深鉢が最も古いものであるがこの一点だけである。この宮滝式以降は滋賀里式晩期が出土土器のほとんどを占め、突帯文土器で最も新しいのはSD1002出土848の長原式である。VI区包含層の深鉢1258は、体部に低い突帯がめぐっているが、刻み目はなされていない。底部は、丸底であり外面器壁はタテ方向のケズリがなされて

いるが、848との前後関係については底部の形状より古いものとみられる。

突帯文土器以前の様相

突帯文出現以前の土器の様相は、篠原式として設定された篠原中町遺跡の土器類によく似た土器の出土状況を示している。(注1)

深鉢については、口縁部の調整からVII区 SW101の場合、1248のように、口縁部と体部の界が幅の広いミガキ状の手法がなされている顕著な例と、1179のように曖昧なナデ状におさめている例もみられる。いつれも口唇部は、丁寧なミガキによって稜の鋭い仕上げとなっている。1179は二枚貝の殻頂を上に横位に連続押捺しているが、1233-2は縦位に施文なされている。一方VI区包含層の1246のように口縁部口唇部下の外面を軽くナデて条痕をスリケシしている例があり、前者は後者より古い様相である。

これらは、滋賀里式III a とIII b の特徴であり、それに伴う他地域の土器とのセット関係も出土量の違いはあるが、篠原中町遺跡と共通している部分がある。

VII区 SW101から出土している1228-3、1229、1292-3などの広義の押し引き文様を、1185-2などの樋原式、1187、1189などの大洞B-C式、VI区包含層の遮光器土偶などが出土している。

突帯文土器の様相

突帯文土器は、口縁部外面口唇部と離れて貼付されているものと、口唇部の成形の一連の作業工程のものとある。これに体部に突帯がめぐると思われるIII区 SD238の1356と同一個体であろう1434、VII区の包含層1258がある。

縄文時代土器棺について

VIII区において六基の土器を利用した墓制が検出された。SX01は1個の深鉢を利用したもので、口縁部は東方向で、水平に納められている。この土壙も墓の可能性がある。

SX501、502は、1個の深鉢を利用し、それぞれ北方向に口縁を向け、やや斜めに口縁を高くして納めている。SX503は、504を切り込み504の土器の一部を欠いている。503は口縁を土壙底に向け、ほぼ立てている。504は、口縁を北方向にし、水平に納めている。SX505は、1394に接合する1431と3個体の土器の破片を利用し、他に礫石をもって土壙を充填している。主体になるであろう1394、1431も完型ではない。

(注1) 家根祥多 縄文晩期前葉－中葉の広域編年 北海道大学文学部 1994年3月7日

報告書抄録

ふりがな	かわなべ いせきはくつちょうさほうこくしょ							
書名	川辺遺跡発掘調査報告書							
副書名								
卷次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	松下 彰							
編集機関	和歌山県文化財センター							
所在地	〒640 和歌山市広道20番地 第3田中ビル TEL(0734)33-3843							
発行年月日	西暦1995年3月14日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 °〃〃	東経 °〃〃	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
市町村	遺跡番号							
かわ 川 辺	わ か やまけん 和歌山県 わ か やま し かわなべ 和歌山市川辺	3020150	145	34度 15分	135度 16分	19870709 19950314	30,641	一般国道24 号線和歌山 バイパス建設に伴う調 査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
川辺	集落墓	縄文	竪穴住居 2棟	縄文土器、土偶、 石刀、石鎌、石棒、 石斧、弥生土器		この周辺において、 縄文時代遺物、遺構 が出土したのは初見。 大型の飾り土馬の 出土は県下で二例目。 中世における墓制 の多様性が確認。 全地区を通して7 世紀代の須恵器杯身 がみられる。		
		弥生	カメ棺 6基					
		古墳	竪穴住居 2棟					
		飛鳥・奈良	方形周溝墓					
		平安	土器、溝	土師器、須恵器、 埴輪、耳金環				
			竪穴住居 7棟	土馬				
			掘立柱建物					
			掘立柱建物	黒色土器				
			中世	井戸 7基	備前焼			
				木棺墓 21基	瓦器碗、瓦器皿、 土師碗、土師皿、 瓦器小皿、土師小皿 錢貨（宋錢）			
	近世	墓、土坑	唐津焼、染付					

川辺遺跡発掘調査報告書

－一般国道24号和歌山バイパス建設
に伴う発掘調査－

平成7年3月

編 集 (財)和歌山県文化財センター
発行・印刷 西岡総合印刷株式会社

川辺遺跡発掘調査報告書

—一般国道24号和歌山バイパス建設に伴う遺跡発掘調査—

(図版)

1995年 3月

(財)和歌山県文化財センター

写 真 目 次

- | | |
|--|--|
| <p>P L 1. I 区上面全景 (南から)
I 区全景 (南から部分)</p> <p>P L 2. I 区上面(部分) 全景(北から)
I 区上面(部分) 全景(南から)</p> <p>P L 3. I 区上面 S X322 (北から)
I 区上面 S X322 (土器残存状況)</p> <p>P L 4. I 区上面 S X328 (南から)
I 区上面 S X329 (南から)</p> <p>P L 5. I 区下面全景 (南から)
I 区下面 (全景一部) (南から)</p> <p>P L 6. I 区下面 (南から)
I 区下面 S I 85 (西から)</p> <p>P L 7. I 区下面 S I 91 (西から)
I 区下面 S I 91 (カマド)</p> <p>P L 8. I 区下面 S I 92 (北から)
I 区下面 S I 92 (南から)</p> <p>P L 9. I 区下面 S B72 (南から)
I 区下面 S B81 (東から)</p> <p>P L 10. I 区下面 S D46 (北から)
I 区下面 S D46 (土器出土状況)</p> <p>P L 11. II 区上面全景 (部分)
II 区上面全景 (部分南から)</p> <p>P L 12. II 区上面 S D484 (東から)
II 区上面 S D484</p> <p>P L 13. II 区下面全景 (部分南から)
II 区下面全景 (北から)</p> <p>P L 14. II 区下面 S E43 (土器出土状況)
II 区下面 S E43 (土器出土状況)</p> <p>P L 15. II 区下面 S D154
II 区下面 S D154 (東から)</p> <p>P L 16. II 区下面 S D45 (北から)
II 区下面 S D45 (断面)</p> <p>P L 17. III 区全景 (南から)
III 区全景 (北から)</p> <p>P L 18. III 区 S B41 (南から)
III 区 S D237 (西端)</p> | <p>P L 19. III 区 S D237 (遺物出土状況)
III 区 S D237 (遺物出土状況)</p> <p>P L 20. III 区 S D238 (北から)
III 区 S D238 (東から)</p> <p>P L 21. III 区 S D238 (遺物出土状況)
III 区 S D238 (遺物出土状況)</p> <p>P L 22. III 区 S D55 (断面)
III 区 S D55 (石包丁)</p> <p>P L 23. IV 区上面全景 (北から)
IV 区上面全景 (南から)</p> <p>P L 24. IV 区上面 S D162 (西から)
IV 区上面 S D162 (遺物出土状況)</p> <p>P L 25. IV 区下面全景 (北から)
IV 区下面全景 (南から)</p> <p>P L 26. IV 区下面 S I 01 (北から)
IV 区下面 S I 01 (北から)</p> <p>P L 27. IV 区下面 S I 02 (東から)
IV 区下面 S I 02 (北から)</p> <p>P L 28. V 区上面全景 (東から)
V 区上面 S D01 (南から)</p> <p>P L 29. V 区下面全景 (東から)
V 区下面全景 (西から)</p> <p>P L 30. VI 区上面全景 (南から)
VI 区上面 S B01 (南から)</p> <p>P L 31. VI 区上面 S E01 (上部)
VI 区上面 S E01 (下部)</p> <p>P L 32. VI 区上面 S K21
VI 区上面 S K23</p> <p>P L 33. VI 区上面 S G01 (西から)
VI 区上面 S G01 (北から)</p> <p>P L 34. VI 区中面全景 (西から)
VI 区中面全景 (東から)</p> <p>P L 35. VI 区中面 S E101 (南から)
VI 区中面 S E101</p> <p>P L 36. VI 区下面西端
VI 区下面 S E102</p> |
|--|--|

- | | |
|---|--|
| <p>P L 37. VI区下面 S E103, 104
VI区下面 S E104 (井戸枠)</p> <p>P L 38. VII区上面全景 (東から)
VII区上面東端 (北から)</p> <p>P L 39. VII区上面 S E01
VII区下面全景 (東から)</p> <p>P L 40. VII区下面全景 (西から)
VII区下面 S E01 (東から)</p> <p>P L 41. VII区下面 S K103
VII区下面 S K108</p> <p>P L 42. VII区下面 S K108 (東から)
VII区下面 S K117 (西から)</p> <p>P L 43. VII区下面 SW101
VII区下面 S W101</p> <p>P L 44. VII区下面 SW101
VII区下面 SW101</p> <p>P L 45. VIII区上面全景 (西から)
VIII区上面全景 (東から)</p> <p>P L 46. VIII区上面東側 (西から)
VIII区上面東側 (西から)</p> <p>P L 47. VIII区上面 (東から)
VIII区上面 (北から)</p> <p>P L 48. VIII区上面 S D508 (西から)
VIII区上面 S D512</p> <p>P L 49. VIII区上面 S X501~505
VIII区上面 S X501·502</p> <p>P L 50. VIII区上面 S X501·502
VIII区上面 S X501</p> <p>P L 51. VIII区上面 S X502
VIII区上面 S X503·504(西から)</p> <p>P L 52. VIII区上面 S X505 (東から)
VIII区上面 S X505</p> <p>P L 53. VIII区下面 (東から)
VIII区下面 (西から)</p> <p>P L 54. VIII区下面 (西から)
VIII区下面 S D1001~1004
(南から)</p> | <p>P L 55. IX区上面全景 (西から)
IX区上面全景 (東から)</p> <p>P L 56. IX区上面北東部 (西から)
IX区上面 S I 01 (南から)</p> <p>P L 57. IX区上面 S I 01 (東から)
IX区上面 S B01 (東から)</p> <p>P L 58. IX区上面 S B02
IX区上面 S B03</p> <p>P L 59. IX区上面 S B04 (北から)
IX区上面 S E01</p> <p>P L 60. IX区上面 S D03 (土馬)
IX区上面 S X01</p> <p>P L 61. I区上面 S E303
S X304 · 308 · 315
· 322 · 333</p> <p>P L 62. I区上面 S K333
S D356 · 359
I区下面 S I 89 · 90 · 91 · 92
S B71</p> <p>P L 63. I区下面 S B71
S E95
S X182
S K97 · 98 · 99 · 209</p> <p>P L 64. I区下面 S K98 · 99 · 106 · 108
S K109 · 499</p> <p>P L 65. I区下面 S K103 · 105
S K106 · 108</p> <p>P L 66. I区下面 S K105 · 114
II区下面 S D44</p> <p>P L 67. I区下面 S D44 · 46</p> <p>P L 68. I区下面 S D46 · 121 · 123 ·
134 · 154
II区上面 S D484 · 490
II区下面 S K220</p> <p>P L 69. II区下面 S D45 · 151
S E43</p> <p>P L 70. II区下面 S D45</p> <p>P L 71. II区下面 S D45</p> |
|---|--|

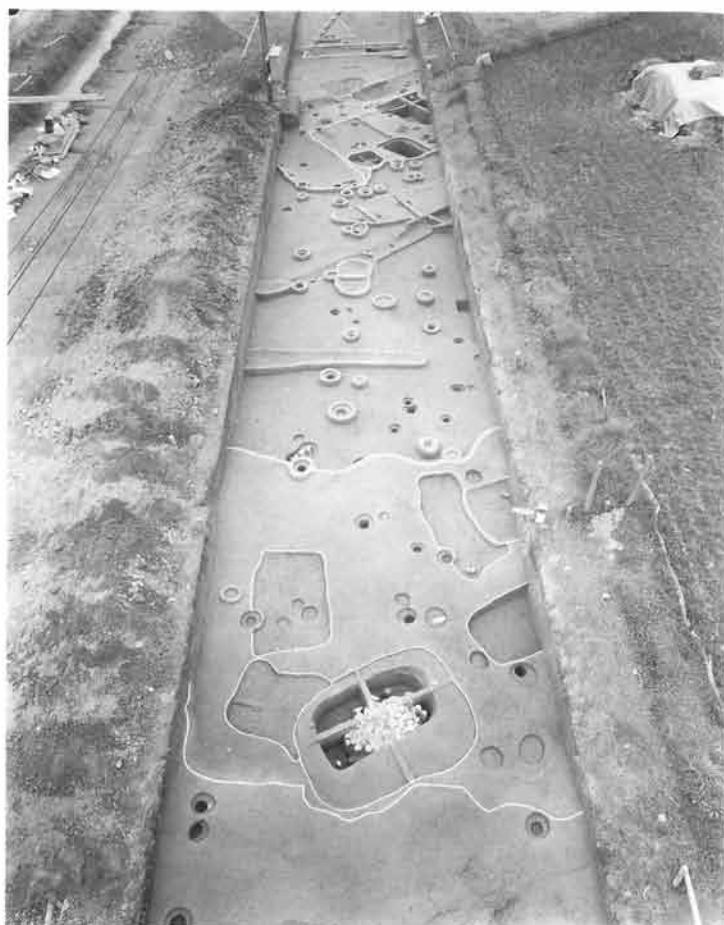
- | | | | | |
|---------|-------------|--------------------|----------|----------------------|
| P L 72. | II区下面 | S D 45 | P L 94. | 縄文土器 |
| P L 73. | II区下面 | S D 45 | P L 95. | 縄文土器 |
| | I · II区包含層 | | P L 96. | 縄文土器 |
| P L 74. | I · II区包含層 | | P L 97. | 縄文土器 |
| P L 75. | III区 | S D 237 | P L 98. | 縄文土器 |
| P L 76. | III区 | S D 238 | P L 99. | 縄文土器 |
| P L 77. | III区 | S D 238 | P L 100. | 縄文土器 |
| | IV区上面 | S D 162 | P L 101. | 縄文土器 |
| P L 78. | VI区上面 | S K 13 · 22 | P L 102. | 縄文土器 |
| P L 79. | VI区上面 | S K 13 · 21 · 23 | P L 103. | 縄文土器 · 石器 |
| P L 80. | VI区上面 | S K 21 · 23 | P L 104. | 石器類 |
| P L 81. | VI区上面 | S K 21 · 23 | P L 105. | 銅器 · 鉄器類 |
| P L 82. | VI区上面 | S D 09 | | VI区 S D 101 · S E 01 |
| P L 83. | VI区上面 | S D 09 | | VII区 S K 103 |
| | VI区中面 | S D 101 | | VIII区 S D 09 |
| P L 84. | VI区下面 | S E 104 | P L 106. | 花粉化石 |
| P L 85. | VI区上面 | S E 01 | P L 107. | 花粉化石 |
| | VI区中面 | S E 101 | P L 108. | 植物硅酸体 |
| | VI区下面 | S E 104 | | |
| P L 86. | VI区包含層 | | | |
| | VI区上面 | S D 09 | | |
| | VII区下面 | S K 103 | | |
| P L 87. | VII区下面 | S K 103 · 105 | | |
| | | S K 108 · 167 | | |
| P L 88. | VII区下面 | S K 105 · 108 | | |
| | VIII区上面 | S D 02 | | |
| | IX区包含層 | | | |
| P L 89. | VIII区上面 | S D 512 | | |
| | VIII区下面 | S D 1006 · 1012 | | |
| | IX区下面 | S D 03 | | |
| P L 90. | VI区包含層 | | | |
| | VII区 | S W101 | | |
| | VIII区 | S X01 | | |
| | VIII区上面 | S X501 · 502 · 503 | | |
| P L 91. | VI区包含層、VII区 | S W101 | | |
| | VIII区 | S X504 | | |
| P L 92. | 縄文土器 | | | |
| P L 93. | 縄文土器 | | | |



I 区上面全景（南から）2-5



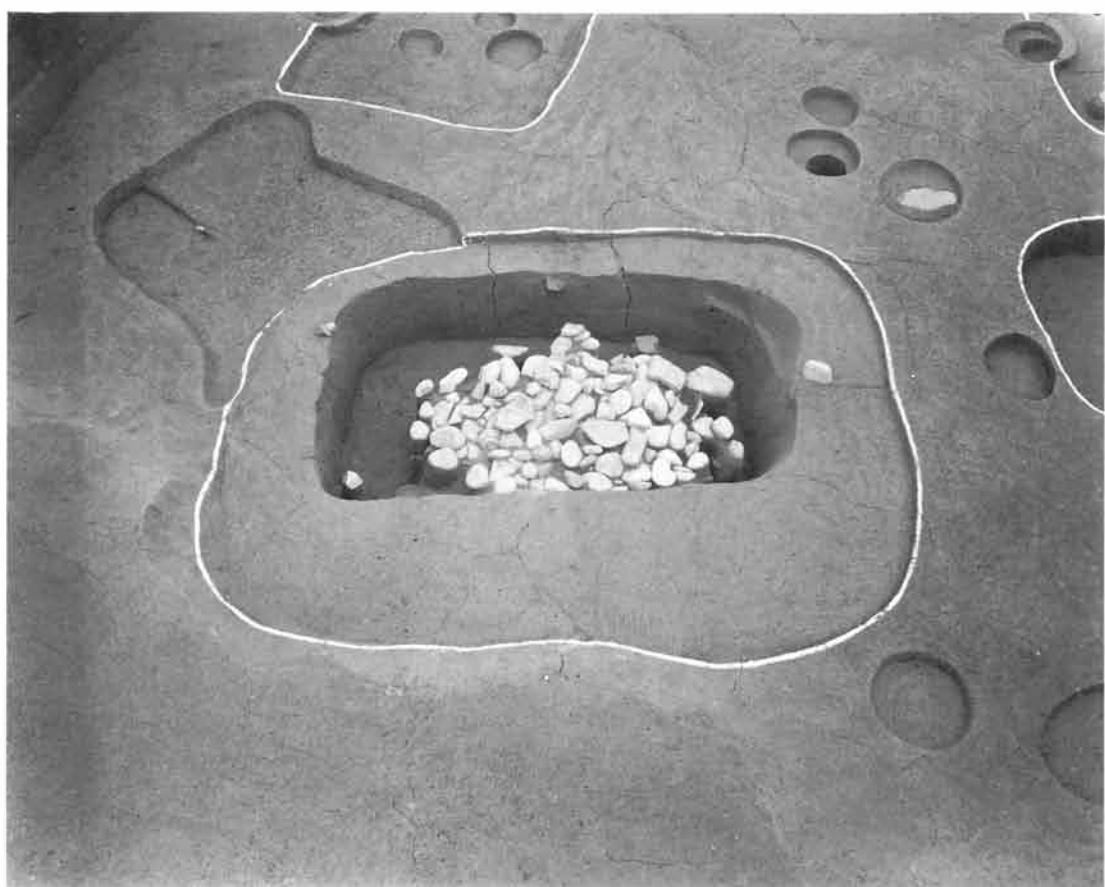
I 全景（南から部分）55-6



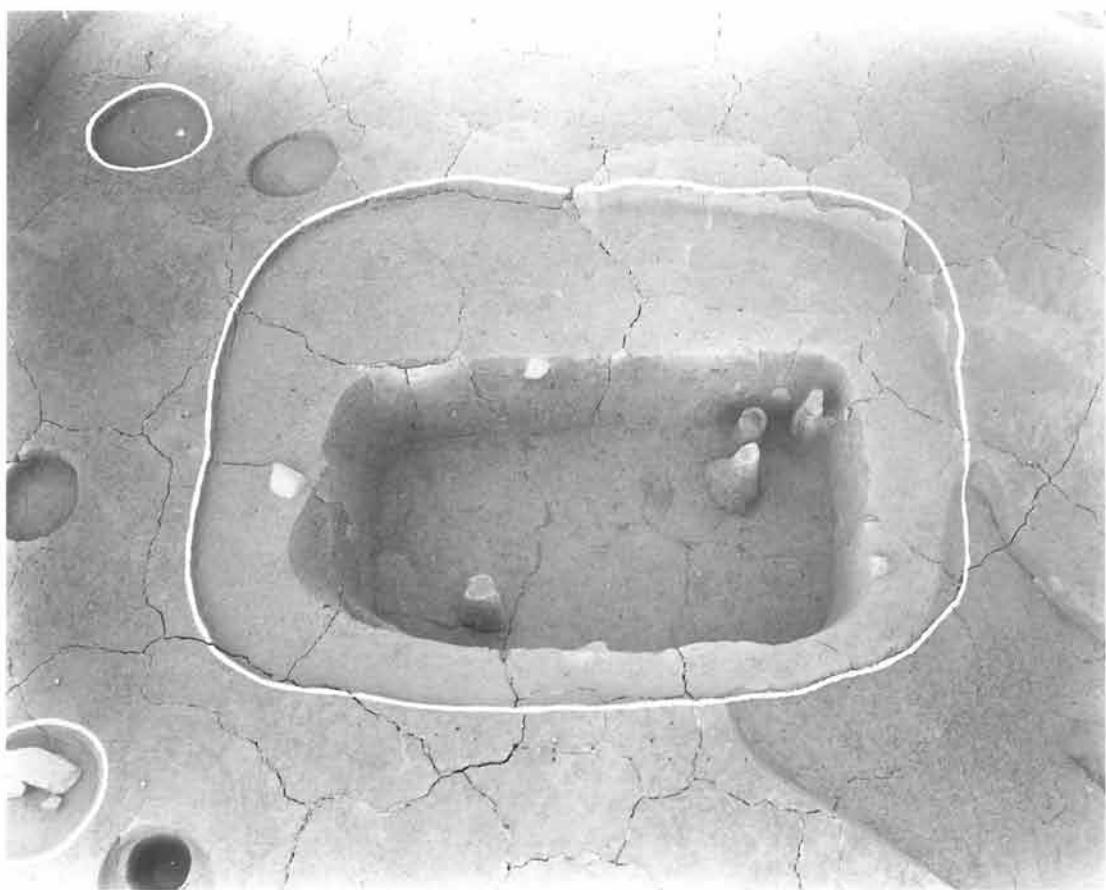
I 区上面（部分）
全景（北から）
55-22



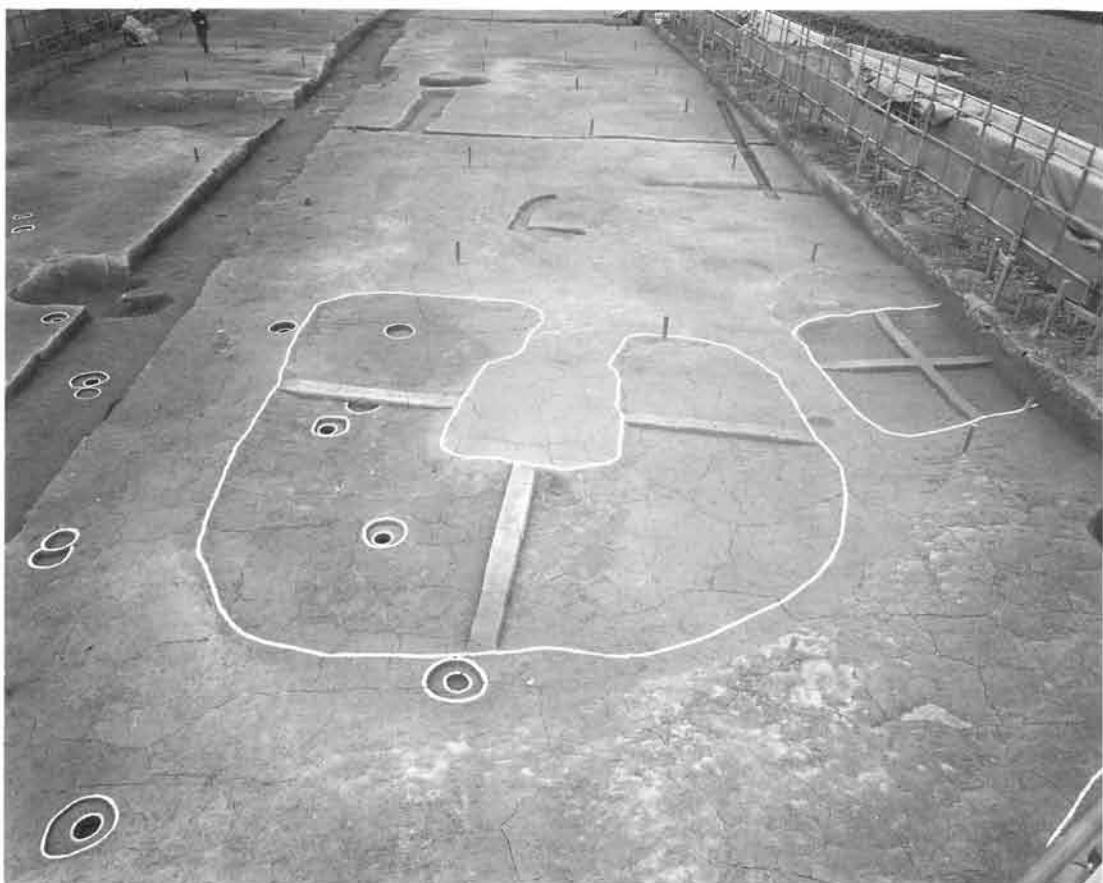
I 区上面（部分）
全景（南から）
55-24



I 区上面SX322（北から）55-34



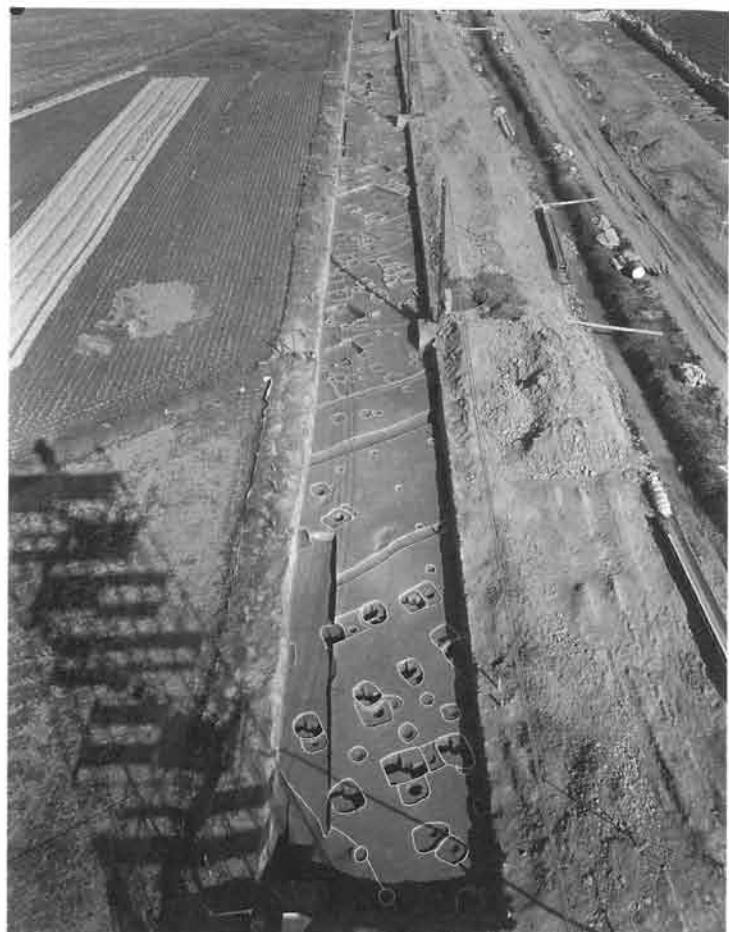
I 上面SX322土器の残存（南から）55-42



I 区上面SX328（南から）2-48



I 区上面SX329（南から）2-51



I 区下面（全景）
(南から)
54-3



I 区下面（全景一部）
(南から)
60-1

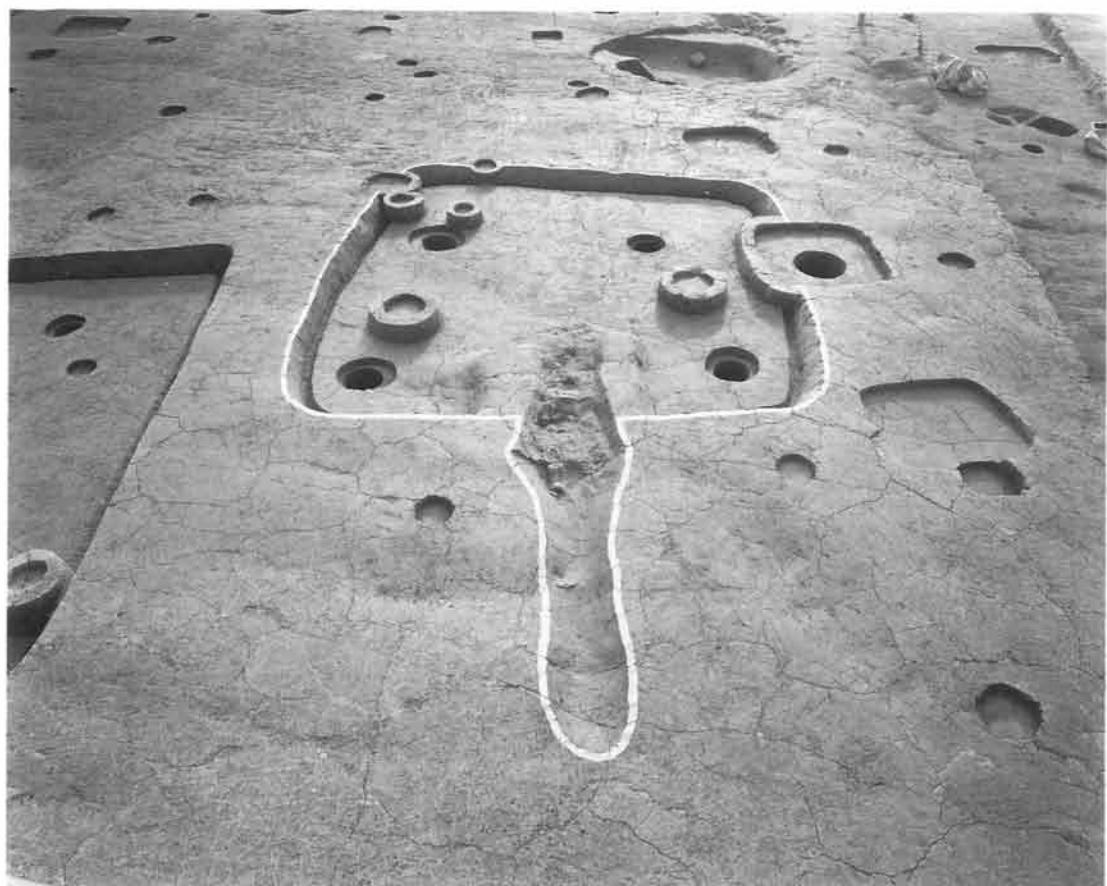




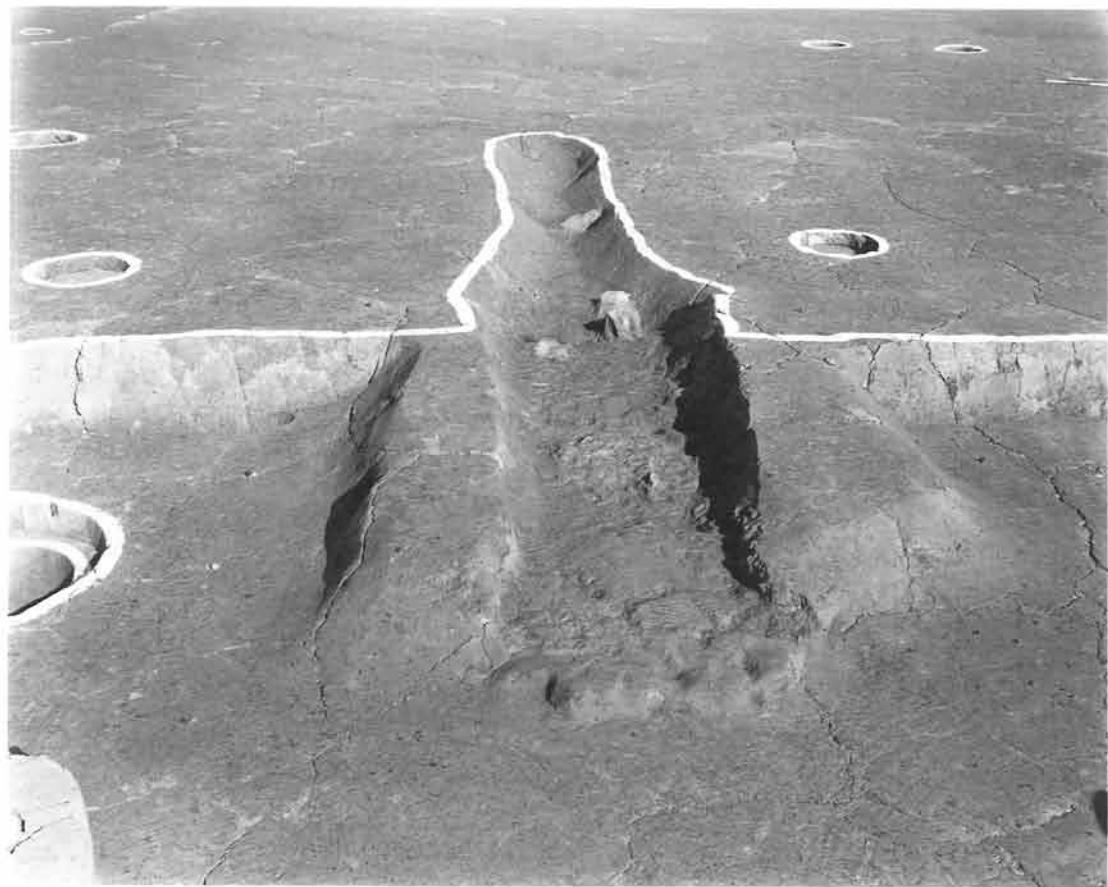
I 区下面SI91（西から） 4-44



I 区下面SI91カマド 4-48



I 区下面SI92 (北から) 4-59



I 区下面SI92 (南から) 4-58



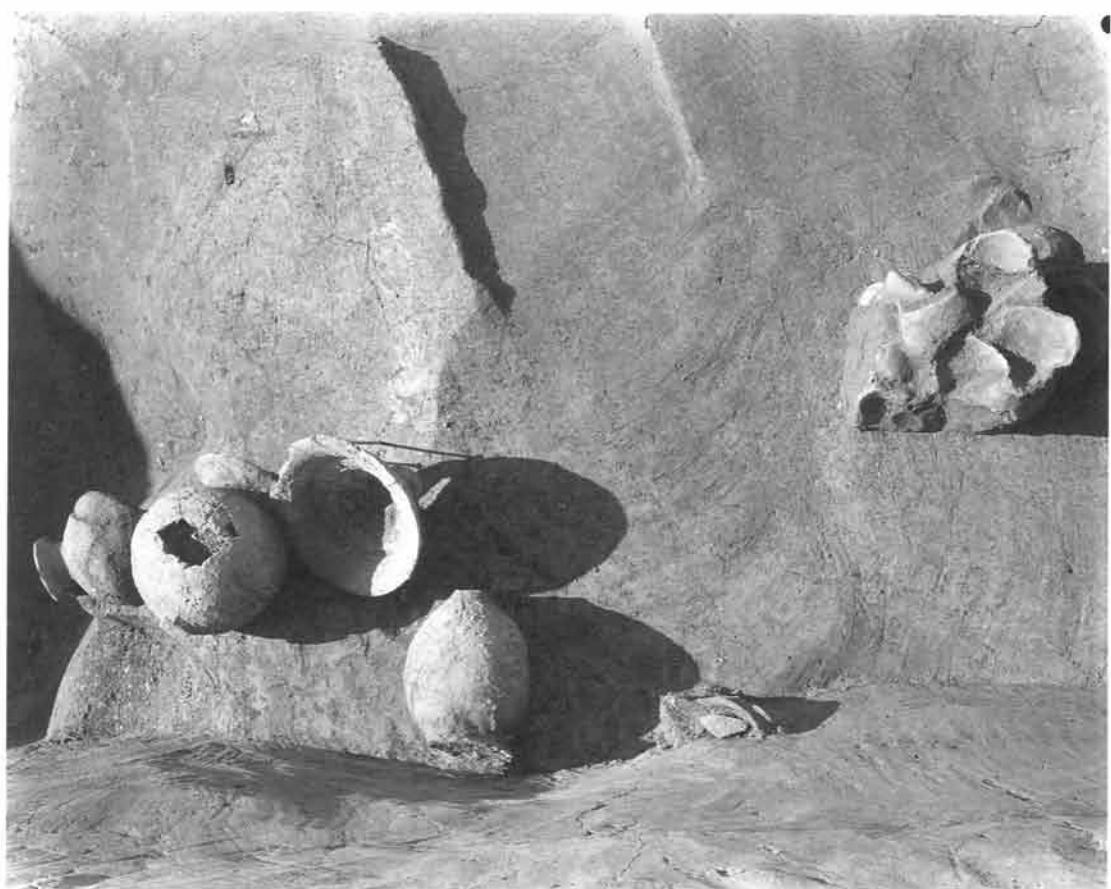
I 区下面SB72（南から）3-22



I 区下面SB81（東から）3-25



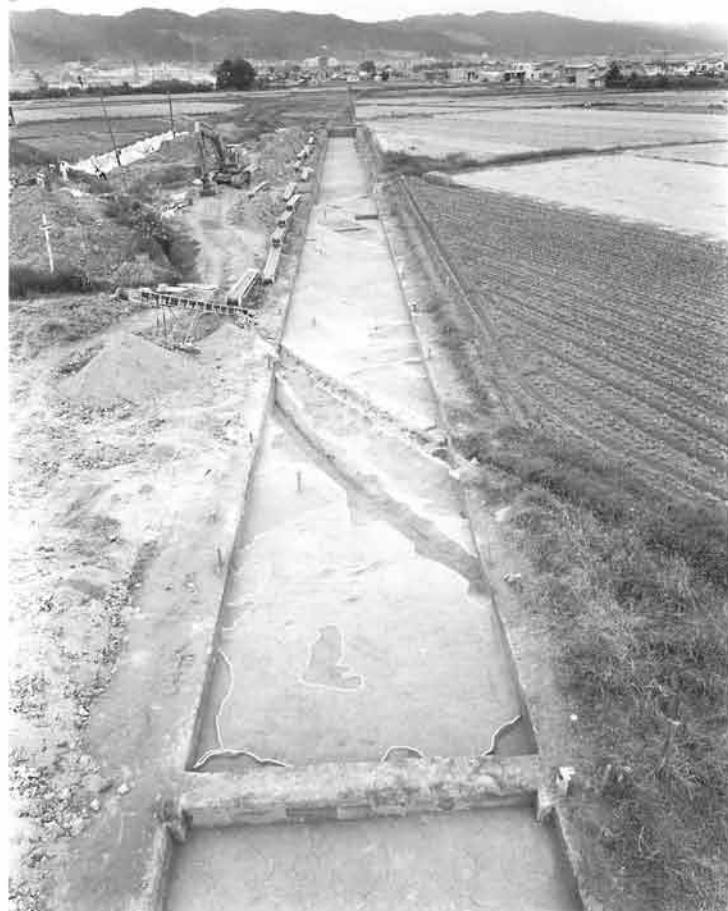
I 区下面SD46（北から）64-16



I 区下面SD46土器出土状况 64-19



II区上面 全景(部分) 6-10



II区上面全景
(部分南より)
66-21



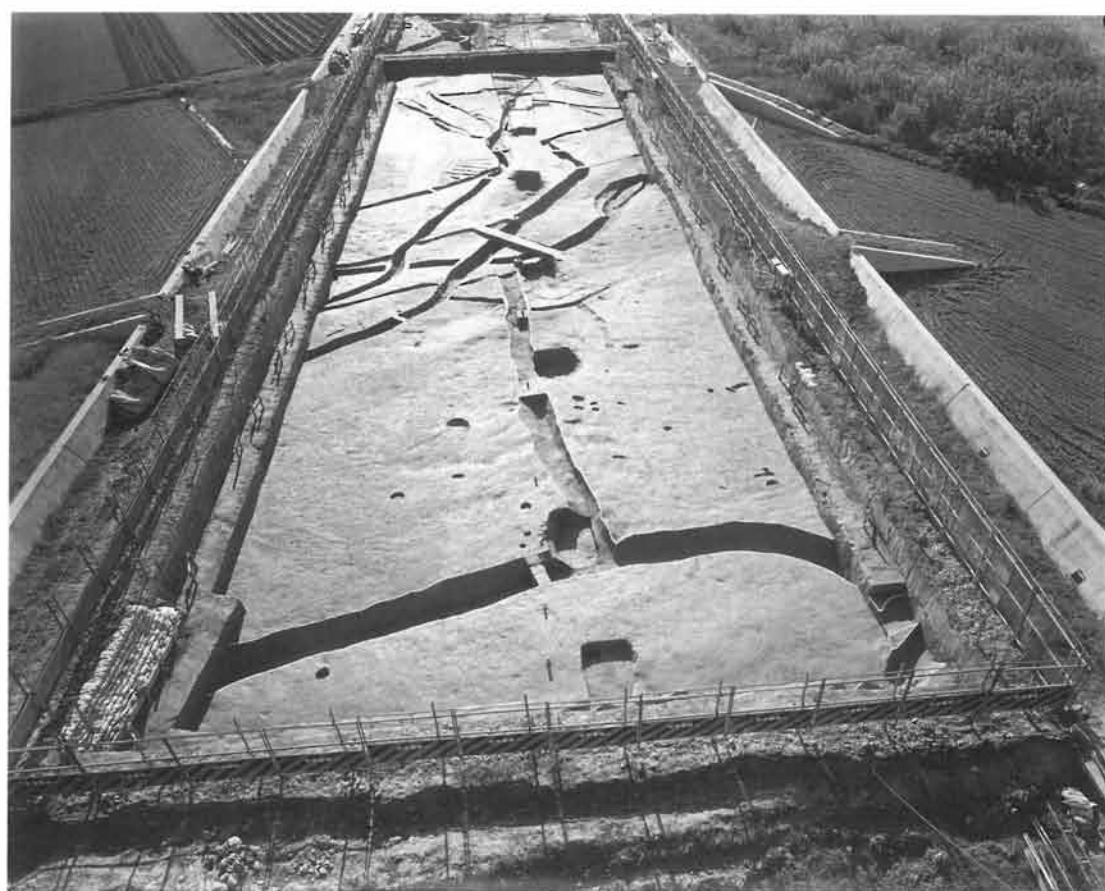
II区上面SD484 (東から) 7-16



II区上面SD484 7-20



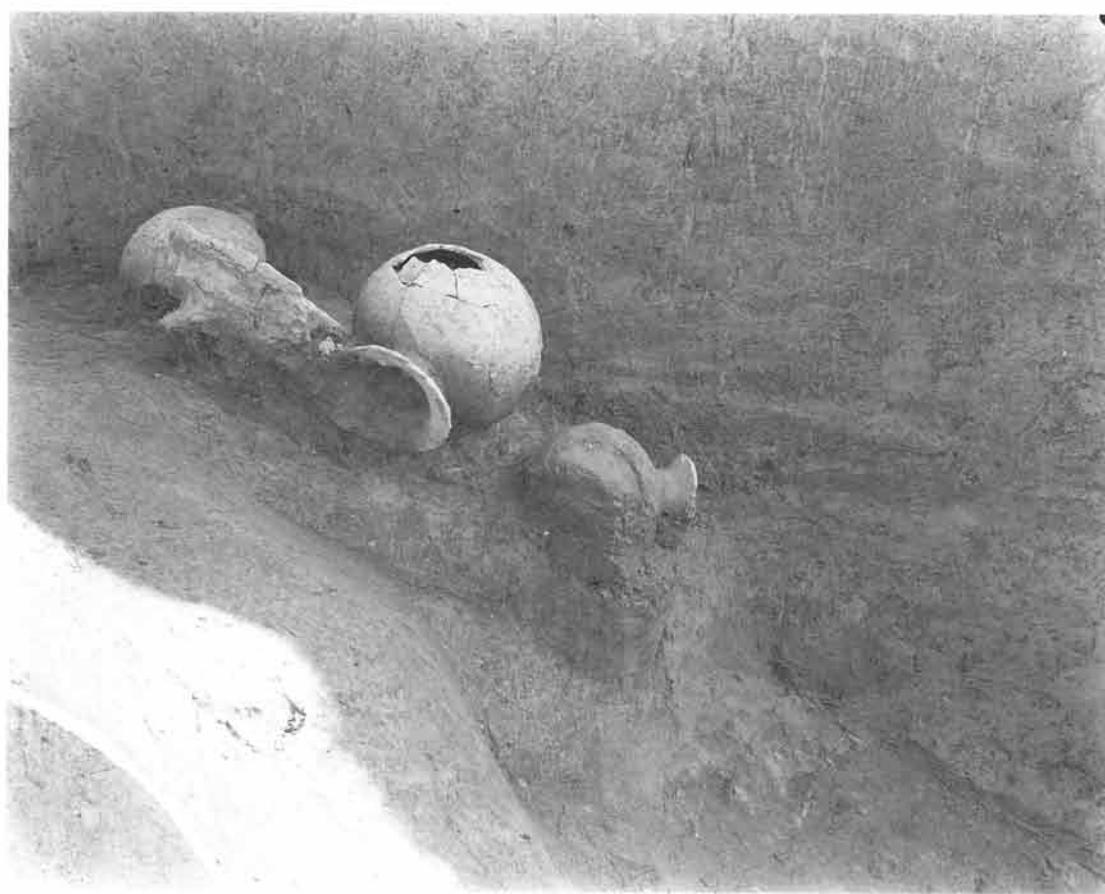
II区下面全景（部分南から） 8-2



II区下面全景（北から） 6-2



II区下面SE43土器出土状况 64—6



II区下面SE43土器出土状况 64—25



II区下面SD154 65-16



II区下面SD154（東から） 6-16



II区下面SD45（北から） 8-30



II区下面SD45断面 8-37



III区全景（南から）10-10



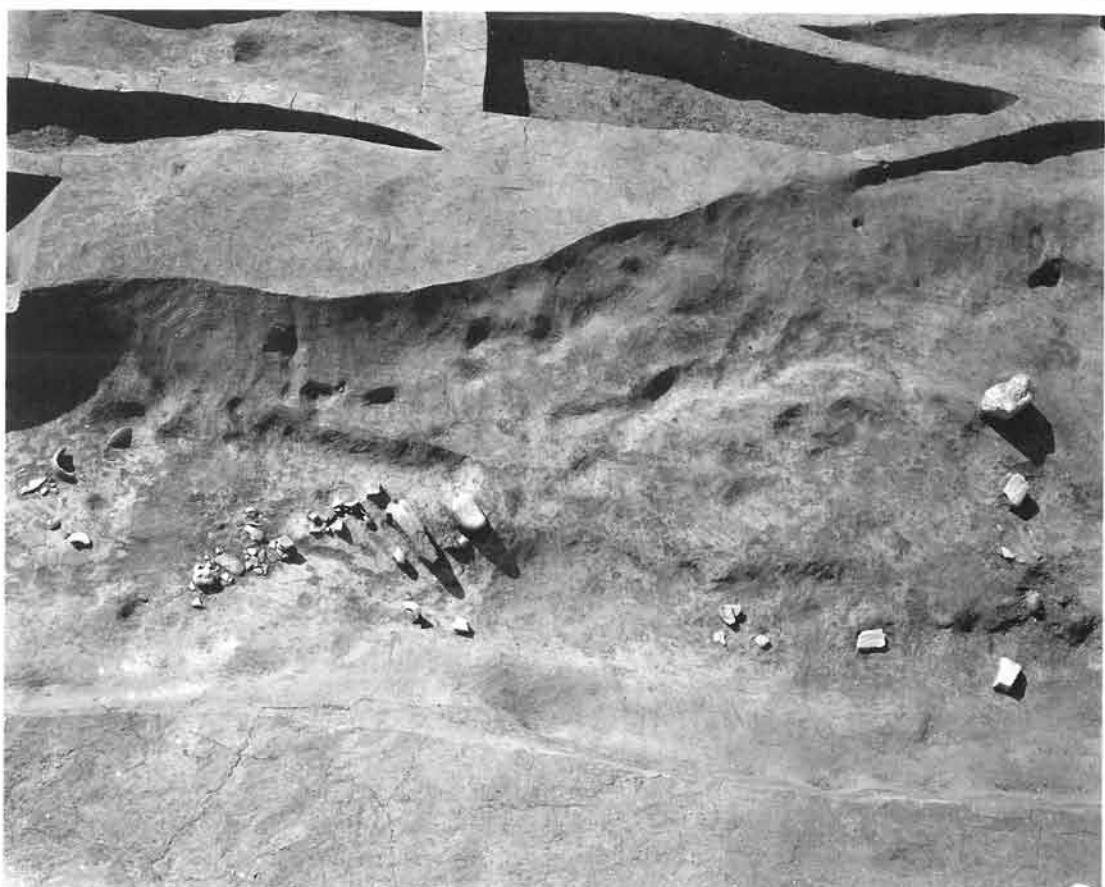
III区全景（北から）10-14



III区SB41（南から）10-46



III区SD237（西端）17-54



III区SD237遺物出土状況 15-2



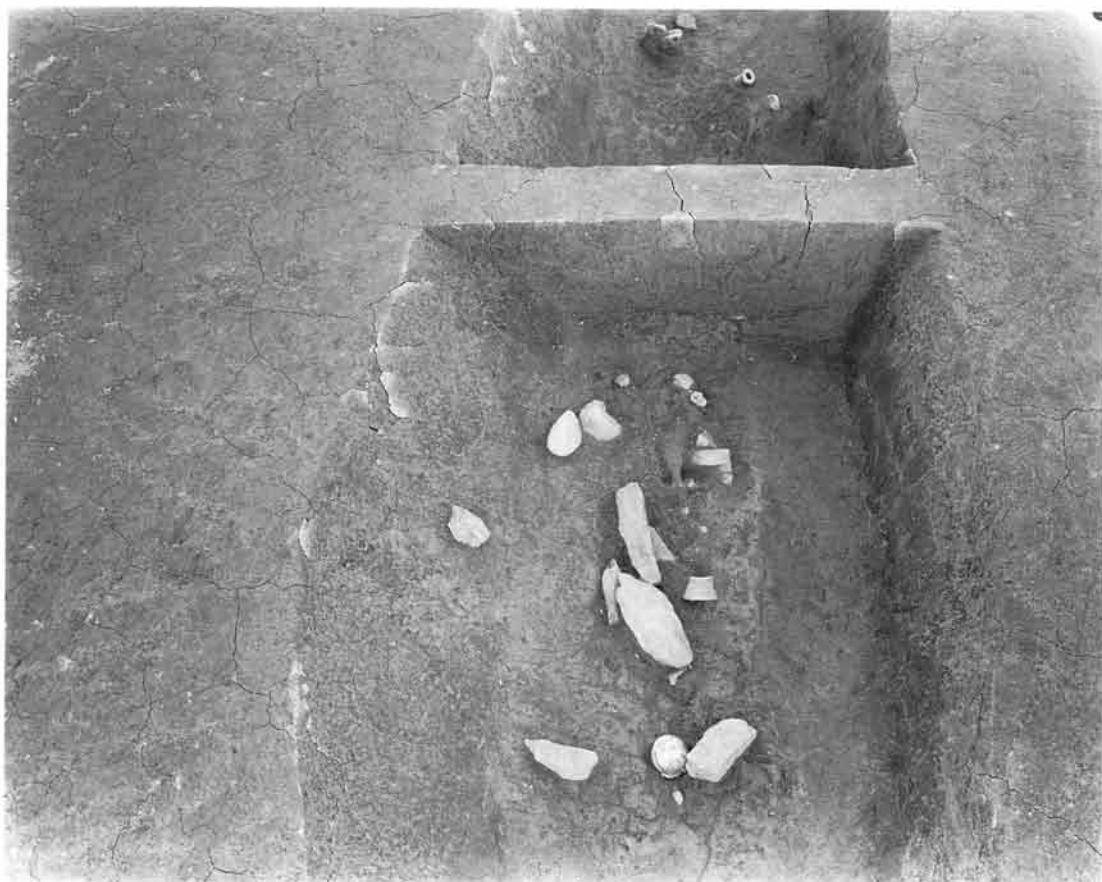
III区SD237遺物出土状況 15-34



III区SD238（北から）16-2



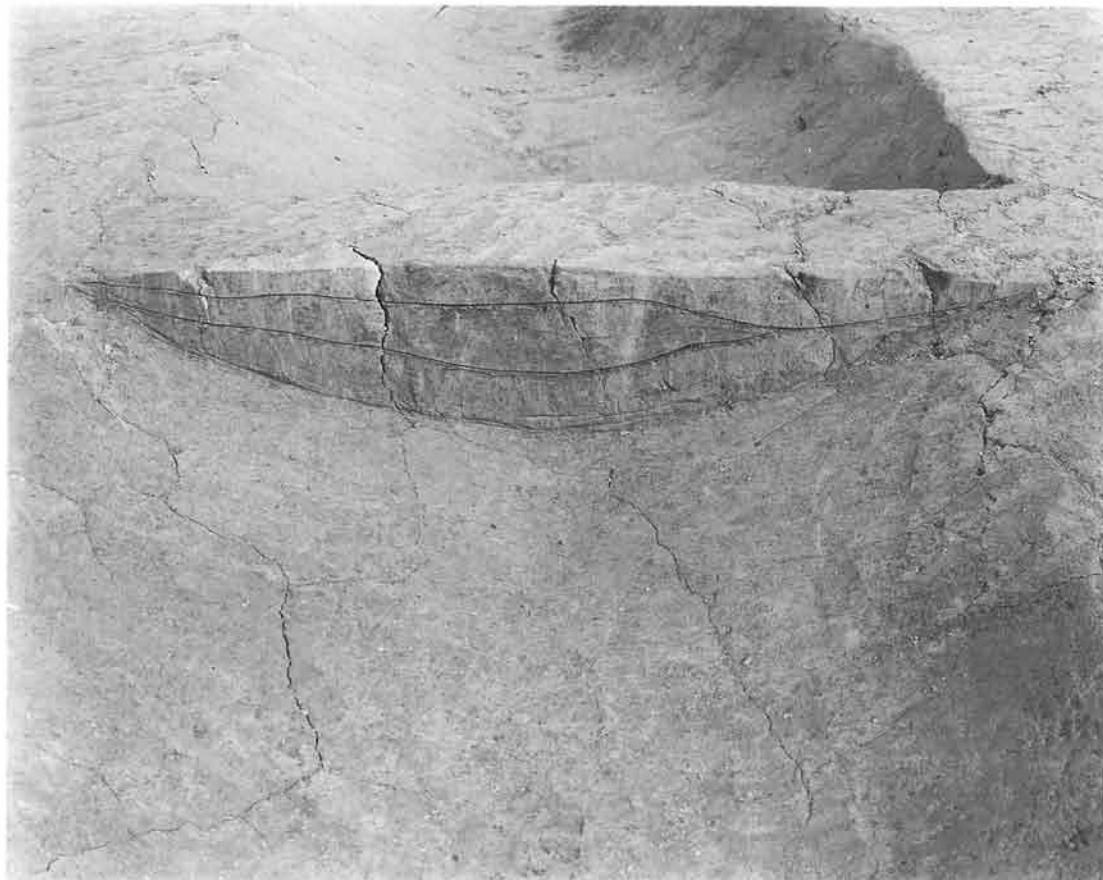
III区SD238（東から）17-58



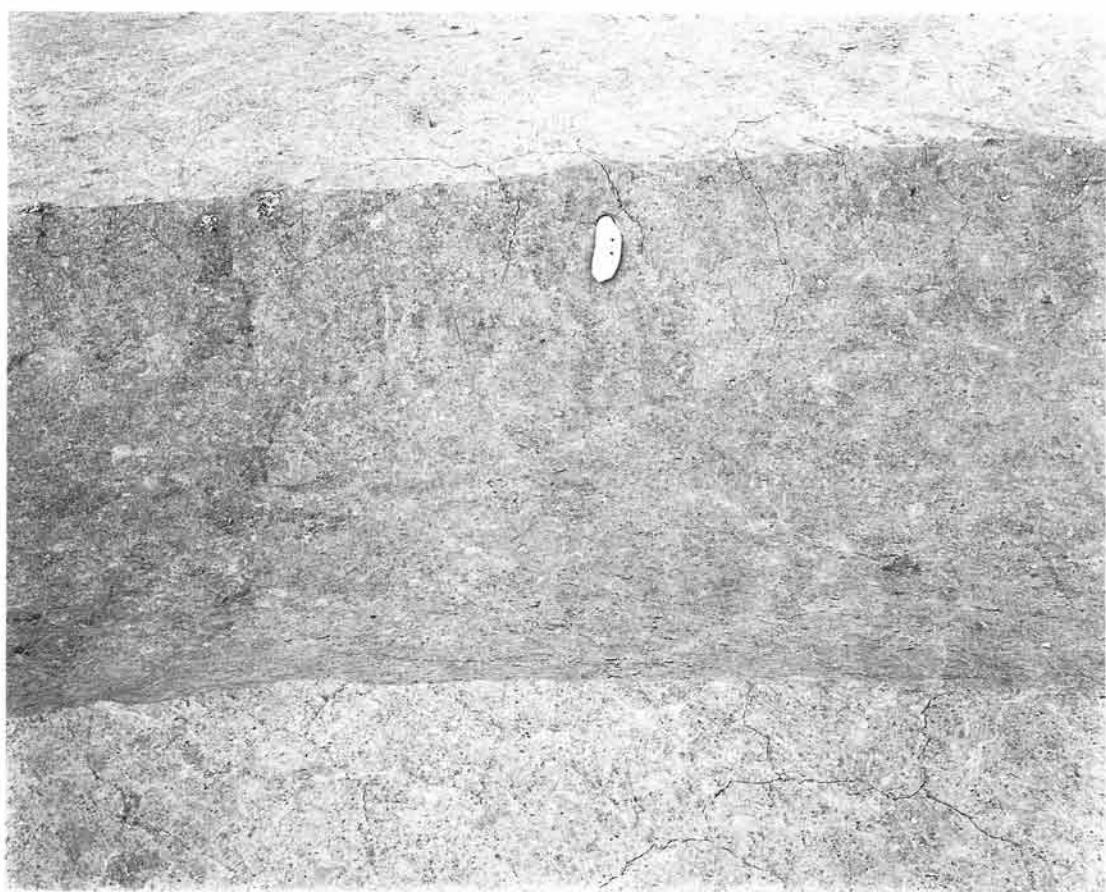
III区SD238遺物出土状況 16-30



III区SD238遺物出土状況 16-36



III区SD55断面 17—18



III区SD55石包丁出土状况 17—26



IV区上面全景（北から） 73-2



IV区上面全景（南から） 73-6



IV区上面SD162（西から）73-20



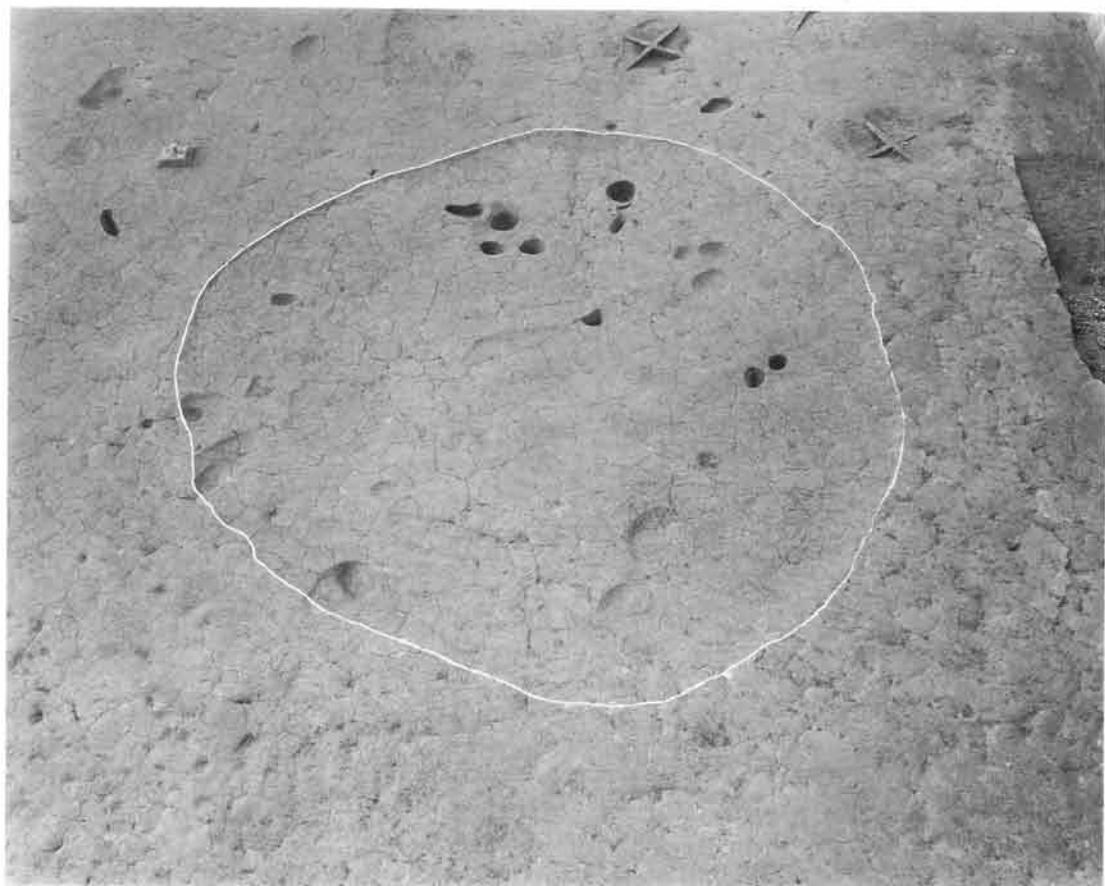
IV区上面SD162遺物出土状況 73-22



IV区下面全景（北から）70-1



IV区下面全景（南から）70-5



IV区下面SI01（北から）70-30



IV区下面SI01（北から）70-39



IV区下面SI02（東から）70-20



IV区下面SI02（北から）70-25



V区上面全景（東から）75-2



V区上面SD01（南から）75-4



V区下面全景（東から）75-5



V区下面全景（西から）75-6



VI区上面北東部全景（南から）76-1



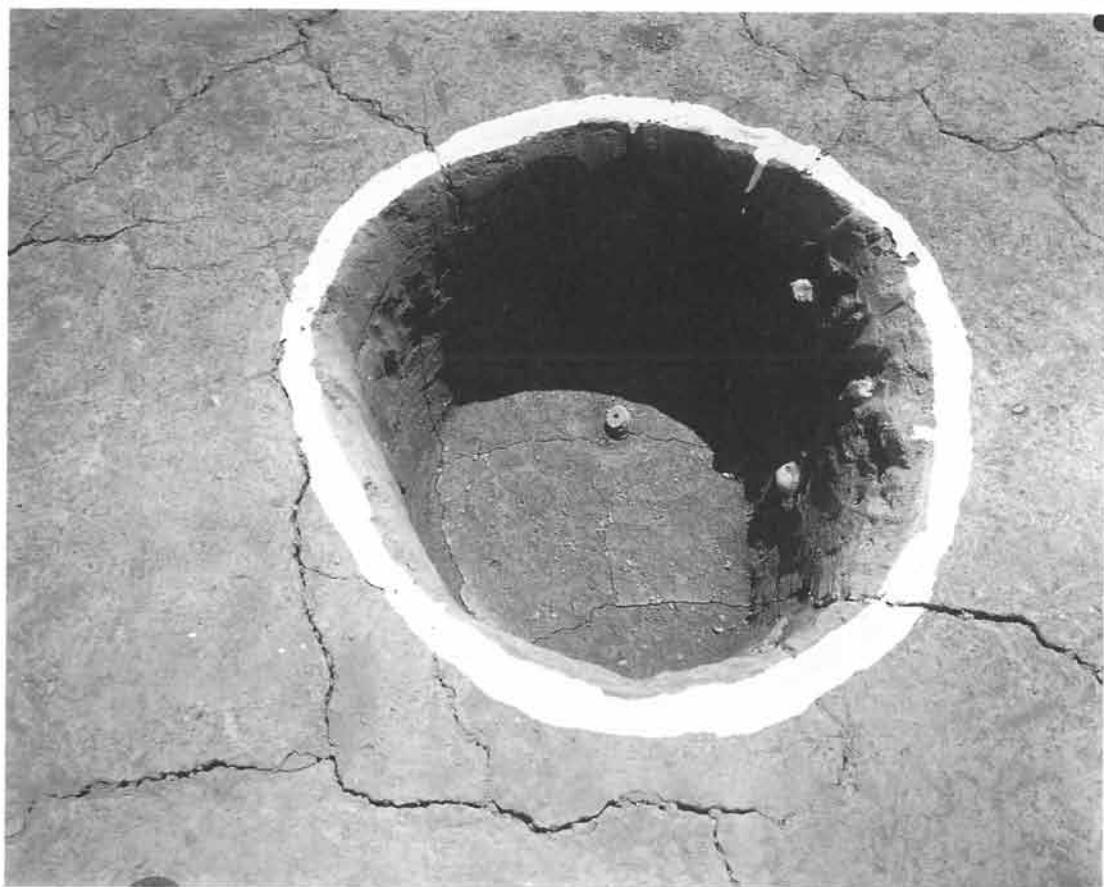
VI区上面SB01（南から）76-4



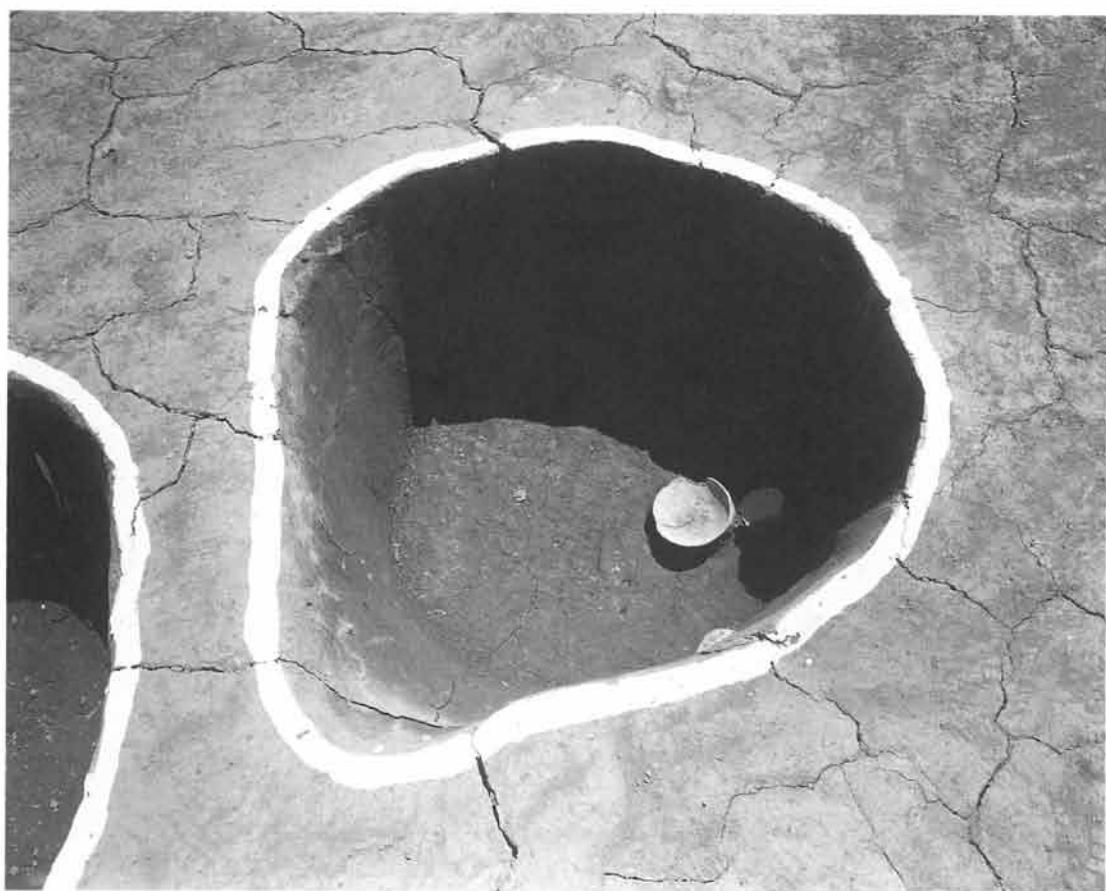
VI区上面SE01上部石組 76-8



VI区上面SE01下部井筒 76-9



VI区上面SK21 76-11



VI区上面SK23 76-12



VI区上面SG01遺物出土状況（西から）76-13



VI区上面SG01土器（北から）76-16



VI区中面全景（西から）76-25



VI区中面全景（東から）76-29



VI区中面SE101（南東から）76-59



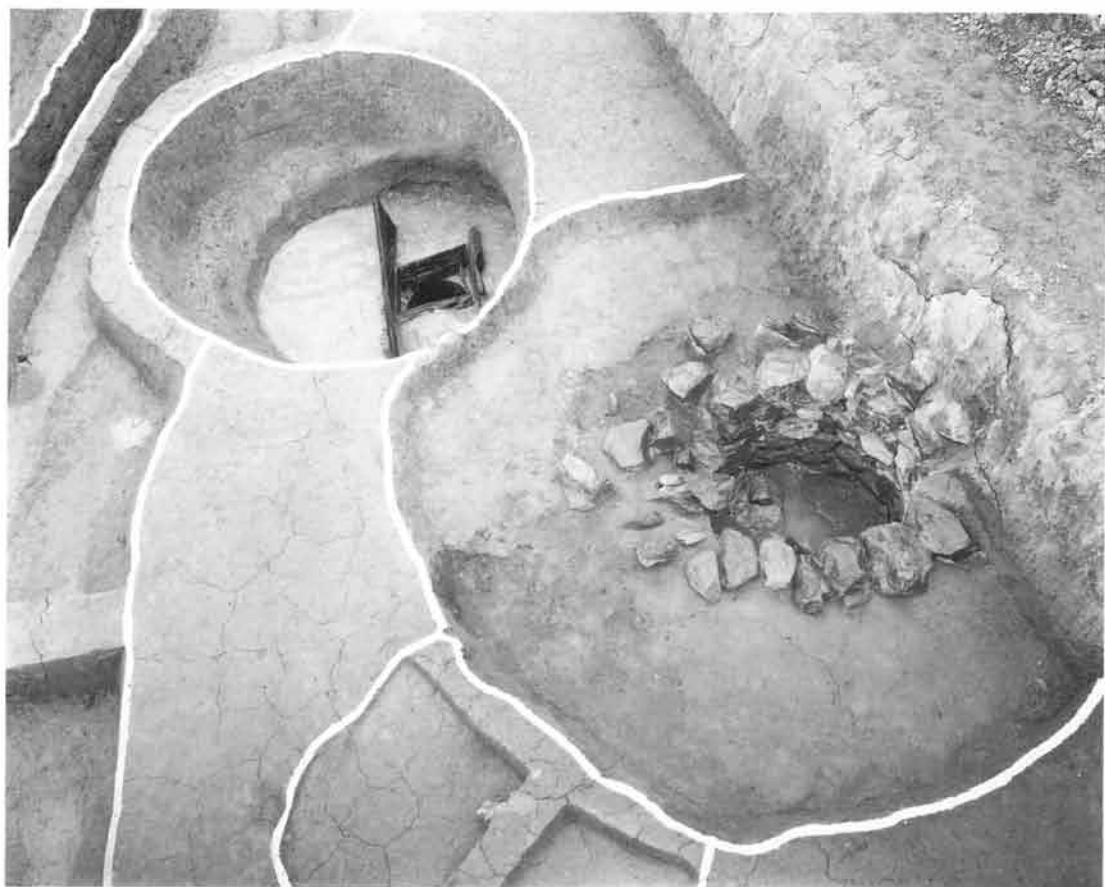
VI区中面SE101 76-41



VI区下面（西端） 76-61



VI区下面SE102 76-39



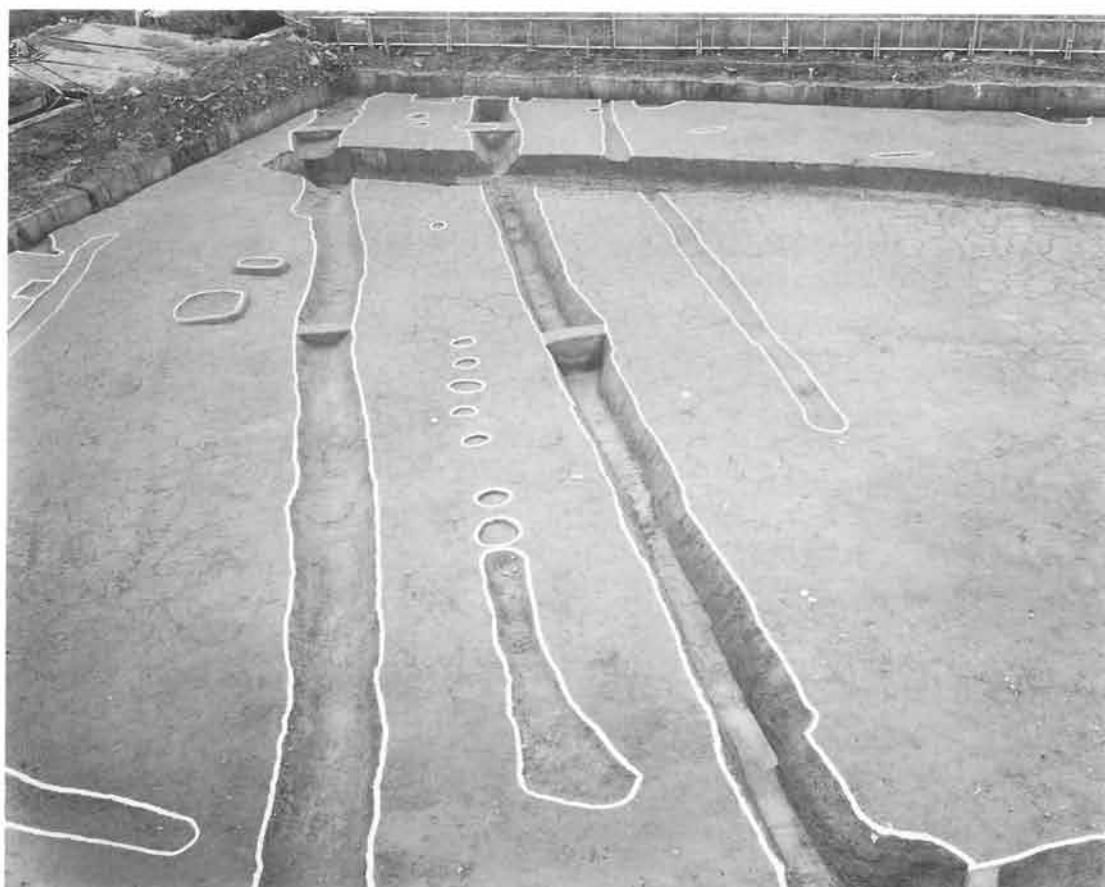
VI区下面SE103・104（東から）76-43



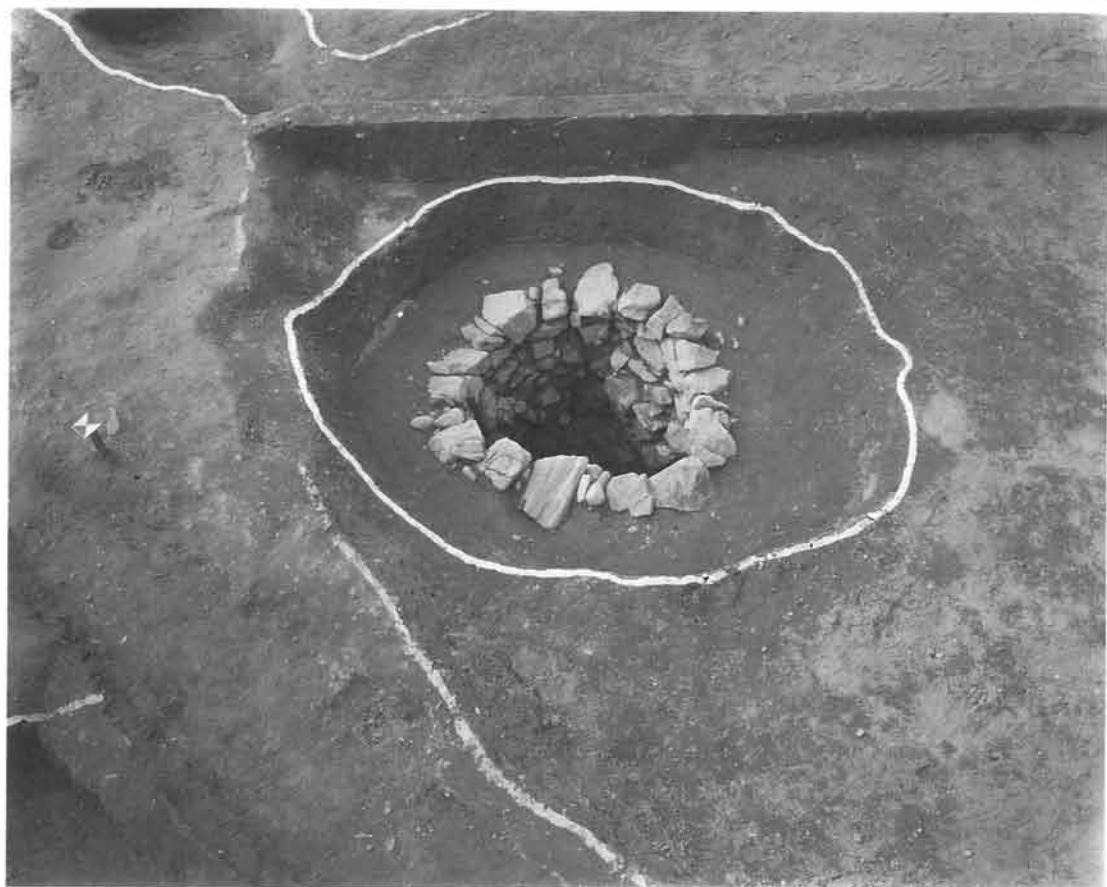
VI区下面SE104（井戸枠）76-45



VII区上面全景（東から）77-5



VII区上面東端（北から）77-6



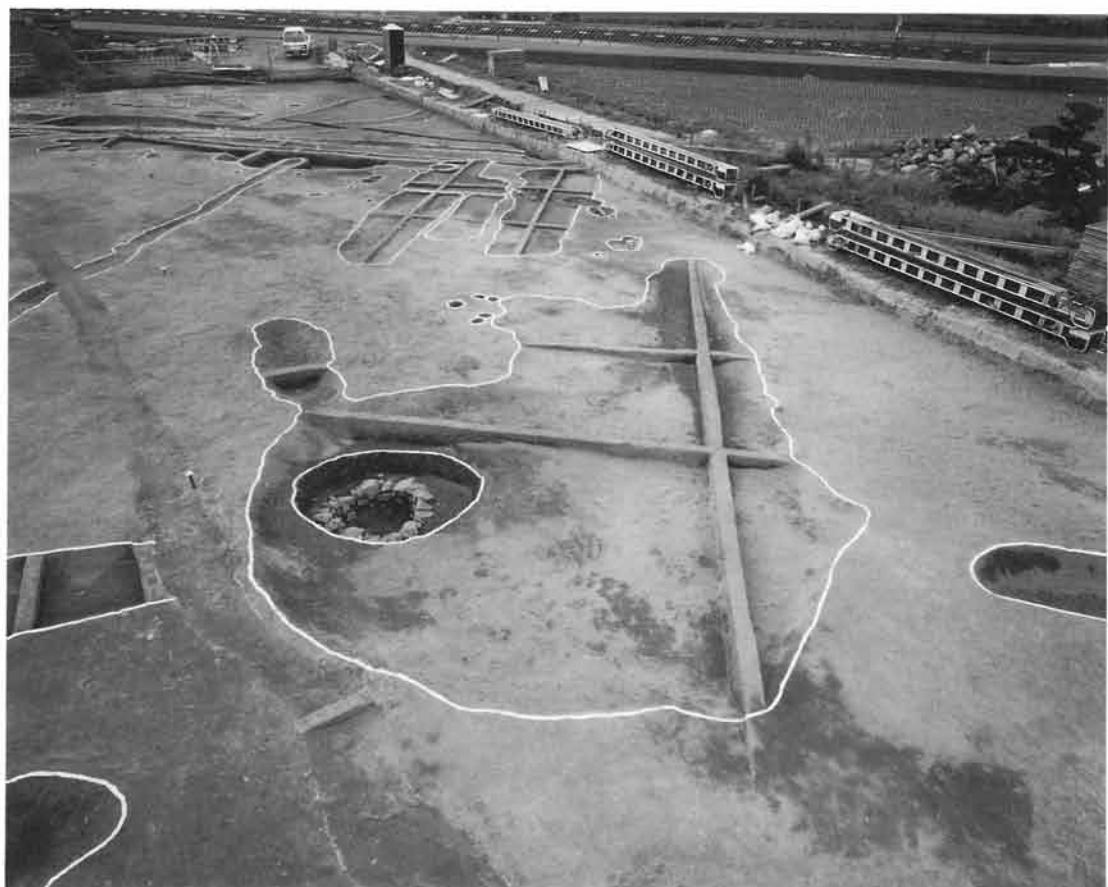
VII区上面SE01 77-32



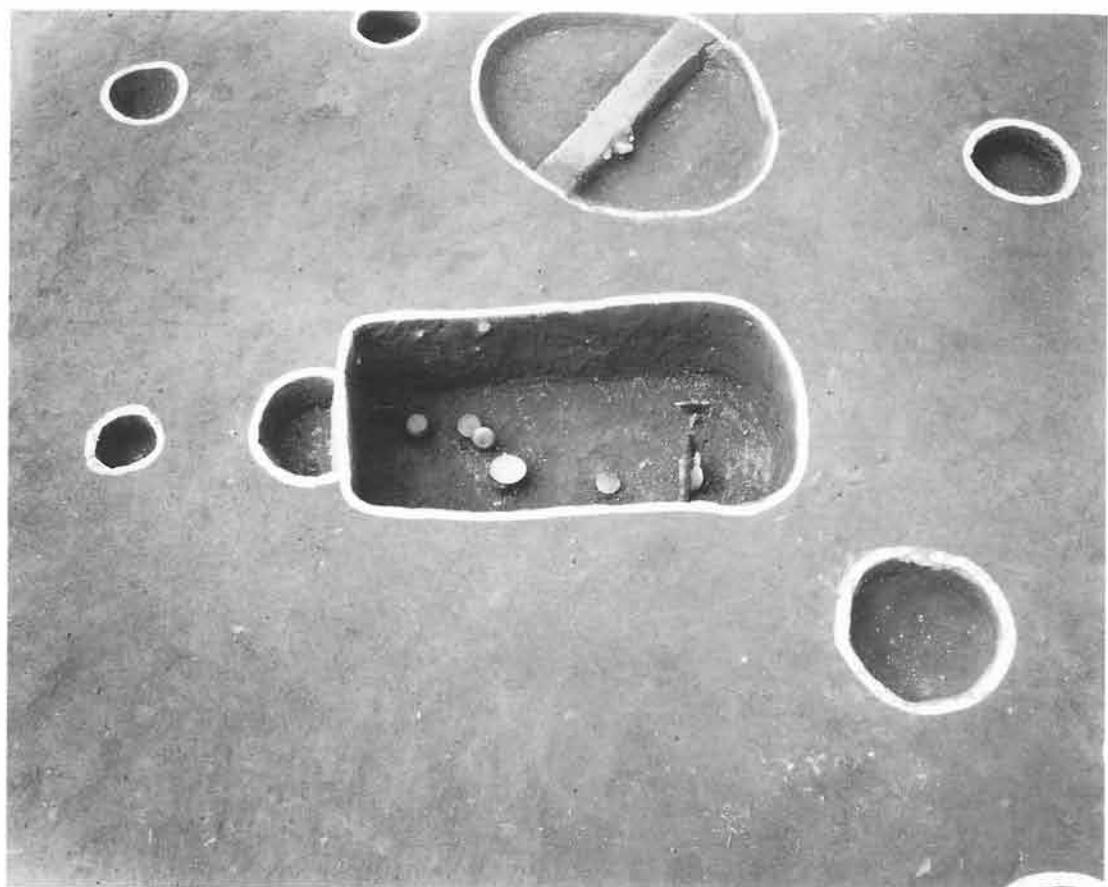
VII区下面全景（東から）77-11



VII区下面全景（西から）77-12



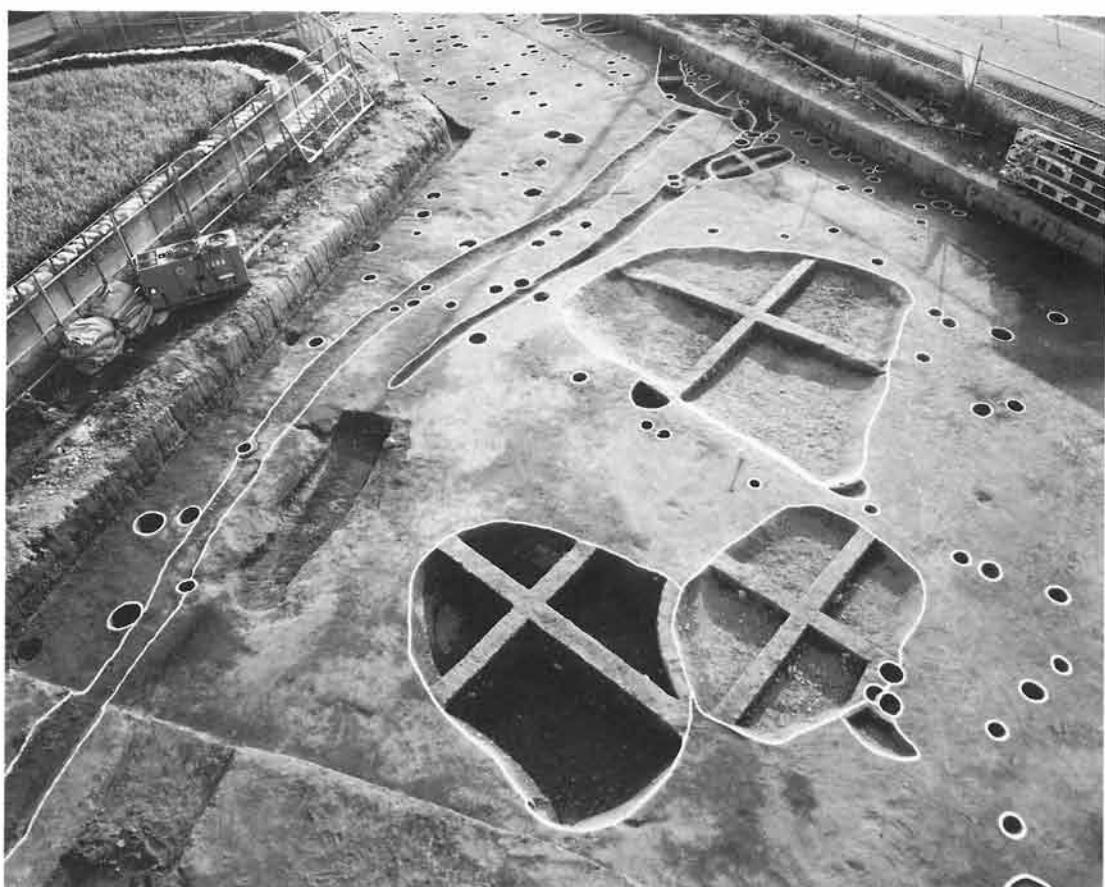
VII区下面・SE01（東から）77-34



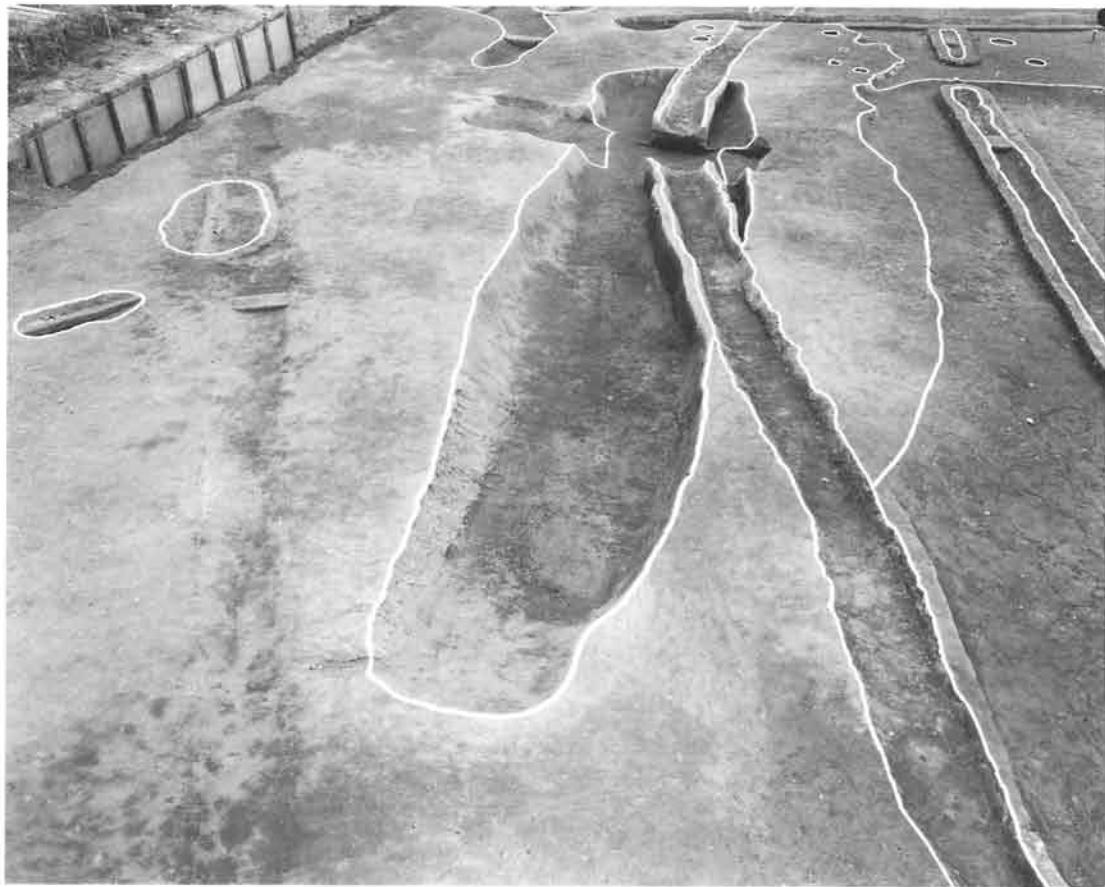
VII区下面SK103 (東から) 77-50



VII区下面SK108 77-39



VII区下面SK108 (東から) 77-23



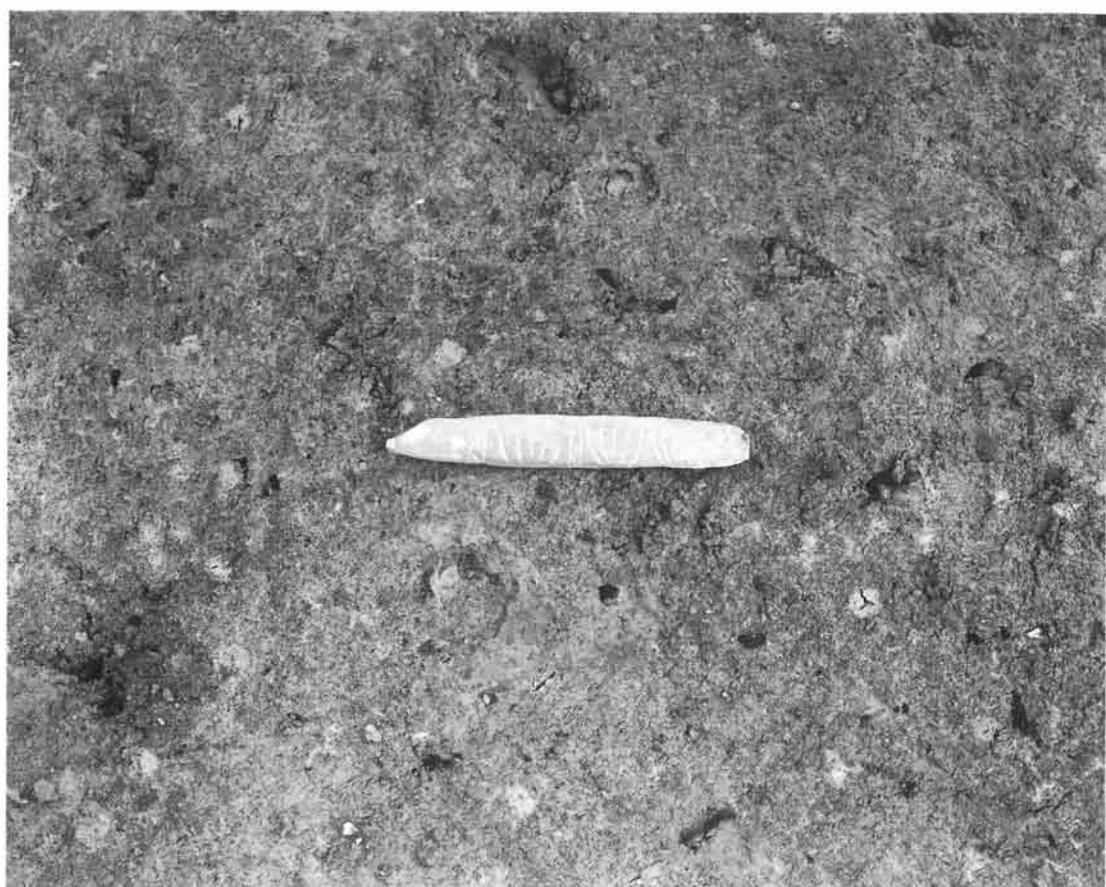
VII区下面SK117 (西から) 77-45



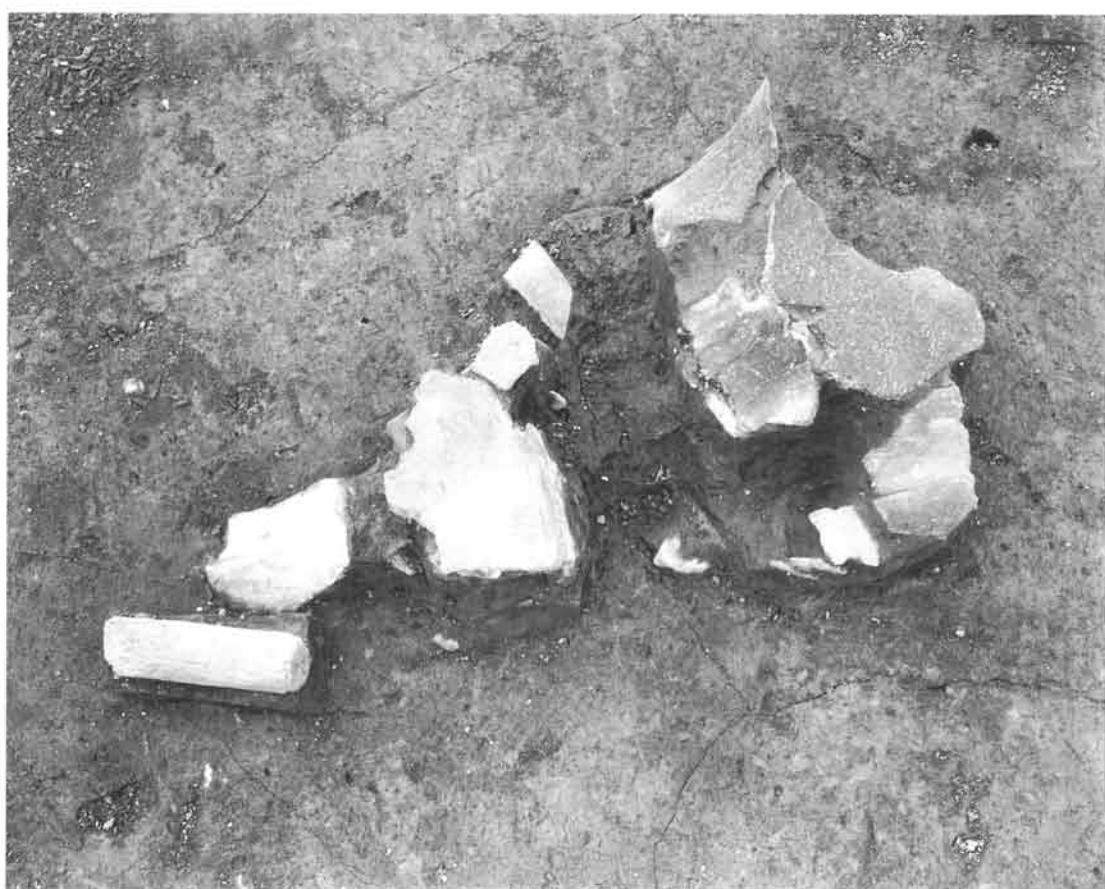
VII区下面SW101 77-62



VII区下面SW101 77-63



VII区下面SW101石劍出土狀況 77-66



VII区下面SW101 77-67



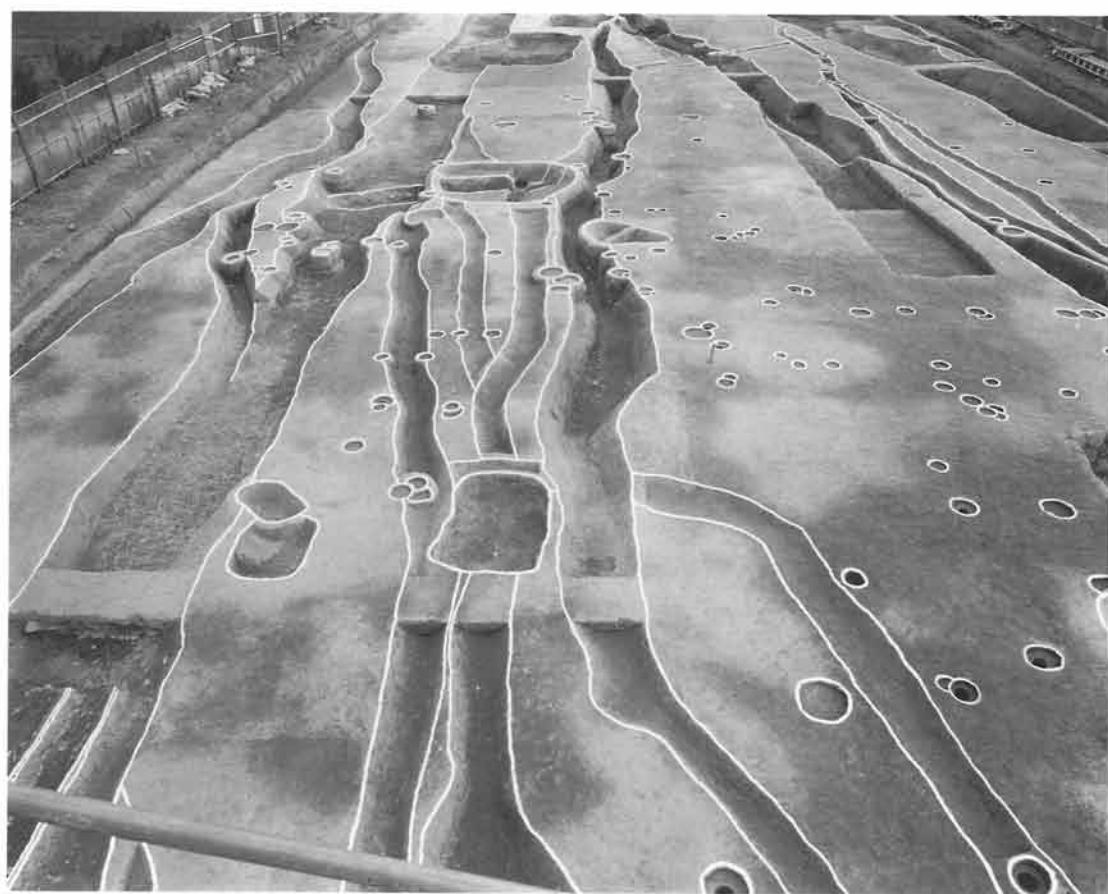
VIII上面全景（西から）78-1



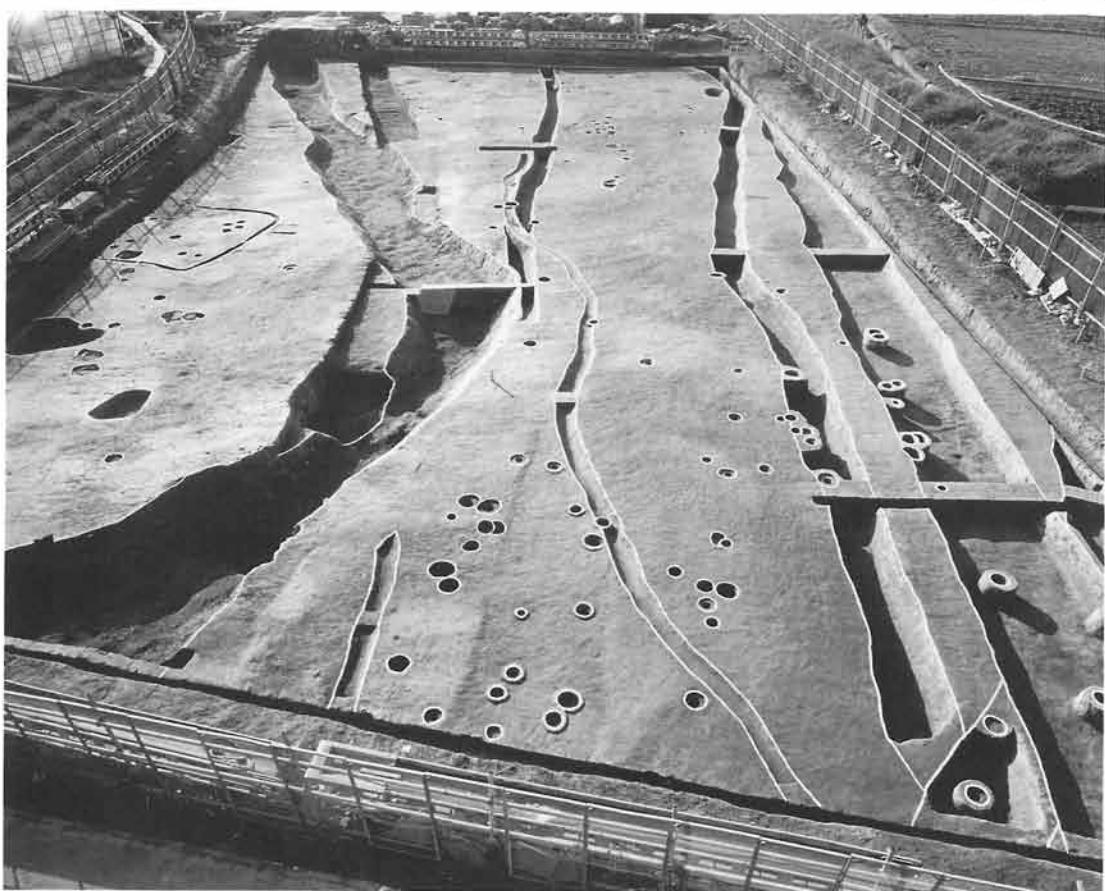
VIII区上面全景（東から）78-2



VIII区上面東側（西から）



VIII区上面東側（西から） 78-8



VIII区上面（東から）78-11



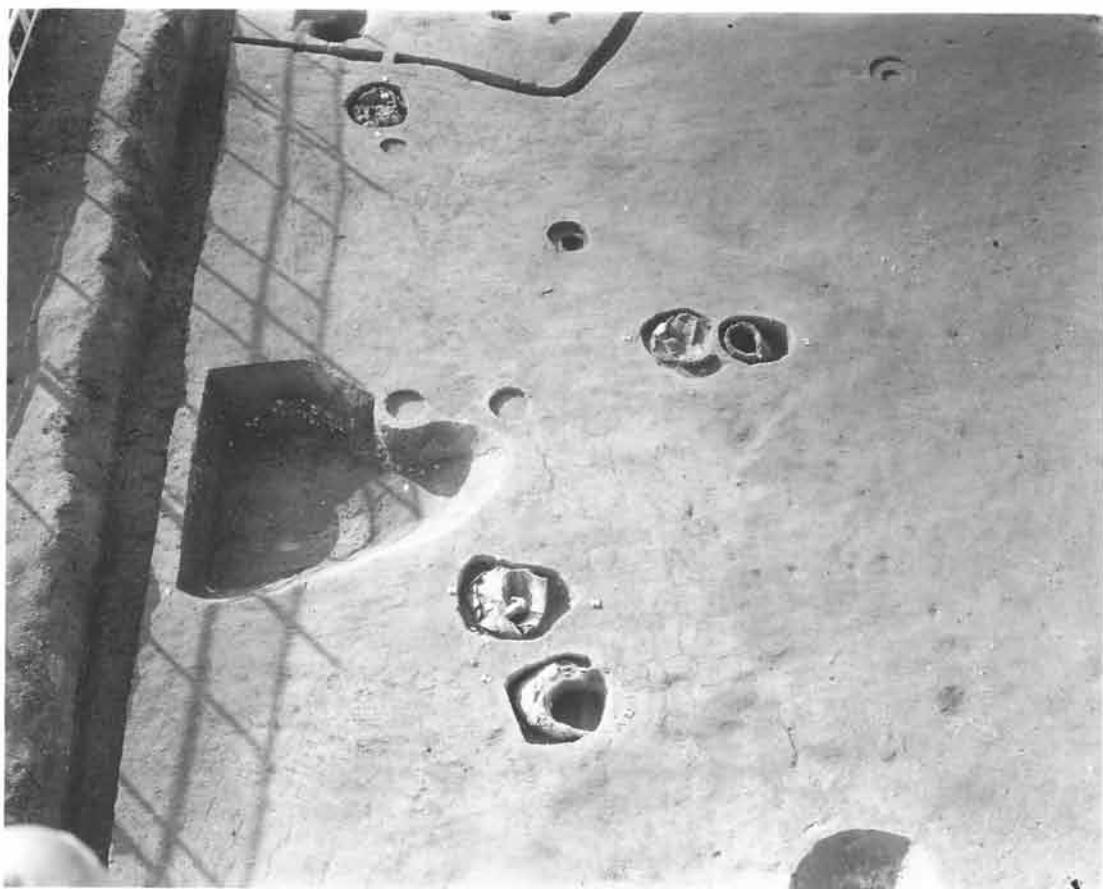
VIII区上面（北から）78-21



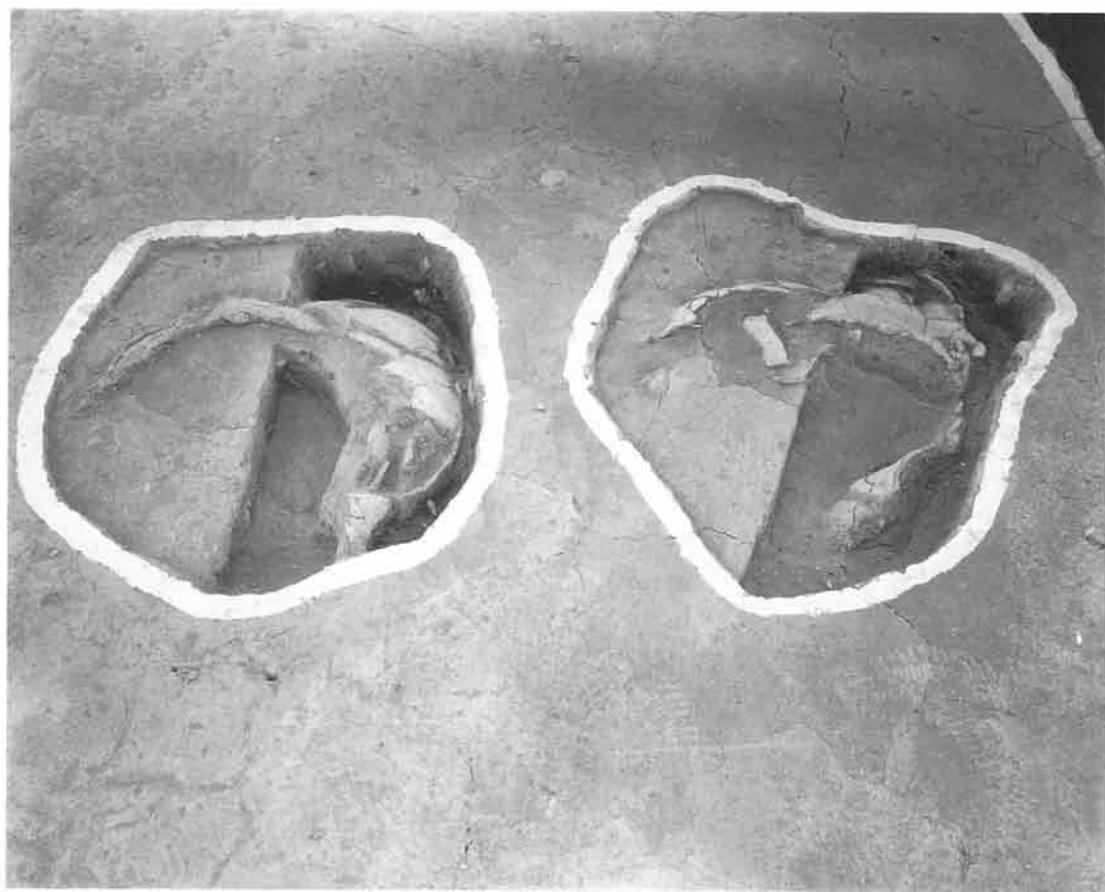
VIII区上面SD508 (西から) 78-23



VIII区上面SD512 78-25



VIII区上面SX501～505（東から）78-37



VIII区上面SX501・502 78-49



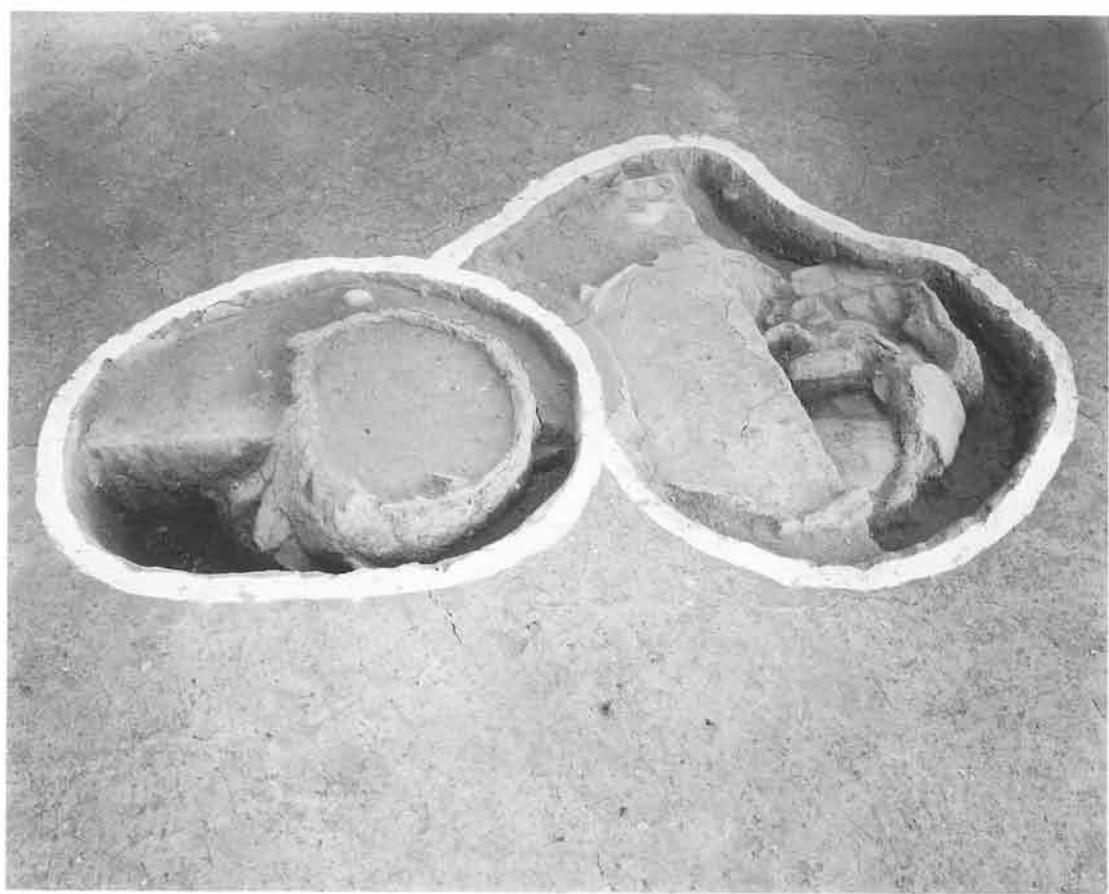
VIII区上面SX501・502 78-51



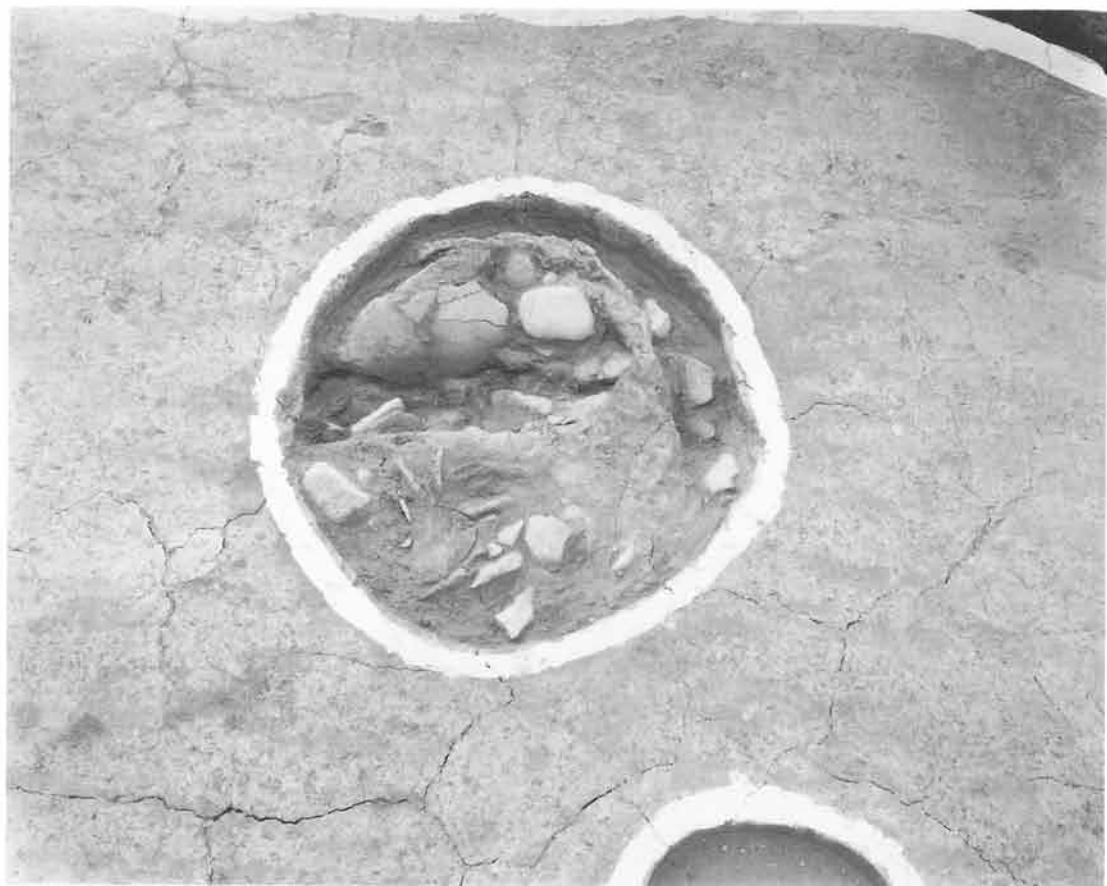
VIII区上面SX501 78-56



VIII区上面SX502 78-58



VIII区上面SX503・504（西から）78-60



VIII区上面SX505 (東から) 78-71



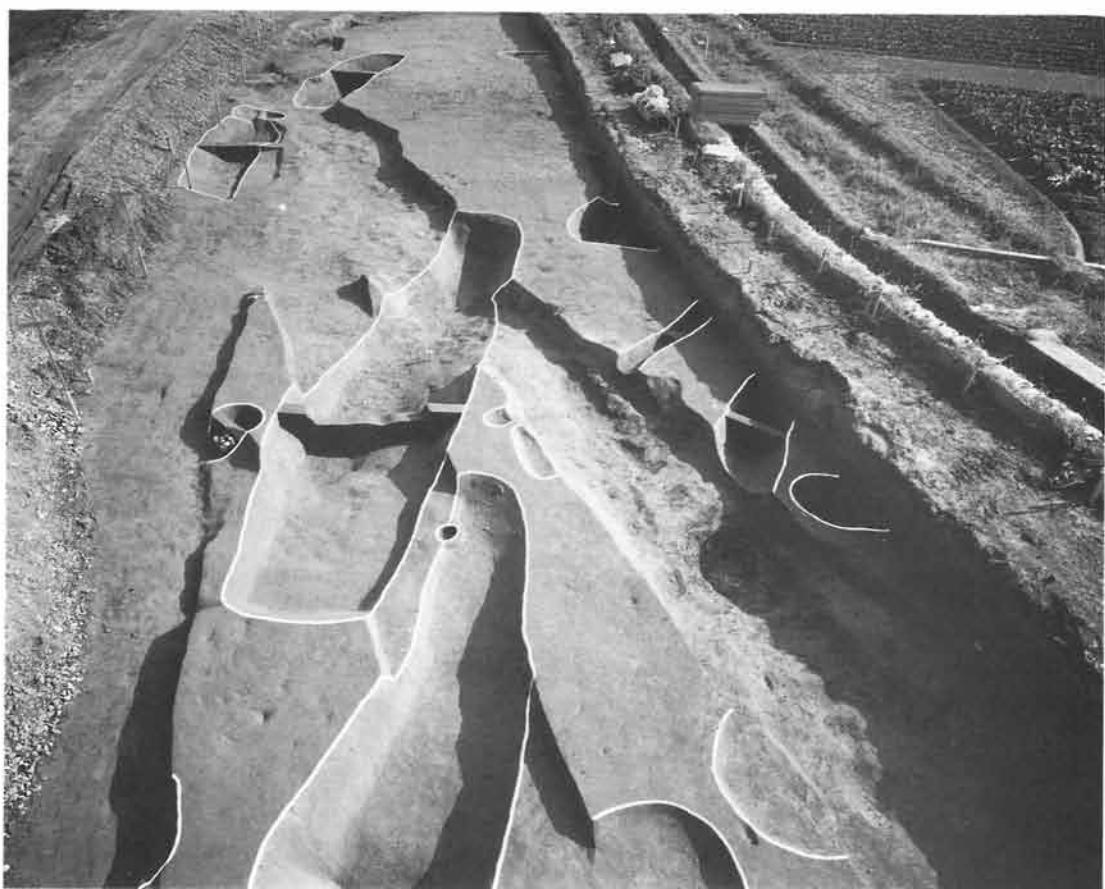
VIII区上面SX505 78-75



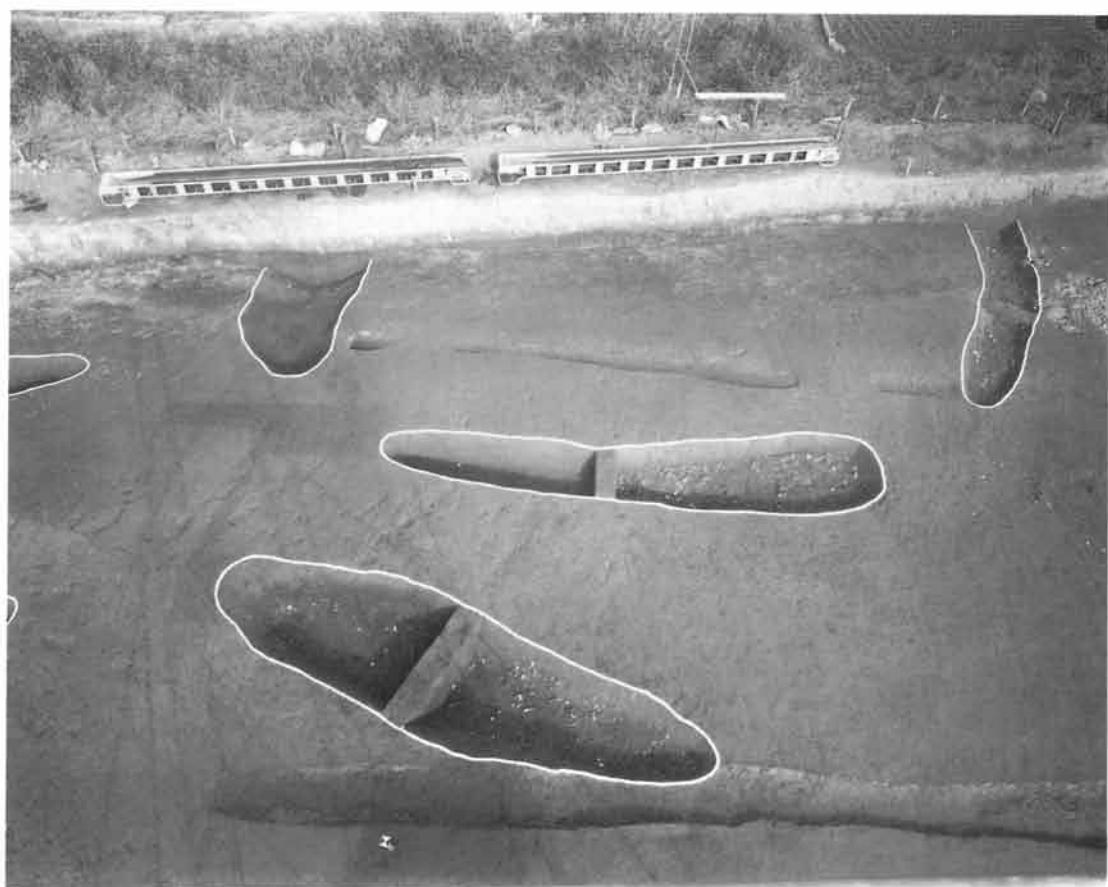
VIII区下面（東から）78-31



VIII区下面（西から）78-32



VIII区下面（西から）78-33



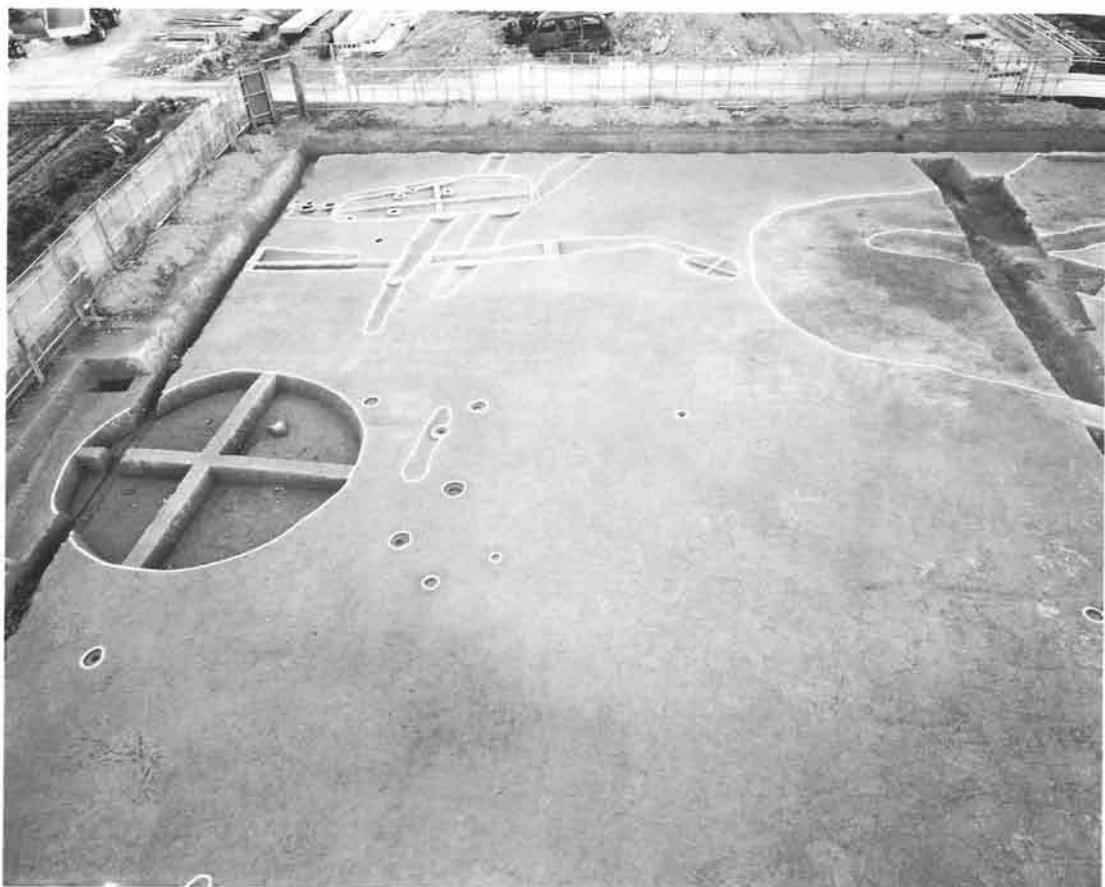
VIII区下面SD1001～1004（南から）78-81



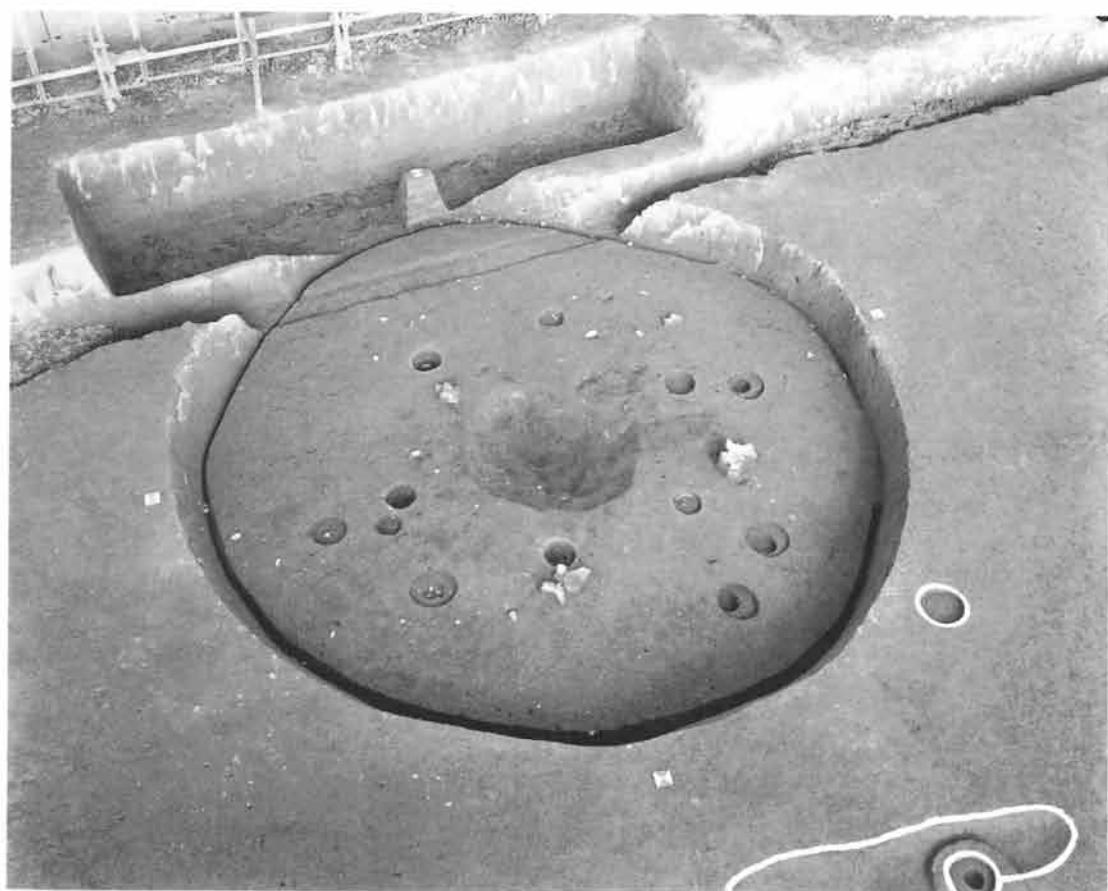
IX区上面全景（西から）79-1



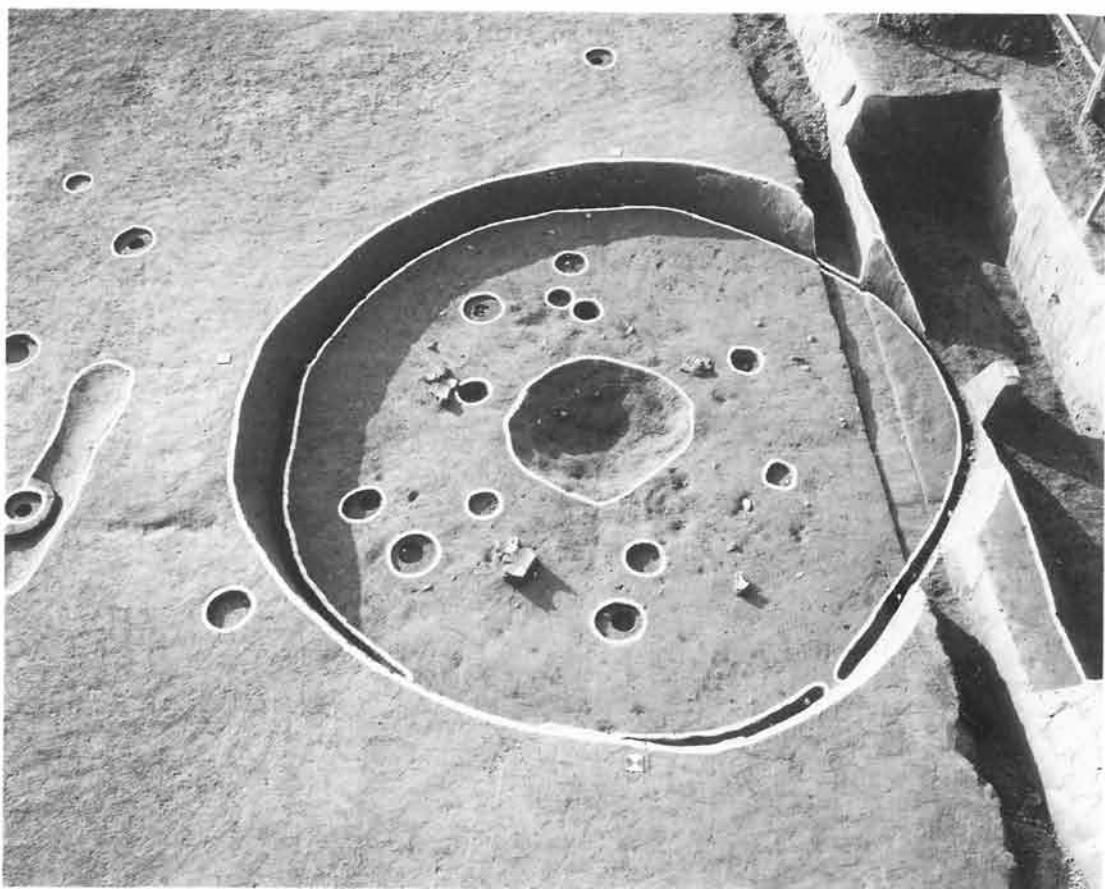
IX区上面全景（東から）79-3



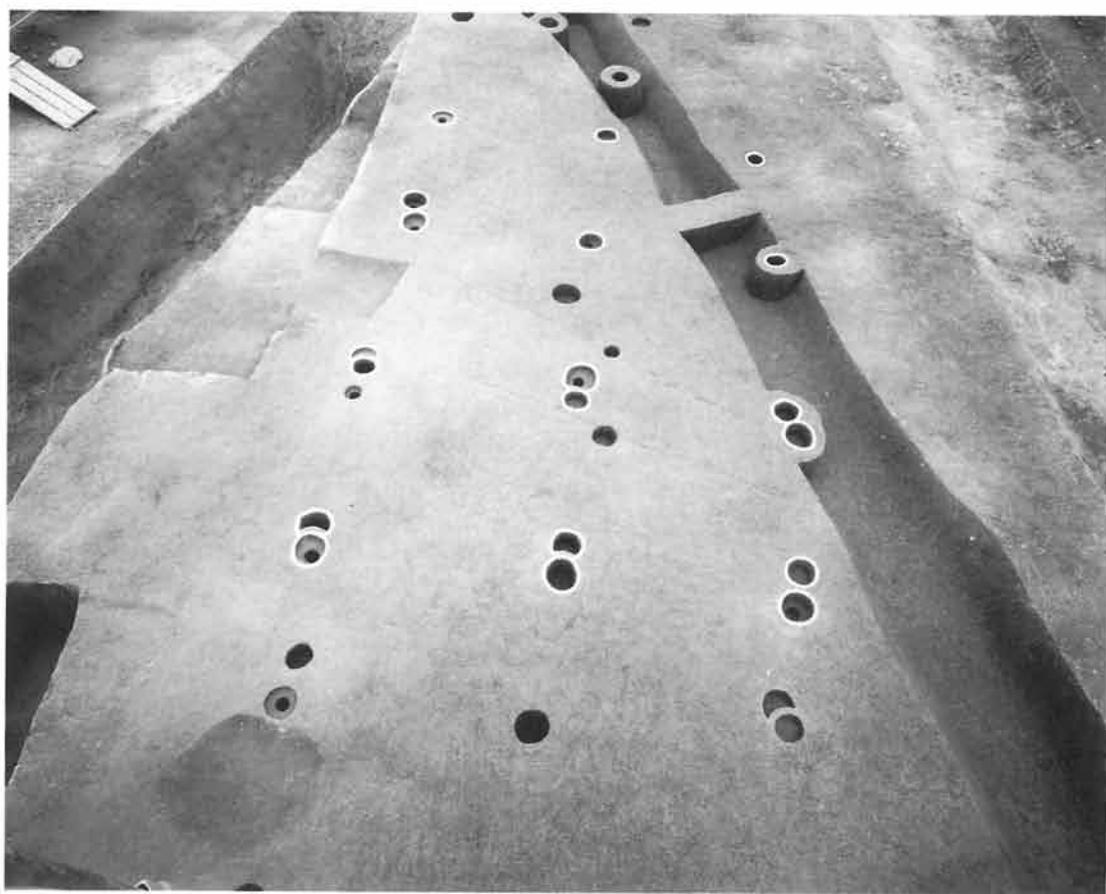
IX区上面北東部（西から）79-5



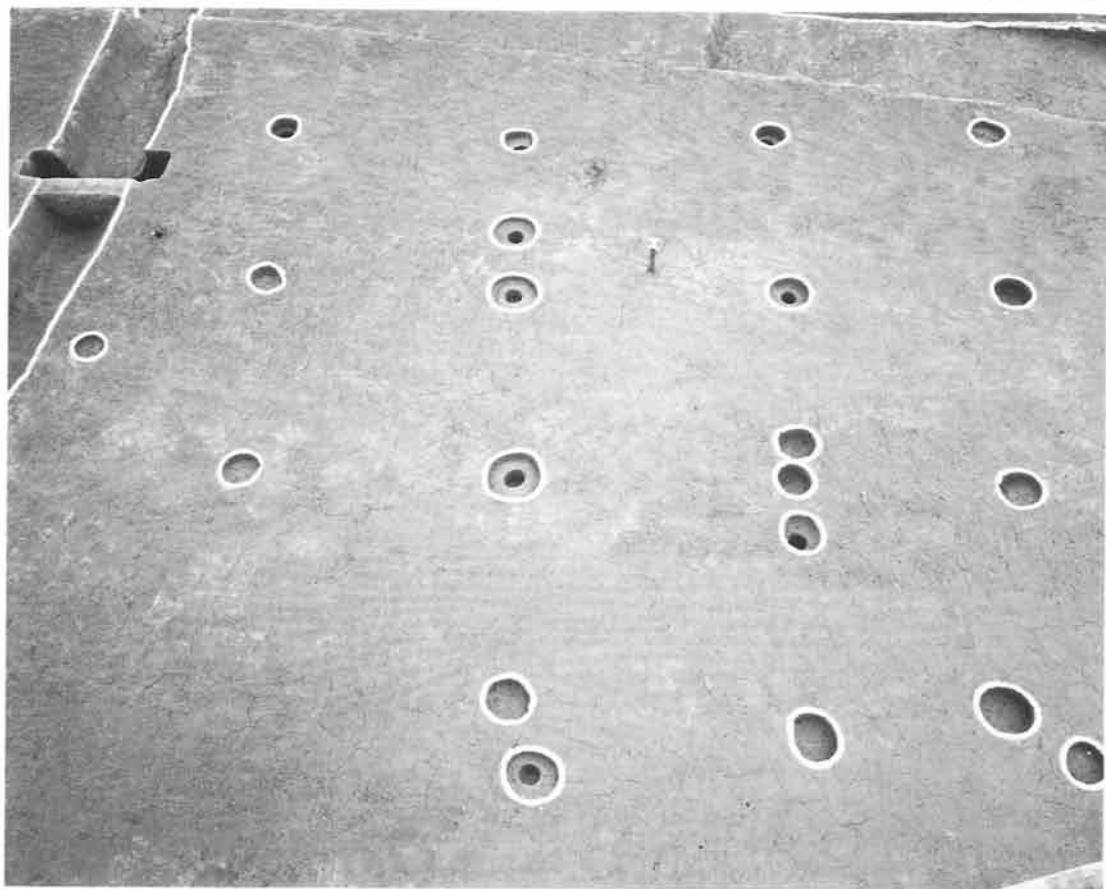
IX区上面SI01（南から）79-7



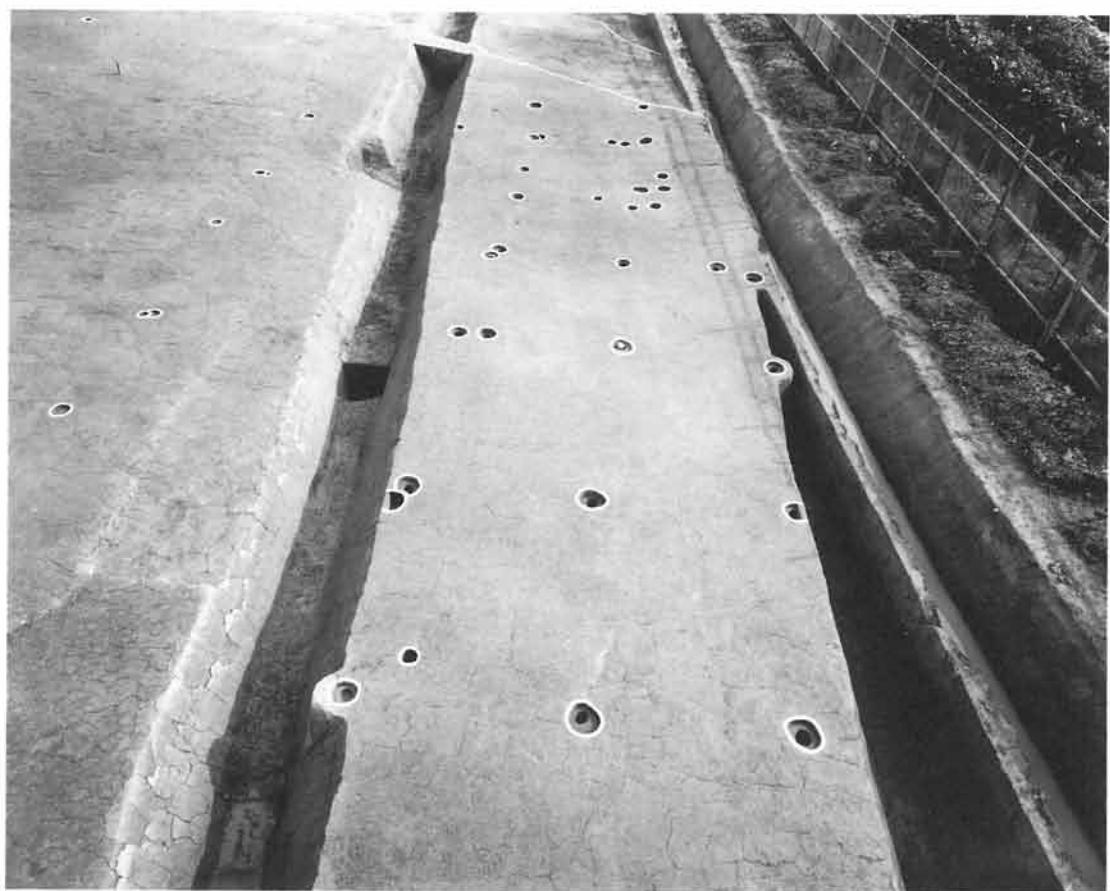
IX区上面SI01（東から）79-9



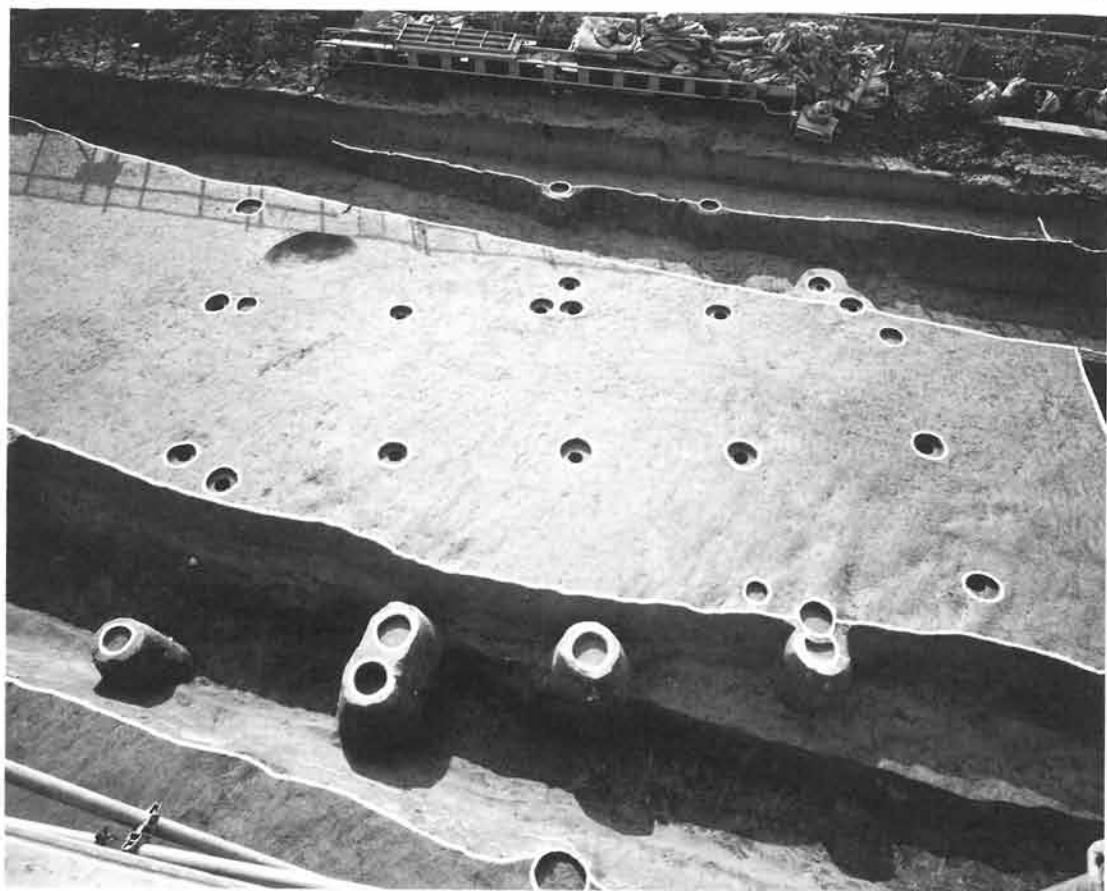
IX区上面SB01（東から）79-14



IX区上面SB02 79-17



IX区上面SB03 79-21



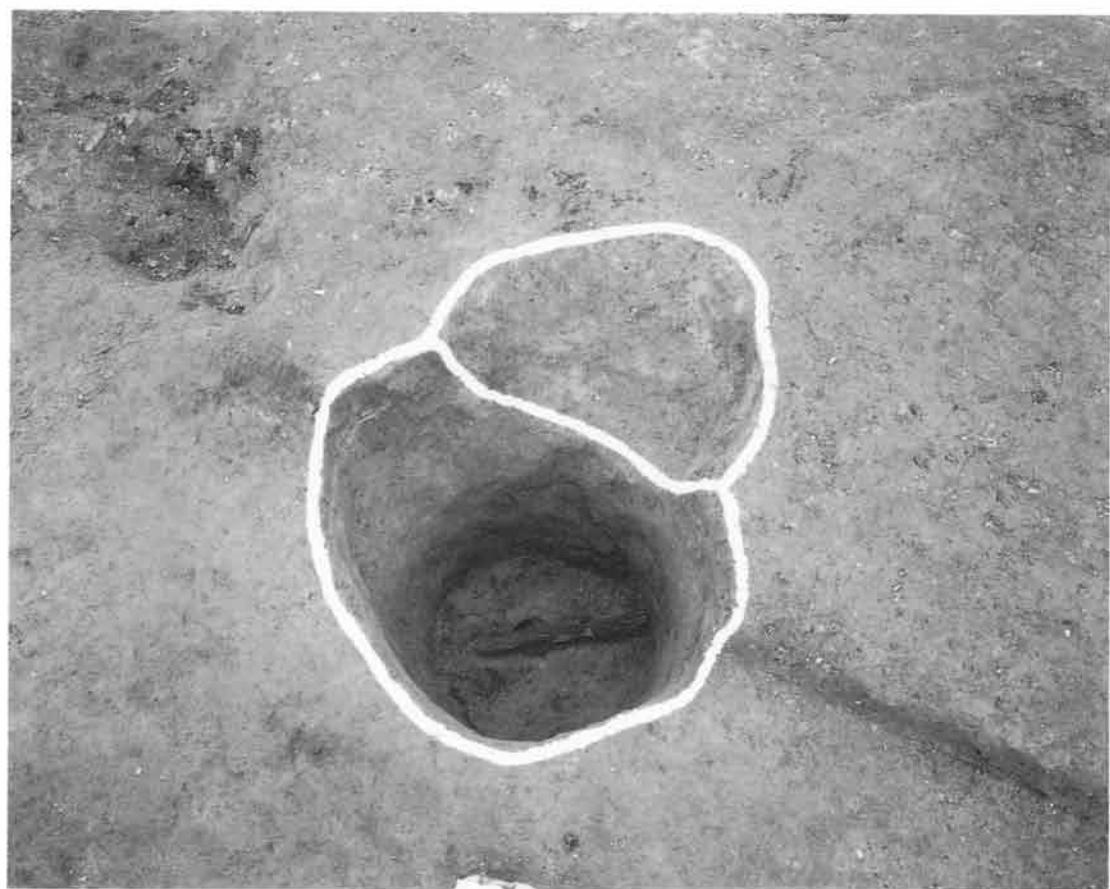
IX区上面SB04 (北から) 79-22



IX区上面SE01 79-25



IX区上面SD03（土馬） 79-26



IX区上面SX01 79-30



19



3



4



5



20



21



24



36

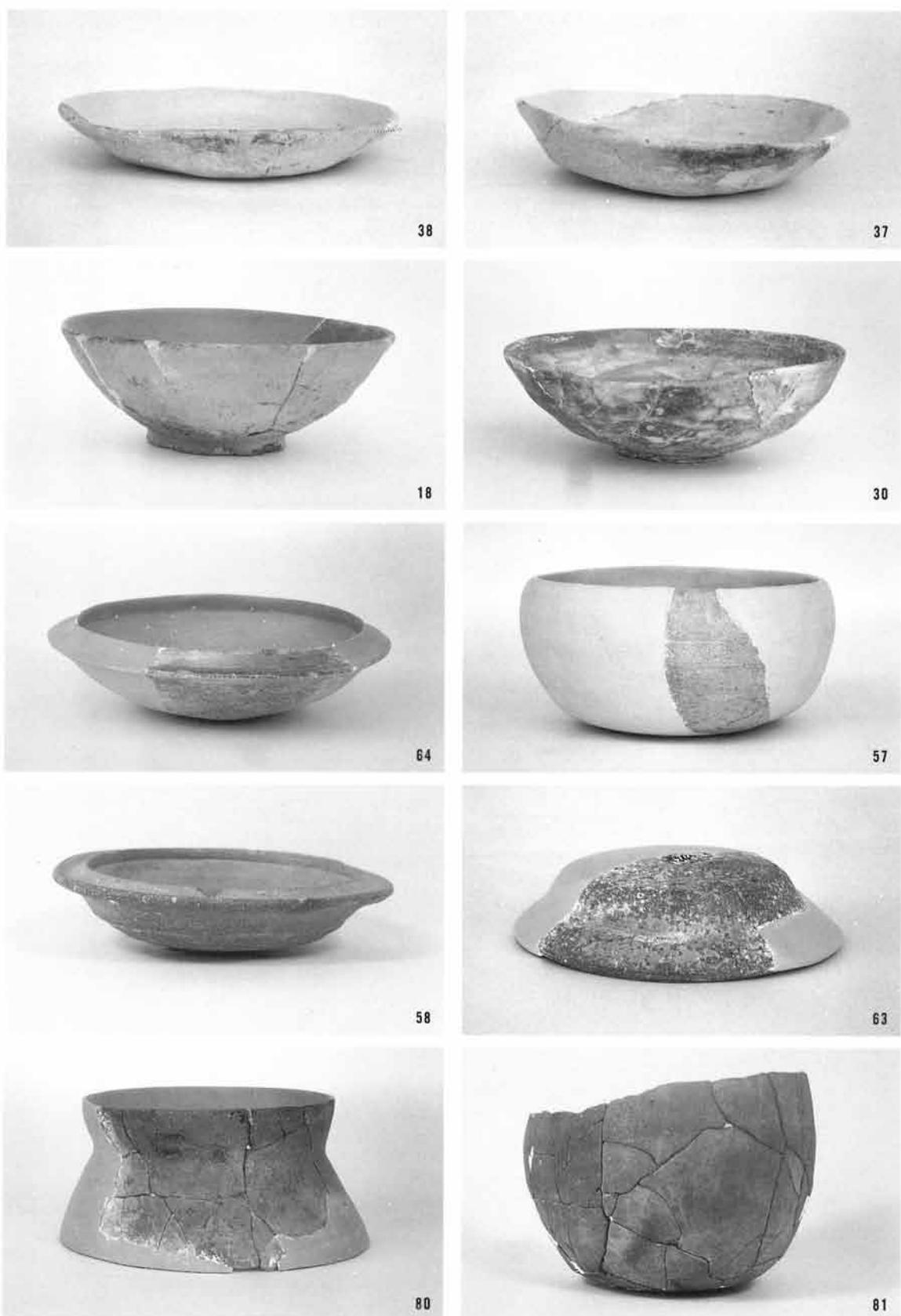


10



35

I 区上面SE303、SX304・308・315・322・333



I 区上面SK333、SD356・359、I 区下面SI89・90・91・92、SB71



507



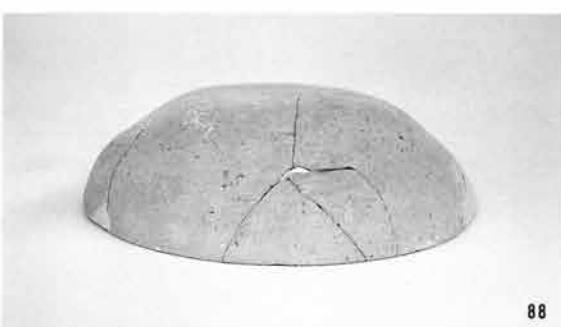
53



51



55



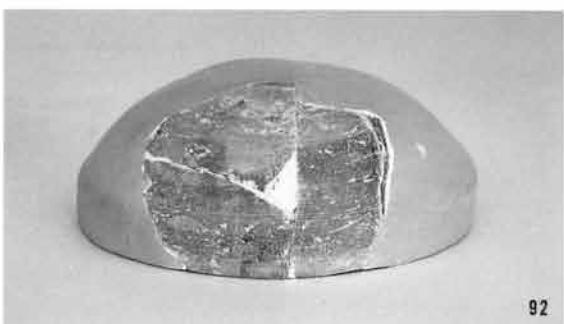
88



50



95



75

92

I 区下面SB71、SE95、SX182、SK97·98·99·209



120



90



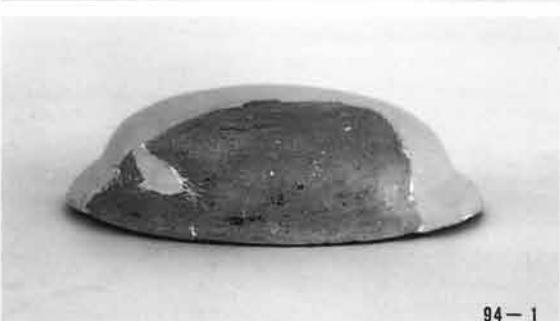
89



91



123



94-1



163



94-2



149



124

I 区下面 SK98 • 99 • 106 • 108 • 109 • 499



122



99



107



119



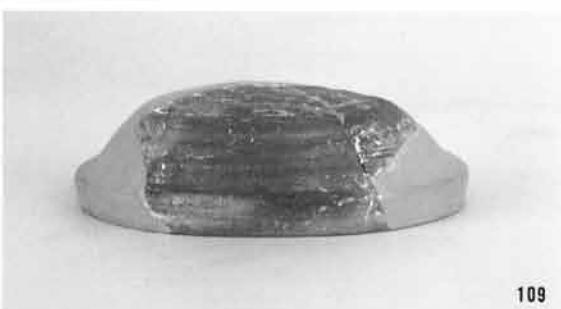
110



100



105



109



101



108

I 区下面SK103 • 105 • 106 • 108



103



102



618



132



134



137



189



200

I 区下面SK105・114、II区下面SD44





212



47



46



45



48



205



159



167



206

I 区下面SD46・121・123・134・154、II区上面SD484・490、II区下面SK220



203



196



224



223



284



256

II区下面SD45・151、SE43



257



262



335



317



320



236



280



336

II 区下面SD45



229



334



230



319



226



228



318



279

II 区下面SD45



2011



283



308



281



282



314



227

II区下面SD45



313



235



523



522



513



538

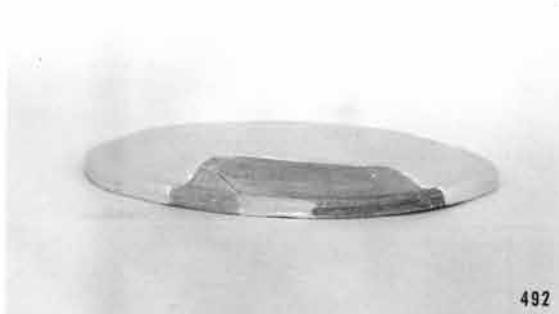


516



506

II区下面SD45、I・II区包含層



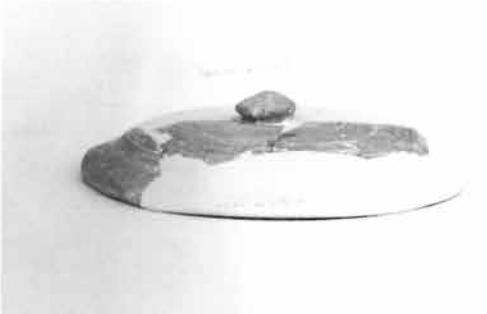
492



537



520



524



543



533



541



536



519



532

I • II 区包含層



425



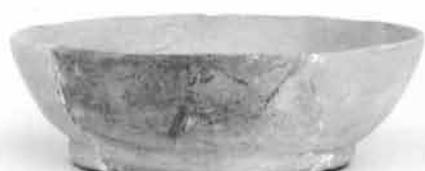
426



419



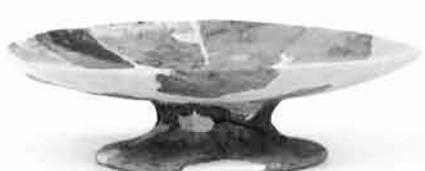
420



422



410



421



407



402



404

III区SD237



438



443



2134



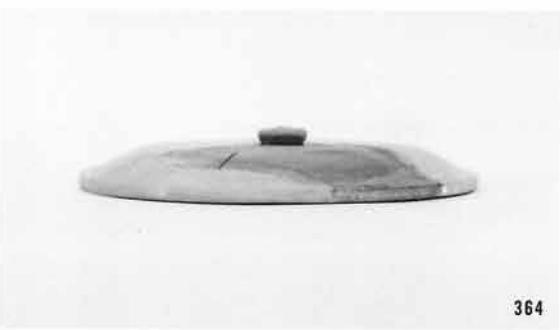
440



441



444



364



355



357



358

III区SD238



363



347



345



620



439



356



342



477



348



349

III区SD238、IV区上面SD162



747



2070



749



750



2071



748



746



710



709

VI区上面SK13・22



711



2074



734



743



723-1



723-2



718



741



724



754

VI区上面SK13・21・23



752



753



757



2077



720



726



735



733



751



731



728



758



755



756



744



715



730



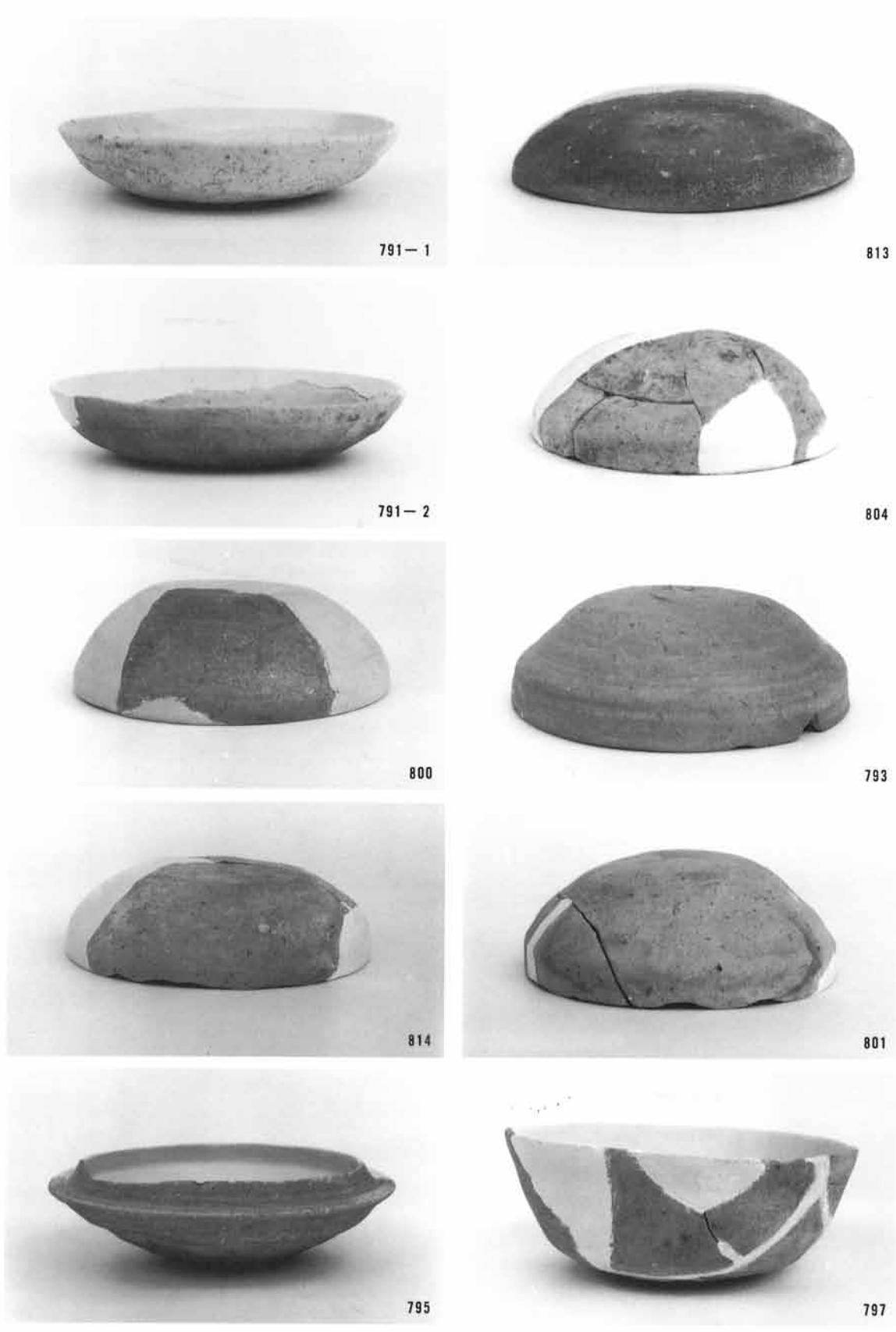
713



732



740





808



805



810



820



802



788



831



816



828



836

VI区上面SD09、VI区中面SD101



939



935



946



934



945



936



944



937



933



940

VI区下面SE104



2025



2023

2026

VI区上面SE01、VI区中面SE101、VI区下面SE104



988



987



989



953



954



1359



951



952



955

VI区包含層、VI区上面SD09、VII区下面SK103



956



957



958



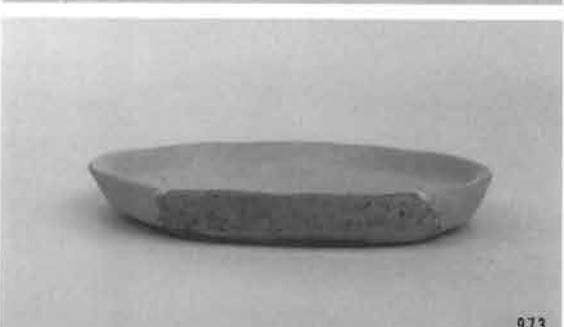
960



961



962



973



964

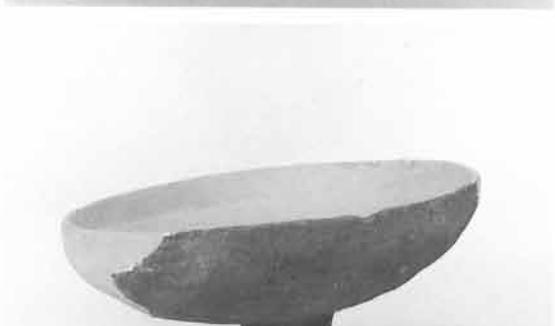
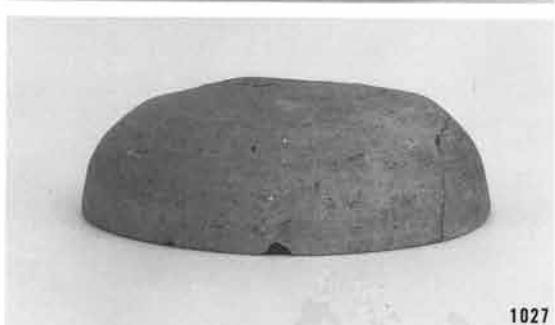


963

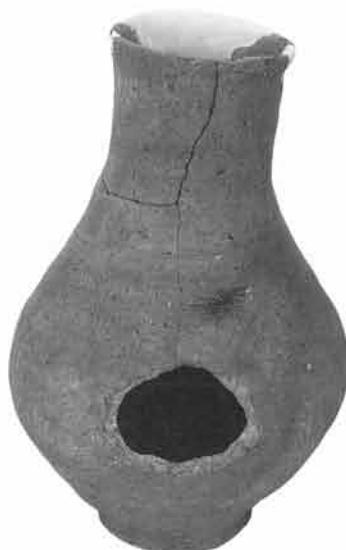


950

VII区下面SK103・105・108・167



VII区下面SK105・108、VIII区上面SD02、IX区包含層



1057



1056



2013-1



2008

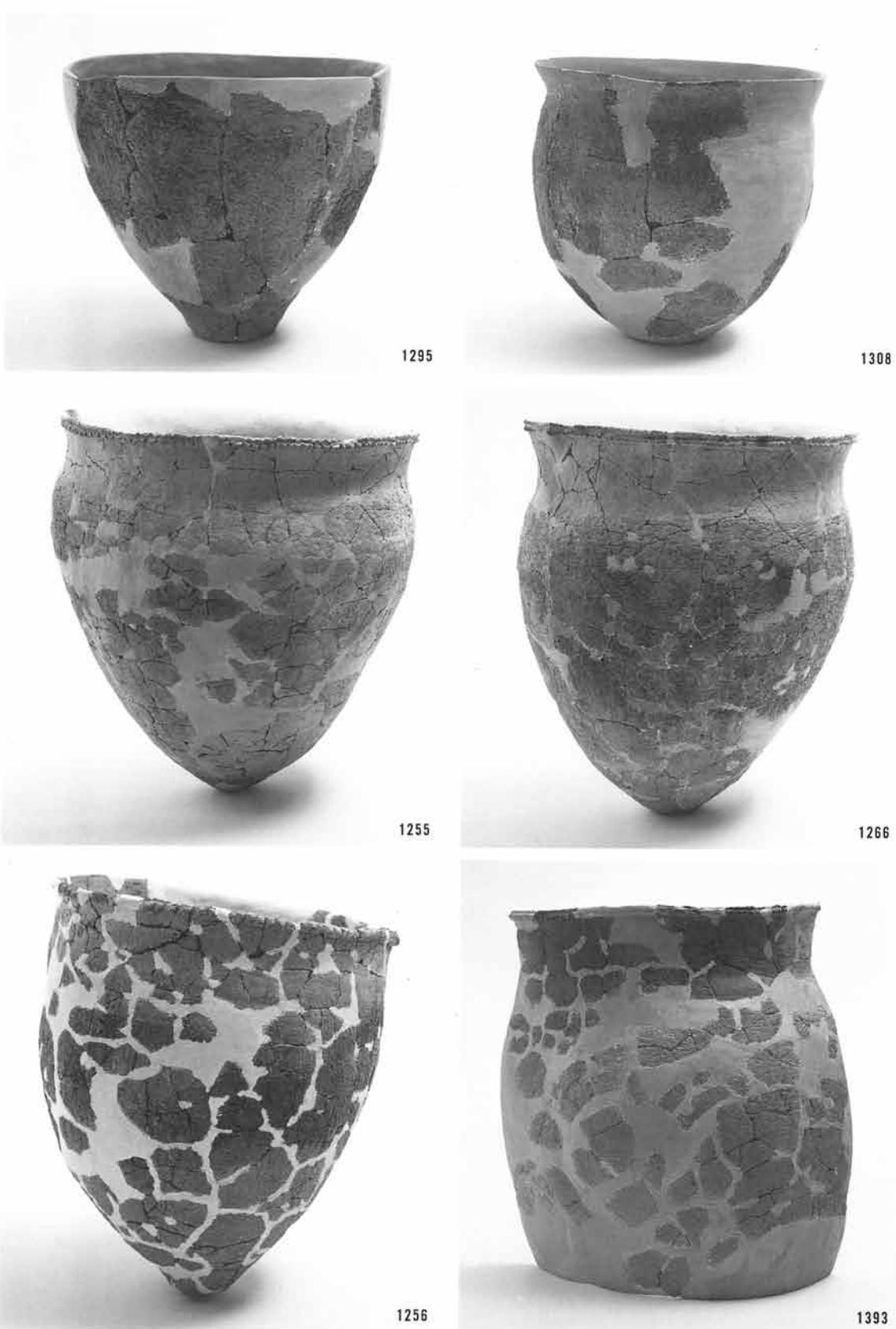


2013-2



2013-3

VIII区上面SD512、VIII区下面SD1006・1012、IX下面SD03



VI区包含層、VII区SW101、VIII区SX01、VIII区上面SX501・502・503



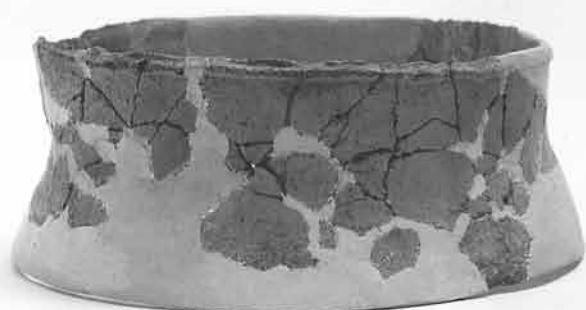
1247



1251

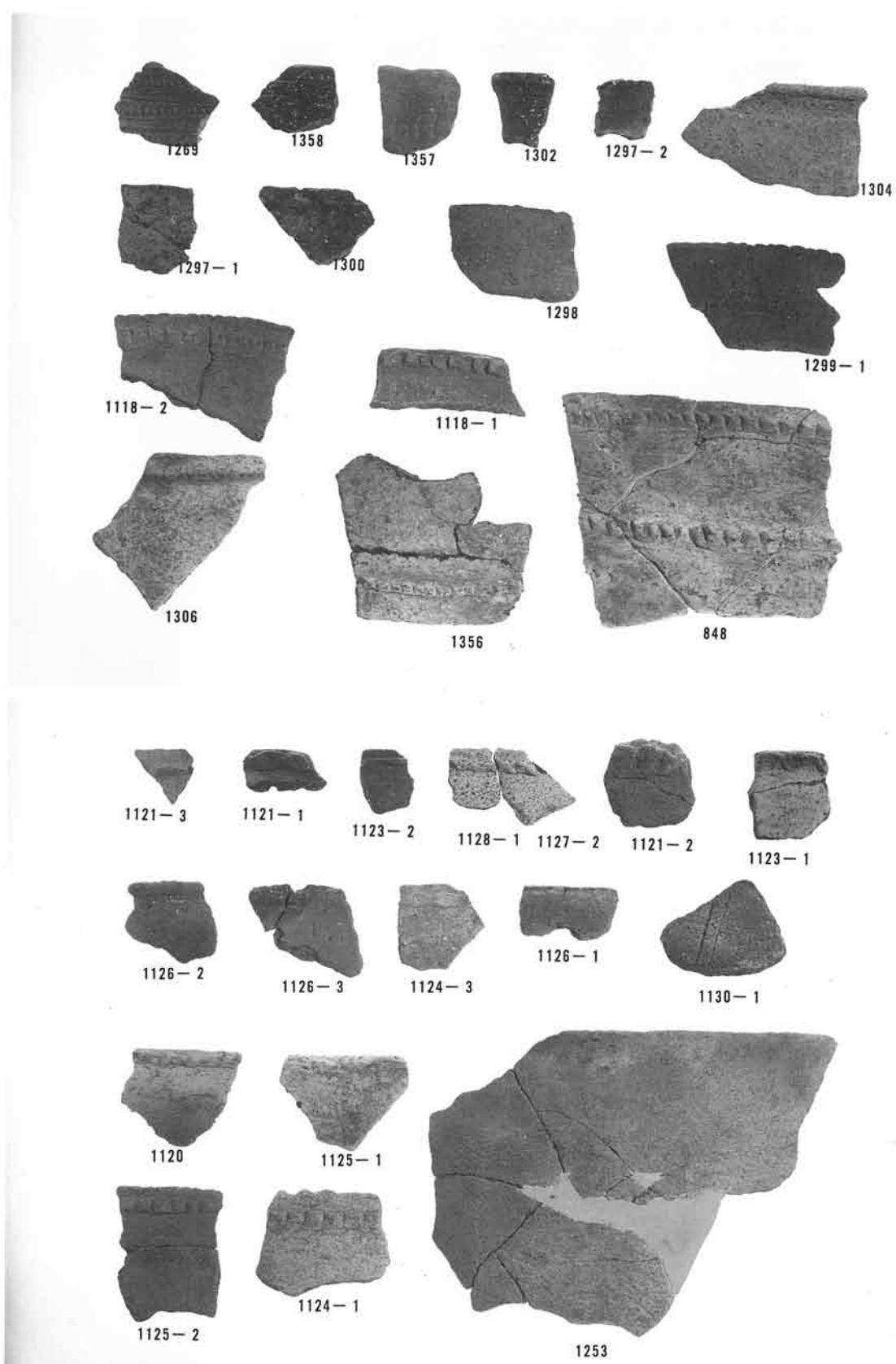


1258

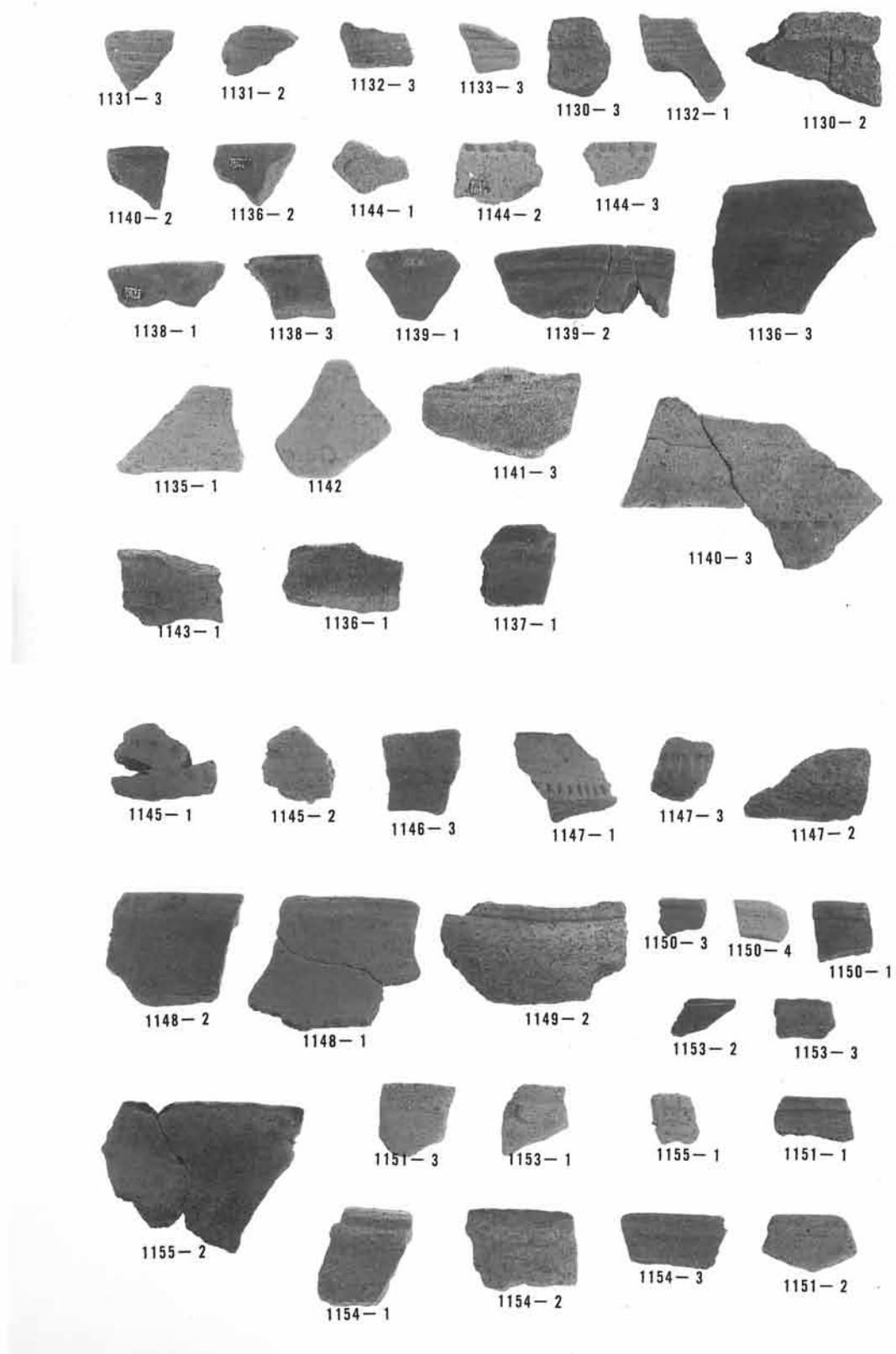


1361

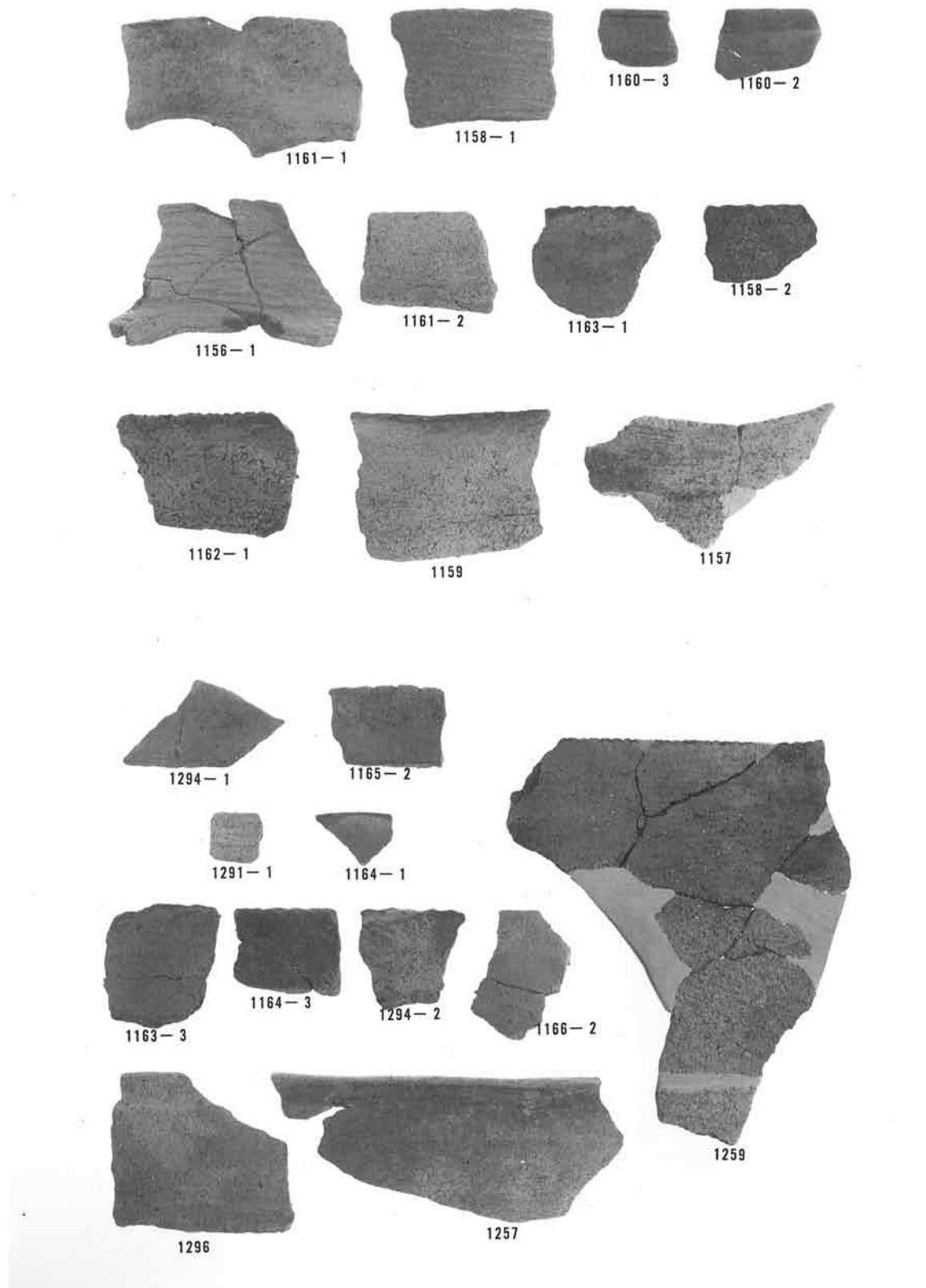
VI区包含層、VII区SW101、VIII区SX504



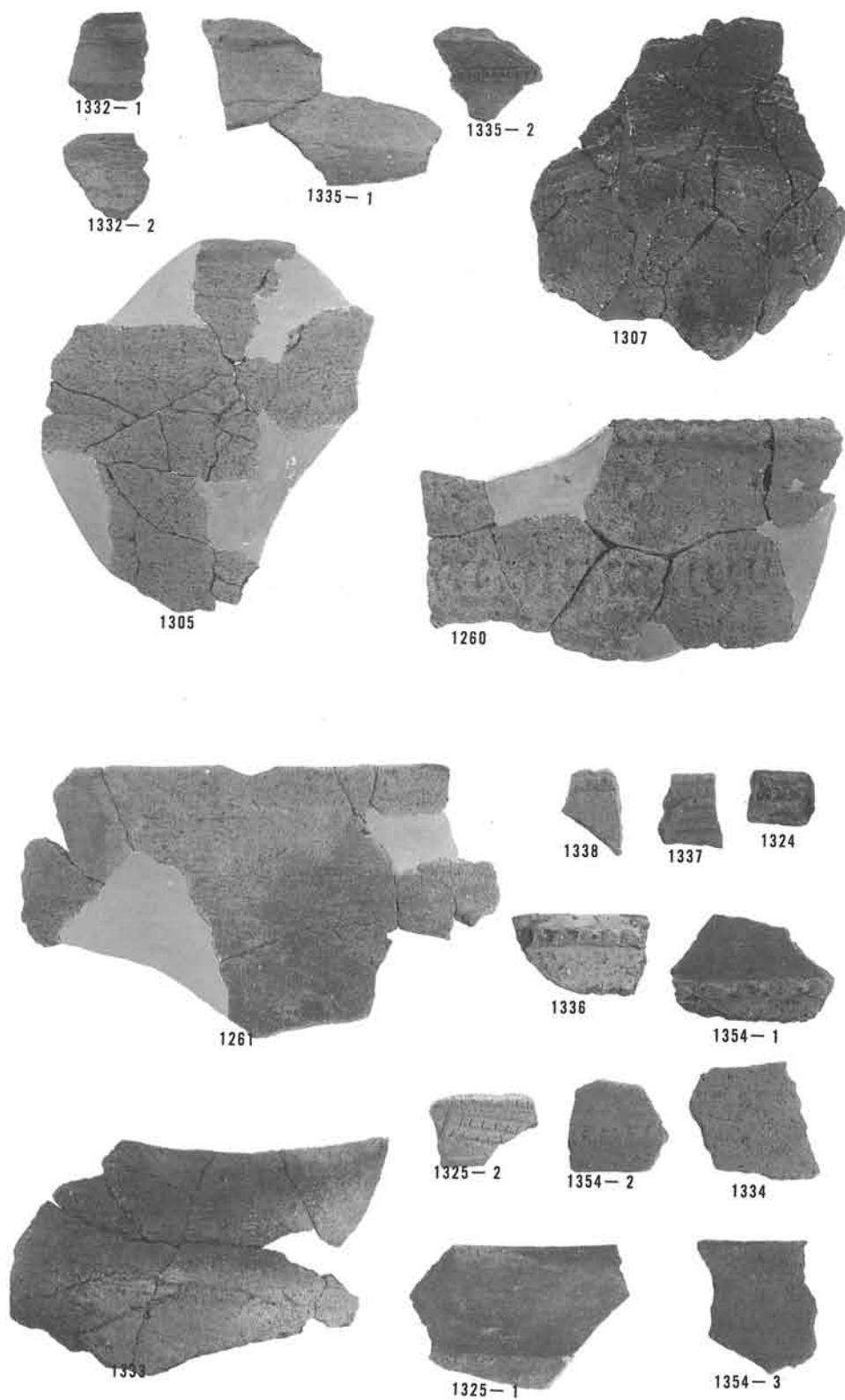
縄文土器



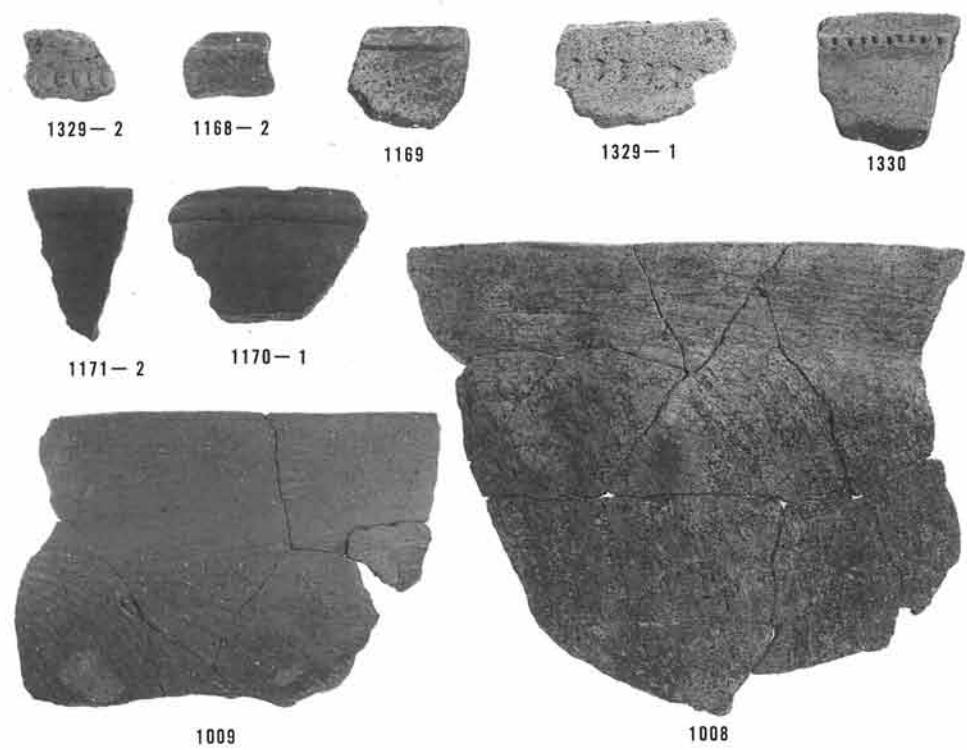
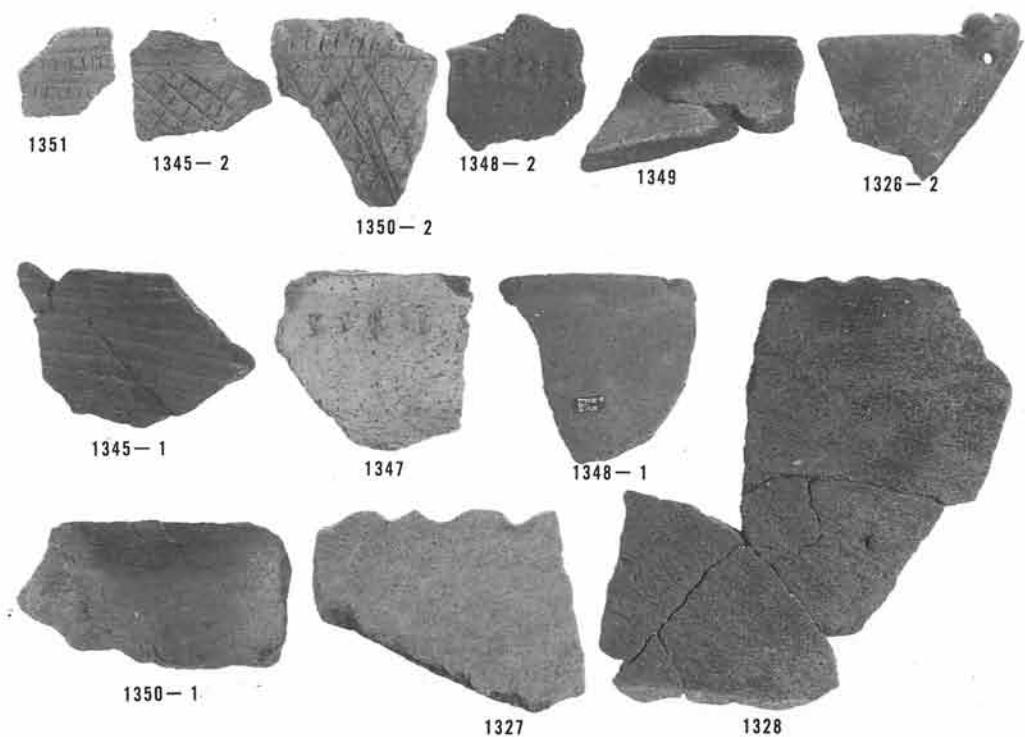
縄文土器

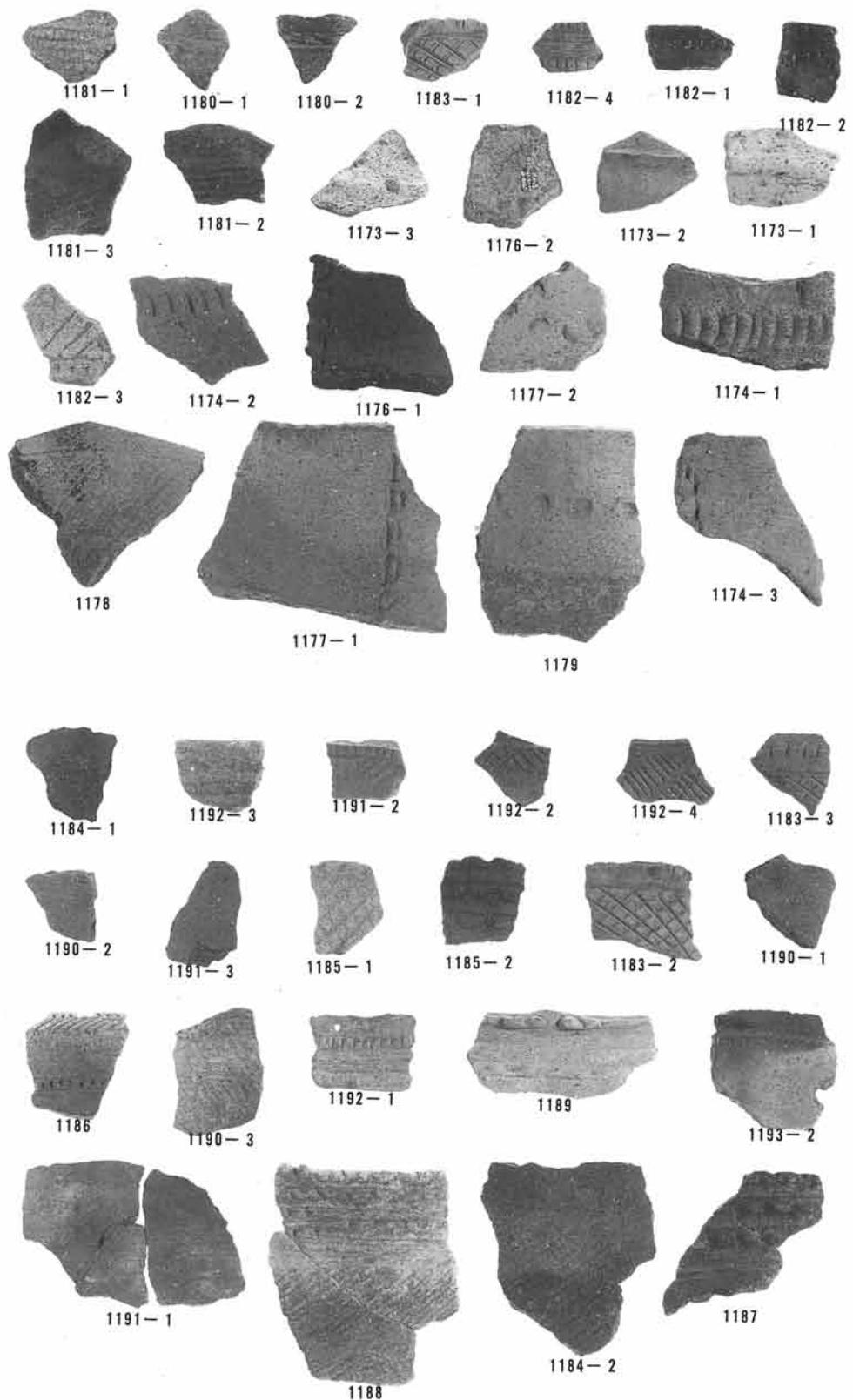


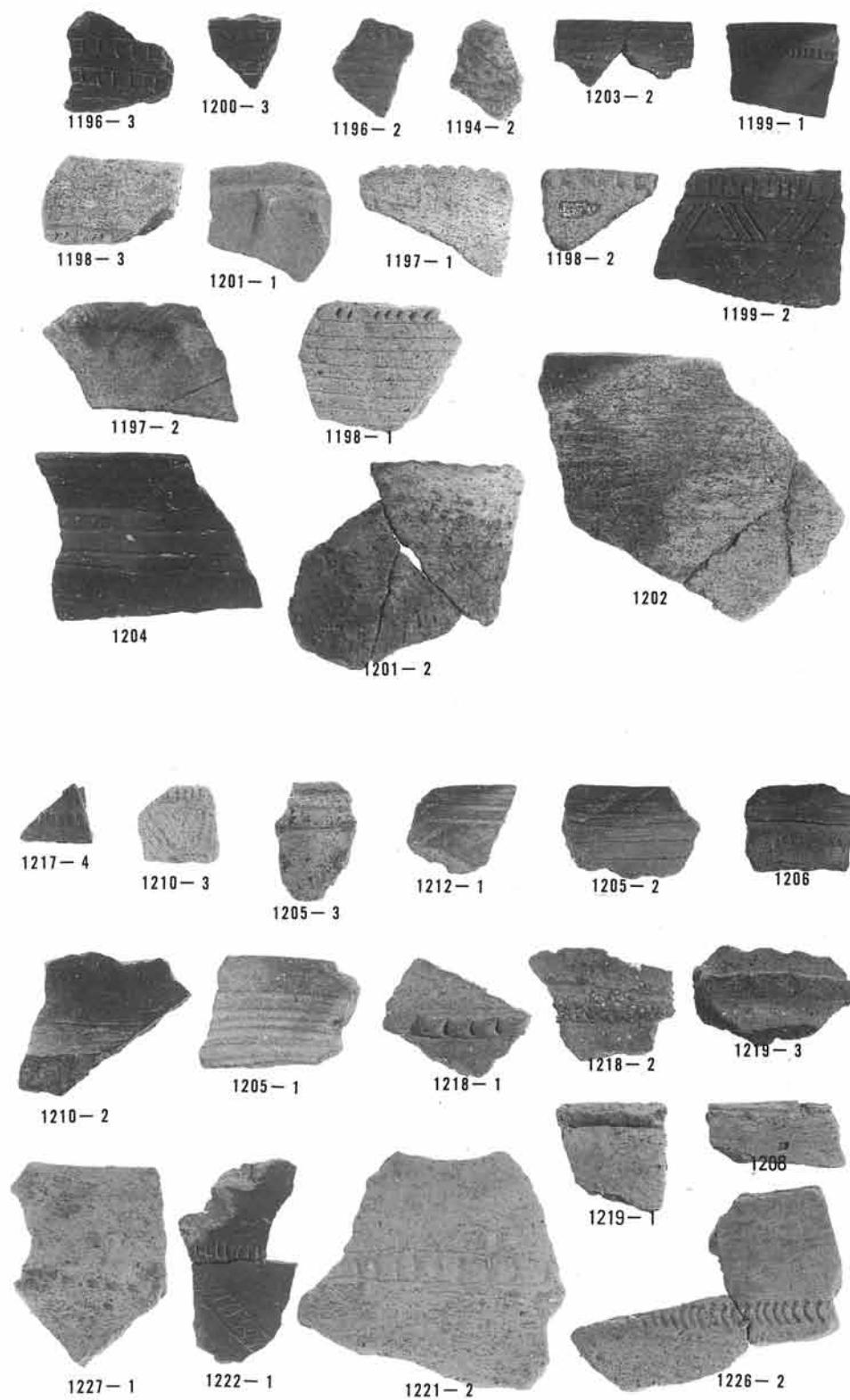
縄文土器



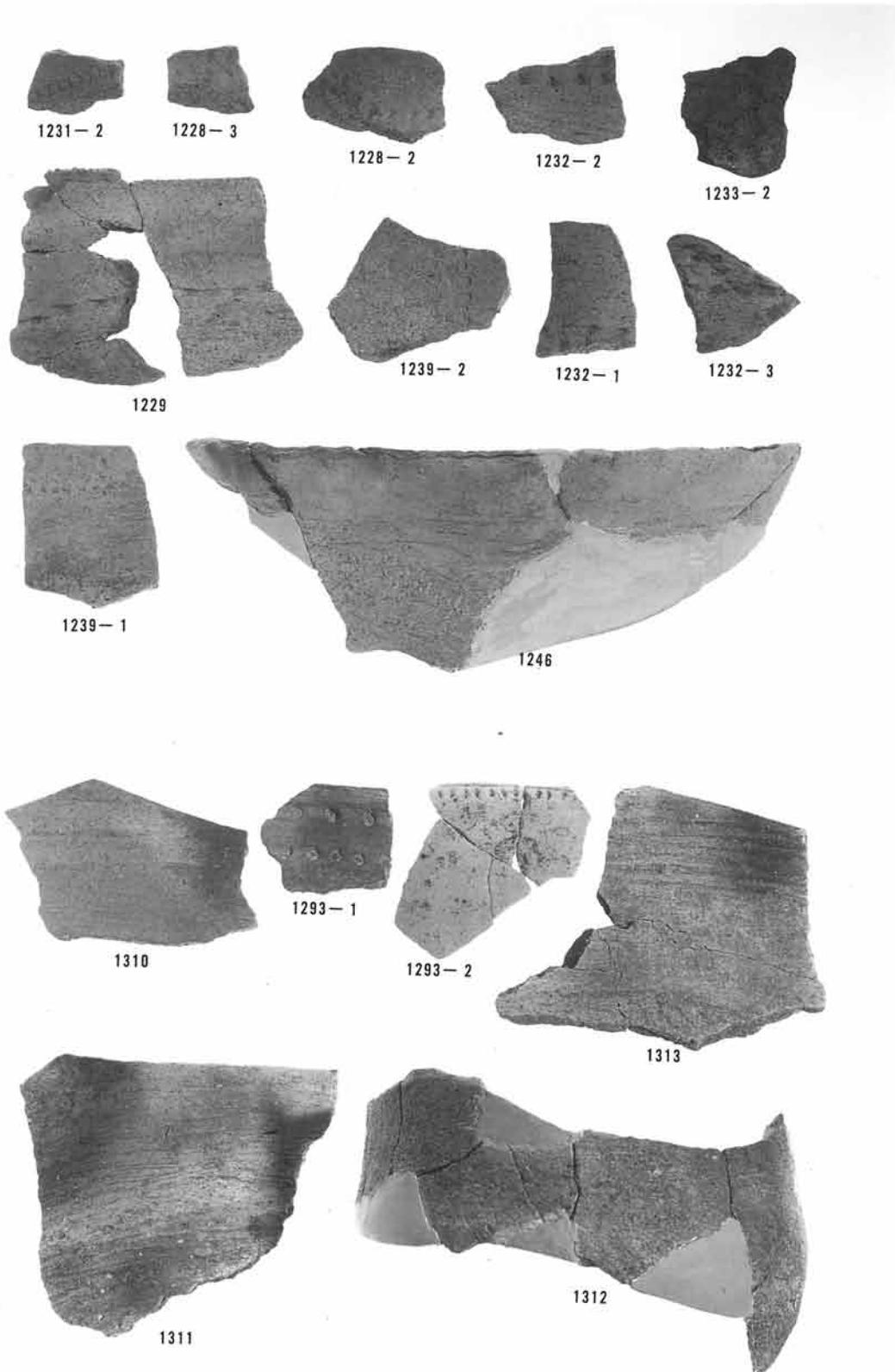
縄文土器



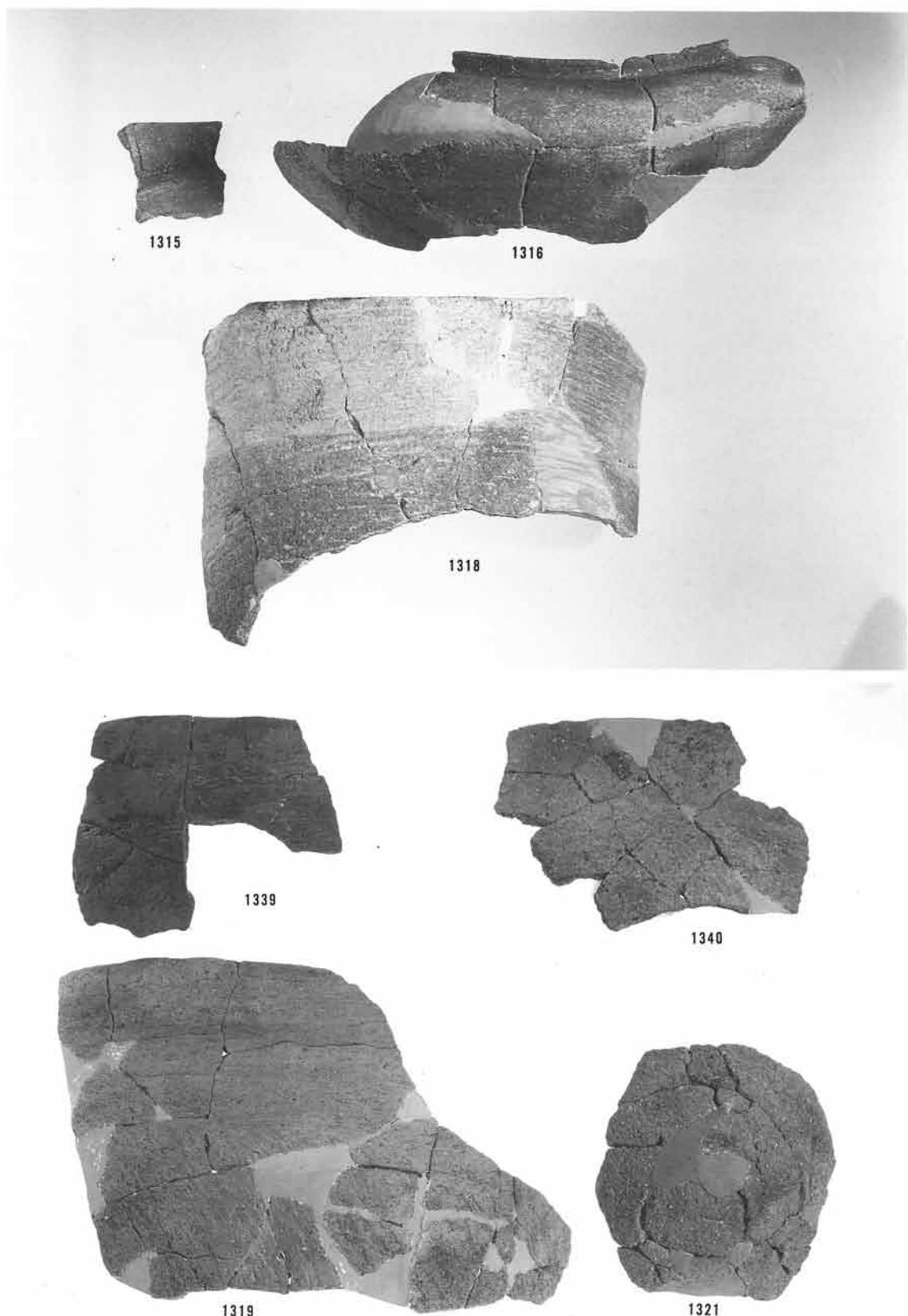




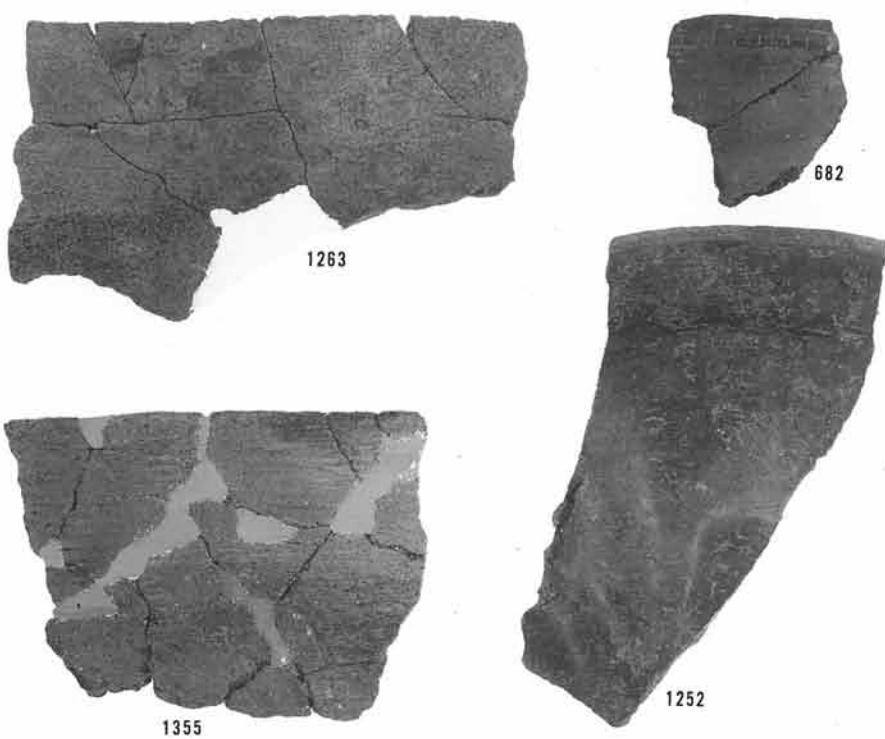
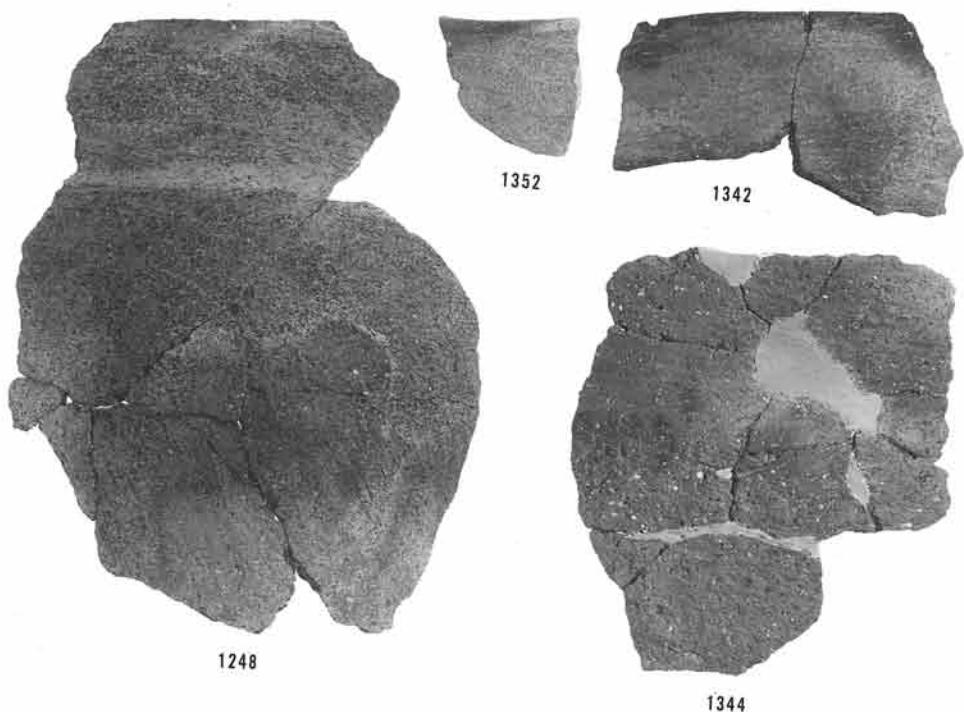
繩文土器



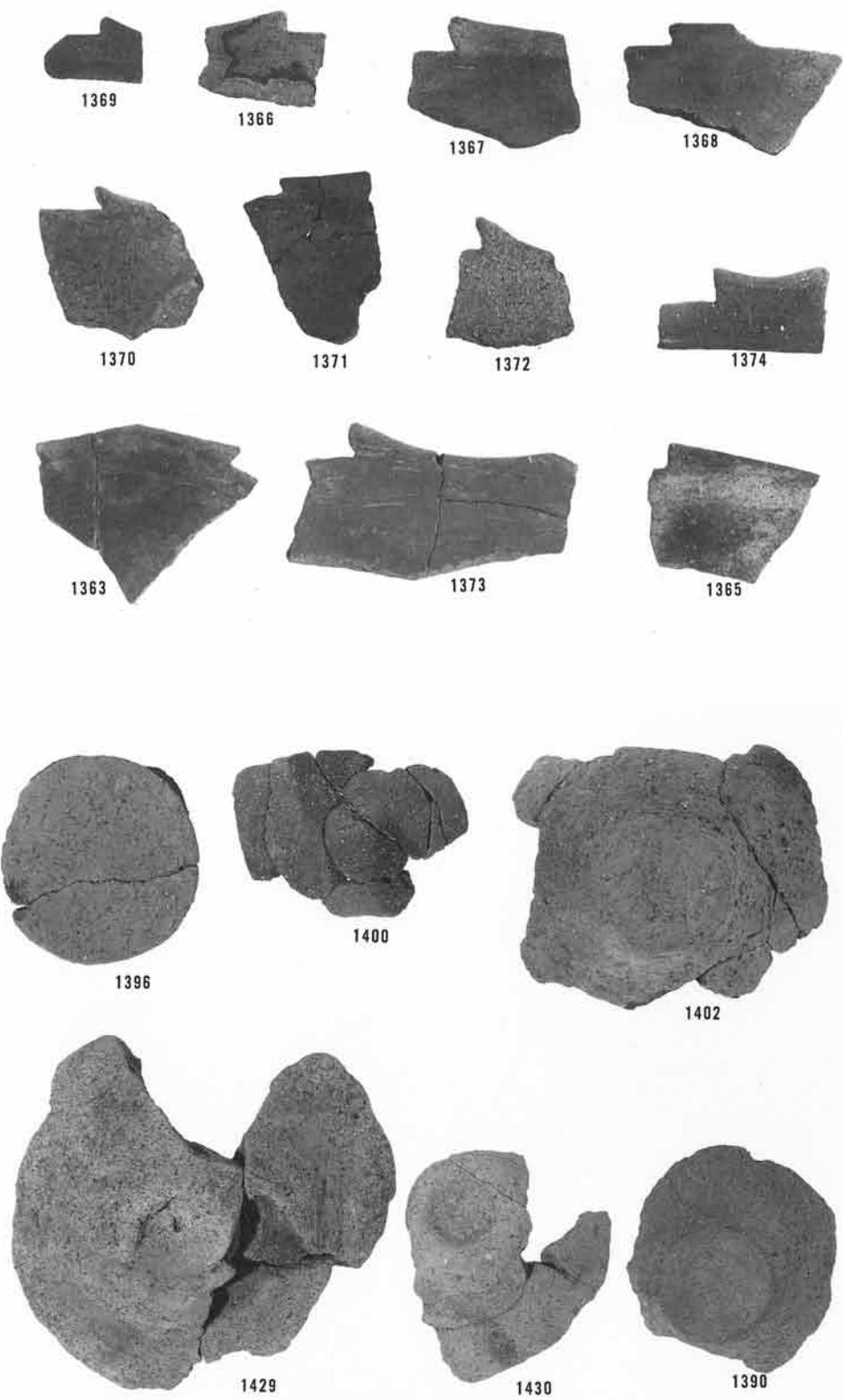
縄文土器



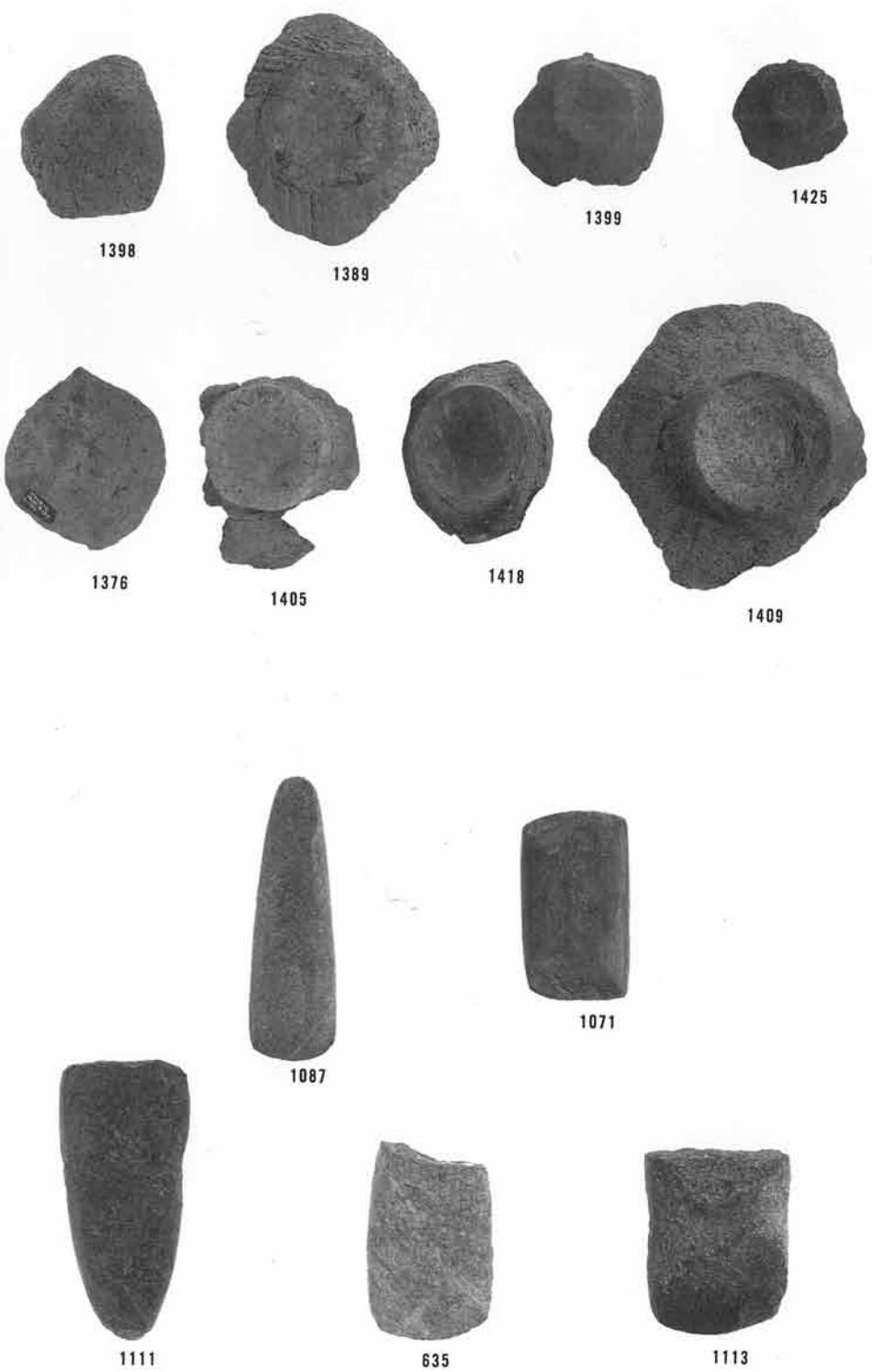
縄文土器



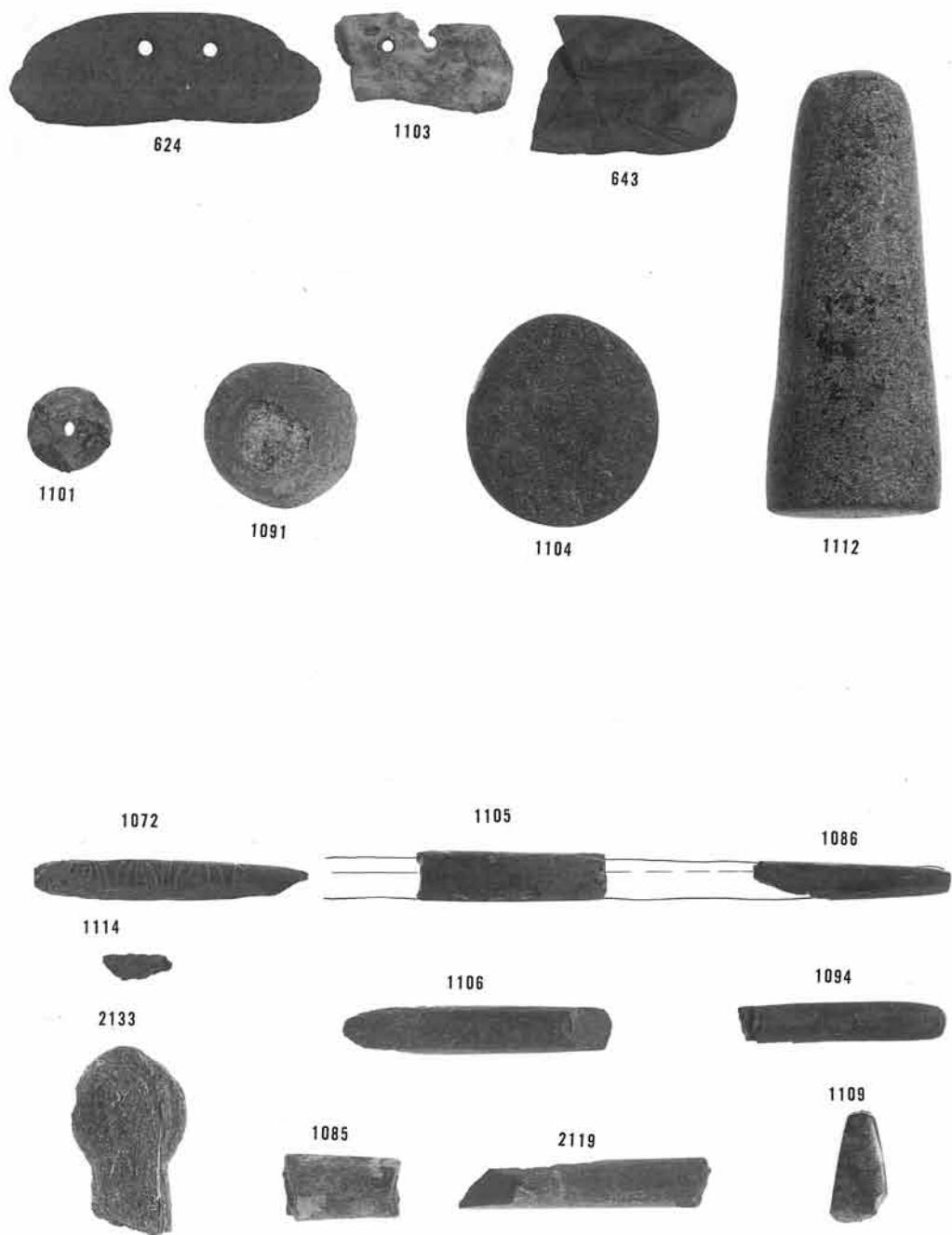
繩文土器

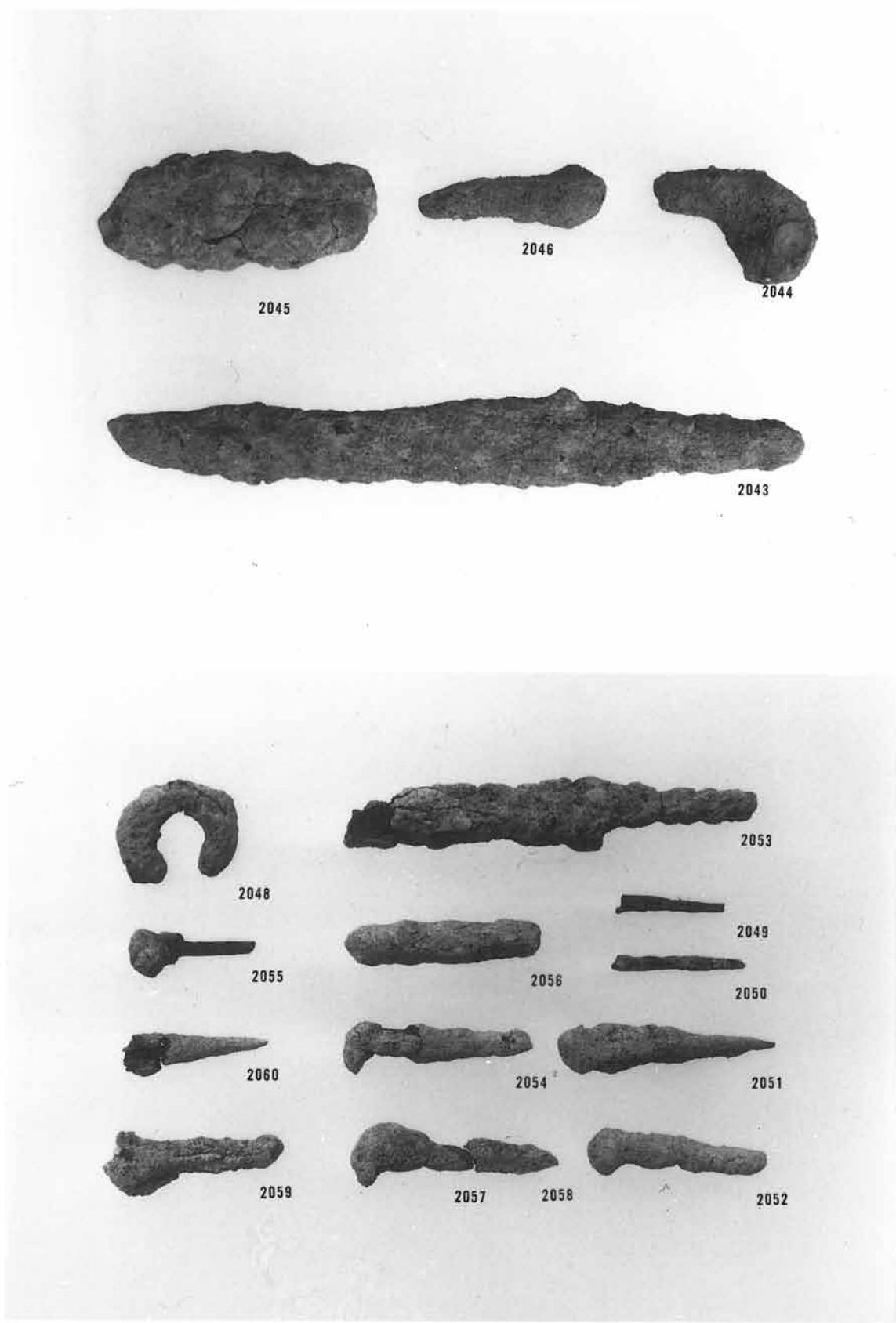


绳文土器



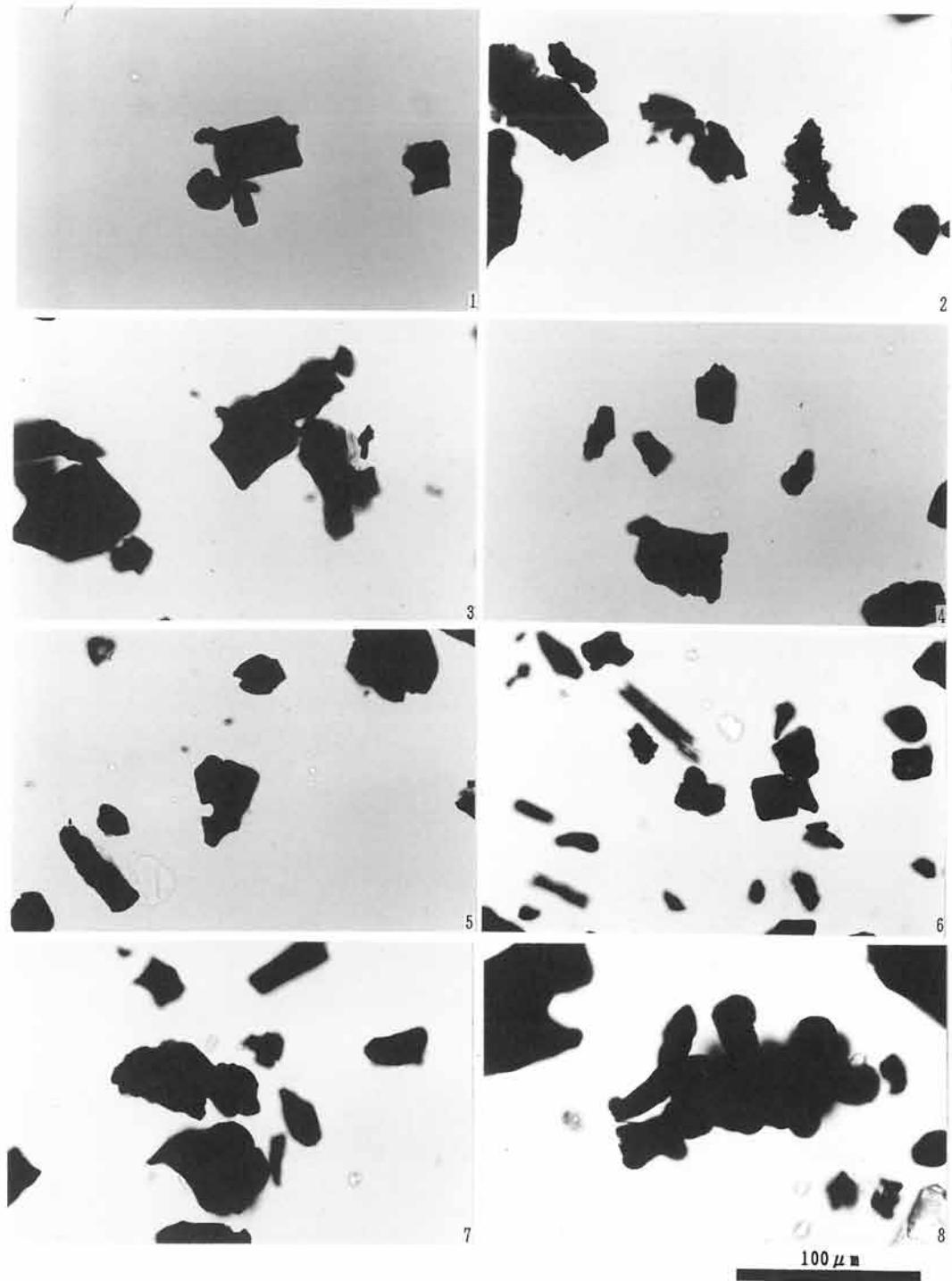
縄文土器・石器





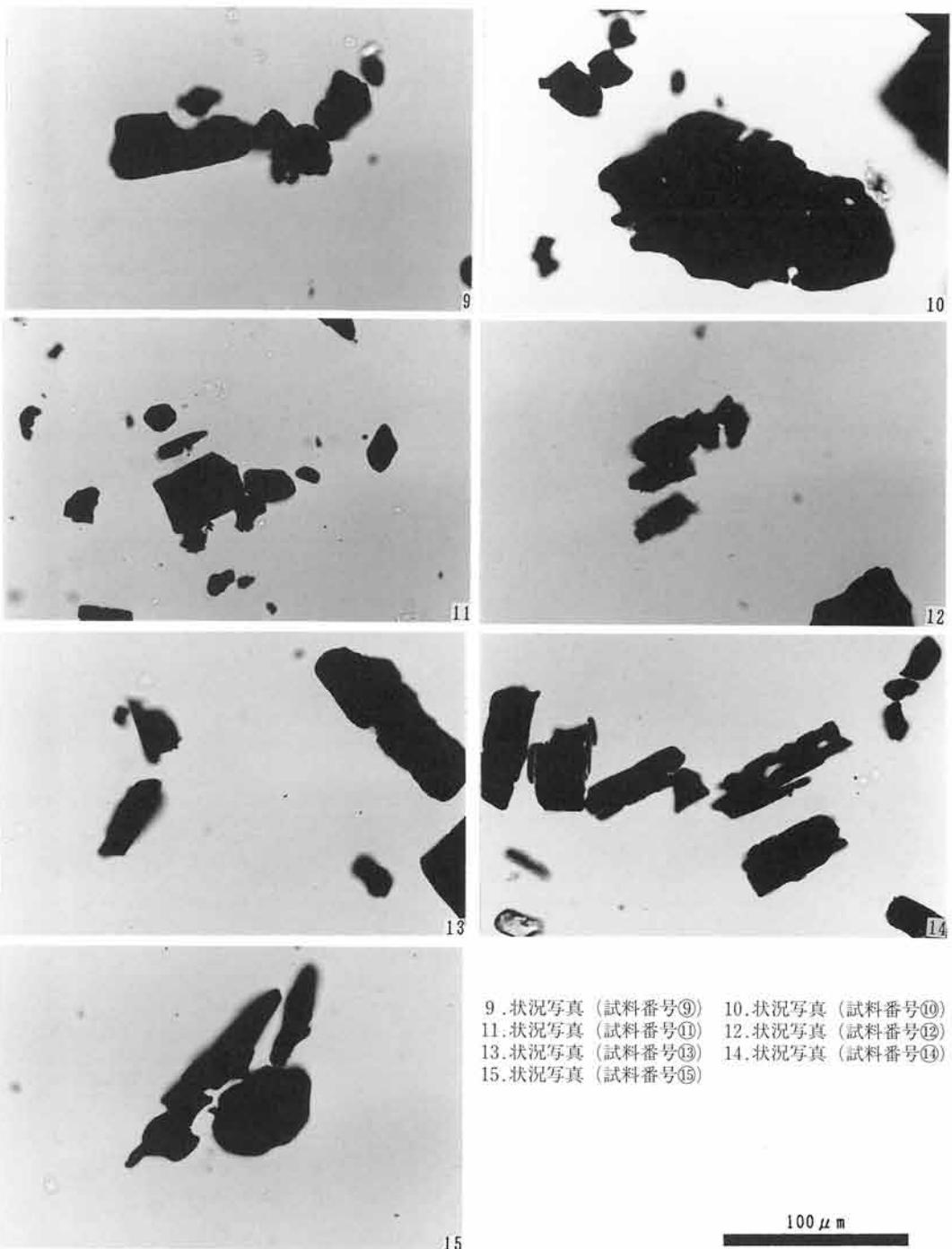
銅器・鉄器類 VI区SD101・SE01、VII区SK103、VIII区SD-09

花粉化石



1. 状況写真（試料番号①） 2. 状況写真（試料番号②） 3. 状況写真（試料番号③） 4. 状況写真（試料番号④）
5. 状況写真（試料番号⑤） 6. 状況写真（試料番号⑥） 7. 状況写真（試料番号⑦） 8. 状況写真（試料番号⑧）

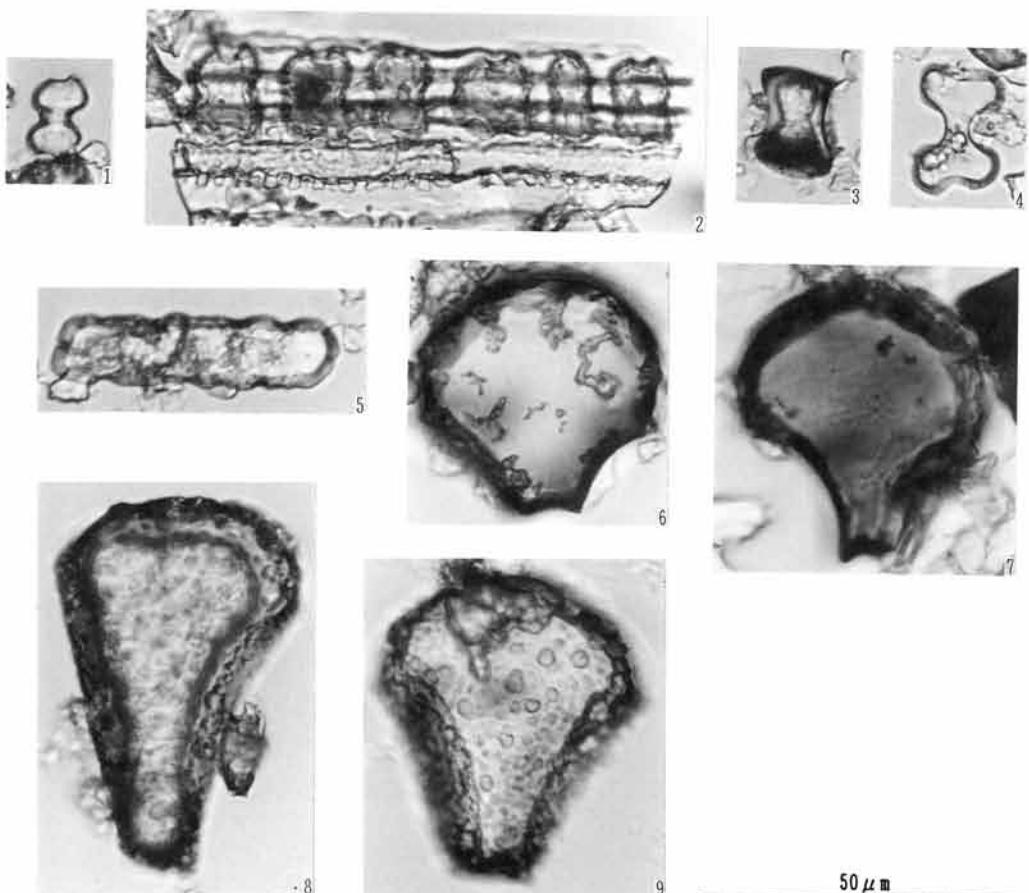
花粉化石



9.状況写真(試料番号⑨) 10.状況写真(試料番号⑩)
11.状況写真(試料番号⑪) 12.状況写真(試料番号⑫)
13.状況写真(試料番号⑬) 14.状況写真(試料番号⑭)
15.状況写真(試料番号⑮)

100 μ m

植物珪酸体



1. イネ属短細胞珪酸体 (試料番号①)
 3. タケ亜科短細胞珪酸体 (試料番号③)
 5. イチゴツナギ亞科短細胞珪酸体 (試料番号③)
 7. イネ属機動細胞珪酸体 (試料番号⑩)
 9. タケ亜科機動細胞珪酸体 (試料番号⑦)

2. イネ属短細胞珪酸体列 (試料番号①)
 4. ススキ属短細胞珪酸体 (試料番号⑦)
 6. イネ属機動細胞珪酸体 (試料番号①)
 8. ウシクサ属機動細胞珪酸体 (試料番号⑦)

川辺遺跡発掘調査報告書

—一般国道24号和歌山バイパス建設
に伴う発掘調査—

平成7年3月

編 集 (財)和歌山県文化財センター
発行・印刷 西岡総合印刷株式会社
